

尖閣研究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－ 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 －

2012 年

尖閣諸島文献資料編纂会

発刊のあいさつ

尖閣諸島海域は魚族が豊富な好漁場として、戦前、戦後は早い時期から利用されてきた。沖縄各地の出漁した漁船、県外船、台湾船も入り混じって操業し、賑わいを見せていたという。

私は1952年琉球大学4年の時に、高良鉄夫先生に連れられて、尖閣諸島での野外実習・生物調査に参加した。高良先生と宮城元助先生の教官2名と私ら学生11名である。

南・北小島に上陸したら、海鳥の大群に驚かされた。

天空は乱舞する海鳥で陽は俄かにかき曇る、それほど夥しい数だった。

しかも糞弾の雨は降るし、油断すれば鳥糞だらけになる。この異様な臭いで息苦しく、上陸するのも一苦労だった。上陸して見たら、さらなる光景に驚かされた。

何と視界一面、ヒナ、ヒナではないか。島全体が無数のヒナで埋め尽くされていた。

親鳥たちは、エサの魚をせせと運び、ヒナたちに食べさせている。

子育ての最中だった。尖閣諸島はまさに「海鳥の樂園」だったのである。

高良先生は、北小島だけで「群れなす海鳥一千万羽」(琉球新報 1953.8.16)と報告している。ならば、尖閣諸島全体では、無数の海鳥が生息していることになる。

この海鳥が食べる魚は量り知れない。ヒナばかりでない、親鳥も食べる。

ヒナが食べるエサの魚だけでも、莫大な量になったであろう。

尖閣諸島が「海鳥の樂園」であることを可能にしたのは、同海域が、魚族が豊富で、豊かな漁場だったからではないか。

当時出漁された漁師の方は、「尖閣へは魚を釣りに行くのではなく、魚を積みに行った」今では想像できない、とても豊かな漁場だったと、今回の聞き取りで語っている。

私はそのあと1963年、71年、79年、80年、82年と5回に亘り、調査で渡島する機会を得た。行く度に、あれほどいた海鳥の群れは段々少なくなっていた。

現在はどうかだろうか、時折、テレビで島の様子が放映されるが、海鳥の姿はあまり観ることはない。飛び交う姿が映っていても疎らの様である。

漁師の方も、「以前は、海鳥は大分多かった。縄入れる時、エサ食おうとあっちこちから飛んで来て邪魔するから、竿で追い払ってやっていたが、今はあまり見えない、魚も減っている」旨を、この聞き取りで語っている。

私ら一般人には、海鳥の消長が漁業資源の消長に関係するのでは、頭で理解しているだけであるが、漁師の皆さんには、日々の仕事で実感する深刻な問題であり、解決を迫られる大きな課題である。

尖閣諸島海域で、昔ほど魚が獲れなくなった要因として、乱獲によるとか、潮の流れが変わったのではとか、はたまた地球温暖化によるとか、諸説紛々している。

これも漁師の皆さんへの聞き取り調査、本報告書を読んで頂ければと思う。

本調査は、尖閣諸島に出漁された沖縄県の漁業者に対する聞き取り調査である。

周知のように、尖閣諸島海域の漁業に関する資料が少なく、同島海域における漁業の実態、その全容は詳らかでない。しかも海域へ出漁する漁船は、現在は僅かである。

かつては尖閣諸島海域へ多くの漁船が出漁し、様々な漁業が営まれてきた。

深海一本釣りのマチ漁から、カツオ釣り、突き船でのカジキ獲り、果ては追込みによるダツ漁、等々である。その中には、ダツ追込みや突き船でのカジキ突きとか、今は漁法が絶えたものもある。また深海一本釣にしても、イシマチャー(石巻落とし漁)からヤマギタ方式を経て、現在の一本釣型になったという。これも今回の調査で明らかになった。

尖閣諸島海域で、往時漁業に携わった漁師の皆さんは大半が高齢となっている。

彼らが元気なうちに、貴重な体験を正しく記録しておかねばならない。

これを逸すると、尖閣諸島海域での漁業の実態、その事実は永久に消え失せてしまう。

このような理由もあって、今回の漁業者に対する聞き取り調査は実施された。

諸般の理由から、聞き取りが一部の地域や漁業者に止まり、十分な内容ではない。

ともあれ、私共編纂会にとって、本聞き取り調査が、尖閣諸島海域の漁業を知るうえで、些かでも役立つのであれば幸甚である。

これを契機に、全体を網羅したさらなる聞き取り調査が実施されることを願う。

本聞き取り調査は、日本財団の2012年度研究助成交付でなされたものである。

日本財団は、早くから尖閣諸島海域の漁業調査の重要性を認識されていた。

私共編纂会は、2009年度研究助成交付を受けて「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告—沖縄県における戦前～日本復帰(1972年)の動き—」を報告できた。

今回の調査は、「聞き取り編」である。この調査の意義と重要性を認識し、この度も研究助成して下さった日本財団には、厚くお礼を申し上げたい。

なお、本調査報告は、以下の二人が担当した。

本編纂会 研究員 國吉 まこも

本編纂会 事務局長 國吉 真古

本報告書の聞き取りに際しては、快くインタビューに応じて下さった漁師の皆さんはじめ、多くの漁業関係者の方々にお世話頂いた。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

2013年(平成25年) 9月30日

尖閣諸島文献資料編纂会

会長 新納 義馬

目 次

発刊のあいさつ

尖閣諸島とは

尖閣諸島の漁業概要 7

聞取り編 15

1 章 沖縄本島地区

1-1 那覇地区漁協 19

(追補 鹿児島喜入町漁協)

1-2 サバ漁業関係者 105

1-3 糸満漁協、与那原・西原漁協 131

2 章 宮古島地区

2-1 池間漁協、伊良部漁協、宮古島漁協 181

2-2 魚釣島・南小島でのカツオ節製造 251

3 章 八重山地区

3 A 1 枚の写真から半世紀前へ 273

3 B 見たり、聞いたり八重山の漁業者の中の尖閣諸島 311

3 C 尖閣諸島と台湾、尖閣諸島と与那国 380

3 D 南海商会の思い出 394

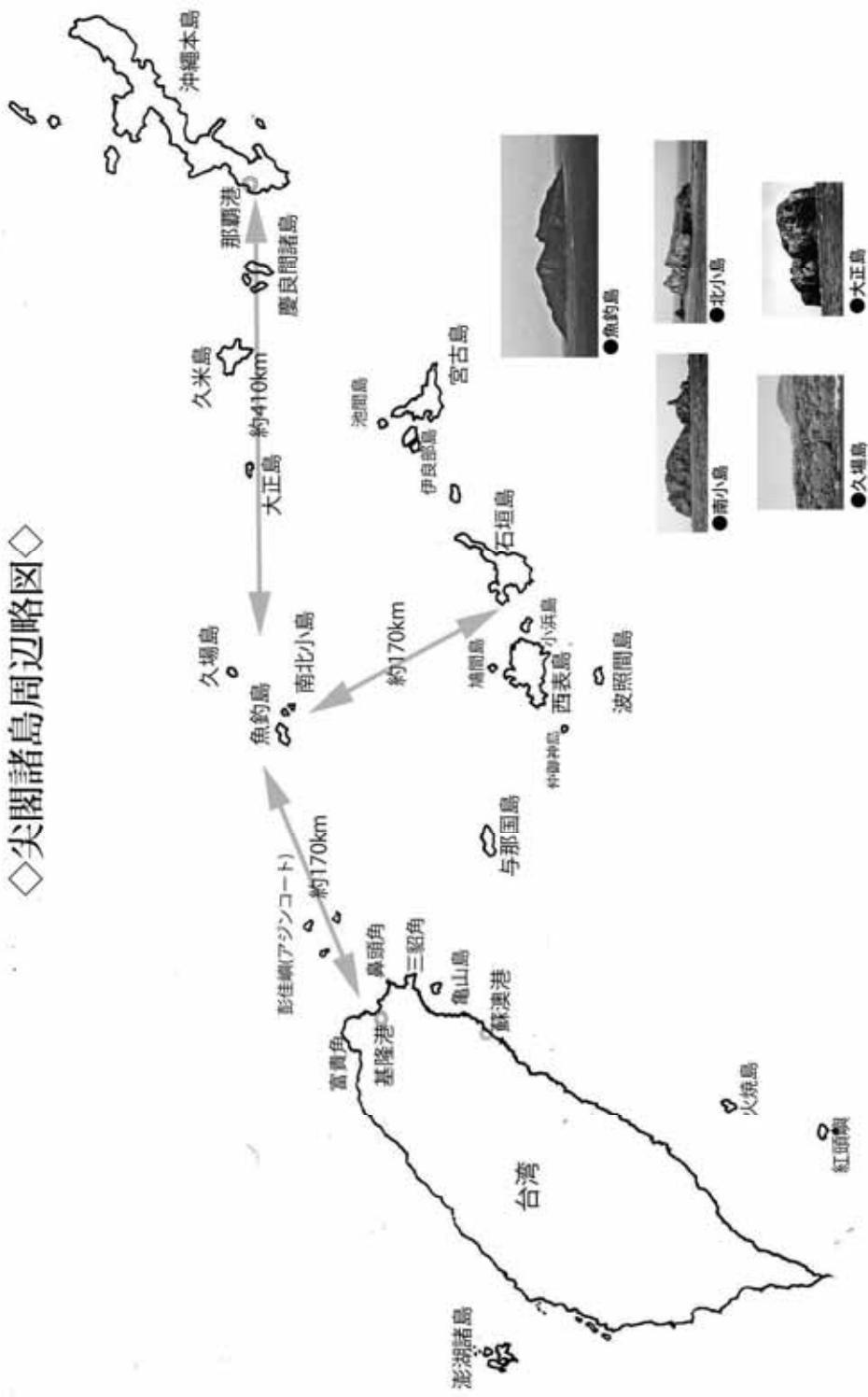
4 章 漁場保全、領海警備

不法入域防止「警告板」設置 401

救命艇「ちとせ」警備関係 419

あとがき

◇尖閣諸島周辺略図◇



尖閣諸島とは

・絶海の無人島

沖縄県の八重山諸島の北北西凡そ 90 カイリ(約 170 km)に位置する無人島群を総称して、いわゆる「尖閣諸島」と呼んでいる。島嶼群の構成は、「魚釣島」「北小島」「南小島」「久場島」「大正島」の 5 島嶼と「沖の北岩」「沖の南岩」「飛瀬」の 3 岩礁である。

地理的には東シナ海南部に位置し、各島嶼が東シナ海大陸ダナの縁辺に沿うような恰好で連なっているため大陸沿岸流と黒潮の混合によって生じる潮目を形成、その影響を多く受け様々な魚族が附近を回遊、棲息していると言われている。

・1895 年に領土編入

歴史的には古くから中国南部福州～琉球那覇途上の航路標識として知られていたが、絶海の孤島とも言うべき場所に位置するために中国、琉球どちらにも属する事はなかった。

このように長い間無主地であったが、1895(明治 28)年に日本に領土編入され沖縄県の所属となり、翌 1896(明治 29)年には行政区分上八重山郡の所轄となった。

・本来の自然が残された島

過去、同諸島を明治政府より借受けた古賀辰四郎等により開拓がなされた。が、学術的には、依然人の手が殆んど入っていない。生きたままの自然の姿が其処に残る島々である。

島で歩き回り調査するたびに本来の自然を実感でき、生物・植物学者にとっては希少種や固有種が数多く棲息する学術上貴重な島嶼群である。

・現在の概要

現在は沖縄県石垣市字登野城に属しており、魚釣島・北小島・南小島の 3 島は無人島、久場島・大正島の 2 島は在日米軍の軍用地として射爆撃演習場に指定されている。

尖閣諸島は歴史的に長くアホウドリやアジサシ類といった海鳥の繁殖地であったが、明治期の開拓により、アホウドリは絶滅したとされていた。が、1988 年 4 月、朝日新聞社は上空から南小島の断崖で繁殖しているアホウドリ及びヒナを再確認した。2002 年には北小島での繁殖も確認されており今後もさらなる棲息数の増加に期待が寄せられている。

参考：◇尖閣諸島地番・地目・面積表◇

島名	地番	地目	面積	備考
南小島	石垣市字登野城 2390 番地	原野	0.40km ²	国有地
北小島	同 2391 番地	原野	0.31km ²	国有地
魚釣島	同 2392 番地	原野	3.82km ²	国有地
久場島	同 2393 番地	原野	0.91km ²	私有地
大正島	同 2394 番地	原野	0.06km ²	国有地

沖の北岩・沖の南岩・飛瀬は岩礁のため地番等は付されていない。

I 章 尖閣諸島の漁業概要

①、戦後の漁業の概要

尖閣諸島海域への出漁開始は、おそらく 1946～1948 年間だと思われるが一定せず。

1、船の整備と製氷所の設置

沖縄戦により漁船の殆んどは破壊されたため、操業するには船の調達が不可欠だった。1947 年より米軍の上陸用舟艇(LCM、LCVP)などを漁業者に貸与し漁船の代船にした。尖閣諸島海域へ行く際に使用した代漁は LCM の鋼船を改造したものだったという。LCVP はベニア製で沿岸での操業ぐらいにしかできなかった。また 1949 年頃から米ガリオア資金による木造漁船の建造が開始された。漁獲高、漁船数を推移を見てみよう

1946 年～49 年の漁獲高、漁船数の推移

年次別	年次別	漁船数
1946	4,750,732 ㄱ	148 隻
1947	10,798,305 ㄱ	237 隻
1948	14,218,380 ㄱ	243 隻
1949	20,645,929 ㄱ	349 隻

1946 頃は漁船数が 148 隻、沖縄戦が終わって翌年である。これが翌 47 年には上陸用舟艇を貸し出す様になると 237 隻、89 隻増加している。そうして 49 年ガリオア資金で船が製造されるようになってからは前年の 243 隻から 349 隻、およそ 100 以上増加している。

なお、宮古・八重山地区は本島に比べて戦災の被害が幾分軽度で、戦前の漁船でも使用可能なものがあつたようだ。

他方、尖閣諸島は遠く、当時の漁船だと行くのに 1 昼夜、往復だと 2 昼夜はかかり、出漁を支障なく行うには氷の積載が不可欠であり、製氷所の設置が重要となる。

戦後沖縄での製氷所設立と時期

製氷所名	場所	設立年月日	日産能力
本部製氷工場(琉球造船)	沖縄本島	1946/6/6	15 ト
糸満製氷株式会社	沖縄本島	1950/9/1	15 ト
宮古漁連製氷所	宮古島	1950/10/10	15 ト
八重山製氷株式会社	石垣島	1951/1/24	15 ト
那覇水産株式会社	沖縄本島	1951/3/5	45 ト
琉球水産株式会社	沖縄本島	1951/9/27	30 ト
与那原製氷所	沖縄本島	1953/1/30	6 ト

1950年代初頭には、各地で製氷会社が稼働し始めている。そうして沿岸から沖合へ、沖合から、尖閣諸島海域へ出漁操業して、魚を積んで帰って来るのが可能となる。

では、尖閣諸島海域でどのような漁がなされていただろうか。漁業者に対する聞き取り調査及び関連する報告書をもとに作成したのが下表である。

尖閣諸島海域における各地区の漁業概表

	沖縄本島地区	宮古島地区	八重山地区
終戦～1950頃	ダツ追込：糸満	カジキ突棒：伊 ※台湾より出漁含	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：与/鳩 マグロ延縄：石垣
1950年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区 サバ跳釣：琉水 サバ棒受：琉水	ダツ追込：池(糸) カジキ突棒：伊 鰹竿釣：池/伊/宮 カツオ節：池/伊/宮 曳縄：池/伊 底物釣：池/伊 珊瑚：池	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：石/与 鰹竿釣：石垣/鳩間 カツオ節：石垣
1960年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区	曳縄：池/伊/狩 深海一本釣：池/伊 珊瑚：池間/伊良部	鰹竿釣：石垣 曳縄：石垣 深海一本釣：石垣 底延縄：石垣 潜り：石垣 電灯潜り：石垣
1970年代～ 復帰以降	ダツ追込：糸満 深海一本釣：那覇地区 底立延縄：糸満/那地 電灯潜り：那沿/浦宜	鰹竿釣：伊良部 曳縄：池/伊/宮 深海一本釣：池/宮	曳縄：石垣 深海一本釣：石/与 潜り：石垣 電灯潜り：石垣

※表中の漁協等の略式名は以下の通りである。

沖縄本島地区：那覇地区漁協＝那地、那覇市沿岸漁協＝那沿、琉球水産(株)＝琉水、糸満漁協＝糸、与那原・西原漁協＝与、浦添・宜野湾漁協＝浦宜。

宮古島・八重山地区：池間漁協＝池、伊良部漁協＝伊、宮古島漁協＝宮、狩俣漁協＝狩、八重山漁協＝石垣、石、鳩間漁協＝鳩、与那国漁協＝与。

なお、今回の調査は、上表中から 8 漁協及びサバ漁業は琉球水産(株)を対象に行った。従って 8 漁協及び琉球水産(株)の漁業関係者に対して聞き取り調査を実施した。

これらの調査をもとに、各地区の漁業状況については以下に述べる。

②各地区の漁業状況

1、沖縄本島地区

1-1 那覇地区漁協

沖縄本島の二大漁村といえば、糸満と那覇の垣花である。糸満は追込などの網漁、垣花は一本釣などの釣漁を得意とした。戦前の垣花は、那覇港前面に位置し、県水産学校、県水産試験場、氷会社、組合セリ市場も設置され、漁船は40隻余も有し、県都那覇の港町として活況を呈していた。冬場には半数20隻ほどは大型漁船(12、3ト級)で、尖閣諸島に、底魚マチ類一本釣で出漁していたという。日米の戦争に突入し、1944年(昭和19年)の10・10空襲で、これら漁船は全滅した。

終戦後は、漁業町垣花は那覇軍港、飛行場の建設の為、米軍に接収されて、漁村垣花は四散し、その後、漁民は、那覇市安謝・若狭、山下の3地域へ集団移転をなし、泊港を中心に、漁業再興を期して統合・結成したのが現在の那覇地区漁協である。

1949年頃には、既に米国民政府補助によるガリオア船制度を契機に、次々に大型漁船を建造し、尖閣諸島での操業に乗り出している。同海域は、那覇地区漁協の冬場の主要な漁場として広く利用されていた。復帰前の全盛期には底魚マチ釣船が40隻余を数えるに至っていたという。また復帰後の1973、4年頃には、鹿児島県より底立延縄漁法を導入し、一部のマチ船では同漁法が操業されていた。糸満漁協に底立延縄が導入される以前である。

底立延縄は、獲乱獲型であり漁獲の減少をきたしたこともあって長くは続かなかった。

一方、復帰後において、沖縄近海でウシシビ(ホンマグロ)が獲れて、マグロブームが訪れた。それがきっかけとなり、那覇地区漁協のマチ船、大半が10ト以上は、マグロ船に切り替わっていった。その後マグロ船への転業、マチ船の廃業が続いた。

2000年代には5ト未満マチ船数隻が尖閣諸島海域に出漁していたが、今は近海での操業にとどまっている。現在の那覇地区漁協は、マグロ船専門の漁協となっている。

他方、1972年の日本復帰後、県外マチ釣船が、那覇地区漁協の泊港を基地にして、多数の県外漁船が尖閣諸島海域に進出してきた。九州の鹿児島、長崎、宮崎、大分、熊本船籍である。全盛期には鹿児島だけで20隻は数えていたという。現在は鹿児島漁船は6隻、熊本漁船が1隻、大分漁船が1隻、尖閣諸島に出漁している。

今回、那覇地区漁協8名から聞き取り調査を行った。

戦前の深海一本釣マチ船の出漁状況、漁法について話を聞くことができた。

また、終戦直後の困難な状況下で、一本釣漁業を再興し、尖閣諸島海域へ出漁・操業に至ったのか、その経緯も大凡知ることができた。

現在、那覇地区漁協のマチ船に代わって、尖閣諸島に出漁しているのが、鹿児島、熊本漁船である。鹿児島県喜入町漁協所属船籍1隻の漁業者に対して聞き取りすることができた。これを本項に追補して掲載した。

1-2 サバ漁業関係者

1953年頃には、李ライン追われた本土漁船は、東シナ海を南下、魚釣島附近のサバ資源に着目、漁場調査・操業をなし、好成績を得た。尖閣諸島海域は新たにサバ漁場として脚光を浴びて、西日本各地からサバ釣船が進出してきた。

「サバはね釣漁業は、(琉球)政府が早くも1954年に本土から技術者を招いて技術指導をさせたが、さらに宮崎県からサバ釣漁船を一隻入れて漁業者を訓練した。この頃初めて生鮮なサバが豊富に一般大衆の食膳に供さられて評判がよかった。政府ではこの漁業がカツオ漁船の冬季操業転換に特に好適なのでこれを奨励し、装備の一部を補助した」(水産業 20年 森田真弘「守礼の光」1969年9月号)

宮古島の池間と伊良部において、カツオ船晃生丸、日出丸等が試験操業を試みた。

しかしながら1、2航海に止まって、本格的操業には至らなかった。

1956年には、水産業最大手の琉球水産社(那覇在)が、沖縄に大衆魚を目指してと、サバ漁業に乗り出した。

「・・・琉球の鯖船は琉球海域の東支那海で絶えず40乃至50隻の日本船と自由競争している。日本船がこの海域から漁獲する鯖の漁は年間2千万斤乃至2千5百万斤を見積もられる。これは1956年度の琉球の漁類総水揚げ1千6百9万斤を遥かに凌駕する莫大な数字であり、琉球水産業の将来の道を指標している事実である」(琉球水産業の展望 長嶺彦昌1958)と意欲的に取り組んでいた。

1959年元旦の新聞は「・・・昨年すでに2百万斤ほど水揚げし、今年、3百万斤の計画である。サバという新しい漁業は軌道にのってきた。現在、90吨の船でも、1航5万斤あげ、50吨の小型船でも3万5千斤平均をあげ・・・現在、150吨、120吨、50吨の4隻が動いて・・・ほかに個人船主の130吨級1隻いる・・・」とサバ漁業の進展に大きな期待を寄せている。

ところが、「1957年～58年は最盛の年であった。それが1959年頃から魚群がまばらになり、1960年には企業として成立しない状況になってしまった。」(琉水社長長嶺彦氏談 1978)。

沖縄の水産史上で画期的とされたサバ漁業はついに終業に追い込まれて頓挫した。

サバ漁業に対して、期待が大きかっただけに、「東シナ海におけるサバ資源の減少で、いつのまにかこの漁業が沖縄から消え去ったのは残念である」(前掲 森田真弘)と嘆いている。

今回、サバ漁業関係者5名から聞き取り調査を行った。

サバ船乗組員経験者4名と琉球水産社元役員1名である。

東シナ海・尖閣海域におけるサバのハネ釣、棒受け網の実態が概ね把握できた。

また、琉球水産社の役員からの聞き取りで、サバの県内消費市場が小さく、販売は不振をきたしたという。サバ漁業の顛末について大凡の状況を知ることができた。

1-3 糸満漁協 与那原・西原漁協

糸満は、追込みなど網漁を得意とする。ダツ、トビウオ、グルクン(タカサゴ)などを集団で袋網に追込んで獲る漁法であり、尖閣海域はそのダツの宝庫であった。

1949年頃には、糸満漁民は、いち早く、漁船を仕立てて、尖閣海域で、ダツ追込みしている。また、米軍上陸用舟艇を改造した箱型漁船を操船し、尖閣海域へ赴き、ダツ漁に勤しんでいる。ダツは、当時数少ないカマボコの原料であり、その需要は大きく、重宝だった。糸満漁民にとって、そのダツが豊漁する尖閣海域は大切な漁場であった。

当時の新聞は、「1956年3月、糸満船「第三栄丸」が魚釣島近海でダツ漁操業中に沈没、乗組員は泳いで島に上陸」(沖縄新聞 56.3.17)／「60年2月、ダツ漁で出漁した糸満漁船2隻(金生丸、豊洋丸)のうち「豊洋丸」(15ト)が、赤尾嶼近海で遭難、乗組員15名行方不明」(琉球新報 60.2.6)／「66年11月、糸満漁船が尖閣近海でダツ漁、約100名の漁夫が出漁、1ヵ月余で3万5千キロを水揚げ。昨年2倍の豊漁」(琉球新報 66.12.10)／「68年1月、糸満漁船、尖閣海域のダツ漁は、昨年に続き大漁」(琉球新報 68.1.4)、等々とダツ漁の盛況を報じている。

復帰後、カマボコ原料は本土産のすり身に代り、ダツは次第に売れなくなり、ダツ漁は廃れた。その頃、糸満には、マチ類専門の底立延縄漁法が導入された。

1970年中世代には、尖閣諸島では、ダツ追込みに代わって、底立延縄船が操業し出した。

1978年の統計資料では、尖閣海域へ出漁している底立延縄船は19隻(昭和52度実績)で、生産量は311ト、生産額は3億1100万円となっている。

1990～2000年代になると、その底立延縄船も次第に少なくなってきた。

現在、糸満から尖閣海域で操業している底立延縄船は2隻となっている。

1955年3月、与那原漁協所属突き船「第三清徳丸」(15ト・8名)が、魚釣島近海で台湾旗を立てたジャンク船に襲われ乗組員2名が射殺、4名が行方不明になった。

第三清徳丸事件である。この事件は、尖閣諸島に出漁している漁民を恐怖に陥れた。

沖縄漁協連合会は、「・・この事件は、事件発生現場が領海内であること、並びに琉球近海に於いて最も優れた漁場であること、しかも今尚同海上にはジャンク船が出没していること、・・このような重大事件が琉球政府の外交権の有無で、不問に附され、究明されることなく放置されるとすれば、琉球の漁民は今後安心して漁業を営むことが出来なくなる……」として事件の徹底究明と安全操業を強く要請している。

今回、糸満漁協4名から聞き取り調査を行った。

糸満漁民のダツ漁と底立延縄漁の実態、またこれら漁法について概ね知ることができた。また、第三清徳丸事件関係者・當眞正清氏(与那原西原漁協)から聞き取りした。

第三清徳丸事件の内容と当時の尖閣海域での曳き縄によるバシヨウカジキ漁(これは當眞正清氏が考案した漁法?)について知ることができた。

2、宮古島地区

2-1 池間漁協、伊良部漁協、宮古島漁協（漁労編）

2-2 魚釣島・南小島でのカツオ節製造

宮古島はカツオ漁業が主体だが、曳き縄、底魚一本釣、等々の多様な漁業を営んでいる。

宮古島漁民も、戦後早い時期から、尖閣海域に出漁していた。これを先導したのは、台湾帰りの漁民達であった。モリを手にして船の舳先に突き出した突台に立ち、荒海の中でカジキを追って、モリで仕留める突ん棒である。台湾でカジキ突ん棒に従事した漁師たちが、終戦後には島に帰り、1950年頃には、すでに尖閣海域に冬場出かけて突き漁に挑んでいる。

「(かもめ丸)で最初はカジキを獲っておったら、されどカツオがあまりにおるもんだから、今度はカツオ漁に切り替えた」(伊良部漁協：奥原隆治 81)。尖閣諸島でカツオを豊漁した。

特筆すべきは、この時、南小島に仮工場を建て、宮古島の工場から道具を運んで、カツオ節製造を行っている。また、宮古島各地から、1950年代には、尖閣海域へは、曳き縄、底魚一本釣でも出漁している。「あの当時は、尖閣へは、魚を釣りではなく、積みに行った。それほど獲れました」(池間漁協 西里勇 82)と、尖閣海域の豊饒を讃嘆している。

宮古島は名にし負うカツオ漁の島であり、島を潤したのはカツオ漁業である。

毎年6～8月になると工場の煙突から煙が上がり、島はすこぶる賑わいを見せていた。

1958年の新聞は「冬期カツオ業が成功し、転業問題まで出されて暗い表情の漁村に明るい希望を与えている。尖閣諸島に出漁した2隻のカツオ船が大漁し、冬期漁業の期待は大きい」。さらに「尖閣諸島に出漁した伊良部の幸洋丸と隆祥丸は大漁、幸洋丸は尖閣諸島でカツオ節1万1千斤製造加工して帰港した」旨を報じている。

宮古島漁船3隻が南小島で、各々仮工場を設けて、鰹節製造を行っていたという。

1960年代には隆盛を極めたカツオ漁は、1970年代に入ると、海外南方カツオ漁に転じていく。それに伴い島内のカツオ漁業は次第に廃れていった。

今では伊良部にカツオ節製造工場1つ残すのみで往時の面影はない。

このカツオ業が廃れた後も、戦後60年絶えることなく続いているのが伊良部のシマガツオ(ウブシュー)漁である。

これが宮古島と尖閣諸島との漁業のつながりを今に示す唯一のものである

今回、宮古島3漁協13名から聞き取り調査を行った。

聞き取りした尖閣海域での漁業の内容は様々である。戦前の台湾突船で行ったことから、戦後のカジキ突き漁やカツオ漁、曳き縄や底魚一本釣、等々のお話を聞くことができた。

これらの話から、宮古島の尖閣海域での漁業状況の大体を知ることができた。

本報告書では、聞き取り内容を表題の通り2つに分けて、「2-1、池間漁協、伊良部漁協、宮古島漁協」(漁労編)と「2-2、魚釣島・南小島でのカツオ節製造」について紹介する。

3、八重山地区

八重山地区の尖閣諸島海域における漁業概要を記すと、1950 年前後から 60 年代にかけてはカツオ船の休漁期である、冬期のカジキ突き棒が主であり、70 年代以降は冬期を主としたマチ釣りに移行していく。その間に、沖縄の伝統的漁法である潜水漁を主体としたグループが、断続的、または継続的に漁場を利用していたといえる。現在尖閣諸島周辺漁場を専門に操業している漁業者は、聞き取りの範囲ではあまり見受けられない。

尖閣諸島が好漁場であるという認識は、各組合員個人個人によって様々であるが、総体的に見れば、尖閣諸島周辺漁場に対する憧れは強くあるといえよう。それは八重山地区の漁業者にとっても、完全に開拓された漁場といえるわけではなく。まだ見ぬ新たな漁場としての認識が根強くあるものともいえる。中でも好漁場という認識は、70 年初めから 80 年代にかけてマチ釣りを専門としたグループの活動がその源となっていると考えられる。

沖縄では高級魚の代表格であるマチ類をト単位で、しかも高値で那覇港に水揚げしたという話は、現在マチ釣り漁を営む漁師の方にすれば、夢物語である。

漁業が儲かった時代の話と共に、決まって話題に上がるのは、今漁業者が追い詰められている現状である。燃料代の高騰、魚価の低迷、漁師が頑張っても、水揚げしてセリに出せば決まって買い叩かれる。沖縄の人が沖縄の魚を買わない。観光客が増えても内地の人は気味悪がって沖縄の魚なんか食べない。陸の状況が八方塞がりの中で、馴染みであるはずの海に目を凝しても、彼らが獲るべき魚は年々減少している。

尖閣諸島における漁業は今後どうあるべきか、そうして現在漁業の状況はどうなっているのか。課題が具体的な形になるよう、聞き取りを進めた。聞き取りした範囲は 1950 年前後から、2000 年前後、凡そ半世紀の、漁業者の活動等の記憶である。

漁業関係者の皆さんから聞き取りを進めていく中で、尖閣諸島の開拓者古賀辰四郎が開いた古賀商店の話が少なからず聞かれた。古賀商店は戦後はやはり海産物を主業務とする南海商会という会社に看板替えしている。今回の 27 名の方から聞き取りを行い、様々な内容に及んだ。これらを整理したのが下記である。()は聞き取り人数。

- 3A 一枚の写真から半世紀前へ (3 名)
- 3B 見たり、聞いたり、八重山の漁業者の中の尖閣諸島 (19 名)
- 3C 尖閣諸島と台湾、尖閣諸島と与那国 (3 名)
- 3D 南海商会の思い出 (2 名)

なお、本節では聞き取りは、そのままの、生の会話形式で記した。この方がウミンチュ一の心意気、気宇壮大、海の仕事の大変さ、面白さ、臨場感を、満喫できると確信する。

4、漁場保全、領海警備

不法入域防止「警告板」設置

救命艇「ちとせ」警備関係

1963年5月、尖閣諸島アホドリ調査団(団長高良鉄夫琉大教授)は、台湾漁民の不法操業と海鳥乱獲に驚き、同行した記者によって、領海侵犯の実態が報じられた。

66年頃から尖閣海域で続発した台湾漁民による不法操業、領海侵犯に対して、琉球警察局は救難艇「ちとせ」を使って取り締まりに努めた。

68年5月、総理府派遣の尖閣諸島調査団の高岡大輔団長は、台湾漁民の尖閣諸島での不法操業・不法上陸は甚だしいとその実態を報告した。

それを受け、同年8月には琉球警察局と琉球出入管理庁、米国民政府渉外局は係官派遣し、南小島に不法上陸し、座礁船の解体作業をしていた台湾人労働者に帰国命令を発した。

そのあと台湾側は正規に入域手続きし、在台北米国大使館を通じ米高等弁務官名で入国許可を得た。が、他方、台湾漁民の不法操業、不法上陸はあとを絶たなかった。

このため、同年9月、米国民政府から琉球政府に対し、不法入域防止策として、3ヶ国語で標記した警告板を、尖閣諸島7島への設置が提案された。

「・・・今後この地域における不法入域をなくすために・・・尖閣列島の各島、すなわち琉球列島の領土に上陸する者に対し、事前に琉球出入管理当局から入域許可を得ること。事前に手続をとらない場合には、琉球の法令に基き起訴され、罰せられることを警告する恒久的な掲示を上陸しそうな地域の各見やすい場所に立てるよう提案したい。この掲示は、英語、日本語および中国語の3ヶ国語で書いた方が有効だと思う・・・」(「米琉往復書簡、米国民政府民政官から琉球政府行政主席宛」(1968.9.03))。

1970年7月、琉球出入管理庁は、米高等弁務官命による不法入域警告板を、尖閣諸島5島に設置された。併せて台湾漁船の不法入域状況を現認報告された。

依然として、台湾漁民の領海侵犯、不法操業、不法入域はあとを絶たなかった。

1972年5月15日に日本復帰し、海上保安庁の巡視船が配備される。

それまでは、尖閣海域の守りは、沖縄唯一救難艇「ちとせ」が孤軍奮闘していた。

救難艇「ちとせ」が尖閣諸島の漁場保全と領海侵犯に対する警備取締りを行っていた。

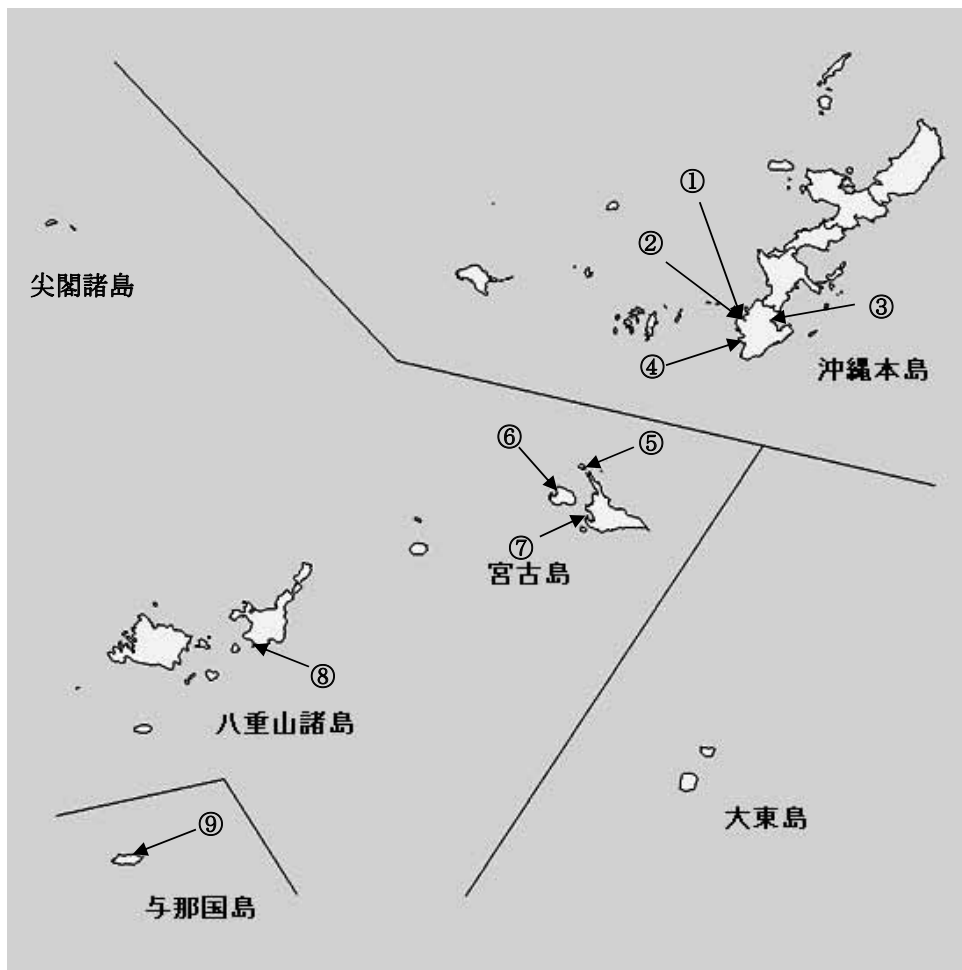
今回、米高等弁務官命による不法入域警告板を、尖閣諸島5島に設置した際の責任者比嘉健次氏に対して聞き取り調査を行った。

警告板設置に至った経緯や設置の意義、設置の際の苦労話等をいろいろと聞くことができた。

また、琉球政府期に尖閣海域の守りに孤軍奮闘していた救命艇「ちとせ」の艇長吉濱貞一氏からご寄稿いただいた。

II章 聞き取り編

漁業者への聞き取りは下記の8漁協、1社に対して実施した。



漁協名	所在地
① 那覇地区漁協	那覇市港町(三重城)
② 琉球水産株式会社	那覇市西町
③ 与那原・西原漁協	与那原町字当添
④ 糸満 漁協	糸満市字糸満
⑤ 池間 漁協	宮古島市平良字池間
⑥ 伊良部 漁協	宮古島市伊良部
⑦ 宮古島 漁協	宮古島市平良字荷川取
⑧ 八重山 漁協	石垣市新栄町
⑨ 与那国 漁協	与那国町字与那国



①. 那覇地区漁協



②. 琉球水産株式会社



④. 糸満漁協



⑤. 池間漁協



⑥. 伊良部漁協



⑦. 宮古島漁協



⑧. 八重山漁協



⑨. 与那国漁協

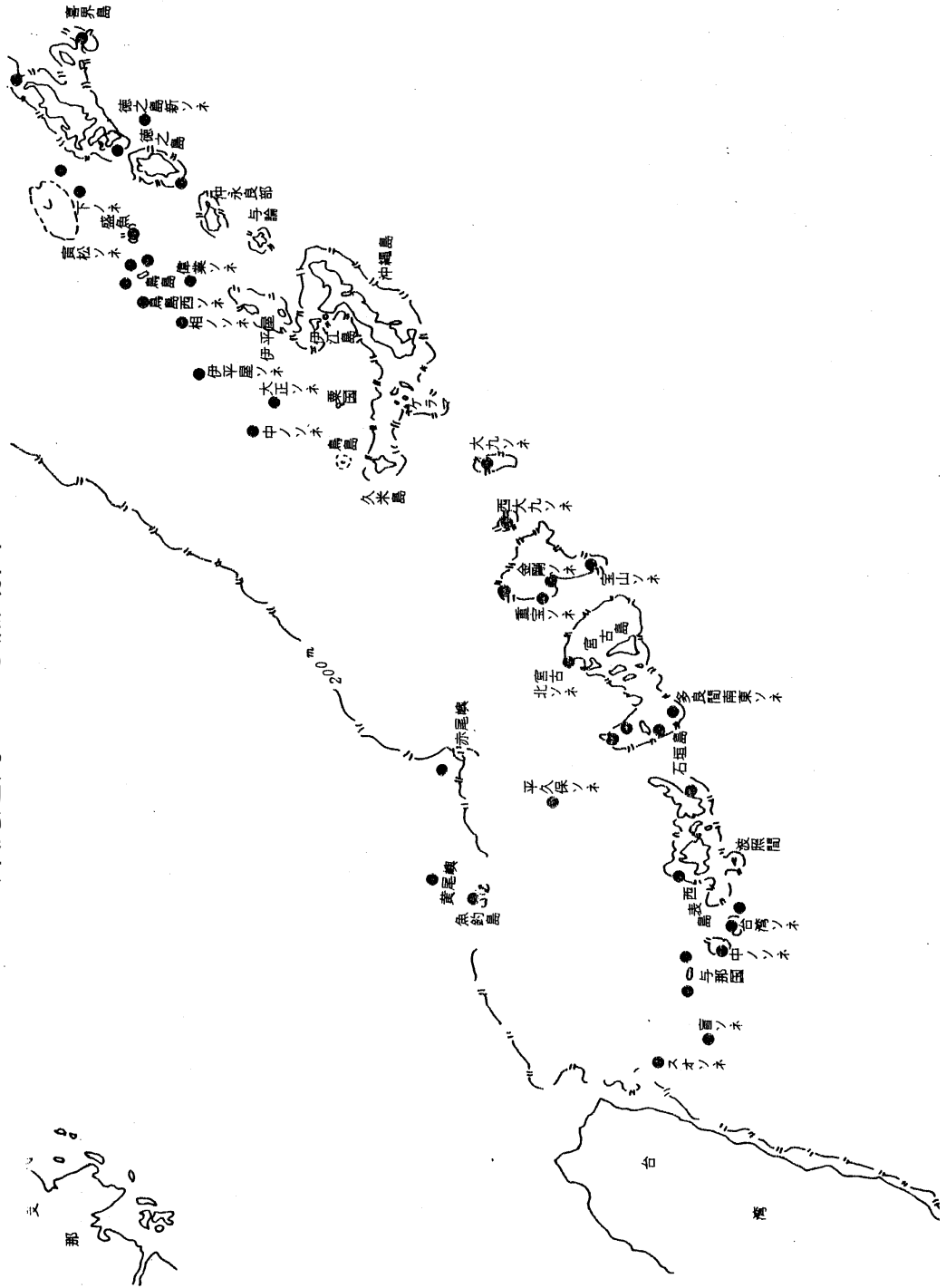
対象者の内訳

漁業関係者へのヒアリング調査は概ね下表の内容である。

地区	所属漁協・団体	員数	備 考
沖繩本島	那覇地区漁協	8	深海一本釣、底立延縄
	(鹿児島県喜入町漁協)	1	深海一本釣
	サバ漁業関係者	5	サバ跳ね釣り、棒受け網
	糸満漁協	4	ダツ追い込み、深海一本釣
	与那原・西原漁協	1	清徳丸事件、曳き縄
宮古島	池間漁協	3	曳き縄、深海一本釣他
	伊良部漁協	6	深海一本釣、シマガツオ漁他
	宮古島漁協	1	曳き縄、深海一本釣
	魚釣島・南小島でカツオ節製造関係者	4	カツオ節製造
八重山	一枚の写真から半世紀前へ	3	カジキ突き、深海一本釣他
	見たり、聞いたり尖閣諸島	19	カジキ突き、深海一本釣他
	尖閣諸島と台湾、尖閣諸島と与那国	3	カジキ突き他
	南海商会の思い出	2	貝殻採り
漁場保全・領海警備		2	警告板設置、「ちとせ」で警備
合 計		62	

※ 主な聞き取り期間： 2012年4月～2013年7月

沖縄近海の主な漁場図



國吉 真一 くによし しんいち (那覇地区漁協)

1936年(昭和11年)、那覇市垣花で生まれる。77歳(2013年時)。

那覇市垣花は深海一本釣業を営み、戦前は尖閣諸島で操業していた。

氏は14.5歳から父親と沿岸で一本釣を行う。20歳(1956年)で、第三五眞丸(15ト)を建造し、これを機に尖閣諸島に出漁、冬期の主要な漁場として操業する。30歳(1965年)には、徳豊丸を建造、一本釣からマグロ漁に切り替え、近海マグロ、遠洋マグロ業に従事、69歳で漁師を引退。氏の体験は1950～60年代の尖閣諸島における一本釣漁業を知る上で貴重である。



那覇地区、一本釣船 一番多かった

僕は、終戦後、学校を途中でやめて、14.5歳には、親父と一緒に漁に下りて、18歳(1953年)には親父や従兄弟達と一緒に株やって、自分の船持ちました。それが第一五眞丸(5ト未満)で、これが小さいからと親父に持たして、そのあと20歳(1956年)には、第三五眞丸(15ト)を造って、これからは尖閣列島には行きました。機関長や船長したりして。

那覇地区が深海一本釣は一番多かったです。アメリカの援助でガリオア船ができて、1949年頃ですか、あの頃殆ど一本釣りでした。免許はカツオも一緒ですが、20、30隻位あったはずです。僕は生い立ちからここ那覇地区の所属船ですよ。ここで若い時からずっと一本釣をやって、尖閣列島には20から30まで10年間、ずっと向こうに、マチ釣りに行ってましたから。そのあと、30歳(1956年)には、徳豊丸(19ト)を新造して、マグロに切り換えて、沖縄近海からフィリピン近辺まで、また大型船一孝丸を新造して、赤道近くまで行ったですよ。69歳に脚を痛めて、漁師は辞めましたから、もう遊んでから5年ほどなります。僕が一本釣釣りで尖閣列島行ったのは50年以上前ですが、憶えています。向こうはいい漁場ですよ。魚の宝庫です。もう向こう行ったら、よう満船して来ました。



那覇地区漁協の深海一本釣船。1960～70年代には3、40余隻で賑わっていた。(那覇市歴史博物館所蔵)

1 航海 3、4ト水揚げ ひと月 3 航海

那覇地区漁協は、深海一本釣りが中心で、尖閣が主な漁場でしたから、ずっと向こうへ行ってましたねえ。あの当時はびっくりするほど魚が獲れましたよ。1週間では3トから4ト、5、6千斤位は積んできたから。向こう行くには、往復で一昼夜半、30時間ほどかかります。向こうに着くと、魚はびっくりするほどいましたから、3日ほどで船のいっぱい獲れました。3、4トを水揚げして5日間で帰れました。航海日数は平均して1週間で行って帰っ

てくる位で、仕込みとか、計算とかあるから2日位は家にいますから、普通天気がよくて、ピストン航海して、ひと月で3航海位でしたねえ。あの頃は船の装備もないから船員は多かったです。第三五真丸は7名位乗りましたが、大体は5,6人で行きました。ここの泊港からですねえ。尖閣で獲った魚は、アカマチ(ハマダイ)とか、もう深い所は、浅くなって行けば、フチミーグワー(大陸棚縁辺部)から上がっていく所では、シルシチュー(シマアオダイ)とか、ミーバイ(ハタ類)もいるし、クルキンマチ(ヒメダイ)もいるし、いろんな魚がいます。



正月の晴れ着姿で子供たちの記念写真。左が第三五真丸(15ト) 1960年頃か (那覇市歴史博物館所蔵)

浅瀬はシチューマチ(アオダイ)とか、マーマチ(オオヒメ)とか、いろいろ獲りました。

冬場、潮が歩かん時 尖閣へ行く

一本釣りは、季節は問わないです。年中行っているわけですが、冬の時期がいいです。夏場は潮が激しいから。潮の流れが速い時は、別の場所に移動したり、宮古、八重山とか、また宝山ソネとか、この辺を歩いたりして。また潮はとまるという時は、あっちへ行くんです。それに夏場は台風時期だから避けるんですよ。発生して逃げてくるのに30時間はかかります。宝山とか、宮古・八重山とかでは5,6時間ではすぐ港に入れますから。

気象とか、小潮大潮との絡み合いとか計算して見るとやっぱり冬場が一番多いですねえ。

もう台風が出ない前まで行きます。大体10月位から行って、翌年の2,3月位まで歩けるなあ、大体半年位ですねえ。

尖閣では潮の流れが速いですから、潮だまり(干潮時)の時は、漁はものすごくいいんです。それで大潮・小潮考えて行きます。今小潮だから潮は歩るかなだろう、今大潮だから、流れは速いだろうと、これを計算して、漁には行きます。向こうへ行って運悪くシケて、1週間、長くても10日間碇泊してもおさまらない場合は、すぐ帰って来ます。季節によって尖閣が荒れる時期は、宝山ソネとか、八重山のクボウの西側とか、水納島のツリーグワーとかに行きました。当時は宮古、八重山近海でも大部獲れましたから。

情報聞いて 向かわせる

尖閣へは、船はいつも一緒に行きません、大概交互に行きますから、情報を聞いていい時は、向かわせます。皆無線機もっていますから、もう無鉄砲には行かないですよ。

あれだけの船員を使いますから、先発隊を入れて行きます。どんなか、どうか、潮はどうか、いいよと言ったら、向かわして。ああ、駄目よと言ったら、別の漁場に変えます。合い船、僚船で行く場合もあります。1隻で何かトラブルが起きた場合、船員の怪我とか、船でパイプが切れたとか、燃料が少なくなって補給とかいろいろありますから、大体2隻

か、3隻で行きますねえ。

向こうで、操業している船は、常時5.6隻位はいましたかねえ、もつといたかも知れませんが。海は広いですから、もう見えない所でも操業していますから。それに他の単協の船が大概1,2隻はいますねえ。宮古や八重山から、糸満から来た船もいますから。向こうでは那覇地区の船が一番多かったです。また、海ではねえ、互いに情報交換しますよ。聞かれたら答えないといかんし、情報交換して、どんなか、どうかを聞いて、漁をします。

シケたら 島陰に 夜が明けると 避難船いっぱい

もう海がシケると、地元の船のほかに、内地船も、台湾船も、よう来ました。よく一緒に避難しよったんです。クバシマ(魚釣島)の島陰に。もう北の方からシケると南側に廻って避難します、南からシケると北側に行つて。もうここは皆の避難場所になるわけです。

違う所で操業していても、昼なんか見えん場合もありますから、シケてきたらここに皆集まって来ます。あっちこちらから、東シナ海ではもうここしかないわけですから、尖閣列島しか避難する場所、風をよける島陰はないですから。もう夜が明けてみたら、もういっぱいになっていましたねえ(笑い)。いつの間にここへ来たのか、地元船、内地船、台湾船が。クバシマの島陰は、風下になって風が来ないですから。でも、時々風が強いもんだから、皆アンカー入れて碇泊していて、そのアンカーが掛からんで流れて、他の船のアンカーに引っ掛かって、もう夜から大騒ぎしましてねえ。アンカー揚げて、入れ替えて流れて、また引っ掛けて、これを夜通しやったこともありますよ。

内地船は、大体が一本釣やカツオ船、サバ船でしたねえ。台湾船はマンビカー(シイラ)とか、あの浮いている魚を獲ってました。小さいトロール船もいたんだけど、台湾船は大体がサメを釣って歩くんです、ヒレは取って、胴体は捨てて、ヒレだけを持って帰る(笑い)、高級料理ですから。今でも大九、宝山ソネでやっているはずですよ。たまには、一本釣り船もいましたね。シチュウマチとかマーマチ釣とか、一緒にやったこともありますよ。

百尋線のフチミグワー いい漁場

尖閣列島では海の深さによって魚の種類が変わるわけです。100メートル以下はマーマチとか、シチュウマチとか。で、アカマチは落ちますねえ、元々アカマチは200から300メートルの所にいますが、尖閣では150メートルから170メートルの所でも食います、浅い所でも釣れますよ。

(海図を広げて)、こっちは周囲全部やります、この3つの島の周り。一本釣りですから量を獲るためには、深い所で釣れない場合は、また浅瀬でやったり、こっちで食わなければ、また移動して、あっちこちに移動して、全部廻ります。それに、こちらは潮が強いですから、潮の流れによっても、場所を替えて移動して行きますねえ。この大陸棚のラインに沿って上がった内側は浅いですから、シチュウマチとか、マーマチとか、いろんな魚が食います、外側は急に落ちて深くなりますから、アカマチが釣れます。

この大陸棚の落ちるラインをフチミグワー(大陸棚縁辺部)といいます、この崖の所はず

ごかったです。大きなアカマチが釣れます。この上の方は、また上の方で、シチューマチとか、ヒラマチとかがいっぱいいますから。フチミグワールはいい漁場ですよ。

ヒラマチの大きくなったのをロンコウと言いますが、百知クラスになるともう若者 2 人で担ぐのは精いっぱいです、あの時分は、あんな大きなロンコウが獲れましたが、今はもう見たことがないですねえ。

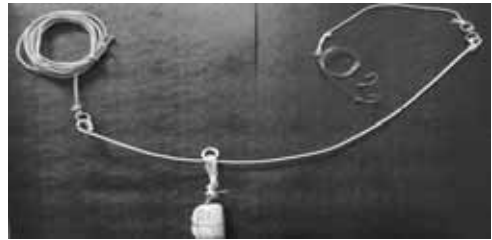
魚探ない時 海の深さ オモリ入れて測った

僕らが一本釣をやり始めた頃は、魚探もなかったですねえ。船に海図がありますから、出発点から目的地までコンパスで測って、何マイルあるから、船は時速何マイル出るから、風や潮の流れも判断して、大体何時間かかるからと計算して行くんですよ。もう船はそろそろ目的地に、ポイントに来たからと、夜でも昼でも、すぐ起されるんですよ。

「チートゥ(オモリ) イリレー(入れろ)と」と言って、ホントにその場所に来たかどうか、海の深さを測りなさいとねえ、その時はエサもかけないで、オモリ(錘)だけ付けて、縄を下ろすわけです。この縄には印されているので何尋と分かりますから、縄は流れがあると幾らかもたれますから、この時は真っ直ぐなるまで船をゴーウェイして、あっちで真っ直ぐなったら止めて、測らすんですよ。で、何メートルあると、そうしたら、海図を見るんですねえ。いや、まだ深い、もう少し浅いとか、目的地から外れている、いや近くに来ている、とか言って。もう間違っていたら、何回も、できるまで、やり直しですよ。潮の流れで外れていたら、1 回アンカー入れて操業してみると、潮がどの位流れているかは分かるんですねえ。南に潮がどの位ひいているから、北寄りに何マイル持っていけば、ポイントの位置に行くとかして、こんなして船を目的地に持って行きよったです。もうその都度、測るわけだから、大変でしたねえ。丸 1 日で目的地に行けない場合もありました。もう探しきれんでねえ(笑い)。今は、もう魚探とか、GPSとか、便利な装備がありますから、ここは水深何百mとか、船は緯度経度のどの位置に来ているとすぐ分かりますから。

イシマチャーから 針金曲げて、ヤマギタでやった

一本釣は、最初はイシマチャー(石巻落とし漁)、それからヤマギタに替わって、今の一本釣になっている。内地から親子サルカンが入って来たから、今は釣針を 10 本も、15 本も付けるようになった。最初はイシマチャーですよ。(※イシマチャー漁法は安仁屋宗栄さんの稿参照)。これは戦前から、終戦直後も皆やりましたよ。釣針にエサかけて、石にくびって、この石をオモリにして、底に落して行って、底に着いたら直ぐ引っ張るから。そしたら石は外れて、あとは一本の縄とエサだけだから、魚の食い付きはいいんですよ。



石巻落とし漁法を改良した単体式ヤマギタ。針金を曲げて作る。真ん中に吊してあるのは石のオモリ。

だけど、イシマチャーは潮がある時はダメ、縄は飛んでいくから。それに魚釣る度に石は捨てないといかん、石をいっぱい積んで行かんとできん。それで、それを改良したがこのヤマギタ式です。(ヤマギタ図を見せながら)、これは針金を曲げて作りよった。この両端にヨリカンつけて、上はキタナー(幹縄)に、下は道(幹)糸に、オモリの石は大体 200 から 300 グラム位、潮の流れにもよるが、潮が強い時は 600 グラムは付けた。オモリは、このヤマギタの真ん中、幹縄寄りに寄せてくびっている。オモリの糸の長さは大体 40 センチ位。だから、これは落ちて行っても、こういう風にエサの方を上にして落ちていく。オモリが底に着いたら止まって、ヤマギタは倒れて、釣り糸は底に、前に行くから、魚が食い付くわけ。それに、イシマチャーはオモリの石捨てるけど、ヤマギタは外れんから何回でも使えた。尖閣列島行ってこれでもやりました。最初の頃はよく、あとでも浅瀬では殆んどこれ使いますねえ。皆が休んで、自分ひとりやる時もこのヤマギタ式を。で、今の 10 本、15 本も針付ける今の一本釣式は、魚が大量にいる時は効果があるが、そうでなければ、これ(単体式)を使いました。また 1、2 人起きている時とか、夜釣りの時は、これを使いましたよ。夜釣りの場合にも使います。



ヤマギタだとオモリを捨てなくてよい。尖閣列島でもこれで一本釣りをしたと話す國吉さん。

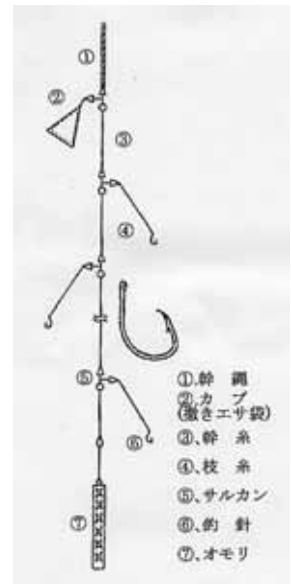
キタナー 豚血で染める 釣針 米軍のワイヤー

だけど、このヤマギタは釣針は 2 本です。下の道糸にヨリカン付けて 2 つ枝出して、釣針は 2 本しかできないです。釣針を 5 本、10 本も付けるとしたら、このヤマギタとは違う連結式になります。

(連結式ヤマギタ漁法は与那嶺三郎さんの稿参照)。

ヤマギタ 1 つ付けて、1 メートル行って、また付けて、また行って、付けて、もう 10 本、15 本も付けられますから。尖閣列島でもこの式も、どっちもやりましたよ。だけど、ヤマギタは自分で、針金を曲げて、作らんといかんから、それに鉄だとすぐ錆びるから、ステンを探して、そのあと親子サルカンが入ってきて、今の一本釣の方式(右図)に替わりました。すぐヤマギタやめて、便利だからと全部この式になりましたねえ(笑い)。

だけど最初の頃はナイロンがなかったです。僕が 25、6 になって入ってきたかなあ。枝糸に使うテグスイはあったが、キタナー(幹縄)と幹糸は、そのまま、戦前のまま、木綿と麻縄でやってきました。キタナーの木綿は染めないと抵抗かかるから。真っ白い木綿糸のサユンナー、これを豚の血で染めましたねえ。この木綿糸



現在の深海一本釣漁法

を豚の血に漬けて、乾かして、また血に漬けて、乾かして、大体これを3回位したら、もうきれいに染まっている。今度はボロ布で、これを擦って、滑らかにしました。最後は、それをセイロに入れて蒸して、乾かせば、もう完全に硬くなるから立派な幹縄です。

もう海に入れても血は溶けないし、水も吸わない。表面もツルツルですから、潮の流れの抵抗も切ります。僕は親父と一緒によく作りましたから。幹糸の麻縄は強い、ヨリも入らないし、もつれもない、水分も取らないし、ツルツルして潮切るのが速いです。だけど、透明なナイロンと違ってキタナーは豚の血で黒いし、麻縄は光って見るし、魚に目立ちます。それでも尖閣列島で魚がいっぱい釣れましたよ(笑い)。魚は相当いましたから。

それに、もう当時は何もない時だから、釣針も、針金を探してきて、自分で作りましたよ。ヤスリで先を研いでから、型作って、曲げて、リングを付ける人もいましたよ(笑い)。鉄はすぐ錆びるが、米軍のステンワイヤーだったら上等な釣針ができましたねえ。

米軍払い下げ 大部助かった。

あの時分は、船の道具作るの材料も、備品も、何もかも、米軍の払い下げです。いろいろ恩恵受けました。オモリも、米軍のフルガニ(屑鉄)とか、鉛探して、フルガニは適當の重さに切って、鉛は溶かして、地面に穴あけて流し込んで、あとからは鉄筋が出てきたから、これ買ってきて、秤にかけて、1和、2和、3和と作りました。また船のロープも、ワイヤーも、軍作業に行って、皆戦果を挙げてきて(笑い)。弁当箱も、水筒も、ナイフも、何もかも、米軍の払い下げを使いました、上等だったから。あの落下傘の絹糸、あれは抜群でしたねえ。ウチの五真丸3号は暴風対策は全部あれを使いましたから。入札業者に頼んで、手に入れました。双眼鏡は、あれも全部アメリカ製を使いました。倍数が日本ものとは比較にならない、米軍用ですから。モーターなんかも、機械も、ウチのサバニも2台据えてエンジンを、3馬力位を2台据えてやりました。

そうそう海図も上等がありましたよ、もう1つ上等なのは潜水艦海図があって、潜水艦が使う海図だからちゃんとされていて、海の底のソネは全部ある、ないとぶつかるから(笑い)。あれは長い間マグロ船する時も持っていたんですよ。魚は潮の流れでブラントンが集まるソネで釣れますから、それで潜水艦の海図を見て、このソネは、どこに、どの位の高さになっていると計算して、縄入れますから。もう米軍の払い下げは相当利用しましたねえ。僕らウミンチューは相当助かったはずですよ。

いろいろ工夫 巻き揚げ機も エサ袋にヌカ殻も

あの時分は、アンカー揚げるのも、縄(釣縄)揚げるのも大変でしたよ、皆で手繰りでしたから。今はラインホーラーとか、釣機とかあって、機械で、電動で巻き揚げるから楽ですが、もう何百メートルの深い海底から、アンカーだと60~45和はありましたからねえ。皆で手で揚げて。それで、いろんな工夫して、自転車のチューブ、古くなったものを探してきて、あのゴムを切って、広げて合わせて、針で縫って、それを手にはめて、揚げたんですよ(笑)

い)。また、内地船の電動釣機を見て、あれを真似して、手動の、手で回す釣機も造って、これを舷にボルトで付けて、長い間使っていました。何もない不自由な時だから、いろいろ工夫しました。(前掲の深海一本釣の図を示しながら)、道糸の天辺にサルカンつけて、ここにカブ(撒エサ袋)がありますねえ。三角のエサ袋、この中にエサ入れるんです。縄を入れる時に一緒に入ると、口が閉まったまま落ちていく、底着いたら、2 尋位揚げたり下げたりすると、逆さになって口開いて、中にあるエサが周囲に撒き散るから。これを食べに魚が集まって来て、針のエサを食うんですよ。だからカブグワーに糲殻も入れたねえ。何体かなあ、尖閣に行く時も 1 航海に 5、6 体位積んで行きましたよ。これと頭なんか切って、混ぜて、ご飯やお汁の余ったもの、食べ残しのカスもは全部これに入れて、全部混ぜてから、このカブに全部詰めた。効果はもう抜群です。魚はこれを食べるため、いっぱい集まってきましたよ。



自転車のチューブで掌当て作り
これだと手練りは少々楽だった。

ゆっくり揚げるのがコツ 提灯行列みたい 魚浮く、

一本釣は、針は 10 本から 15 本位かけてますから。尖閣では、いい時はもう全部にかかります。もういい場所当たったら、オモリが 3 疋以上もあつたら重過ぎて、今度は手で揚げきれんです。魚が 10 本位食つたらもうすごい重みですよ、それに潮の流れが速くて、あの自転車のチューブで作った手袋、あれが切れる位まで、手にかかりますから。だが、ある程度揚げたら魚は、自分で 100 メートル位向こうに浮いてきます。もう提灯行列みたいに赤くして、生きたまま、胃袋吐いてパタパタして回っています。その時は釣針から外れても、海の中に潜れんです。もう胃袋が出てますから。深海は大体抜けますねえ。アカマチとか、マーマチ、ヒラマチは胃袋が出るのは、速さによります。ゆっくり縄を揚げると出ないが、急いで揚げると、全部が出て、それに釣針が外れたり、切れたりしますから。

船の上では、キタナー(幹縄)入れたら、今何匹魚が掛かっていると分かりますねえ。

自分で縄を掴んでやっていますから、それで今幾ら食っていると判断して、自分で揚げ方を決めるんです。1 本だったら速く揚げて、急いで次の縄を入れんといかんから。3 つ 4 つだと、ゆっくり引いて、切れんようにして、揚げていきます。

魚は胃袋が吐き出さない状態がいい、値段がいいですから。魚を急いで揚げたり、暴れたりすると血管が切れて、肉質に血筋が出てくる。こういうのは市場で値段が安くなりますから。アカマチとか上等な魚は釣り揚げると、柔らかいマットの上に置いたり、水槽とかにすぐ入れましたよ。もう船の上でパタパタ暴れると血管が全部散りますから。

避難中、月夜の晩 マーチ 800 疋 釣り上げる、

尖閣列島での 1 番思い出ですか、それは月夜の晩に夜釣りしたことです。縄入れてみたんです。クバシマで避難していたら、夜中 12 時まで釣れましたねえ。マーマチが。それが

月がきれいな夜だったので、よく憶えています。こういうのは宝山ソネでも 1 回当たっています。大シケでも、避難しながらでも釣りはできます。北風が強くても、クバシマの南側は島陰になってますから。あの時は高気圧は 1023 ミリだからそんなにはシケンだろうという船長の勘でねえ、絶えず気象は聞いてますから。それによって波は何メートル位はあると、自分なりの判断で、あんまり島の浅瀬行くよりは、ここで一応釣るかもしれないから、ここでやってみようと、少し下の深い所に行って。それにあの時は、いつの間にここへ来たのか、地元船、内地船、台湾船がもういっぱいでした。昼間から避難して、皆アンカー入れて碇泊して、あれだけ船が、皆が、食べたご飯のカスとか、おかずのカスとか、全部流すでしょう、それが沈んでいきますから。もう全部の船から、昼間からですから。それしたらドンどん釣れましたねえ(笑い)。あの時一晩で 800 疋も釣れました。やっぱり、あの流したカスを食べに魚が浮いてきたと思います。あの時の夜釣りが一番の思い出ですねえ。

操業日誌 どこで 何が 幾ら 獲れたか つけていた

マグロ船乗っている時もそうでしたが、マチ船で尖閣列島行った時も、どの海域で、北緯東経の幾ら幾らで、何々が幾ら上がったとか、何回目操業していたとか、操業日誌を毎航海つけていたんですよ。潮の流れ、気象ねえ、天気はどうか、波は何メートル位あるとか、これが何冊も、この位あったんですが。もう海を辞めた時に、全部捨ててしまいましたねえ。一本釣の記録は、尖閣での操業日誌は、マグロ船に切り替えた時に処分しましたねえ。もう使うことないと思って、マグロ船のものは後輩が貰うものは全部上げたんですが。

あの時は操業日誌をつけていてよかったです。なぜかといえば 3 月 31 日にこっちに行ったら、来年のその日は釣れるんですよ、ここで。だから全部つけていくんですねえ、データーを。魚釣れん場合はですねえ。一年前のデーターも全部つけてありますから、開けて見て、ああ去年はこっちはダメだったなあ、今日もダメだなあって、じゃとまた調べて、別の場所は、日にちは、僅か変わるけど、漁がよかったようだ、と行って、また向こうに移動するわけよ。あんなしてデーターで全部行くんですよ、そしたら確実に釣れます。どこかで当るんです。この操業日誌は大事なものでしたが、もう使うことないからといって処分しないでとっておけばよかったですねえ。尖閣列島の海域でいつ、どこどこで、何々が、幾ら幾ら、釣れたかといういい資料になったはずですが。

内地の一本釣船 大陸棚に沿って 南下

今、那覇地区漁協で、尖閣行っている船はもういないですよ。若い人は皆大型化して、皆マグロやってますから、一本釣は 3,4 隻はいますが、皆高齢化して、年取ってしまって、行ける能力はあるんですが、行けんわけですよ。もう皆県外船が行ってますよ。こっちな那覇地区の港に入ります、こっちで仕込みして、こっちを基地にした鹿児島とか熊本が全体で 10 隻位いますけど、この船なんかは尖閣列島に行きますよ。時季的になったら九州から段々南下下下って、久米島からまっすぐノーイース(北東)かに行くソネがあるんです

よ。もう大陸棚の手前で、僕らも何回も行ったんですけど、アコウからこんなして大陸棚のソネを沿って行って、尖閣列島のフチミグーを全部探しながら漁して行きますよ。そして尖閣列島から与那国の所までずっと廻って行っているはずですよ。今は魚探とGPSを持っていますから、何でもできますから。こういう風に、大体冬場は南下して、沖縄近海、尖閣列島で操業して、ここに水揚げすると、夏場は、また戻って奄美大島、九州近海で漁して帰っていますよ。

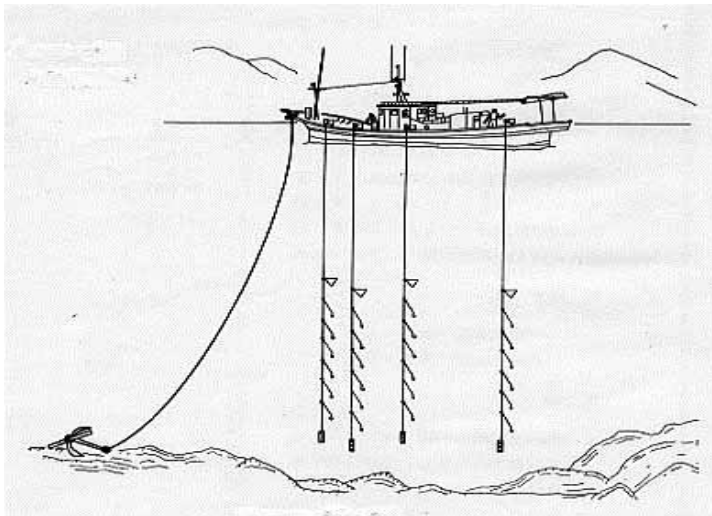
今はもう 昔のように獲れない

復帰前は、僕等の時代は、もうびっくりするほど釣れましたねえ。大概 3 日で満船し、3、4ト釣って5日で帰ってきました。ひと月に3回位航海しましたねえ。

もう、今は、1週間歩いてきて200和、300和とかいいますから。あの当時同じ日数で3、4トでしょう、しかも航海もひと月に1、2回しか行かない。そんなに魚が獲れないかと、今の一本釣りを見ると悲しくなります。もう尖閣は昔の面影はないですね。もう禿げ山みたようになっています。あの当時は、宮古の宝山ソネでも、八重山近海でも、一本釣りで魚はどこでも多く獲れました。今ではどこでも獲れなくなっています。この数十年間でこんなにも変わりますかねえ。終戦後の頃から一本釣りをやっていますが。その頃はやる人は僅かでした。ここ(那覇地区)でも少なかったです。

それが一本釣りは儲かると聞いて、尖閣列島へ行けばいっぱい釣れると聞いて、ウチらもやろうかといって、あれから広がっていったんです。ここからも、他所からも、尖閣に交互に押し掛けて行ってねえ。戦後67年経ちますが、50年で計算してみても、もう大変な数になります。成長するのと獲るのが合わず、尖閣にも魚がいなくなるは当たり前ですねえ。だけど、今は、県や国が、マチ類の禁猟区を決めて保護していると聞いてます。

昔のように尖閣列島が豊かな漁場になり、魚が回復できればと願っています。(了)



深海一本釣りの図（「沖縄県の漁具、漁法」より）

安仁屋 宗榮 あにや そうえい (那覇地区漁協)

1924年(大正13年)、那覇市垣花に生まれる。89歳(2013年時)。

垣花漁家に生まれ海に親しみ、戦前の漁村垣花には40隻余のマチ船があった等の事情に詳しい。13,4才で、飯炊きで、尖閣諸島へ、マチ船で行ったという貴重な体験をされている。翁の話から戦前の垣花漁民の尖閣へ出漁、また石巻き落とし漁をしていたようすが明らかになった。また昭和16年以降統制経済で魚価格が高い鹿児島近海に出漁し、尖閣出漁が途絶えたという新たな事実も明らかになった。



垣花漁民の長老安仁屋翁に、尖閣での漁労のようすを聞く 戦前イシマチャーからヤマギタと、一本釣漁を大いに語る

賑わった漁村垣花、40隻余りあった漁船。

— 垣花は戦前はとても漁で栄えたと聞いてますが。

安仁屋：今は那覇軍港と飛行場に取りられてないが、戦前は3つ町があって、あとで合併し垣花町になった。東は今も残っている山下町、真ん中は垣花町、西側は僕達の住吉町があって、住吉町が全部海仕事していたさあ。僕のお祖父さん、お父さん、従弟とか、親戚は皆海仕事しておった。住吉町1丁目辺りが昔はカツオ船に乗っていた。この時はねえ、カツオが高いから、カツオ船が一番儲かっていた。あの水産学校の所にカツオ製造する納

屋もあったんですよ。またカツオ船は夏だけするから、若い人達は夏中、八重山に行って、それであれ達は儲けていた。僕達3丁目の人は、割り船でクサバー(ベラ科の小魚)といって、チンブク(観音竹)で、安い魚を獲ったが、あまり儲けにならなかった。ウミンチュ(海人)クサバーというのは悪い言葉だが、僕達はそういわれていたよ(笑い)。そのうち段々カツオも安くなって不景気になったが、僕達の所は、割り舟でクサバー獲りから、段々一本釣とか、



戦前賑わった垣花漁村 深海一本釣マチ船40隻余りあったという。垣花高台から望む(「同窓会記念誌追憶」より)

シビナーといってカジギヤマグロを獲っていた。それがよかったから、垣花は皆その仕事をするようになったさあ。戦前は、割り舟しかない。漁船がないから県や国から補助があった。それで皆補助をもらって、ドンドン船を造って、魚獲って、儲けて、漁業で栄えるようになったよ。だから、戦前は、垣花には、40隻あまりの漁船があった。全部一本釣をし

ハーリー船落成写真の先輩達、大体が 尖閣行ったはず

— 深海一本釣はといえば垣花、垣花といえば深海一本釣ですよねぇ、

安仁屋：昔のことは知らないが、僕が戦前いた頃は住吉町 3 丁目辺りは一本釣が盛んだった。1 丁目、2 丁目、他所にもおったが、とくに 3 丁目が多かった。

一本釣は最初はイシマチャー(石巻落し漁)でやっていたが、あとでは下にオモリ(錘)を付けたヤマギタの一本釣になったさあ。住吉町には、國吉とか、儀間とか、安仁屋、渡嘉敷とか、川上、外間とか、この人達が多く海仕事していた。船持って、魚獲って、ドンドン儲けて、また船を造って、一本釣を盛んにやっていた。

戦前は、ハーリー(海神祭の爬竜船競漕)の時は、垣花は大変にぎやかだった。泊、久米、那覇バーリとあるさあ、那覇バーリーは、僕達垣花が皆漕ぎよった。

(爬竜船の写真を取り出して)。これが僕達のハーリー船、前はハーリーは割り舟でやっていたが、マグロやカジキのチム(肝)ねぇ、これが薬の原料になるからと、人が買いに来てから、皆捨てないで一斗缶に入れて内地に送って、この金を組合に積み立てして、それを青年団に上げてねぇ、この立派なハーリーブニを造ったさあ。これは昭和 16 年に撮った落成式記念の写真だが、僕の兄さんはここにいる。

こっちは従弟の兄さんだ。僕は 14,5 歳の頃、この従弟の船に、シンコウ丸という船に、飯炊きで乗って、尖閣列島に行った。この人も従兄弟だ。この写真にある人達は皆先輩だが、大体が尖閣列島に行ったはずですよ、皆海の仕事していたから。先輩達の名前ですか、僕はよく知らない、あの時は子供だったから、それに戦争ですぐ亡くなった人もいるから。戦前は 40 隻も一本釣船があったが、全部は、尖閣列島へ



爬竜船落成記念(昭和 16 年)、この中に尖閣へ出漁した先輩達が写っており、戦争で多くが亡くなったという。

は行かないですよ。小さい船は行かない。大きな船、10 ㍻余りの船は皆あっちへ行っていて、ただ冬の 2 ヶ月から 3 ヶ月間位仕事していた。夏は行かないですよ、台風があるからねえ。また遠く行ったら大変、逃げるといって。それに夏は一本釣じゃないですよ、今のマグロ船みたように、あのシビナーといってマグロ釣ったり、カジキ釣ったり、近海からやりおったです。戦前は、今のようにエサがないから、夏はバカイカといって、夜はエサのイカ釣って、昼は縄入れて、この喜屋武岬から久米島までマグロ延縄みたようにやりよった。

13.4 才飯炊きで尖閣へ、イシマチャーを手伝う

— 40 隻あまり一本釣の漁船のうち、尖閣へ何隻位行ってましたか。

安仁屋：戦前はねえ、この船は何トとかはあまり言わなかった。ただエンジンだけ、あなたの船は20馬力、15馬力とって、何トとってのは後からです。県からあれして、一番大きい船が14トあったって、僕の家内のお父さんのシンソウ丸（船主川上太郎）が1番大きかった。僕達は貧乏だったから船はいなかった。あっちへ行っていた船は大概10トから12、3ト位だった。僕が最初飯炊きで行ったシンコウ丸（船主安仁屋宗？）も12トだった。船員は大体8名から9名位乗っていた。尖閣へ行くのは、大体旧12月から2月位までの冬の3ヶ月位、あちは潮が速いからねえ。3月なると北に波と風が合わせて、すぐ海は荒くなって仕事ができなくなるから。1航海は10日以上だったように思う。氷も積んで行った。氷は僕達組合の南に大きい氷会社があった。昔の那覇港の角辺りに、氷会社と組合のセリ市場があった。氷会社から氷を買って積んで行った。

（尖閣諸島の写真を見ながら）、僕らはねえ、昔はこの尖閣列島をユクン・クバシマと言っていた。この大きい島がクバシマ（魚釣島）、少し上にユクン（久場島、黄尾嶼）がある。

こっちはトシマ（南小島）とイシジマ（北小島）だねえ、そこへ行って仕事していた。

どこの島にも下りたことはないですよ。ただ魚を釣って、（魚釣島を指して）、海がシケたらこの辺に避難してねえ。

最初尖閣行った時、僕は飯炊きだったから、何も分からなかった。ただ、随分遠い所に来たなあと感じただけで何も覚えていない。尖閣列島と八重山が魚獲る所では一番遠かったから、それに僕は子供の飯炊きだし、船長達に全部責任があると思っていたから（笑い）。

— 尖閣行くには、慶良間からアコウ見て行ったんですか。

安仁屋：はい、アコウジマ（大正島、赤尾嶼）から尖閣列島に行った。大体7、8マイル出る船で、那覇から34、5時間位かかる。アコウジマは朝行ったら夜が明けたら着く。初めはアコウジマから仕事をしてねえ。そこから魚釣って、魚釣ったらいなくなるから、また尖閣列島に行く。ユクンはクバシマから東になる。ユクンでも仕事した。

あっちで仕事を終えて帰る時はねえ、獲ってきた魚は組合のセリ市場に出すから、那覇に向けて直行で帰って来た。（海図を出して）。ここからそのまま那覇に向かうさあ。潮が速いからねえ、（潮流の方位矢印を指して）、これは潮が速い印だよ。帰る時は、この潮に乗ればよいから、行く時はよりは早く帰れるさあ。

僕が最初行った時、飯炊きで行った。13、4だったから、皆がイシマチャー（石巻き落し漁）で魚を獲る時は、鱸で獲る時は、表にエサがあれば、ザルに入れて持ってくる、また表で獲るなら、鱸からエサを表に、また表から鱸に、僕はもうこんな仕事だけ（笑い）。イシマチャーの仕事は子供にはさせない、やったことない。

イシマチャーの石とエサ 伝馬舟で慶良間から

— イシマチャーというのはどんな漁でしたか。

安仁屋：釣針にエサを付けてねえ、釣針とエサを、縄を、石に巻いて下に降ろすからイ

シマチャーというさあ、この石が地面(海底)に着いたら、引っ張れば外れるようにしてある。

丁度魚がエサに食いついたら、縄を握っているからすぐ分かる、すぐ引っ張るさあ。石が外れて魚が釣れて上がってくる。石を捨てて、石と魚と交代するやり方ですよ(笑い)。

このイシマチャーはねえ、沖縄近海でやっていたが、尖閣列島でやる時は、船いっぱい石を積んで行かんとできない。これ位(拳の大きさ)のマーイサー(真石、緻密な石灰岩)を、慶良間の阿嘉とか、慶留間という島から、伝馬舟で行って採って、船にいっぱい積んで持って来たよ。また八重山でする時は、西表から、浜の前から石を採ってきた。

西表と与那国の相中に中ンスニとあるから、あっちからイシマチャーをやって八重山廻ったりした。今はエサにサンマを使っているが、あの当時はグルクン(タカサゴ)だった。

慶留間の古ザマンには糸満のアギヤーのヘージョーグワー(南門小)シンカ(漁労集団)がいたさあ。浜にカバヤー(天幕)を建ててそこで寝て、また朝になったら魚を獲りに行くから、僕達はそこに舟を着けてねえ、エサのグルクンを買って、桶に、伝馬舟に積んで船に運んで行った。またこれとは別に、組合のエサとって、これを買って大きな冷蔵庫に入れて持ってくる人もおったが。

— 尖閣では、イシマチャーで、どんな魚を獲ったんですか

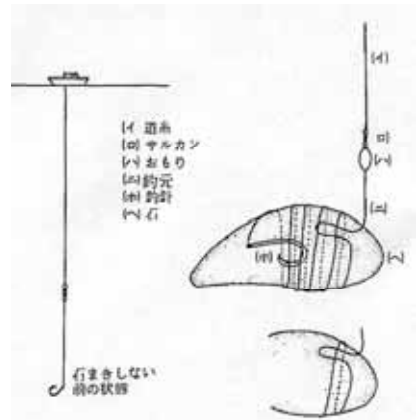
安仁屋：深さによって魚の種類は違っていきわけです。沖縄の近海は 200 尋(1 尋=1.8 メートル、約 360 メートル)もあるが、尖閣列島だったら 100 尋(約 180 メートル)から 7、80 尋位の深さがあるから、イシマチャーでは、大概 50 尋(90 メートル)から 60 尋(100 メートル)位の深さで魚を獲った。

時には 7、80 尋(130~140 メートル)の深さでもやった。

マーマチとか、シチューマチ、ガーナーシチューマチ、シルマチ、テイクチャーマチ(オオクチマチ)とか、ウチムルー(カンパチ)、ミバルとかを釣った。

戦前はねえ、オオクチマチやマーマチは高かったけど、今はこれ獲ったら飯も食えないですよ、安くて(笑い)。今は一番高いのはアカマチ、ナガジューマチ、シチューマチといった魚。逆になっている。

戦前は食べ物が少ないで、カマボコ原料の魚が高かった。アカマチはあまりカマボコにはできなくて、安かったんですよ。だからアカマチは釣れるんだが、あまり獲らなかった。今は全部刺身で食べるから、アカマチは美味しいから高いが。



石巻き落とし図 (「沖縄県の漁具、漁法」より)

イシマチャーから、ヤマギター一本釣へ 漁獲は増大

— 尖閣諸島は遠いし、波も荒く危険ですが、何であっちに漁に行ったんですか。

安仁屋：それは分からん、僕は飯炊きで子供だったから。船長達はちゃんと分かって行

ったはずだ(笑い)。イシマチャーは沖繩近海でやっていたが、尖閣列島に行けば、魚がいっぱい獲れると知っていたから行ったわけよ(笑い)。それに皆飯も食べんといかんし、皆うんと儲けないといかんからねえ(笑い)。冬になると皆、あっちへ行っていた。

魚は相当獲れたよ。だから、天気が少し悪くても獲りに行っていた。その位、尖閣はいい漁場だった。あちは、ウチムルーとか、マーマチとか、いろいろな魚がよく獲れた。

このイシマチャーもねえ、もう3年位経ってからねえ、イシマチャーはやめて、釣針の下に石でオモリ付けて、ヤマギタに、今の一本釣のようなやり方に替わってきた。

針金を曲げて、ヤマギタを作って、またこれを幾つも繋いでねえ、(ヤマギタ漁法の単体式は國吉真一氏、連結式は与那嶺三郎氏の稿参照)。このヤマギタに替わったのは、僕が16,7歳になっていた頃からだと思う。昭和15,6年(1940,41年)位からねえ。

僕はイシマチャーの時は、飯炊きで子供だったからやったことはなかったが、このヤマギタになってからやりよった。縄使ってよ。もう、このやり方がいい、魚もいっぱい獲れた、イシマチャーと比較にならない位に釣れたですよ。

— イシマチャーから、ヤマギタの一本釣に替わって、どう漁は変わりましたか。

安仁屋：とても楽になったですよ。イシマチャーは、石と魚を交代するやり方だから、船いっぱい石積んで、それを慶良間から、また八重山行く時は、西表から持ってこないといかん、もうこれが大変だった。このヤマギタになると、下に石のオモリを付けるだけだからねえ(笑い)。それにイシマチャーは釣針とエサを石に巻いて釣るが、これは慣れないと難しい。ヤマギタになってからこれが全部なくなり、大変仕事が楽になった。

イシマチャーの場合は、釣針は大概1つだがねえ。魚が獲れる所では、2つ付ける場合もあった。だから魚は釣れても2つまでだから。ヤマギタの一本釣だと、下はオモリを付けて、釣針4.5本位付けて、それにエサ付けて、仕事しよったから。

その時も、エサは同じグルクンですよ。もう釣針は4,5本もあるからねえ。

魚はずっといっぱい釣れた。魚は相当獲れたから、もう皆儲けたはずですよ(笑い)。

尖閣で、カツジョウ丸 ヤマギタで 3ト水揚げ

— 尖閣諸島では、その頃(戦前)、何ト位水揚げしたか覚えてますか

安仁屋：イシマチャーの頃は知らないが、ヤマギタの一本釣で一番大漁したのがねえ、僕の叔父さんのカツジョウ丸(12ト、船主安仁屋宗こう)だった。あの時は斤だったから、尖閣列島に1航海、10日あまり漁をして、5千斤(3.0ト)を水揚げした。

僕の兄さんがこの船の機関長をしておったが兵隊に行ったから、船長の叔父さんに呼ばれて、僕が機関長していたから覚えている。尖閣列島での水揚げはこの5千斤が一番多かった。戦前は、大体2千斤(1.2ト)以上も釣ったらもう大漁ですよ。その後こんなことがあった。従弟のシンコウ丸ねえ、僕が飯炊きで乗っていた船、その頃はもう僕はその船に乗っていないが、僕の親父がシンコウ丸に乗って、あの大東島から、あっちから、魚釣って

ねえ、大漁して帰る途中、儀間タロー船長が「ウンチュー(叔父さん)、今度の航海はとても大漁だった。僕達より魚多く獲った人はいないはずねえ、ウンチュー」と航海中ずっと、そう言って自慢していたさあ。カツジョウ丸は 5 千斤釣っていたので、簡単にこれを越えると思っていたんじゃないかねえ。

タロー船長は港に着いたら急いでセリ市場に行って、どの位あるかと計ってみたら、4 千斤(2.4 ト)だったって(笑い)。大東島での水揚げは、尖閣列島には、敵わなかったさあ。

統制経済で、魚の高い奄美・鹿児島方面へ 出漁

— 戦時体制に入って、尖閣へ出漁する船はいなくなったと聞きましたが、なぜですか。

安仁屋：イシマチャーから一本釣りに替わり、漁業組合のセリ市場も造って、これからトドンやろうという時に、昭和 16 年 12 月 3 日にあの大東亜戦争が起こってねえ。

その頃から統制経済に入って、日本全国、魚は公定値段になりますよ。沖縄は、魚は 1 斤 48 銭、鹿児島・奄美大島は 80 銭余り、また鹿児島はシチューマチとかは公定値段に入っていないから 1 斤 2 円しよったって(笑い)。この公定値段があるからねえ、奄美大島や鹿児島で魚獲って、そこに卸した方が儲けるから、尖閣列島へ行く船は段々いなくなっていったさあ。僕は兄さんの代わりに叔父さんのカツジョウ丸で機関長していたが、船長が奄美大島に行ってシチューマチとかを釣って鹿児島に持って行こうとってねえ、名瀬まで行ってそこで 2 航海した。奄美大島の海で魚を釣って名瀬に卸してきた。

あの時は石油配給制になっておるからねえ。1 ヶ月に幾らか自分の組合に水揚げしないと燃料がもらえない。それで 3 航海目には家に帰って、周辺で漁をしたが、あの時は、皆そういうやり方していたさあ(笑い)。

戦争に突入 船 軍に徴用 10・10 空襲で全滅

— そのあと、戦争に突入し、那覇は 10・10 空襲で大きな被害を受けますねえ。

安仁屋：昭和 18 年から 19 年には 40 隻余りあった船は、皆軍に、暁部隊に徴用された。

その徴用した船は、敵に見つかるといけないからと港に入れないで、波の上(地名)の下とかに隠したりしていたさあ。もう船は徴用されていないから海の仕事はなくなってきた。

時々、伝馬舟を引っ張ってきて、皆を乗せて沖にある漁船へ運び作業の手伝いなどをしたが、あとは全部、もう陸(おか)の作業だった。小禄飛行場の气象台の後ろから道造るとか、いろいろあったねえ。兵隊に行くまではもうそんな作業ばかりやったおった。

昭和 19 年 10 月 10 日の空襲は忘れられない。あの空襲で那覇は全部やられた。垣花も全部やられた。港も、船も、僕達の家も、屋敷も、全部やられてなくなった。丁度その時、運がなかったのか、僕の叔父さん達は、慶良間に兵隊さん達がおるからと荷物や道具を運んだりして島に行っていた。その帰りがけに空襲にあってねえ。アメリカの飛行機に爆撃されて、叔父さん 1 人と従弟 3 名が空襲で亡くなった。兄は南方に行く途中亡くなった。海の仕事させたら優秀な人達だったのに。あのシンコウ丸は、10・10 空襲でやられず残って

いたが、戦後は残っていないさあ。沖縄戦でやられた、垣花の漁船、全部やられて、1隻も残っていない。僕は、10・10空襲の5日後の15日、数え歳21歳で兵隊に行き、武(たけ)部隊に入隊した。そのあと台湾に移動し、向こうで終戦を迎えて、沖縄に帰って来た。

戦争で灰燼、米軍接收され 安謝、若狭、山下へ移住

— 戦後は、飛行場・軍港建設に米軍接收され、垣花の人達はどうしましたか。

安仁屋：垣花は戦争で全部やられた。港も、船も、僕達の家も、屋敷も、全部やられてなくなった。その後は米軍が港を軍港に使うとあって接收して、垣花には戻れない。だから、安謝とか、重民町(若狭)とか、山下町(ペリー)に移住した。初め僕も兵隊から帰って来た時は、山下町におったんだよ。海の仕事をしなくても船がない。しばらくしたら政府が船造って、アメリカの材料で15トンの船、ガリオア船ですよ。一本釣するものは一本釣造って、離島でもカツオ船するとカツオ船の船造って、その配給があったわけ。僕らも株で泰久丸を造って漁をやりだした。この時はまだセリ市場はなくて、あの壺川の所の海に着けて、魚を水揚げしたらこれをリヤカーに乗せてねえ、セリ市場ないから壺屋に持って行って、あっちで仲買人に渡して皆で売っていたわけ(笑い)。あとから自分達でセリ市場を造って、漁業組合作ってねえ。また山下町に戦前の海仕事する人が、あっちにも組合作って、安謝にも、そのあと、この3箇所がまとまったのが今の組合ですよ。



米軍により軍港化される垣花。安謝、若狭、山下へ集団移転を余儀なくした。(「同窓会記念誌追憶」より)

那覇地区漁協に統合 尖閣出漁 一本釣船 沖縄一

— これが現在の那覇地区漁協になるわけですか。1つにまとまったあと一本釣マチ船4,50隻を有し、尖閣出漁では沖縄一に発展しますねえ。安仁屋さんも泰久丸を新造し、尖閣で相当活躍された。泰久丸は有名な大漁船だったと聞いてますが。

安仁屋：那覇地区になって、皆一本釣船、マグロ船造ります。この人達の大半は住吉町3丁目の人達ですよ、1丁目の人もいることはいたが……。この戦後の話になると、いろいろあったねえ、いろいろあったから、話していくと長くなるよ(笑い)。

これはもう次の機会にゆっくり話そう。僕も疲れたので、今日はこれで終りにしたい。戦前の垣花のことは分かったかねえ。僕は知っていることしか話できません。

— はい、とてもよく分かりました。貴重なお話ありがとうございました。

この次は、ぜひ安仁屋さんの泰久丸のお話を聞かせて下さい。楽しみにしております。

(了)

与那嶺 三郎 よなみね さぶろう (那覇地区漁協)

1925 年(大正 14 年)、那覇市垣花に生れる。88 歳(2013 年時)。

15,6 歳(昭和 14,5 年)の頃、飯炊きとして、豊祥丸に乗船して尖閣諸島に一本釣漁に行く。終戦後は 25 歳(昭和 26 年)には株仲間で船を拵え、本格的に漁業に従事する。46 歳(昭和 45 年)には第八幸丸(13ト)建造 尖閣諸島で深海一本釣、底立延縄に専念。のちマグロ船を建造、マグロ漁を専業して 75 歳で引退する。今回、氏には戦前・終戦直後において使用されていた深海一本釣のヤマギタ式漁法の漁具を作って頂き、同漁法の話をお聞きました。

**垣花は釣漁 糸満は網漁**

ウチは垣花で生まれた。戦前の垣花は海の仕事が盛んだった。昔は糸満は釣船はいなかったですよ、皆網使った漁法で。この垣花は釣漁で糸満と並んで漁業が盛んだった。那覇港があるし、水産学校、氷会社も、組合の市場も、造船場もあったし、カツオ工場もあった。船は 30 隻あまりじゃないかねえ、数えては見ないが。年寄り達はユクン(尖閣諸島の通称)のことはよく話していたが、もう向こうは遠いから大きな船しか行かなかった。その時分は小さい船が多い、皆イシマチャー(石巻き落し漁)とか、スクフェナー(底延縄)とか、またチンブクジケー(ホテイ竿釣)といって、イェクワーシー(魚食わし)といって、小さい魚、クサバー(ベラ類、雑魚の意)とかねえ、あれを舟で獲るお祖父さん達が沢山いたよ。それで皆飯食っていたから。ウチの父はイザイ(漁り)といって、夜灯をつけてから、ヒシで貝やタコ採ったり、エビねえ、小さなエビ、これはサバニを持ってフェナーしている人がこれを買うよ。残ったものは町に売りに行く、そんな海の仕事をやっていた。小さい頃からそれ見ているから漁師になった。13,4 から船に乗って 最初は飯炊きですよ、兄貴達の(笑い)。もう 1 人前になったのは 17 からですねえ。その時から配当は同じようにくれよった。

垣花には氷会社があったから、ウチ達は氷持たされてねえ、2 人で氷を捉まえてから、1 人はカシガー(かます)掛けて、はいと、肩ヌシキティ、こんなして氷担いでやっていた(笑い)。船に足場かけているでしょう、落ちないか、もう怖くて(笑い)、ウチ達は小さかったから。もう昔は大変だったねえ。今の漁業は皆機械でやるから、何の心配もないし、天気予報も、無線も、レーダーもあるから。昔は何もない、だからカジマーイ(風廻り)には、タシメーター(老人達)がいなくなったのは多かったよ。2 月カジマーイとか、その時には。

15,6 歳 飯炊きで 尖閣へ行く

ウチは 15,6 歳で尖閣列島に行ったよ。もう 70 年前のことだけど、戦争が始まる前の昭和 14,5 年(1939,40 年)の頃だった。イーバンガシラ(伊江島の番頭)グラー(接尾語、愛称の意)のカーカンメー(屋号)の我那覇の船から、豊祥丸から。その時は 7,8 名位、船は 13ト位の船、1 航海で 10 日位かかったかねえ。こっち(旧那覇港)から出港するでしょう。すぐ久米島に着けて、そこで時間つくってから、夜中、アコウ(大正島)に夜明けに着くように、船走

らすんですよ。コンパスで方角を見て、向うは潮の流れが強いから、必ずアコウを見てから、そこから尖閣に方向をとりました。アコウから魚釣島までは何もないから、ただ勘とコンパスだけです(笑い)。で、着いたら、島見ているから、それで山当てして、漁場を決めると、縄にオモリ(錘)を付けて深さを測ったりしてねえ。その時はイシマチャー(石巻落し漁)じゃない、一本釣ですよ。「トー、ヤマギタ(山型?)グワー、入りレー」と言ってねえ。ヤマギタを使って、一本釣をしましたよ。でも、ウチは飯炊きで行ったから、させて貰えなかった。もう兄貴達がやらすのねえ、漁業習い初めで、こんなして手繰ることはできよったから、手繰ったりして(笑い)。魚釣島のすぐ近くでやりましたねえ、あの時はやっぱりシチューマチですねえ、アカマチは獲らない。もう手繰りだから、揚げるのが大変、だから深い所はあまりしなかったねえ。

イシマチャーから ヤマギタに 魚 何倍も獲れた

豊祥丸で行った時は、もうヤマギタだけで、イシマチャーする人はいなかった。石積まんといかんし、石がないからできない(笑い)。ウチらの頃は終わってましたよ。皆ヤマギタに切り替えてあった。だからイシマチャーは全然やらん、やったことない。豊祥丸で行った時は14,5歳だから、昭和14,5ですねえ。この時には全部ヤマギタになっていた。

その前は分からん。イシマチャーだったら小船ですよ。垣花にはサバニがいっぱいいたから、オジー達はそのサバニでやってましたねえ、チービシから慶良間方面まで行ってねえ。ヤマギタに替わったら、もうイシマチャーの頃とは比較にならない。魚はもういっぱい獲れたはずですよ。イシマチャーは針は1本、ヤマギタは10本も付けるから。

最初は自分達がやる時は5本位付けて、あんまり多くすると、傍のものに掛かるからよ。だけど、先輩達は7,8本も、多い時は10本位も針付けよったですよ(笑い)。魚が食ったら、すぐには揚げないですよ。縄を握っていて、今1つ食い付いた。また1つ食い付いた、もう1つ、もう5匹は食い付いていると、大体分かる、勘でねえ。で、いい時分食わしてから、皆揚げましたねえ、したら、いっぱい獲れるから。(笑い)。イシマチャーに比べると、何倍も魚獲れるから、それにヤマギタは、船に石を積んで行くかなくてもいいからねえ。

銘々で 針金 曲げて作った

ヤマギタは、自分の道具だから、皆銘々、針金で作ったですよ。戦前もヨリカンがあったから。ヤマギタはヨリカンと針金があったら作れた。針金といっても硬いワイヤーよ。この位のワイヤーが縄巻くように巻かれてあって、親方がこれとヨリカンを買って、「はい、これで作りなさい」と、それはまた経費に入れるからねえ。ワイヤーを切って、手ではできない、硬いから、これは道具を使って曲げてから作りよった。で、ヤマ



ヤマギタは、銘々こうして道具を使って針金を曲げて作っていたよと話す与那嶺さん。

ギタには、1本でやるのと、幾つもつないでやるのがある。1本式は釣針は2本しか付けられん。(単式ヤマギタ漁法は國吉眞一氏の稿参照)。尖閣行った時は、ヤマギタをつなぐ式でやりましたねえ。これを上手に作ろうと思ったら、曲げる道具は、堅い木で、樫とか、イークとか、丸太棒を切って、これに釘2本打って、釘もしっかりしていないダメですねえ。ヤマギタは紐が切れて失くす場合もあるから、その時は、予備も入れて、2、3航海分までまとめて作ったねえ。20個から30個位作りよった。もう30個もあれば十分よ。最初は、針金を曲げて、釣り糸と釣針を付けるもの(Y字型)を作るんですよ。これは二股の枝に2つ耳作って(輪状に曲げて)、幹は30センチ位伸ばして、先に耳作って、ヨリカン付けて、その先に釣針を付けます。



連結式ヤマギタはY字型(右)とI字型(左)の組合わせ、これを5~10つないで使用した。

次はヤマギタ同士をつなぐもの(I型)ものねえ、これはこっちの2つの耳に、針金を通して、その両端を曲げて、耳作れば出来上がり。あとは、ここの2つの耳から紐通して、ヤマギタ同士をつないでいきますよ。つないだ紐が縫れても、擦れたりしても、これが自由に回ってヨリカンみたいになっているからうまくできている(笑い)。これを幾つもつないでやりますよ。大体5本位つなぐが、上手な先輩になると10本、15本つないでやる人もいましたねえ。また、ここは魚はいるなあと思ったら、すぐ外してまた追加してねえ(笑い)。



2つつないだ手本を示し、連結式ヤマギタに替わったら「魚が何倍も穫れたよ！」と説明する与那嶺さん。

他所のものと同引掛かったら、すぐ揚げて、取って外して、また別のヤマギタを付けて、すぐやれるから、これは便利でしたよ。

オモリは石で キタナー 豚血で染めた

一番上にキタナー(幹縄)があって、その下にカブ(撒きエサ袋)もある。ヤマギタとヤマギタは大体1メートル30から50センチ位は離して紐でつないだ。釣り糸は30センチ位だった。

ヤマギタをつないだ一番下にオモリをつけてねえ。重さは1知はいかない。オモリの紐は別個に付けるんですよ。ヤナ(海底のサンゴ礁)に掛かったらすぐ切れるようにして、やわいものを付ける。オモリが切れたら、ヤマギタは全部揚がってくるから。だからオモリは予備を4、5個位は巻いて持っておく。慣れない人はよけいに入れて、ヤナに引っ掛けるが、先輩達は着くのは分かるから、すぐ揚げて地面に掛かからんようにする。

戦前は木綿糸を持ってきて、これを豚の血で染めて、あとは黒くなるよ。血で黒くなくても、魚は寄り付いたからねえ。その時分は魚は多いから、どこいっても魚いるから、すぐ食い付いたよ。釣り糸はテグスイを使った、テグスイは絹糸だから高かった。

戦後は三叉サルカンが出て、いろいろな道具が出てから、ヤマギタはやめているよ。
ヤマギタは、魚にしたら障害物だよ、もう目の前にぶら下がって、邪魔だから(笑い)。
それでも、魚が食ったのは、いっばいいたから。今ならとても食わないねえ。今の一本釣は、ナイロン糸を使って、透明だから、魚をうまく騙せるからねえ(笑い)。

先人の知恵 カブで 魚寄せ集める

ヤマギタを入れる時、カブ入れよった。(カブ袋は國吉眞一氏の稿参照)、三角形の撒きエサ袋ねえ。ヤマギタの一番上に付けるさあ。これも自分達で作りよった。布切れを三角形に折り曲げて、大きさは6,7寸位かねえ、これを針で縫って、三角形の袋にすればできますから、簡単ですよ。カブグワーは底に着いたら 脱げて、エサ撒く仕掛けになっている。それを食べるに魚が寄って来るさあ。これ入れるから、魚はよく釣れるさあ。簡単な仕掛けだけどよく考えている。先輩達の知恵だ。これに色んなものを入れよった。一番は米の粃殻と魚のエサを起した頭とか、搗いて混ぜたものを。ヤマギタを入れる時、カブの口の方を、捉まえて一緒に入れる。そしたら速く落ちて行く力と潮の抵抗で、口は閉じたままで、下に行くから、カブは脱げない。下に着いたら止まって、すぐ横に倒れるから、カブは口開いて脱げて行くよ。縄をちょっと上げて、落す、これを2,3回やれば、底から脱げて行く、エサはもう全部撒き散るから。カブは途中で脱げたと思って、魚を釣ってみると、下でちゃんと開いて、魚が食っているねえ、粃ですぐ分かる。魚のエサだけだと分かんが、魚の口に粃殻がくっ付いているから。それにしても先輩達の知恵はすごいねえ

オモリの石 慶良間に採りに行った

戦前のヤマギタグワーのオモリは石を使った。終戦後は鉄筋の切れ端でやったが、石に針金巻いてオモリにしていた。一番いいのは、慶良間のヤカン(屋嘉比島)という所の石、ヤカンは銅が出るんだよ。昔は銅を採っていたというが、その作業納屋は見えないが、その海のハンタ(傍ら)の石で、この石はまた重いよ、普通の石よりは。同じ大きいでも比べたら重さあ、銅が混ざっているから、1和とか、2和とか、3和位かかる石を、探してきて、オモリにしよった。だけど、ヤカンの石は、重い重い、丸みのもの、形のいいものがないですよ。ヤカンの南にクボウ(久場島)といって、そこは形のいい石があった。それで、皆大体ここに採りに行きよった。ちょっと細長くて、形がいいから針金で巻いたらすぐできるから、これをオモリに付けてやっていた。ここのものは普通の石より重さあ、あれはマジントウ(緻密な岩石)といって、沖縄(本島)の石とは違うねえ。また、イシマチャーに使う石は、慶良間辺りから採りよった。クボウとか、ギルマ(慶留間島)とかにねえ、これは1和位の小さい石でいい。ウチ達はイシマチャ



慶良間諸島、前より屋嘉比島、久場島。
〔「ウェブサイト」より〕

ーはしないから、ヤマギターの石だけを採っていた。

大シケで 魚釣島島陰へ 避難漁船 垣花船 4,5 隻

ウチは、戦前は豊祥丸に乗ってしか、尖閣行ってない。行ったのは2,3回ですねぇ。

1度は、向こうで、天気が悪くなり、大シケになってから、高い山があるでしょう。魚釣島ねえ。北風だから、あの山のカタカ(島陰)に、避難しましたよ。先輩達は昔から分かってましたねえ。向こうで波が荒くなったら、すぐ向こうに避難しましたから。船は見えないけど、天気が悪くなったら、あっちこっちからも、船が避難しに来よった。全部で4,5隻ばかり来ていたねえ、もう皆垣花の船だけですよ。

戦後になって、ウチ達がフェナー(底立延縄)で行った時は、台湾船が来よったけど。復帰した後からは中国船も(笑い)。中国の網船が。だけど台湾も、中国も、ワッタームンドヤル(俺達の島だ)と言っている。ナー、ガーハティ(もう我を張って)、あれはおかしいよ(笑い)。

戦前は、台湾船も、中国船も来なかったのに。他所の船もいなかった。皆垣花の船だけだった。そうねえ、あの時は垣花のどこの船が、何丸が来ていたかは分からんねえ。自分が乗った豊祥丸しか知らない。ウチは子供だったから(笑い)。

避難しに来たのは4,5隻でしたねえ。あっちこちに見えよったから。

尖閣で魚獲ってきたら、垣花の市場に持って行っただが、1度は、この豊祥丸で、八重山、与那国近くのソネで漁してから、台湾まで行きましたよ、魚売りに。ヒラマチといって、アカマチとは違う、長くはないが、丸みがあって7,8疋から10疋位の魚を、これを2疋位持って、台湾スオウに行ったら、もう値段が安くて。アカマチはよけい大変だった。こんな魚は見たこともないと言うて(笑い)、それですぐ帰って来たけど。

鹿児島 シチューマチ 4 倍値 皆北の海へ

それからあとは、17 になったら企洲丸といって、カーラブチグワー(屋号)の國吉さんの船に、兵隊に行くまで乗っていた、ヤマギタの一本釣船に。この一本釣船の企洲丸は、昭和17年から19年の10・10空襲までやっていたが。この頃には、八重山辺りに行っていた、尖閣にはもう行かんですよ。なぜなら、鹿児島ではシチューマチは高く売れるというので、ムル(皆)北の海に行っていたから。だから、ウチ達も、大島辺りによく行きました。もう鹿児島では、シチューマチは、値段は4倍もしたから、皆、大島に来ていたねえ。

あの時は、鹿児島はシチューマチは高いが、アカマチは安いよ(笑い)。シチューマチばかりになったら鹿児島に行った。あっちではホタといっていた。色んな魚持って行っても、売れるのはシチューマチだけ、それ以外は、アカマチ獲ったら、大島に持って行って売った。沖縄では高かったけど(笑い)。もう、何だねえ、企洲丸で大島に行ったら、やがて半年位は、沖縄に来なかったねえ。大島から、エサ、氷なんかを積んで、沖に出て、魚釣って、魚は鹿児島に持って行って、また大島に戻って、また漁に出て、こんなにしよったですよ。

戦後、大島で底立延縄 大漁に驚く

20歳で兵隊に行き、武(たけ)部隊で台湾に行き、戦後復員してきたあとは、外間の船から雇い歩いて歩いていた。一本釣りのガリオア船で15ト位の船だった。その時は尖閣には行かないですよ。して、25歳頃からは仲間6、7名で、共同で、中古船買って、幸丸と名付けてこれでやりました、これが古くなったから新造船を造って、豊泉丸だったかな。これで一本釣したり、マグロ延縄やったりしたおったが、沖縄近海から、宮古、八重山、大東島辺りです。

ウチが尖閣行くようになったのは、47歳(1970年)に、自分で独立して、第八幸丸(13ト)を新造し、自分の船を持ってからですねえ。この船で尖閣行きました。一本釣とか、スクフェーナー(底立延縄)でねえ。鹿児島島の船が、大島の近くで、ものすごく大漁していた。これを渡慶次次郎さんが見てから、「底立延縄は上等よ、あれしてみよう」といって、それでウチ達は真似したんです。最初は渡慶次さんの慶豊丸とウチの第八幸丸の2隻だった。残りはもう一本釣だから。だが、これなら、魚獲れるとあって、皆ウチらの真似をしたんですよ。最初の頃は、慶良間のルカヌフェーで、シチューマチとか、アカマチとか、獲った。相当獲れたもんだから、もう4、5日で2千斤位も。それに海も近い、日戻りできる距離。慶良間の南側だから、皆こっちに来て、皆で獲った。それでも、魚いなくなっている。自分1人だったら、相当獲れたねえ(笑い)。あそこは今につけても食わないというから、その位相当獲ったんだよ。それから、宮古、八重山近辺に行き、そこでやって、皆もやって、魚いっぱい獲って、そしたら魚はいなくなっているさあ。それで尖閣に行った(笑い)。



アカマチを釣り上げる、釣針5本で3尾釣り上げる。場所は宮古の宝山ソネ、豊泉丸の船上にて

尖閣で 底立延縄漁 専門に

尖閣は誰も行ってないから、海はまだいいだからねえ、魚がいると思って、あつちは一本釣では皆行きよったが、それでは埒はあかんさあ、これでやったら、もう全部掛かってきてよ、相当獲れたよ。アコウから、魚釣島から、トリシマから、島の周辺近く、もうあつちこっち廻ってやって、相当獲れた。

1航海で、その時分は斤だから、3千斤(1.8ト)とか、4千斤位(2.5ト)は獲れた。4千斤位なら1番大漁だったねえ。この時はマチ類は、売りもよかったから、すぐ那覇に帰って来て、ここで水揚げした。宮古や八重に着ける場合は天気が悪くて、避難の時だけだったねえ(笑い)。



1970年、第八幸丸(13ト)新造、尖閣諸島で深海一本釣を操業、のち底立延縄に切り替える

魚はタイとか、マーマチの大きいもの、7,8 疋のものが獲れた。主にマーマチめがけてやりよったから。シチューマチはシルシチュー、アオもあるが、シルーが。それに大きなタイも、あれは何タイかなあ、沖縄近海にはいないタイだ。これが大体 200 メートル位の浅瀬でねえ。アカマチも獲れた。アカマチは 250 メートルから 300 メートルで、これは 300 メートルまでできたから。また、魚釣島のニシ(北)の方に、ニシジマ(久場島・黄尾嶼)とってある。そこには寄りはしないで、その近くでやったが、いろいろ獲れた。マーマチとかねえ、ハーゲー(浅場)があって、その辺に上ると、シルイユとかが釣れよった。タイとかも、マダイかねえ、4、5 疋位もかかるタイが。

魚は相当獲れるが 大変だから やめた人多い

この底立延縄というのは、丁度一本釣があるねえ、これを海の中で横に幹縄を引っ張って、それに一本釣の下がりねえ、枝縄をいっぱい下げて、それに針かけて、魚を獲るんだよ。(※注 底立延縄漁法は渡慶次次郎氏の稿参照)。

この枝縄は 30 本以上、それ針に 5 本は付いているから、魚は大部獲れるさあ(笑い)。

この幹縄は大きな浮き付けて、目印に旗を立ててある、ウチ達は旗は 3 つ立てたけど。

この旗から旗の間はどの位あったかな。枝縄と枝縄の間は 20 メートル位だったか、もう忘れてしまったいるさあ(笑い)。これを最初やる時は魚探で底の深さを測って、何メートルといったら、浮きをしめてから、浅くなったら、くびって、深いと、また伸ばして、枝縄を調整していくわけですよ。糸満の底立延縄は、ウチ達が始めてずっとしてから、こっちのものを真似したか知らんが、あとからやっている。ウチ達がやっていた時分、尖閣で糸満の船で底立延縄していたのには遇ったことはない。皆、那覇地区だけでしたよ。

この旗式は、魚は相当獲れることは獲れるが、大変だからとやめた人も多い。縄を揚げるのにも、相当時間が掛かって、縄も失くなるしねえ。これが瀬に掛かったら、もう取れないよ(笑い)。いっぱいいっぱい巻いたら、あとは切れて揚がって来るからねえ、それに尖閣は潮の流れが速いから、オモリがよく切れるんだ。だからオモリは、いつも沢山準備しておかんといかん、それがないと仕事できんから。それで最初は、ベニヤ板で型枠組んで、それにセメンを流して固めて作りよった。1 疋位のオモリを、自分で何千個もよ、もうこれが大変だった(笑い)。その後から、皆建築するから、鉄筋屋ができて、そこに鉄筋の切れ端が、曲がったものとかが、沢山あったから、少し楽になったねえ。

鉄筋の切れ端を買ってきて、それを切って、オモリに使ったから。

尖閣に小さなフグがいて、あれが釣針の糸も、幹縄も食うよ。エサのカスが何か引っ付いたら、こっちはもう食べられて、縄も食い千切って、あの小さなフグ、たまには釣針に掛かってくるからよ。だから縄を切るのもフグだなあど直ぐ分かるんですよ。エサ食べるって、切るんですよ、歯はかみそりと同じだから、すぐ切れるんだ、食い千切るんだよ。もう尖閣にはいっぱいいる。また、あのカワハギもエサを盗りますよ。揚げたらもうエサは皆ないでしょう、そしたらセンスルーカージャーがやっていると分かるから。

このフググワー(小フグ)やセンスルーがいると、仕事はできん、すぐアンカー揚げて、他所に移動する。もう、移動、しょっちゅう移動で、大変でしたよ(笑い)。

中国底曳船団 大挙押し寄せる 仕事できず逃げ去る

ウチ達は、尖閣列島には上陸したことはない。トリシマには鳥がいっぱいいるから、台湾人が上陸して鳥の卵を採りに来よった。それを食べるためか、売るためか知らんが、相当の卵を採って持って行きよった。台湾船は大体サンゴ採りに来ていたねえ、南の方に。あれ達は魚が獲れない時は、サンゴ網曳いたり、代わる代わるして、一本釣もやっていたし、すぐ見てサンゴ網船と分かった。あそこはサンゴは採れん、あれは相当深くないと、200メートル以上ならんと、山があって、その裾の辺にあるはずだが。日本復帰したあとは、海上保安庁が尖閣を警備するから、台湾船が来たら追っ払っていたよ。

だけど、ウチ達が尖閣列島に行った時はもう中国船がいっぱいよ。中国の網船が、曳き繩船が、こんなして網で、島(の傍)からすぐ網入れていたから、もう仕事できなかったねえ。ウチ達がやる所は、もういっぱいいるから怖くて仕事はできない、20隻か30隻位だったですよ。船は大きかった、200ト位あったかなあ、小さいものから大きいものもいたから。

昼よ、向こうに着いたらいたんですよ。丁度トイシマグワー(南小島)の西辺りを、あれ達はやっているから。怖いから仕事しないで、すぐ逃げて来た。その時にウチ達も、カワハギがいっぱい海に捨てられていたのを見たよ、もういっぱいよ、小さなセンスルーカワハギねえ、海に死んで浮いていた。網から出して、捨てたはず。

もうあれだけの網船だから、もう海は網で全部曳かれて、魚は獲られているよ。それから魚はあんまり釣れなくなっていたから。それで、尖閣での底立延縄にあまり期待できないからと、そのあとからは、向こうには行かなくなりました、尖閣行くのは辞めて、一本釣に切り替えて、近海とか、大九・宝山とか行って、そのあとマグロ延縄をやりました。

長嶺のオジー 昔 尖閣でカツオ製造やった

昔、尖閣でカツオ製造やっていた人が。ウチの家内の従兄弟がいた。もう亡くなっているけど、生きていたら100歳余りになる。長嶺三郎とって、ウチ達によく来た。ウチもウミンチュ(海人)でしょう、「キミ達は向こうに行くか」と聞いて、それから話が出て、「尖閣に行ったよ」と、「ウチも若い時、魚釣島のカツオ製造工場にいて、向こうで仕事やっていた」と言っていた。あの時はカツオ製造する工場もあったって、ウチ達は海の仕事で、向こうは陸のワザ(技・仕事)だから、ウチはあまり分からんから。

長嶺のオジーとはただ会える時にちょっと話をして、若い頃に行ったということだけしか憶えていない。誰か他所の人が憶えていたらいいけど、でもあれから長らくなるから。

当時は元気でしたよ。ウチは毎日沖だから亡くなった時も分からん、船入港したらもう亡くなったと聞いてから分かったんです。オジーのことをもっと知るのには難しいですねえ。子供はいないし、もう大部経っているから、それにあの頃の人は皆亡くなっているから。

あの時分、魚釣島のカツオ工場に雇われて行ったはずだが、八重山からが多く来ていなかったかねえ、垣花の人も行ったんだけど。垣花の人は昔は相当ワッキレて(島外へ分散、雄飛の意?)行っているさあ。伊江島とか、伊平屋とか、八重山とかねえ。あの豊祥丸、ウチが戦前、尖閣に乗って行った船の船長はイーバンガシラグワー(伊江の番頭)という屋号で、お祖父さんが伊江島帰り。また隣近所にエーマジマグワー(八重山島)という家もある、お祖父さん達が八重山戻りの海人だから。

マグロ船で、新南群島、パラオ、インドネシアへ

第八幸丸でしばらく、一本釣していたが、57歳(1981年昭和56年)には、ファイバー船のマグロ船第十八幸丸(20ト)を新造した。これで新南群島(南沙諸島)まで行った。漁していたら、たまには中国船に警告される場合があったがねえ。ウチ達は縄でマグロだが、糸満の人達は、昔はここに潜って貝殻採っていた島ねえ。あつちはもう瀬だから、ハーギ(浅場)が沢山あって、曲がってあるから危ない。糸満の船でもなかなか行ききれんからねえ。

ウチが船長して7、8名位で行って、島の後ろの深い所でやって、大体15ト獲ったら帰ってきた。新南群島は1航海大体1ヶ月位で、水揚げは14、5ト位でしたねえ。あそこで釣れなくなったから、今度はパラオの南、3度線まで。陸の仕事していた長男も一緒にやるようになってねえ。あの頃は南に行ったら20ト位は獲った。1航海1ヶ月位で、たまには40日かかる場合もあったが。もう、ウチは75で隠居するから、子供達にこの事業を継ぐかと聞いたら、やると言って、長男英誠(56)と次男雅則(54)が、海の仕事を継いでいる(笑)。

2002年(平成14年)には、新造船翔英丸(15ト)を造って、南で150度、160度位、日本海周辺で、マグロ漁して気仙沼に水揚げしている。乗組員は7名、船長と機関長は息子達で、残り5名はインドネシアの青年ですよ。ウチらがやった時に比べて、今は大部楽にはなっているが、それでも乗組員は探せない、なり手がいない。だから皆インドネシアの青年、もうインドネシアの青年達がいないと、マグロ船はやっていけないですねえ。(丁)



豊泉丸の竣工式
1960年

船を背に家族親戚一同集い船の門出、幸先を祝う。右3人目の赤ちゃんは長男英誠さん。50年前の懐かしい光景

渡慶次次郎 とけし じろう (那覇地区漁協)

1927年(昭和2年)、那覇市垣花で生まれる。86歳(2013年時)。

戦後沖縄の漁業復興はガリオア船建造が契機である。氏は1949年ガリオア船第一豊泉丸を建造、マチ一本釣に。1956年には第三豊泉丸を建造、マグロ漁に従事する。1968年第一慶豊丸を建造し、1974年マチ一本釣で奄美大島に行った際、底立延縄漁を習い、初めて沖縄に導入、那覇地区漁協組合員に普及させる。糸満が導入する以前である。氏は尖閣諸島を主漁場に数年操業したあとマグロ漁に転換、以後マグロ漁に専念し65歳で引退。85歳の今尚壮健で、2.7トンの愛船を一人で繰り出し、近海で一本釣に勤しんでいる。



13,4歳で、深海一本釣、ヤマギタでやった

ウチが生まれたのは垣花住吉3丁目、育った所も垣花で、昔からのウミンチュー(海人)。次男坊だから次郎になっているよ(笑い)。中学1年出ですぐ海人に、13,4歳で、深海一本釣やったり、マグロ船やったり、一本釣はヤマギタで、三角グワで、あの時は魚探もないし、方探もないし、もう「チートウ(オモリ)、イリレー(入れろ)」といって、海の深さを、縄入れんと分からんから、あれでやっていた。そして魚が釣れたらすぐアンカー入れる。亡くなった兄貴と渡慶次マチューと川上の4名で、豊泉丸、13ト位の本船を造って、冬はマグロ、夏はそれで一本釣やった。ウチらは尖閣は行かないですよ。行っても、せいぜい宝山までねえ。大きな船が何艘もあったから、あれたちは尖閣列島に行っていたはず。

17歳になって、昭和19年1月に、ウチは徴用行員で佐世保の海軍工廠に行った。

そのあと10・10空襲があつて、那覇は空襲でやられて、垣花のウチの家屋敷も、港も、全部やられたさあ。豊泉丸もその時やられた。あとで聞いたけど。

20歳、下関で5百ト級トロール船 乗った

戦争終わって、1年位沖縄に帰れないから、下関行って船乗った。大洋漁業のトロール船を、元々海人だから(笑い)。ウチが乗ったのが第一大洋丸、5百ト級の大型船、船員が機関・甲板入れて27,8名、あの時大型船は3隻しか残ってなかった。第一大洋丸の船長は宮古の池間の人、佐渡山カン三郎というて、もう5百ト級だから威張ったものよ、会社に来ても皆敬礼しよったもん(笑い)。ボースン(甲板長)も砂川というて池間。一等航海士も、ボースンと同じ砂川で宮古の人だったねえ。それから沖縄帰って。21歳だから、昭和24年の頃、ガリオア船というて、本部(沖縄本島本部町)で、ベイマツ(米松:米国産針葉樹林)で造って、また宝泉丸の船名にして、今度は15ト、これを渡慶次マチュー(松)、これがボスなって、部下は従兄弟達3,4名、それで造った。マチューも101歳で死んだが、その船で一本釣りましたねえ。この時も、尖閣列島には行かん。そのあと28歳には、25トのマグロ船を造って、これが第三豊泉丸で、これからはずっとマグロ船ですよ。その3号が事故に遭って、しばらくは海の仕事やめていた。そのあと40歳位になって、今度はウチがボスなって、(笑

い)、一本釣のマチ船・第一慶豊丸(15ト)を造った。それから尖閣列島には行きましたねえ。向こうには一本釣では行かんですよ。スクビューナー(底立延縄)しに行った。もう尖閣列島は、魚がグジャグジャがいるもんだから、もうすごかったですよ、相当釣れましたから。

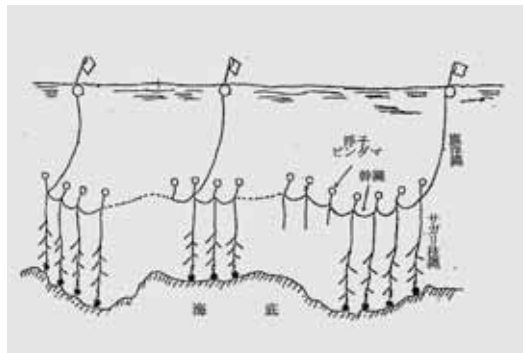
奄美大島で、底立延縄習う 金毘羅丸から

ウチが復帰直後ですか、45歳(1973年)位に、奄美大島の名瀬に、向こうに一本釣して魚下ろしに行ったら、鹿児島県の方金毘羅丸(船長岩永金蔵 5ト)というて、串木野の船がいたんですよ、タイとか、ピタロー(ハナフェダイ)とか、ものすごく積んでいた。もう珍しくてねえ、それで船長の前に行って、教えてくれないかと言ったら、道具よ、この位のビンダマかねえ。どここの船具店で、買いなさいと、もう全部書いてさあ。もうこんなに釣れているのを見たら、一本釣は馬鹿らしくてできない。それですぐ帰って来た。ウチには、マグロ船の道具が沢山あるから、キタナー(幹縄)とか買わないで、道具はすぐ作れる。あの時は、ビンダマねえ、サガリ(枝縄)に使うこのビンダマ(次頁に写真掲載)は沖縄にはないですよ。どこにもなかった、これがないとできないから。

ないものだけは、那覇地区の組合長、あの時は我那覇生精さんだから、あれに注文させて、道具を揃えて、ウチがすぐ初めたんです。これやったらもう箒で掃く位、魚が釣れよった(笑い)。ウチがやっているのを見て、いろんな人が習いにきたから。教えたけど、皆ようやりきれなかったねえ。ウチは慶豊丸で3,4年位はやっていたかなあ。マグロ船に切れ替えて途中でやめたけど。ここでやっていたのは、第八幸丸(与那嶺三郎 13ト)とか、兆福丸(船主外間安健 5ト)、とか、協徳丸(船主國吉眞喜 10ト)とか、いろんな船がやっていた。最後までやったのはこの前亡くなった國吉さんの協徳丸だけですな。

サガリ・枝縄 50 付けて、一本釣 50 縄分

このスクビューナー(底立延縄)のやり方は一本釣と変わらないですよ、(底立延縄の図で説明しながら)、ウチがやったのはこの通り、最初は旗入れてから、下に大きなオモリ付けて、旗浮縄を下ろすさあ、大体200メートル位の長さ。この浮きは大きいですよ、沈まんように、1尺2寸(36センチ)の浮子(3,4個)。これはマグロ船のものがあつたから使つた。金毘羅丸は旗は2つでやっていたが、ウチはもう1つ真ん中につけて旗3つでやった。尖閣列島は、潮の流れが速いし、旗だけが目印だし、これを失くしたらいかんから。この浮標縄に横に1つ通してあるのが幹縄、この幹縄に、浮子のビンダマ付けて、何本もサガイ(枝縄)があるねえ。これに釣針5本付けて、下に錘付



底立延縄 旗浮縄は約200メートル、枝縄間は25メートル
枝縄は25本×2=50本。枝縄長さ約18メートルとした。

けて、底に下ろしているねえ。一本釣と全く同じですよ、この一本釣の枝縄は、旗と旗の間は25本、その2つだから全部で50本位、釣針は50×5で250本位は付けている。この延縄の縄1回入れるのは、一本釣50縄入れるのと同じですよ。

これやったら一本釣バカらしくて、もうできないですよ、もう難儀して(笑い)。サガリ枝縄の長さは、自分勝手の長さだが、ウチは18メートル位にした。また枝縄と枝縄の間は25メートル位、だから、全体で1和は越えた、もうこっちの旗から向こうの旗は見えんさあ(笑い)。

尖閣の潮 流れ速い、オモリ わざと切らした

この枝縄の上に付いている浮子のビンダマ(3寸9センチ)がこれですよ。ウチらが慶豊丸で底立延縄で使ったものねえ、これで尖閣列島でやりましたよ。捨てないで倉庫に置いてあったから。このビンダマから1メートル位離して枝縄につなぐが、下の錘はビンダマがうまく沈むように付けないといかん。底に行ってもこう縄が眠るようにねえ、オモリは小さなものでよかった。1キロはなかった。尖閣列島は潮の流れが速いから、このオモリがわざと切れるようにした。切れても、このビンダマがあるから、道具も、魚も全部浮き上がってくるから。それで道糸にサルカン付けて、弱くして細くして、もう引っ掛かったら、すぐ切れる。



サガリ枝縄のビンダマ(3寸9cm)、プラスチック製 尖閣諸島で使用したもの

だから、向こうに行ったらオモリは、海に捨てていたさあ(笑い)。オモリに鉄筋使っていたら、お金がもう大変ですよ。それでトラックのいっぱい砂買ってきて、針金入れて、セメンでオモリを作って、すぐ港行って、ビンダマに吊るして、これが浮いておったら、どうもならんし、沈む位のオモリの大きさ計算して、大きさが決ったら、あとはベニア板に四角に仕切り入れて、セメンをかき混ぜて入れて作るだけ。

ウチの母ちゃんがもう毎日(笑い)、駐車場にベニア板を広げて、セメンでオモリをいっぱい作ってねえ。子供が手伝う場合もあったみたい。もう作ったオモリは、家の玄関の前に、石垣みたい積んでおったから。尖閣行く時は、そこから持って行って(笑い)。また、あの時は縄揚げるラインホーラーは油圧がなかった。それでトラックのギアねえ、クラッチ、あれを利用して、自分で改造して、ゆっくり巻けるようにした。今のように油圧式があったらもう簡単、ポンポンと速度の調整ができるから。

エンジンスローで、縄ポンポン 入れる

縄入れるポイントは、魚探で決める。水深だけ、水深を測らないと縄の長さが分からん。長さは余裕もって入れんと底に着かんでしよう。100メートルあったら100メートルは着けんと。枝縄の長さは決まっている。ウチは20メートルにしたが、旗の浮子と幹縄のビンダマの縄、この浮標縄の長さを調整しながら、枝縄が底に着くように縄を入れて行く、

魚探見てから、ああ何尋だ、何メートルだと、長さを決めてから、向こうでは一旦決めたらあまり変わらん。底はずっと大陸棚だから、大体深さが 100 メートルから 150 メートル位を主にやったねえ。主に狙ったのはマーマチ(オオヒメ)、シチューマチ(アオダイ)、タイだから。

底に魚がいるかは、あの時分の魚探では見えない、底に縄入れてみないと魚がいるか分からん。ところが向こうは魚がグワジャグワジャいるわけよ(笑い)。(海図を指しながら) この大きな島の魚釣島と小島 2 つ(南・北小島)があるでしょう。この北側でよくやりよった。魚釣島の北側は潮ひくけど、南側はあまり潮はないから、もう北側は魚いっぱいいたから、南側でやったことはないですねえ。

で、縄入れる場所とそこの水深が分かると、最初は旗入れて、そこでは縄の長さを調整して、あとは、こうビンダマを捉まえて、ポンポンと投げるんですから。その時は慶豊丸のエンジンは掛けっ放しですよ。船はごくスローにゴーウェイしながら、ポンポン投げるねえ。箱には、約 1 メートルに 50 セツ位の箱には、縄もちゃんと釣針にはエサもかけて、ビンダマも錘も並べて入れているから、すぐ一緒に投げるんですよ。向こうは、潮の流れが速い、だからもう西から東に入れよったんですよ。

縄入れる時間は、そんなに長くかからん。船は、約 1.5 マイル位出して、枝縄 50 本位、ポンポン投げて行くだけだから。

どこもかもでやった 尖閣が主な漁場

この底立延縄で、宮古近くの宝山とか、大九ソネねえ、あの辺でもやったですよ。あそこではメバルよ、オオナシいうて、あれがよく釣れよったです。タイも混じるし、シチューマチも、ビタローも、もうビタローなんかは、箒で掃く位釣れよった。

鹿児島県の北の方でもやった。宝島のこっちの方もよくやりよったねえ。また奄美大島の北のサント岩とか、ヤワテー島とか、もうどこもかもでやったですよ。奄美大島の向こうは、全部タイばっかし、レンコダイよ。小さくて約 0.5 呎位のが、この延縄でよく釣れよった。ミーバイも。与論とか、伊平屋島近くもやった。

だけど、主に尖閣列島でやったねえ。向こうはこんなに魚がいるもんだから。

尖閣では、全部縄を入れると 最初の位置に戻らんですよ、そんなに時間は待たないで、すぐ揚げたねえ。もうその位魚がいるもんだから。こっちの大九とか、宝山に行ったら、縄入れ終わると、煙草吸ったりして少し休んで、U ターンして、もとの場所に戻って、そこから縄を揚げて行った。こっちは潮の流れが緩いからオモリもあまり切れなかった。

オモリ切れて、魚 パタパタ浮いてくる

尖閣列島では西から東へ縄入れて終わったら、すぐ縄を揚げたねえ。揚げてみると、魚はもういっぱい、枝縄の針、5 つ全部を食っているから、もう揚げられんですよ。

大きい奴が食って、約 5 呎位かかる奴がねえ、その代わり、オモリは全部切れているか

ら、魚はクワンクワン浮いておる。ラインホーラーもあの時は油圧がないもんだからねえ、あの車のギアを利用してねえ、こうゆっくり、もう人が手繰る位にゆっくり回して、縄を巻き上げていく、そうしないと、魚の嘴が弱いもんだから、パタパタ切れてもう皆落ちていくから。もうマーマチがよく釣れましたねえ、ラインホーラーで揚げたら、マーマチは暴れてパタパタして(笑い)。もう切れて落ちるからと、全部カキジャー(鉤)でかけて、水槽にドンドン落して行きました。もうマーマチはカキジャーで揚げる位大きかった。

こっちが苔生えて(笑い)、真っ黒なる位、大きな奴がねえ。小さいものはそのまま揚げたけど。また、あの時分は冷凍機がないから、水槽に氷いっぱい入れて、潮水入れて、これに魚を落として入れて、すぐ氷漬けた。それがいっぱいになったら生間に移して、生間に中床しいて氷を厚めにひいて氷漬けた。お家まで氷で持たんといかんでしょう。尖閣行ったらもう1週間も、10日間も歩くから。

1日3、4回縄入れて、5、6日では満船、

ウチが慶豊丸で尖閣列島に行ったのは40過ぎだから、復帰したすぐあとですよ。

1973、4年頃かなあ、大体冬行って操業した。その時分は、向こうは魚は相当いましたよ。魚と思えん位釣れよった。この一本釣の延縄でやったら5、6日では満船した。縄は1日3、4回しか入れないが、1回で200ヤ、それ以上は釣れよった。この位の槽が2回位ではいっぱいなりよった。水揚げは3、4千斤(2~2.5ト)、多い場合は5千斤(3ト)位ですねえ。

もう、向こうでは、オモリはわざと、全部切れるようにしたから、切れないとこの道具は持たん、失くすから、これが切れたら魚もクワンクワン浮いておる。だから、オモリは相当捨てましたねえ、1日3、4回入れて150~200個だから、一航海が5、6日だともう千個は捨てことになる。もうウチの母ちゃんも、これ作るのに大変だったねえ。(笑い)。

で、魚探でポイント決めて、水深測って、もう一旦決めたら、もうずっとそこでやりましたよ。尖閣列島ではそんなに釣れるもんだから、毎日同じ所、一步もかわさん。

ここから東の方へ縄入れて行って、潮の流れが速いもんだから、ずっと東の方にもたれて、また最初の位置に戻って、3、4回しょっちゅう同じ所に縄入れてやる。

それ位魚がいよったんですよ。慶豊丸には3名から4名乗っているから、縄揚げながら、1人は魚は外して、1人はエサかけて、次の準備をしながら船を廻して。島見て、山当てしながら最初の位置に戻るが、もう潮の流れが速いもんだから、船もあんまり歩かないから、それだけ時間がかかる。だから1日3、4回入れたらもう終わり。夜はやらんです。昼ばっかし。宝山、大九では、潮の流れが遅いもんだから、1日7、8回は縄を入れたけど。

尖閣では3、4回縄入れて、それで夕方仕事が終わったら、魚釣島の島陰に隠れに行く。アンカーこっちで入れたら危ないから、島が小さいからすぐさっと行けるから。北風にはもうしょっちゅう向こうで寝ていたんですよ(笑い)、仕事ができない場合は、向こうは潮の流れが速いもんだからシケたら波が荒くて、大変だったですよ。波の高さが2メートル位だったらすぐ休んだねえ。

尖閣では、マーマチ いっぱい釣れた

底立延縄のエサは、あの時はサバの塩漬け、冷凍の奴、内地から注文したらすぐ来よったです。沖縄にないもんだから。エサはイカでも何でもいいけど、あのサバ使った。

宝山、大九、尖閣ではシチューマチも、尖閣ではマーマチがよく釣れた。

時にはメバルとか、タイとかも、たまにサメが縄に掛かってくると、棒に鉤付けて、これで縄切って、ポンポン海に落としよった(笑い)、サメは捕っても売れないから。

アコウ(大正島・赤尾嶼)はやっぱり潮の流れが速くて、尖閣列島と似ている。

アコウではマーマチはあんまり、タイが多かった。小さなレンコダイが、0.5 疋位のものが。でもアコウではあんまりやっていない。よくやったのは尖閣列島ですよ、向こうでも時々タイが釣れますよ。2 疋位の大きなホンダイが釣れました。だけど、尖閣列島はいっぱい釣れるのはマーマチですから。7、8疋、10疋掛かる大きな奴が、もう頭が真っ黒して、苔は生えたみたいな大きい奴が釣れましたよ。縄入れたら、オモリ切れて、皆パタパタしてすぐ浮かんでくるから、それをカジギヤで引っ掛けて、ポンポン水槽に落としていく。もうこれしたら止められん(笑い)、ものすごくマーマチはいるから。



いっぱい釣れたマーマチ(オオヒメ)
最大 60 セチ 平均 40 セチ

アカマチですか、アカマチは釣らなかつた。やったのは 100 メートルから 150 メートル位と浅いもんだから、200 メートルから深い所やったことはない。深い所やればできますよ。縄の長さを調整すれば、アカマチも釣れるけど、主に狙ったのはマーマチとか、シチューマチ、タイだから。

台湾船、マチくれたら、カツオ持って来よった

尖閣での底立延縄をやったのは主に冬だった。あの頃は与那国から突船が来ていた。

中国漁船は見たことなかつた。見たのは台湾漁船ですよ、台湾船はいっぱいいたから。ある時ウチらが縄入れていたら、潮の流れが速いもんだから、魚はポンポン浮いているさあ。オモリ切れて、もう魚は全部提灯行列みたいに、浮いているから。台湾船が寄って来て、この魚を盗みに来てねえ(笑い)、いっぱい浮いてパタパタしているから、もう流れてきたと思ってねえ(笑い)、ウチらは縄揚げるの止めてから、すぐ追いやった。

あの時分は、台湾船はカツオをエサにして延縄しよった、カジギ釣専門の浮き延縄を。あれは一本縄で浮いてるわけよ、もう、オモリも何も入れない。それに釣針を 15 本から 20 本位つけて、あとは流してやるが、向こうは潮が速いもんだから、それで流して、あれでバショウカジギをよく釣りよったねえ。何本釣っていたかは分からんけど。台湾人と話はやったことありますよ。魚釣島に避難しに来たら、船着けてからに。日本語も大体解りよったねえ。年寄りには、日本教育受けているもんだから、若い奴は解らんけどねえ。言葉が

通じない時はティヨーヒサヨー(手足使って身振り)して(笑い)。マチなんかくれたら、またカツオも持って来よった。台湾の酒、ボンカン酒？貰ったり、あれ甘くて美味しかった。

ウチらが行った時分、台湾船に船着けて、物々交換したりして、仲良くしておった。あの時は、保安庁が来て、尖閣列島を警備していたけど、復帰してすぐだったせいか、そんなに厳しくなかったですよ。ウチらは何10航海もやっているが、操業中は、保安庁の船は、あんまり見たことなかったですねえ、いたのはいたけど。

尖閣で漁船事故 保安庁に呼ばれ、八重山に船廻す

ただ1回はねえ、確か底立延縄をやり始めた頃だったと思うが、那覇地区の船が、尖閣列島で、エンジンに巻かれて、事故起して、ウチは、丁度その時八重山にいたから、保安庁に呼ばれたんですよ。八重山に魚下ろしている時に、保安庁に呼ばれて、保安庁の船で、向こうに行ったんです。この事故を起した船は、那覇地区船籍の15トンの一本釣船で、船名は忘れたが、この船に船長1人と船員2人が乗っていて、船長は与那国の人だった。

船長が誤って、エンジンホイールに巻かれて、エンジンはチャーマーイ(ずっと回っている)でしょう、それで背中をやられて、死んでしまっ。2人は船に残っているが、免許もないし、船は動かしきらんから。それで、ウチが保安庁から連絡受けて、保安庁の船に乗って、この船を動かしに行ったんですよ。船長に代わって、この船を、尖閣列島から、八重山に廻して着けてねえ。そのあとウチは漁しに行くから、今度は那覇地区から若い奴が2、3名くらい呼んで来て、八重山から、またこっち(那覇市泊港)に廻しにきたですよ。

あの時の保安庁の船は「八重山」というたはずだが、那覇地区の船の名前も、船長の名前も全部忘れてる。もう大部前のことだから。

マーマチよりは マグロが儲ける

尖閣列島で、あんなに釣れたのに、底立延縄はどうしてやめたかって、ウチは慶豊丸でマグロ船も、スクビューナー(底立延縄)も両方やっていた。夏はマグロ船、冬は底立延縄を。底立延縄は儲かりますよ。だけど、マグロ船には敵わんのに、だから、マグロ船専用に切り替えたねえ。マーマチは相当釣れるけど、もう一番安い、シチューマチより下がる。和幾らかは憶えていないが、アカマチの半値位。あの時分はマーマチよりマグロは高かった。話にならん。それにマグロ船の方が利益が大きい、全部の経費差し引いて、船主には一本釣は4分、マグロ船は5分だから、マグロ船は儲かるから(笑い)。

この底立延縄していた時は、宮古・八重山ではマーマチとかは全然下ろさない。もう向こうではこんなに獲ったら処理できない。宮古では避難する時たまには下ろしたけどねえ、

船便でも飛行機でも沖縄に送らない、必ずお家に帰って来た。那覇のセリ市場でしかこれは処理できないから。マグロの場合はすぐ八重山に着けた。トンボは向こうで処理してねえ、パチは沖縄に送った。送ったらすぐ内地に飛ぶ。こんなにマグロがよかったから。

ウチは早い時期に切り替えたから、その頃は船も少ないし、マグロも相当獲れましたよ、那覇地区漁協のマチ釣船もドンドン切り替えていたねえ、小さい船まで、今の5ト級のマグロ船は皆、前は一本釣船ですよ。

マグロ船に乗る 65 で退職 一本釣楽しむ

マグロ船専用にしたら、尖閣列島行ったことないです。八重山と尖閣列島との間ではやりました。波照間の北の方でも、もう向こうは、大体がバチ、トンボはあまり釣れない。八重山着けたら、もう船ではご飯炊いて食べないですよ、全部レストランで(笑い)、船員皆一緒に、儲けの一部もポケットに、小遣いにして(笑い)、その位マグロ船は儲けよったですよ。この慶豊丸でしばらくやっていたら、長男の清(60)が海やるというもんだから、八重山に船は売ったんですよ、それでファイバーのマグロ船第三慶豊丸 19トを造りました。それからパラオに行って、パラオの許可とって、そこでマグロ漁して、今は長男はこの船でアム島に行ってやっています。現地人を使ってやっているから、今はとても楽ですよ。

ウチはあれからはずっとマグロ船、65歳なって引退して、それからは今の小さい船2.7トンを造って、GPSも、自動操舵も、装備しているから、近くの慶良間とか、大九ソネとかに、一人で一本釣に行きますよ、これが楽しみですから。

あの尖閣列島でやったスクビューナー(底立延縄)ねえ、あれは相当釣れたから、今禁止になっていないかなあ、今でもウチにやれと言うたら、すぐやりますよ。あの時のビンダマもあるから、道具作るの簡単ですよ。2.7トンの船もあるから、この辺でもバンナイ(ドンドン)縄入れられるさあ(笑い)。もう面白いほど魚は釣れるんだから。(了)



「錘を作るのに毎日大変だったですよ。一人でセメンかき混ぜて・もう、うんとアワレ(難儀)したさあ」(渡慶次菊子 84 歳) (2013.2)



セメンで作ったオモリ
渡慶次夫妻に 35 年前の当時を思い出して作ってもらった。右の浮子と比べても大きいことが分かる。
大きさ：約 3×4×31 cm
重さ：約 0.7 kg

外間 安賢 ほかま あんけん (那覇地区漁協)

1935年(昭和10年)、那覇市垣花に生まれる。78歳(2013年時)。

16歳から漁師になり、サバニで慶良間近海で石巻落とし漁を操業、のち深海一本釣りに替える。先輩漁師達が尖閣諸島で大漁を見聞しあこがれて、1958,9年、23,4歳で永昌丸(15ト)で、尖閣諸島へ深海一本釣りで出漁する。以来60歳で病気で漁師を辞めるまで、同島海域での深海一本釣りに36年間従事、氏は、健康を取り戻せば、今一度尖閣行って漁をしてみたいと語っている。



生粋の垣花漁師 16歳から サバニでイシマチャー

僕は昭和10年(1935年)生まれで、今年で78歳、生まれたのは那覇市住吉町3丁目71番地、生粋の垣花ウミンチュー(海人・漁師)さあ。戦争で家は焼けてない。



戦前ののどかな垣花の漁村風景、戦後は那覇軍港に接收され移転(「写真集 沖縄」より)

戦後はチャーナガリーテー、(ずっと放浪して)、壺屋にいて、そこから今の安謝に移動してきた。

16歳の時(1951年頃)には、もうイザリしてサバニに乗って、イシマチャー(石巻落とし漁)していた。ここから慶良間近辺を。タンメーター(爺さん達)からイシマチャーは教わったが、戦前はこれをしに尖閣へ行っていたそうだ。

イシマチャーは魚喰うのが早いんだ。

それでマチ釣のタテナー(一本釣)あるさあ、あれに切り替えて、それから大きい船に乗るのがいいと、大きい船に乗ったねえ、船員して、あとでは船長して。その時分には尖閣には行かない。最初にあっちへ行っただのは、自分の船永昌丸15トを持ってからですよ。

先輩漁師見て 尖閣行きを決意、

その頃、那覇地区漁協にはねえ、深海一本釣りで、尖閣行く船が多かった。瑞宝丸(船主：儀間サブロー)はよう大漁していた。泰生丸(船主：儀間真コウ・ジロー)という船もいた。あの人は亡くなったけど、この人はよう尖閣に行きよった。泰久丸(船主：安仁屋宗栄)、もうこの人は90近くなるはず、よく尖閣に行きよったねえ。瑞幸丸は渡嘉敷真厚さん(シンコーヤッチー)も、宝生丸の我那覇生康さんもよう行きよった。國吉真喜さんの協徳丸も、あの人は80余り元気なはず、この人も相当行っていたよ。この人達が尖閣の先輩だった。非常に詳しいさあ。この人達が3ト位水揚げしたから行きたくなったわけさあ(笑)。

釣れることが分かっているから、皆んな5千斤、3トも釣って来るのに、これ見たら尖閣に走るさあ。向こうは、デージナ(非常に)釣リータンヨ(釣れたよ)、ほんとの話、3ト位よう釣れて来たんですよ。2ト、3ト位、大漁したら3ト位、皆が大漁したら、僕も行きたく

なるさあ。それで 23、4 歳(1958、9 年)の頃には、カツオ船を買ってきて一本釣りに改造した。これが永昌丸 15 ト、八重山・鳩間から買ってきて、元の船名は忘れた。それで行ったねえ。

永昌丸 15 トで尖閣へ 3 トも大漁する

やっぱりあの当時は相当釣れたねえ、魚はずっといた、相当いた。永昌丸 15 トは 7 名で行ってねえ、1 航海は大体 10 日位かかりよった。15 日かかる時もあった。天气が悪い時には。大漁した時に 10 日以内に帰るということは滅多にないねえ。冬場だから仕事ができないさあ。それで 15 日はかかっていたねえ。大漁の時は 3 ト釣る時もあった。少なくとも 2 トは釣っていた。もう忙しい位魚が釣れよった、すぐ傍で。沖縄帰ったら島の近くでそんなに釣れないさあねえ。すぐ人が見える位でも魚釣れよったのに、そんなに魚がいた。島の近辺も全部魚がいたよ。プープー(クルキンマチ)とシチューマチ(アオダイ)、マーマチ(オオヒメ)とかを釣っていた。魚釣島の西側でねえ。アコウ(大正島)でもよう釣れよった。ユクン(久場島)辺りは岩が少ない、泥になって魚が少ないからあまり行かん、たまには行ったが、大概魚釣島の西側を歩いていたさあ。

垣花漁民 戦前、尖閣でイシマチャー、先輩から聞かされる

戦前、垣花は、尖閣へようイシマチャーしに行きよったって、この話は小さい頃先輩達からよう聞かされた。また永昌丸 15 トに乗っていた我那覇生トクさん、この人はもう 90 余るさあ、亡くなっているけど、我那覇さんからもよく聞かされた。イシマチャーしに、石積んで行きよったって、マーマチが非常に釣れよったって、トイジー(北小島)があるさあ、その東の方で、もう非常に釣れよったって。イシマチャーといのはこの位の石を、エサ付けて釣針くびって降ろしてよ、地面に着いたら外して潮に流すさあ、これで釣りよった。

僕らも小さい時、サバニからようイシマチャーやりよったけど。

戦前は、石は慶良間に船着けて、伝馬舟にこれ積んで、あそこへよう行きよったって、その話は先輩からよう聞いた。でもイシマチャーは深い所はできないさあ、浅い所しかできない。大体外すのは大体 50 尋(約 80 メートル)から 60 尋位(約 100 メートル)じゃないかねえ。

非常にマーマチが釣れたって、でも、今のように行かなかつたはず、天气の問題もある。石積まんといかんさあ。天气が大変なのに、尖閣に行くと。

40 隻余が操業、那覇地区から 10 隻位、多かった台湾船

永昌丸 15 トで尖閣に行くとねえ、あっちこっちからの船が来ていたねえ。僕らの那覇地区の船も、あそこに糸満からも来るさあねえ。八重山からも来るさあ、天气がシケたら皆避難しに来るから、多い時で 40 隻位はいたかねえ、那覇地区の船は大体 10 隻位だった。那覇地区は皆が皆尖閣には行かない。半分はこの辺沖縄近海歩いて、半分はあそこに、小さい船はあんまり行かなかつた。あっちへ行く船はもう決まっていた。ちょっと大きい船が行きよった。僕はずっとあそこを基地にしていた。冬場は毎航海行っていた。

本土のサバ船が、夜電気点けて操業していたが、あまり見なかったねえ。サバはずっと北の方にしかいないから、尖閣辺りにはあまり来なかった。カツオ船はよう見た。アコウの辺りはよう来よったですよ。大体2,3月に、海が静かになってよう来よった。大きな船だった。40トン位じゃないかねえ。マグロ船よりはずっと大きい、その船の人と話はない。カツオ船だなあといって傍に寄せたことはない。僕らと関係ないから話したこともない。台湾船のマグロ船はよう来よったねえ。延縄でサバ(フカの意)釣りに来よった。今のマグロ釣るさあ、そういう縄が入って、エサは生餌かけて、また投げておって、時間なったらたぐる、揚げたり、やったりしていた。マグロでなくフカ釣りに来よった。台湾人は好物と言うさあ。台湾船はフカの目当てで、尖閣に来よった。台湾船は多かったねえ、沖縄の船よりは多かった。兆福丸の時でも、永昌丸の時でも、台湾船は僕らの船よりも大きかった、15トンから20トンの木造船だった。

無線電話ができて、安心操業

尖閣へは天気見て行きよった。沖縄からも、八重山からも行きよった。八重山からは朝出たら夕方あそこには着きよった。沖縄からは2日かかる、朝出したら明日の夕方しか着かない、久米島からアコウの南を通って行った。天気が良い時はそのまま向かって行きよった。この頃は地図と羅針盤だけさあ、島見るといって大変だった。もう、何時間も前から島見るといって起きて島見ていた(笑い)。永昌丸5ト時代(注、復帰後)は、電気でこうして山が出るのがあったさあ、ああ、あれはGPSでなくローランか、ローランで行きよった。この時から楽になっていたねえ。GPSなら簡単だったさあ、眠っていてもどこ来ていると分かるから。尖閣は天気がシケた時は大変さあ。この辺の海とは話しにならない。波は高くて大きいさあ、潮の流れが速いから命がけで仕事やっていた。天気が破れた時は島陰に逃げるといって、ほんと精いっぱいだったですよ。天気が北風なるさあねえ、あそこは潮の流れが速いから海が荒くなる、もう遭難したら大変。苦勞の連続だったですよ。小型船舶に無線電話ができたから、ちょっと安心だったねえ。何か事故あったら連絡できるさあ。15トンの頃はない、5ト未満になった時、まあ、補助で付けるようになっていた。付くと検査が通らない。無線電話は検査に入っていた。

これが入ったから安心だったですねえ。自分はどこに来ている。どういう状態とこれで話してスイッチ入れたら、もうどこにいると分かる、これで連絡していた。

これがない時代は大変だったよ。何か事故あったら知らせんといかんし、僕は船長として責任もあるし、これで安心して操業できたねえ。

毎航海、開洋塔に、安全操業を祈願

僕は、漁に出る時は、安心操業とか、航海の安全とか、大漁祈願とかを、開洋塔に拝みに行っていた。家の近くにある開洋塔に、いつもそこを拝んでから漁に出ていたねえ。大体朝早く出るから、朝早く拝んで海に行きよった。僕ら垣花の住吉の人達は、皆拝んでか

ら行っていたはずよ。この垣花の竜宮神は、戦前は住吉宮にあったが、戦後は那覇軍港を造るから立ち退きになって、それで安謝にウンチケー(お招き)して、向こうの丘に開洋塔を建てて祀っていたけど、そのあと、今の場所に移してきた。毎年旧9月29日には、皆でそこに集まって、竜宮神へ海ウガン(御願)をするさあ。一年間の安全航海、大漁祈願の願いと感謝のウガン(祈願)をねえ。僕はそこに、漁に出る度に、朝早く手を合わせてから行っているから。この開洋塔をいつも拝んで行っている。だから、僕は、尖閣行っても、宮古の宝山、大九行っても、八重山行っても、どこ行っても、大きな事故に遭ってませんよ。これも竜宮神がミーマンキテ(見守って)くれているから、開洋塔のお陰ですよ。もう安心して漁ができるさあ(笑い)。



毎航海、安全を祈願した開洋塔。戦前垣花にあった住吉宮をお招きして安謝住吉区に祀ってある。

冬 潮が切れる頃 尖閣へ

尖閣には、冬場しか行かない。夏はこの辺歩く、沖縄近海、宮古とか、宝山、大九辺り歩いて、八重山とか歩いて、冬場しか行かない。冬は潮がなくなるから、黒潮が切れるから、それ当てて、あそこに行きよったねえ。夏は潮が速い、流れが速いと仕事ができない、ウチナー口(沖縄方言)で、潮の流れが速いことをスーガヒチョーン(潮がひいている)と言うさあ。夏は潮がひくからと仕事はできない。冬は季節風があるさあ、15メートル、20メートル吹くさあ。そういう時しか静かにならん。天気がいいと黒潮が流れ過ぎて、仕事にはならない。尖閣行くのは、もう大体11月から2月頃まで、それから後は潮がひいて仕事はできない。2月末頃、黒潮の流れが変わるかもしれん、どこで変わったか分からん、専門でないから。モンゴル高気圧が1040、50ミリとかになると天気は破れるねえ、北風なるさあ。その時は潮がなくなる。高気圧とか、気圧の関係じゃないかねえ。僕は一本釣しかしてなかった。だから尖閣には潮がある時は、一本釣は行かなかったねえ。

魚を満船 大漁して帰るのが 一番の楽しみ

尖閣行った時に楽しい思い出ありますかって、そんなのないですよ。魚が釣れるのが楽しいさあ、いっぱい釣れるのが、大漁して帰る時が一番の楽しみさあ。この他に漁師は楽しいのはないよ(笑い)。もう、びっくりする位釣れたことあったかって、そんなには釣れないさあ。まあ、釣ろうと思ったら釣れるが、もう引き揚げて帰る時もあったねえ。氷が漬けるのがなくなったら、魚は腐れるから、なくなったらすぐ帰って来た。

氷がもっとあったら、もっと、3トンは釣れたねえ。氷が足らなくなったことはたまにあった。島に上がったことは一度もないねえ。天気の悪い時は、島の近くに行って錨下ろ

すけど、島に上がったことはない。ボートを持ってないから。トリシマでも鳥捕りに、卵採りにも上がったことはないねえ。仕事しに来ているから魚釣ったらもうすぐ帰るさあ。

復帰後 永昌丸 5ト未満に替える

日本復帰の年はいつかねえ。1972年ですか、あの頃から魚は段々少なくなっていたねえ。それで永昌丸 15トから永昌丸 5ト未満に切り替えた。那覇地区の丸二丸（船主國吉真喜）を買って、切り替えた。いつだったかねえ、もう忘れた。そのあとファイバー船兆福丸を新造したが、これも 5ト未満にした。両方とも実際は 4.99トだが、5ト未満になると検査が緩いから、5ト以上なったら検査が厳しい。何もかも入るから、5ト未満は簡単だから、今の軽自動車みたいなもの。15トは検査が厳しかったから 3年に1回は定期検査でエンジン全部ばらさないとならないし、経費もかかる。それで5ト未満に切り替えたねえ。

この永昌丸 15トの時は船員は7名だったが、5ト未満は4人でやった。もう魚は前のように釣れなかったねえ。大漁した時は2トは獲ることはないです、1ト半獲ったらいい方、たまに2ト獲る時もあったが減多になかったですねえ。

復帰してからは、台湾船にあまり邪魔されなくてよかった。保安庁の警備船が来てからホースでよ、これで帰れと、ホースで水かけてもう追い払っていた。傍に寄せつけなかったねえ。復帰してからずっと警備船がいた、毎日いたから。

中国漁船 200隻余来る 機関銃もつけて

中国船がいっぱい来たことがあったねえ、びっくりする位、中国船が 200隻あまりもねえ。復帰してからすぐだった。中国は尖閣で石油が出るからと、尖閣はワッタームンヤサ（我々のものだ）といってねえ（笑い）。尖閣盗りに来たのかねえ。アッターヤ（あれ達は）ヌスルヤサ（泥棒だ）だ、ウフヌスルヤサ（大泥棒だよ）。機関銃もつけてあったってよ、中国の船は皆装備していたって、行った船はびっくりしていた。その時僕は家において、あっちへ行かなかった。行った人は、この船達は装備してあったって、機関銃も何もかもつけて、もう、いっぱい来たからすぐ逃げてきたって。僕はそういう話を聞いて、大変だなあと思った。もう、漁も何もできなくなるからと、漁連が皆に呼びかけて、那覇地区も呼びかけて、もう皆で、「尖閣漁場を守ろう」の大会開いて、デモ行進したさあ。その時は僕は用事があって参加できなかったが。

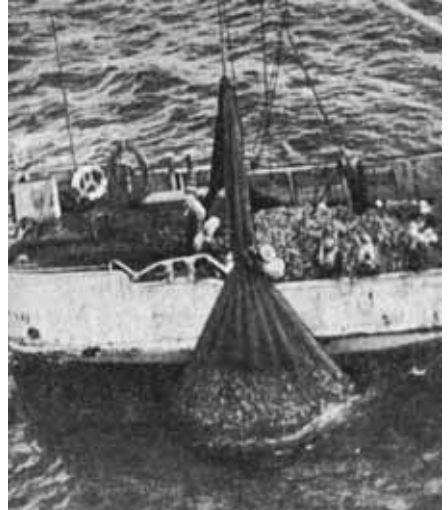
中国漁船は、復帰しない前は全然来なかったのに、復帰してから、もうあそこに石油が出るという話が出てから、尖閣によろ来るようになったねえ。その前は全然来ないよお。

中国船 底曳きで、魚いなくなる

あの中国漁船が機関銃つけて大勢来たあとからかねえ、そのあとから、中国から底網サー（底曳き船の意）が来たねえ、魚釣島の西側辺に来ていた。領海外だから警備船も取り締まれないさあ、これが来て流したら眠られない位心配したよ。鉄船で大体 150ト位じゃ

ないかねえ。この前警備船に衝突した中国漁船があったさあね、丁度ああいう船が来ていた。ペンキはあまりきれいに塗ってなく、鉄船の汚れた船が来ていた。

あまり多く見たことはない。よういって 5、6 隻じゃないかねえ、あっちこっちにいた。冬の 11 月から 12 月の間、もう大体 3 月まで。怖いから近づかない、ビクビクしていた。僕らの船は小さいさあ、潮に流れて来た傍にどけて、すぐ遠くに逃げる、鉄船だから。これ沖で当たったら大変さあ、破れるさあ、底から網曳いて歩くのを手繰り船といいよった。このあとから、尖閣に行ったら、毎航海見る位だった。どこかに灯がいっぱい点いてよ、ああ、中国の手繰り船が来ているとそれでよう分かった。電気点けているさあ、マッカーラー（赤々と）して。



1978 年 4 月中国武装漁船、尖閣諸島に大挙押寄せ、底曳きで操業（琉球新報 1978.4.15）

日本の手繰り船は、底曳き船は、たまには来よったが、尖閣には来ないですよ。八重山のイリ（西）の方に中ソネと台湾ソネあるが、こういう所に来よった。また宮古の南の方ねえ、タヌマヌヘイ（多良間島の南）といいよった、この辺にもよう来よった、宝

山にも。尖閣には来なかったねえ。中国の底曳き手繰り船が、尖閣に来てから、その頃から魚がいなくなっていた。底から全部曳くさあねえ、その関係で魚が全部なくなっていた。ほんとに全然釣れなくなっていた。今は魚はいないよお、尖閣行っても。あんまり釣れない、昔はデージナア（相当）釣れよったが。段々いなくなって、行ってもそんな獲れないから、もう八重山近海を歩いていたもん、魚釣れないから。あまり尖閣行かなくなっていた。魚がいなくなっていた。

尖閣の魚は小さいさあ。別のシチューマチはこの位しているがねえ、向こうのはこれだけしかない。非常に小さい、値段が非常に安い、小さいから、あそこの魚は。沖縄の近くの魚は大きいけど、あそこのはプープーでも、何でも小さいから安かったですよ。魚は釣れるけど、小さいから値段があんまりもたなかったねえ。

何であっちの魚が小さくなったのか分かんですねえ。皆が釣ってからじゃないかねえ（笑い）。最初はあまり変わらなかったけど、皆が釣ったから大きいのはいなくなって、小さいものになって、釣れなくなっていた。今はいるかねえ（笑い）。皆が行かなくなったから釣れるかもしれないが、その位釣れなくなっていた。

一本釣から 立て延縄に切替える

魚も少なくなっただけで、儲けも少なくなってきたから、それで 5 ト未満の船に切り替え

たが、それでも大変だったねえ。その頃から大概皆は一本釣をやめて底立延縄で対応していた。釣れる魚はプープグワーとか、シチューマチとか、一本釣と変わらない。(※注 底立延縄漁法は渡慶次次郎氏の稿参照)。

僕もこれに切り替えた。立て延縄は何百メートルもあって、端と端には旗があるさあ、向こうの旗見えない位長いですよ。その間にさがり(たて縄)が幾つもある。さがり1つにテ

ィーグワー(釣針)は5本位つけてあるから、全体で100本はきかない、200本位かねえ、だあ忘れてるけど、200本か250本位ついていたはずよ、このさがりにオモリ付けてあるから底に下ろしてねえ、沖投げて流してやりおった。浮きつけて流すからナガシメーナ(流し延縄)とも言うさあ。潮にもたして魚がいる時に釣るようにされていた。こういう延縄していた。流してから20分から30分位休んでから揚げよったねえ。釣り針が200本位もあるから魚はいっぱ



深海一本釣36年間の足跡を語る数々の賞状

いかかっているさあ、手繰りでは揚げられない。巻き上げ機で巻いて、ローラーでやっていた。かかっている魚を取って、今度はエサをつけて、また降ろして、それを大体1日6回位するさあ、7回も、1回揚げるのに1時間以上かかりよった。

それにエサ切ったり、エサ撒くとか、それで準備するだけで10分位かかるさあ、だから一日中ずっと、8、9時間ずっと、忙しかったよ、一本釣よりきつかったです。一本釣はもう釣ったら揚げるだけ、あれは旗の所に行って揚げて、また行って、揚げて、もう休む暇なかった。6、7回したら太陽も落ちていた。一日が終わっていたさあ(笑い)。

底立延縄 糸満が上手 尖閣で常時10隻ほど操業

糸満の船は一本釣はあまりやらなかった、底立延縄だった。この立て延縄で非常に対応していたよ。糸満の船は相当対応していた。(※注 糸満漁協の底立延縄漁法は上原常太郎氏の稿参照)。あそこはエサはイカ付けてよ、僕達はムロ(アジ)を使っていたから、あれで一本釣していたからよ。糸満はイカ使ってイカで相当釣れた見たいだねえ。大漁していた。儲かっていた。僕達の3倍も釣れていた、ほんとですよ。

一本釣の場合、僕達が上だが、立て延縄だったら、糸満が上だったねえ。あれ達からどの位釣ったという話を聞いていた。また一緒に歩いても相当大漁しよった。よう釣っていたねえ。でも糸満は雑魚も、何でもかんでも、獲っていたからねえ。僕達は選んで獲っていたから。でも量からいくと那覇地区の船が敵わなかった。尖閣にはもう多い時は糸満船は大概10隻位いたねえ、来る時は大体同じ場所に来るさあ。那覇地区の、僕達の船も10隻位じゃなかったかねえ。

経費もかかった立て延縄 やめて一本釣に戻る

底立延縄はもう何でも釣れる、安い魚も、高い魚も、だから量が多かっただけ、でも僕達はある限り小さい魚は釣らなかった。いい魚しか獲らなかった。アカマチとかソームン(価値ある魚)、そういう物しか釣らなかった。小さい魚はいることが分かってもあんまり釣ろうとはしなかった、深さによって変わるからよ、小さい魚釣ると、大きい魚、いい魚釣ると、深さの関係だからよ。釣れたら揚げるけど、あんまり熱心にやらなかったねえ。

立て延縄は、縄は長くて釣る範囲も大きいから、一本釣よりもよかった。魚の量も多く、小さい魚も、大きい魚も、いっぱい獲れた。でもしばらくすると、魚が少なくなって、釣れなくなった。それに立て延縄は、時間も経費もかかりよった。釣機でも、エサ代でも、一本釣よりかはずっとねえ、エンジンもずっと掛けっ放しさあ。一本釣はアンカー打ったら、エンジン止めるからよ。燃料もあまり喰わない。立て延縄は流しだから燃料喰いよったねえ。経費が倍かかりよった。それに最初は相当釣れて大漁していたが、段々釣れなくなってきてですよ、それでもうやめてねえ、もとの一本釣に戻りました。(笑い)。

ファイバー船兆福丸 新造 アカマチ専門に

そのあと 49 歳(1984 年)の時、ファイバー船兆福丸を新造したさあ、八重山の造船所で。5ト未満は検査が簡単だから 4.99トにした。乗組員も 4 人から 2 人にした。設備があったからよ。2人でできるようになっていた。船も走るし、船は走らしたからよ、船がスピードが出るから航海中の時間が少ないから 2人で十分できるようになっていた。経費をうんと削るためさあ、船員も雇い難くかった。人雇ったら金貸さんといかんからこういう関係もあったねえ。2人と3人とは経費は大分違う。それに魚は鮮度が落ちないうちに航海した方がいいさあ。それで最新式の船に切り替えした。古い船だとちょっと日にちも、時間もかかって、鮮度が落ちるさあ。速い船にすれば少し魚釣っても、家に帰ったら配当があるからよ、それで新造船に切り替えた。

大漁したら早く帰った。その時は魚がいなくなっていたからよ、もう大体 10 日位かかりよったよ。アカマチ専門に釣っていた。大漁したら、たまには 1ト釣る時もあった。まあ大体 500 疋もあればねえ、その時はアカマチだったから引き合った、アカマチは高かったから。

2人で 500 疋だったら大漁だった。

500 疋から 800 疋、1トは滅多に釣れなかった。尖閣に行ったら大体 500 キロ位釣

れよったねえ。この辺歩いた時には 200 疋から 300 疋、500 疋釣る時もあったが、その時代は尖閣に行ったら 500 疋位は釣れよった、アカマチだったから。



兆福丸の進水式 昭和 60 年 11 月、少人数で操業でき、最新・最速のファイバー船に切替える

永昌丸時代はアカマチはあまり釣らなかったねえ。その頃はプープグワー、シチューマチが沢山いたから、よう釣れるから、あんまりアカマチ釣には行かなかったねえ。あれは深さが違う、あれは少し深い所にしかいないから、アカマチはちょっと釣れにくいさあ。シチューマチは広いからよお、兆福丸に替えてアカマチ専門になったけど、僕達は2人でやっていた。兆福丸は上等なって、2人でやって儲けたよ。持ちやすくて、ケーブー(艶福な)船なって、兆福丸で儲かったさあ。

マグロ延縄に大半転換 一本釣を継続

那覇地区は、垣花時代から、イシマチャーとか、一本釣が専門だったさあ。

だが今は一本釣船はいない、少なくなっている。皆マグロ船に切り替えている。あのクロマグロの釣れるようになってからよお、それで切替したねえ。クロマグロよう、これが釣れるようになったからマグロ船に切替した。

いつ頃からか覚えてないが、復帰したあとからねえ、我那覇生精さんが組合長していた時分だった。沖縄近海であのウシシビ(クロマグロ)が食うとあってねえ、あれで切替したさあ。少し大きい船はねえ、大概10ト未満の船はマグロ船に切替していたねえ。それで一本釣している人は大分少なくなっていた。ワッターヤ(俺らは)チャー(いつも)一本釣テヤー(だけさあ)。船が小さかったから、5ト未満だったからやらなかった。僕は一本釣しかできないから、これしか分からないから。それに好きだったからねえ。病気になるまで、ずっとやっていた。満65歳で病気でやめたさあ、もうやめてから13年位になる。

元気になれば、もう一度、尖閣列島に行って、一本釣したいねえ。

(了)



魚釣島の夕焼け 南斜面から古賀村跡を望む (新納義馬 1979)

高江洲 昇 たかえす のぼる (那覇地区漁協)

1933年(昭和8年)、八重山石垣町/登野城に生まれる。80歳(2013年時)。

13歳から石垣市で漁師となり、素潜りを特技とする。25歳に那覇移住、那覇地区漁協に所属し、25歳(1958年)に第一安洲丸を建造、深海一本釣を専門に行う。41歳(1974年)に第三安洲丸を建造、以後、尖閣諸島を冬場の漁場として出漁、60歳でマグロ船に切り替える。40歳から60歳までの20年間に亘り、尖閣で一本釣に従事する。のちマグロ漁を行い70歳で引退する。



13歳から素潜り、那覇地区で、一本釣を

僕は八重山の石垣市登野城で生まれた。親は那覇出身だが、13歳から漁師だから最初は素潜りでした。その頃はパンタタカーとか、魚追い込みとかした。与那国は突船のほかにかつオ船も多かったから、与那国でかつオのエサ採リアギヤもしました。また鳩間旅や波照間旅も。あの時分は鳩間や波照間には、かつオ船10隻余りもいましたよ。もう今はなくなってますが。25才には八重山から那覇に出てきました。船長免許をとって、第一安州丸を造ってからは、那覇地区漁協に所属して、ここで40年間、深海一本釣を専業してきました。

6年前に、70歳過ぎたから海の仕事を辞めて、今は遊んでますよ(笑い)。最初安州丸一号持っている時は、ニシ(北)の海、与論・徳之島、奄美大島辺り、宝島・小宝島附近まで行きました。もう漁する人は、情報聞いてあっちがいいと聞けば、あそこへも行くし、こっちが駄目なら、いい所を探して漁場を替えますから。



1974年第三安州丸(9.9ト)建造し尖閣に出漁する。

伊平屋の北側にイギョウズリというソネがあつて相当釣れましたが、そこが食わなくなってから、段々南に下がってきましたねえ。41才(1974年・昭和49年)には、第三安州丸(9.9ト)を造りました。この三号を造ったその頃からアコウ(赤尾嶼)、クバシマ(魚釣島)付近がいいとのことで、尖閣列島方面へ行くようになりましたねえ。以来、60歳にマグロ船に切り替えるまでの約20年間、冬は向こうを主漁場にして、一本釣をやってきました。

尖閣列島は、もう底魚がいっぱいいいて、一本釣のいい漁場でしたよ。

1日で1ト釣ったことも

あの時分、ここ(那覇地区漁協)には漁船は3、40隻はいました。うちマグロ船は3隻か4隻位で、殆んどが一本釣船でした。尖閣列島に行く時は、那覇泊港から夕方5時位に出ると、12時間ほどで夜が明けるとアコウが見えますよ。アコウは岩みたいな島ですが、そこから5、6時間位走ったら、尖閣が見えますよ。

(海図を広げて)、この大きな島は魚釣島、僕らはクバシマと呼んでいたが。これはトイジー(鳥島の意、南小島)グワー(愛称の接尾語)、これはシーグワー(石または岩島の意、北小島)、北にあるからこの島(久場島)はニシ(北)ヌシマグワーという。那覇から尖閣列島までは、18時間位かかります。今の船ならもう少し速いはずだが。向こう行く時は、大体4,5隻で船団組んで行きました。毎日出ていたから、向こうでは、常時12,3隻位が操業していて、多い時は15隻位はいたかもしれない。安州丸三号は、7名から6名乗って行きました。

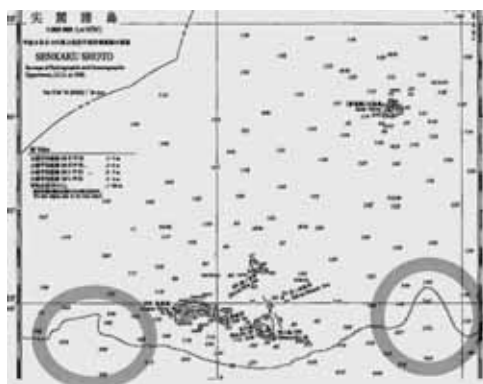
尖閣列島は底魚がいっぱいいて、一本釣のいい漁場でしたから相当獲れましたよ。大概3ト、4トも水揚げして、3日ほどで船のいっぱいでした。早ければ5日間で帰れましたから、航海日数は大概1週間位、いい時は1日で1ト余り食う場合もありました。

東西のマガイグワー付近、マーマチ、アカマチの好漁場

(海図を指しながら) このクバシマ附近ではマーマチとか、シチューマチですねえ。

少し離れていったらクルキンなんかが釣れましたよ。そこから1時間半ほど西の方へ行くと、大陸棚のラインが少し内側に凹っ込んでいるマガイムティ(湾曲した箇所)があります。

魚探でキャッチしますから、はっきり分かります。ああ海底地形はこっちからこっちへ曲がっていると。僕ら海人はイリーヌマガイグワー(西の湾曲部)と呼んでいます。このマガイグワーではよく魚が獲れます。この大陸棚の上側ではマーマチ、シチューマチが。下のフチミーグワー(大陸棚の断崖部)ではアカマチが沢山釣れます。クバシマ(魚釣島)の東にも、アカウの辺りにもマガイグワーがあります。このアガイヌマガイグワー(東の湾曲部)も、アコウのマガイグワーもいい漁場です。ここもよく釣れますよ。上で



魚釣島下側の大陸棚線の東西に位置する2つのマガイグワー、(○で囲む)いずれも好漁場。

はやっぱりマーマチ、シチューマチ、ヒラマチが、フチミグワーでは、アカマチがよく食いますねえ。尖閣列島の島の周囲は全部やります。この大陸棚も全部廻ります、ラインに沿ってですねえ。で、深い所で、フチミグワーとかで釣れない場合はまた浅瀬でやったり、こっちで食わなければ、またあっちこっちに移動してやったりして、全部廻りますから。

南・北小島で 夜釣り よく釣れた

南小島と北小島では、シケで避難した時、朝早くとか、夜釣りをよくやりました。マーマチ、シチューマチがよく釣れました。避難する船が皆釣るから、台湾船も避難していて、皆釣っているから、昼はあまり食わなかった。それは夜揚がってくる魚と昼の魚とは変わっているからかねえ(笑い)。避難した時は外は荒れていますから、もう艦の方に隠れておって1人2人がやるんですが、よく釣れよったですよ。クバシマの東側で、2回位ですか、カ

ンパチ、ウチムルー、あれ一晩で 300 キロ位釣りました。その時は魚が大きいからと、釣り針を普通 15 本位付けてあるのを、5 本付けてやってみたら、殆ど 3 本位は食いよった。もうカンパチはこんなに大きかったですよ。

沖の北岩は、トイジグワヌ(鳥島の)ニシヌ(北の)シーグワ(岩島)と呼んでいます、海が浅いからシルイユ、カンパチが釣れましたねえ。向こうにも昼間はあまり行きませんが、海がシケた時に行って、夜釣りだけでしたから。

こっちのユクン(久場島)の近辺は、昼間行ってあんまり食わなかったです。10 回以上は行きましたが、よく道具が失くなるわけよ。底に着けると同時に、すぐもう針がヤナ(海底のサンゴ礁)に引っ掛ってしまうから。サンゴが生えているのかねえ、この辺は泥ですよ、アンカーに泥が掛かって来ます、もう道具も揚がらないから、島の近くではあんまりやりませんでした。離れた所でやると魚は釣れよかったですよ。マーマチとか、シチューマチとかよく釣れました。アカオはいい漁場ですよ、大陸棚の外側ではアカマチ、大陸棚の内側ではシチューマチ、マーマチで、外側のフチミグワでは、ロンコー、ヒラマチ、アカマチなどがよく釣れました。

潮が強くて速い、予備アンカー 4,5 個もつ

魚釣島の西側も、大陸棚線のアガイヌマガイグワ(東の湾曲部)の所も台湾船がいましたねえ。あれ達は浮き縄に針付けて流し釣りしてました。ウチなんかはアンカー入れてますからこの縄が流れてきて、アンカーに引っ掛かって、いつときにはアンカーが切れよったですよ。もう向こうは潮が強いもんだから、ナイロン糸がアンカーロープに食い込んでいて、大体 2 時間位で切れましたねえ。もうロープが切れたら、船は流れて行って、アンカーも失くなるから、だから、向こうではアンカー4,5 本位予備持って行きましたねえ。

重さが 60 扣から 65 扣位のアンカーです。これは近くのスクラップヤ(屑鉄屋)に行って、鉄筋を溶接して造って、曲げるの自分で曲げて、オモリとかも一緒に造りましたよ。

台湾船の流し縄で、アンカー切れるのはたまにしかありませんが、底魚の一本釣ですから、アンカーがよく底のヤナに掛かりました。その時は、アンカーを船で引っ張って起してからホーラで巻き上げるんですが、尖閣列島の場合は潮が強くて速いもんだから、引っ張ったら切れる時が多かった。だから、アンカーの予備は必ず 3,4 本以上は持って行きました。

台湾船、竹筏に使い 一人ずつ漁

台湾船が、ウチの船に寄せてきて、マンビキ(シイラ)を持ってこれと交換できないかと来てましたねえ。あの頃は台湾船も沖縄船も皆ごっちゃごちゃでした。避難する時も一緒に避難しましたから。必ず 1 人か 2 人は、ウチなんかと同じ年頃の人に乗っていて、殆んど日本語を話しよったです。11,2 歳位の、まだ小学 1,2 年位かと思う子供も乗ってました。孟宗竹を編んで造った筏に乗って、何かザルみたいなものを置いて、流し釣りしていて、あっちこっちに皆それを浮かべて、これに 1 人ずつ乗って、あっちこっちに流して行

くんですよ。自由に流れて、風とか潮まかせで流れて行きますが、潮が速いから、ずっと向うへ流れて行ってねえ(笑い)。

ウチなんか船の傍から流れているのを何遍も見えていますから。これは海の静かなナギの時しかできないけど、たまにはカジマーイ(風廻り)して嵐になって、どこかに流されて行方不明になったのか、探している時もあったですよ。

ウチの船にくっ付けて来て、こういうのを見なかったかといつて、こんなのは2、3回はありました。一応見たら、旗揚げるか、何か連絡してくれと、向こうは、日本語分からんから、手振り身振りで話してねえ。

また、あっちに流れて行ったと言ったら、すぐ追いかけて行きましたねえ。台湾船は1つの船からもう10何人も乗せて流しているわけですよ。あの当時そんなしている船は沢山いましたから。避難している時に筏が積まれているのを見ましたが、もう何10個も乗せて、くり舟ならあんなに重ねて乗せることはできない(笑い)。台湾船にはたくさん乗ってましたねえ、20人位乗っていたはずですよ。小さい子供から、年寄らといっても大体40位の方が。

筏に乗って何を釣っていたんですかねえ。ウチは見えないから分からんが、底釣りや流し釣りなら、もうマーマチとか、シチューマチ、そういうものかも分からん。あの辺りは小さいマンビキが沢山いるんですよ。船にくっついて来るから。だからあれかも分からん。ウチの船に寄せて着けて、何かと交換できないかと、マンビキを持って来たですから。



魚釣島近海で不法操業している台湾漁船。右端に竹筏が積んでいるのが見える。写真は琉球政府出入管理局取締りの際撮影したもの。(比嘉健次 1970)

1 航海 シケで2、3回避難 モンゴル高気圧 影響

冬の尖閣列島は、波が荒くて大変です。黒潮が北の方に流れていますから、潮がまた速い、大体この辺の風力16,7メートル位は、あっちの12メートル位と匹敵します。

漁業気象を聞いていると、東シナ海は風力幾らと言いますから、モンゴル高気圧は千何リとかいいますねえ。それ聞いたらこの辺は大体何メートル位シケるねえと分かるんです。

これまでの経験で、モンゴル高気圧があの大陸の冬の高気圧が1050余ったらすぐ避難ですよ。この辺では、沖縄近海では、もう1050とか1060でも仕事はやりますよ。だけど向こうでは、予報よりより1.5倍ほど風は強くなる。この大陸棚は浅い、120メートルから90メートルの所もある。だから少しシケると、潮が北に流れて、すぐ波は立つんです。うねりが大きいから、風が13メートル吹いてもこの辺の海の17,18メートルと同じになり、波の高さはすぐ5メートル位は来ますから、もうシケて漁はできないから、すぐ避難ですよ。

向こうでは1航海で、シケは多い時は3回位。全然ない時もあるが、大体1,2回位はありますかねえ。それにシケが収まるまで3,4日位はかかる。もう3回位避難したら、15日

以上はかかれれば、もう仕事できません(笑い)。大体 15メートル位までは、クバシマの島陰とか、東側のトイジグワーとかに避難します。それで避難しながら夜釣りしたわけです(笑い)。

漁業気象 いつも聞いて 前もって避難

向こうで危険な目に遭ったことはありません。避難してアンカーかけて寝ている時に仲間の船が流れてきて、ウチの船の表に衝突したことがあります、その1回だけです。

もう前もって、向こうがウミゴ(大シケ)といたら、嵐が来るならすぐ逃げよったんですから。冬にモンゴル高気圧が 1050 余りで大陸で発生すると、大体いつ頃来るということは分かります。中心の位置、範囲内があるでしょう、だからすぐ避難ですよ。漁業気象はいつも聞いてましたから。夜の 10 時でも、眠っていても。それに、避難しながら絶えず大きな波が来ますよねえ。向こうは風の吹く方向と潮の流れが違ってぶつかるので、波が高いんですよ。だから前もって早く逃げないといかん。だけど、もう風マーイ(廻り)して海が荒れると逃げられない時もあります。アンカー入れて、ここで止まっていた方がよい場合とかも、逃げる途中で横波受けたらよけいに危ないですから。また向こうへ大体台風時期を避けて、冬行きますが、夏場に行く場合もあります。その時怖いのは、熱帯低気圧です。もう気圧が 1002 ミリ以下になると殆ど台風になります。これは殆んど北緯 20 度線辺りで、フィリピンの東辺りとか、たまには沖縄の下の方で発生しましたから。

沖縄と宮古の合中で仕事している時は、すぐ島の方に、尖閣でやっている時は、アカオなら宮古の池間島、クバシマなら石垣へ逃げて行きました。この天候情報を仲間の船に知らせたり、もらったりして、お互いに情報交換しました。だから、ウチらはこれまで一度も、尖閣では危険な目にあったことがないです。また仲間の船が向こうで遭難したことは殆んどないですねえ。

アコウで、米軍演習に遭遇

あの頃は米軍が飛行機から演習してますからねえ。アコウで遭ったことがあります。

ウチらが漁している上からすぐバラバラバラとやって行きよったです(笑い)。米軍機と分かっていますから、もう何でもありませんよ。このアコウジマ目がけて、飛行機から爆弾じゃなくて、何かロケット砲みたいにやって、もう音は大きいけど、着かないうちに爆発しよったですねえ。岩は砕けない、岩の手前で爆発しよったですから。ウチなんかは島から大体 4 呎位離れている所で漁してましたから、飛行機から近寄るな、危険だという合図はなくて、頭の上から飛んで行って島目がけてやりよったんですから(笑い)。

ウチらは 1 週間位仕事していたから、大体 3 日から 4 日位続けて演習したこともあったです。飛行機は 1 台ですよ。大きな飛行機でプロペラはついてましたねえ。操縦士は見えてないです。ロケット弾が煙引っ張って行くのが見えて、島に近づいてもすごい大きな音でパーンと爆発しましたねえ。これ 3,4 回位やって、どこか行って、2,3 時間位おいたら、また戻ってきてやりましたねえ。同じ飛行機か、別のものが来たか分からんけど。

漁協からアコウで米軍演習があるから行くなという通知ですか、そんな通知は聞いたことはなかったです。コウビトウでは演習に遭ったことはありません。アコウだけです。

あの時は、ウチらの仕事に影響しなかったから、漁をしながら、アメリカが演習するのをただ見てましたがねえ(笑い)。

一本釣の大敵 小フグ 釣糸食いちぎり 魚落とす

尖閣列島には、いろんな魚がいますが、フグの小さいものがいっぱいいますよ。この小さなフグは皆、釣糸を食いちぎって魚を落としますよ。飛んできて、ナイロン釣糸に食らいついて、魚がこっちまで揚がって来ている時に落とすんですよ。そういうことがよくありましたねえ。3センチ位の小さいフグで、もう魚探にはっきり映ります。真っ赤らして、こうして盛り上がって。そしたら、皆「ウマー(ここは)フググ



ワヌウッサー(フグ野郎がおるわい)」とって、別の場所に移動します(笑い)。もうフグに釣糸やられた人も多から。魚探にサバなんかよく映りましたねえ、沖縄持ってきたら売れないからとって、サバなんか獲っても捨て
深海一本釣の大敵 クロサバフグか?
よったですよ。で、あのフグは、瀬の近くだけでなく、どこにでもいました。この大陸棚の周りにも、フチミーグワの周りにも、もう魚探に真っ赤に映りますから。しかし、年によっては全然いない時もありました。向こうで20年位やっていて不思議でしたねえ。一本釣やっている人は、皆このフグがいる所ではやらないですよ。釣糸を喰いちぎるから、殆んど下から飛んできて、やっぱり魚を狙っているんですかねえ、縄に食いつくみたいな恰好ですから。また、釣糸の上はワイヤー使ってますが、時々はそのワイヤーまで食いちぎろうとします。カチカチカチの音で分かりますよ(笑い)。あのフグいる所では、もう全然仕事はできませんねえ。

中国トロール船、日本語で 警告も

復帰後の話でいつだった忘れましたが、中国船が5,60隻来たんじゃないか。もったいたかもしれない。200ト位の大きな鉄船で、台湾船とは別で、手繰り船、トロール船で、網引っ張ってました。冬ですよ、ウチらは殆んど冬に行ったから。中国船が船団組んでいっぱい来てましたねえ。(海図を指しながら)、この辺、西のマガイグワの所、この辺には中国船は殆んどいて、上の大陸棚の側に、もう行く度にいました。毎日いましたよ。

丁度遠くから見たら那覇の電気みたいに、グワラグワラ(煌煌と)電気点いて、陸(おか)みたいな灯りして、毎日3,40隻以上いたんじゃないか。交代して出たりするのか、殆んど毎日灯りがついてましねえ。ウチなんかは、夜寝ている時も起されて、急いで逃げたことが2,3回もありました。これ網曳いているから、「邪魔だから退きなさい!!」とって、スピーカーで。中国語だから何を言ってるのか分からん時もあったけど。でも、ある時は日本語でも言いよったんですよ。だから、その時は日本人が乗っているのかなあ?と思いま

した。夜中から大きな船が近づいてきたら、危ないですから、すぐ逃げましたけど。大体 1 週間位仕事して見えなくなって、またどこからか、また寄ってきましたねえ。

海一面 死んだカワハギ 浮き漂う

中国船は、獲ったカワハギは捨てていました。カワハギ捨てていたのは、1,2 回じゃない、何 10 回と見ましたよ。何であんなにカワハギがいるかなあと思う位浮いていました。もう向こうの海一面に、獲ってから捨てて、皆死んで浮いていましたねえ。尖閣にはカワハギはいっぱいいますよ。さっき話したフグの小さいのも。(魚図鑑を見ながら)、向こうに捨てられていたのは、このカーハジャー(シマジロモンガラとメガネハギ)とこのセンスルー(ソウシハギ)だったと思う。もうこれなんかが海一面に浮いてました。向こう仕事している漁船なんかは皆見えていますよ。

何でカワハギを捨てたのか、皮剥ぐのが面倒だからか。今なら売れますけどねえ(笑い)。

中国船が、こんなに何 10 隻もの船が、船団組んで来て、底曳きしたら魚いなくなりますよ、もう毎年来ましたから。ウチらはフチミグワでやりましたが、トロール船はここでは網が引っ掛かるからなくて、大陸棚の上でやるわけですよ。

そこはクルキンマチとか、シチューマチとか、マーマチがよく釣れましたが、中国船が来た後からは、釣れなくなりましたねえ。とくに底立延縄は大陸棚の上を漁場にしてますから相当影響したはずですよ。ウチら一本釣さえもそうでしたから。



上：メガネハギ (カーハジャー)
中：ツマジロモンガラ(センスルー)
下：ソウシハギ (センスルー)

魚 宮古・八重山から送り 仕込して 出漁

普通 4,5 日で満船したら那覇へ帰ってきますが、大体が宮古や八重山に寄港して、獲った魚はコンテナに入れて船で、那覇に送りました。そこで仕込みして、食料や燃料、水などを補給して、また尖閣列島に出漁して、そうやって 2 航海位して、家には帰って来ませんでしたねえ。家に帰って、魚を市場に出して、計算して、仕込みして、また出漁しますが、その都度、那覇へ帰って来ませんでした。これは燃料費を節約するのと船員の関係です。それに船員は家に帰ると 4,5 日遊んで来ない場合もあったから(笑い)。

あの頃は船員は雇い難かったです。船洗うのも船長、機関長がやりましたよ。船員は大事にしないともうすぐ他所に逃げて行きましたから(笑い)。それに尖閣列島に行っても、いつも魚がいっぱい獲れるとは限りません。シケとかであまり魚は獲れず、魚が長引いて燃料や食料が切れるとかありますから、宮古か、八重山に寄港して、ここで仕込みを済ませて 2 航海はしました。那覇は遠いし時間的にも経費の上から大変助かりましたねえ。

それで、仕込みするから金送ってくれと、宮古や八重山から漁協に電話したり、家に連絡したりして、大変忙しかったです。船を持っていると、あれやこれやで苦労も多かった

です。漁業経営は大変ですよ。締めてみると、あまり儲けはなかったですねえ。

閑話休題 夜光貝の話

尖閣列島開拓者の古賀辰四郎さんが向うで夜光貝採っていたんですか。明治の頃ですねえ。アホウドリの羽毛を採ったという話は聞いてましたが、これは知りませんでした。戦後夜光貝を採りに行った話ですか、聞いたことがありますよ。素潜りに行って採った話を聞きましたが、ウチも石垣では16歳の頃から専門に夜光貝採りやってました。夜光貝はナミウリジュン(波打ち際)に割目があるとこちに殆んどいますねえ。夜光貝は歩きますよ。ホーヤーホーヤー(這い這い)して歩きますから(笑)。それを相当採りましたねえ。夜光貝は台風が来たらひっくり返って起ききれないわけです。そのまま死んでしまいます。ウチはこれを専門にしていたから分かります。台風が近づくと夜光貝は、海底の岩に強くくっ付いていますよ。引っ張ったら貝から身が抜ける位に強くにねえ。だから、こんな時に夜光貝を採る場合は、右に回したら何でもなくうまく採れるけど、左に回したら身が抜けますよ。台風が来たらもうひっくり返ってしまったら自分も死ぬからと、強くくっ付いているのかなあ、ウチなんかも貝採りながら、ああ、今度の台風は大きいのが来るなあとすぐ分かるわけです。大きな台風が近づいて、海の上は静かだったとしても、海の下は動いていますよ。大体14~20尋あったら、海の下の砂はもう動いている。だから夜光貝はそれを察知しているんですかねえ。またウチらは台風のあとは泳いで採りに行きますでしょう。そしたら皆これにクゲーリヤーしている。専門用語でひっくり返っているという意味(笑)。クゲーリヤー(ひっくり返った)シナアグワーヌ(貝が)マンドーサヤー(いっぱいあるさあ)。大きな台風が来たら、皆ひっくり返って海底で光っている。裏の方は白から、太陽で皆光って、はっきり見えるわけですよ(笑)。



尖閣諸島でも採取された夜光貝

一本釣、見限って 60歳 マグロ船に切替える

ウチは60歳になってマグロ船に切り替えました。60過ぎたら借入れできないからと、また一本釣はこれ以上もう見込みはないと思ったからです。一本釣は35年余りやってきましたよ。最初はワーヌイ(雇われ船員)して、あとから自分で船持って。次第に魚が減ってくるのが分かるんですねえ。安洲丸一号造って、ニシ(北)の海行って、奄美大島辺りに行って、そこがあまり獲れなくなったから、次第に南に下がってきて、三号からは殆んど尖閣でしたねえ。40から60までの20年間は向こうに通っています。もう向こう行ったら帰って来る時は満船でした(笑)。だけど、段々魚が獲れなくなって、毎年減ってくるのが分かるんですよ。やっぱり獲り過ぎですかねえ。それで、一本釣はもうダメだと思って、60なってマグロ船に切り替えました。この機会に借り入れして、今の安洲丸八号(8.99ト)を持ちまし

た。この八号のマグロ船で、北緯 20 度線位まで行きましたよ。甥っ子の伊差川正則(42)と 2 人で行きました。船が小さいもんだから、大体フィリッピン・ミンダナオの手前までしか行けないですねえ。このマグロ船を 10 年位やってから、70 になったから海の仕事はもう辞めました。今は甥っ子が責任持ってやっています。もう昔に比べたらとても楽ですよ。

インドネシアの青年 3 名と船長の甥っ子の 4 名でやっていますから(笑い)。

海の仕事 子供達やらない インドネシア青年が頼り

今はもうインドネシアの青年がいないと、マグロ船はもう動かせないですよ。大体 4 名から 5 名位乗っていて、船長とか、機関長の 1,2 人だけが沖縄の人で、残りは皆インドネシアの青年ですよ。ウチのように小さい船は船長 1 人だけ、3 人はインドネシアの青年です。

一本釣船でも今の現役の人達が歳をとると漁師はいなくなるはずですよ。やっぱ若い人は海に行くのを嫌いますから。ウチなんかの時代は海の仕事は辛かったですねえ。睡眠もろくにとらない。忙しいから食事も立って食べたりして、もう大変でしたねえ。あの頃は、宮古、八重山、大島辺りに船着けて、もう 3 ヶ月に一遍位しか家に帰ってこなかった。ずっと太陽と潮風にあたっているからマックール(真っ黒)に日焼けして、髭バァーバァーでしょう。ウチが海から帰って来ると、上の 2 人は女の子だから、いつも逃げよったですよ。どこの人が来たかなあと行って(笑い)。尖閣列島に行っていた頃も、宮古や八重山に船を着けるから、殆んど家にいないですよ。また家内は、海で事故が起きないか、いつも心配して、こんなにしてる親をずっと見てきてますから、海の仕事はしたくないと思いますねえ。だからウチの長男坊は海に行こうと言ったらすぐ逃げよったです。小遣い上げるから船洗いに行こうと言ったら(笑い)。やっぱし、今は陸(おか)の仕事していますけど。

ウチの仲間の子供も、親の仕事継がんで、大体が陸の仕事ですよ。海の仕事はきつい上に、もう昔のように儲からないですから。もう若い人で漁師やる人は少なくなって、いなくなって、これからはどうなりますかねえ。

(了)



マグロ船第八安洲丸、右より高江洲昇さん(79)、甥の伊差川正則さん(42)。(2013.2)

渡嘉敷 眞厚 とかしき しんこう (那覇地区漁協)

1928年(昭和3年)、那覇市垣花に生まれる。85歳(2013年時)。

垣花漁家に生まれ小さい頃から海に親しむ、戦後は叔父らと近海で一本釣、マグロ漁に従事、1966年、38歳にマチ釣りの船瑞幸丸15トを建造して、深海一本釣を専業にする。のち船を5トに替えるなどして、40年間、一本釣に40年間専念、5ト未満の船では2人で操漁する。その間、尖閣諸島を主要な漁場としていたという。2008年(平成20年)、同5ト未満の部で見事一等賞(水揚量)を獲得、氏80の歳である。これを機に漁師を引退する。



垣花の海人・深海一本釣の大先達に聞く

80歳で水揚量、一等賞をとる、尖閣漁場の魅力を大いに語る

安謝の海人(ウミンチュ)集落に 一本釣の名人訪ねる

— 先ほど、住吉宮の拝所と住吉町集会所を見てきました。戦前住吉町にあった臨海寺もこっちにありますねえ。元の住吉町を、安謝に集団移民した感じですねえ。

渡嘉敷: そうです、戦前の垣花は糸満と並んで漁業で栄えてましたから。10・10空襲あとから戦争なって、国頭に歩いて逃げて、戦争終わって帰ってきたら、港もなくなっていた。家も焼けて、屋敷も、米軍にとられて、もう向こうには戻れないから、ウチらはヤンバルから来て壺屋にしばらくいました。それから安謝に引っ越して来てから、ずっとここに住んでますよ。重民町(若狭)やペリー(山下町)に行った人達もいるが、一番ここに多くがきている。皆で、泊港の傍に組合(現那覇地区漁協)を作って、市場を作って、海の仕事を一緒にやってきた。さっき見てきたという住吉宮の拝所、あれは竜宮神ですよ。航海安全の神様、元の垣花からウンチュケー(お迎え)して、開洋塔建てて、皆で祀ってます。

ここは地番は安謝ですが、前の通りも住吉区通りと呼んで、集会所も住吉区自治会集会所としてねえ(笑い)。



那覇市安謝の海人集落 真中上の丘陵は開洋塔跡、鳥居が見える。周辺海岸を埋立て、ビルが建ち並び、往時の面影を失いつつある



行政地番は安謝だが、住吉町大通りの一角にある住吉区自治会集会所

— 開洋塔で、航海安全、大漁祈願の願いをするんですね。

渡嘉敷：開洋塔は、ここの安謝にも、若狭にも、ペリーの山下町に、3箇所にあります。旧9月16日の海ウガン(祈願)の日は、皆ここに集まってウガンして、また若狭も、ペリーも、全部廻って拝みますよ。また1カ年に1回は普天間にも行って、航海安全のウガンします。また旧5月4日のユッカヌヒーには、皆でハーリー(爬竜船)も漕いだんですよ。開洋塔の前で、ハーリー歌を歌って、ハーリーウガンしてねえ。前はハーリー漕ぐ位、ここは賑やかだったですよ。3組に分けて競漕しますから、泊と久米、那覇の3組で、皆でハーリー漕ぐ人を選んで、どの組に乗るか、クジで決めて、競漕しますから、選ばれた人は一生懸命ですよ。



海人の一大行事、海神祭のハーリー(爬竜船)。垣花海人が一堂に集い、競漕に沸き立つ(泊漁港で)

もう優勝しないといかんから(笑い)。その時は、岸壁は見物人がいっぱいして、賑やかで、楽しかったです。段々海の仕事する人は少なくなって、ハーリー漕ぐ人もいなくなったから、ハーリーはもう辞めたですが。今は、那覇市のハーリー保存会が、ウチ達の代りにやっていますよ。

生粋の垣花漁民 叔父達 尖閣でイシマチャー

— 渡嘉敷さんは、若い頃、漕ぎ手に選ばれて、大部活躍されたんじゃないですか。お祖父さん、お父さんも、代々海の仕事をされていたんですか。

渡嘉敷：はい、ウチは垣花の住吉町1丁目で生まれて、祖父も父も、叔父さん達も、皆昔からのウミンチュ(海人)です。戦前はお祖父さんの息子は漁船持っていた。ホウセイ？、トクホウ丸だったかなあ、はっきり分からん、あれは大きかった。15、6ト位かな、これは尖閣に行ったはずですよ。イシマチャー(石巻落し漁)で。先輩達からも戦前向こうに行って、イシマチャーした話は聞いたことがありますよ。石は慶良間から伝馬に積んでから、船に乗せてねえ、そうしてやったらしい。でも、向こうは潮が速いもんだから、イシマチャーは難しい。それに石1つずつしか使えんから、量もできないし。やったとしたらやっぱし島の近くで、浅い所でしょうねえ。

— 渡嘉敷さんも、イシマチャーをなさいましたか。

渡嘉敷：ウチは17に終戦だから19でここに来て、叔父さんから、お母さんの弟國吉タローから海習った。その時に習ったのがイシマチャーですよ。エサをこうしてオモリの石に巻いて、底に着いたら石が外れる仕掛けにする。外すタイミングは、着いた時にすぐ揚げないで、大体何メートル位と数えてから揚げる。揚げて石が外れたら、エサに釣針付いてい

るから流れたら、それを魚がすぐ食う、食うのが速いです。だけどオモリも捨てて一回しかできませんでしょう。だから、あとではヤマギタになった。ウチなんかイシマチャーはやらんです。ヤマギタでやった。一番下にオモリ付けるからオモリは捨てない。それに針は5つも10も付けてやるから、イシマチャーよりいっぱい獲れますから。それからナイロン糸に替わって、今の一本釣に。ウチは一本釣が専門ですよ、一本釣だからマチねえ。アカマチとか、マーマチとか。もう80手前で、海の仕事をやめるまで、ずっとそれを釣ってきたんですよ。尖閣行ってもう相当獲れましたから。

マチ一本釣船・瑞幸丸 15トを建造 尖閣 主な漁場

— 尖閣に行かれたのはいつからですか、自分の船をお持ちになってから？

渡嘉敷：初めは尖閣列島は行かなかったですよ。小さい船から、周辺で、一本釣です。そのあと瑞幸丸を造って、15トのマチ釣船ですよ、これで最初に尖閣行きました。あの時は幾つの歳かなあ。もう長くなるから忘れてしまって(笑い)。今は漁のことは考えなくていいから。前はずっと考えていたけど、今はもう考えないねえ(笑い)。向こうに写真が飾ってますよ。この船です。義弟の國吉眞栄が造船場しておったから。その時は終戦後だから材料はないですよ。だから松の大きいのをヤンバルから買ってきて、それで造った。

この船から尖閣は行きました。シチューマチとか、アカマチとか、またクルキンマチとか、あれを主に釣ったんですね。人数は4名か、5名位で、2、3日では帰ってきませんよ。氷も相当積んでから、航海は、1航海は大体10日位ですねえ。もう尖閣が主な漁場でしたから、もう向こう行ったら、いつも大漁でしたから、儲かりましたよ(笑い)。



1966年建造 瑞幸丸(15ト)で一本釣で、尖閣へ出漁

— 底立延縄もなさいましたか、どうでしたか。

渡嘉敷：これもやりましたよ、この15トの瑞幸丸で。尖閣列島では、これでマーマチが釣れるから、アカマチでもできますがねえ。これは慶良間近海でも、大九、宝山でも、あっちでもこの式でやりました。向こうでは潮が強いからあんまりこれしたら引っかかってねえ、岩にひっかかるんですよ。だから、これはそんなにやらなかった。今の一本釣、もうこれでずっとやってきた。

— 渡嘉敷さんは、5ト未満の瑞光丸で、尖閣によく行っていたと聞きましたが。

渡嘉敷：そうです、それから今言うあの小さい船に切り替えましたよ。あの15トの瑞幸丸は長らく持っていたけど。いつ小さい船に切り替えたか憶えていませんねえ。これも瑞

光丸という名前、ウチは船は1隻しかないから、全部第一瑞光丸ですよ(笑い)。

これは4ト幾らか。この船もよく漁できて、小さい船だが装備も新しいから速力も出てよかったですよ。大きい船だと時間かかるし、燃料も食うし。この5ト未満で2人で行って、尖閣列島で魚を獲ったら、宮古に船着けて、向こうで氷も、エサも積んでから、またあっちから出て、魚は、那覇に、船や飛行機で送って、もう皆、アカマチとか、マーマチとか、大きいものねえ、だから1航海は大体20日位、あの時は相当儲かりましたよ(笑い)。

平成19年度「深海一本釣5ト未満」水揚げ一等賞

— 尖閣では、どの位、魚を水揚げしたんですか。

渡嘉敷：どの位って、相当揚げたんですよ。15トの大きい船の時は、5ト位は揚げていたかなあ。4.5トの瑞幸丸の時はそんなに多くなかった。幾らだったか憶えてない(笑い)。



平成20年度水揚高 一等表彰状 深海一本釣5ト未満 平成19年度：平成19.4~20.3実績

だけど、揚げてもう順位は1、2番でしたよ。これは下ろした魚を組合で計算しますから、最後の年は1番になった。最後の年ですか?、何年だったかなあ、賞状見ればわかります。一等賞といっても、5ト未満の小さい船ですから。

(賞状掲げている隣の部屋に案内する)。これが最後の年の表彰状です。「平成19年度、深海一本釣・その他漁業の部」とありますねえ。平成18年度は2等、16年度は3等です。賞状は2階にもっとありますよ。こっちの賞状を貰った時は、あの小さい船のエンジンがだめなっ

から、ファイバー船を、外間安健さんの兆福丸(5ト未満)を買って、瑞幸丸に切り替えて、やってみました。最後は一等賞をとったからと、もう海の仕事はもうやめました。

— 最後に一等賞の時は、80手前ですよ、すごいです、漁はどこでなさいましたか。

渡嘉敷：漁場ですか、漁場は主に尖閣ですよ。宝山とか、大九とかにも行きましたが、主に尖閣列島ですねえ。けど一等賞といっても、これとった時は、船も少なくなって、5ト未満の小さい同士ですから。80歳だから大変だったでしょうって、いや、もう大丈夫でしたから、向こう行くのは慣れてますから。

2人で行きましたねえ。あの時に使った釣機があったが、(玄関の方を指して)、ああ、あれがそうです。1人で2台使っていました。船は宮古に売ったから、船から外して、あんなして玄関に置いたままです。でも年とるのは速いですねえ(笑い)。ウチはドックする時、ここの足打つてですねえ、それで一等賞



往時、活躍した一本釣機 玄関先に2台放置のまま

とってからと、船をやめたんですよ。一緒の人も、腰が痛くて仕事もうできなかったから。

引退間際まで よく釣れたから 尖閣行っただ

— 組合の話だと、今は尖閣に行っている組合の船は1隻もないと言っていました。

渡嘉敷：そう言っていましたか、今は1隻もないかもしれませんねえ。ウチらが漁している時分はいました、あの時に、尖閣に何隻位行っていたかなあ、忘れましたねえ。組合の方を調べれば分かるはずですけど、(※、後日組合に問合せたが、分からないとの回答)。一本釣では、皆宝山とか、大九には行きますが、船が小さくなっているからは、向こうに行かなくなってきたかもしれん。それにウチらと同年配の人はもう皆いなくなっているから、ウチらは最後まで行きましたよ。もう向こうに行ったら、よく釣れましたから。



第一瑞幸丸の大漁旗、魚満載しマストに掲げて帰港

— 尖閣に行ったらホントによく釣れたんですか。

渡嘉敷：はい、初めの頃はすごかったですねえ。相当釣れたんですよ。大九だとか、宝山とか、別の場所より量が多かったんですよ、アカマチも、マーマチも、それにクルキンといって小さいマーマチがあるでしょう、あれも釣針のいっぱい釣れたんですよ。釣針5つ10も掛けると、そのいっぱい釣れたんですよ。大九や宝山に行くよりは、尖閣行っただ方が早いですねえ。潮が強くなってシケの時なんかは釣れないけど、それでも、向こうはよかったですよ。

尖閣のどこで、よく釣れましたか

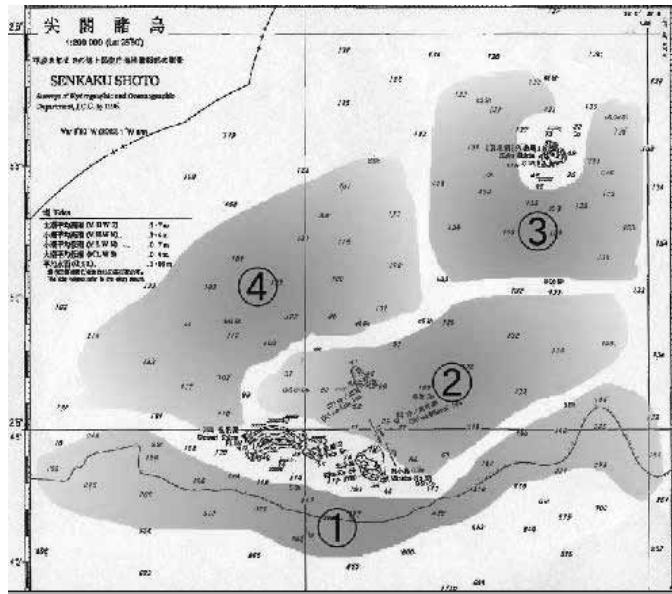
— 最後に一等賞もらった時がありますねえ、その頃も釣れましたか。

渡嘉敷：はい、クバシマ(魚釣島)とか、トイシマ(南小島)グワー(接尾語・愛称)がある所ですねえ。浅い所から。深い所から浅い所に上っていくでしょう。フチミグワー(大陸棚縁崖部)がありますねえ、向こうの方はよく釣れたんですよ。

— 尖閣に40年以上行かれて、これまで主にどの辺で漁されましたか。

渡嘉敷：(海図を示しながら) これがクバジマ、これトイシマ、これが百尋線、大体この辺(①)でやっていますねえ、この辺り全部ですねえ。(①の海域を指しながら)。この境の所、やっぱり、このフチミグワーの所がいいんです、憶えているんですよ、どこで魚を釣ったか。この辺の浅い所から、こうして深い所に行く所に、大体この境辺で。ここに縄入れてやったら、一番マーマチ、シチューマチが釣れるんですよ。この線を越えた深い所では、

アカマチが。こっちは潮が強いから流し釣りです。アンカー入れないで、ここは大体潮はノーイース(北東)にひいていますからねえ。それ見て縄入れるんですよ。こっち入れたらフチミグワーを流れていくから、魚は釣れるんですよ。こっちのマガイグワー(百尋線、大陸棚線の湾曲部)は魚がよく喰う所ですねえ。こっちにもありますねえ。これは魚探で分かります。このマガイグワーの所は相当魚が釣れましたよ。



操業海域の模式図 ①大陸棚百尋線付近、②③魚釣島付近、④久場島周辺

— (大陸棚の方を指して)、この辺りはどんなですか、トリシマとコウビトウの間は。

渡嘉敷: こっちはあまり浅いですねえ。ここにもヤナ(サンゴ礁、漁礁)があるんです。ナガター(平状)とか、チブルサー(頭状)とか、こっち(①)にもありますが。ヤナといたら浅い所に岩場があって、凸凹していますから、魚探に映るからすぐ分かります。魚は大体こっちにいますから。このハーギー(浅場)(②の海域)はシチューマチ、マーマチが釣れますねえ。この辺(②)もう流し釣りやっている、潮の関係で、潮は大体ノーイース(北東)にひいているから。

— 那覇地区の船も相当いましたか、皆どこで漁してましたか。

渡嘉敷: はい、相当いましたよ、皆この辺で(①と②)でやっていたですねえ。

こっち(④)は、あんまり行かなかったですねえ。台湾船なんかは、魚釣島の西側、トリシマの近くは全部、台湾船がいたわけですよ。この辺(②と④)の島近く)浅い所で、百尋線のこの内側でねえ、あれ達もマーマチとか、シチューマチとか。いろいろ獲っていた。向こうは浮縄で、旗グワー(接尾、愛称)付けて、流して、マンビカー(シイラ)かねえ、獲ってい

た。また、こっち(①)のマガイグワでやっていました。

— 深海一本釣は昼も夜もやるんですか、よく夜釣りするとも聞きましたが。

渡嘉敷：いや、夜は釣れんからねえ、浅い所だと夜もできるんですがねえ。島の周辺なら夜もできるんです、大体避難した時とかやりますねえ。でも夜もずっとじゃない、大体夜は 2、3 時間位、その時はマーマチとか、カンパチとか、シルイユとか、大体浅い所の魚ですねえ。

魚が釣れるヤナ探して GPS・海図に載せていた

— ユクン(久場島、黄尾嶼)辺りは行きましたか、どうでしたか。

渡嘉敷：ユクン辺りもよく行きましたよ、こっち(③)は浅いですから、釣れんですよ。こっちは、ユーミグワ(夜釣り)なんかで、小さい魚が、電灯点けて夜やるんですよ。ここはマーマチとか、アカイユグワとか釣れますねえ。ヤナの所ではよく釣れますから、だけど、島の下側行くと、ヤナはないです。こっち(②)は、ヤナがあっちこっちにあります。

魚探で見れば、形ですぐ分かりますよ。ヤナを探して、見つけたら、GPSで緯度経度が分かるから、それを全部とめておいています。このヤナに行けば、魚は釣れますから。

— 渡嘉敷さんは、魚がよく釣れるヤナをいっぱい知っていたんですねえ。

渡嘉敷：はい、久米島から来ると、最初アコウ見て、それからヤナグワ探して行って、それをGPSで位置見て、経緯度の印を付けて、ウチなんかが持っていたGPSにも、海図にも、全部載せていましたよ。大陸棚のヤナグワは全部ありますよ。それを魚探で探して、見つけて、全部とめておいたんですよ、緯度経度を。もうこのヤナに行ったら魚が釣れるから。だから また那覇から尖閣行く時は、このヤナの所に行って、そこで魚釣って、あんなにしていましたねえ(笑い)。海の仕事やめた時に、船売った時に、全部上げたんですよ。GPSも海図も、全部、船と一緒に持たしました、もう使わないから。

— 企業秘密が載ったGPSも海図も、船と一緒に全部持たしたんですか(笑い)。海図があれば見たかったですねえ、で、アコウですが、そこではどうでしたか。

渡嘉敷：こっちがアコウですねえ。アコウ辺りも行きました。ここもヤナが多いから釣れましたよ。アコウは潮が強いから、アンカーを下ろして、流し釣みたいをやっていた。殆んど流し釣で、向こうではやっぱし、マーマチとか、アカマチとか。種類は大体同じですねえ、

尖閣で無事故 宮古で船座礁させた

— 尖閣は潮の流れも速いし、あの5ト未満の小さい船の時は、大丈夫でしたか。

渡嘉敷：危ない目にあったことはいっぱいあるが、大丈夫ですよ、事故は一度もないで

すから(笑い)。向こうは潮の流れが強いから、小さい船は、もうあまりシケたらもたんから、北風になったら、すぐ魚釣島の島陰に避難しましたねえ。台風に遭ったらもうダメですよ。すぐ逃げて帰って来んといかんです(笑い)。それで相当用心しましたから、向こうでは事故は1度もないです。だけど、宮古の近くで一回あった。15トの瑞幸丸の時だから、昔にねえ。5ト未満になってからは一度もないです。あの時は潮の流れにひかされて、引き取られて、船が座礁してねえ、航海中じゃなく、避難しておって、ロープが切れてから座礁したですよ。多良間の近くで、潮が強いから方向間違えて、座礁させて。それで組合に無線電話で連絡をして、組合から、那覇の方から、応援を頼んで、下ろしに来て貰ったんです。船を引っ張って下ろしてから、平良港に持って行ったら、栈橋の方でもう沈没してですねえ。グレーンで引っ張って揚げて、それをドラム缶で浮くようにして、15トの瑞幸丸を那覇へ引っ張って来たんですよ(笑い)。もし尖閣で座礁していたら、もうだめですねえ、あんなことはできない、船はすぐ捨てないといかんから(笑い)。だからもう向こうに行ったら、相当用心しましたねえ。

マチ類のいい漁場 行けば確実に釣れた

— 尖閣は、遠くにあるし、潮が速くて、危険な所でも、やっぱり、いい漁場ですか。

渡嘉敷：はい、いい漁場ですよ、マチ類のいい漁場です。もう行かなくなると長らくなるから、今どうなったか分からんが、ウチが行った時分はよかったですよ。もう久米島側通って行って、アコウを見て、尖閣へ行きました。向こうのシケの時には、あの大九、宝山を歩いて、また宮古近海、八重山近海もですねえ。尖閣に行く場合は、近くで魚が獲れない場合、向こうに行ったら、もう魚が確実にいるから釣れたんですよ。それに量も多いから。皆尖閣に行っていたんですよ、もうよく釣れましたから、ウチも小さい船で長らく歩いたんですよ。うんと儲けましたから(笑い)。

— 最後に、一言お願いします。

渡嘉敷：尖閣列島はいい漁場ですよ。ウチがもう少し若ければ、もう一度向こうに行ってやりたいですねえ。テレビでニュースを見ていたら、最近、中国船が、尖閣列島に来て、自分のものと言って、尖閣列島近くに、ずっといるでしょう。あれはひどいですよ。昔は中国船はいないから、復帰してからが来るようになったんだから。それに、中国があんなしていたら、怖いから誰も行かない、もう一番困っているのは漁師ですよ。

日本政府は、中国にあんなことをやめさせて、もう皆が安心して、尖閣列島に行けるようにせんといかんです。もう問題を一日も早く、解決して、向うで皆が、安全に漁できるようにしてほしいですねえ。

— 早めに問題解決して、尖閣で安心・安全操業できるといいですねえ。

今日は大変ありがとうございました。

我那覇 生康 がなは せいこう (那覇地区漁協)

1931年(昭和6年)、那覇市垣花に生まれる。82歳(2013年時)。

戦前は垣花にあった実家はシンコウ丸を所有し、尖閣諸島に出漁した体験を父親から聞いたという。16歳には漁師となり、21,2歳(1952,3年)に南開丸で尖閣諸島に出漁。34歳(1965年)には有昌丸を購入、深海一本釣を専業にする。木船宝生丸、ファイト船宝生丸等を購入・新造して、尖閣諸島で一本釣、底延縄漁に40年余にわたり従事する。のち65歳でマグロ船に切り替え、10年余マグロ漁に勤しみ、76歳で漁師を引退する。



戦後 垣花漁民 3箇所に移住

私は昭和6年生ですから、数えて82歳かなあ。戦前は住吉の2丁目でした。10.10空襲でやられて、ヤンバル(沖縄本島北部)に避難して、終戦直後は宜野座の惣慶にいました。

そこに戦前那覇市議員をした泊出身の佐久川長吉さんが来て、那覇が開放なったから魚を獲って那覇市民に上げようということで、壺屋に来て、そこから今の埋立地の重民町(現若狭町三丁目)に引っ越して来たんです。またグシカー(現うるま市具志川)にも垣花の人がいっぱいいました。この人達は安謝に来たんですが、またペリー(那覇市山下町)にも来ているんですよ。皆自分達が生活がしやすい所に、親戚なんか頼って、もう戦後は、昔の垣花はアメリカの軍港になったもんだから、この3箇所に分かれて住んでいます。

私は、壺屋にいる時から、16歳から海の仕事してました。あの時分はサバニですよ。

親父と一緒にイシマチャー(石巻落し漁)とか、一本釣とかやっていました。サバニは崇元寺の橋がありますねえ、そこから100メートルほど行った先にサバニを揚げる場所があったんです。壺屋からこっちに通って漁をやっていました。サバニからは、北は読谷まで、こっちでは慶良間近辺、それだけしか行けなかったですねえ。

21,2歳 南開丸で 尖閣へ

壺屋から通って、サバニから漁を2,3年位やっている内に本船ができたもんだから、21,2歳(1952,3年)頃には、本船に、南開丸に乗ったんです。この船の乗組員として、冬場の尖閣列島に一本釣で行きましたよ。

この南開丸というのは終戦後、米軍が沖縄水産業の再建、振興のために造ったガリオア船です。本部(現本部町)にあった造船所、向こうで造った船です。あの頃から船は次第に増えてきました。

最初はあの南開丸と交開丸とか、4,5隻位だったかなあ。私らは壺屋にいるか



1951年、ガリオア資金で建造した南開丸(17ト)

ら、那覇水産組合という組合があって、して今度は同じ安謝の垣花の人たちが来て、向こうが那覇地区の組合を作ったもんだから、向こうに合併して、今の那覇地区になりました。その時両方合わせて 10 隻あまりいたですかねえ。それから皆株で古い船があったら買ってきたりして、段々多くなって 20 隻位になりましたが、初めはあんまりなかったですねえ。で、私が乗った南開丸は、一本釣で尖閣行きました。

やっぱり戦前尖閣へ行ってるから、向こうは漁はいいことは分かっていたんですねえ。

南開丸の船主は儀間眞淳さんという方で、今は亡くなっていないけど、この船はあとから私が買いました。この南開丸で、尖閣行った時、船長は儀間眞淳さんで、私の父より 1 つ上でした。儀間サンルーヤッチー(兄さん)は戦前の南開丸の親父でした。昔は尖閣のことをユクンと言うたんですが、この人達が一番ユクンに行ったという話も聞いています。

もう、この海人達は向こうに着いたら、アテムンといって標識、島と島とかの交差で山当てして、大体戦前はこの近辺で漁をしたとって、漁場を探してましたねえ。

尖閣列島へ行く度ごとに大漁して帰ったきましたよ。

トビイカ採れなくなると 一本釣に転換

私が南開丸に乗った頃は、船は 5 月から 10 月頃まではマグロ船、1 隻の船でマグロ船、また 10 月あとは早い人では 4 月、5 月頃までは一本釣です。1 ヶ年に一本釣もやるしマグロ船もやっていましたよ。マグロ船のエサは自分でトビイカを、あれを採ってエサにして、5 月から 10 月までは天気はいいからトビイカは採れますが、冬の季節風が吹いたら、採れないから一本釣に替わります、エサがないから。段々内地からもサンマやムロなどが来るようになってからが、今のようにマグロ船はマグロ船ばかり、一本釣は年中通して一本釣に変わってきたのですが、あの頃は、エサの事情で、5 月から 10 月までは大体がマグロ船、冬場の 11 月から 4、5 月までは一本釣りをやりましたねえ。

その時、尖閣列島にも行きました。一本釣はねえ、あのサンマが来たから、サンマ持っていったり、本部にカツオ船がいるからカツオ買ったり、また伊江島に行ってグルクンを買ってエサに使ったりした。あの当時は、氷会社が本部だけしかない、船が 14,5 隻もいるんだから、漁から帰って来ると、私なんか独身だから、本部の方に氷の番とりに行ったりして、また情報聞いて、大島にも行きましたよ。大島は氷会社もあるし、向こうはムロはよく採れますから。

父も戦前 尖閣へ アコウで あわや遭難

私達の住吉町には、戦前 30 隻、40 隻の船がいてユクンに行っていました。それで向こうに行けば、魚が釣れるのは分かっていたわけです。戦前あった南開丸も行って、家内の親父の戦前の船・宝生丸(船主國吉眞善、約 12 ト)も行ってはいたはずです。この宝生丸はカーナー(招福名)なので、私を受け継いで自分の船の名前にもしましたけど。

安仁屋さんとこのカツジョウ丸(船主安仁屋宗コウ)も向こうに行ってます。

ウチの船も行っていますよ。シンコウ丸といますが、進む幸という字か分からんけど。親父からシンコウ丸(船主我那覇生義、12ト位)もよく行ったと聞きました。親父はユクンによく行ったと、魚は向こうではよう釣れよったと言ってました。一度はアコウで、帰って来る時に向こうは波が大変荒かったもんだから、もう波でブリッジも壊れてからに、これもロープでくびって、もうやっとの思いで家に帰って来たと話してましたねえ(笑い)。

沖縄近海は 12、3メートル位の風が吹いても仕事はできますが、向こうはもう 12、3メートル吹いたら、もう波が荒くて仕事はできないですよ。危険な海だから。

それで、私が尖閣に行くようになってから、こんな危険な目にもあったから、気をつけなさいよと言うたと思います(笑い)。こんな話を親父はしてましたねえ。そのあと、シンコウ丸は昭和 16 年大東亜戦争が始ってから、軍に徴用されて翌 17 年の終り頃ですか、ボルネオのタカラノ島に行ってます。向こうに行って操業やって、向こうにいる日本の兵隊さんに魚を獲って上げていたそうですが、最後はボルネオでやられました。

戦前尖閣に出漁した実父と義父



シンコウ丸(12ト)
実父・我那覇生義



宝生丸(12ト)
義父・國吉眞善

これまで船4艘持って 尖閣で漁してきた

私は、22、3歳に南開丸で、尖閣列島に行って、行く度ごとに大漁したもんだから、今度は自分で船を持ってから行くことにしました。

34歳(1965年昭和40年)に有昌丸を3名で株買って、尖閣に行く場合、初めは叔父さんが船長で行ったのですが、叔父は母の妹の旦那で私の父と婿兄弟になります。船員6名、7名位を雇っていて、叔父さんが休む時は、私が船長を交代したりしてやっていました。またあの南開丸を売るといふもんだから買いましたねえ、南開丸は私が専用で船長しまして、この2艘で、長いこと尖閣行ったりしました。

44歳(1975年昭和50年)になって今の宝生丸を、日本復帰になって2、3年位なってから、宮崎の船も沖縄に来るようになったので、宮崎の南郷の船を買いました。これ16トだったかなあ。その当時は乗組員は6、7名位だったんです。

段々海人が少なくなってから、ファイバー船の宝生丸に切り替えて、2、3名でも対応できるようにしました。これまでこの4艘の船持ってきましたが、これで尖閣に行って漁して来ました。



第8有昌丸(16ト)の進水祝(1965.9)
正面左端は父母、船上右2人目小生

航海日数 2 週間 2 ト半水揚げ

尖閣列島へは、那覇から行く場合は 30 時間から 34、5 時間はかかります。1 昼夜では行きません。航海日数は大体 2 週間位ですねえ、一本釣りは、魚を獲ってから 10 日位しか保存できません。また魚は宮古・八重山に行って、そこから送っていました。八重山からは 12、3 時間、また宮古だったら 17 時間位かかりますから、近いし、一応沖縄から出たら、尖閣で 2 週間位仕事をやって、そこから魚を送るわけですよ。船も大きな汽船も多くなっているから、魚をコンテナに詰めて、また飛行機も出てますから、船から、飛行機からも送ってました。また尖閣に戻って、漁をして、また八重山・宮古に行って魚を送って、こんなふうには 3 航海したら、もう 3 航海目には那覇に、家に帰って来ましたよ。

私は 3 航海以上はやらなかったです。これ以上やった船もいると思いますが。

水揚げですか、大体 1 航海で 4 千斤(2.4 ト)ですかねえ。2 ト半位獲ったらもう大漁です。

最初の頃は大漁したけど、段々少なくなりました。深海一本釣ですから、漁場としては少なくなります。大体同じ場所からやりますから。

主にマーマチ シチューマチ

尖閣列島では、シチューマチとか、マーマチとかをよく獲りました。アカマチはあまり獲らんですよ。沖縄から来たらコースは必ずアコウに行きますからねえ。アコウの島を見てから尖閣に行きますから、アコウから尖閣列島の魚釣島の間、魚探を持っていますんで、その間に釣れそうな所があれば、そっちから漁はやって行きます。

でまた、魚釣島の西の方は、大体 3 時間位まで行きよったんだけど、船が 7 マイル走ったとしても 21 マイル位までですねえ。その辺また北西の方も 20 マイル位、その辺の近海をいつもやっていました。

マーマチとか、シチューマチとか、アカマチは 250 メートルとか、300 メートルとか深い所、マーマチが 70、80 メートル。シチューマチが 120、130 メートル。プープーグワ一のクルキンマチはシチューマチと大体同じ深さです。

尖閣のシチューマチは小さいですよ。ただ、前の南開丸の儀間船長が向こうに行った時、戦前はこの場所からこんな大きなシチューマチが釣れよったんだけど、今は何で小さくなったかなあと言っていました。やっぱり獲りすぎて小さくなったんですかねえ。

昔は魚も大きく、沢山はいたと思うんです。話を聞いたら、やっぱり向こうは、(海図を示しながら)、こう尖閣がこうあって、沖縄がこっちにあれば、北東の方に潮が流れていま



宝生丸(木船 16 ト) 1974 年頃宮崎県南郷から購入

すから。コースは大体、東に沖縄に行くんですが、昔の人は尖閣まで来たら、帰りはこっちから、もう流れて行きながら魚を獲って大漁して、家に帰って来よったそうです(笑い)。潮の流れに乗って行けば、沖縄近くに行きますから、大体アコウの方面まで行ったら帰りは、もう大漁やって、家に帰って来よったという話も聞いています(笑い)。昔はそんなに獲れたんですね。

アンカー入れないで 流し釣で獲る

尖閣列島では、潮が強い時には、魚は、一本釣といっても、釣り針を 15 本付ける人もいれば、13 本付けるのもいて、これ皆違うんですが、大体 10 本以上は付けていますねえ。

釣れる時にはこれだけ全部に釣れて来ますから。マーマチなんかは、エサ付けて入れると底に着いたら直ぐ引っ張ります。これが 2、3 時間もしよっちゃうですよ。マーマチが全部食うて、もう釣り針を 15 本かけたら、大体 10 本位は食っているから。その時、アンカー入れたまま、巻き上げ機を回したら、潮が速いから、100 メートル後ろに魚が浮き上がってバツタン、バツタン回っているのが見えますから(笑い)。そしたら、魚は船のスクリューみたいにバツタンバツタン回るから、口元から切れて獲れませんよ。ですから、潮が強い時は、アンカーを入れなくて、船も、魚も流れるままして、釣機で揚げていくと、魚は直ぐ下から揚がってくるから獲れます。この巻き上げは昔は手繰りでやりました。手袋しても大変でしたよ。今は上等な道具ができたので、電気で揚げる釣機になってますから。

便利な道具できても 人の技と勘が頼り

まあ今の釣機はいちいち見てなくてもいいから、助かりますよ。一旦海の底に着いたら、もうこれ以上は延びても行かんし、また揚がってきたら途中で止めることもできるし、1 つが揚げてくる間、もう 1 つにエサかけて、次の準備ができますから、1 人で昔の 2 人分の仕事ができます。だから、人は沢山は乗らなくてもいい。もう船員も少なくなって、人を雇うのが難しくなっていたから、助かりましたよ。

南開丸とか、有昌丸の頃は、あまり船の装備がないから船員は 7、8 名もいました。

甲板と機関の 2 手に分かれて 3 時間から 4 時間位、甲板ならラット(舵)のあれするし、機関であれば機械を見たりしてねえ。

ファイバー船の宝生丸になると自動操舵で走るから、あまり船員はいなくてもいい、3、4 名でできます。だが、天気が崩れたら船長はもう苦労はしますがねえ。とくに尖閣列島は波の荒い海ですから、向うで怖いのは季節風です。あれが強くなったら波も高くなるし、また天気が崩れると、魚釣島か、トイシマグワー(南小島)に避難しに行きますが、行く途中



ファイバー船・第 1 宝生丸(7ト) 1990 年頃購入

に大きな波が来たら転覆する恐れもあります。その時は自動操舵で船は走らしたら危険です。あれではできません。ラット(舵)で波も見てからに、波が下りてきたら舵を切って、突っ切って、また直して、突っ切って、こんなして、ラットでやらんと危ないです。どんなに便利な道具ができて、危険な時は、人間のワザ(技量)と勘が頼りですよ(笑い)。

尖閣で遭難 勘違い 全船港に待機

最初の頃は無線もない、何もない頃ですから、何か事故があった場合には、助け合う意味もあって、リンシンシ(僚船して)イカヤー(行こう)と行って行く場合もありました。

有昌丸と南開丸で尖閣に行った時ですが、その時は、私が南開丸の船長して早く行って漁をしていて、そのあとから、有昌丸も来たから、天気が崩れてですねえ、この天気が崩れる時には魚釣島、またトイジグワーなんかには避難するんですよ。避難していて、これが2、3日天気の崩れが続いて、天気がよくなったから、また仕事を始めたんです。

それから正午12時に天気予報(漁業気象の意)をやるからとラジオを聞いていたら、「那覇地区の漁船は、この放送聴いたら、すぐ連絡して下さい。どこどこにいるとお知らせ下さい」と放送しているんです。もう、びっくりしました。

那覇地区には船頭会というのがありましてねえ、船頭会は何か強風警報やらあったら、皆一齐に操業を止めて、皆待機させるんですよ。強風で船が遭難したり、座礁することがありますから。その時は船は全部休んで、船頭会を開いてどうやったら助けられるか、皆で議論し合っている。ラジオからその連絡を聴いたもんだから、私達が尖閣で遭難したと勘違いしていたら大変だ。直ぐ、叔父さんの所に行って、何隻かなあ、あそこに他の船もいたんですが、私が漁は少し持っているから、那覇に走って行って連絡するから、こっちにいる全船に皆操業やるようにと、そう言ってフルスピードでエンジン回して飛んで帰ったことがありますよ(笑い)。28時間ばかり掛かって、4時過ぎには着いたから、すぐ下りて組合に行って、皆大丈夫ですよと知らせました。そうしなければ大事になっていた。もう14、5隻位の漁船が皆漁を休んで、遭難していたら助けに行くのと港で待機していましたから(笑い)。また一度は、叔父さんが有昌丸の船長していた頃、尖閣列島に行った時に、向うで眠っていたら、ラジオで、「有昌丸、この放送聴いたら直ぐ連絡して下さい」と言ったから、あの時は天気が崩れていたけど、八重山にすぐ走って行きましたよ。八重山から、船頭会に電話して、「何でもない、無事だから」と連絡したもありましたよ(笑い)。今のようになら無線があれば直ぐ船から連絡できたんですがねえ。

互助の船頭会 戦前から垣花に

この船頭会というのは那覇地区の互助組織です。戦前から垣花の人はこういう組織を作って助け合っていたもんですから、船を誤って座礁させたら、もう自分達だけで下ろしもできないし、また曳航できないから、皆でこれをやるんですよ。船頭会を開いてどんな状態だから、もう船何隻出して、何人加勢に行けばいいとかを決める。ある時、宮古の水納

島で、仲間の船が座礁させた時には、船頭会で決まったから私も船長で行きました。ウチの南開丸、そして共和丸と有徳丸の3隻だったかなあ、乗組員は各船から1名とか2名とか出して、座礁した船を下ろしに行きました。して、これが決まったら港に待機している船は漁に出ますよ。このように皆で助け合うために作った組織ですが、もうこの船頭会もなくなって、今は船が遭難したとか、事故の場合は、皆漁船保険でやっていますねえ。

役立ったラジオ 真っ暗闇でも 島の方向分かる

あの頃は無線はないから、船頭会の連絡はラジオから聴きました。那覇地区はラジオに連絡して、ラジオで放送したから、天気予報を聴くといって12時にスイッチ入れたから知りましたよ。尖閣でもラジオですか、よく聞こえますよ。台湾放送も、中国放送もたまに入るが、雑音が入って、沖縄の放送はよく聞こえる。あの頃はトランジスター(ラジオ)だったから、よく聞こえる方向に持っていけばいいから、一定の方向に向けていたらよく聞こえますよ。また、このトランジスターを船で持つようになって便利になったねえ(笑い)。

昔は方位は羅針盤1つだけだから、真っ暗な海では、島はどこにあるか分からん。

沖縄の方向が分からなくなったら、このトランジスターを持っていたら、どこの方向からよく聞こえるか、音で確かめながら島の方向を探す。マックラシン(真っ暗闇)でも、あそこちの方向と分かる(笑い)。だがこの方向線上にはあるが、前の方が後の方は分からんです。一番怖いのは、間違っって反対方向に船走らしたら、島は余計に遠くなってしまいうさあ(笑い)。でも、これは大体勘で分かるから。海ではラジオは重宝ですよ。とくに尖閣のように遠い所に行った時はなんか。だから、海で持つトランジスターはデューダカー(高価なもの)を買いよったですよ。私のラジオですか、40ドル余りましたから(笑い)。

底立延縄もしたが 一本釣りに切り替えた

尖閣では、一本釣の他に、底立延縄もやりました。復帰後のことですが、これもやりました。大体どの位だったかなあ、長さは2マイル位じゃないかなあ、(底延縄を図示しながら)、大体こんな形ですねえ。ここに浮きが付いていて、こっち(枝縄)に釣り針を5本位つけてからに、この(幹縄)長さが大体いくらかなあ。これ(枝縄)を大体100位入れたと思うんです。これ(間隔)が25メートルとしたら100ヶだったら、2,500メートルで、もう2疋以上の長さですよ。2,3名ではとてもできません。もう5名以上いないと。木船の宝生丸の時にやりました。

経費はかかるけど、釣れるのは釣れますから、初めはよかったですよ。魚も獲れてよかったけど、段々同じ所ばっかしてやるもんだから、次第に魚は獲れなくなりましたねえ。それに魚も小さいから、値段も安かったですから。それで、しばらくしたら元の一本釣りに切り替えましたよ。

中国底曳船に驚く やつとのもので逃げきる

一本釣の場合は、日が暮れたらマチ類は食わんで、すぐ眠るんですよ。

ある時、眠っていたら、眠って起きてみたら、すぐ傍にこの中国船が、何やら網を揚げていたみたいで、底曳き船か分からんけど、知っている人だと、あれは誰だなぁという位に船が接近していたもんだから、大きい鉄船だから、もう海でぶつかったらウチの船はすぐダメになるから(笑い)。直ぐ皆を起してからに錨を上げて逃げたけど。あの時には船が多くてですねえ、夜だから、あっちにも電気が点いている、こっちにも点いている、もうどこに走っていか分からん位で、やっとのことで魚釣島まで逃げて行ったことがありますねえ。宝生丸の時だから、復帰して大部あとからです。

あの前までは、台湾船はいたが、中国船は1隻も見なかった、あの時に初めて見たが、もういっぱい来ていましたねえ。100ト余りの大きな鉄船があっちこっちにいて、そのあとからも見ましたよ。1,2隻がトイジー小(南小島)の東側にいるのを、また、尖閣の沖合いにいるのを2,3年は見ましたねえ、それから来なくなりましたが。

マグロ船に切り替え 75歳で 漁師引退

復帰後しばらくして沖縄近海でウシシビ(ホンマグロ)が獲れました。それで那覇地区の一本釣はマグロ船に替わりました。私も大部あととなってから、16年位前ですかねえ(1996年、65歳)、まぐろ船に切り替えました。

底立延縄にしても、一本釣にしても、毎日大体同じ所から獲るもんだから、段々魚は少なくなりましたねえ。でもマグロ船は一本釣と違って、マグロは回遊魚ですから、今日はここになくて、漁がなくても、また明日は沢山獲れることがあります。だから、マグロ船は、無線で毎日毎日、海の状況とか、魚の獲れる模様はどんなかといって、皆話し合っ、連絡し合っ、獲れる所に皆行きますよ。

それもあって私はマグロ船に切り替えました。まぐろ船になってから尖閣には行かないです。向こうは大陸棚で浅いからマグロの延縄はできませんから。

このマグロ船を10年位やってから、75歳には海の仕事を辞めました。

私の住んでいるこの重民町に垣花の海人が移住してきて、ここから、尖閣列島に漁に行っていました、もう皆歳をとって亡くなって、もう数える位しかいませんねえ。戦前行った人はもう何人も残っていないはずですよ。私も漁師を引退してからもう5,6年になりますが、尖閣列島のことが毎日新聞やテレビに出たりしていますねえ、「中国の海監4隻が接続水域に、領海に侵入した・・・」とのニュースの度にとっても心配になりますよ。

尖閣列島は日本の領土ですし、戦前から沖縄の漁民が漁をしてきましたから、日本政府は、中国に盗られないように、しっかりと守ってほしいですねえ。(了)



旧正月のハチウクシー光景、宝生丸の前に全員揃って1年間の安全航海と大漁を祈願 (1997年旧正月)

一 奥さんの我那覇澄子(すみこ)さん(79)に聞く一

家で帰りを待っている女の方は、心配ですよ
もう竜宮の神様に、無事をお願いするだけです



船出たら、火の神と竜宮神へ、航海安全 祈願

ウチの人が船出たら心配ですよ、無事でありますようにと、ずっと拝みしましたから、もう拝みしかできないですから(笑い)。すぐ船出たその日に、お家の火の神を拝んで、また、向こうに竜宮の神様がいらっしゃるから、戦前の垣花の住吉宮の竜宮の神様は、戦後は3箇所に移動してあるんですよ、こっち若狭と安謝の開洋塔とペリー(山下町)の住吉宮に、こちらは名前分らんから、若狭の海の神様と呼んでました。そこの神様にもお願いに行きましたよ。もう無事に帰って来させてくださいと、ビンシー(携帯用の御願道具箱)がありますねえ、真ん中に酒入れて、ビン2つあって、あれにヒラウコー(平線香)と供える果物を持って行って、もう航海安全をお願いしますと、そうしてウガン(祈願)しよったです。

とくに尖閣列島なんかに行った時は、とても心配でしたよ。向こうは遠いし、海も荒いですから、家で待っている人は大変でしたねえ。あの時は船に無線電話はなかったから、宮古とか、八重山に船着けた時しか連絡は来なかったですよ。

台風であっちに避難しているからとか、こっちにいるからと言って組合に電話があったら、その時は組合から家に連絡がありましたけど。

殆んど連絡がなかったから、ずっと心配でした。夜はもう眠れない時はホントにありますよ、こっち(若狭)に海歩いている人が沢山いたけど、もうこんな話はできんさあ、だから、おじいちゃん、おばあちゃん(義父・義母)の所に行って、台風みたいだけど、大丈夫かねえと、どこに着いているかねえ、と話しよったですよ。そしたら大丈夫よ、心配しないでとおっしゃってました。おじいちゃんは、前は船乗っていて、海のことはよく分かるから、それで安心しましたけど(笑い)。また、子ども達が熱出たり、はしか一番下が罹っていた時は大変でしたよ、その時は自分独りで、病院連れて行かないといかんし、夜通し起きて、冷やしたりしてやったんです、帰って来るまでには治っているから、ウチの人は何があったか分からんですよ(笑)。



わが家の火の神、カマドの神様
出漁する度毎に航海安全を祈願

いい日にとって、年2回、海の神様に お願いとお礼

船を持っているから、旧9月になったら、9月の海ウガンといってねえ、いい日を探してからに、首里とか、波の上(神宮)とか、あの住吉宮も、どこもかも、航海安全と大漁祈願の拝みに行きましたよ。また、旧12月には、お蔭様で、この1年間の皆元気で頑張っています、ありがとうございます、というお礼のウガンをやります。ウガンは9月と12月の年2回

に。最初は、首里十二箇所(十二支ご本尊)廻りして、観音堂から、ダルマ寺、ティラーグワー(盛元寺)とかを拝んで、それから那覇に下りて来て、波の上(宮)から、ペリーの住吉宮を拝んで、那覇飛行場のある所、ミーヌシン(目之心)を拝みます。前は、そこは自衛隊の基地の中にあったから行けなくて、金網の外で、空港行く道の傍で、ウートゥーシ(遥拝)したんです。今は修復されて、きれいになっているから、許可貰ったら中に入れるんですよ。

あっちは海歩いている人は皆拝みます、昔は兵隊に行く時は皆拝んだともいいますから。

それから、またミーグスク(三重城)を拝んで、ユーチヌサチ(雪之崎)に行きます。あっちにも海の神様がいらっしゃるから、今の若狭小学校の後ろにあります。あっちでも無事です。ありますようにとお願いをして、今度は、またお家に帰りながら、こっちの若狭の神様(開洋塔)を拝んでいたんですよ。こんなして、あっちこっち廻りますから、もう1日かかります。日曜日にいい日をあてて、婿とか息子に車頼んで一緒に行っただです。その時は、もう朝早く出て、全部廻って、最後のこっち着くまでは夕方です。船持っているとなりの人はこんなして、もう無事に帰させて下さいと、あっちこっちの神様にお願いに行きますよ(笑い)。



首里 12 箇所廻り出発地・観音堂



航海安全祈願に必須の波之上宮



垣花海人の守り神・住吉宮



三重城にも竜宮神が鎮座、祈願



ミーヌシンは垣花海人が崇敬参拝、



ユーチヌサチは肝心な海神の拝所

また、男の人の場合は、ウチの人も、海ウガンは旧暦 9 月 29 日だから、大体その前に、自分達で、暇見て、普天間神宮に拝みに行ってました、そして船のお守りといって、神棚とか、炊事場や機関場とかに貼るお札(護符)とかを買って来てたりしてました。もう自分達の拝みは、海ウガンの日の前には、早めに終わってましたねえ。

ハーリーウガン 男の仕事、女はムイメー(賄係?)

旧 5 月 4 日のハーリー(海神祭・爬竜船競漕)の時も、全部男の人達が、首里にも、あっちこっちに拝みに行ったみたいです。住吉宮も、あの崎樋川も拝んでから、ハーリーのその

日には、こっちに、若狭の神様の所にいらっしやる、この時こっちに旗も立ててからに、ビンシーもって、果物も供えて、ハーリーウガンをしよったです。あの旗は何の旗だったかねえ、私達はミイメー(賄方?)で忙しくて、旗見る暇もなかったから、分からんさあ(笑い)。この時は、安謝から男の人達が来て、この人達が初めに拝んでから、女の人達はあとから拝みよったんですよ。自分なんか女の人達は、こんな時は、ミイメーとって、5、6人位、今度あんた達やりなさいねえとって、毎年交代交代でやるんですよ。このミイメーの人達は拝みに行きますよ。住吉神社、波の上とか、ユーチヌサチとか、だけど首里は、安謝の開洋塔とかは行かないです、普天間も、自分達の若狭に關係する所だけです。



若狭海人部落の守り神・通称「海の神様」、ハーリーの日にここ皆集まりを安全祈願

また、皆こっちに集まってウガンウサギル(捧げる)から、その準備したり、また皆にお膳を出して上げますから、またこれが済んだら後片付もありますし、もう1日中、忙しかったです。子供達が小さい時には、今日はウガンだから、遅くまで掛かるからというて、子供を(他所)人に預けてやりましたねえ。

その時は、こっちの若狭の神様の所で、筵を敷いて坐ってからに、年寄りのおばあちゃん達も、皆いらっしやって拝んでねえ。普段会わない人も、この時はもう皆集まって来ますから、賑やかで、楽しかったですよ(笑い)。集会所できたら、そこにはテーブルもあるし、腰掛もちゃんとあるから、あとでは皆向こうでやりましたけど。

あの時分は、ここ若狭にも、海歩いている人が沢山いました。今は皆歳とって、皆いなくなって、ウチの人を入れても、もう何人もいない。安謝も、ペリーも、大部少なくなってますよ。今はもう、ハーリーも辞めて、あのミイメーも、ただ3箇所を廻って簡単にウガンするだけになっているそうですから。

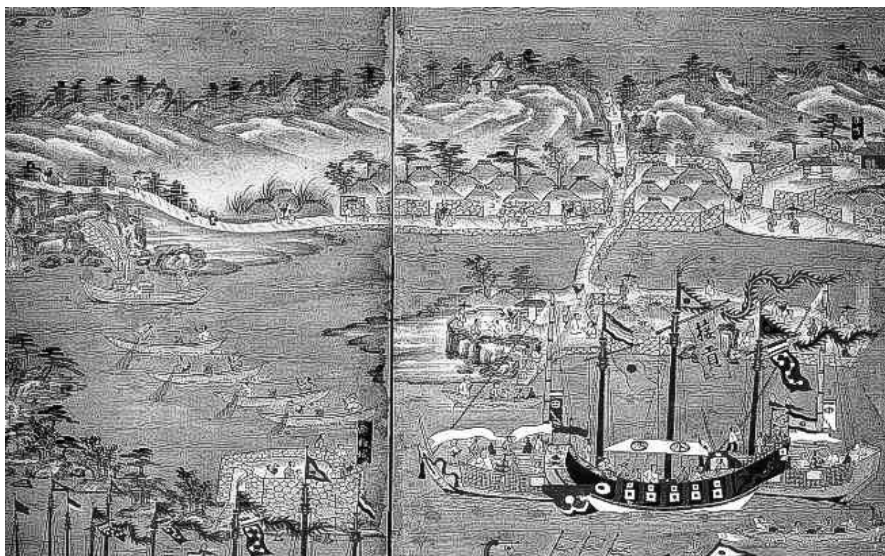


垣花海人の最大の行事、旧5月4日の海神祭ハーリー(爬竜船競漕)、この日は女達も航海安全・大漁を祈願、ハーリー競漕に歓喜・熱狂した。

(1955年金城棟永氏撮影)

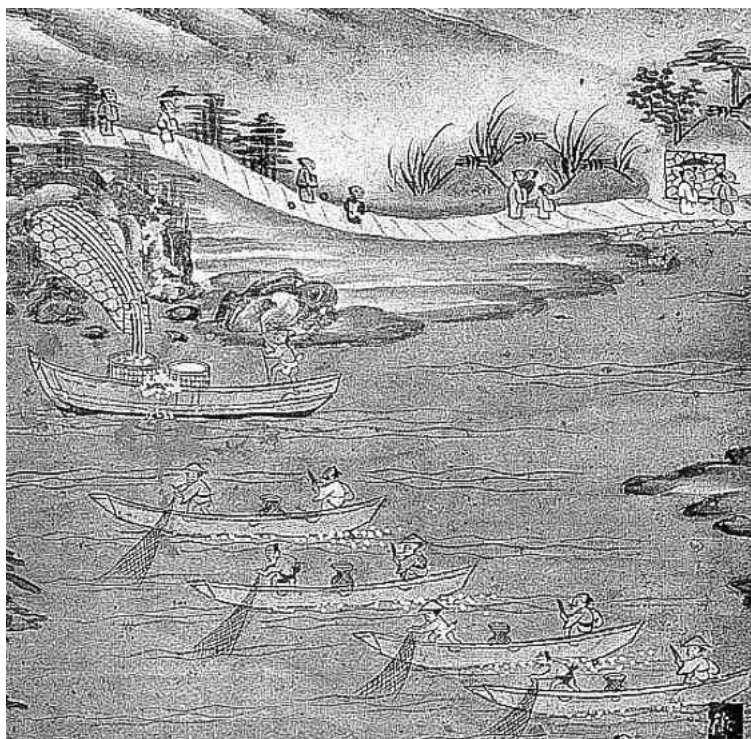
参考資料

1. 「琉球交易港図屏風」に見る 垣花村、首里王府時代から海人



屏風絵図の一部、垣之花村が描かれている。中央はその家並み、右端に村の守り神「住吉宮」がある。左下に漁民が漁をしている様子が描かれている。下図はそれらを拡大した。

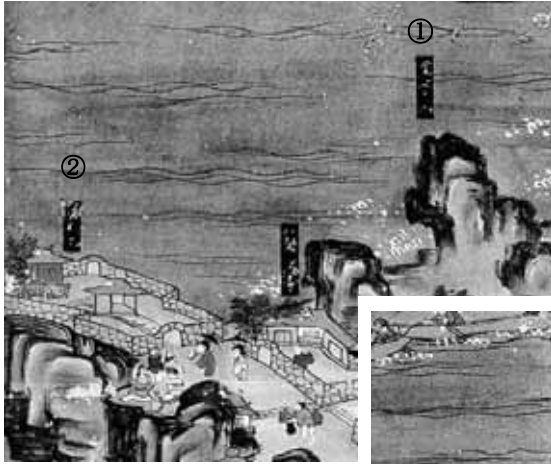
「琉球交易港図屏風」(六曲一隻) 19世紀 滋賀大学経済学部附属史料館蔵



垣花村の守り神「末吉宮」、航海安全の神でもある。王府時代も尖閣を通過して中国へ渡海する際の祈願所の1つだったかもしれない。

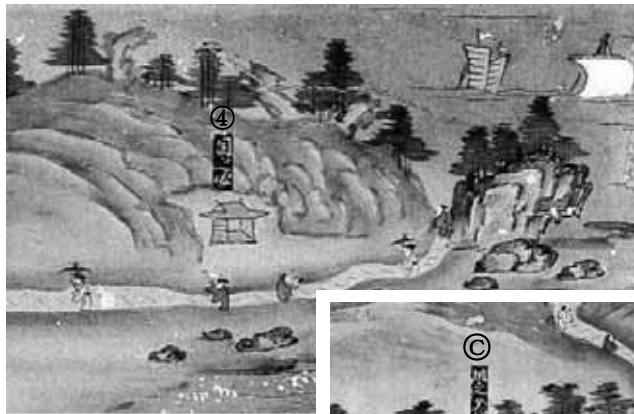
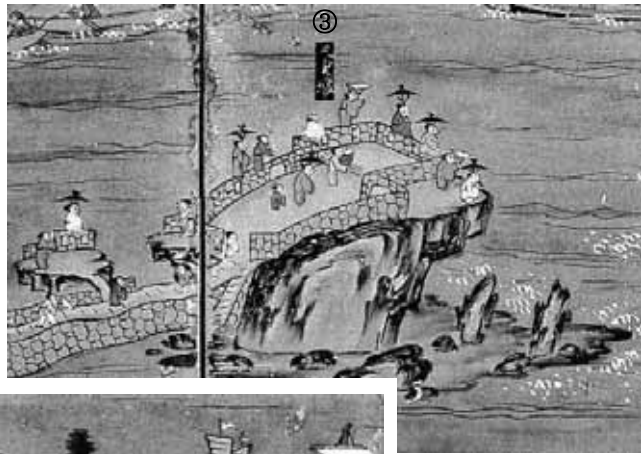
垣花村は王府時代から漁を営んでいた事が分かる。進貢船を派遣する王府も、垣花漁民も、島に鎮座する諸々の海神・竜宮神に航海安全を祈願したのでは。

尖閣渡海の航海安全祈願 島に鎮座する諸々の海神へ
進貢船の王府期から 垣花漁民 綿々と今に引継ぐ



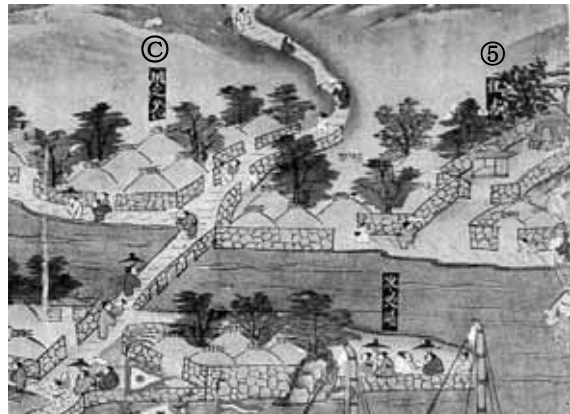
①雪崎山(ユーチヌサチ)は、現在埋立地の一角に小さな拝所を残すのみ。曹祖父母から海の神様がいらつしゃると教えられたというほど垣花漁民にとって肝心な拝所。②波之上は必須の拝所。

③三重城は海の神、竜宮神が鎮座、航海安全祈願だけでなく、海で亡くなった死者の魂招きもここでやる。

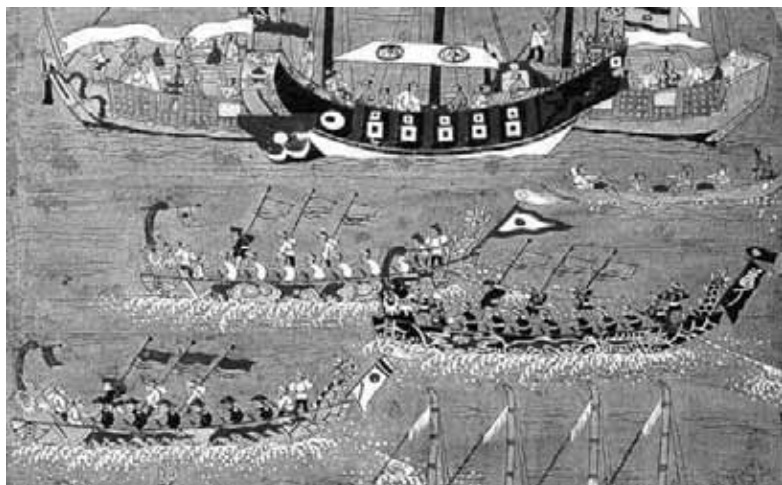


④目之心(ミーヌシン)は垣花海人が航海安全祈願で崇敬参拝。戦時中は出征した兵士は故国へ再び帰れるようにと帰還祈願したという。

㉞垣之花(村)と垣花(村民)漁民の守り神である⑤住吉宮。戦後垣花は軍港となり、村民は3箇所に移転を余儀なくした。住吉宮は、開洋塔として分祀もされ、航海安全祈願に欠かせない拝所である



このように見てくると、島に鎮座する諸々の海神に対する尖閣渡海の航海安全祈願は、進貢船の王府時代から 垣花漁民が、今に至るまで、面々と引継いでいると言えまいか



垣花漁民が漁している斜め下方に爬竜船競漕図が描かれている。船の形や服装、所作は今の垣花の爬竜船そのままだ。当時から漕ぎ手は垣花漁民だったのか、「琉球交易港図屏風」(六曲一隻) 19世紀 滋賀大学経済学部附属史料館蔵

宮崎卓己 みやざき たくみ (鹿児島県 喜入町漁協)

1960年(昭和35年)、鹿児島市喜入町に生まれる。52歳(2013年時)。

漁家は深海一本釣を専業、鹿児島市の水産高校を卒えて、家業を引き継ぐ。1982年21歳に、父親とともにマチ船みつ丸(19ト)で、尖閣諸島、沖縄近海に出漁する。以来30年余に亘り、同島海域で、マチ一本釣に従事。現在、那覇泊港を基地にした鹿児島船籍マチ釣船は6隻だが、1980年代には20隻は数えていた。今回氏の話から鹿児島漁船の尖閣諸島でのマチ釣の様子が明らかとなり、興味深い。

**マチの好漁場 九州以南 ～ 大陸棚 ～ 南西諸島**

深海のキンメですか、あれだと、水深500メートル位の、黒潮が通った所、通り道じゃないとしないという話ですよ、このマチちゅう魚は水深が100から200、大体200前後だけど、海底の魚、殆んど瀬(ソネ)に付いた奴、底棲魚だから、やっぱり九州の南側で盛んじゃないかなあ、鹿児島近辺というたらクサガキとかあって、島々の周りとか、海底に場所場所であるもんだから、このマチは、瀬に付いたりしています。長崎辺り、五島とかでも、釣れますかねえ、向こうは、別のタイとかが釣れると聞いたが、行ったことないから知らんけど。ウチらが釣るマチというのは、やっぱり九州から下の方ですよ。あと大陸棚の方とか、大陸棚もやっぱりいますよ、こっちの西の方の、九州近辺から、尖閣まで、ずっと大陸棚がつないでいるから、鹿児島近辺にもいますよ、シチューマチ(アオダイ)は少ないけど、クルキン(ヒメダイ)とか、アカマチ(ハマダイ)とか、ミーバイ(ハタ類)とか。

この大陸棚からドンドン下りていくと、大陸棚の境目(百尋線)がこうありますねえ、(海図を指して)、ここ大陸棚の上がった所にもいるけど、やっぱり、この境目付近が、マチという魚はよく釣れますねえ、水深がまだあるから。鹿児島の方から、この東シナ海の大陸棚はずっとつないでいますねえ、ドンドン下りていった各場所、場所に、ポイント、ポイントがありますよ、奄美大島の西位かなあ、その辺からずっと、尖閣まで、点々と、ポイントはありますから。また、こっちの沖縄本島とか、宮古、八重山の周りとか、あと与那国の周辺とか、この大陸棚や、尖閣諸島、南西諸島近辺が、マチ釣の好漁場ですよ。

復帰10年後、沖縄へ 鹿児島のマチ釣船 20隻程いた

ウチら鹿児島の深海一本釣・マチ釣りやっている漁師は、最初は鹿児島近辺でやっていて、それから漁場を広げて、こっちへ来て、段々尖閣方面へ行きましたよ。ウチの親父も、最初は鹿児島近辺で、5、6ト位の小さい船でやってました。今のみつ丸(19ト)を造って、1年もしないうちに、沖縄に来て、あと大正島とか、尖閣とかに、行きよったです。ここに来たのは31年前、丁度沖縄が本土復帰して10年後(1982年・昭和48年)、鹿児島近海から、沖縄へと漁場を広げて、こっちに来ましたねえ。私が水産学校を卒えて、芳栄丸というて、同業者の船に半年位乗ってましたが、そのあとに、みつ丸造ったから、これでウチの親父(宮

崎次雄)と一緒に、来ましたよ。

親父が 51、私が 21 の時です。あの頃は 鹿児島にマチ釣船は、沢山いました。ウチらは、指宿の岩本の港に船を泊めているが、そこに 11 隻、12 隻はいたから。(対岸に陸揚げしている船を指して)、ホラ向こうに、幸丸とめぐみ丸が廃船になって置かれていますよ、あれも鹿児島のマチ船ですよ。鹿児島市内に、あのめぐみ丸、幸丸の他に、昭進丸、喜久丸、吉丸、大幸丸、鶴丸、巖島丸とか、あとの大島船籍で、瑞宝丸とか、琉宝丸とかいましたから。沖縄には、鹿児島のこのマチ船だけで、全部で 20 隻位は来ていたんじゃないですか。また、熊本、長崎からも来てましたねえ。

県外船が全部で何隻いたか憶えていません、相当いましたから。ここに現在いる鹿児島船籍は 6 隻です。大体大きさは 19 トンクラス、こっちに八坂丸、高治丸と栄丸、高吉丸がいますよ。芳栄丸が来ていない、今は鹿児島の奄美大島近辺で、仕事しに行っているから。

ウチは、親父と一緒に、みつ丸に乗って、宮古、八重山から与那国、大正島とか、尖閣とか、相当廻りましたよ。親父は今年 82 になります。もう 70 手前に、船から下りたから、引退して 10 年ちょっとです。ウチが船長交代したのが 23 だから、親父もずっと乗っていて、年明けには、毎年、尖閣に行きよったです。



沖縄県漁連の那覇泊港に係留している鹿児島漁船
左より高治丸、高吉丸、みつ丸等が見える、

初航海 鹿児島から 3、4 昼夜かけて 直で、尖閣へ

大正島とか、尖閣とか、やっぱり年明けに、まあ 1 月から 3 月、4 月位まで、毎年向こうに行きよったから。その年の初航海は、尖閣には、鹿児島から、山川港から、直で行きよったです。3 昼夜、4 昼夜かけてねえ。初航海は、とくに縁起を担いで、大安吉日とか、いい日を選んで出港するから、それで 3 隻、4 隻一緒になって、その時は、船に旗を立てて、ウチの船は立てないけど、指宿の連中は、やっぱり旗を立てて、出港しますよ(笑)。

この間、尖閣で中国海監に追っかけられた船ねえ、あの高吉丸と栄丸は、あの時は、遅れて 1 月の末だったかなあ、やっぱり初航海だから、鹿児島から直で行って、大正島をやって、大正島を 2 日商売して、そのあとに、尖閣に行って、そこで操業したら、中国の海監に追っかけられたわけよ。(※報道記事「毎日新聞 2013.2.4」末尾に掲載)

尖閣へは、初航海は鹿児島から直に行って、そのあと 2 航海目、3 航海目は、那覇から行きます。こっちの泊港(沖縄県漁連港)を基地にして、大体 4 月位まで仕事しますねえ。

初航海に鹿児島を早めに出れば、大概ひと月に 2 航海はしよったですよ。あとは 2 ヶ月で 5 航海の目安でやりよったです。魚は、こっちに下ろして、こっちが安い時は、やっぱり鹿児島に また魚種によっても違うから、ミーバイというのは、鹿児島は値がいいから、

その時は、向こうに送ったりして。普通は、単独では出漁しません、何か事故があったり、いろんな安全上の問題とかもを考えて、僚船組んで大概 2、3 隻で行きます。だけど、行く時は一緒に行っても、先に釣った船が 1 週間して帰って、次は 8 日して、また次は 9 日して帰ると、まとめて帰ったら、魚が水揚げできないから、1 日ずらして、1 隻ずつ帰港してましたねえ。

マチ釣 操業場所、替えて順繰りで、パターン決まる

深海一本釣りで、マチ釣りで、あっちこっちに行きました。年の前半は尖閣に行っていて、また、行けない時は、こっちで、沖縄本島から、宮古・八重山、与那国近辺でやったりして、これが大体 5 月から遅くて 6 月までかなあ。今の 4 月の時期に、前はここから南シナ海辺りにも行きました。それから、大体 6 月から 7 月 8、9 月には鹿児島に帰る。こっちの台風シーズンには、鹿児島近辺でやって、そして後半 10 月以降になれば、この辺が釣れなくなるから、漁場を替えます、小笠原方面とか、また南に下がって行って、宮古、八重山とか、尖閣に行きました。ウチらのマチ釣りは、その時期で、何月はどっちに行っていて、何月はどっちと、大体操業する場所、パターン決まっておって、その順繰り順繰りで、やりましたねえ。



みつ丸(19ト)で 30 年間、尖閣諸島で漁をしてきた

小笠原ですか、向うは 11、12 月の冬場はよく行きましたよ、鹿児島から直で。アカマチが主

体で、マグロがはじける前はよかったです、値が大部安くなったから、あれからは大部行ってないです。鹿児島からでは、片道でも 4 日はかかりよった。だから燃料が 8 千リッターから、多くて 1 万リッター使いよったから、今は厳しくて、とても行けないですよ。

台湾アジンコート 南シナ海・東沙西沙にも

尖閣では、大体が大陸棚の境目と島の周辺、大体が領海内 12 マイルで操業しているが、前は魚釣島の 30 マイルとか、台湾近くまで行きよった。台湾近くに無人島が、アジンコートというのがありますよ。あの近くまで行きよった。(海図を指して)、あとソーソネとって、丁度ここになるわけよ、この辺にもソネがあったんですよ、そこで尖閣がダメな時にはここまで行って、また、アジンコートでも、仕事したことがありますよ。だけど、台湾が厳しくなったら行けなくなりました。南シナ海ですか、向こうに行ったのは、熊本の船とか、鹿児島の船とかが行ったと聞いていたもんだから、その連中に教えて貰って一緒に行きましたよ。向こうは、時期的に今の時期(4 月)が、丁度一番いい、水温が上がった頃、によく行った。南シナ海は出港してから大体 4 昼夜目に仕事できますよ。台湾の基地がある東沙島とか、また西沙島とかのリーフで、あちはよかったですよ。

クルキン(ヒメダイ)とか、オオヒメとかが釣れよったが、量的に一番多かったのは、アオダイに縦縞が入った、沖縄でシルシチューといって、アオダイに縦縞の入ったシマアオダイ、あれがいっぱい釣れよった。だけど、もう値段がやっぱり安いわけですよ、最後に行ったのは平成 16 年 4 月やなあ、その時は 2 回行って、4 千疋から 5 千疋釣ったが、燃料代差し引いたらいい所なかった。あっちまで 4 昼夜はかかるから、燃料も 8 千、9 千リッター位は使いよったから。値段は疋当たり 600 円切っていたから、せめて 800 円はとないと採算はとれない。今はもう南シナ海には行ってない。また尖閣行ったら、台湾近辺、アジンコーとも行けなくなったから、行ってないですよ。

尖閣 いい漁場、1 日 10 時間 釣り放しできる

尖閣だと、鹿児島から直で行くと、大正島には 3 昼夜かかって早朝着く、ここで 1 日漁をして、大正島を夜走れば、もう明るく日の朝やったら、尖閣に行きよったから。

行きだした頃の 2,30 年前は、結構釣れよったですよ、3 千疋から 5 千疋は釣れましたよ。1 日 400 疋とか 500 疋とか釣れよったから、だから 8 回(日)から 10 回位、商売して帰りよった。それがドンドン釣れなくなって、去年のデータ見れば、やっぱり 2 千 4,5 百疋しか釣っていない。しかも魚は、結構小ぶりになっている。それでも、他の漁場に比べたら、あっちはやっぱりいい漁場ですよ。

釣り数はないけど、針は 9 本 10 本付けた奴に 5,6 匹とか、1 つの下がりにやっぱり食ってきよるから。それとまた朝から晩まで、ずっと釣り放しというか、ずっとはではないけど、また潮が流れてまた潮上りして またそこに道具やって、

で、また船が流れたら、またそのポイントに行って、また一応中に入れる、その繰り返しだから。また釣れなくなったら、またポイント変えれば、1 日 10 時間はできるわけですよ。10 時間釣り放しできるから、ウチのみつ丸の場合は、大体 6 名位、多い時 10 人位は乗って、釣機は 1 人 2 台で、5 名入れて、1 航海、10 日間行って、大体 2 千 4,5 百疋は釣れますから、上出来ですよ。あっちは、ホントにいい漁場ですから。



1 人で釣機 2 台を使って、海底のマチ釣りに、1 日 10 時間ほど挑む。

漁場の特長 魚群多く 釣れるポイント多い

尖閣での漁場ですか、(海図を見て)、これが大陸棚だなあ、大体がこの大陸棚の境目辺りで漁します、これは水深がずっとある、この凸凹の所に大体魚いるから、ちょっと深めに行ったら、アカマチがいますよ。上がった所にも魚はいるけど、で、久場島のこの周りとまたこの辺でも漁するんですよ、またこの辺も、久場島の周りでもやりますよ、この並びでも北西方、北東方とか釣れよったし、また魚釣島の北西側、ここから 12,3 マイルこの辺と

か、あとこの真西、東、また大正島の周りとか、結構点々と、結構広い範囲で、場所場所にポイント、ポイントがある。だから、尖閣の漁場の特長は、魚群が多いことと、魚の釣れるポイントが多いことかなあ。

(ブリッジに案内し、GPSの画面を指して)、ホラ、こっちは尖閣で、黄色、赤、白とか、色が付いたのがポイント、ポイントがいっぱいある。ここは赤だからアカマチが釣れたことが分かる、もう島の8マイル以内は、もうポイントだらけですよ。魚群が豊富というのかなあ、ちょっと深りに下げたらアカマチが釣れて、浅りに行ったらシチューマチが釣れたり、それに近くに島があるから、もう絶好のポイントだなあ、島から漁場は8マイル近辺だから、あと天気



GPS画面を指して、「尖閣は魚群が多く、釣りポイントが多い」と説明する宮崎船長

がシケても、もう島陰に避難できるから一番いい、冬場にはもってこいの場所やなあ。

夏場にシケることはないけど、やっぱり冬場に行くもんだから、冬場結構シケますよ、もう波の高さは4メートル、5メートルざらだから、3メートルまでは何とか商売できるんだけど、もう4メートル、5メートルになったら、もう島の近くで遊びがてら、まあ遊ばない程度やるけど、暇つぶしに島の近くで仕事するのはあるけど、夜釣りじゃないよ、昼間よ、午前中、時間つぶしに(笑い)。ずっと寝ているのは退屈だから、ホレ島の近くで、それでも結構釣れますよ。

その時は浅瀬もあるけど、もう小さなアカマチが釣れるポイントもあるから。

シチューマチ、クルキン マーマチ アカマチ釣る

獲った魚ですか、シチューマチ、クルキンマチ、あとマーマチ(オオヒメ)とか、ウチなんかは全部釣りますねえ。アカマチ、あとミーバイとか、カンパチとかを釣れよった、まあ、場所場所でやっぱり違いますよ、糸満の人達は、尖閣では、マーマチが殆んど、あの底(立)延縄でなあ、2500キとか量を釣ってきたから、水揚げする時に、こっちでよく一緒になりましたよ。尖閣で、ブダイですか、あれは見たことなかったねえ。あれは2、30メートルとか浅い所に、島の瀬近くにいるかもしれないが、ウチらは浅い所で110メートルの水深から、300メートル位まで、仕事しますから、ブダイは見ませんでした。ホンダイ(マダイ)は、前は尖閣でも釣れよったですよ、今でも釣れるんじゃないかなあ、結構前は小さい奴が1航海に10何匹かは釣れましたよ。水深120から130メートルで釣れていた。あと大陸棚の方も釣れてましたけど、沢山は釣れないけど、レンコダイですか、あれはこっちの大陸棚の砂地の所に結構レンコダイは来てました。尖閣付近では、瀬からちょっと真



釣り上げた魚は、シチューマチ!

っ平らの所は釣れてましたよ、水深 120 でも 200 メーターでも。ウチらが主に釣ったのは、シチューマチ、クルキン、アカマチ、マーマチです。島の近くには、夜寝る時とか、シケで避難する時しか行かなかった。魚釣島に、なんかカツオ工場があったというのは聞いてましたよ。灯台の北の方にあったんでしょ、真っ平らな所ありますよ。島の北の方に、だけど上陸したことはない、ゴムボートかなんかで行かないと、上陸できないから。



尖閣諸島では、シチューマチが多い

サメに、漁邪魔されたら

共食いさせて追いやる

尖閣の島近辺はサメが多かった。魚釣っている途中でサメに食われることは、しょっちゅう、もう島近辺はサメだらけですよ。潮の関係で出ない時もあれば、もう 1 回目からサメに魚を食われて、商売できないこともあります。賢いサメなんか、船の後ろから付いてきますから、1 投目で魚釣るでしょう、で、サメに食われて、食われるから場所を変えようとして、隣ポイント、1 マイルとか行って、2 投目でもまたサメが来て、もうずっと、ポイントポイント、場所を変えても、エンジンの音か、匂いか、何か知らんが、血の匂いは 1 和先まで判るというからなあ。あと、サメは魚群探知機に映る、少し線引っ張って映るから、で、道具揚げる時に、こうサメが魚を食ったら、熱出すのか、音を出すのか、そこが大きくなって、濃くなります。魚探見れば、ああ、誰かの道具にサメが喰い付いて、切られたなあというのは大体分かります。だから、サメがひどい時には、マグロ縄の大きなワイヤーで、シチューマチ一匹つけて、それでサメを釣って、そのまま切って、血を流したまま、その場所に投げとけば、これを共食いして食べるから。もう明るく日には、サメは全部いなくなりますよ(笑い)。何か共食いして嫌うんじゃないかなあ、はっきり分からないけど、サメに漁の邪魔された時は、このサメ釣りをやれば、結構効果はありました。大体 5 日から 1 週間位は効果あります、ホント、あのサメはどこに行ったのと言う位だから。だから、ひどい時には、サメ釣りして、共食いさせましたねえ。八重山では、年に 1 回位サメ駆除してますねえ、捕って持ってきたら、そのヒレで幾らと補償している見たいで、ああやったら全然効果ない、ただ数は減るかもしれんが、魚釣るには影響ないというか、それより、サメ釣って、そのまま切って、ホラ血を流して、その場所に放流すれば、いなくなるからと、鹿児島では昔からそうしてました。だから、ウチの親父と乗っていた頃から、サメがひどい時には、サメ釣しよったですよ。宮古、八重山にも、サメは結構いましたけど、尖閣でも、もう島の周り、大体島から 3 マイル以内には、いっぱいいましたねえ。このサメ釣も大変ですよ(笑い)、サメ釣る時、引っ張って、もうワイヤー切れたり、外れたりして、ウチは、この前なんかは、釣機の太鼓がホラ、サメが暴れて引っ張って、このリールが逆にパァと回ってパーンときたもんだら、こっちの手首を傷めて、長い間重いものが持てなか

った(笑い)。サメの種類ですか、大きいのはあのイタチザメ、あれはなかなか、釣るのはちよつと無理だなあ、300 疋もあるから。せいぜい 100 疋前後なら、またあれはヨゴレザメというのかなあ、背ビレが白くない奴、普通はあれが多いですよ。

電波状態悪いと ポイントに旗立てて 操業

尖閣で事故とか、トラブルですか、ウチはなかったなあ。他の船で、ホラ波が急に乘っかってきて、波に流されて、デッキの角で頭打って怪我したとかはあったけど、ウチら鹿児島島の船で大きな事故というのはありませんでしたよ。

また、今は船の位置、緯度経度見るのに、あの衛星の、GPSがあるから便利だけど、最初は、ローランCとか、Aとかでやってましたよ、あれは2箇所からの電波交差させて、船の位置を割り出す方式だから、尖閣では、一瞬電波がザラザラなって、そのポイントに行けない時がよくありましたねえ。その時はもう大体勘でやってましたから(笑い)。

電波状態が悪い場合は、ポイント探したら、そこにアンカー入れて、その上に浮き付けて、竹竿に旗を立てて、それを目印にして、仕事したことありましたよ。南シナ海に行った時も、それでよくやりよった。あつちには中継基地がないから、ローランは使えんから。

尖閣では潮の流れが速いから、ポイントに旗立てるやり方は便利でしたよ。釣っている間に船が流されても、すぐ元の場所に行けるし、またどっちに流れたか、すぐ分かるから。もう場所場所で、条件も違うし、不都合もあるから、あれこれと工夫しましたねえ。

無線業務日誌 漁場、水揚高を記録

(無線業務日誌を持ってきて) これは毎日無線局にする業務日誌で、自分なりに使って、1 頁を使って、1 航海分かりやすいように、何年はどこに行ったと書き込んでいる。1 番古い奴ですか、平成 9 年の後半位からしか残ってない。その前のものは処分したのか見当たらない。これに尖閣の漁もありますよ。平成 17 年を見ると、やっぱり早い時に 1 月 12 日、初航海、山川港から出港して、沖縄で水揚げして。操業場所は、ワレメと書いているが、このワレメというのは、丁度大正島と尖閣の中間位の所なあ、

魚釣E22だから、東22マイル、これは尖閣Wだから西7,8マイル近く、31は31箱のこと、赤10というのはアカマチが10箱は入って、また近くを見て、NW10とあるから。ここは尖閣の北西方10マイル、48箱だから500疋釣れて、この最後の北上、久米Wは久米島から80マイル西にまたアカマチが釣れるソネがあって、そこで200疋釣って、8回商売をして水揚げが2,735疋だから約2.7ト、疋単価809円で、221

日	記	相手局からの通知事項	備考
1月12日	初航海	山川港から出港して、沖縄で水揚げして。操業場所は、ワレメと書いているが、このワレメというのは、丁度大正島と尖閣の中間位の所なあ、	
		魚釣E22	
		東22マイル	
		尖閣W	
		西7,8マイル	
		赤10	
		アカマチが10箱は入って	
		また近くを見て、NW10	
		ここは尖閣の北西方10マイル	
		48箱だから500疋釣れて	
		この最後の北上、久米W	
		は久米島から80マイル西にまたアカマチが釣れるソネがあって	
		そこで200疋釣って、8回商売をして水揚げが2,735疋	
		だから約2.7ト、疋単価809円で、221	

平成17年の初航海を記した無線業務日誌
魚釣島での操業場所、水揚げ高が分かる。

万円か。こうして、これを見ると、いつ何年にどこに行って、その時期はどの辺で商売をして、その時の漁のようすも、水揚げも、値段も分かるから

尖閣でのマチ釣船 大半が鹿児島・熊本・宮崎の県外船

尖閣に行き始めの頃は、あっちにどんな船が来ていたかあんまり憶えてないなあ。

親父と船長交代してまだ見る余裕がなかったから(笑い)。でも、結構マチ船はいました。那覇地区とかの小さな船は沢山見なかったけど、県外船が結構いましたねえ、ウチら鹿児島だけで20隻はきていましたから、あとは熊本とか、宮崎とか、大分とか、また長崎からも来てましたから。宮崎の船は宏漁丸、大分は第一宏栄丸と第三宏栄丸とかいましたねえ。この第三宏栄丸は、今はこっちの新垣水産という問屋が買って、鹿児島の人間に船長させて、漁はウチなんかと一緒に、尖閣に行ってますよ。長崎の船ですか、長崎の連中は、大概大陸棚の80メートルか100メートルの水深で、夜イカを釣って、それをエサにして、ミーバイとか、カンパチを釣りよったですよ。その大陸棚は尖閣までつないでいるから、長崎の一本釣船が尖閣にも来たりしよったよ。また長崎から巻網船が、もう大部前になるかなあ、ウチなんか巾着船と言っているけど、4,5隻で船団組んで来てました。鉄船で青色にブリッジが黄色かなあ、前の船名の横に日の丸付けて、船団で尖閣に来てました。もう見えなくなって10年もならないが。あと糸満の小さな船が、底立延縄船がマーマチとかを獲ってました。常丸とか、カネイチ丸とかいって、こっちで水揚げで一緒になりました。だけど、尖閣でやっているのは見たことなかったですねえ、ウチなんかと操業している場所も違うから。あとは台湾船、あれは結構見ましたよ。

台湾・中国船 根こそぎ獲って 10マイル沖 魚釣れない

台湾船は、ウチらが来た頃は、タライに乗って、あれでサバとか釣ってましたよ。その前は、竹の筏に乗ってやっていたと聞いてますよ、台湾のアジンコー(彭佳嶼)とか、カトウショー(紅頭嶼)に行った時に、それを見ましたが、あの時は、ビニールパイプの筏でした。

尖閣で見たのは、タライに乗って漁をやってました。1隻の船に、大体10人位が乗り込んでいて、1つのタライに1人ずつ乗って、サバなんか釣ってましたよ、あの頃は結構サバは多かったから。向こうは潮が速いから、タライはすぐ遠くに流される。そしたら、皆乗せてきた船が、急いで追いかけていって、拾っていたんじゃないかなあ(笑い)。

でも、今は台湾船といえば もう遊漁船ですよ。沖では、この釣船をよく見よった、12マイル沖の方でも、釣客を乗せて、集魚灯ですか、電気を沢山点けて、ずっと夜中も電気点けて、ずっとやりっ放しで、釣竿で底魚を釣ってますよ、深海は、200メートルちょっと、浅い所は150メートル位かなあ。釣る魚、釣る場所は、ウチらの一本釣りと一緒に、それを釣竿ですずとやっている。釣客10人位を乗せて、皆竿釣でやっているから。ホラ、前に尖閣の島近くまで来て、保安庁の巡視船とぶつかりトラブル騒ぎを起した釣船、遊漁船ですよ。

あれが尖閣近くまできてやっている。そんな何10隻は見えない、ポツンポツンと4,5隻

位が見えるだけだが、あと昼間に肉眼で 2、3 隻は見える場合もあったけど、あんまり近づいたら、海上保安庁が追いかけるから(笑い)。だけど、あれは相当影響していますよ。もう 20 年位前から来て、もう毎回ひっきりなしに来ているから。それと中国トロール船も来ますねえ、中古船見たような大きな鉄船で、あれは前は尖閣には来なかったけど、10 何年前から相当来るようになって、船団組んで来て、底曳きでしょう、もう一網打尽、小さい魚も、全部。だから、台湾の釣船と中国のトロール船が来て、尖閣の魚を根こそぎ獲ったもんだから、島の 10 マイルから沖の方は、もう魚釣れないですよ、魚はいないんじゃないですか。

中国サンゴ船 沖縄近海 漁場壊して 魚いなくなる

(海図を示して) あとこっちの方に中国のサンゴ船が、宮古の宝山と東大九とか、久米島の北西のソネとか、2、30 隻とか、4、50 隻いるという話、だからこの辺は近づけないですよ。

ウチらの漁場もここだが、中国のサンゴ船がもう多くなって、この近辺で操業できなくなって困っておる。それに尖閣とか、八重山・与那国とか行った時の丁度帰るコース内になるから、だから、北か南かに避けて、またコース変えて帰っている。だけど不思議なのは、この中国のサンゴ船だなぁ、もうやりたい放題だが、それは日本が昔許可出した何かで、やっとするから、水産庁は取り締まれないと、他の連中は、そう言っているけど。それは腑に落ちない。なぜなら、サンゴ漁はワイヤー網を曳いて、海底のサンゴ礁を壊すから、国内の漁業者に対して簡単に許可しない、なら中国には許可するはずがない。だけど中国のサンゴ船の操業が殆んど黙認されているのが現状で、やっぱり取り締まれない他の理由があるのか。



宮古沖で違法操業で逮捕された中国サンゴ船。大半が操業が黙認？(2013.3.5 石垣海上保安部撮影)

そうでなければ、日本の海なんだから、国は、中国サンゴ船を徹底的に取り締まってほしいよ。もうウチら漁業者にとって、大変な打撃なんだから。この前 3 月に、尖閣に行けないから、宮古の宝山ソネに行って、そこで 2 日商売したら、もうだめやったねえ。今の時期やったらホントはいいはずだけど、ホラ、中国のサンゴ船が、サンゴ網曳いて漁場を傷めてしまっているから、もう魚はいない状態ですよ。

あと南の方にもサンゴ船がおるというから、それで大正島に行きましたよ。その時は、水産庁に連絡して行ったけど、勿論、危険承知ですよ。

大正島行って、3 日商売して、無事帰ってきたけど(笑い)。だけど、そうでもして魚釣ってこないと、ウチら漁民は食べていけないから。

国は 尖閣での安全操業の実現 沖縄近海漁場の保全を

去年の暮頃だったかなあ、尖閣を国有化したからといって、今度は海監といった、あの中国の監視船が尖閣に何隻も来ているから、今年になって、ウチら鹿児島県の船 2 隻が、初航海で、尖閣行ったら、あの海監に追っかけられて、もう大変でしたよ。あんなひどいこと初めてですよ。そのあと、ウチらも宮古島に行って、宝山ソネがだめやったから、大正島に行って、仕事してきましたけど、今年は、尖閣行ったのは、この 1 回だけだから。

もう前のように尖閣に行けなくなって大変困っています。向こう行ったら、魚は確実に釣れるし、量は釣れよったから。それで皆口を揃えて言いますよ、今年ほどこの漁場で魚釣ったらいいのか、行く所がなくなると。それに現状では漁場が限られているから、尖閣に行けない分、もう他の所に行ってみても、ホラ、中国サンゴ船が、宝山とか、大九とかで、サンゴを採って漁場を荒らしていますでしょう、あのサンゴ船の操業をやめさせなければ、沖縄近海の漁場は、もうだめになって、魚はいなくなりますから。

そうなると、私ら漁民にとって、これは死活問題ですよ、もう大変な問題ですから。

国に対する要望ですか、ですから、まず第一に、ウチらが今までのように尖閣に行けるようにしてほしいことです。第一に、尖閣で安全で安心して操業できるようにねえ。それと二番目は、沖縄近海の漁場を守ってもらいたい。そのためには中国サンゴ船の操業を取り締まってほしいです。この 2 つを国に対して、強く要望します。

※参考資料：新聞報道記事

尖閣周辺領海に中国漁船 2 隻侵入 漁船に接近し操業妨害

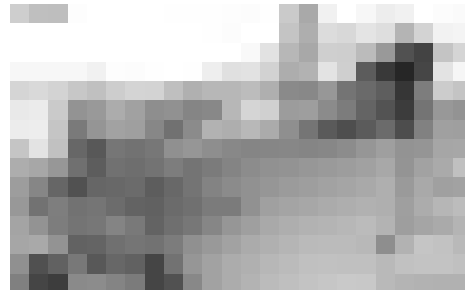
沖縄県・尖閣諸島周辺の領海内で今月 4 日、中国の海洋監視船 2 隻が鹿児島県の漁船 2 隻に 1 対 1 (1852 メートル) にまで接近していたことが 28 日、関係者への取材で分かった。同県漁連は漁の妨害行為として、水産庁に安全な操業ができるよう要望書を提出する方針。漁船 2 隻が所属する同県指宿漁協などによると、監視船の接近を受けたのは、高吉丸と栄丸 (ともに 19 トン)。高吉丸の高杉忍船長 (52) によると、4 日正午ごろ、魚釣島西の海上で一本釣り漁をしていた 2 漁船の西側沖に、中国の監視船が確認されたという。監視船が漁船に向かってきたため操業を中止し、近くにいた海上保安庁の巡視船の指示で魚釣島に船を寄せて避難。巡視船が監視船と漁船の間に割って入る形で停泊するなどして保護したが、2 漁船はその後、約 5 時間にわたり避難を続けたという。高杉船長は「年に 1、2 回は中国船を見るが、今回のようにここまで接近してきたのは初めて」と話した。第 11 管区海上保安本部によると同日午前 9 時 25 分ごろ、領海に中国の「海監 46」と「海監 51」が侵入。午後 1 時 40 分ごろに出て行ったという。
【垂水友里香】 (毎日新聞 2013.2.28)

尖閣諸島で操業している県外漁船(1)

鹿児島船籍マチ釣船



みつ丸(船長：宮崎卓己、19ト)



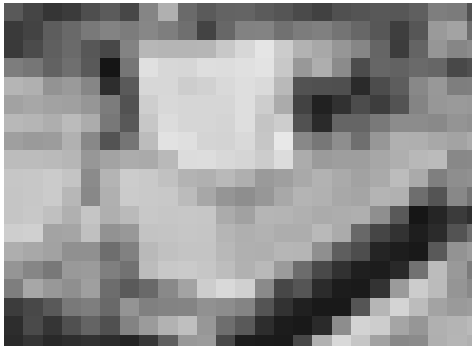
高吉丸(船長：高杉忍、19ト)



栄丸(船長：高橋一雄、19ト)



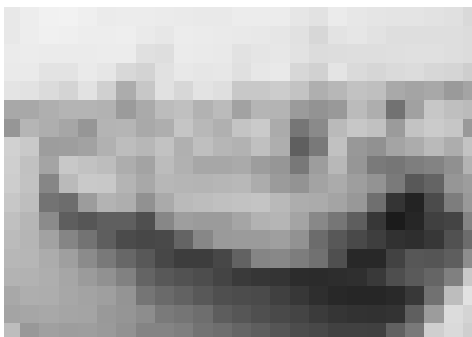
八坂丸(船長：坂元明、19ト)



高治丸 (船長：高田哲司、19ト)



芳栄丸(船長：高木徹、19ト)



第八幸丸(廃船、19ト)



第三めぐみ丸(廃船、19ト)

尖閣諸島で操業している県外漁船(2)

熊本船籍マチ釣船・底延縄船



マチ釣船・福栄丸(船長：野口登美、19ト)



右舷には何台もの釣機が



釣機に撒きエサ袋が付いている



マチ釣船・海栄丸(船長：丸山文博、19ト)



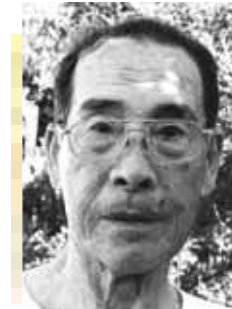
底延縄船・右豊丸(船長：久保一、19ト)



沢山の水揚げ、アール(ハタ類)か

髙原 忠太郎 たけはら ちゅうたろう (池間漁協)

1928年(昭和3年)、宮古島平良池間に生れる。85歳(2013年時点)。
宮古中学校(現宮古高校)を卒業後、代用教員等をし、のち漁業界に
転じる。カツオ節製造工場勤務を経て、池間漁協に専務職で就く。
1954年琉球政府に宮崎県サバ船が招かれたハネ釣の実習に参加、サ
バ漁業に期待していただけに、氏の60年前の実習は記憶は実に鮮明。
サバ漁業にかけた当時の思いと実習のようすを語ってもらった。



宮崎県サバ・ハネ釣船で 実習受ける

沖縄でもサバ漁業ができんかということで、これは何年頃だったかなあ、私が25歳です
から、昭和29年(1954年)頃、58年前ですねえ。その時の琉球政府がサバ釣り漁業を広め
るために宮崎県からねえ、第二共和丸(39ト 船主宮田次平)という船が指導に来ましてね
え、宮古の各漁協から希望者を募って、佐良浜から仲村渠勉さん、池間からは私、平良か
らは豊見山朝一さん、それから水高生が3名位ですねえ、5名位乗りました。

仲村渠勉さんはあとで、琉球水産社に入ってマグロ船銀嶺丸とか、サバ
船琉水丸の船長をしていましたねえ。

この共和丸というサバ釣り船ですが、この船に乗組員もそっくり乗って
きてやったんですよ。その時に参加しまし
たけど。あの時は棒受け網はやらなかった。
ハネ(跳ね)釣でしたねえ。ハネ釣というの
は、1メートル2、30から50センチ位の、短い釣
竿で、灯りで、集魚灯で、浮かしたサバを
引っ掛けるようにして釣るんですよ。この
共和丸に乗って、このサバのハネ釣の実習
を受けて、訓練して、これをできるだけ皆
に普及させようということですねえ。カツオ
漁は6月から夏にかけてでしょう。カツオ
船は冬の間は休業していますからねえ、そ
の冬の時期に、この漁ではできませんからねえ。



宮田次平さんと宮崎県のサバ釣り船・第二共和丸
〔「油津漁業協同組合創立七十年史1972」より〕

それで当時の琉球政府はサバ釣り漁業を広めるため、当時あっちこちでサバのハネ釣
の講習会が催されてましたねえ。石垣、波照間や鳩間でも、もう宮古ではもう一回だけ
です。この共和丸での実習を受けただけです。もうサバ釣り漁業を普及しようか、どうかと
いうことで試験的にやったものですから。

宮古でエサ採り アカオから 漁場へ

共和丸はねえ、最初は白川湾に行って、棒受けでエサを採って、もうサバ釣に行こうと

いう計画で、そこで集魚灯を試験的にやって、棒受けもしたんですよ。そしたらエサのイワシがあんまり採れなくてねえ、明け方に出て、陽が上がって10時頃だったかなあ、尖閣列島の北側のアカオ(大正島、赤尾嶼)に着いて、そこで一本釣りをやって。もう試験ですから、30分から1時間位かなあ、底釣りをして。共和丸はサバ船ですが、何のためにアカオで底魚の一本釣りの試験をやったのか分かりません。食料のためではなく、漁場探索でなかったかなあ。それからサバ漁場に向かったんです。(漁場地図を示しながら) これアカオですねえ、これから見ると漁場は、これから真っ直ぐ北側に行ったんじゃないかなあ。

この線からこうしてこの辺に出たんでしょなあ。尖閣列島のずっと上の方、この辺だったんじゃないか、アカオからもう7時間位、6時間以上出たはずですから。

漁場 大都会並み明るい 漁船同士 連絡とり合う

その時はもうあれですよ。本土でもサバ釣り漁業の一番盛んな時でしたから、もう漁場は6時間位前からはっきり見えましてよ、電灯の灯が、サバ釣り漁船の灯がねえ。

私らが行った時は、5月でしたが、夜はもう霧が強かったねえ、40ト足らずの船だからもう船の長さは30メートル足らなんですねえ。25、6メートルですが、表に立ったら艫の人は見えんです。東シナ海は、漁場は、その様な時だったねえ。して、また、漁場はもうやがて着くよと言うもんだから、もう明るく見えるさあ、赤く。だけど6時間位かかるんだよ、船で、見えてから漁場に行くのに。サバ船は集魚灯全部点けているもんだから、もう漁場に近づいたら昼間見たいに明るい、大都会の灯位が見えるんですよ。

内地のサバ船は、その時はそこを漁場にしていますから、沢山いましたよ。もう10艘位かねえ、いや、もっとおったかもしれない。そしてねえ、その時は宮崎県の船は、漁協の船同士で連絡をとっているんですよ、無線か、電話で。で、どこにおいて、今魚はどうなっていると、連絡しているんですねえ。食いつきが悪いとか、悪いとか、で、魚群が少ない時には、別のいい漁場に全部集まるわけさあ。そうしておったねえ。お互いに漁船同士が連絡をとりあっていたですよ。

魚探を使い 集魚灯で サバ浮かす

その時には沖縄でも魚探というものはないんですよねえ。昭和29年頃だからねえ、内地の船は魚探から、何から積んでいるわけですよ。もう漁場に着いても最初は魚がどこにいるか分からないから魚探で。魚探でも魚は1匹1匹は見えないわけさあ、その時は全体として黒く映る、魚探を見た時はすごいと思いましたねえ、魚探をまわして、魚がいるということでもう、魚は最初はそこにいるわけだから、これを夜ねえ、集魚灯でサバを浮かせて、釣るんですよ、網じゃなくて、もう釣竿で1匹1匹を、それを浮かして釣るんですよ。

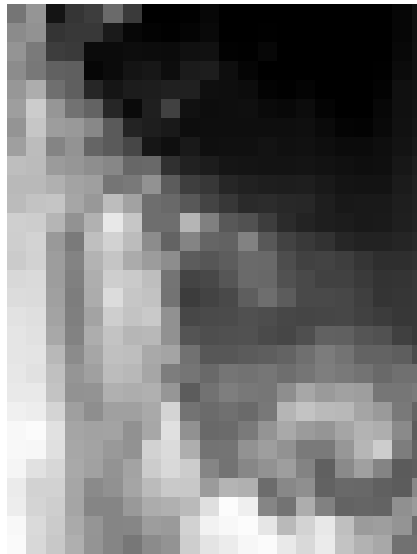
エサはあまり撒かないが、上に来てから釣っていたねえ。

集魚灯は上から照らすのと、海中に入れるものもあるんです、入れながらもやるんですよ、底にいるサバを浮上させるために、浮上させてからは海中に入れるものはあんまり深

くないでしょうから、集魚灯はもう夜通しずっと使っていた。夜通しといっても、朝方が食いつきは一番よかったねえ、夜明け前が。夕方から集魚灯を点けて魚群を探して、釣り始めるんですが、やっぱり食いつきは夜明け前がよかった。

跳ねて船上に落ちる ハネ釣で

漁法は、短い釣竿を使うハネ釣です、餌はサバを釣ってねえ、サバの皮の方を薄く切つて、幅1センチ位、長さは3センチ位かねえ、こう斜めにひし形に切っておこしてねえ、それを針に掛けて投げるんです、これを食わすんですよ。そしてガギ(鉤?)というものは、もう1つ、まあ1人1つずつ道具持っていて、浮いたサバを海面を叩くように、こうして引っ掛けるように釣り上げて、このカギで掛けて、サバは船内に落ちるようになっている。(図示しながら)、こうしてここに針があってここにエサが掛かっているわけさあなあ。魚はこれ位まで食っているわけだから、その時にガギはねえ、こうして、こういう格好で、これがこの針先まで来るわけねえ、引っ張ってガギでやるもんだから、その拍子に魚の掛かっている所は弱いからすぐ跳ねるんですよ。跳ねて針から離れて、すぐ船の上に落ちるわけだから、それで跳ね釣りというですよ。釣竿は片一方で使います。もう右手を使う人は、大体右側にもう席に座る人も、もう右手の方ですねえ。あげる人は釣ってきてすぐ縄を鉤でかけてぱっとしたら離れる様になっているから、針にかかって、そしてすぐやるようになっているから、それはまた左舷と右とは違うでしょうなあ、釣手が。両舷に大漁した時は釣る時もあったでしょうけど、私達は片舷だけでしたねえ。



現在のハネ釣光景(「ウェブサイト」より)

すぐ馴れた ハネ釣り

共和丸の乗組員は30名位おったんじゃないかなあ。殆んどが宮崎の人ですよ。もう20代か30代の方が、若い人が多かったですね。船長さんがねえ、漁労長ですかねえ、水産講習所出の甲種の船長でねえ、いい方でねえ、名前は忘れましたが。船員に船の中に向いては話をするなど、海の方に向いて雑談でも何でもしなさいと、よく指導しておったんですよ、またその時は天測は六分儀でやっておりましたんで、時間になったら若い者集めてねえ、六分儀の測定方法も指導しておりました。非常に指導にも熱心な船長でしたねえ、40代か、50代の初め頃の方でなかったかねえ。

私達実習生もサバのハネ釣にはすぐ馴れましたねえ。前もって、エサ採りから釣り方から指導を受けていましたので、漁場に着いたらもうその通りやりましたから、

私は艫の方、仲村渠さんと水高の実習生は船首の方でやりましたが、釣りながらエサも時々撒きました、エサ箱を持っていますから、坐っている所の前の方に置いて、時々エサを撒いてやるんですよ。ハネ釣の仕事はあまり難しくないと思いましたねえ。

1 航海 6ト揚げる

第1日目はそんなにはサバは集まらなかったですよ、群れも小さくて、集まりは少なかった。2日目にちょっと群れの大きいのに出会って、それで大漁しました。殆んど2日目に釣ったので、最初の航海で6,000キロ位上げたんですよ。6ト位の漁獲がありました。これが大体1週間位操業しておりましたねえ。

その時は内地から来る船も1週間位おったんじゃないか。

私達は、そこから引き揚げて、沖縄本島に帰って10日位して那覇港に一応入るわけさあ、そこで魚を下ろして、また積み込みもして、風呂も浴びて、もう夕方には漁場に向かったんですよ。もう皆は、陸上で一晩もおらんわけさあ。私らは1航海の実習でしたから、そこで下りて、那覇から宮古に帰って来きましたけどねえ。実習をひと月位やったんですが、皆はこれからは何ヶ月もやらんといかんでしょう。共和丸の皆さんは、もうよくも頑張っているなあと思いましたねえ(笑い)。

サバ釣は夜だけの仕事ですよ、昼は寝ています。アンカー下ろして寝ているわけよ。夕方からは集魚灯を点けて、仕事を始めるんですがねえ。その時は錨巻き上げ機もないもんだからねえ、もう80尋位ですから120メートル位の水深ですよ。アンカーは昼は下ろして、休んでいるから、もうその若い連中が全部でアンカーを、手繰りで上げるんですよ。すごいなあと思ったねえ。

デッキ 波被って 内地の漁師 よく働くなあ

その時はもう5月ですから、季節風はまだまだあるんですがねえ、共和丸のデッキは殆んど水ですよ、海水、波を被っているんですよ。作業服の上から雨具を着けていますがねえ、で、食事時間になったら、もう船をストップして飯を食んです。その位波も荒いの、もう、皆一生懸命だったからねえ。頑張るなあと思った(笑い)。

してまた、漁場でもさあ、どこでもそうなんです、若い者はミヨシの方にずっと並んで座るんですがねえ、それにサバは柔らかいもんだから、釣ったら皆氷打ちするんですよ、水氷で、潮も混ぜて、その作業も全部、前の人の青年、若い連中はねえ、もう一生懸命でしたねえ。文句も言わないでやるもんだからねえ、ああ、よくやるなあと思ったんだ(笑い)。私も未だ若かったから、25歳でしたからねえ。一緒にやるんですが、大変きつかったですねえ、こんなにきつい仕事を、もう皆文句も不平不満も言わないもんだから、よく働くなあと思ったねえ。しかも5月ならいいですけど、冬場ならもっと寒いんですよ。もう、内地の漁師はよく働くなあと思いましたねえ(笑い)。

池間からサバ釣り試験船 成功せず

私達が帰ったひと月後位に、池間から晃生丸(船主武富セイイチ 30 ト)がサバ釣りに試験的に出たんですが、あんまり漁はなかったようです。釣りの道具は準備したんですが、ハネ釣りの経験はなかったはずです。乗組員は 30 名位乗ったんじゃないですか。

その頃の宮古の漁業は、殆んどが日帰りの沿岸漁ですからねえ、泊まっても 1 晩位です。

サバ釣りは夜の仕事だし、宮古の漁業で夜の仕事はないですからねえ、それに 1 週間、10 日間も泊るとか、また、跳ね釣りの漁法も初めてだし、また漁具の装備の問題もありますねえ、晃生丸はカツオ船ですから、魚探を持っていたとしても水深の測量だけの魚探ですから、魚影はある程度映るんですが、宮崎の漁船の持っている魚群を捉えるとかねえ、そういう魚探じゃなかったはずですよ。サバ釣りは底にいる魚群を見つけて浮上させるんですから、やっぱり魚探というものは大きな力になります。晃生丸は、1 航海だけして、もう漁はあまり芳しくなくて、もうそれでやめたですねえ。

サバ釣り漁業 普及できず残念

私は、宮古ではサバ漁業は初めてのものですから、普及しようと参加したんですよ。

サバ船に乗って見て、これができたらいいなあと、ホント思いましたよ。尖閣の上の方ですか、向こうにある漁場にはもう内地のサバ船が 10 何艘も来て操業していましたねえ。

もう 1 晩で皆何千キロも釣れるんだから、跳ね釣りだけで。もう羨ましかったですねえ、宮古でそれができないなら勿体ない話ですよねえ。

あとで、サバの販路の問題が出てきましたがねえ、あの時は考えなかったですねえ。

沖縄本島にもって行けば、売れる位に思っていましたから。とにかく、宮古に新しい漁業ということで、冬にカツオ漁を休んでいる時に、サバ漁業ができれば周年操業ができるということでねえ、それで私もサバ釣り漁業を普及させようと思って参加したわけですから。当時の琉球政府も、漁協も一生懸命でした、普及できなくて、残念ですねえ。 (了)

※参考資料 「琉球政府」行政資料

・・ 昨年の 1953 年頃から日本で盛んに行われ好成績を上げている鯖はね釣漁業が、この年の 3 月 18 日から政府で招聘した 3 人の技術者によって、技術講習会が各群島で行われた。その翌月の 4 月は宮古漁連が招聘した宮崎県の鯖はね釣船共和丸の大漁により鯖の好漁場が近海にあるのと、その有望性が実証された。

更に 7 月には長崎県の試験船鶴丸が来航し、琉球水産研究所と共同調査が行われ、それにより好漁場が多くある事が確認された。それで政府でも早速これが施設費に対して相当額の補助金を交付して奨励した。そして 7 月には糸満の金福丸が鯖延縄漁業から鯖はね釣りに業態転換し、鯖はね釣漁業の第 1 号として好成績を上げている。

(「水産業戦後十年の歩み 琉球政府 1955」より)

金城 清信 きんじょう きよのぶ (糸満漁協)

1936年(昭和11年)、糸満町に生まれる。77歳(2013年時)。

1955年19~21歳の3ヵ年、尖閣諸島にダツ追込み、1957年21~22歳の2ヵ年間は、東シナ海でサバ漁に従事する。サバ漁業は、琉球水産社が基幹漁業として力を注いでおり、糸満漁船がサバ漁業に参入していたことは殆んど知られていない。氏は糸満船ニッシン丸に最年少22で乗り込みサバ棒受け網漁に行ったという。一緒にサバ漁に行った先輩達は殆んど亡くなっているという。氏は当時の貴重なサバ漁業を体験をした数少ない人である。



22歳から2ヵ年 糸満のサバ船乗る

サバ船乗った時は22歳、尖閣列島でシジャー(ダツ)獲りして、少し遊んでからサバ船に乗った。これは姉さんの夫がサバ船歩いていたんですよ。だからあの人が辞めるといったから、ウチの代わりにお前乗りなさいといって、乗ったのが、琉球水産の船じゃない、糸満の組合長した上原信繁さんの船ですよ。120トンの大きい船で、ニッシン丸?だったかなあ。

あの時は丁度B円(米軍票紙幣)とドルの切り替えの時だった。22の時はB円、23の時はドルだったです。だから、あれ覚えているから22と23の年ですよ。(※注 1958年9月16日:米軍票B円から米ドルへ通貨切り替える)。

ニッシン丸は魚を下ろす場合は那覇港に行ったんです。軍港じゃなくて、琉球水産(社)のミーグスク(三重城)の所、トウ(そう)、そこで仕事をやったんですよ。あの時、琉球水産は、サバ船を何隻も持っていて、相当盛んにやっていました。ウチの兄なんかは、その琉水5号に乗っていたから、5号ははっきり憶えているけど、琉水13号もあったはずですよ。あれ100ト位でしたかねえ。

糸満から、ハワイに、カツオ船とか、マグロ船の仕事があるとかで、送った人がいたでしょう。平安座の石川文太郎さんねえ、あの人が琉水5号の漁労長だったんです。

サバは1960年頃になったら全く獲れなくなったんですか。それは知らなかったですねえ。ウチはサバは2ヵ年位してすぐ辞めて、マグロ船に乗りましたから。だから、そのあと信繁さんのニッシン丸がどうなったか、分かりませんねえ。那覇の泊港に行って、垣花の与那嶺三郎さん、あの入なんかのマグロ船、第一幸丸に12ヵ年乗っていたですよ。



上原信繁糸満漁協組合長がサバ船所有、これに乗船してサバ漁した。

右舷で 集魚灯で魚集め 左舷に 棒受け網 準備

ニッシン丸は、琉球水産があった三重城から出て、久米島の北側を通過して、東シナ海でやりました。サバは棒受けともいう袋網でした。

(棒受け網図で説明しながら)、船がこうあるさあ、こっちは艫、こっちは表、ここは電気は点けない。最初、魚は集めるのは、こっち右舷ですよ。ここは電気(集魚灯)点けて、ト

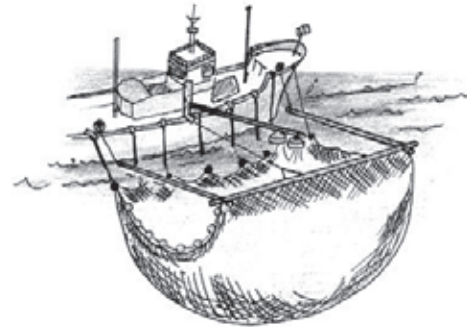
バシグワー(撒きエサ)を撒いて、魚を集める。魚が集まる間に、皆釣りして遊んでいますよ(笑い)。この袋網(棒受け網の意)は、反対側の左舷に入れます。魚が右舷に集まった時分に、艫から次第次第に、順番に電気は消して行って、魚を船の表まで寄せて来るんですよ。

ウチ達は、エサをニープ(柄杓)で、前に、前にかけて行って、表から左舷の方に、魚を段々廻して行きますよ。

エサですか、うん、エサはミンチ、ミンチをタライに入れて細かくボロボロにして、船のサカキとリョウトイ、真ん中?にエサ置いてあるから、これをニープ(柄杓)で、少しずつエサをかけたり、かけたりして。

この時は1月、2月の冬の時期だから、もう東シナ海の大変寒いです。ヒーサ(寒さ)ガタガタだからねえ(笑い)。エサ撒きする時なんかは、靴下は3つ位はかないと、足が切れるみたいに寒くて、仕事できなかつた。こうしてエサかけて、魚を左舷に廻して行きました。

左舷にはもう袋網を入れているから。だけど網は普段は真っ直ぐ下に降ろされてある、真っ直ぐ立っているんですよ。オモリで船の下に降ろして、ウシキヤーマ(押込んでいる)。この網の浮きは、大きなマータク(真竹)一本でやっていた。こっちがそのマータクの浮きですよ。漁が始まれば、ワイヤーでオモリを揚げて、浮きも揚げて、こんな袋網の形にして、魚全部を、この網の中に一気に移動させますから。



棒受け網 (「ウェブサイト」より)

左舷に網入れて 魚引き寄せ 網を揚げる

魚が網近くに廻ってきたら、あのミンチの大きいのを投げて、それから電気(誘魚灯)をパットと点けたら、すぐ集まって来ますよ。網のマストのここに、何メートルかなあ、3メートル位か、もっとあったかな、ここの電気が2つパットと点くから、魚はもうゴールナイキーサー(ドンドン来るよ)。この時、真ん中に、網の中に、塊りのエサ投げる。網の中にエサ入れるから、もうこれ食べようと魚がドット集まるから。

このミンチですか 何のミンチか分からんけど、イワシかなあ。

これを機械ミンチにした固まり、あれを軟らかくして、魚集める時には、潮入れて、軟らかくしてから、柄杓で撒いて。この網の中にも固いのを軟らかくしたらすぐ溶けてなくなるから、一所に投げて、こっちに集めるわけよ。

この上に魚がいっぱい集まったきたら、漁労長が「揚げなさい」と合図したら、網揚げますよ。網は全部、ウィンチでワイヤーで揚げる。網揚げたら、ひと網でサバは相当揚がりました、沢山獲れましたから。

大きなタモで 魚掬って ダンプルに入れる

サバは相当揚がりますから、あの時の網から魚掬うタモは、デージマガー(とても大きい)でしたよ、ひとタモで 500 斤は入ったはず。あれが 23 ばかりあった。500 斤の 10 で 5 千斤から 6 千斤は入ったかもしれん。だから、タモで掬ったら、もう人間が揚げることでできない。ハンマヨー(感嘆詞 とんでもない!!)、ジョーイ(とても)動かすことはできん。

ウインチでしか揚げられない、だから、大きなタモを袋網に入れて、魚をいっぱい掬ってから、ダンブル(魚槽)んかい、ゴーナイスルバーヨー(ドンドン入れていくさあ)。

あとから上に、コマキ氷は入れていって。

ニッシン丸 総勢 40 名 1 月から 3 月 冬場漁した

上原信繁さんのニッシン丸には 40 人位乗っていた。ウチが 22 で一番若い、皆 3、40 歳代、20 位上の人達が乗っていた。だから寒い所でエサ撒きは、もうウチが一番歳下だから、お前エサを撒いてこいと(笑い)。また渡名喜の人が船長だったから、渡名喜の人が多かった、糸満からはウチと 2、3 名、漁労長は憶えていない。はっきり分らない。

サバですか、うん、サバは相当獲れましたよ、獲れる時は、すぐ 3、4 日位で満船しよったんですよ。ひと網に 500 斤位のタモが、22、3 個も、入る時もあつたんですよ。

500 斤×23 で 11,500 斤だから、ひと網で約 7 トンかなあ??。

だけど、大漁しない時は 1 週間も、10 日もかかりよつたですよ。

サバですか、糸満には下ろさないですよ。三重城に、琉球水産社の所に、下ろしました。どこに売ったのか、全部内地に持っていたかどうかは分かりません。ウチはまだ 22 で子供だったから。漁場ですか、漁場は三重城から 1 昼夜半位だったかなあ、36 時間位、久米島くっついて行って、久米島からコース測って、北西の方向走らして、東シナ海に上る、百尋線のずっと上側、奥ですよ。季節は冬だから、東シナ海は靴下も 3 つ位はかないと寒いですよ。新正の頃だったかなあ、冬、真冬よ、手足切れるようにして、1 月から 3 月の 3 ヶ月位はやったかなあ。朝船を掃除して洗ってから、ご飯食べたあとお椀を洗うと(笑い)、樽に水溜めるでしょう。一眠りして起きて、茶碗洗おうと、手を入れたら、もう氷水になって、手は入れられない位だったですよ。だからエサ撒きする時には、靴下は 3 つ位はかないとできない。一番歳下だから、お前出てエサ撒いてこいと(笑い)、もうその時分は上の人には一言も文句は言えないから、何もかも「ハイハイ」してやりよつた。

内地船がいっぱい 跳ね釣り

東シナ海の漁場に行ったら、もう内地船はいっぱいでした。全部電気がいっぱいだから、どこに人が入っていいか分からない位だった。そんなに内地船が沢山いましたよ。何隻位ですかって、ホンマヨー(感嘆詞)、これ電気見たら、もう何 10 隻ですよ。昼みたいに明るくなって クニみたいに、ザーと電気点いて、だけど、内地船は釣りばかり、ウチらみたいに網使ったら、網入れて、大量に獲れたら魚が売れない、魚を売っては食べていけ

ないからと言っていた。だから網使うのは沖縄ばかり。

釣ったら鮮度もいいし、網では全部上から押されて傷むこともないから、鮮魚用にはいいから。あちはサバは幾らでもいる。釣るのはヒーチェーンチ（引くだけだからねえ）ヤカラヤー、あれは疑似餌ねえ、あれでもどんなに釣れるますから、オナーグワークンジャーニョー（結んで、投げると）、すぐグワサナイョー（いっぱい集まっているのが）見えるさあ、ザァーと上なり下なりしていたら、もう口からも、どこでもかかってくるから、ジュー（尻尾）からマーンタイ（あっちこっち）ヒッカキラリヤーニ（引っ掛かって）、チャーバンナイ、チャーバンナイ、ドゥヤクトウ（ドンドン、ドンドン、ひっきりなしだから）、こんなに獲れるんですよ（笑い）。



写真は「魚釣島近海で魚群探索中の日本サバ棒受網漁船」とあり、1964年には棒受け網で操業していたことが分かる。（「1964.1965年度事業報告書 琉球水産研究所」より）

満船した時 軍艦マーチ鳴らして 入港

獲る時は、満船した場合は、一番旗、真ん中にして 軍艦マーチ鳴らしてイッチクーセー（入港してきたよ）（笑い）。ハンマヨー（笑い）。はい、もう軍艦マーチをスピーカーで大きく鳴らして（笑い）。一番表と真ん中、それに艫に、大漁旗三本を揚げて、勇ましく軍艦マーチ鳴らして入ってきよったですよ。その時は配当ですか、相当もらったんじゃないですか（笑い）。もう魚は満船して、大漁しているからねえ、配当もいっぱい貰ったら最高に上等ですよ、そうですねえ、大漁する場合は5、6日、60ドル位はあった。120トンの船いっぱいでしょう。これのいっぱい積んで来よったから。だけど、そのあと乗ったマグロ船には敵いませんでしたよ。あの第一幸丸からは、相当儲けましたよ。（了）

・ ・ 以下は「1-3、糸満漁協、与那原・西原漁協」の項に掲載

仲松 弥盛 なかまつ やせい (琉球水産株式会社)

1929年(昭和4年)、那覇市に生まれる。84歳(2013年時)。

1951年、琉球水産株式会社(現リウスイ社)の創設に伴い、長嶺彦昌琉球水産連合会長に連れられて、22歳で入社。総務部部长、専務取締役を歴任し、73歳で退職、50年間琉水社と歩む。1950年代半ば、尖閣諸島にサバ漁場が発見され、琉水社は、「沖縄に大衆魚をめざして」とサバ漁業に乗り出し、大きく期待されたが撤退を余儀なくする。氏にこの顛末を話していただいた。



沖縄に大衆魚をめざして、大きく期待されたサバ漁業 琉球水産社の取り組みの動機と顛末を語る

琉球水産社、戦後沖縄の水産業 リード

— 琉球水産社は、全琉組織の琉球水産連合会を母体に設立され、冷凍冷蔵業、製氷業、遠洋マグロ漁業を行い、戦後沖縄の水産業をリードしてきたと聞いていますが。

仲松：琉水(社)は、終戦直後の1951年11月、いわば琉球水産振興の推進母体として設立された会社ですよ、(1957年度版「沖縄写真案内」の琉球水産株式会社の紹介を手にして)、これは米軍が造った冷凍庫なんです。ガリオア資金で造られて、アメリカ民政府が経営していたんですが、長嶺彦昌さんが会社を設立しまして、これを払い下げしてもらったんですよ。東洋一と言われた冷凍庫です。これは琉水の銀嶺丸と大鵬丸で、150トンのガリオア資金で造られた150トンのマグロ船です。民政府が手を入れて、日本の一流造船所で造った立派な船でした。沖縄で当時は15トンから2、30トンの船で近海マグロをやっておったですよ。長嶺彦昌さんのパイオニア精神で以って、琉水はこの2隻で遠洋マグロ漁業を始めたわけです。南方セレーブス方面まで出漁して。これが戦後沖縄の遠洋マグロ業の先駆けですが。長嶺社長は、こんな考えもあって、サバ漁業を仕掛けたはずですよ。



那覇市三重城にあった琉球水産社
(1957年「沖縄写真案内」より)

大衆魚として、サバ漁業 華々しくスタート

— サバ漁業に進出したきっかけは何ですか。当時の新聞を見ると、李ラインで追われたものだから、本土船が南下し、尖閣諸島、魚釣島辺りに来て、盛んに操業してますねえ。

仲松：そうです。それと李ラインとは関係なくてねえ。長嶺彦昌社長がサバ漁業仕掛けたのは、大衆魚として沖縄でも獲って売れるんじゃないかとやったんですよ。これまで沖縄では大衆魚というのがない。本土でいえばサンマとか、ニシンとか、沖縄にはそんな大

衆魚がないですねえ、サンマとか、ニシンはその時季なると大量に獲れますから、もう食べきれない位、余ったのは肥料するから、沖縄にしたら勿体ない話ですよ。だから値段も安いし、美味しい魚だから、皆の食卓をにぎわしている。長嶺社長は、尖閣列島付近で、大量にサバが獲れるなら、沖縄の大衆魚になるんじゃないかとやったんですよ。

それで、1955年には、華々しく大衆魚をめざしてと 沖縄でサバ漁業を本格的にはじめたんですよ(笑い)。沖縄の水産史上にとって画期的であると、相当期待もされました。

(当時の漁船名簿を指して)、さっき話したこの大鵬丸と銀嶺丸は遠洋マグロ船です。第2 琉水丸、第3 琉水丸は近海マグロ船ですが、併用してサバ船とかにも使ったわけですよ。

この第5 琉水丸、第11 琉水丸はマグロ船、やっぱりこれもサバ船にも使いました。米秀吉さんや石川文太郎さん、登川史郎さんですか、あの人達が船長、漁労長をやっていましたねえ。この光洋丸は、これは光洋水産から琉水が買った船で30ト級、この銀福丸、申琉丸も30ト級で、これらは殆んど近海マグロです。ウチのサバ船

は、最初は第1 琉水丸、第3 琉水丸、第5 琉水丸の3隻で、サバのハネ釣りをはじめました。



琉水社の広告「新しい大衆さばの生産に活躍する本社サバ船」とあり、サバ漁業へ賭ける意気込は大きい。(1958年「琉球商工名鑑」より)

米国民政府高官ら サバ水揚げ 視察にも来た

— 沖縄の大衆魚を目指してと、サバ漁業に進出したわけですねえ。当時琉球政府はサバ漁業を普及させたいと、いろいろ施策しています。この資料見ると、「水産物移入超過は1億5千万円(軍票B円)」ですから、サバ漁業が成功したら素晴らしいですねえ。

仲松: そうです。沖縄経済に大きなプラスになりますから。この写真はサバ漁業を初めた頃に、アメリカ民政府のバージャー首席民政官が視察にきた時のものです。民政府は沖縄の漁業振興策に力を入れておったですよ。琉水のサバ漁業には関心を持ち、期待していたんじゃないですかねえ。民政官辺りが、船が入りますとねえ、水揚げするのにこうしてわざわざ視察に来たりしました。



琉水社の漁況を視察するバージャー首席民政官、説明しているのは長嶺社長 (1957年「沖縄写真案内」より)

ハネ釣、採算とれない、棒受け網に転換

— 琉球政府は、宮古・八重山では、カツオ釣りは夏場しかない、冬場にサバ釣りができれば周年操業できると、講習会とか実習とかして、サバ漁業を熱心に普及させていましたが、宮古の池間、佐良浜でやってみたら、うまく行かなかったようです。

仲松：やっぱり、最初はハネ釣でしょう、琉水も 30 ト級の船で仕掛けたんですよ。

ところがとてもじゃないが採算とれない、やっぱりうまく行かなかったんです。同じ漁場で、同じで 30 ト級の船で、本土の漁船と競合しながらやっているものですから、なかなかうまく行かない、結局採算が採れないわけです。私共は会社でしたので、どうしたらいいのかということで、本土から技術者を呼びまして、静岡の清水辺りから技術者を導入しましてねえ、そして船も新造したり、買取しましてねえ。ハネ釣りから、棒受けという網で、サバを獲る漁業を始めたわけです。そしたらうまく行って、沢山獲れたんですよ

棒受けで、サバは 100 万斤以上 沢山獲れた

— (下表の「水揚げ量の推移」をみて)、これが琉球水産社の水揚げ量ですか、確かにそうですね。棒受けに替えたあからは、毎年増えているのが分かりますねえ。

琉球水産社の水揚げ量の推移			単位：千斤	
年度	近海マグロ	遠洋マグロ	サバ	マチ釣
1955	記載なし	記載なし	数次に亘り試験操業	
1956	165 (1.00)	998 (1.00)	67 (1.00)	
1957	284 (1.72)	756 (0.75)	448 (6.69)	
1958	383 (2.32)	809 (0.81)	1,214 (18.12)	40
1959	312 (1.89)	423 (0.42)	1,699 (25.36)	97
1960	1960 年度以降も水揚げ量記載なし			

(沖縄商工名鑑 1955～60 年度版より作成)

仲松：サバは 1955 年度は 2 隻の船で試験操業して、1956 年度(1955 年 4 月～56 年 3 月 以下同じ)から水揚げしてます。この年は 6 万 7 千斤、翌 57 年度は 44 万 8 千斤に増えています。これでは、とても採算取れないからということで、ハネ釣から棒受け網に替えました。そしたら 58 年度は、簡単に 100 万台を突破して 121 万 4 千斤に揚がりました。2 年間で約 18 倍に増加しました。これまで琉水の花形だった



サバの水揚げ光景 (1957 年「沖縄写真案内」より)

マグロ、近海マグロや遠洋マグロの水揚げを見るとそんなに変わっていませんよ。

サバはマグロを抜いて水揚げのトップになっています。

1959年度は、トントン増えて169万9千斤も揚がって、56年度の25倍です。

サバはもう沢山獲れましたから、獲り過ぎたほどです。

沖縄 生サバ食べない、本土市場へも コスト高

— こんなに獲れたわけですから、沖縄の大衆魚を目指したサバ漁業は成功ですねえ。

仲松：確かに沢山獲れました。だけどあんなに獲れても、沖縄では売れなかったです。沖縄ではサバ缶は食べますが、生サバは食べない。今はどうか知りませんが、あの当時は、生サバにあまり馴染みがないから、食べない、食べる習慣がなかったです。でも私達が生サバを市場に出したから、食べ出して、少し食べるようになった頃には、琉水はサバ獲るのはもう辞めていましたから(笑い)。だから、こんなに獲れても、本土でのニシンやサンマのような大衆魚にならなかったですよ、沖縄ではねえ(笑い)。

それに売れたとしても消費市場が小さい。小さいもんだから、採算は取れません。だからといって本土に持って行っても、あつちはすでに市場に出回って値段が安いです。漁場から直行して清水や焼津、鹿児島とかに下ろしても、船員が皆沖縄の人でしょう、またこっちに帰って仕込みするから、これがコスト高になって、儲けなんかない。

サバは沖縄からは水揚げしてはととても引き合わなかった。沖縄でサバ漁業をやれば、いろんな問題がありましたねえ。結局、琉球水産がやめた1つの理由は、サバは獲れても消費できないわけですよ。地元で消費するものは数が知れている。漁連の泊市場に水揚げしても、叩も捌けません。だから、沖縄の大衆魚を目指したサバ漁業でしたが、難しいかったですよ。それで急に立ち消えになりましたねえ。

魚群まばら 獲れなくなって、サバ漁業 一気に辞める、

— この「琉球水産社の水揚げ量の推移」をみると、1960年度以降はありませんねえ。

それで、琉球水産社は、サバ漁業を一気にやめたんですか。

仲松：この消費市場の問題もありますが、一番の大きな理由は、サバがあんまり獲れなくなったからです、サバの全盛期には、とにかく遠洋漁業の2隻を除いては全部サバ船に切り替えてやりましたよ。また130トンの第13琉水丸、150トンの第15琉水丸の2隻を新造するなどして、サバ漁業に相当力を入れてましたが、それが一気に獲れなくなってしまって、それで辞めたんですよ。魚群がまばらになったということで、不漁になって、それで辞めたのは事実です。だけど、サバがまばらにならず、ずっと獲れ続けていたとしても、沖縄で捌ける量はたかが知れてますよ(笑い)。だから、この消費の問題を解決しない限り、沖縄では、サバ漁業を続けることは難しいですねえ。それで、琉水は、どうにかサバを消費させようと、缶詰にして食べさせようと、いろいろやってみました。

サバ缶も試みる コスト高で、続かず辞める

— 沖縄では、当時は生サバ食べない、その代わり、サバ缶は相当食べてました。家にはいつも買い置きの子バ缶、水煮と味付けがあつて、これをおかずにして食べました。

仲松：そうです。沖縄では生サバより缶詰ですね。サバの缶詰は相当消費されてましたから。さっきの資料に「水産物移入超過は1億五千万円(軍票B円)である。魚缶だけで半数に達し、うちサバ缶は全魚缶の30%、5千万円を占めている。尖閣諸島等の豊富なサバ漁場を有してしながら、サバ缶は本土から移入している」とありますねえ、確かにその通りですよ。それで琉水はそのサバ缶詰をやりました。長嶺社長は熱心に取り組んでいましたから。琉球食品という缶詰工場を持っていて、そこで缶詰をやりましたよ。

サバの缶詰はそんなに技術を要しません。シーマー缶詰造る機械が当時しっかりしていたですから。詰めて、ポットと蓋して、所謂真空パックする、味付けは大体は水煮の方でやっていました。だから、缶詰を造る機械を入れてしまえば、あとは女工を使って、加工処理だけでしたから。だけど、製缶工場が沖縄にないから、缶は本土から取り寄せまで、会社でも一応サバ缶を作ってみたら。コスト高で採算が取れなかったです。沖縄で販売してみたら、高くついて売れなかったです。大手の大洋漁業とかの本土産と競争ですから、とてもじゃないが太刀打ちができなかった(笑い)。だから結局やめましたですねえ。

長嶺彦昌社長 強列な個性、先見性で リード

— このサバ缶が成功していたら素晴らしかったですねえ。尖閣諸島のサバ漁業でいつて、本土から移入しているサバ缶5千万円(軍票B円)分が賄えたわけですから。

長嶺彦昌さんは、沖縄の大衆魚を目指して熱心に取り組んでおられたんですね。

仲松：そうです、この長嶺彦昌社長は熱心でしたよ。琉球水産の創業者なんだけど、終戦後の沖縄の漁業再建、振興に尽くした人ですよ。強烈な個性と、先見性で、漁業界をリードしていました。沖縄の遠洋マグロ漁業の創始者です。また沖縄の大衆魚を目指して、サバ漁業にも始めて、また、この人がサバの缶詰工場も造ったんですよ。琉球食品系KKという琉水の子会社を。琉球食品KKは、三重城の琉水の一部に食品工場がありました、大体坪数からすると2千坪位でしたからねえ。うまく行かなくて、あとでパイン工場に切り替えしました。



長嶺彦昌社長

本部町から生果のパインアップルを集荷してきて、那覇でパイン缶を作ったんです。

長嶺彦昌さんは、琉球水産組合連合会長した時に、琉水社を設立して、で、琉水社を辞めたあとは、琉球遠洋鮪漁協会会長とか、琉球新報社の社長などをしてしています。

深海のマチ釣りも、漁業の種類 殆んどやった

— 琉水さんは、マチ釣もやったんですね。

1958年度は4万9千斤、59年度は9万斤が水揚げされていますが。

仲松：そうです、サバ船でねえ、深海一本釣りもやっ
たんですよ。マチ釣りを。やっぱし尖閣付近でやりました。サバ漁場なんかは、魚釣島から上の方ですねえ。そうしたら深海一本釣りも、同じ尖閣付近でできますから。だけど、これは那覇地区の漁業者が小さな船で、一本釣りをしてましたから、琉水は 30 ト級でやって、100 ト級の船ではやらなかったですよ。琉水は、漁業の種類は殆んどやっております。別にサバ船であろうが、マグロ船であろうが、船はラインホーラーとか、縄巻き揚げ機とか、網巻機とかを乗替えるだけでできますから、サバの棒受け網で出るとか、深海一本釣マチ船で行くとか、マグロ漁するとか、いろいろ替えていって仕事していたわけですよ。これも船長、漁労長に工夫させました。30 ト級の船では船長、漁労長は一人でやって、大きな船になると、船長、漁労長別々にして、それともうホントの専門的な漁労を本土から積極的に技術導入をしたりしてやりましたねえ。



マチの水揚げ、ホクホク顔の長嶺社長
(1957 年「沖縄写真案内」より)

船員、先島の人が多かった 漁ないと 最低補償

— 今度は、サバ漁業についてお聞きします。どこの船員が多かったですか。

仲松：沖縄でも尖閣列島辺りに漁業に出るのはねえ、船員は、最初は先島辺り、宮古とか八重山とかから船員を採用していました。沖縄からの人はあまりいなかったですよ。あそこの人達の伝で、また紹介で、そこの島の人 came ましたから、船長が渡名喜の人なら、渡名喜の人が、平安座なら、平安座の人が、誰々から紹介されて came ましたといっねえ。

船長、漁労長はやっぱり、宮古と与那国の人が多かったですねえ。

私は 22 歳から勤めて、辞めた時は 73 でした。約 50 年は勤めてました。琉水丸の船長、漁労長ですねえ、与那覇三郎さん、伊良部英次さん、米秀吉さんなんか、おりましたけど、もう皆殆どで亡くなっています。登川史郎さんも、石川文太郎さんもないですから。皆さんがお元気なら、もっと詳しい話が聞けたはずですがねえ。

— 普通は、那覇地区や糸満辺りの漁業者だと、船主が、船長や漁労長して、船員を雇ってやっていますが、琉水さんのように会社組織だと、いろいろ苦勞したと思いますか。

仲松：苦勞はするんですねえ、やっぱり雇い船長、漁労長ですから一般漁業者と変わりがあってねえ。基本給を決めて、それ以外は歩合制、所謂配当制ですからねえ。水揚げによって収入が、会社側が幾ら、船側が幾らとあった。水揚げによって本人の収入が多くなり、少なくなったりしたんですよ。ですからそんなに損得はなかったですよ。ただ漁があまりないとねえ、最低保障というのを会社から出ましたよ、船員に対しても、それ以外は歩合制でしたねえ。

事故も、大きなトラブルもなし 悩みは 鮮度維持

— 尖閣諸島付近は、相当波が荒くて、遭難とか、事故とかは、なかったですか。

仲松：船の事故はなかったです、全然なかったです。内地船との大きなトラブルもなかったし、一応安全に操業していました。悩みですか、水揚げされたサバは足が速いですよねえ、すぐ傷む。当時の沖縄の船はねえ、急速冷凍というのはなかったですよ。氷蔵して来たんですよ、所謂船倉に氷を入れてねえ、細砕いた氷を入れて潮水を入れてこれに魚を入れて持って来るんです。船そのものの冷凍機が小さいもんだから急速冷凍はできないわけです。ホントは今頃なら、サバは水揚げすると急速冷凍でポワンと凍らしてねえ、そのまま冷凍庫に入れていつまでも、あの当時は、冷蔵で、ゆっくり、ゆっくりですから、鮮度が悪くなるわけです、だからそれを、鮮度悪く傷ませないために船倉に海水を入れて氷を入れて、結局水でこう圧迫しないようにこうして持って来たという感じでした。

領土問題も、何もなし 島に自由に上陸

— 尖閣諸島は、領有権問題でごっちゃしてますが、あの当時はどうでしたか。

仲松：サバ漁は、大体尖閣付近が漁場ですからねえ、東シナ海も勿論あるけどねえ、多くはこう沖縄からそこに行ったんですよ。今は領土問題とかあって、ややこしくなっているが、あれは東シナ海で石油が出るからといって、台湾とか中国が領有権を主張し出したが、あの当時はもう全く尖閣は問題にならないですよねえ。

通常の漁場、サバ漁場です、そこに尖閣列島があつて、それだけのことですよ。

船員の連中もそういった認識でしたから、領土問題とか、何とかは、何にもないですよ。当然、日本のもの、沖縄のものと思っていましたからねえ。何にも支障なかったです。だから船員の連中は尖閣列島に上陸して鳥の卵を採ったり、そこで休んだとか、という話はよく聞いている。当時の乗っていた連中は、昼間は島陰で休んだり、いろいろとやっているわけです。漁の合間には上陸して休んだりしてねえ、もう領土問題もなくて、自由に上陸できましたよ。

— 中国はエカフエの調査で、尖閣諸島近海に石油が出るから、1970年に自分の島だと言いはじめています、その前は自由に上陸できたんですねえ。今日のお話で、琉球水産社のサバ漁業についてよく分かりました。ありがとうございました。

(了)

下里 郁夫 しもごと いくお (伊良部漁協)

1936年(昭和11年)、宮古島伊良部町に生まれる。76歳(2013年時)。琉球水産社のサバ船が、東シナ海で操業したのは60年前である。氏は、22,3歳(1958,9年)に琉水13号に乗船し、サバ漁に従事している。サバがまばらとなり、サバ業が衰退したあとは、社命転船で、マグロ船に転船し、琉水を辞め、県外マグロ船に乗り、大西洋へ出漁する。



のち、氏はマグロ船を2隻所有し、グアムを漁業基地に、マグロ業を営み、伊良部鮪船主組合長を歴任している。現在毎月グアムにある愛船視察を楽しんでいる

小さい頃 宮古から 尖閣へ 相当行っていた

もう60年前の話だが、琉球水産社にいて、琉水13号(第十三琉水丸)で、サバ獲りに行きましたよ、漁場は東シナ海、尖閣から上の方でねえ、2カ年位やりました。あの時はハネ釣じやないですよ、棒受け網で、もういっぱい獲りました。こっちの琉水に来る前ですか、宮古にいましたよ。いろいろ素潜りとかをしていた。自分が小さい頃は、宮古から、相当尖閣列島に行っていました。追込みしにも行きよったよ、グルクン(タカサゴ)の追込みだから、いっぱいの人が、2,30人は行ったはずですよ。あの当時の人ですか、もう皆亡くなっていますねえ。生きていたら100歳位にはなるかなあ、はっきり覚えてないけど、伊佐という人が潜り長かなんかしていた。川満稔さんですか、私より5,6つ上だ、稔さんは尖閣には行っていたが、グルクンはやっていない。稔さんなんかよりか、ずっと先輩の人達がグルクン獲りに行った。ウチもはっきり覚えてないが確か行っていたという話は聞いた。で、また、カツオ漁にもよく行っていたねえ。私の親父はカツオ漁で、尖閣行った。船は何丸かは覚えてない。アホウドリ(カツオドリの意)もよく捕って来ていたよ、卵もよく採ってきて、家族で皆で食べてねえ。あの当時は何もない時代だから美味しかった(笑い)。

21歳 従兄弟に誘われ 飯炊きで 琉水の船に乗る

私が乗った琉水13号は、サバが主だったですよ。サバは、別の船では、11号はやったし、5号もやったいた。残りはやっていないはず。銀嶺丸、銀洋丸はまぐろ船だった。これは私の船員手帳です。あの時に琉球政府が発行していたもので、ここに工務局長の印が押されていますよ。1958年6月9日発行だから、もう60年以上になるねえ。これを見ると、どの船にいつ乗ったのかが分かりますから。(乗船記録をめくりながら) 1番最初乗った時は、1958年6月30日だから、21の時に申琉丸という船に、これは近海でやっていた33トンのマグロ船ですよ。従弟の池原正義さんが船長し

船名	琉申琉丸	航行区域又は従業制限	第三種
総トン数	33.75 トン	機関の種類数量及び公称馬力	焼玉式 / 馬力
船舶所有者の住所及び氏名又は名称	那覇市豊原町二丁目七番 琉球水産株式会社	船長の住所氏名	池原正義
職務	甲種厨師	給料	割配1/10分
昭和十八年に到達する年月日	年 月 日	手当	その他の条件
雇入期間	不定	公年	年月日
雇入年月日及び雇入地	1958年6月30日	那覇	池原正義 印

琉球政府発行の船員手帳、最初にマグロ船「申琉丸」に、1ヶ月間乗ったことが記されている

13号の棒受け網は相当大きかったですよ。横の長さは20メートル、船の長さあったから、これは孟宗竹のこんな大きい竹を、ずっとつないで、つなぎはこんなこんなして、1つでは持たない、3つ4つこれ位束して長くして、20メートルはあった。

普通は右舷からコマセを撒いて、電気を点けて、サバが浮いてきたら、こっちの電気を消して、あっちの電気を点けて、左舷の、あそこに移動させます。網はもう下ろしてあるから、魚をあそこに移動させて、またエサ撒いて、この網の中に入れて、全部入ったところで、網を揚げよった。棒受け網はこんなに大きいから持ち上げる時は、全部機械で揚げますよ。ここにワイヤーが通っているから、ワイヤーで巻き上げてきて、人間である程度は手繰るさあ、実際見ていたら分かります。巻き上げてきたら、次第に人間の手で揚げていって、揚げて、魚がかたまったら、タモで、大きなタモで、300キロ位入るタモで、すくって、ダンブルに入れますから。



写真は、琉水13号での鮮度保持のためのダンブルの氷の取替え作業のようす（上里実 1959）

サバ いっぱい獲れた ひと網 50トン~60トンも

サバはいっぱいいたから、もう大分獲れましたねえ。あの時分は相当おったが、今はどうかなあ。あの時は1回の網で船のいっぱい分も獲れた。多い時は50トンから60トン位は獲れましたよ。13号の乗組員ですか、サバ船には、魚班と機関場があって、分担はエサ投げる人、網揚げる時は分担、20名以上は乗っていた。大体25、6名はいたと思うねえ。

航海はもう1週間前後ですねえ。漁のある時は相当獲れたから、1回、2回で帰って来よったです、もう向こうはその位獲れよったから(笑い)。でもあんまり浮かなかったら、もう4、5日から1週間位。だから水揚げ、仕込みなどありますから、ひと月に大概2、3航海しましたねえ。



船から水揚げしたサバは竹カゴに入れられ、大型冷凍倉庫へ保管される。三重城の琉水社港構内（オキナワグラフ 1958年7月）

サバ船 夜の仕事 朝昼寝て シケたら 魚釣島に避難

サバ船は、夜やる仕事だから、昼間は眠っていますよ。日が暮れる1時間位前から準備して、冬の時期だから、5時、6時にはもう暗くなる場合もあるから、4時、5時位から起きて、ご飯食べて準備して 夜中に作業して、もう夜が明けたら終わって片付けて、水浴び

て、そして休むわけです。昼間、尖閣列島の島陰に休みに行くこともあったですが、ウチ達は島に上陸してない、11号でそういうことした仲間はあまりいないですねえ。

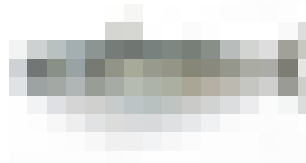
東シナ海は波が荒いですが、シケている場合も、仕事できる時はやりましたよ。どの位の波かといっても、もうできない時はある程度休みますが、できる時はもう精いっぱいやっていました。シケル場合は、尖閣のクバシマ(魚釣島)がありますねえ、あそこに避難しましたよ。大シケになるとシーアンカーを入れ、アンカーを浮かした。船が島に近づき危険になるとエンジンを入れて離れたりしてねえ。台風なんかには遭わんですよ、夏はやらない、冬にしか行かないから。

獲りたてサバ すぐ食べると 中毒する

獲ったのは殆んどがゴマサバです。で、獲りたてのサバをすぐ食べたら中毒しますよ、薄い紙みたい皮は剥かないと中毒するよ。紙よりか薄い、サランラップみたいに薄い皮があるから、あの皮は取って捨てないといかん、市場に出しているのは冷凍したらそんなのは失くなるから、中毒する魚は殆んど冷凍したら中の毒が死んでしまう。船でのサバ料理ですか、サシミも、煮付も、普段食べている料理ですよ。

サバは全部バラ積み、氷と潮水で、バラ積みして持って来ましたねえ。だけど、足が速くて傷みやすいから、操業期間中、毎日一回冷蔵水を、氷入れて取換しましたねえ。

そして水揚げしたら、すぐ会社の冷凍庫に運んでねえ。そのあとどうしていたんですかねえ。市場に鮮魚で出していたのか、内地に送っていたかは分かんず。ウチ達はただ獲ってくるだけでしたから。



ゴマサバ

文太郎さん ペラから網外したこと 憶えていた

11号の漁労長だった石川文太郎さんは、最近亡くなったけど。琉水を辞めたあと、沖縄の漁師連れてハワイに行っている、カツオ船でいっぱい募集して行って。サバ船に乗っていた漁師も何名か、糸満からも、あっちこっちからハワイに連れて行っている。私らと一緒にサバやっていた人も何名か、もう30年前の話だが、未だハワイに残っている人もおるらしいよ。この文太郎さんが沖縄にきた時、何10年ぶりに会いましたよ。

そしたら、1958年頃だから55年前、あの時のことをよく憶えてましたねえ(笑い)。

東シナ海の海、相当シケるからねえ。風向きや潮の加減によって、網が船底に入り込んで、ペラに巻き付くのが多かったですよ、そうなったらもう船は動かん、底に潜ってそれを外さんといかん。だけど冬の海だし、あちは潮の流れが速いし、誰も潜れない。

私は22.3だったが、もうウチしか潜らなかつた。だからよく憶えていたんだ(笑い)。

だけど、網が絡まった場合は、スクリューだけじゃない、エンジン止めないと潜れない。網が巻いているから、ある程度クラッチが動いてもスクリューは動かんさあ。これ外した

時に急に回る場合がある。これで死んだ人もいますよ。クラッチに物が挟んでいたら回らないけど、これが外れたら、急にぐるっと回るから危険だよ。だから、エンジンが止まっているのを確認してから、潜らないと(笑い)。このサバ船の 11 号と石川文太郎さんには、こんな思い出もあるさあ。

サバ漁 衰退し マグロ船に転船

(乗船記録の次頁をめくって)、13号から次は11号に転船している。11号はあんまり乗らなかったと思ったけど、60年8月から9月だから、1航海やっている。そのあと5号にまた1ヶ月乗って、11号に乗っている。これも1ヶ月間、マグロ漁で乗ったです。11月だからサバ漁かなあ。だけど、もう、琉水はサバ船は辞めているから、マグロ船で行ったかもしれない。サバはあとで獲れなくなったというが、そんな感じはなかった。行く度にいっぱい獲れていたのに。いつのまにかマグロ船に替わったのは、サバは獲ってきても、あまり売れなかったのでは。私らはただ獲るだけだったから、サバ船を辞めた事情は、あまり分かりませんねえ(笑い)。このあとは社命転船で、マグロ船に乗っている。第十三海幸丸、これは350ト級の船で、琉水が内地から買ってきて、マグロ船にして、これでインドネシアなんかに、遠洋を1,2航海しました。それから雇止となって琉水を辞めました。

内地の大型マグロ船で 大西洋へ

そのあと、神奈川の三崎に行って、内地のマグロ船に乗って大西洋に行きましたよ。

これが三崎第13061号とある船員手帳、関東海運局長印があるねえ。宝幸水産の第三十一宝幸丸に乗った。これは千200ト余るからねえ、

このあと洋上転船して石山丸に乗り換えて。これはまた3千200ト、今なら5千、6千ト級だから、船の中に処理施設、凍結設備もあって、これを母船にして、小さい船は8腹持っていた。本船は縄は入れない、8腹がこう四方八方にこう縄入れて、朝は入れて行って夕方は戻って来るから。もう大西洋辺りで漁してねえ。宝幸水産の会社は、東京の築地にあったですよ。琉水が提携していたのはよく分からない。日本全国のマグロ船は、あの当時は三浦半島の三崎を基地にやっていたから、遠洋マグロ漁業は華やかで、盛んな頃ですよ。だけど、今はもう殆んど会社は潰れてなくなっている。政府がお金を出してマグロ船30隻いたら10隻とか5隻に減船させてたから。

私も、小さなマグロ船2隻を、19トの第五と第八裕盛丸を持って、グアムを基地にして、やっていますが、マグロ業はますます厳しくなっていますから、これからどうなっていくか、心配していますよ。

(了)

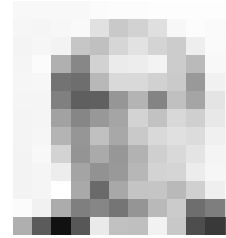


宝幸水産(東京築地)のマグロ船石山丸(3,268ト)の乗船記録、雇入れ大西洋上とし、在ブレイリア(南ア共和国)総領事印が公印してある

仲間 清昌 なかま せいしょう (伊良部漁協)

1939年(昭和14年)、宮古島伊良部町に生まれる。73歳(2013年時)。

1959年宮古水産高校卒業、琉球水産社に入社、19歳(1958年)の時、琉水13号に乗船しサバ漁に従事、当時の本土漁船入り混じっての操業光景、仕事終わった後、魚釣島の島陰で休んでいた時、台湾漁師の海鳥のヒナと卵をとっていた光景が印象深く残っているという。サバ船からマグロ船に転船、のち海の仕事を辞め、警察畑に入りし、町会議員等々、伊良部町議会議長を歴任する。



水産高校卒業 琉水サバ船に乗る

水産高校を卒業して、あの三重城の琉球水産(社)、あっちのサバ船に乗っておったんですよ。卒業前の3年には現場実習があつて、卒業したら琉水に入ると決めていましたから、琉水に行きました。琉水13号(第十三琉水丸 以下同じ)、琉水15号の2隻に配置されて、尖閣列島に行って、サバ船、底釣り船の実習をやりました。それで4月に卒業したら、そのまま琉水に入りました。あっちは、マグロ船もサバ船も持っていて、また底釣のマチ船もやって、冬の時期にはサバやって、夏になったら底釣りに替わったりしてました。

銀嶺丸とか、申琉丸、琉水何号とかいって船は何隻もいたけど、自分が乗ったのは琉水13号と15号、この2隻しか分かん。高校卒業してすぐ入ったから18か19歳、1958年頃です。あの時は、丁度サバが盛んな時期だったから、琉水13号と15号は両方ともサバ船してました。それで、最初は琉水13号に乗りました。13号は130ト、船長は与那覇三郎さん、漁労長は与那国出身の大新垣稔さん、それから牛番セイキチさんなんか一緒に、与那覇さんはよく憶えていますよ、大分世話になりましたから。

琉水15号は150トの鉄船で、船長は渡真利太郎さんだったかなあ。

ウチがサバ船に乗ったのは13号だけです。あとで15号からはマグロ船で行きました。

13号単独で出港 1航海4、5日 相当獲れた

琉水13号でサバ漁に行った時は22、3名位は乗っていたかなあ。水産高校卒業して琉水に行ったのは、僕と上原クニオという城辺の男、船員ではウチら2人が一番若かったです。サバ漁に行く時は、僚船で行かない、13号だけで行きましたよ。

130トの船だから何ト積めば、満船大漁だったか、数量は憶えていない。

でも、サバはもう相当獲れましたから、航海は4、5日、で、あまり獲れない場合長くなる。これ水揚げして三重城に着く、大体2、3日、水揚げ・積み込みして終わったら大概1週間位では沖には行く。会社が水揚げすると、あっちは冷凍庫も持っていたし、琉水は、当時はマグロ船なんかも持っていたので、銀嶺丸とかねえ、恐らく冷凍に入っていくと思います。本土市場に行くか、それは分かんですねえ。

漁場 東シナ海 灯とコマセで 魚浮かす

漁場は東シナ海です。尖閣からちょっと、あつちは西側というのかなあ 尖閣のクバジマから、魚釣島から西の沖に行つてねえ、大概2和位か、3和位かなあの所で、仕事は夜だけやるんです、して、漁のやり方は、棒受け網ですよ。

夕暮れに沖の方に出て、最初は、一応魚探でサバを探すわけですねえ。

で、魚探で探して、それに魚影が出ると、コマセとって、魚の切り身と残滓なんかをこねた奴をねえ、コマセカゴに入れて、その魚の群れの所に下ろすんですよ。

で、それで、あつちでコマセカゴを振つてねえ、あつちにそういうふうな撒き餌をしますねえ。それで船を、風上の方に少々進めながら、ライト、集魚灯ですねえ。あれでコマセを引っ張ると、そういう風に灯りとエサの加減で、するとやっぱし、サバは灯りに浮くわけです、灯りに付いて来て、最初の場合は、魚の群れが塊まるまでは、一応ハネ釣りをするわけですねえ。ハネ釣ってって、1メートル2、30センチかなあ、竹竿で、サバのハネ釣りをするんですよ。内地船の場合は、その時はもう棒受けは禁止されていたもんだから、内地船の場合は朝までハネ釣りです(笑い)。

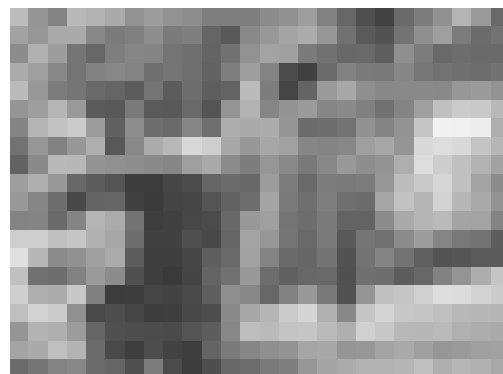
灯で 左舷に誘導 棒受け網へ

エサは、サバとか、サンマとか。サバという魚は習性的に、同じサバの切り身を、あれもエサ付けたら食うんです(笑い)。それで、魚群が光に浮くと、またライトで以て、魚を反対の舷側に誘導するわけですよ、サバ釣りの場合は西向きに、風向きに、風上の方に表、船首の方を向けて、それでサバのハネ釣りをし、そこに魚の群れが大部集まると、このライトを切り替えますと、右舷でハネ釣りしておいたものは、棒受けの網は、左舷に前もって張るわけですよ、もうこの時点で張ってます。それでサバのコマセ、あれを一応網の上に撒いて、右舷のライトを消すと、そこにいたサバが皆左舷の方に集まりますから。

そしたら、左舷に張ってある網に、全部乗ったところを見計らって、これをラインホーラーで巻き上げるんです。

魚掬って タモに入れ ダンプルへ

棒受けの造りが、一応船の片側の、そのあれは何というかなあ、網は一応あつちに畳んでおいてあつて、網の先には必ずオモリが付いている、下に収納するような形で、このオモリには、この表からのワイヤーに付けるオモリ、オモリからくるオモリ、この両方から来て、ラインホーラーで、巻き上げる式になっていますので、一応サバの群が集まって、これを引き揚げる場合は、網を張ってあ



ダンブルに詰め込まれたサバの大群が大きなタモで水揚げされる。(オキナワグラフ 1958年7月)

る孟宗竹の下の方にオモリが下りているものですから、これを揚げると、孟宗竹に吊るされている網が揚がってくる構造になっていて、これが多い時はもうホントに巻き上げられん位いっぱい入ってましたよ。で、巻き揚げ機で、揚げたら、適当な高さに網が揚がって来たら、中に入っている魚を、もう手ですくって、タモ網の中に入れます。やっぱしベテランの船員さんなんか、色々と指導しながらウチらも習って入れましたよ、このタモ網は大きいからいっぱい入ったら、これもやっぱし揚げるのはローラーで、ウインチで揚げてきてですねえ。それを移動して、ダンブルに魚を入れるんですよ。タモ網に何十杯も魚をすくって入れて、これをダンブルに入れていきましたから。

サバ 傷み速い アカ水 絶えず交換

サバは傷みがやすいから、冷蔵水は、ホンバンと魚を漬けて、大概 3 日あと位に換えると、その間は水を換えないといかないですよ。あの升氷、前の赤水は、ポンプで汲み上げて捨てて、あと一回水氷に漬けるんですよ。氷はダンブルに相当積んでいっています。

あの当時は冷凍はあまりなかったですから、また東シナ海まではその必要もなかったし、氷で以って升氷にして使いましたから。

内地サバ船 50、60 隻操業 街明りみたいに

漁場には本土船は相当いました、もうあつちは夜なると街の灯みたいにねえ、50 隻から 60 隻はいたかもしれん。船籍が船尾に付いている、あれ見ると、鹿児島、宮崎とか、長崎、静岡だとか、来て集まっておったですねえ。東シナ海に面している漁協の船は殆んど出てきておったんじゃないか。漁場に、皆集まって、一緒にやりましたよ。

だけど、内地船は、当時はもう、棒受けはしないで、ハネ釣りだけです。ハネ釣りでは獲れる量は知っている。ウチらの場合は棒受けする場合は、1 回に何トという魚が入るから、内地船がこれを見て、大部トラブルもありました。この沖縄土人とか、魚泥棒とか、言って(笑い)。それとウチらの場合は、朝まで棒受け網で漁労でしょう、獲るとまた場所を移動するわけですねえ、内地船が、魚をハネ釣りしている所を、風上から行って、コマセを撒くと、魚は皆浮いてくるんです(笑い)、跳ぶみたいにして、スピードで付いて来ますねえ。

すると、そこでまた棒受けをすると、もういっぱい獲れて、そしたら自分達が浮き上がった魚を、棒受けで獲るからといって、内地船は大部憤慨して、またトラブルになって、魚泥棒といわれて、中には、船の舳先を持ってきて、船に体当たりするみたいに威嚇したり(笑い)、ひどい人なんかだったら、ビンを、空びんを投げたり、こっちが応戦するわけにもいかないし、喧嘩じゃないから(笑い)。そんなこともあったですよ(笑い)。

仕事終わると 尖閣島陰に 停泊 台湾船 筏で フカ釣り

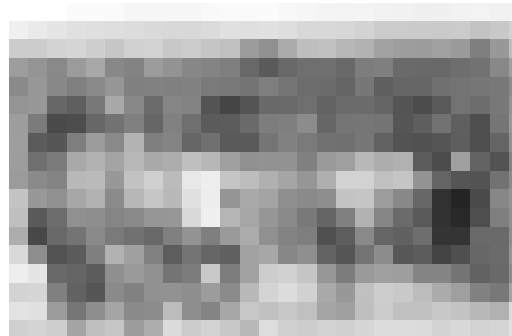
サバ船の場合は、日が沈む時から、夜明けまで、ずっとサバのハネ釣りと棒受けをするんですよ、それで夜明けと同時に、一応は仕事をやめて、仕事を終わって、島陰に行って、

昼寝するわけです。昼寝というよりも停泊して休憩ですねえ、東シナ海の上の方で夜仕事やって、朝から昼過ぎまで、殆んど、尖閣列島のクバシマ(魚釣島)の島陰で、停泊して休むわけです。こっちの島陰に来るのはウチらだけ。内地船は大きなシケの場合はこっちに避難にきますが、殆ど沖泊りでした。それと昼間停泊していると、台湾船も見えてましたよ。台湾船は筏(竹いかだ)釣り、筏で、フカを釣ってました。これは筏を1基ずつ下ろしていくんですよ。で、筏の上から、人間も一緒に下ろしてからに、筏一基に、漁師が一人乗ってフカを釣るんですよ。びっくりしましたねえ。たまには、潮に流されて、捜されない、不明になったという話も聞きました。やっぱり目的はフカヒレじゃないかなあ、中華料理なんかの、流水のマグロ船に切り替わる場合も、フカヒレは採ってきて会社に下ろすと、会社では、フカヒレ専用の乾燥場もありましたので、恐らく台湾船はフカヒレ目的だったと思います。そうそう、台湾船の連中は、向うのトリシマ(南小島)に上がって、アホウドリ(カツオドリの意)ですか、あっちに海鳥が沢山いる、あれを捕まえてましたよ。

台湾漁師 島に上がって 海鳥 土産に捕る

この当時アホウドリは多かったですから、あの連中が、島に上がって、あのアホウドリ、あれを20羽位担いで来るんですよ。君ら、これどうしたのかと聞いたら、棒で叩いて捕ってきた、これどうするかと言ったら、島のお土産にするんだと、島の人が皆が喜ぶ、家族が喜ぶと言うんです。そういうことがありましたねえ。そういう風にアホウドリを肩に担いで帰っているもんだから、あの連中の姿をよく憶えていますよ。

当時は保安庁の警備ということもなかったし、特別の取締りもなかった。やっぱり同じ漁師ですからねえ、君らはこれを大部捕っているが、あんなことしたらいかんよと、ウチらも注意したりして(笑い)。台湾の漁師とは、同じ漁師同士の違和感もあんまりなくて、仲良くしてましたよ。



台湾漁師が、南小島に上陸し、鳥と卵を乱獲している。真ん中のカゴにヒナが捕らわれてる (撮影者不詳 1963)

網 ベラにかかると 潜って

もう1つよく憶えているのは、サバ船は冬場行ったから、尖閣列島は相当寒かったですよ。寒かったんだが、ウチらの伊良部島は、泳ぎや潜りが専門の連中で、サバ船の棒受けの場合は、潮や風や波の加減でね、張った網が船底に沈む場合があるんですよ。

やっぱり、風向き、船の向きによっては、片舷に張ってある棒受け網、あれが潮に流されてきて、舵とか、スクリューに巻く付くわけです。で、そういう時なんか、ウチの島の同僚、先輩達が、あんなに波の荒い、フカの多い所に、夜中に潜ってねえ、もう寒い海で

すよ、4、5名位潜って、交代で潜って、それで舵とかペラに巻いたりしている網を、切ったり、外すんですよ。まあ少々は報奨金もあったがねえ(笑い)、そんなこともよく憶えています。

サバ釣れなくなって マグロ船に転船 インドネシアへ

1960年頃にはサバはあんまり釣れなくなったですか。それは知りませんでした。

ウチが琉水に入ったのは1958年4月で、13号のサバ船に満1ヶ年位は乗っていましたから、その頃にはサバは衰退しかかっていたのかなあ。暫くしたら殆んどサバは切り上げて、あとは底釣りか、マグロに切り替わったようですねえ、ウチもその後、琉水15号に社名転船があったですよ。

15号はマグロ船に替わってましたから、転船して15号で、インドネシアのハルマヘラ、パンチモールまでマグロ漁で行きました。そしたら、その時に、セレベスのメナードで、慢性盲腸を罹って、あっちの病院で注射して

貰って、止めて、那覇に帰って来てからに、切らしたんですよ。あっちの病院で1週間位は入院したかなあ。操業中でしょう。15号の冷凍機があまりよくないから、積氷で、水氷でやっていたもんだから、それで皆に迷惑かけたねえ。それから、陸(おか)に上がらんといかんと思って、12月に警察官の採用試験があったから、それに受かって、琉球警察に転職しました。琉水には1年9ヶ月位いて、琉警は満5年位は勤めましたねえ。



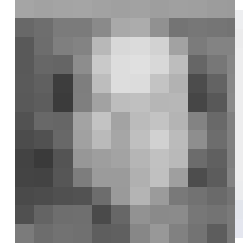
流水社の遠洋マグロ船からマグロ陸揚げのようす
(1958年「琉球商工名鑑」より)

(了)

金城 亀吉 きんじょう かめきち (糸満漁協)

1931年(昭和6年)、糸満町に生まれる。82歳(2013年時)。

糸満が誇る漁は追込である。集団で潜って網に魚を追い込んでいく勇壮な漁である。若い頃から追込で鍛えられ、潮水を多く飲んだという古参の漁師。氏は終戦直後、米軍上陸用舟艇で尖閣諸島に行きダツの追込漁を行った。これを手始めに同島には7、8回出漁を体験している。40代にはハワイに渡り、10数年間、カツオ漁に従事。米国籍も取得、今は趣味の釣りを楽しみながら悠々自適に暮らし、青年漁師の指導にあたっている。



糸満伝統の追い込み、ダツ、トビウオ獲る

ウチは糸満生まれのウミンチュ(海人)だから、学校卒えると、すぐ漁を手伝わされた。終戦は、昭和20年だから14歳、1年間はして、あの時は全部軍作業だったんですよ。ウチも軍作業に行つて、今那覇の旭橋のこつちに大きなパン工場があつて、そこで1年半位やっていた。この部隊が天願に移動したから辞めて、元の漁師に戻つてすぐシジャー(ダツ)獲りをした。丁度冬だった。ウチらがやる時は、すぐその糸満港の地先で獲れた。

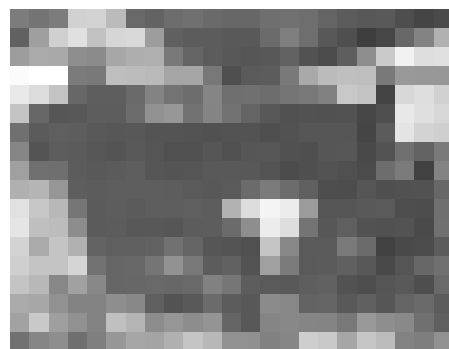
昔から糸満は追い込み専門だから、シジャーも、トビウオも追い込みでやりますよ。

あれは、海に大きな袋網を仕掛けていて、皆で遠くから魚を取り囲んで、この網に追い込んで行くから、母船やサバニに乗る人、潜つて追い込む人とか、もう相当の人数が、2、30人は必要です。だから、その時期なると、ウチら追い込みシンカ(組仲間)はもう忙しかつたですよ、シジャー獲りに尖閣列島に行つたり、トビウオ獲りに波照間辺りに行つたりして。

波照間はねえ、丁度与那国の方向に、アシジー(浅瀬)がずっと伸びているから、そこに網入れたら、もうトビウオは、1日で1万斤位は獲れよつたですよ(笑い)。大体5、6回位網入れますから、もう船はすぐ満船しました(笑い)。

ベニヤの上陸用舟艇 近海に 日帰り漁で

終戦直後は、糸満は船は戦争でやられて1隻もなかったです。もう全部、米軍の上陸用舟艇でやりましたから。LCVPという舟艇の一番小さいもの、ベニア板で造られているが、防水されて頑丈だったですよ。それを米軍から漁船に改造したのを貰つたり、また捨てられているのを持ってきて修理して使つたりして(笑い)。カツオ船もそれでやっていた。58号のカツオ船も。VPはエンジン1個だけ付いて、小さくて、もう船の半分位しかない。だから、あれでは遠くに行けなかつたです。それにあの頃は、氷がないから、近くのチービスとか、慶良間のハテ



船は幾らあつても足りない、放置された舟艇を補修して使う。(「沖縄戦後写真史」より)

ジマとかに、日帰りでトビウオ獲りに行きましたねえ。シジャーは、久米島辺りに、3隻の舟艇で行って、2隻で網入れて、1隻は運搬船にして、1,2回網入れたら、船のいっぱい獲れました。昼までしたら魚腐らすから、すぐ1隻に魚積んで運んで、那覇と行ったり来たりして、もうフル運転ですよ。終戦直後は、近くでもいっぱい獲れよったです。昔からシジャーとかトビウオはスウヌクワ(潮の子)とって、潮の流れがよかったら、いい潮だったら、いっぱい獲れました。あのベニアの木船、VPの舟艇のあとから、今度は鉄船を、エンジン2個付いたLCMという大型の上陸用舟艇を改造した漁船が来ました。この頃には、もう氷も積めたから、このM型で、シジャーは尖閣列島に、トビウオは宮古とか、八重山の波照間島とか、遠くに行けるようになりましたねえ。

久米島・鳥島沖 米軍爆撃演習に遭う

一遍は終戦の翌年だったか、久米島の鳥島があるねえ、あっちの沖でシジャー獲りやった。米軍の爆撃演習場所と分かりながら、皆でシジャーを追込んで、2隻のVPの舟艇で綱引っ張っていたら、音もしないでよ、米軍の飛行機が来てから、いきなり爆弾が落ちてきたですよ(笑い)。綱引っ張っている真ん中に、すぐ落ちて(笑い)。

一人の船長はもう頑固でねえ、必ずやる、このまま漁を続けると言って、もう一人の船長は臆病さあ、止めて、もう逃げるとって(笑い)。そうこうしているうちに飛行機が下がってきてよ、「避けなさい、ここから離れなさい」と言ったから、もう離れたけど。

あの時は、鳥島は緑がいっぱいあったです。今テレビから見ると砂っぽくなって木一本もないけど、昔は緑がいっぱいでしたよ。向こうに壕があります。隠れるガマ(洞窟)があって、糸満の連中は、嘉手納辺りから艦砲の弾を取ってきて、信管を外して中の火薬を採って、これでダイナマイトで使っておった。向こうに持って行って、誰もが分からんからとって、壕の中でよう外していた。

カマーヤッピーさんねえ(笑い)。もう亡くなったけど。あの人は、壕の中で、もう一生懸命火薬を採るとって、火薬はあれから10斤位は採れる、ウチもやってみたが、もう怖くてできなかったですよ(笑い)。外では、飛行機が、バンバン爆撃演習しているがねえ、壕の中では、もうこの人汗だけで、一生懸命火薬とりに熱中、外ではバンナイ(続けざまに)爆弾が落ちているよ(笑い)。もう終戦直後は皆こんな、もう何でもかんでもやらんと、飯は食えなかったからねえ(笑い)。

尖閣へ初のダツ漁 沈引揚船・第二栄丸で

糸満で最初に、尖閣列島にダツ獲りに行ったのは、大城組(大城漁業団)の第二栄丸です。上陸用舟艇でなく和船で行ったんですよ、終戦直後は、漁船は全部舟艇だった、和船はこの船一隻しかなかった。これは戦前からの船、テグリ船だったです。糸満のこっちは全部海だったから、向こうの地先の入口に丁度船たまりがあって、そこに係留しておいたら、空襲でやられてしまった。そのままずっと沈んでおったのを、終戦直後後、大城武徳(良則)

さんが引き揚げたんです。武徳さんは組合長もやった人ですよ。エンジンはやっぱし海水にずっと入っていたら、空気に触れなかったら、サビ1つしてないらしいですよ。太陽に当たらず、海底の泥の中にずっと埋まっていたら、いつまでも置けるんだって。南方から帰って来た焼玉エンジンの専門がいたよ。沈んだ船を引き揚げ、エンジンも直して、また船体を修理したんですよ。あれは50ト位あって、かなり大きな船だった。この栄丸で、尖閣列島に行ってダツ漁を初めたんです。玉城礼次郎さんとか、ウシーヤッピー上原信吉さんとかが船長、機関長して、向こうで。ウチが16歳(1947年)の頃かなあ。

もう尖閣列島に行ったら、行く度に大漁続き、満船して帰ってきた。あの時4万斤、5万斤は積んできたというから。今の和数になおせば、24トから30ト位になる。向こうではこんなにダツが獲れたんですよ。そのあと栄丸は、長崎県に追い込みを教えに行ってから、沖縄に帰る途中に台風に遭って、鹿児島沖で沈没してしまったらしい。もう皆糸満の人達が乗っていたから大部亡くなっています。



戦後、尖閣にダツ漁に行った第二栄丸(50ト)
上は船主・大城武徳氏(糸満町漁業組合長歴任)
(「現在糸満実業人銘々傳」より)

追い込みのおどし縄、慶良間・久高産の、クバの新芽

シジャーの追い込みは、母船2隻とサバニで行うが、海に大きな網を、袋網を仕掛けていて、皆で遠くから魚を取り囲んで行く、母船2隻は左右に分かれてスルヂナ(おどし縄)を引っ張って行く。サバニに網を乗せて脇から付いている。潜りの人はこのスルヂナと一緒に泳ぎながら、それで魚を、おどしながら、(袋)網の中に追込んで行く。縄の先にクバの葉の新芽をくびってねえ、未だ青くならんうちに新芽真っ直ぐなっている。これだったらねえ、海の中で白くなってピカピカした光で魚は驚くから。また魚を取り囲む縄にも1メートル、2メートル間隔位でくびっているから、外へ出ようとする魚は、海水をパンパン叩いて逃がさない。もう魚は全部、袋網の方へ追い込んで行ったら、2隻のサバニ同志はロープ投げて、袋網を両方から引っ張って、網を閉めていけば、網の中は、もうシジャーでいっぱい(笑い)。こんなして獲りよった。トビウオも全く同じやり方ですよ。で、あのクバの新芽は、慶良間の黒島にもあるし、阿嘉に、座間味の全部に、クバがありますよ。また久高島の東側にも。ウチらが尖閣列島に行ってシジャー獲った時は、クバシマにクバがいっぱいあったが、こっち(沖縄本島付近)で採って、慶良間から採って持って行った。新芽はキラキラ光って、葉が開いたらもうダメ、新芽を切ったら、すぐ氷に入れていたら、大体2,3週間は保ちますから。

上陸用舟艇・M型を改造 尖閣へ ダツ漁

ウチが、尖閣列島に最初に行ったのは21歳だから、昭和27年(1952年)位ですねえ。

当時こっちには、シジャー獲る組が、4、5組位の網元が、糸満にあったんです。それで一応連れられて行って、あの時は、大型の上陸用舟艇で、鉄船で行きましたよ。舟艇2隻で、それに30名ほどのシンカ(組仲間)で。舟艇は、ほんとの漁船でないから何丸とかいう船名は付けません。大きいですか、今の10トン位の漁船を横に3隻並べた大きさかなあ、幅は10メートル位あったかもしれん。長さはあれよりずっと大きかった。舟艇は戦車も積むから、戦車の歯が掛かるようギザギザが付いているよ、前の方は扉になって、この扉の所はきちんと切って、絶対開かないように溶接して、上にデッキも張って、氷施設も造って、漁船に改造してねえ(笑い)。



米軍上陸用舟艇、このLCM型を漁船に改造した。
(「水産だより 37号 1966」より)

だけど部屋は小さいし、年寄りの連中が部屋にいて、ウチら若いのは、台所の薪入れる所、あの時分はドラム缶2つに切ってカマドにして、また薪は焚いても燃えないから、石油かけて、もう煙で真っ黒く汚れて、そんな所で寝起きして(笑い)。

あの時は尖閣に行くに、大体2昼夜(48時間)位かかったですよ。糸満から出て、大体久米島の方に行って、クミアカ(大正島、赤尾嶼)の傍を通過して、クバシマ(魚釣島)に行くから。普通の漁船なら30時間位で行けるけど、舟艇は、先は箱みたいに四角だから、遅くなって、あんなにかかった(笑い)。その代わり、向うは、潮が速くて、波が荒い所だけけど、箱型だから、今の和船型より横には強かったです。向かい風になったら、もう風下とか、横とかには安定しておるから(笑い)。

クバシマ付近中心に ダツ漁 もう満船して

あの時は、シジャーの網曳くから、舟艇2隻で、サバニは3隻を横に積んで行ったですよ。人数は大体30名位かなあ、追込みだからもっといたかもしれん。11月から12月頃に行くと、1週間から10日位、冬だったから、シケてできない場合もあったから。

ウチはどの辺でやったか憶えています。(海図で示しながら)、クバシマ付近を中心に、こちに網入れてねえ、またこの辺に潮から頭出したり引込んだりする所があります、(飛瀬か?)、こっちでも多く獲ったですねえ、そっちにも小さい岩があつて、北の小岩か、この辺でもよく獲れましたよ。この切り立った岩島、クミアカかねえ。ウチなんかは、こっちではやらなかったです。別の人がやっておった、糸満の人が。こっちは小さな島だから、2、3回やったら、すぐ終わる。シジャーの網は大きい、片方で700から800メートル、両方のあれだった1300から1500メートルはあるから。もう長い縄を30分も曳いたら3回位しかで

きないですよ(笑い)。クミアカで獲れたと思うけど。ウチなんかは、こっちでやってみないから、どの位揚げたか分からない。尖閣では相当獲れました。大漁しましたよ、舟艇のいっぱい満船して帰ってきましたから(笑い)。

トリシマに上がり 鳥殺して 持ってきた

あの時、トイジー(鳥島：南小島の意)グワー(接尾、愛称)には上がりました、鳥採るために。向こうにはアホウドリ(カツオドリの意)ねえ、バカドリとって、ものすごくおったですよ。山に登ったら、山いっぱいトビウオです。親鳥が海から捕って来て、ヒナに上げるとってねえ、ずっと上まで、もうトビウオでしたねえ(笑い)。あの時は、尖閣には、シジャーも、トビウオも、いっぱいいましたねえ。ウチらは、鳥を採るため山に登っていったが、あれは採りやすいさあ。もう上から見たらすぐ飛んで逃げていくから、遠回りして、下から上がって行ったら、もう10メートル先から見ているよ。すぐには飛びきれない、コッコ、コッコして。それを1メートル位の棒で打つと、すぐ倒れるから、これを殺して、山の上から投げたら、コロコロコロと下の所まで落ちて来るさあ。この鳥を何百匹も採ってから、氷漬けにして、家に持ってきた。あの時はアメリカのソーセイジとか肉の缶詰とか、皆あんなものしかない、生肉なんかないから、(笑い)。卵もこんなに大きかった。ニワトリの卵の2,3倍はあったかなあ。あれもいっぱい持ってきたですよ(笑い)。

洞窟に一人住み 鳥の羽毛 採っていた

トイジーグワーに、人が住んでいましたねえ。すぐ海の傍らに、ちょっと自然壕見たいのがある。あそこのガマ(洞窟)に、水が岩から滲み流れる位の所に。あそこに、男の人が一人で住んでおったんです。もう色もマックール(真っ黒く)して、顔は髭ボウボウしていたから、歳ははっきり分からん、4,50代位だったはず。話を聞いたら、自分は元々糸満の人で、八重山に渡って、八重山からここに来たと言っていた。名前は憶えていない。ここに一人で棲んでいて、ここで鳥の羽毛を採っていて、それを八重山に送っている。

ここには、船も何もないよ(笑い)。もう連絡は、無線も何もないから、あっちで日にちを見て、大体もう今頃は、羽毛はたまっているだろうとって、八重山から船が来て、羽毛を積んで持ち帰って、代わりに食料を置いていく。この人は、またここで、羽毛を採っておいて、船が来たら、それを持ち帰って、また食料を置いていって。これの繰り返し、繰り返しで仕事していると言っていた。あんな所に一人でいるんだから、もう大変ですよ。怖くて普通の人ならできないさあ(笑い)。

あの頃は、鳥の羽毛とったら、羽根布団なんかを使う高級だから、相当利益があったはずですよ。島に一人でこもってやる位だから、魚なんか獲るよりも、もう相当儲けがないとできない。あれは誰でもできるワザ(仕事)じゃないから。そうです、ウチも、尖閣列島で、昔は、鳥の羽毛採っていたという話を聞いたことがあります。だけど、終戦直後に、島に一人であって、羽毛を採っていたんだから、あの人に遇った時は、ホントにびっくりし

たねえ(笑い)。あの人はですか、もう 60 年余り前のことですから、あの時で 4、50 はなっていたから、もう亡くなっていますよ。

多数の舟艇・艦船 海岸に放置 部品取り放題

ウチは、尖閣には、組合を 3 回位替えて行ったです。合計 7、8 回位は行ってますねえ。大体がシジャー獲りに、もうあっちに行けば、シジャーはいっぱい獲れましたから。

一度は、泡瀬に米軍の工作隊の本部があって、そこの上陸用舟艇から、尖閣にも行ったです。その時はダイナマイト漁しにですよ(笑い)。

獲った魚は、全部泡瀬に降ろして。この仕事ですか、あっちから請けた仕事なのか分からんが、船も、燃料の油も、工作隊が全部出して、ウチら糸満の連中だけで行きました。

獲った魚は、工作隊に全部納めてねえ。

あの時は、泡瀬の海岸には、舟艇とか、艦船とか、もう船がいっぱい上り揚げてましたねえ。船体がセメントでできた船もあった。千トン級で大きかった。ひよっとしたら冷凍船だったか？、もう海岸一帯は、いろんな船が転がっていて、全部捨てている状態だった。アメリカは、台風なんかで打ち揚げられたら、修理も何もしない、もう放ったらかしたまま(笑い)。エンジンの部品とか、船の備品とか使えるものはいっぱいありましたよ。それを自分達で、外して、糸満に持って行って(笑い)。工作隊が、泡瀬一帯を管理していたか分からんが、海岸に乗り揚げている船から、何もかも取っても、何でもなかったですよ。自由に取ることができよった。何でも取り放題でしたから、(笑い)。糸満の人は、これで船修理したり、船造ったりして、相当助かりました。あの時ですか、まだ 19 か、昭和 25 年(1950 年)位ですかねえ。



台風で座礁して放置されている米軍舟艇・艦船
(1945 年リビー台風による被害)

(沖縄県公文書館)

魚釣島周り 泳いで ダイナマイト漁

この工作隊の舟艇で、尖閣に行ったですよ、目的はダイナマイト漁だったから、1 隻で行きました。今の魚釣島の周囲を、4、5 名で殆んど泳ぎ廻りました。泳いで魚いる所を探して、ダイナマイト入れんといかんから。あの時はフカが多かったですねえ。深い所は危ないからといって、わざと波の傍から、陸にくっ付いて、泳ぎ廻って。ダイナマイトは、何回入れたか、憶えていないが、相当入れましたよ。もうあっちこっちに入れて、相当獲れましたから(笑い)。シチュー(オキナメジナ)といって、ちょっと黒くて丸い奴、あれが主に獲れよった。島の縁で入れたから、これしか獲れない(笑い)。

小さな瀬の所では、アーラの百知位の大きいものが獲れた。あれはダイナマイト入れた

らすぐ浮いてきましたよ、胃袋が大きいからねえ。ブダイとかも、少し獲れたが、底魚はあまりいなかった。

フカはものすごく大きな奴がいました。ダツ漁の時はあんまり見なかったけど、その時は、5メートルあるのがザラにいましたねえ。ダイナマイト入れると、相当魚が浮いて、それを食べに、フカが集まって来るから、大きな奴を釣りました。もう5百和位もある大きなものを、2匹も。タイガーシャークというんですか、人食いサメを捕りましたよ。

あの時、クバシマの周辺を泳いでいたら、丁度、伝馬船が通る位に岩を削ってあって、中まで入れるようになっていた。その上を見たら、立派に石垣積まれてあるわけさ。

家はないが、先輩達が昔のカツオ製造工場の跡だと言うていた。昔はこのクバシマ近くにカツオも沢山いたんだろう。あんな所に製造工場を造っているから、島の傍で採って、すぐ加工できるようにしてあったですねえ。

追込み旅漁、宮古へ グルクン 尖閣へ ムロアジ

アギヤー(追込み)で、尖閣に行ったこともありますよ。2ヶ月間のアギヤーアッチ(旅漁)で(笑い)。最初はグルクン(タカサゴ)獲りに宮古に行きました。宮古はアギヤーのいい所、八重ビシといってグルクンのいる所がありますから。糸満の大型船で行ったですよ。

船長はイシクエース(屋号)といって、船の名前は忘れたねえ。アギヤーサー(追込み集団)だから、サバニも積んで、60ト位の大きな船だったが、焼玉エンジンで、速度は遅かったですねえ。宮古には、ユカエーサー(魚運搬船)と2艘で行きました。八重ビシに着いて、そこで何回かアギヤーして、グルクンを獲りましたよ。それを運搬船で糸満に運んで行って、また皆の食料を積んでこっちに戻ってきます。だけど、あの時は運搬船も待たないで、すぐに尖閣に行きましたねえ(笑い)。こっちで、グルクンはそんなに獲れないからと、自分達だけですぐ行っただですよ。それに1ヶ月位前に、あの第二栄丸の連中が、尖閣に行って、相当ムロアジを獲ってきた話をしてもらった。それを聞いていたもんだから(笑い)。

南小島と北小島の近くで、島の縁で、大体17,8尋というから、20メートルから25メートル位の所で、ダイナマイトを入れたら、もうムロアジが、足がこんなに入る位、もう下にいっぱい沈んでいて、潜って、タモですくって、交代交代で、引き揚げて、相当獲った話をしてきたから。今度は、このムロアジを、アギヤーしに。

もう運搬船待てないからと、尖閣へすぐ行きましたよ(笑い)。だけど、あっちに行ったら、どこにもいなかった(笑い)。あれは小さいもんだから、大きな魚に狙われていて、弱いから群れなって、いつも塊っているんですよ。いる時は、もう千斤も、二千斤もすぐ獲れるが、ウチら行った時はいなかったです。そうしているうちに食料もだんだん切れたもんだから、今度はトリシマに上がって、鳥ばっかし捕って食べましたねえ(笑い)。

トリシマの下で、昔の大きな鍋、シンメナービといってあるでしょう。ドラム缶半分切って、それでカマド造って、あの鍋で鳥をいっぱい炊いて、食べてねえ(笑い)。あの当時のアギヤーといったら、人数も多いです。30名から40名位いましたから、もうお腹もすく

し、さんざんアワレ(難儀)しましたねえ(笑い)。

アジンコーから 与那国へ 西表船浮で グルケン追込

そしたら、台湾の近くのアジンコーにですよ。あっちならムロアジがいっぱいいるはずだからって、尖閣から、今度はあっちに行っただす(笑い)。丁度、夕方船出して、アジンコーには、朝早く着いた。あちは山なっていて、下は小さな棧橋があるわけ、ウチ達の船は棧橋のそこまで来たら、上の方から竿担いだ人が来るもんだから、兵隊さんが鉄砲持って下りて来たと思って、もう皆びっくりしました。もうこっちは危ないからと、急いでそこから逃げて行って(笑い)。折角、アジンコーまで行っただが、あちに台湾の軍隊がおるから、漁はできないからといって、すぐ与那国に向かいました(笑い)。

もう与那国に行ったら、丁度あの時は糸満からの密航船がいっぱいしておったですよ。密貿易が盛んな時だったから、もう糸満の連中がいっぱい。上陸したら、もう皆知っておる人達だった(笑い)。糸満から、アメリカの物資持って行って、向こうの台湾船と物々交換して。あの当時与那国は人は溢れる位おって、密貿易の船で相当賑わっていた。

で、与那国で食料を積んで、そこから西表の船浮に行きましたねえ。船浮の西、鳩間島の所はグルクンのいる所だから、こっちはアギヤーの立派なヒシがあるから、こっちでグルクンを獲って。何と獲ったか覚えていないが、相当獲りました。

こっちで、いっぱい獲ったもんだから、糸満にやっと帰って来れました(笑い)。

このアギヤーアッチ(追込み漁歩き・漁旅)は、大体2ヶ月かかっていたねえ。

この時にはウチは23まではならない。ウチは帰って来たら、一応この仕事もう辞めました。そのあと、皆は船浮にまたグルクンアギヤーしに行っただらしい。2航海目には、同級生1人が亡くなった。アギヤーする時は、スルシカーといってオモリを持ってねえ、深い所で、魚追い立てるからカンカンカンして、クバの新芽を付けてねえ、全部並んで、20メートル、25メートル位の所から、そのスルシカーが石にひっかかって、皆はもう前に進んでいくでしょう、この人はこれを外そう、外そうとして、溺れて死んでしまったと、行った連中が話していましたねえ。

密貿易で香港へ 40にハワイへ カツオ船の仕事

ウチはその後、闇船に乗って、香港にも行っただす。香港商売、こっちから薬きょう持って行って、全部、糸満はこれで栄えたのに(笑い)。ウチはあの頃未だ23,4だから、荷主になる位の力はなかった。船乗りで行っただすよ。あの時は、香港行ったら1航海で家が建つ、20日ウェーキー(長者)と言っていましたねえ、ウチの場合は、往復で16日かかって5万円(米軍票B円)儲けてきたよ(笑い)。そのあとは、内地ルートの闇船に乗ったり、新南群島に貝殻採りに行ったり、またノースボルネオで3年間仕事したりして、そして45の歳(1976年)には、ハワイに行きました。向こうでカツオ船に乗るために、糸満から100人位は行っておった。カツオの一本釣。向こうのハワイアン・トーナーパーカーといって漁業

会社に、そこで15年仕事してました。だから、ウチが尖閣行ったのは、23歳まで、あの2ヶ月間のアギヤーアッチが最後です。

安いすり身に押され ダツ・トビウオ追込み漁 衰退

ウチは、その時、尖閣には3つ組合替わって行って、合計で、7,8回は尖閣には行ったが、殆んどがシジャー獲りで行きましたねえ。もう向こう行ったら、いつも船のいっぱい獲ってきた。大体1週間から10日位かけてねえ。あの頃はシジャーも、トビウオも、いっぱいおったです、近海の魚も。あれがカマボコのいい材料だった。大量に獲れたし、今のよう内地から、すり身なんかは全然ないから、あれを捌いて、カマボコを作っておった。

糸満にカマボコ屋が相当あってねえ、女の人達が夜中の2,3時から起きて、魚の背を開いて、スプーンで全部身をとって、白で混ぜて、カマボコ作っておったですよ、生の魚だから、ホントに美味しかった(笑い)。あの当時、ウチらが糸満に帰って来たら、獲った魚は、すぐ船の前で、一人何百斤、何百斤と計算して、銘々にその場で渡して、全部自分達で魚をカマボコ屋に売ってましたから(笑い)。

復帰してから、内地から、冷凍物のすり身が入ってきたでしょう。あれは値段が安くて保存が利いて便利だから。だから、もうシジャーやトビウオなんかは売れないです。金にならない。もうその頃からは、追込みやる人も段々少なくなって、規模も小さくなってねえ。最後までやっていたのは、ウシーアッピー上原清吉さんとか、平安名栄照ヤッチーさん達。もうこの人達が辞めたら、糸満から、尖閣へ追込みで誰もいなくなったですねえ。

マチ釣り専門、底立延縄船 尖閣行き出した

ウチがハワイから帰ってきたのが1986年、その頃には、糸満で、マチ釣り船が相当出てきてましたねえ。尖閣には、マチ類専門のスクフェーナ(底立延縄)が行ってました。

最盛期には、糸満には20,30隻はいましたかねえ。

だが、それも段々少なくなって来て、今は上原常太郎さんの常丸(7.27ト)とか、金城芳雄さんの兼市丸とか、4,5隻位しか行かなくなっていました。

常太郎さんは、クバシマ(魚釣島)に行っているが、最近はあんまり行かないみたい、今は中国の監視船がいるから。その前は、ずっと中国の底曳き船がいっぱい来てからに、もう怖くて仕事できなくて困っていると言っていましたよ。

ウチは、尖閣には、60年前に7,8回行ったが、その時は台湾船もきておったが、だけど、中国船は来なかった。中国船を見たという話は聞いたこともない。それが日本復帰の前に、石油が出ると分かったから、急に中国は、尖閣は自分達のものと言い出している。また魚もいっぱいいると分かったから、中国漁船が押しかけて来て、自分達の手みたいでドンドン魚を獲っているさあ。話聞けば、もう大変ですよ。来るのは中国の縄船、あの底曳き船というから。あれが来たら、底から網を曳いて歩くから、小さい魚も、大きい魚も、何でも、全部獲られる、もう根こそぎですよ。

それに魚の棲家、サンゴ礁のヤナまで壊してしまうから。それに船団組んで、相当な隻数来ているというし、常太郎さんの話だと、もう 10、20 年前からだというし、このままでは尖閣の海は荒らされて、魚は確実に全滅ですよ。

尖閣以外 いい漁場ない 政府は ちゃんと守ってほしい

ウチが、南シナ海、南沙諸島に高瀬貝採りに行った時、驚きましたねえ。バシー海峡から香港に行く時、皆トロール船よ、ジャンク船で底曳き船だった。中国大陸がこうあったら、こっちから越したらねえ、海は濁っているですよ、こっちから向こう側は全部茶色がかって、だから下は全部泥、こっちみたい青くない、泥だから。

もうあれ見たら、中国大陸近くの海と比べたらねえ、尖閣以外にいい漁場はないですよ。中国のどこにもないはずですよ。だから、中国は、尖閣列島は、自分達のものだと言いついて、島も、海も、魚を、魚も強引に盗りに来ているから。

(日中両国が主張する境界線図を指して)、中国に尖閣列島を盗られたら、もうお終いです。もう中国はドンドン、こっちまで、この沖縄の近くまで、攻めてくるから。中国は、この沖縄トラフのところまで、宮古・八重山ギリギリの所まで、自分達の海と言って、境界線を主張している。中国大陸の大陸棚は沖縄トラフ延びている、延長しているから、そこまで自分達のものと言っている。また、南シナ海も、自分達のものといい張って、ベトナムやフィリピンとかと争っているが、だけど、向うは中国の大陸棚じゃないさあ。中国から相当離れている(笑い)。だから、中国は最近はこの大陸棚延長という考えは言わなくなっている。南シナ海では不利になるから(笑い)。その代わり昔から中国領土だったの一点張りになって(笑い)。だけど、中国に尖閣盗られたら、あつちに軍事基地造って、沖縄トラフまで自分の海だと言って、近海で漁する漁船は拿捕するし、中国漁船がワッーと押しかけてきますよ。そうなったらもう大変です。沖縄の漁民はどこで漁しますか。

これは、沖縄だけの問題じゃない、もう日本全体の問題ですよ。だから、政府は、尖閣の島も、海も、魚も、中国に盗られんように、ちゃんと守ってほしいですねえ。



日本と中国が主張している中間線、中国は沖縄ぎりぎり近くまで主張し、漁民にとって死活問題である。

(了)

金城 清信 きんじょう きよのぶ (糸満漁協)

1936年(昭和11年)、糸満町に生まれる。77歳(2013年時)。

1955年19~21歳の3年間、尖閣諸島にダツ追込みに行く。

1957年、21~22歳の2年間、東シナ海で、サバ漁を行う。

以後、12年間、マグロ船に乗り、沖縄・八重山近海からフィリピン沖で、マグロ延縄漁に従事する。氏は尖閣諸島でダツ漁に従事し、色々な体験談を披瀝している、その1つに糸満漁師が台湾漁民に同漁法を教えたが、ダツが向かってくるから、驚いて逃げ去って、ダツは獲れないよと失敗譚もその1つである。

**19~21歳 尖閣でシジャー獲り 追込み40名で**

ウチは、19の歳(昭和30年.1955年)に、シジャー(ダツ)獲りに行かないかと誘われた。あの時は追込みやっていたから。行くさあと、小使い儲けに、それで尖閣に行きましたよ。

それから20、21と3年間行ったですよ。19の時はタルマヤー(屋号)玉城テイギの15トの船3隻で、船の名前はシンヨー丸(15ト)、セイトク丸(10ト)、もう1つは憶えていない。船主は玉城テイギさん、20の時はまたタルマヤーの船、21の時その人の弟が替わった。テイギさんはやめたらこの弟がやりましたよ。3年間親方は3名とも違ってきますよ。

追込みアギヤーで、宮古に行く時は、八重ビシに行ってよくやりおった、グルクン追込みに。その時は、アギヤーシンカ(組仲間)は大体80名位。だけど、尖閣にシジャー獲りだったら40名位で行きました。あの時は、本船3隻、ロープ引っ張る2隻と、氷積んでこれに獲った魚を積んで沖縄へ航海する船と合わせて、全部で3隻で行きましたよ。それにサバニを3隻積んで、1隻は袋網に乗せるアミブニ(網舟)、その網は半分ずつ分けて入れるからワキブニ(脇舟)と、魚を運搬するカラニグワー(空き舟)を積んで行きました。

尖閣に行く時は、こっちから久米島ヌイテ、アコウ(赤尾嶼・大正島)を通って行くんですよ。あの時の船はあまり走らんから久米島まで8時間はかかった。そこからアコウに行って、尖閣列島行ったです。シジャー獲りは、大体が旧10月から旧正までの3ヶ月間、寒い冬の時期です。

最初ひと網で15ト 船のいっぱい 獲れた

追込みアギヤーは、グルクン(タカサゴ)なら宮古の八重ビシ、トブー(トビウオ)なら八重山の波照間、シジャーだと尖閣列島と大体決まってきました。もう尖閣列島では、シジャーは相当獲れました。最初のうちは、アラウミ(新海)だから、ひと網で、もういっぱい獲れて、大漁しましたよ。その時は、魚はサバニに乗せないで、運搬船を直接(袋)網に寄せ着けて、魚は全部船に揚げて乗せました。袋網の中に、シジャーを追い込んで、どの位獲れたかは、櫂を真ん中を突っ込んで立てて、網の底に届くかどうかで分かります。届かなければ、サバニに乗らない位いっぱい獲れているから(笑い)。その時はすぐ運搬船に積み込んで、そのまま糸満に運んで行きましたねえ。ウチらアギヤーの仕事は、もうそれで終わり。

魚獲っても、船も、氷もないから(笑い)。運搬船が糸満と尖閣列島を往復するの 10 日間位はかかっていたかなあ。はっきり憶えてない、それまでユクティ(休憩して)います。

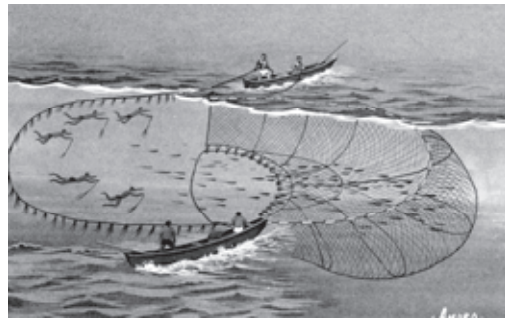
やっばし初めは相当獲れますよ、アラウミで荒らされていないから、ひと網で満船する位、沢山いました。だけど、毎日ずっと獲っているから、やっばし減ってきますねえ。

2,3 日では満船していたのが、あとからは 5,6 日位はかかるとか、魚は、次第次第に少なくなってきます。漁は 3 ヶ月間旧正までやって、海は休まずでしょう。また来年、尖閣列島に行けば、やっばし最初はいっぱい獲れましたよ。3 年間行って、毎年どうでしたかって。もう、あの頃は尖閣列島行ったら、シジャーはいっぱい獲れるましたから、毎年少なくなっていた感じはしませんでしたねえ。

本船 2 隻、スルヂナで 取り囲み 旗立てば 網に追込む

(シジャー獲り図を見せながら) これがスルヂナ(おどし縄)といって、魚脅すスルーがこれにいっぱい下がっているねえ。こっちが袋網。シジャー獲りは、このスルヂナで、シジャーを大きく取り囲んで、アギヤーシンカが、この袋網に追い込んで獲るやり方ですよ。

袋網は広げたら運動場位の大きさだが、スルヂナは優にその 10 倍位長さがあります。だから、スルヂナは本船を動かして引っ張って行きます。あの当時は巻き揚げ機とかはないから、また揚げる時は、皆で手繰りで揚げます。このスルヂナには、クバの葉の芯とか、白い布を吊るして、これが海の中で白くキラキラ光るから、シジャーはこれを見て驚くさあ。これで驚かして、前に逃げて行くから、最後は袋網に追い込んで、獲るわけですよ(笑い)。



ダツ追込み獲り図 (「沖縄／ニライの海」より)
この図では漁師はスルシカーを手にして追込んでいるが、金城氏の場合は後方のスルヂナにくっ付き泳ぎながらダツを袋網に追込んでいくやり方である。

まず、漁場に来て、シジャーがいるのを確かめたら、遠くから本船 2 隻は 2 手に分かれて、スルヂナを真っ直ぐ引っ張りながら前進させて行きます。大きな円を描くようにして、シジャーをいっぱい取り囲みながら船を歩かして行くから。その時に袋網を乗せたサバニも 2 手に分かれて、各本船の脇に一緒に付いて行きますよ。そうして、スルヂナでシジャーをドンドン囲んで行くから。もうこれでよしと決めたら、本船 1 隻に親方、漁労長が乗っているから、目印の旗とか、權を上げて、「はい、曲げなさい」と、皆に合図します。

そしたら、急いで、サバニシンカは袋網を準備し、アギヤーシンカは、いよいよ追込みですよ。本船 2 隻は、急いで反対に向きを変え、袋網が入れられるように、両方からスルヂナを狭めて、丸く曲げて行きます。網舟と脇舟のサバニ 2 隻はくっ付いて袋網を出して、1 つに繋いで網入れたら、サバニシンカは皆で引っ張って網を広げて行く。その時には、ウ

ちらアギヤーシンカは、急いで海に飛び込んで、スルヂナにくっ付いて、そのまま一緒に泳ぎながら、シジャーを、この袋網に追込んで行きます。

あの時は、今みたいなウエットスーツもなく、潜るから、皆ミーカガン(水中眼鏡)して、あとはパンツ一枚で裸ですよ(笑い)。尖閣列島の海は大変寒かったですねえ。もうブルブル震えて、シジャー獲りは、旧11月から12月、真冬の時期のワザ(仕事)だったから。

追込んだら、袋網急いで揚げる 突っ込まれる危険も

そうです。漁労長が旗揚げたら、ウチ達アギヤーシンカは、スルヂナにくっ付いて泳ぎながら、サバニシンカが仕掛けた袋網に、シジャーをドンドン追込んで行きます。サバニシンカも、袋網からシジャーが逃げないように、ロープを引っ張って網を締めているさあ。(シジャー獲り図を指して)、これがその時の図ですよ。実際はサバニに7,8名が乗って、全員でロープを引っ張るんだけど。ウチ達は、追込みしていて、本船のシンカがスルヂナを手繰っているが、それが本船に真っ直ぐに並んだら、もう追込みは終わりですよ。

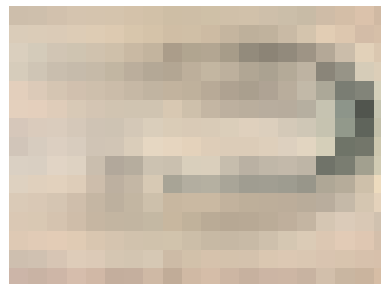
もうシジャーは、袋網の底まで丸くして沢山入っているから、すぐに、網を揚げに行く。早く揚げないと、シジャーがこの上から逃げたり、また引き返してきたりするから。

急いで潜って、網の底に、下にオモリが付いているから、皆で揚げる。サバニシンカは舟の上から引いて揚げて、本船に乗っている人も、皆海に下りて、網は下から急いで持ち揚げます。もう、これを皆で早く揚げないと、シジャーが戻ったり、こっちに向って来るから危険です。

シジャー獲りは、間違えると危険なことが多いですよ。旗立って、スルヂナにくっ付いて泳いで、魚を網に追込んでいく時に、ここに少し尖がった曲いがあったら、シジャーはすぐそこに突っ込んでくる。

だからこの時が一番危険。きれいに丸くなっていたら、そこを回って行って、また帰るから大丈夫だけど。

引っ張る時、スルヂナが変な曲いになったら、すぐそこに飛び込んでくる。また、泳ぎながら追込んで行く時に、傍の人が速く前に進んで、一方が遅れてしまうと、後列の人の側に、シジャーが飛んで来る。その時は早くここから退かんと、シジャーに刺される、これも危なかった(笑い)。



尖閣で多く獲れたマーシジャー(おきざより)、嘴が鋭く突っ込まれると危険。

3ヵ年 事故1回だけ シジャーに足刺されて 怪我

ウチは3ヵ年やって、尖閣列島では大きな事故はないが、1回だけ、袋網から、シジャーを運搬用のサバニに乗せる時、誤って嘴が足に突き刺さって、ここをホガされて(穴開けられて)、もう血がブトブト噴出した(笑い)。痛くて歩けんし、もう急いで抜かんといかん、だけどあれが突き刺さったら簡単には抜けん。棘は小さいが針の返しがあるから。こんな怪我ですんだけど、シジャーが飛んできて、突かれたことは一度もなかったですよ。

常時は見えない どこに縄入れるか 漁労長の判断

尖閣列島では、シジャーは沢山獲れましたよ。沢山獲れるからといって、あっちに行っても、群れているのは見えませんよ、何にも見えないから。もういても、いなくても、漁労長の責任で、漁はやりますから、ここならシジャーはいるから、「はい、スルヂナ入れなさい、(袋)網入れなさい」と、やりますから(笑い)。シジャーは潮によって、いい潮の時はいなくても、すぐに大量に寄ってきます。カツオなんかとは違う、カツオはその上を鳥が飛んでいるのを見て、鳥巻き見たら、すぐそのあと追って行くけど、シジャーは見ても見えない、もう漁労長の勘1つで(笑い)。この辺をやっていたら1回で終わりにするとか、また2回やるとか、3回も同じ所いる

はずだからと、潮の流れによって、シジャーがこっちに付くか、付かないかは分かりますよ。今いっぱい獲っても、次縄入れる時は、潮が悪くて何も入らん時もありますから、潮関係で、だから、糸満では、シジャーも、トブー(トビウオ)も「潮の子」と呼んでいますよ。尖閣列島でも、あんまり沢山獲れなくても、しょち



水平線上の左に南・北小島がうっすら、右に魚釣島が見える。この合い中がシジャーの好漁場。(上原博輝 2012)

ゆう同じ所ばっかし、いてもいなくても、一応仕掛けはしておいて、漁労長の、親方の判断1つで、やりますから(笑い)。漁労長は、ブリッジの上に坐って、潮の流れを見て、向こうは付きそうな流れだから、スルヂナを入れて、取り囲んでいけば、シジャーが段々集まって来て、もう尻尾で潮をポチャポチャとやるから、ではいつ合図の旗を、權を上げようかと待ってますよ(笑い)。

クバシマ 飛び瀬、北の小岩で 網入れた、1日7回位

だけど、シジャーが来なければ、漁労長は皆に怒られるけど(笑い)。でも、尖閣列島行ったら、もういっぱい獲りましたよ、毎回満船していましたから。しょっちゅう同じ所でしたよ。(海図を指して)、この一帯がシジャーの通り道だから、もう何回も、何回も網入れてねえ。これが、クバシマ(魚釣島)だねえ、トイジーグワー(南小島の意)とクバシマ、こっちがユクン(久場島)、このユクンでもやったが、たまにしか、ユクンはイユ(魚)イキラサヌヨ一(少ないよ)。クバシマとトイジーグワー一帯が多い。

このトリシマの後ろに、ここにシーグワー(岩っ子)の尖がりがある。水面から1,2メートル突き出て、波がゴーゴーするサンゴ礁の小さな岩が2つ位あるよ。こっちが北の小岩(沖の北岩)、これが南岩(沖の南岩)となっているねえ。これがそうかもしれん、ここにも多くいるよ。こっちが飛び瀬だねえ。だからウチらが行った時は、シジャー網は、この近辺に多く入れよった。この端っこから引っ張ってきて、この辺に、これに入れたり、こっちに入

れたりして、両方に入れて、また網はこの辺から引っ張ってきて、あれに曲げたり、こっちに曲げたりして、あとはクバシマ近辺が多かった。網は、大体1日7回位入れたかなあ、スルヂナ入れて、大体半時間位経ったら曲げよったと思う。あの時は時計持っていなかったからよく分からんけど(笑い)。冬だったから日は短い、相当早く揚げないと7回はできない。魚いる場合とない場合があるから、いない場合は、揚げるのも早かった。



シジャーの漁場。大体が魚釣島、南・北小島、沖の南岩沖の北岩、飛瀬付近とほぼ決まっていた。

人食いサメに遭い スルヂナに包まり 助かった

追込みアギヤーしていたら、下にサメが来る時がありますよ。たまには人食いサメも見ます。もう襲ってきたら危険だから、その時は、大抵、スルシカー(脅し縄)を、自分の身体に寄せたら、サメは寄ってこない。このスルシカーというのは、縄の下に3斤位のチェーンを下げて、このクバの新芽、白い部分の芯を4つか5つ付けて、あれが白くて、キラキラ光るから、驚いて逃げて行きますよ(笑い)。それに下に吊るしたチェーンで地面をガラン、ガランしながら、音でもびっくりさせる。だから深い所にいる魚を、下から上に揚げるから、アギヤーというけど(笑い)。

シジャーとかトブー(トビウオ)獲りは、このスルシカーは使わない、縄にクバの芯とか、白い布とか付けたスルヂナを使う。漁労長が「はい、縄曲げなさい」と旗立てたら、皆海に下りて、スルヂナにくっついて、一緒に泳ぎながら、魚追い込んで行くさあ。

この時、ウチも追込んでいたら、傍から何か黒いのがスーッと通り去ったから、おや何だろうと、後ろ振り返って見たら、もうサメが後ろにいたですよ。15メートル位後ろに止まったまま、じっとこっちを見ている。横に縞縞がある人食いザメ、あのイッチョウサバがじっとこっち見ているさあ(笑い)。「ハンマヨー(感嘆詞)!!」、ナー(もう)ドゥマンギヤーニ(動転して)、傍にあったスルヂナを慌てて引き寄せて、手も、足も、これで身体を巻いたよ(笑い)、もうウチはスルーに包まっているから、海の中で揺れて、白くキラキラ光っている。これ見てサメは、もう怖がって、すぐ逃げて行きました。スルヂナに包まったお陰で助かった。あの時は、船止めて、船シンカがスルヂナを手繰っていたから、自分の力で引き寄せられたが、船のエンジンで引っ張っている時だったら、全然手では寄せきれない。だから、ウチはあの時は運がよかったですよ。

事故ですか、ウチ達は、3年間、尖閣列島にシジャー獲りに行って、あっちで人食いザメに食われたとか、怪我で人が亡くなったとかは一度もなかったです。

3ヶ月 船上で生活 合羽被って デッキで眠る

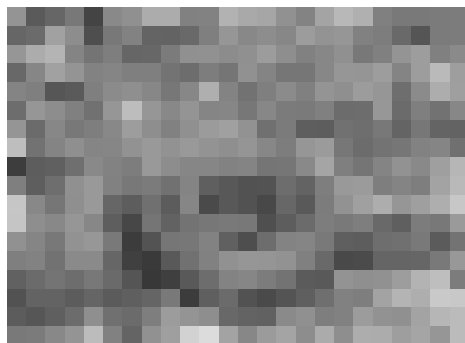
ウチ達、アギヤーの仕事は、この仕事が終わるまで、ずっと尖閣列島ですよ。あっちで、船の上でずっと生活していましたから、船の上で3ヶ月間も(笑い)、もう仕方ないです。

あの当時はあんなにしないと食べていけなかったから(笑い)。アギヤーシンカは、皆こんな生活、宮古の八重ビシなんかに行った時も、1回は佐良浜に着けて、そこから出たら、仕事が終わるまで3ヶ月間、ずっと八重ビシで、船の上で、生活してましたから。

尖閣列島でも皆同じ、魚運ぶ運搬船は、こっちと糸満を航海して、食料とか、飲み水とか、燃料とかを運んできたり、時々は油味噌とか、黒砂糖とか持ってきましたが、これがまた楽しみだったですよ(笑い)。船の上での生活といっても、全部部屋には入らんから、上の人とか、先輩達は部屋に寝ていて、もう、ウチらみたいな若者は、デッキの上で寝起きです。雨降りの時は、合羽被って、廊下とか、網の上で眠っているんですよ。炊事場とか、あっちこっちでもねえ。運搬船が航海している間、仕事しない、こっちの船に氷積んでいたらワザ(業、仕事)できるが、氷積んでないし、魚腐らすからできん。だから、運搬船が氷積んでくるまでは、皆チャーユクイ(ずっと休憩)ですよ(笑い)。

クバシマ ヘビいるから 上がらない 山頂に旗竿の竹

運搬船が行って戻ってくるのは、大体1週間から10日位かなあ、それまではチャーアシビ(ずっと遊び)。その時、ウチはあんまり島に上がらなかつた。クバシマに上がった時、あっちに昔のカツオ工場があった、石垣で屋敷は囲まれていたから、また前の方には、小さな港が造られていて、クリ舟が入る位の港がありますよ。これを見て、少し山に上がろうとしていたら、黒いヘビ、トカラーとって、これ位大きなヘビがいて、2メートル位はあると先輩達が話していた。ウチはもうヘビは苦手で、怖いから、山には上がらなかつたですよ(笑い)。このクバシマの山の上に、竹がねえ、今浮き流しフェナー(底立延縄)で旗竿に使っているあんな竹が沢山生えてある。先輩達が上等な竹だからとって、沢山採ってきていたから、この山の上に竹があるかと聞いたら、あぁマンドーンドー(沢山あるよ)と言っていたさあ。長い竹でなかつたから釣り竿にはどうかと思う。だけどウチは山に上がって見ていない。採って来たのを見ただけだから分からん。



尖閣諸島にいるシュウダ (新納義馬 1979)

水がなくなったら、トイジグワー(南小島)から汲んできましたよ、クバシマに上等な湧き水や川もあったがウチらは分からなかつた。あの時は、仕事終わったら、夜はトイジグワーの傍に、南側にアンカーかけて、眠りに来ていたから、水汲みは、このトイジグワーしか行かなかつたです。昔造ったタンクがあつて、そこから水汲んできて飲みました。

鳥糞臭いか分かんが、これしか水はないから飲みましたよ(笑い)。

ウチはこっちの山にも上がらなかった。ヘビがいたらもう大変だから(笑い)。山に上がって、鳥捕ったり、卵採ったりする人もいました。

台湾船、糸満の人から教わり シジャー獲りに

尖閣列島は、潮の流れが北東に速い、その時に北風なったら、波がこんなに高くなるから、そんな場合は仕事休みます。この辺でも同じですよ、ヒーソー(引潮)に南に潮が流れていく時に、南風がバァーバァー吹いたら、逆風みたいな格好で、もう潮と風とぶつかりあって、波が大きくなりますよ。波が高くて、仕事できないと、すぐクバシマの島陰に避難しました。避難しに来た船ですか。自分の相棒の船しか見ていない、あの時は終戦から10年ですから、他所の船はあんまり見たことなかった。1回は台湾船に糸満の人達が乗っていた。台湾船は突船じゃない、シジャー獲りで来ていた。

ジョーガニクヌヤー(上兼久屋)の大城いさむアッピーター(兄貴達)が、台湾人にシジャートエー(獲り)を教えて、一緒に乗って来ていたんですよ。兄貴達とは知り合いだから、もうお互いに喜んでねえ、船に必ず来いというから行ったよ。行ったらご飯出してくれた。あの時は、こっちはウムニー(芋煮)だから、船に米を積んでいてもなかなか食べられなかった、これもお粥みたいにしか。だから白いご飯を出された時は、もうご馳走だからと喜んで食べた。だけど食べたら、砂糖沢山入れた砂糖ご飯だよ(笑い)、これは自分達には、もう甘すぎて、とても食べられないからと、食べなかった。そしたら新たに白いご飯炊いて、食べさせてくれていたよ(笑い)。

向かって来ると 一目散に逃げて 全然獲れない

台湾船は、シジャー獲り来ていたというから2隻いたかもしれん。サバニも積んでやり方教えていたかも分かん。ウチなんか船は離れていますから、ただサバニを漕いで遊びに行っ、ご飯食べて帰って来たただけだから。実際やっているのは見てない。だけど、ジョーガニクのアッピー達が言うには、全然獲りきれないって(笑い)、「ワッターナー(俺達はまだ)、イチヤーカイ(いつになったら家に)、ケーイガスラ(帰えられるのか) ムルワカラ(全く分からない)」と言っておったよ(笑い)。ウンターガスルムヌ(これ達〔台湾人〕がやるのは)、シジャーが来たら、もう突かれると思って(笑い)、網ンムドヤーニ(網も何も放り投げて)、ナムルヒンギエー(もう皆逃げるばかり)、ヒンギエーシ(逃げて去って)、ムルウドルカーニョ(皆驚いてからよ)。だから全然獲りきれないって(笑い)。それに台湾人はあまり潜りはできんはずよ。アギヤーシンカは相当いないといかんが、あれはどうしていたかなあ、台湾船に糸満の人は4,5人しか乗ってなかったようだが、あれも教えていたのかなあ、どうして指導していたか、それは分からない。あのジョーガニクの大城いさむアッピーは2,3年前に亡くなった。生きていたらもう94,5になったはず。元気な時に、あの時のことをちゃんと聞いておけばよかった。

3 ヶ年行って配当 小遣い程度 ご飯食べれたらいい

尖閣列島に3 ヶ年行って、相当配当貰いましたかって、いや、貰いませんよ(笑い)。こんな団体事業は、個人は10分の1ですよ、あのトモヌイ(網元)が、アギヤー網出したり、船出して、自分で3 儲け4 儲け取りますから、この袋網の儲け、船の儲け入れたら、やがて、親方で7,8 儲け取りますから、ウチらシンカの、船員の儲けは、僅かしか残らない。

ウチなんかは1 人前といっても、配当は小遣い程度でしたよ。飲めば一晩でなくなりよったから(笑い)。アギヤーシンカは、全部親方へのグークー(奉公)ですから(笑い)。

だけど、あの当時は、量は沢山とったけど、儲けはそんなになかったかもしれん。相当厳しかったはずだから。それに、今はいろんな仕事があるけど、あの時は追込みしかなかったから、もう何にもない時代でしょう、食べるものもないし、芋でもあまり食べなかったですよ。だから、アギヤーの仕事に行つて、そこで腹いっぱいご飯食べれるだけでもいい方でした。尖閣列島に行つて、船の上で3 ヶ月間、生活して、合羽着てデッキで寝ていても、別に大変とも、苦しいとも思わなかったです。こんな仕事があるだけでも有り難い、食べられるだけでも有難かったです(笑い)。あの頃は、そんなしないと食べていけなかったですから、もう皆、食べるのに、生きていくのに、一生懸命でしたから。

22 の歳から2 ヶ年 糸満サバ船 乗る

サバ船乗った時は22、シジャー獲りして少し遊んでから、サバ船に乗った。これは姉さんの夫がサバ船歩いていたんですよ。だからあの人が辞めるといったからウチの代わり、お前乗りなさいといつて、乗ったのが、上原信繁さんのサバ船に乗ったんです。

・ ・ 以下は「1-2、サバ漁業関係者」の項に掲載。

そのあと12 ヶ年間 マグロ船乗って 配当70~100ドル

サバは2 ヶ年位乗つて、またすぐ辞めて、マグロ船に乗りました。那覇の泊にいて、与那嶺三郎さんのマグロ船、第一幸丸に12 ヶ年乗つたですよ。サバ船に乗つた時からは、配当はよかったです、大漁した場合は60ドル位はあったかなあ。120トンの船にサバをいっぱい積んで来よつたから。でも、それは大漁した場合の話、普通は15日で15ドルは儲けきれなかった。1ヶ月で30ドルは全然儲けきれなかった。だけど、与那嶺さんのマグロ船、第一幸丸は、40トンの木船、あれでは近海歩いてから。フィリピンの東側よ、こっちから5昼夜走らして、あの辺でマグロ延縄やっていたんです。相当大漁して、あれで八重山近海歩いて70ドルから80ドル、フィリピンに行つたら、月に100ドルから落ちなかったです。

幸丸は、与那嶺さんら親方6人で株していたが、親方さん達も相当儲けたはずですよ(笑い)。もうウチらがアギヤーしていた時とは、儲けは比較にならない。だけど、アギヤーしていた頃は、何にもない頃だし、また、親方も、ウチらアギヤーシンカも、誰も、儲けられる時代でなかったですから。(了)

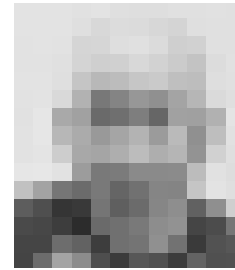
松川 国夫 まつがわくにお（糸満漁協）

1933年(昭和8年)、宮古島城辺に生まれる。80歳(2013年時)。

6歳に石垣に移住、14歳から17歳、カツオ船のエサ採りに従事。

17歳に糸満に素潜り仕事で来、尖閣諸島には密航船に売る魚を獲りに行ったり、ダツ漁、ダイナマイト漁、曳き縄でカジキ突き漁を行う。

47歳(1981年)には、国丸(3.5トンのち5トン)を建造し、北は徳之島から、南は宮古・八重山から、波高き尖閣諸島に出かけて、単身で操業する。まさに海ヤカラー(勇士)である。



国丸造って 一人で 尖閣に 一本釣で

僕は海に行かなくなってもう1年余りだ。腰痛ヘルニアで漁ができなくなったから漁師はもう引退したさあ、歳もやがて80だよ。76,7まで持っていた国丸も他所に譲った。この船を造ったのは、47の歳(1981年・昭和56年)だったかな。3.5トンの小さな船だが。

この国丸に独り(単身)乗って、尖閣列島には、深海一本釣りで行きましたよ。この船を持つ前は、伝馬船1トン半をもっていた。またサバニも3つ持っていた。2トン位のサバニだったから、主に沖縄本島とか、慶良間沖周辺に行った。大九や、宝山とか、ミズニーグワー(西大九)辺りは、オオマチ、アーラ(ハタ類)とか色んな魚が食う。また、宝山の北と南でカジキが釣れるさあ。2トンのサバニだとそんなに行けない。国丸を持ってからよく行った。また、尖閣列島とか、与那国の西、台湾の近くのソウノセまで行ったよ。そのあと艫を40センチ位伸ばして、3.5トンから4.5トンに、馬力を70から90馬力に改造した。それで、遠くの海にも、南の海とか、ニシ(北)の海にもねえ、徳之島の南にソネがあるわけ、そこで漁をして、沖永良部へ行って、そこから、与論へ行って帰ったりして。



試験航行する国丸、真ん中が松川さん、他は試験者

僕は、国丸持ってからは、ひと月に大体23日は海に出て、1週間位しか家にはいなかったから、オカ(陸)のことは知らない。

大九・宝山で 釣れないと アカオ・尖閣へ

1人漁だから、殆どが曳き縄と深海一本釣りだけ。尖閣列島ではアラミーバイからアカマチとか、マーマチ、ヒラマチ、タマンとか、タイ類を釣ってきた。普段は、沖縄本島近くで釣るが、そこで釣れないと、大九に行く、大九で釣れないと宝山へ、宝山で釣れないと、アカオ(赤尾嶼・大正島)へ、アカオへ行けば、尖閣列島はもう目の前さあ。

クバシマ(魚釣島)から、トリシマ(南小島)、イシジマ(北小島)、ユクン(久場島、黄尾嶼)

と廻って漁をする。いい漁場だよ。トリシマとか、クバシマの傍で、アカマチやテグロアカマチ(ロンコー?)、クルキン、シチューマチがいっぱい釣れた。少し浅瀬に行くとマーマチが。夜暗くなってから日が落ちてから、マーマチから、シールから、色々釣れる。

向こうはサバもいっぱいいる。魚探で見るとすぐ分かる。群は真っ赤にしているから、マーマチも夜はあんなに見えるよ、サバは、20本釣針つけたら、20匹はすぐ食う。だけど、日持ちが悪く2日で傷む。儲けないから誰も、サバ獲らないですよ。やっぱり、狙うのはアカマチとか、マーマチとか、マチ類だ。

糸満から行く時は、八重山に行く、7時間位かかる。八重山から、尖閣列島へも7時間位。また宮古からアカオまでは7時間、アカオから尖閣までどの位かかったかなあ。航海日数は大体1週間から10日位だった。島の近くで魚釣ってから、島のカタカ(島陰)に行っておアンカー下ろして眠って、また夜が明けると始める。

大体がこれの繰り返し。それで魚が獲れると、八重山や宮古に行って、水揚げし、燃料詰めて、そこからまた尖閣へ行った。



客間に飾ってある見事なアカマチの剥製
西大九ソネで捕獲、尖閣でも同じ物が釣れる

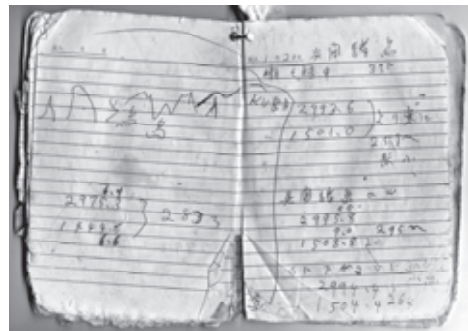
一日半で1トも 日時と場所 帳面に記す

ある時はクバシマから3時間位の所で、1日と翌朝の9時何分かまで、1日半で千八百斤余り釣った。1ト余り、船内いっぱい、アーラミーパイから、アカマチから、タマンから、タイ類の大物、もうダンブルいっぱい、すぐ八重山に行き、また積み込みして、また行って、そして糸満に帰って来たけど。いつもの帳面に、あの時に釣れた場所と日時を書いてあるから、漁師仲間が、その話を聞いて、帳面貸してくれといったから、「いいよ」と貸して上げた。

そしたらねえ、「ワッタガー(俺達には)、分からん」と言って返してきたよ(笑い)。分かったら大変だ。他所の人には漁場がどこにあるか分からんように記号で書いてある、企業秘密だから(笑い)。

あの時分はCローランで記号だから、今見たいにGPSだったら、すぐ緯度経度で分かったはずだが(笑い)。釣れた場所と日時を書いた帳面は、何冊もあったが、もう漁師をやめて、家を引越したりして、大分失くしてしまった。

ある時、漁師仲間「尖閣ヤ(は)、マーガ(どこが)、マシヤガ(いい漁場か)」と聞かれたから、釣れる場所に連れて行ったこともある。その時は、糸満から充丸(6ト、船主大城亀一)、初漁丸(8ト、船主上原三郎)、千恵丸(8ト、船主久保田操)の3隻を連れて行った。



釣れた場所と日時を記した帳面、この頁に尖閣諸島・「鳥島、KUBA(クバシマ)」とある

そしたら、アカマチから、チョウチンマチから、アーラから、したたか大漁してねえ、とても喜んで、お陰でこんな釣れましたと、お礼を言っていた(笑い)。

悪天候 島影で いい天気 島の外で漁

尖閣列島では潮の流れが速い、夏はそれほどシケないから安心だが、台風が怖い。冬行くと波が荒くて、シケで仕事できないことが多い。波は殆ど北東、北風で波が荒くて天気が悪い場合は、島のカタカ(島影)でしか漁はできない。それだと悪い魚しか食わない。プープグワーとか、シチューマチの小さいものとか、いい天気なら島の外に出て、タイ類とか、カンパチ、マーマチ、クルキンとかが釣れる。魚釣島の近くだったらマーマチ、シルリュ(タイ類)、ガーナ(タマミー・シルシチューの大きな物)も釣れる。

それに魚は食う時間があるよ。真っ昼間はダメだ。大体3時から4時頃がよい。朝は太陽が上がる瞬間と10時位はよく食う。また、潮が悪かったら魚がいくらおっても食わない、全然食べない。これは僕の経験だが、キタナー(幹縄)を掴まえているから、オモリが底に着いたらすぐ分かる、その時、縄に弛みがあったり、重たかったりして、潮が引っ張ったり、浮かしたりしている時は、絶対に魚は食わん。その時は工夫して、ちょっとエサを動かしたりして(笑い)、魚を騙さんといかんから。また、エサの付け方を工夫するとかして。

漁は、もう魚とジンプン(知恵)スープ(勝負)だからねえ、(笑い)。

あの時分は、保安庁の船は2隻いて、尖閣列島を巡視していたが、台湾船はシケている時でも島には寄せ付けなかった。だから、波が荒くなると、台湾船は「ナー、ワザナラン(もう業、仕事できない)から」と帰って行くさあ。国丸は、14、5メートル位荒れ出すと、もう危険だからと、島のカタカに避難したよ。波は、北東から北へチャーハイ(流れっ放し)だから、北風なら、大体4メートル近くまでは普通に仕事をする。

尖閣行く船 沢山いた 糸満 底立延縄船 10何隻

あの時分は、尖閣列島に行く船は沢山いたよ。あっちこちに船は見えていたから。いい天気の時船は多かった。糸満からは浮き流しフェーナー(底立延縄)で10何隻も行ってた。曳き縄でジューガジラー(シマガツオ)を釣りに来た船もいた。宮古からも何隻も行ったはず。アヤガチュー(ホンガツオ)も食うけど、シマガツオがもういっぱいいる。あまり食うものだから、糸満からも、シマガツオ釣りに行って400疋から、500疋を釣ったと聞いた。トイジー(南小島)とクバシマの灯台建っている近くは、もうたぐりきれないほど釣れる。だがシマガツオは、キロ2.3百円はしたかなあ、あれは節にもならんから、あまり金にはならないと思うが。八重山のアガリグヤ(東小屋：糸満系漁民集落)の船にも遇った、3隻だった。マチ釣り船で、シチュウマチとか、ププーとか、マーマチを釣っていた。一人はトシオという、ワッターチルミー(同年輩)。糸満からも一本釣で行っていた船もあったが、一人乗りで行ったのは僕だけ。向こうで二人乗りの船に遇ったことはある。那覇地区の垣花の船で、兆福丸とか、瑞幸丸とかに。兆福丸は外間安健さんという人だ。瑞幸丸は

シンコーヤッチー(真厚兄貴)といいよった。外間さんも海やめてからもう 10 年位なるはず。

一人乗り船だから 何回も 命拾い

国丸は、一人乗り船だから危険なことは多かった、尖閣列島では、潮の流れが速いから、カジマーイ(風回り)したらもう大変よ。すぐ島のカタカ(島陰)に避難しないと。大シケだから潮は変速して、艦がカジワラ(風の逆方向)に向うから、とても危険だ。

風上から波が来るさあ、艦のデッキいっぱい波を被って、船を風上に向けてから、エンジンをストップさせんといかん。大波がどっと来て、ダンブルにも水は入るし、急いであっちこっちも閉める、これは船走らしてからは間に合わん。こんなことを一人でするから、あれやこれやしている間に、船はドンドン流されて行くから、島の方に。もう島にぶつかれば座礁するさあ。座礁したらもう終わりだから。命も船も捨てんといかん(笑い)。

こんなことが何 10 回もあった。だから天気予報はいつも聞いていたねえ。何回も命拾いをしたから、尖閣ではいつも危険は付きものさあ。

船はいつもピカピカ、お陰で 水揚げ糸満一

国丸で、宮古、八重山とか、大東島とか、尖閣列島とかを廻った。一航海は大体 1 週間から 10 日位。漁から帰ってくると、家内(初子)がすぐ掃除してくれた、国丸はいつもきれいだった。2つの巻き上げ機(釣機)も油を塗って、いつもピカピカだった。船を大事にしていたから、僕もやり甲斐があった。あんたの船は何年経ってもきれい、いつも部屋は整理整頓されていると、皆に言われたよ。国丸でひと航海 7,80 万円水揚げしたのは何回もある。100 万円超えたこともあった。

3ト未満の部で糸満で一番にもなった。3年連続だったと思う。沖縄県水産振興会から優良漁業者、また産業まつりで県知事からも、水産部門で表彰もされた。これも、船をいつもピカピカしてくれたお陰だと、家内に感謝している。

今考えると、あの国丸に乗って、自分独り乗って、沖縄中の海をよく歩いてきたなあと思う。沖縄本島から、慶良間、久米島、徳之島、沖永良部から、大東島とか、また宮古・八重山、与那国近海から、尖閣列島まで行ったからねえ、台湾近くのソウノセへも行ったよ。

僕が、尖閣列島へ初めて行ったのは 17 歳の時だ。家内の親父(宮城三郎・故人)の船に乗せてもらって、初めて行った。



飾棚に水揚げ高優秀で表彰の優勝カップが所狭しと並ぶ

14 歳から 八重山で 海仕事 17 歳 糸満へ

僕は、宮古島の城辺で生まれて、6 歳に八重山に移住した。昭和 17 年戦争が始っていた時は 9 歳、小学 4 年生で、台湾に疎開した。そのあと石垣に引き揚げて来たが、もう 14 歳

から海の仕事をやった。最初は、運搬船のハンメースガヤー(飯炊き)をした。あの時は大変きつかった。そのあとカツオのエサ採りをした。終戦直後の八重山は、カツオ製造工場が幾つもあった、製造の時期になると煙突から煙も上がって、相当賑わっていた。僕はマルノーのカツオ船、友福丸のエサ採りをした。仲田屋の勝ちちゃん兄さんとカミジューと僕と3人で、潜ってカツオのエサ採りを3年間、17歳までやっていた。

そのあと沖縄本島に、糸満に潜りの仕事をしにきた。終戦6年目の1951年だ、5,6月頃だったと思う。嘉手納の海に、艦砲の薬きょうとか、機銃の弾とかがいっぱいあった。そこでスクラップ船の引き揚げとか、薬きょう採りとかの潜りの仕事していたが、冬はできないさあ。それで家内の親父(サブローオト)に出会って、いろいろ世話になり、船に乗せてもらった。その船で、初めて尖閣列島に行った、17の歳に。家内の親父に連れられてねえ。船は14,5トで乗組員は7名位だった。船名は忘れた。船長は西銘トッコウスウ、もう1人は名前忘れたが、肥った人で船長代理だった。

尖閣で魚獲る 密貿易船に 魚売るため

あの時分は、香港ルートの密貿易全盛時代。沖縄から香港に、薬きょうを持って行けば、もう一航海するだけで1軒家が建つと言われるほど儲けたからねえ。親父達が、尖閣列島行ったのは密貿易船に魚を売るのが目的だった。糸満から香港に真鍮類、薬きょうを持って行って売ってから帰りに何もなかったら、警察にどこに行っていたかと言われて捕まるさあ。それで魚買うから、魚食わして待っておくと相談して約束して、向こうに漁に行った。もうどんな魚でもよいさあ。だから、アカオではトカキン(イソマグロ)とか、ツムブリとかの安い魚をよう釣った。クバシマ(魚釣島)でも大部食いよった。

夜は、また親父がクバシマとトイジグワー(南小島)の合い中で、ツムブリをしたたか食わして、夜中まで起きて一人で釣っていた。朝はクバシマの西側、海岸から見える近くでシチューマチ、マーマチを親父が釣ったら、僕らは加勢するだけ、魚を持ってダンブルに入れるだけ、冬場行ったので、波は相当荒かった。向こうは少しでもニシカジ(北風)になると大変だった。魚は沢山釣ったよ。だが幾ら待っても船は来なかった。もう時間はない、魚は腐るさあ、それでもう帰ったわけ(笑い)。トカキン、ツムブリは安い魚で、日にちも経っている、もうカマボコ行きで儲けはなかった。糸満に持って行っても、金にはならなかったさあ。同じ年に、親父の船で、また行ったよ。

2度目 深海一本釣で 初めて島に上陸

今度は、密貿易船へ魚を売るためではない、2回目はタテナー(縦縄、深海一本釣の意)するため、11月から12月頃に行ったが、向こうは冬は荒れやすく危険だが、親父は魚がいっぱいいるからといって(笑い)。あの時分は、糸満にはゼロ番地に氷屋があったが、氷は簡単には買えなかった。メージョーの氷屋で角氷を積んで行った、航海日数は大体12,3日位、今だとそんなにかからない。クバシマの鯉工場のあったすぐ近くから魚が食いよった。

いま灯台建っている所のすぐ北側かな、そこから曳き縄を引っ張るとカツオがいっぱい釣れた。シマガツオからホンガツオから大きかった。

一本釣のエサは、今はサンマとか、サバとか、ムロアジとか、沢山あるが当時はなかった。それでカツオを食わしてから、これをエサにしてやった。クバシマのすぐ傍で、いい天気の時トリシマの北東、トイジグワの南側の半時間位の所で釣った。アカマチとか、マーマチとかはあまり釣れなかった。

2回目はあまり漁はなかった。その時にクバシマに初めて上陸した。昔カツオした跡があった。灯台の近くの処にあった。石積みをして、大きな石門もあり立派な造りに驚いた。先輩から昔のカツオ工場跡と教わった。親父は上陸しなかった、向こうは船を着けるのが大変だから。海鳥がいるトイジグワは下りやすい。南の方に、伝馬舟ではなく、船から直接下りて行けた。夜に上陸したが暗くて危険だった。崖になっているので怖かった。カツオドリを捕るといって、崖から落ちて怪我したり、落ちて死んだ人もいと聞いていた。海鳥の卵あるかと探したがなかった。親父もすぐ引き返して来た。

親父は「垣花サブロー」 終戦直後、垣花マチ船で 尖閣へ？

親父は尖閣に詳しくあったから、向うへは何度も漁で行っていたはず。トイジグワに上ってから鳥を捕まえて、羽根を脱いで皮剥いで氷漬けで家に持ち帰った話もしていた。家内が小学生の頃だから、私らと行った1、2年前じゃないか。親父は深海一本釣り専門、もともと名護の人だが、戦争終えて南洋から引き揚げて、那覇の垣花(現那覇地区漁協)にいて、そこで一本釣りの船に乗っていたそうだ。



義父宮城三郎 尖閣の漁の手ほどきしてくれた

だから「垣の花サブロー」と呼ばれていた。親父がどこの船に乗っていたかは聞いていない。垣花の漁師は一本釣りによく尖閣列島へ行っていたというから、親父もこのマチ船に乗って行っていたと思う。向こうでは魚はよく釣れたはず、だから僕を連れて行ったんじゃないか。尖閣列島での漁を最初に教えてくれたのはサブロー親父だ。

そのあと、シジャー(ダツ)獲りに行ったさあ、翌年18の歳(1952年)に、よその船でねえ。

18歳 シジャー獲りに 経験不足で不漁

糸満では、終戦直後からシジャー獲りは盛んだった。あの時分はシジャーは全部カマボコの原料だった、和200~300円位もしよったから。

僕が連れて行かれたのは、アークンスー(元糸満漁協組合長上原徳助さん)の船だったかな。あの時分は「イクミ(行くねえ)」、「はい、リッカ、リッカ行かな」と言って行くだけだから。

20ト位の船で、船名は共栄丸だったかなあ？ 忘れたさあ、航海は10日間位。シンカ(仲間)は17.8名だったと思う。尖閣列島にはシジャーは沢山いたよ。群れでサットと飛んで来るからものすごく危ない。トブー(トビウオ)と違って、嘴が尖っているから。これが何百ナ

一、サッサッサーと群でいっぱいいたけど、だあ獲れなかったさあ。

あの時は、縄を引っ張って網を入れて沈めていくが、天気も悪いし、潮も速かった。

本船とサバニ1艘だけだった。網も3,4回程しか入れなかった。シジャーは大きくやらないとダメ、トビウオの場合も同じ、専門ならいっぱい獲るが、下手くそなら同じやり方しても獲れない。私らシンカは経験がなかったと思う。シジャーが少ないからと、そのあとクバシマ(魚釣島)で、ハッパ(ダイナマイト漁)をした。

ダイナマイト漁 ハギ20和しか 獲れず

普通ハッパは2合瓶や3合瓶に火薬入れて、それにニチビ(導火線)を付けてやるけど。

あの時は、20リッター缶、1斗缶にだよ(笑い)、それに火薬を詰めて持って行った。

火縄(導火線)は3本付けてねえ、1尺4寸、5寸、3寸と長さを調整した。

僕ら2人は前に櫂を持って乗っているさ。後ろの先輩2人がダイナマイトを肩に担いでいる。「トウ(それっ!)、ヒーチキレー(火を点けれ)！」と火を点けて、「一、二、三、ハイ」と海に投げたら、「トウ、ハイ、ク(漕)ゲー！」の合図だ。もう一生懸命にサバニを漕いだよ(笑い)。4,50メートル離れたかな、ボワンみかして、ものすごい音と一緒に、大きな水柱が上がった。だが、魚はあまり浮いてこない、なぜか、上には浮いてこない?。なら、下にいっぱい沈んでいるだろうと思って、僕は急いで飛び込んで潜って見た。そしたら、潮の流れが速くて底は見えなかった。ハッパのあとにすぐ潜るのは、ほんとは危険、サメが魚食べにすぐ走って来るから。それに向こうはサメ所だが、サメが来なくて運がよかったよ。

潜って底見たら、底には何もなかった(笑い)。「ないよ」と言ってすぐ上がったさあ。

結局、獲れたのはヒレーカー(テングハギ類)だ。20和位で2,3和ほどの小物だけ(笑い)。

ハッパした魚は、外から見では分からないが、中身や骨はグジャグジャしているから安くなるし、ヒレーカーも安い。和100~200円しかしらないから。向こうは魚はいっぱいいるが、ダイナマイトを入れた所が深すぎたので獲れなかったかもしれない。

ハッパでは、ニチビを短くして、タギヤー(浮き魚)を獲るやり方もあると聞いたが、1斗缶では無理だろう、直ぐ底に沈んでしまうから。

あの時、17,8名行ったが、僕が1番若かった。もう60年余り前の話だから皆亡くなっている。ダイナマイトに誰が火を点けたかなあ、もう忘れてしまった。1人は八重山の人だったはず。帰りの船で、ボス達がシジャーの内臓を美味しそうに食べていたのは憶えている。ハンメースガヤー(炊事係)は、毎日同じもの食べさせられない。いつも同じものだと飽きる。シジャーの内臓は美味しいから、これはボス達のタマシ(特権)だった。僕等らペーパー(平船員)には、とても当らなかつたわけよ(笑い)。

19歳 南方へ貝採りに、ジコーアワレした

そのあと、19歳にパプアニューギニアに高瀬貝採りに行って、ジコーアワレ(大変な難儀)したさあ。大城組の栄丸で行った。総勢34名だったかなあ、僕ら5名が先に島に上がった

ら、島にいた兵隊がいきなり発砲したよ。機関銃がパラパラパラ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、まるで「暁の大脱走」映画そのまま。1人は撃れて即死、1人は捕まって、僕ら3名はヒシに着けている刳り船目掛けて一目散で逃げてきた。

刳り船のウエーク(櫂)、これも機銃でやられていたよ。栄丸に乗らないと帰れない。栄丸まで辿り着いて、やっと刳り船を乗せた。そのあとがアワレよ。

20日の間、航海中水はない。ドラム缶に溜まった上澄みを舐めるだけ。食事は曳き縄で釣ったカツオの切り身一口だけ。ご飯はあるが食べられない。汚れて真っ赤に錆びた溜まり水で炊いてあるからドト^ロ。もう皆シニガター(半死半生)さあ。

やっとフィリピンの北島まで来て、「ああ、助かった。ここに水があるから」(笑い)。

だが、島には監視兵がいた。夜中に、気づかれないようそっと水を汲んできて、これでどうにか生き返ってねえ(笑い)。それから沖縄に向かったけど、そしたら、今度は途中で大シケに遭ったよ(笑い)。船は壊れて、デッキからは水は入ってくる。もうカシガー(カマス)を解いて塞いで、やっとのことで沖縄に帰って来た。そしたらまたアワレさあ(笑い)。

待っていたのは監獄だから、(米国民政府公安部に領海侵犯の連絡が来て)、もう大慌てで慶良間に逃げて、慶良間は危ないからと、名護に逃げて、また糸満の前の島に隠れて、そこから伊江島に逃げて、もう逃亡者になって(笑い)。最後に八重山に行ったが、もうあの時は大変アワレしたよ。帰って来た時は、19歳になっていたから、19の年は、ほんとに厄年だと思ったねえ(笑い)。

そのあと新南群島に2回、高瀬貝を採りに行った。カイフク丸ともう1つは何丸だったかなあ。その時は相当穫れた。12.3メートルの深さにいるから潜って採るが。僕は一番になったこともあった。全部で3万斤も採れて、高瀬貝は高かったから、一人当たり配当が3万円(米軍票B円)だった。採った貝はダンブルに、次から次へと入れて中身は腐らして、糸満の女の人達が、八重山では、アガリグヤの女の人達に、貝殻を洗わせて、貝ボタンを作る材料にした。

23,4才 第一清徳丸で、尖閣へ バシヨウカジキ漁

八重山から糸満に戻ったのが23,4歳(1957,8年)、家内の親父に紹介されて、今度は馬天の當眞正庸さん(故人)の清徳丸に乗った、第一清徳丸に。

僕が乗る3年前(1955年5月)に、當眞さんの清徳丸1号と3号がクバシマで漁していたら、3号がジャンク海賊船に襲われて、當眞さんの次男正徳さんら乗組員3名が殺された事件があった、新聞に大きく載った事件だが。その時、船の表(船首)に下がって隠れていて、運良く助かった人がいた。玉那覇善一さん(故人)という人だ。その人と1号と一緒に仕事したことがある。乗組員は6,7名だったかなあ。

尖閣列島で漁をしていた時のことだが、突台の先に2人立つさあ、玉那覇さんも立っていた。その時は海は大シケだったから、ここにおったら危ないと思って1人が後ろに退い

たら、突然大波が来て、玉那覇さんが波にさらわれて、突台から投げ飛ばされた。もう血はゴーゴー、倒れて動かないさ。もう皆死んでしまうか思ってびっくり、急いで助け起こして、「大丈夫か、大丈夫か」と聞いたよ、そしたら、目を開けて、「サーターミジフサン（砂糖水ほしい）」と一言、(笑い)。それ聞いて、皆ほっとしたのを覚えている。それから急いで宮古へ船走らして病院へ運んだ。そのあと尖閣列島へ戻って、カジキ突きを続けたわけだが。

當眞さんの清徳丸はまぐろ延縄とカジキ突きが専門だった。あの時の1号は、尖閣列島ではバショウカジキを4、50本は獲った。ヒコーネさん(八重山の人)が突き手だった。今やっているカジキ釣りと同じ、あの頃はサンマをエサにかけてから、カジキを艦で食わしてから、ワイヤー縄を引っ張ってから、表に持って行く。向こう行ったらたぐるわけさあ。

たぐって突く、突いたら真ん中へ持って行って揚げる。カジキはインディアンといった羽根よ、波間からサッサッサーと群れをなして行くのが見える。それほどいっぱいいた。カジキが食わなくなったら、トイジグワ(南小島)の後方で一本釣りをした。マーマチとシチューマチ、プープグワを大部食わしたよ。

清徳丸1号はまぐろ延縄もした。大体2月頃、漁場は沖縄本島周辺や大東島近海でやった。ある時、ウシビ(クロマグロ)を7本も食わしたこともある。あの時分は釣ってきても食べる人はいない、全部カマボコ行きだった、今なら考えられない。

譲った国丸 尖閣で漁 すぐ分かった

そのあと36歳から43歳頃までかねえ、ハワイにカツオ漁をしに行った。日系2世が経営する会社に雇われて、その時にアサヒガニを知って興味をもった。糸満に帰って、1年ほどしてから、またハワイに行ってアサヒガニの採り方なんかを習って、沖縄でやってみた。

しばらくしたら、皆が真似したからアサヒガニは辞めた。そのあと船持って、一人で漁をやることにした。最初に話したようにねえ、それで伝馬船1ト半をもって、また2ト位のサバニ持って、近海とかでやっておった。そのあと3.5トの国丸を造った。この国丸に自分独り乗って、宮古・八重山とか、尖閣列島とか 遠くに行行って漁してきた。

もうヘルニアで歩きにくくなったから、1年余り前に、77,8の歳に、漁をやめたさあ。

それで、国丸は、あの糸満で県の漁業担当していた長嶺巖さん(現伊良部漁協組合長)ねえ、あの人に船譲った。この前テレビを見ていたら、あの国丸が、尖閣列島で漁していたのが映っていた。拓漁丸の船名にして色は少し塗りがえているみたいだったけど、すぐ国丸と分かったよ(笑い)。あれは船大工の宮良貞光さんに造って貰った上等な船だった。大漁船だったから、すぐ分かった(笑い)。テレビに映った尖閣列島を見ていたら、自分が向こうで漁をしていた時のことを思い出した。いろんなことを(笑い)。

僕も、この腰痛ヘルニアを早く治してしてからに、早く元気になりたいねえ。

(了)

上原 常太郎 うえはら つねたろう (糸満漁協)

1940年(昭和15年)、糸満町に生まれる。72歳(2013年時)。

漁家に生まれた氏は、学校を卒えるとサバニを仕立てて、近海浅瀬で、延縄、トビウオ追込み漁を行っていたが、40歳(1980年)には、常丸(7.7ト)を建造し、尖閣諸島に底立延縄で出漁する。以来、今日に至るまで30年間、同島を主漁場にマチ釣りを専業。1978年200余隻の中国武装漁船団が、尖閣諸島に押しかけて来た。これを契機に中国トロール船団の進出が次第に常態化し始める。身近にこれを遭遇・体験した氏から、中国漁船団の進出のようすを話していただいた。



ウミヤカラー(海の勇士)・糸満漁民、今なお尖閣で、マチ釣り 浮き流し延縄漁と中国船団の進出のようすを語る

中国公船 尖閣に居座り 出漁できず

— 尖閣諸島へ、今もマチ釣りに行かれているんですね。去年(2012年9月)の政府の国有化以降、中国監船が居座っているため、出漁してないと聞きましたが。

上原：そうです、中国の監視船が何隻も尖閣列島に来ているから、保安庁はもうあっちは危ないから行くのは控えなさい言うし、今年はまだ行ってないですよ。ウチはソデイカと兼用してやっているが、今年は、このソデイカ漁はよくないから、イカを早めに切り上げて、これから尖閣列島にマチ釣りに行く予定でいますけど。

前に中国漁船が体当たりした事件(2010年9月)がありましたねえ。あの時もワサワサ(騒然)として、長らく行けなくて困りましたよ。だけど、今の状態は全然違う、海監とかいう中国の船が、あれが何隻も押しかけてきて、尖閣列島はもう中国のものだからといって、日本から盗み取ろうとしているさあ(苦笑)。向こうに行つて、あれに追いかけられた船もあるし、もう怖くて簡単には行けなくなっているから大変困ってます。こんな状態がいつまで続くんですかねえ。どうにかしてほしいです。

糸満 元々追込み 終戦直後 ダツ・トビウオ漁

— 尖閣諸島に、以前のように安心してマチ釣りに行けるといいですねえ。ところで、糸満は元々追込みの網漁が専門で、このマチ釣りはあとからやりだしたですねえ。

上原：そうです、糸満は昔からアギヤー追込み専門ですよ。終戦直後も、それでシジャー(ダツ)とか、トブー(トビウオ)なんかを獲ってました。シジャーは冬場だから、その時期なれば、尖閣列島辺りには盛んに行っていました。そして旧正までには家に帰ってきて、それからトブーが始まる。その時期なると、皆トブー獲りに憧れて、波照間とかに行きよったんです。船3隻だったら2隻で漁して、1隻は魚運搬しながら、魚獲ったらこっちに持ってきて、また交代で行き帰りして、追込みシンカ(組仲間)は、1,2ヶ月位はずっとあっちで仕事してましたねえ。ウチなんかその頃は、小さい組で、こっちのイノー(珊瑚礁池)

で追込みやっていたから、向こうにシンカを取られて、自分達の漁ができない位さらわれて困りましたよ(笑い)。そして旧5月頃には引き揚げて来ると、また、この近辺のチービシとか、慶良間沖とか、久米島辺りに行って、サガハマーとか、ブーカー(トビウオの大きな種類)とか獲っていた。これが10月頃位まで獲れよったから、大概ユッカノヒー(旧5月4日、海神祭・爬竜船競漕)から始めて、10月の運動会位まで、皆追込みの網漁してました。

1980年代 ダツ・トビウオ漁 廃れ マチ釣りへ

— 糸満では、この追込みの網漁から、マチ釣りにいつ頃から替わったんですか。

上原：その頃は、糸満ではマチという魚は知らなかった。ウチなんかも、浅瀬の魚タマンとか、いろいろな小魚を採っていた。タマンでも70から80メートルの浅瀬で延縄だから、深海の魚・マチ類なんかは知らなかった。また獲る人も少なかった。あれは那覇の垣花の人達が初めから獲っていた。あっちは戦前からマチ釣り専門だから。ここではトブーやシジャー獲りが段々少なくなった時分から、丁度マチ釣りが出てきて、次第に盛んになった。それまでは、シジャーはカマボコのいい材料だったのですが、もうお金にならなくなった。



上原さん親子3人乗せて尖閣に漁に向かう常丸、息子2人も漁師を継ぎ、表にいるのは次男晴彦さん。

ウチが常丸(7.7ト)を造ったのは、40になった年、その前は刳り舟を8年位持っていた。その頃には、大きな船はマチ釣り、この浮き流しフェーナー(底立延縄)をやっていた。宝正丸(船長上原正次郎79歳)とか、先輩達が、オモリをセメンや鉄筋で造って試して、どれがいいか、何知が適当かとかいって、道具を改造しながらやっていましたねえ。ウチもこの浮き流しフェーナーを先輩達から習って、これに切り替えました。もうシジャーやトブー獲る人も少なくなって、もう組は解散しかけていたし、それに前のように獲れなくなっていたはずですよ。宮古や八重山、尖閣列島には行っても、あまり見なかったですから。前に獲り過ぎたのか、潮の流れが変わったのか、温暖化の影響なのか、それは分かりませんが、大部いなくなってますねえ(笑い)。

浮き流しフェーナー 尖閣専門 32年間操業

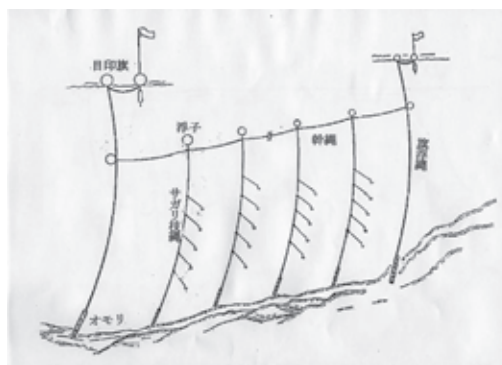
— 上原さんは、常丸造って、尖閣諸島へ、浮き流し延縄で、マチ釣りに行って、もう何年になりますか。また、これは那覇地区のやり方とどこが違いますか。

上原：常丸は丁度40の歳(1980年昭和55年)に造って、すぐ行ったから、今年(2013年)で32年になるかなあ。今でも天気の良い時には、あっちへ行きます。だから、32年間、尖閣列島専門にやってきたことになる。ウチ達の浮き流し延縄は、垣花の人達(那覇地区漁協)のと大体やり方は同じです。(底立延縄図を指しながら)、大きな違いはこの枝縄の数ですね

え、釣れるなら数は少なくてもよいが、釣れなくなったら数は段々増やしていきます。那覇地区は50本位ですか、あの時は相当釣れたはずだから。これを初めた頃は、この枝縄は7、80、多くても100本位でした。魚も段々釣れなくなって、またやり方に段々慣れてきて、入れ方も便利になってきたから、今は距離を伸ばして、150本は入れます。朝なんかは食いがよいから150本は入れて、2投目、3投目は、100、80本と段々数を減らしていきます。

この枝縄1本に釣針5つ付いているから、150本だとエサは750個、100本だと500個は付いている、だからもう食いがよければ、もう1回で相当釣れますよ(笑い)。

枝縄と枝縄の間隔ですか、30メートルあります。だから、枝縄が150本だと縄の長さは4.5和、100本だと3和の長さになりますねえ。流し浮き延縄の始まりと終わりに、両端に、大きな浮子を入れて、それに旗棹を差して、目印にしています。尖閣列島は潮が速いから、縄が岩に引っ掛かって片方が切れたら、目印になるのは旗だけですから、急いで旗探しに行かないといかん、縄の揚げ口は旗だけですから。だから両方切れたりしたら、目印の旗を失くしたら、もうお手上げですよ。



底立延縄 旗浮縄は約200メートル、枝縄間は30メートル。糸満漁協の特長は枝縄が80本から150本と多い。

縄 1日4回～5回入れる 纏れないよう 横目に

— 枝縄は150から100本もあるなら、相当食いますねえ、これだと縄入れるのにどの位かかりますか、また、縄は1日何回位入れますか。

上原: 枝縄150本だったら、入れるのに30分位かかりますねえ。半時間位待ってから揚げる。その位では魚はエサを食っているから。朝だったら入れて、食事して、すぐ揚げる、揚げたら、魚とって、エサ付けて、また縄入れるまでは、大体、1時間位かかる。

この浮き延縄は、1回やるのに大体2時間位はかかるねえ、それ以上かかる場合もある。だから、冬場陽が短いから、1日に大体4回位、夏だったらようやって5回位ですねえ。また、縄入れる時は、潮の横目に入れた方がいい、真っ直ぐなれば、潮と一緒にあって、かさばって、縄の纏れが多いですよ。



魚釣島沖での縄入れのようす、縄はエサを付けて円筒に巻かれている。これを外しながら次々と投下、右に見えるのは枝縄の浮子、左の棒は鉄筋のオモリ。(上原博輝 2012)

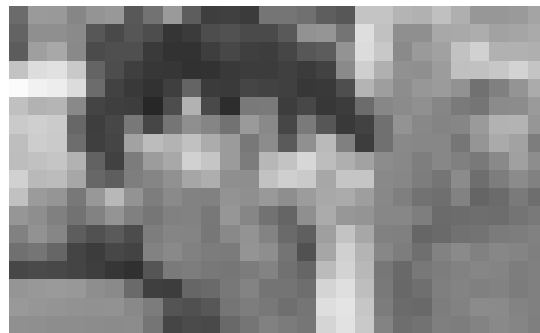
また、潮が流れるように流したら、もう全部引っ掛かるから、なるべく横目に入れた方がよい。揚げる時は、風上の方にして、船が流れても船から離れて行くようにしないと、縄が下に潜っていくから、ペラの方にこないように、潮の流れと風向きも考えないといかん。縄揚げる時は、最後に入れた所から揚げるが、ナギの時なんかは、裏(元の場所)にも行きます。時間かかるが、裏に行けば、ポイントが合っているから、こっち行って、この辺りで揚げれば、次の仕事がやりやすい。

また、尖閣列島は、潮の流れが速いから、縄は結構流されます。距離にして100本位だったら、平均で長さ2マイル位、3和から4和は流されます。だから次の縄入れる時は、船は2マイル位走らして、元のポイントに移動する。潮の流れがもっと速い場合は、それ以上ですよ。それに枝縄が100本あると縄の長さは3和になる。そしたら、この枝縄1つ1つに5つずつエサが付いている。この500個全部のエサが潮に流されて、底を移動しているわけです。丁度エサが魚を探しているみたいに、魚は、待っていてもエサが流れてくるから、これにすぐ食い付くから(笑い)。

常丸 月2回出漁 航海日数5日で 水揚高1ト~2ト

— なるほど、底立延縄は、こんな仕掛けで、魚を獲ると考えてもいいわけですねえ、尖閣諸島では、何日間行って、水揚げは何ト位しましたか。

上原：尖閣列島に行ったら、もう5日あったら、1ト位、いい時は2ト位は揚りましたよ。とにかく量が獲ればねえ 色々な雑な魚も混じっているけど、殆んど5日で1ト、1日で2,300和位、魚は殆んどマーマチですねえ。(海図を指しながら)、この島の傍とか、島の上の方、100メートルから上の方だからマーマチ、100メートルから下がるんだったら、アカマチとか、ヒーランマチとか、いろんな高級な魚も獲れますよ。この百尋線近くは、この辺は、潮の流れも速いから潮切り目指してから。このクバシマの西側の130メートルちょっとの所、こっちはシチューマチとか、多いけど、もうこっちは、シチューマチを獲りに県外船がしょっちゅう来てました。



縄を引き揚げる時が楽しいひと時。大きなマーマチが食い付き、釣針を外している光景。(上原博輝 2012)

ウチなんかは、もうマーマチとかを目当てに、この周辺でやってますよ。だからアカマチとか、シチューマチは少なく、マーマチが多い、クルキンとか、アーラミーバイ、ガーラとか、安い魚ばっかだから、量はあるけど、質は落ちる(笑い)。

市場ですか、もう大概1ト近くあったら、県漁連を利用して、那覇の泊港セリ市場に持って行きます。それより少なければこっち糸満に下ろしますよ。

—— 常丸は、尖閣諸島へ、何人で、月に何回位、行っていましたか。

上原：常丸には3、4名乗って行った。八重山で漁ができなかったら、すぐ尖閣列島辺りに行った。大体、月に2回位。夏も、冬も大概もうあっち、夏のいい天気には、台風も、熱低もない時は、すぐあっちに行っている。アカオ(大正島、赤尾嶼)は、中間地点だから、行く時にそこで漁やって、また帰る時にやって、行き帰り、しょっちゅうやりますよ。

尖閣列島で漁する所は、大概魚釣島とユクン(黄尾嶼)、今は久場島と書かれているユクン、その周辺で操業した。また一本釣とか浮き流し延縄船が多い時には、台湾が見えるギリギリの所まで行きましたよ(笑い)。クバシマから30マイル沖まで、あっち行けばもう間違いなかったから。あの頃は、台湾近く傍まで行っても、操業している船も少なかったから、あんまり警戒してない、台湾は見張りも、軍艦も、何もいなかったですよ。

台湾は、前は軍艦もいなかったけど、あとから軍艦が見張りとか、やっているみたいだった、でも軍艦がいるのは台湾寄りだから、あんな遠くまで行かなくても、島の周辺20カ所以内で、操業は十分だった。

シケると島陰に 避難船20隻余 アンカー夜通し見張る

— 尖閣諸島は、潮が速く波が荒い、向うで漁はいろいろと苦労はあると思います。

上原：もう、あっちへ冬場行ってシケたら、クバシマ(魚釣島)の側に、北風には風下になっているから、向うは行って待機しておかんと、あっちは波も高いしねえ、潮の流れが速いから、もう島ハラガーからサンカジ、山に当たってくる風、台風のようにすぐゴッーと風が来るから。急に静かになって、また急にバァバァバァして強く吹いたりするから。船の上の釣り具はしっかり縛っておかないと飛ばされる。あの時20隻位避難していたかなあ、自分の船のアンカーが引っ張られたら、傍の船にぶつかるから、もう夜も眠れない、それにあっちでは自分のアンカーも沢山持っておかないといかん、また、アンカー入れても、1晩に2、3回起こされよった。アンカー曳かれたり、もう何かで起こされたり、またアンカー揚げてねえ、あれ70呎位のアンカー、股が5、6つ位造ってあるけど、もう浅い所に引っ掛かるようにしないと、少しでも100メートル引っ張られたら、もう掛かる所ないから。

県内のマチ釣船 あまり見ない いるのは県外船

— 那覇地区の船は殆んどマグロ船に切り替わって、今は、沖縄本島から尖閣諸島に行くマチ釣り船も少なくなっていますが、糸満の底立延縄船はどうですか。

上原：糸満から、浮き流し延縄で行くのは、今は兼次の市丸とウチの常丸の2隻位かねえ。前は、ここには延縄船は2、30隻もいて、尖閣列島に全部行きよった、八重山、宮古、与那国とかにも行きよったですよ、もう皆年とって、またマグロ船に替えたりして、今は2隻だけしか行ってません。那覇地区の一本釣も前はよくいたけど、最近は見えないですねえ、もう尖閣列島では、沖縄本島からの船はあまりいないです。あっちで夜電気点けてピカピカして漁やっている船は、大体が県外船、鹿児島や熊本の本一本釣船ですよ。

復帰前は、アメリカ統治だから来れなかった。復帰後してから県外船は皆来るようになった。もう今は那覇泊港の県漁連を基地にして、宮古とか、八重山、尖閣列島に行って操業している。盆とか正月でも、こっちの港に船を置いて、自分達だけ、飛行機で帰って、また来て、こっちで操業して、県漁連に水揚げしている。今は、沖縄県のマチ釣り船より、県外船が多いですよ。もう皆こっちへ来て操業やっているから、沖縄近海の漁場は相当荒らされている、近く行ってもあまり魚は獲れない。

尖閣列島は確率が大きいから、もう皆あっちへ行ってます。漁場も、釣る場所も、大概ウチなんかと似ている、あっちもマチ釣りだから、大体同じ所で操業やっている。

県外船は人間は多いし、巻き揚げ機(釣機)は多いから、太刀打ちできない。船は20ト位はあるし、那覇地区だったら10ト位の船、ウチなんかは7ト位で、人数は3、4名。もうあちは6、7名位で、大体1人で2つ扱うから、片舷は表から艫まで、ずらっと10機余りも並べて置いてある。船も大きいから、少々のシケしても、アンカー下ろして、船をゆっくりゆっくり歩かしながら漁はやっていますよ。ウチなんか少しシケと思ったら、すぐ魚釣島の島陰に急いで避難ですから(笑い)。

縄入れたら 必ず獲れた 年々 魚減る一方

— 那覇地区の一本釣船の話ですが、尖閣諸島でも段々釣れなくなったから、マグロ船に切り替えたと言っていました、魚の釣れ方は前と比較してどうですか、

上原: 今はあまり釣れないです。ウチは、尖閣列島に行って30年余りになります。

年々魚が少なくなって、年々釣れなくなって来るのが分かりますよ。あっちの魚がいなくなるのはホント珍しい(笑い)、やっぱし人間の知恵には敵わない。もうあっちの魚は減らないだろうと思っていた。最初はその位獲れた、もうどこ行っても釣れたから。

あちは潮の流れは速いから、思った通りにポイントには行かない。だけど縄入れば、必ず魚は釣れよったです。どこに縄入れても、魚は釣れました。その時分は、(海)鳥は大分多かったですよ。エサ食おうとあっちこっち飛んでいて、縄入れる時には、キビナゴのエサを使っていたから、これを入れようとしたら、飛び込んできてエサを食うから、もう網は入れられなかった。棒とか竿とかで追い払ってやりましたよ。今は鳥なんかも減って、あまり見えないですよ。前はサバもいっぱいでした、ムロアジとかねえ、サバはあっちこちに沢山いたから、マチを釣る前は、このサバに邪魔されて、もう枝縄に釣針5本付け、これにエサ付けているでしょう。縄入れるとゆっくり下がっていくから、もう底に行くまでの間に、上の方のエサは全部サバに食べられて(笑い)、マチは釣れなかったですよ。あれに邪魔されてから、あんなにいたサバも、鳥も、今はあまり見えないですねえ。

こっち(沖縄本島)の船とか、宮古、八重山の船とか、県外船とか、台湾、中国船が来て、尖閣列島でずっと魚獲っている。ウチでも33年間も、ずっと獲ってきたから。もうあっちの魚は獲り過ぎて相当減っていますよ(笑い)。

前は中国船は全然見なかったけど、10年余り前から、今度は、中国の底曳き船が来て、

網曳いて魚獲っているから、あっちの海は相当荒らされて、魚は相当やられていますよ。

中国船 大陸沿岸で漁 獲り尽くして？ 沖合へ

— 中国の底曳き船が来たのは、10年余り前ですか。

上原：そうです、中国のトロール船、底曳きが来たのは20年位前ですかねえ。はっきり憶えてないけど。その前はいなかった、あんなに船団組んだ船は見えなかったですよ。

最初は沖の方には、大陸棚のずっと上の方に、灯だけが見えた。水平線の上にずっと電気が見えてました、丁度陸みたい。あの時は、こっちに船は見えないから、中国沿岸寄り、やっぱし自分達の周辺で、漁をやっていたんですかねえ。ずっと遠く離れて電気見えたから。中国船は、大陸沿岸で魚を獲り尽くしてきたら、段々量が少なくなって来たから、次第次第に、沖の方へ出て、段々大陸棚に下りて来たんじゃないか。

中国の周囲も汚染されて魚がいなくなっているかもしれない。あっちも人間も多いし、(尖閣諸島の海図を見て)、もう大陸の周辺は、深みがなくて平坦な所が多いからねえ。トロールはしやすいはずよ、尖がった岩なんかないから、だけど一遍獲ればもう魚はいなくなる。もう尖閣列島辺りは、大陸棚は上がった急に浅くなったりして、黒潮が流れて、潮目多いから、こっちは魚が沢山いる。だから、中国船は今度はこっちの方に寄って来たんじゃないかな。

相当な隻数 20数年前から 尖閣海域へ 押しかける

— 中国漁船は、どの位の船団が来ていたんですか。

上原：船団は相当な隻数だったよ、もう読めない位、あれ達の傍から夜船走らすと、大きな船でも迷うはずよ。あの灯を見たら、陸から何かなと思う位の船団だから。

この前の中国船が保安庁巡視船にぶつめた事件(2010年9月7日)があったねえ、網を後ろで広げているのをテレビで見たが、あれもトロール船で166トだったけど、前に船団組んで来ていた船は、あれよりはもっと小さかったですよ。この半分位で70から80ト位かなあ。皆ボロ船だったさあ(笑い)。もう皆日本から払い下げ買ったかと思う位の船、鉄船で錆食ったスクラップみたいな中古船、新しい船とか、上等な船とかは見当たらない。こんな船で船団組んでいっぱい来てましたよ、もう毎年来てました。今も来ていると思います。

テレビでは、中国の海監ことしか報道しないけど、中国漁船は、尖閣列島の沖で、領海の外で、見えない所で、相当操業しているはずですよ。

中国にすれば、尖閣列島以外にいい漁場はないでしょうから。



尖閣諸島付近に向け出港する中国の漁船団。
2012年9月16日撮影 (Keystone)swissinfo.ch

圧倒的規模と数 トラブル避け 領海内で操業

— 中国の船団があれだけきたら、操業にどんな影響がありましたか。

上原：やっばし、不安でしたよ、もう中国船は沖で待機していたり、操業して廻っている船もいるから。ウチらの浮き流し延縄(底立延縄)は、縄が2扣から4扣もあって、長いから邪魔になる、あっちのアンカーとひっかかることもあります。

向うは潮が速いから、中国船から相当離して縄入れても、あっちの方に流されて行く時もあるし、もう、縄は入れられる状況じゃなかったですよ。それに入れてもちゃんと揚げられるか分からんから。

道具を盗まれたらと、これも心配だったねえ。旗でも1つ盗れば、もう何千メー、何キロと縄入れているから、この旗だけが目印です。だから、旗盗られたら、もう片方の縄しか揚げることでできない、半分はダメ、2つ盗られたらもう全滅(笑い)。何が起こるか分からん、怖い。だから、最初からすぐ逃げてきましたよ。今は12カ所領海内にずっとやっ

ておりますよ、ここは安全だから。また、他の人の話聞いたら、保安庁の巡視船が碇入れる所に、夜は、わざと来て一緒に寝るらしい、これが安心だからといって(笑い)。



南・北小島沖で縄入れて、開始地点の浮き旗、目印の旗が失くなれば、もう大打撃。(上原博輝 2012)

領海外 魚獲り尽くした？ あまり食わない

— こんなにいっぱい底曳きしたら、魚は無くなりませんか。

上原：これだったら魚はなくなりますよ。大概底曳き船だから、底から網を曳く張るつてから、岩なんか、サンゴ礁なんかひっくり返して、もう魚の巣を壊してしまう。

この前は大きな船が来ていた。何百ともある大きな船が2、3隻来てから、棒受け網のようなもので魚獲っていた、サバかなんか。あれは日本のサバ船ではない。どこの船かねえ。サバはずっと上の浮魚だから、段々サバがいなくなったから船も見えなくなったけど。

縄入れたら分かるけど、尖閣列島周辺は、12カ所の領海内はまだ魚はいるけど、領海から離れた所はあんまり魚は食わないですよ。あちは中国船が相当撮り尽しているんじゃないか、魚はいなくなっているはず。だから、尖閣列島の方に、島の方に、12カ所内に寄って来るんじゃないかなあ。中国船は、領海の入ってくるのは時間の問題かもしれん。

保安庁から 中国漁船が来ている連絡ない 漁に来て分かる

— 保安庁から、今は中国漁船が来ている、どんな状況だと、連絡はあったんですか。

上原：ウチ達は台風の時期を外して、夏場でも、冬場でも行きますし、中国船も、台風時期と冬場の荒い時に除くと、大体年中底曳きできるから。だけど、中国船が来ているか

は、尖閣列島に行ってみないと、分からないですよ。保安庁は発表はしませんし、新聞にも載りませんから。あっちに行ってみて、操業していたら、危ないから、もうしょっちゅう12カ月の領海内ですよ(笑い)。冬場は島の周辺でやりますが、いい天気が続くなら、少し離れて沖でも縄入れたいですねえ。でも領海の外には出ません。危ないですから(笑い)。夜になったらいい天気の場合はずらっと中国船の灯が見えますねえ。

だけど、ウチらが問題に思うのは、中国船は、尖閣列島の近くまでは来て、12カ月の領海には入らないにしても、ギリギリ近くまで来て、魚を獲っているよねえ。なぜ国は、それを取り締まらなのか。尖閣列島は日本のものなのに、他所の国みていたら厳しく取り締まっていますよ。何で日本政府は取締まらないのか、これが問題だと思う。

日中漁業協定を見直して、漁民のために改定を

— 2000年に、日本と中国は、日中漁業協定を取り決めて、北緯27度以南の沖縄近海水域(尖閣諸島含む)での中国漁船の操業が認めているから、現状は取締りができません。この協定締結された頃から、中国漁船は、頻繁に来るようになっていませんか。だけど、協定が締結された後から、中国漁船の隻数の報告がないんですよ。(※文尾の資料参照)

上原：言われて見ればそのような気もする。そうかもしれない。こんな漁業協定があるのは初めて知りました。国がこんな協定を結んだもんだから、中国はトロール船団組んで、尖閣列島に押しかけてきて、領海外で勝って気ままに魚を取り放題できたんですね。ウチらは怖いから、領海内に逃げるしかない。もう尖閣列島の領海の外には、魚はいませんよ。こっちで魚が獲れなくなれば、中国船は、次は領海の中に入りますから。だけど、国は、何を考えてこんな漁業協定を結んだのかなあ。これで得しているのは中国だけじゃないですか。日本側は、地元沖縄側は損だけですよ。(日中漁業協定水域図を指して)、

これを見ると、この「取締権限を行使できない日本EEZ」水域では、中国船は、領海外であれば、どこでも操業できるんですね。その範囲が尖閣列島から宮古、八重山、沖縄本島近くまで範囲が広がっている。これでは、中国船がやってきたら沖縄県の漁業はもう全滅ですよ。尖閣列島の領海外は、もう魚を獲り尽くされて殆んどいないですから、その次は、宮古、八重山へ、沖縄本島へ、次々やってきますから。そしたら、もうこっちの魚も獲り尽くされて全滅しますよ。保安庁は、中国漁船の領海侵犯とか、領海内での不法操業しか取り締まらない、取り締まれないわけですねえ。国は、ウチら漁民のことを考えていますか、もっと真剣に考えてほしい。尖閣列島の漁場を守り、こっち(宮古・八重山、沖縄



日中漁業協定水域図

本島)の漁場をホントに守ろうと思うなら、こんな漁業協定なんかすぐやめるべきだ、すぐ失くすべきですよ。

沖縄県にとって、ウチら漁民にとって、何の得にもならず、害だけだから。

— おっしゃる通りです。日本政府は、漁業者皆さんの意見も聞いて、日中漁業協定を見直すべきだと思います。有益なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。



上原さんは後継者も揃い、親子3人で海の仕事に団結して励む。左より常太郎さん(72)、次男晴彦さん(40)、三男博輝さん(37)。(2013)

※ 参考資料

海保白書では、1983年、87年、88年から93年まで、尖閣諸島領海線付近で多数の台湾、中国漁船が操業しており、領海侵入の可能性は高いとしている。

尖閣海域の領海近くでの中国漁船の操業は、1990年代半ば頃から報告されている。

1996年度の海保白書は、尖閣海域で「中国漁船は例年3～5月にかけて、底引き網漁法により、かわはぎ等の採捕を目的として、多数操業している。10年(1998年)には、同諸島の領海内において、不法操業を行い又は漂泊・徘徊等の不審な行動をとった漁船は1,547隻・、巡視船により嚴重警告の上、漁海外に退去させた。」(平成11年度白書)。また、「11年(1999年)には、1,548隻」(12年度白書)と、急速に増加していると報じて、中国漁船の尖閣海域への出漁・操業が常態化していることを報じている。

2000年に日中漁業協定が締結された。同協定では「尖閣諸島を含む北緯27度以南の水域ではお互いが自国の漁船だけを取り締まり、相手国漁船の問題は外交ルートで注意喚起を行う」として、中国の底曳き漁船等々の領海外で操業したなら、日本は法的に取り締まることができなくなった。2001年からは、同白書は「海上保安レポート」に変わって、同レポートでは尖閣海域の中国漁船のこれら操業隻数は記されなくなった。そのため、2001年以降の詳細はわからない。

続き 追加報告

尖閣行ったら、中国監船が領海侵入、物騒だから逃げてきた

— (電話で)この前、尖閣諸島に行かれたそうですねえ、中国監船が領海内に入ってきて、漁ができなくなり、保安庁の巡視船にガードされて、逃げてきたと聞きました。

上原：そうです、保安庁に電話入れて、尖閣近辺に4、5日予定で、この前(2013年5月12日)に行きましたよ。向こうに着いたのは夜の11時頃、その時は1隻も船は見なかったです。南小島の東側近辺で漁しようと思っていたから。

翌朝には、保安庁には自分達の位置を教えて、無線でいろいろとやりとりしながら漁してましたよ。丁度3回目に網入れた時かなあ、午後1時頃だった。保安庁から慌てて、何回も問合せ、「今どこ来ているか、どこにいるか」「中国の監視船が来てから、魚釣島の所を廻っているから、南小島の所にも行くはずだよ」「あんた達は道具片付けるのに時間かかるか、もう中国船が来たら何するか分からんから、早く揚げて待っておきなさい、離れておきなさい」とか言ってきた。

一本釣だと一齐に縄揚げてすぐ逃げられるけど、ウチ達の延縄だと揚げるまで時間かかる。また揚げる途中で、縄が纏れたりして相当時間かかるから、とにかくアワティーハティーン(大慌てで)揚げていたら、案の定、中国の監視船が来ましたよ、北側から。

最初操業していた時は、領海内には入って来なかったはず、魚釣島のずっと沖の方にいたというから、やっぱし向こうのレーダーに映ったのか、中国の監船が南小島の領海内に入って来たですよ。こちらは領海内だから来ないと思って、操業していたんだけど(笑い)。中国の監船3隻共です、領海内に一緒に入って来たら、もう自由自在に走り廻るし、保安庁はウチ達をガードですよ。それで急いで網を揚げて、もうこっちは怖いからとすぐ逃げましたよ。もう無我夢中で、急いで船走らして、保安庁がガードしながら一緒に宮古近くまで来ましたから。

そしたら、もう安心だからと、保安庁は引き返して、また中国船の見廻り行きよったけど。ウチらは、宮古の所に来ているから、そこで3回位漁をやって、糸満に帰って来ました。もう尖閣列島では、物騒で仕事はできませんでした。

中国の監船が領海内にあんなして入って来て、何するか分かりませんから、急いで逃げたんですよ。もう物騒ですから。

(電話聞き取り 2013.5.27)

當眞 正清 とうま まさきよ (与那原・西原漁協)

1922年(大正11年)、与那原町当添の漁家に生まれる。91歳(2013年時)。

1947年24歳には第一清徳丸を建造、28歳には同船1号を拵えて、尖閣諸島で深海一本釣、曳き縄を操業、1955年国籍不明のジャンク船に襲われ、弟ら3名の命を失う第三清徳丸事件に遭遇する。

1957年同船5号を建造、35歳でマグロ漁に転換、以後同船8号、11号を建造、ほぼ10年連続、マグロ水揚げ高沖縄一の座を占める。翁

は91歳で今なお矍鑠とされており、58年前の第三清徳丸事件の話を語ってもらった。



**与那原の網元 當眞翁に 終戦直後の尖閣諸島での漁業を聞く
第三清徳丸事件の真相と尖閣でのカジキ曳き縄漁を語る**

馬天港 戦前 軍港 終戦直後 密貿易で賑わう

— 「馬天の當眞」と言えば、沖縄の水産業界でマグロ水揚げ高1位の座を占め、つとに有名でした。當眞家は代々、馬天で漁業をされていたんですか。

當眞：ウチらは元々は、隣の与那原(町)の当添です。当添は漁業が盛んでしたから、ウチはもう5、6歳から、くり舟で網を手伝って、櫂で漕いで、それでお祖父さん(正色)は網とるし、ウチは舵とったりなんかしてましたねえ。ここ当添部落の10戸に1つ船を持っていたから、戦前は県でも2番なるわけですよ、1番が垣花、2番が当添で、糸満は追い込み、アギヤーだから、削り舟は沢山あるが、船は少ないです。ウチら当添の船が段々大きくなってきたら、こっちは浅瀬だから、くり舟は入るんだけど、船は入りきれん。船は全部那覇の屋良座森城の港に着けておったですよ、垣花の那覇港に。戦前から当添は垣花と行き来してねえ。垣花に市場もあったから、そこに魚下ろして。夏は近海でマグロ船して、冬は深海一本釣をやってました。ウチは、学校卒業したら、12歳で、飯炊きで、船乗って、自分でこっそり機関場に入ってからに、機械を憶えて、もう15、6になったら全部、自分で機械を運転しよったですよ。昭和19年の10.10空襲で全部やられましたよ、那覇港に着けておったから、垣花の船と一緒に。で、ウチらが当添から馬天に引っ越したのは、戦後ですよ。父正庸の時代です、清徳丸1号、3号持つてから、ここで船見ながらということ。

— 馬天港は、戦後は、大東航路や密貿易の港町として大変賑わってましたねえ。ここから、尖閣諸島にはいつ頃から行くようになったのですか、

當眞：馬天は昔の港で、戦前は軍港だが、海軍廠という水タンクもあるし、ガソリン入



戦後の馬天港光景、船も接岸でき港町で賑わう

れる倉庫もあって、棧橋はあったが、遠浅で、船はすぐ傍には着けられんですよ。戦後米軍が浚渫してから、港に船が着けられるようになった。それからがあっちこっちから船が集るし、大東航路も、琉石の石油販売会社もあって、港は賑やかになりましたねえ、水産試験場も、鯨解体所も、スクラップの集積場もここにありましたよ。密貿易関係でどんなにして賑わったのか、それは分かんが、料亭は10軒はあったねえ、もう夜は電気グワラグワラ(煌煌と灯ら)して(笑い)。で、ウチが尖閣列島に行くようになったのは、清徳丸1号を造ってからですよ。その時は24歳です。もう戦で、船は全部やられてないでしょう、どうしても自分の船を持ちたくてねえ。それで自分で杉船を造る計画立てて、材料集めて、造りました。これが沖縄で戦後第一号の杉船ですよ。

杉材集めて 清徳丸1号 3号 石油運搬船 改造

— 當眞さんが清徳丸1号を造ったのが24歳ですと、1947年です。米軍援助でガリオア船が造られる前、あの資材不足の時代に、よくも船を造ることができましたねえ。

當眞：米軍資材のベイマツはいっぱいあったですねえ、ウチが1号造ったあと、ガリオア船ができたが、あれは皆ベイマツで造ってねえ、ベイマツはダメですよ、重いし、もう干割れするから。ウチは、船は絶対、杉で造ると決めておったねえ。で、23歳の時かなあ、奄美大島に、密航船で渡って行って、米軍の機械を改造して、割船用にペラ付けて、これを持って行って、向うで、杉一本と交換してきてねえ。それで足りないから、また方々廻って、首里の方で、軍作業の手間賃代わりに杉板を貰っている話を聞いたから、そこ行ったら、ほんと日本杉ですよ、日本軍が使っていたものかなあ、今の工事現場の足場板があるでしょう。あれを何遍も通って全部集めてきて、またヤンバル行って、松の木を注文してきて、また船造る金具は、アメリカの上陸用舟艇とかが沢山あるから、ボルト・ナットも全部外してから、タンクも外すし、もう船の必需品は全部取ってきた。また不足分は、鍛冶屋に行って、鉄筋で頭作って、ネジとか、全部作ってねえ。また米軍の廃品置場には捨てたペンキがあるから、缶底のペンキ集め、叩いて軟らかくして、パテとかはそれで作った。それで材料全部を揃えたもんだから、那覇に比嘉という船大工の所に行ってねえ、戦前からの付き合いがあって、それが生きておったから、比嘉さんに頼んで、設計させて、1号を造ったわけですよ。それからが尖閣列島に行くようになりましたねえ。

長男と次男 1字取り合わせ 「清徳丸」

ウチは長男で、次男も三男もいるから、将来兄弟で船持とうと最初から決めていたねえ。

で、ウチは清、次男は徳だから、2つを取り合わせて、清徳丸1号と付けましたよ。

一緒に仕事して、ウチは機関長もできるし、船長もできるが、8歳年下の正徳は油差しして、見習いさせていたから、その後から、船を1つ増やしたわけですよ。それが3号です。あれは内地からの密航船ですよ、こっちにある琉石の石油会社の人達が、この船を、中古漁船を買ってきて、米軍港のホワイトビーチから石油を運搬していたです。それが台風で

壊れたから、デッキ全部なくなっていたから、それを買ってからに、修理して漁船に改造しました。1号はウチが船長して持って、3号は、船長を雇って、正徳を乗せて、船長見習いさせてねえ。もう、清徳丸1号と3号で、夏はマグロして、冬になると一本釣を、尖閣行ったり、与那国行ったり、また奄美大島から、九州の五島列島まで行きましたよ。

五島の島々も全部を廻って、もう、皆、自分の庭のようなもんでしたねえ(笑い)。今でも港の地形は分かるわけよ。一応入った港は、夜でもすぐ出たり入ったりしよった。もうちゃんと端を当ててねえ、出る時にも後ろの地形を、山当てで見て、入る時も山当てして、一応入った港の地形は全部憶えているから。尖閣列島で漁した時も、もうしょっちゅう、クバシマとトシシマの所を行ったり来たりよ。仕事終わると、向こうに避難して、夜はアンカー下ろして眠って、朝はそこから漁場に行つて仕事して、帰ってきたら、またそこで寝泊まりしたから。もう向こうの地形は、全部頭の中に入っていますよ(笑い)。

— 清徳丸1号で、最初尖閣に行った時は、どんな様子でしたか、

當眞：はいはい、内地船も来ていたが、台湾船はいっぱい来よったです。米軍の飛行機も、演習しよったよ、尖閣列島の北に平たい島があるでしょう。(写真を見て久場島・黄尾嶼と確認する)、最初行った時に、この島辺で、機銃する音が聞こえよった。飛行機は見えなかった、ただ、パラパラパラしてねえ、最初だけ。そのあとから演習に遭ったことはない。尖閣列島で、漁ができる、よく魚が獲れるということは、これは分からなかった。行って初めて、ああこんな魚もおる、これもおるなあと分かったんですよ。一本釣もして、マチなんか釣っておって、曳き縄して、カツオとか、シイラとか釣って、また夜はアンカー入れて休むから、その時に夜釣りして、マーマチなんか釣ったりして。でも最初はあんまりよくなかったねえ、釣ろうと思うんだけど、釣れなかったですよ。潮も速いし、それはおることはおったですから、それが曳き縄しておる時に、あのバショウカジキがいっぱいおるから、あれを釣り始めたら、もう相当釣れました。これが1号で行った時だからねえ。そのあと3号できた時からは、尖閣列島行けば、このバショウカジキは、行く度にもう大漁ですよ。

事件の目撃者・當眞翁、第三清徳丸事件のようすを語る

ジャンク船2隻 水がほしい 近づいてきた

— 尖閣で、3号が、ジャンク船に襲われた事件がありますねえ。沖縄中をびっくりさせた事件です。弟の正徳さんもあの時に亡くなってしまって、大変お気の毒です。

當眞：丁度あの時、ウチの1号も、弟の3号もカジキ突きしていたのに、もう突然だからびっくりですよ、最初はもう何考えていいか分からなかった。弟は25で、ウチが33だったから、早く船長なって一緒に漁するのを楽しみにしていたけどねえ、・・・。

— 新聞には、ジャンク船が助けてくれと呼びかけたから、船を近づけたら、すぐ軍服

を着た、銃を持った人達がパーツと乗り込んで来て、それで射殺されたと、ありましたが。

當眞：そうらしい、そうだった話はしよった。それは当たっている。ウチもジャンク船が2隻が来るのを見たんですよ。旗を、ちゃんと星の付いた赤いのを艦に揚げていてねえ。

あれは台湾の旗じゃないか。軍服は青だったかなあ、あれ達は皆同じ軍服で、帽子も被っておったですよ。皆兵隊みたようだった。弟達はそれ見てから、向こうに行ってから、そのジャンク船を曳っ張って来て、こっち(魚釣島)に来てからに、止まったから、ウチは、もう入用ないからといって、すぐ裏に廻って漁しておった。その時に、もうやられているわけさあ。何か水が欲しかったらしい、誰の話だったかなあ、金城夫助さんだったかなあ、水がないからというて、向こうから曳っ張って、水のある所まで、こっちまで、ジャンク船を連れて来て、アンカー下ろさせて、で、こっちに水はあるからと言ったら、すぐ3号に付けて、それで、3名射殺されたしまった、ウチの弟達は。で、水は全部盗ってからに逃げているわけよ。3号はあとから帰って来たが、その船見たらねえ、もう水が全然なかった、タンクの水は。



事件を報じる新聞 (琉球新報 1955.3.14)

弟 ダンプル蓋 投げて 海に飛び込む

— あの時に、船長の金城次郎さん(47)と伊野波一男(32)の2人が射殺され、弟の當眞正徳さん(25)は海に飛び込んで行方不明となり亡くなっていますねえ。

當眞：金城さんは台湾に渡って向こうで突船とかの船長やっておったらしい、弟は見習いで油差し。伊野波さんは八重山の人だったかなあ、この3名が亡くなった。あとから3号見たら、ブリッジの後ろから撃った弾も残っておったよ、ブリッジというたら船長室があるでしょう、そこの後ろから弾が通って、(船の写真を指しながら) 止まっておったよ、こっち(中の仕切り壁)に、真ん中に。こっちに付けて、こっちから乗り込んで撃っているから、で、こっちに船長達はいて、テーミー(手動)でやっておるから、こっちに舵があって、操舵はここに立って棒でやってますから



第三清徳丸、舳先に突出して見えるのはカジキ突台

ねえ。ウチの弟は泳げなかったらしい、金城夫助さんが言うには、ダンブルの蓋を取って、海に投げ、海に飛び込みよったって、これを浮きにして泳いで逃げる積りだったかもしれん。行方不明で、長らく捜しても見つからなかったから、あの時、逃げ遅れて撃たれておるわけよ。ウチは、運転もできるし、修理もできるから1号持っていた。3号は弟の正徳に

持たそうと計画して、金城次郎船長の下で油差しで、見習いで乗せておったが、亡くなってしまって、不憫だ。

— 海に飛び込んで助かった人が、當眞さん達 1 号に事件を知らせたわけですねえ。

當眞：そうそう、ウチは魚釣島の後ろで曳き船していたら、島から人が手招きして、もう助けてくれと、合図しておるんだから。金城夫助さんと誰だったかな、2 人位だった。泳いで逃げて来てからに、島の後ろに回って来ておるわけよ、漁場は皆分かっておるから、で、行ったら、ピストルで撃たれておるちゅうて、で逃げて来ておるわけよ。もうあれ達は泳ぎは専門だから。で、こうこうであると言うて、もう相手は、銃持っているし、軍服を来た兵隊達だから、何を持っているか、何されるか分からないでしょう。

それで、警察に連絡して、警察本部や軍に手配させるために、皆船に乗せてからに、もう八重山に直行したわけですよ。その時、島を廻って、八重山に向かう時に、そのジャンク船がねえ、帆をかけてからに外に出て行くが見えた。

八重山署で 調書に手間取り 搜索遅れる

— 八重山に着いて、すぐ警察行って、助けを求めたわけですねえ。

當眞：急いで、八重山の警察に行って、ジャンク船に襲われたから、すぐ警察本部に、軍(米国民政府の意)に、連絡してくれと言うが、警察は、もう調査、調査と言ってねえ、前には進まないわけですよ。もう調書、調書だけ。それで、ウチは怒ってから、何でこれは、後からでもできるのに、早く手配からせんかと、ウチはこっちにおるのに、逃げもせん。何日でもここにいるから、1 週間でも、1 ヶ月でもここにいるから、調査できるでしょう。もう先は後にしてやっておるから、とにかくジャンク船が逃げないうちに早く手配してもらおうと、警察と相当喧嘩をやったわけですが、もう調書、調書で、それに手間取って、もう逃がしてしまったですよ。

— この事件のあとに、米軍が飛行機を出して確か搜索してますねえ、あの時、すぐ行けば、ジャンク船は捕まえることができたんですか。

當眞：そうですね、すぐ行けば捕まえることができたかもしれん。ウチが八重山に向かおうとして、島の端に来たら、そのジャンク船は帆を揚げて行くのが見えたから、1 隻だけ、それからうしろは見ないさあ、ずっともう早く行かないといかんといつてからに、連絡しなくちゃいけないというて、その時は、風もあんまりないから、帆船だから、あまり遠くには行ききれないわけですよ。だから今だったら、捕まえられるから、早く警察本部や軍とかに、手配しなさいと言ったけど、調書に時間取られて、もう逃がしてしまったわけよ。で、こっちに来てからに、沖縄の警察本部の部長だったかなあ、その人が来ておったから、この人にうんと文句を言うたら、向こうの巡査が怒られてからに、とうとう首なったらしいですよ(笑い)。

弟探して 魚釣島上陸 ジャンク船 座礁してバラバラ

— ジャンク船、1隻帆を揚げて逃げて行って、もう1隻はどうしましたか

當眞：ウチは弟を探しに魚釣島に行ったですよ、もしか弟が向こうに上がっているんじゃないかと思って、もう事件から1ヶ月は過ぎていたんじゃないかなあ、沖縄でもいろいろ調査があったからねえ、そしたら、ジャンク船が乗り上げて、座礁してからに、バラバラになっていた。その時、初めて1隻が座礁したのが分かったわけですよ。別の1隻に、水を積み替えてからに、皆乗り移ってそれで逃げています。ウチはあの時に、帆を揚げて、2つ帆を揚げてからに、逃げて行く見たですよ。ジャンク船の大きさですか、大きかったですよ。こっこのヤンバル船とは桁違い、2隻とも大体同じ位の大きさだったねえ。

— 米国民政府は、ジャンク船をずっと捜索して、台湾側に確認したが、そんな船は知らないとの返事だったと聞いてますが。民政府から聴取とか、連絡はありましたか。

當眞：民政府からは何もなかった。沖縄の警察からだけ。軍も飛行機でずっと捜索したというたんだけど、それはどうだったかなあ、分からない。もう、ずっと後からしかウチは向こうに行かないから。



第三清徳丸の写真を前に、ブリッジから弾が通り抜けて、ここで止まっていたと話す當眞さん

船員の生活だけ 考えていたから あとのこと分からん

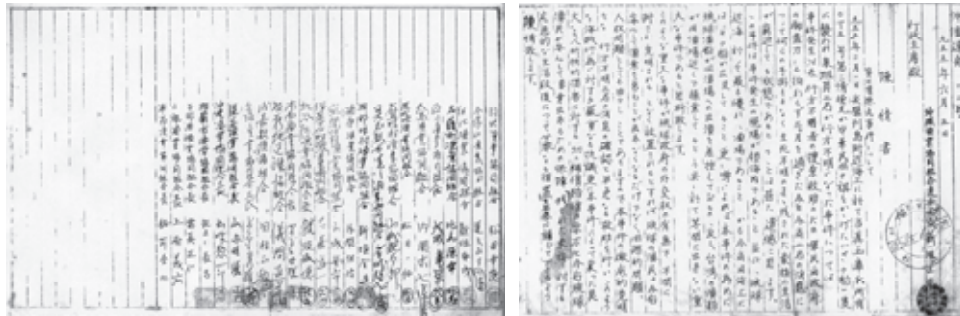
— 沖縄漁連や各漁協から、第三清徳丸事件の徹底的な究明と遺族に対して生活救援をしてほしいと琉球政府や民政府に対して陳情書も出されていますねえ、

當眞：ああ、そうですか、分からなかったねえ、ウチは長男でもあるし、責任があるさあ、船員の生活を考えないといかんし、儲からないといかんでしょう。もうしょっちゅう海だから、入港しても陸には2,3日しかいないから、隣近所の人とも顔も会わさんですよ。だから、しょっちゅう海のことばかりしか考えんといかんし、あの事件の件は、親父(正庸)に言うてさせていたから、ウチは今言うた陳情書のことは分からんよ。

ただ、あっちこっち、もう交渉するといつて、30万円(軍票B円)位かなあ、それ位は使っておるからねえ、もう、あっちこっち手配したり、願って向こうに、調査させるといつてから、負債しておったが、その時にもう一遍であれさあ、バショウカジキを曳き縄でして儲かって、で、船の配当分30万円で、借りたのをポンと払いましたがねえ(笑い)。

— 當眞さんのこれまでのお話の中で、新聞で詳しく報道されていないこと、例えば水が欲しいといわれて、魚釣島まで曳航して行ったこととか、また3号の水を盗って1隻で

帆を上げて逃げたこととかは、新聞には載っていません、それに警察の方で、チンタラして調書で時間を費やし、捕まえる機会を逃がしたことも初めて知りました。當眞さんのお話を参考にして、この事件がウヤムヤにされることなく、台湾側の協力も得て、徹底的な真相究明がなされてほしいです。



沖縄漁業協同組合連合会は、「この事件は、事件発生現場が領海内であること、並びに琉球近海に於いて最も優れた漁場であること、・・このような重大事件が琉球政府の外交権の有無で、・・究明されることなく放置されるとすれば、琉球漁民は今后安心して漁業を営むことが出来なくなるだけでなく国際的問題、人権問題としても由々しい・」として、事件の徹底究明を琉球政府に陳情(1955.6.15)

カジキ釣り名人・當眞翁、尖閣での曳き縄カジキ漁を語る

曳き縄でカジキ釣 研究、研究し あとは成功

— さっきのお話だと、バショウカジキを獲って儲けたので、借りた 30 万円をポンと払いましたと言っていました、そんなに尖閣で、カジキが獲れたんですか。

當眞：はい、あの頃は尖閣列島に行ったら大漁違いなしですよ。カジキはいっぱいいましたから。バショウとか、クロカワとか。ウちらは、殆んどバショウを獲った。島グワー、島グワーがあるから、瀬の所に集まっておるわけよ、固まっている、そこを順繰り、順繰り、曳き縄してから、バショウカジキ全部釣りよったよ。あの時は、他所は全部突きん棒で獲っていたが、ウちらは曳き縄ですよ。与那国辺りにもカツオを曳いてから食わずやり方でやっている船もあったが、バショウカジキを曳き縄専門でやっていたのは、ウちらだけですよ、ウチの船ばっかし。これ誰も分からないわけ。ウチがもう研究、研究やってきたから、最初は釣れなかったんだけど、研究、研究してからに、あとは成功したわけよ。

艫で釣り 船廻して 表に寄せて モリで突く

— 曳き縄でバショウカジキ釣ったといいますが、どのような方法でやりましたか。

當眞：カジキを突く人は船の表の突台でチャー(ずっと)立ちして待っているさあ、船を廻す人は舵元にいるから、ウちら 2 人は、艫の両角に立って、エサ付けて曳き縄を流しますよ。それにバショウカジキが食ったら、すぐ縄は引っ張らないです。ミチナー(道糸)は細い針金だから、切れたらいかんさあ。舵の人はしょっちゅう立っていてウちらを見ているさ

あ(笑い)、で食ったら、すぐ船を回転させます、すると、縄は前に行くからねえ。ウチらは船の回転に合わしながら、縄を突台の方に寄せて持って行きます。ここではもうモリを構えて待っているから(笑い)。すぐモリで突いてからに、モリで突いて引っ張ってきて、こっちから揚げるわけですよ。あの時は曳き縄の幹縄は木綿糸です、豚の血で染めたものだが、カジキ釣る時は、掴まえないでスルスルスべらせながらやりよった。だから、もう手が焼けて大変、あとからは手袋を買ってきてやったが、手袋しても1日で切れよった。手繰りで揚げよったから。乗組員ですか、艦で釣る2人と、船廻す人とモリで突く人2人、最低4人はいないといかん、1号と3号は、普通は5,6人、多い時で8,9人で行きよったです。

コツ 自分は釣らず 相方に 逃げるカジキ 曳き寄せる

— この曳き縄の方法で、バショウカジキを大漁するためどんな工夫をしましたか。

當眞： 曳き縄のエサは、最初はカツオを釣ってからカツオでやっていたが、あとからサンマに切り替えたら、すぐもうジャンジャン釣れたから、サンマを使っていた。

曳き縄だから、エサのサンマをかけたなら、船はスローに走らすねえ。で、艦の両角に2人立って、カジキを釣っておる、これはねえ、縄(幹縄)をこうやって少し5,6尋位を、左手に巻いていて、右手は縄を掴まえていて、もうしょっちゅう後ろのエサの所を見てるわけですねえ、すると、カジキが来るのは分かるから、ハネ(背ビレ)を黒くして白波して走ってくるのが見えますよ。これも長く流したら見えないから、一応20尋位の所に丁度船のスクリュウで、白い泡が出る所までに流しておく。カジキはねえ、来たら、すぐにエサを食わんで、上になったり、下になったり、横になったりして、エサを見てますよ(笑い)。で、一応食うことになると、エサを、鼻で打ちます、ポンと、そしたら、カカン、カカンと手に感度が来るから、その時、巻いてある左手の縄を全部投げるわけ、投げて外したら、そこでエサはこっちで止まるから、その時食うわけです(笑い)。ウチの場合は、エサ食おうとしても、すぐ引っ張って、相手の方にカジキを寄せて、向こうに釣らすわけ。向こうに釣らしてから、自分は釣る。また、カジキが逃げようとしても引き寄せて、相手に釣らすわけ。だから、魚を寄せるのがウチの仕事、これもコツだが、相手に釣らすのもコツですよ、ウチしかできないけど(笑い)。でも、魚ちゅうものはバカじゃないですねえ、もう分かっている魚は、ウチの所に来て、下になったり、上になったり、横になったりして、見ておるから、その時はこれを自分で食わしてねえ(笑い)、それから、別の魚を寄せて、相手に釣らすんです。



バショウカジキ、曳き寄せて釣らす

— その時は、相方に、あんたの方に魚寄せるから、釣りなさいと合図しますか。

當眞： いやいや、全然、こんなことは全然しない、相手は分からんで釣っている(笑い)。ウチが引き寄せたと分からんで、自分が釣ったと思っているさあ。だけど、自分が釣った

もんじゃない、ウチが釣るものを相手に釣らしているだけ(笑い)。だから、このやり方だと、相手が誰でも、素人でも、ドンドン釣れますよ(笑い)。ウチが魚を曳き寄せて、また逃げようとしても引き寄せて、向こうに釣らしているからねえ。こういうふうになんか工夫をしたから大漁したわけですよ(笑い)。

バショウカジキ いつも大漁 台湾船 総立ちで見ると

— 尖閣行けば大漁間違いなしと言ってましたが、どの位獲れたんですか

當眞：尖閣行くと相当獲れましたよ、1日で2千斤位獲って、もう2日で満載よ。

4千斤(2.4ト)だから、4千斤では何本なるかなあ。一本で約5、60和位、まあ100和の奴もおるし、これは集団でこっちに集まっておるから、大きいのも、小さいのもおるし。(※注60和級カジキなら40本ほど)。1日で満載した時もありますよ。

操業日数は、大体1週間位でしたねえ。尖閣に行く度に、大漁して、すぐ那覇に来てから下ろして、相当儲けましたよ。この儲けで、新造船も造り、造りしてから大きくしましたから。いつも大漁してましたから。

ある時ねえ、台湾船が、もう船を寄せて来てからに、こっちの漁の様子を見ておるわけですよ(笑い)。ウチはまたもう見せないために道具を取ったりなんかしてやっておったけど、あれ達は突き棒だから、必ずカジキのハネ見てからに、追いかけて行くでしょう。ウチらはハネ見なくても、エサでちゃんと魚寄せてから、もうしょっちゅう食わしていたから(笑い)。前ではモリで突いて魚揚げているし、後ろは釣ってパタンパタンやっておるし、もうもう前も、後ろも、しょっちゅうさあねえ(笑い)。あれ達はもう皆、突台に立っておって、見ていたよ、何でこんなに釣れるかなあ(笑い)、もうデッキは歩きもできないさあ、皆バショウカジキでいっぱいしているから、どんな道具でやっているかを見て(笑い)。ウチはもう道具皆揚げなさ(笑い)と、揚げてからに、あれ達が行くまでやめていたさあ(笑い)。

船員 引き抜きしてやらずが 皆失敗

— 當眞さんの船がこんなに釣れていたら、沖縄の他の船も真似したんですね

當眞：ウチの真似するんだけど、皆もう失敗ですよ。那覇の何という船だったかなあ、あれもウチの真似してからに失敗している、ウチの使っておった人を引っ張って行ってから真似しておるわけよ。真似してからに、もう全然釣れないわけ、ウチがどういう工夫しているのか全然分からないから(笑い)。こっちの与那原の組合にも1つ船がおったけど、あれもウチの真似する(笑い)というて、全然だめだよ。ウチの船員2、3名位、すぐ別の船から引き抜きしてからに連れて行って、向うでは突きも、モリも、何も整えてやるんだけど、釣れないから、もう皆失敗よ。これは何も言わない、行くんだったら行かして(笑い)、行っても、釣れないから。ウチはまたウチの船員にあんたやりなさいと言ってさせる。ウチのやり方だと、誰でも素人でも釣れるさあ(笑い)、自分が釣ったもんじゃない、ウチが釣るものを釣らしているだから(笑い)。この方法ならどんな素人でも釣れるわけだから。

そのあとでマグロ船専門に切り替えたから、ウチのこのやり方は、もうウチしかできないし、誰も知らないですよ。もう尖閣列島に行かなくなって、バショウカジキは釣らなくなったから。

マグロ船でも 10 年連続、水揚高 沖縄一

— 尖閣行くのをやめたのはいつですか、またどうしてですか

當眞：潮の加減か、季節か、何か知らんが、段々バショウカジキが釣れなくなりましたねえ。最盛期には行く度に満船してくるんだけど、あとから漁が少なくなってから。季節の関係は分からなんけど、今でも行ったら釣れると思うんだけど。で、その後は一本釣して、マーマチ釣ったりしてきてから、で、夏になってからマグロ船してから、そしたら、マグロがドンドン釣れたもんだから、もう尖閣には行かなくなっているわけよ。マグロ船は冬も関係なくできるでしょう、だからマグロ船一点張りに、マグロに力を入れたんですよ。それで 1957 年かな、マグロ船専門の清徳丸 5 号を新造しました、大分の津久見で 30 トンの船を造ったから、そのあとに 1 号と 3 号は処分しましたよ。もう尖閣には行かないから。

マグロ船の漁場ですか、こっちの南、宮古沖とか、大東島とか、その辺ですよ。

— 「馬天の當眞」と言えば、マグロ船で有名でしたが、

當眞：ウチは、5 号造ったらいつも大漁でしたよ、もうマグロの水揚高は 3 年連続の 2 回の 6 年間優勝ですから。3 年連続優勝したら、ニッセキから優勝旗が貰えるから、優勝旗 2 本貰いましたよ。また 5 号は 30 トンだが、この船も小さくなってから今度は 50 トン級の 8 号を申請したら、あの那覇の琉球水産社でも、50 トンは成功しないからダメというてからに最初は断られた。だけどウチが 8 号造ってやったら、成功ですよ。8 号もまた 3 年連続で優勝したから、また優勝旗貰い切りです。もう全部ウチが優勝旗貰いきりしておるから、どうせ優勝旗は清徳丸のものど決まっておるからと、ニッセキはそのあと優勝旗をストップして、優勝旗はないわけですよ(笑い)。その年も優勝したから 10 年連続優勝ですよ。

ウチは年から年中マグロ船計画して、次第次第に船を大きくして、5 号で儲けて 8 号を造って、またその 8 号で儲けて、今度は 11 号の鋼船 100 トンも造ってねえ。尖閣でバショウカジキでも儲けましたが、マグロでは相当儲けましたよ。

88 歳で引退、もう一度尖閣行って、カジキ釣りしたい

— 當眞さん、向こうの賞状は何ですか。漁具・漁法、漁場開発に努力とありますが

當眞：ああ、あの賞状ねえ、あれはウキフェーナワ(底立延縄)を改造した時のものです。ウチがそのあとマグロ船経営から手を引いて、昔やったマチ釣りねえ、深海一本釣りじゃないですよ。浮子付けてやる底延縄、あれを見たんですよ。糸満に行つて小さい船造ったら、糸満で、あれでマチ釣りやっていたから、最初は向こうのやり方を見て、その形を見てやったんだけど、もう船に 3 名は乗らないとできないわけですよ。ウチは 1 人で漁やるか

ら(笑い)、これではいかんといって改造してからに、1人でできるように縄の道具を造ったわけです。それで成功して、もう沖縄本島の東海岸から、奄美大島まで行きましたよ、喜界島辺りにねえ。そしたら、漁協からこの賞状を貰ったんですよ。「漁具漁法並びに漁場の開発に努力されました」といって、(笑い)。今まで貰った優勝旗や賞状はいっぱいあったが、もう今の家を建てた時に全部処分して、これ1つだけしか残ってないから(笑い)。



底立延縄の漁具漁法・漁場開発に対する漁協からの感謝状 (平成12年・當眞翁78歳)

— 91歳でこんなにお元気で！、何歳まで海の仕事されましたか、最後に尖閣に対する思いをお聞かせ下さい。

當眞：海辞めてから3カ年位かなあ、88まで海行っているよ。もうこの歳で海行くのは危ないからと息子ともケンカしてからに、船も処分してからに辞めたんだけどねえ(笑い)。

しかし、尖閣列島はいい所ですよ。漁は、これができない場合は、あれこれと、いろいろできますからねえ、曳き縄したり、カジキ突いたり、一本釣りしたりしてねえ。いい漁場ですよ。うちも、もう一遍、行ってみたいなあ(笑い)。向こうで、もう一度バショウカジキ釣りをやってみたいねえ。連れていく人があれば、指導をやってもいいんだけど(笑い)。もう歳が歳だけど(笑い)、うちが考えたやり方を、これは誰にも引き継いでないから、若い人に教えて上げんといかんからねえ(笑い)。

— 貴重なお話を、有益なお話を、沢山聞かせて頂き、ありがとうございました。



當眞家は曾祖父の代から息子・孫と5代に亘り海の仕事を守り続ける

右より息子正守さん(58)、正清さん(91)、孫健太(21)と達喜さん(26)

西里 勇 にしごと いさむ (池間漁協)

1933 年(昭和 8 年)、宮古島平良池間に生まれる。80 歳(2013 年時)。

勇猛果敢な池間漁師である。18、9 歳(1951、2 年)には尖閣諸島に出漁し、27、8 歳(1960、61 年)まで、深海一本釣り、曳き縄漁に従事している。尖閣には「魚を釣りにではなく、積みに行った」と、当時の尖閣が魚の宝庫だったと語っている。また氏の語るコウビトウでの体験や長嶺老人との芋畑、島の羽毛採りなどの話も興味深く、貴重なものである。米軍が戦中に撮影した同島の写真に、何と氏が寝起きして遊んだという不時着機が写っていた。



終戦直後 尖閣へ 一本釣りで

僕は 18、9 の歳、学校を卒業してすぐ尖閣列島へ行った。その前には先輩なんかはいっぱい行っている、何年も前から行っている。僕が最初に行ったのは第三瑞光丸(2.3 ト)という小さな船で行った。深海一本釣をしに行った。手繰りでマチ、タマン類などだが、潮の強い時は、曳き縄でシマガツオ、マンビキ、サワラとかをよく釣っていた。

向こうは潮のいい時はカジキとかも来るからねえ。潮のいい時は深海のマチを釣って、潮がよくなかったら、曳き縄でシマガツオとか、サワラとか、シイラとかを釣っていた。クバシマ(魚釣島)は、あんまり一本釣は食いつきが悪い、向こうは下は泥だから。コウビトウ(黄尾島 黄尾嶼、久場島の意)は、一本釣の魚もよく食うよ。

あの頃の船は遅いから、14、5 時間位かかっていたねえ、それに氷がない時代だから、午後 3 時頃には、池間を出て、向こうに夜船を走らして行くさあねえ。朝早く着いて漁をして、魚釣ったら、そのまま引き返した。商売しておったから、だから朝から漁をやって、沢山釣れたら、昼 3 時頃には、もう、離れんと朝の市場に間に合わなかった。それに朝 8 時の定期船で魚を平良に送っていたりしていたから。

向こうでは、漁が少ない時は、もう釣った魚を炊いて、船の上で少しおかずして食べた、もう残りは捨てて、また明日朝早くから釣るというやり方だった。沢山釣れることは釣れたけど、あんまり儲けはなかったねえ。

コウビトウでは 不時着のゼロ戦機で 遊んだ

あの頃、漁がない時、相棒と 2 人でよくコウビトウに上陸した。そしたら、飛行機があった。燃料不足で降りた飛行機よ、ゼロ式戦闘機かねえ？、一人乗りで、日の丸がはつきり付いていた。丁度向こうの芋畑の真ん中位に落ちていたねえ。芋畑は、部落の屋敷跡がある所のずっと上った所に、屋敷のある所からつないでいて、そこからずっと東側に相当あったよ、だから飛行機は屋敷跡の所から見えていたから。芋畑は 1 町歩(約 3000 坪)位はあったと思う、その丁度真ん中位に坐っていたから(笑い)、芋づるが後ろから相当這い上がっていたよ。そのかづらを取り外して、ゼロ戦機に乗って、遊んだがねえ。ペラー(プロペラ)まできれいにあった。相棒は僕より 1 つ下で、新城ヨシゾウとって、一昨年位に

亡くなったけど、彼とはコウビトウに何回も一緒に上がった。僕らは飛行機のある所の向こう側に、北側に上等な所があったから、向うに2,3日も寝たりして、一緒に遊んだりしたけどねえ。彼の兄貴は元気でここにいるさあ、シンコウ兄さんといって僕より2つ位下。潜りをやっていたから、尖閣にダツ獲りにも行ったはずよ。あの飛行機はジュラルミンで、なかなか腐れるものじゃないから。コウビトウのあの芋畑に、今でもあるんじゃないか。

カツオドリ捕まえて、持ってきて売る

コウビトウには何回上がった分たらん。何10回も上がった。シケて、もう漁ができない時は、あの年寄りなんかは、船は風の廻る度に逃げてあるいてねえ、もう僕らは若かったから島に上がって、鳥を採って皮剥いて、2人であんなしておったから。向こうにはヘビも島だから一応おるはずだけど、見たことはなかったねえ。鳥はねえ、ここではウンカー(カツオドリの意)という羽の長い、嘴が長い少し大きい奴、あれを捕って、殺して縛って、船に持って行って、毛を抜いて、皮を剥いて、裸にしてねえ。氷のない時だから潮ぶっかけて、いっぱい島に持って来て下ろしたから、昼捕って、夕方に船を走らせば、朝早く宮古に着くから、そしたら仲買人がいっぱい買いに来ておったねえ、一匹25セトで売れたよ(笑い)。もう高い物ではあるさあ、魚は釣ってきて15セト位しかなかったからねえ。1人で200羽しかできなかった。あれはきかったねえ。それに全部殺さないといかんから怖かった。だから捕るのはすぐ止めたけど。

加那志オジー コウビトウで、鳥の羽根採り

僕らがねえ、コウビトウに行って鳥を捕って、島にも2,3日寝たことがあるよと、その話したら、長嶺加那志(カナシー)というオジーねえ、池間の人でもう亡くなっているけど、今生きていたらもう120歳位かねえ、自分は向こうに、コウビトウに行って、あの羽布団用の鳥の羽根をもう何年もやっておったと。

「コウビの方」(古賀氏のことか?)から頼まれて行って、自分は何年も向こう



西南海上から見た久場島・黄尾島 (高良鉄夫1968)

に住んでいたよ、どこどこに住んでいたと話しておったが、そこら辺は家の形も皆ないさあ、もう戦前の話だからねえ。そのコウビトウで、加那志オジーは鳥の羽採って、こっちで足らん時は、トリシマ(南小島)に行って採ったとねえ、船もあつたらしいから、自分らが採った鳥の羽根、船が来て積んで行き、食糧は持って来て置いていった。1年分の食糧は貯えておってやっていたから別に怖くないからと。僕が、トリシマの方が鳥はいっぱいいるからいいんじゃないかと言ったら、加那志オジーは、あっちもいいけど、捕って掴まえ

るのは面倒、足場も悪いからと言うていた。トリシマは高い山や崖があるが、コウビトウは真っ直ぐさあ、多分、採りやすかったから、向こうにおったんじゃないか。

コウビトウには鳥はいっぱいおったよ、けどウンカーよりはカゴ（アジサシ類）という鳥の羽根がいいかもしれない、あれは白くて短いしねえ。ウンカーの羽根は大きくて長いけど、お腹の半分から下は白いし、きれいでもあるさあ。

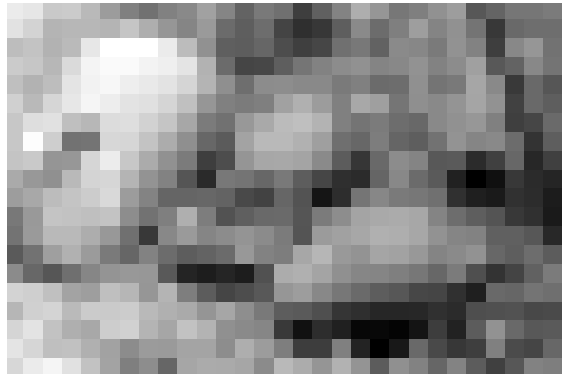
コウビトウの屋敷跡 大きかった

加那志オジーは、自分の家は、芋畑の西側だったと言っていた。

向こうは家がいっぱいあったはずだよ。それも大きい家が、向こうの基礎はあれだよ。この位あるよ、でっかいよ。コンクリーやっている所は高さがあった。こんな大きいコンクリーの基礎が打たれていたのもあったから、そこは何かの工場だったんじゃないかなあ、そういう所もあって、どんな造りしていたか分からんけど、コンクリーで基礎は上等にできていたからねえ。

向こうに墓はありましたかって、それは分からん、お墓といっても、向こうは墓か何か分からんから、西側には何んかなあ、石碑見たいなものがあつたけど。

僕は若かったから、あんなものは気が付こうとしないからねえ。



屋敷跡には当時使ったカメがゴロゴロ(新納義馬 1971)

向こうは水が不便だから、大きいコンクリーでやられた所には水タンクがあった。

屋敷跡にはカメ(甕)も水がめもあつたねえ。カメには口の大きい物と小さい物があつて、昔は飲み水をやる時は大きいカメに、蓋閉めて置いておいて、あんな物でやっていたが、あんな水がめがあつちこつちに転がっていたよ。

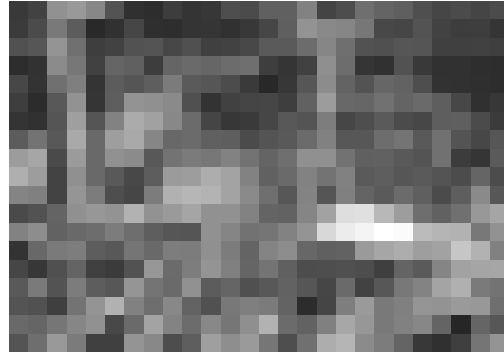
向こうはいい所ではあるさあ、加那志オジーなんかはずっとおつたわけだから、向こうの瀬で魚なんかも捕ってきて、食べたりしていたって、自分らずっと向こうにおつたと言つて、あんなに敷地を上等にやる位だから、何年か生活していたはずよ。長いこと暮らしていたんじゃないかなあ。コウビトウは海水浴できそうな場所もあるさあ。南西側はきれいに下がった所もあるから、水さえあれば、大東島よりもいいはず。

芋 元々「コウビの方」が 植えた

僕が、コウビトウにあった芋を食べた話をしたら。加那志オジーは、「自分らは脚気なつたらいかんからあの芋は作つて食べていた」と言っていた。「あんたなんかが植えた芋は、食べられないと言つたら、あの芋は自分なんかが植えなかつた。あれは元々『コウビの方』なんかが持つてきて植えてあるものもの」と言っていた。あの芋は大きいさあねえ、もの

すごく大きい、こんなに大きい、いっぱいあるけど、これ炊いたらもう(笑い)、プカプカして美味しくない。コウビトウだったら人間は死なんよ(笑い)、もう芋がいっぱいあるからねえ。大丈夫だよ、1町歩位はあるかもしれん、1,2年で喰えんから(笑い)。

サトウキビ畑は、屋敷跡の一番南側にあったねえ、その上は、屋敷の上は、全部キビ畑だから。あれは昔の在来種だが、あれはこっちから持って行っているはず。池間にハーラヤーという所があるけど、僕らが小さい時からそこにあったのに似ていた、匂いもあれみたいだった。20号の大茎種というのは美味しかったが、あれではないさあ、小さいキビでねえ、長くなっていたよ。僕らが行った頃は5畝位、150坪位はあったかもしれない。オジーに「25号の大茎種、なぜあれを植えなかったか」と聞いたら、「向こうでは風が吹いたらなくなるから、あの小さいのが上等だ」と言っていた。多分、こっちから持って行って植えたはず。



屋敷跡近く?から掘り出した芋 (新納義馬 1979)

コウビトウで儲けて 赤瓦葺きの家造る

加那志オジーは、コウビトウに池間の仲間と一緒に、それとも自分一人行ったのか、それは分からん、自分らでも池間から行った人は、加那志オジーしか聞かないけど。オバーに聞いたら分かったはずだが、もうオバーもいないからねえ。でも沖縄から行っている人はおったんじゃないかなあ、そんな話はしている見たいだった。若い時に向こう行って相当儲けたかもしれない。オジーの家は、昔から大きな赤瓦葺きで造られていたねえ。オジーは向こうからの儲けであの家は造ったと話していた。僕らが小さい時は皆小さいカヤブキだった。僕の本家も、僕が昭和27,8年までもカヤブキヤ(茅葺家)だよ。

池間がカツオ漁が栄えて、カツオ業の収入が出てから、赤瓦葺になったけど。

この話は、それよりずっと前のことだからねえ。あの頃は収入源はないもん。

加那志オジーはねえ、「もう、向こうに行けないからねえ」と懐かしそうにしょったよ。もっと、向こうの話、コウビトウにいた頃の話、オジーが元気なうちに、うんと聞いておけば、よかったと考えるさあ。あの時は僕らは20にもならなかった、子供だったから。

コウビトウ、アカオで、採れたのは 赤サンゴだけ

その頃、19歳位の頃(1952年)だと思うが、尖閣にサンゴがあるからとサンゴ網下ろしに行った。幸丸という11トンの船で、船長は仲間ヤマさんと、長嶺金五郎さんも一緒だった。

コウビトウでサンゴ網引っ張って見たら、本サンゴは1つも採れなかったけど。今考えてみたらねえ、あるわけないよ、向こうには、島の西側の一本釣して魚を釣っている所を引っ張ったからねえ、したらねえ、あの赤い、柔らかいサンゴが、あれが掛ってきて、大

きいのがよ、こんなにでっかい物がかかって来ていたよ、これサンゴかなあと思って、色も一緒さあねえ、そしたら違う(笑い)、もうあんなのしかなかったよ、向こうには。

だけど、北側にあるはず、北とか、東面とか、向こうの下がった所にはあるはずさあ。アカオでもやったが、赤サンゴをねえ、小さいのは採ったよ(笑い)。1日やっても一斤位しか採れない。アカオには赤サンゴの小さい奴はあることはある。それは東側だったけど、いい奴は掛からなかった、でもやってみないと分らん。あることはあるはずだ。

コウビトウにもあるかもしれんよ、向こうは。東の絶壁の所はやってみないと分らんよ。僕らが幸丸でサンゴ網下ろしていた時、台湾船はいっぱい来ていた。だが、サンゴを採っているのか、何をしているのか分からなかった、僕等は19歳位、未だ子供だったから。

サンゴブームの前に うんと儲けたよ。

1959年、宝山ソネにサンゴが発見されて、僕らが行ったのは60年だ。24,5歳の時、仲光丸(31.90ト)で最初行って、僕が機関長して、最初に行っていたから。

皆より早い時期に行ったから、うんとサンゴを採って、大部儲けたよ。

そのあと、皆は別の船で行ったからねえ、それからサンゴブーム(1962,3年)になってあの時はサンゴ網入れる所ないで走っていたけど。もうサンゴいっぱい巻揚げて ウィンチ壊して入って来た時もあったけど、あの時は尖閣列島には行かない。ここは宝山ソネを発見して、こっちだよというから、皆行ったさあ、もうメチャクチャ採れたからねえ。

一貫以上のサンゴの木なんかは何10本と揚げておったからよ。網揚げて簡単にはサンゴは外せない。棒で叩いて落として、もう残ったものだけが製品だからねえ。

だけど、最後に行った時には金にはならないなあと思ったねえ。もう殆んど枝サンゴ採っている見たいにデタラメに揚がったからねえ、これでは金にならないと思った。もう、いじって、恰好の悪いものは、海に捨てて、また採ってきて、捨てて、あるもの持ってきて、ハンマー叩いて割ってみたりして、あんなしていた。もうサンゴは金にならないと思ったから、カツオ船に切り替えて、サンゴ採らんでカツオを獲ったさあ。

そのあと皆も、サンゴはもう採れないからと辞めていたけど。

尖閣で、狙ったのは 深海のマチ類

僕が尖閣列島に行ったのは18,9歳から27,8歳位まで、もう30歳には、南方カツオ漁に行っていたからねえ。あっちでやったのは、主に深海一本釣、マチ釣ですなえ。

当時は、宮古近海でも魚は釣れたが、尖閣列島付近はいっぱい釣れたねえ。

だけど、クバシマ(魚釣島)とか、トリシマ(南小島)付近は、あんまり良い魚ではない。

アコウとかの東側の魚はいい魚だ。皆、マチを狙っていた、アカマチとかを。コウビトウの東の絶壁なんか、あんな所へ行かんと釣れなかったから、もうクバシマから北になれば、向こうはもう海じゃない、一本釣の場所じゃない、向こうは浅いから。皆泥ですよ、東シナ海の泥だ、サバとか、サンマとかあんなものしかない。浅瀬だから、もう向こう

に行ったら何もしない(笑い)。

(海図を指で示しながら) ここになるともう泥よ、浅くして一本釣には向かない。クバシマから東側でなければ、一本釣はできなかった。一本釣はマチ狙い、マチとかシロダイ、シロダイは、殆んどシケた時に、島の周辺にいる、深い所にいないからねえ。向こうまで行ったら、深海のマチ狙いしかやらなかった。浅い所だったらシロタマンとか、ミーバイ(フェフケ類)とか、あんなものがいっぱいいて、よく釣れたけどねえ。

あの当時はミーバイなんか買う人いなかった(笑い)。今は美味しくて高いけど、もう誰も買わなかったからセリにはやらなかった。持ってきて、自分で食べるおかずにする位、だから、あんまり釣らなかったねえ。

魚を釣りにではなく、積みに行く

漁場は色々だったけど、コウビトウの近辺やったり、またクバシマの東側か、南側の向こうの下がった所、西側は全然ダメですよ。東シナ海側は、浅いからねえ。もう泥になっていい魚は釣れなかったから。もう潮の強い時に向うに上がって、曳き縄で、シマガツオとか、サワラとか、あんなの釣っていたけど。アカオには丁度東に行った所に、マチの食うポイントがいっぱいありますよ、向こうには僕等が行った頃は 2、3 時間釣って、すぐ引き返していたからねえ。深海は 1 本釣りでやるから、大きい魚のポイントに行けば、もう下ろしたら 1 回に 20 疋、30 疋は揚がるねえ。もう何回もやらないうちに大体釣れるから、すぐ戻っていたさあ。僕らが行った当時は、もう魚を釣りに行くではなく、魚を積みに行っている見たいだった。(笑い)。

マチ類は、もう沖縄本島の船、糸満の船、那覇の船、ああいう所からもずっと獲りに来ていたから、今では相当やられているはず。それに、今はもう道具がいいから、魚探も付いてあるし、絶対逃がさないから。もう尖閣列島では、昔見たいに釣れないかもしれない。

だけど、向こうにあんまり行ってないから魚は大分殖えて、昔のように獲れるかもしれないねえ。

10 回なら、6 回は苦労、欲しい避難港

尖閣は潮の強い所だから波がものすごく強い。だから危ない目にあったりで、うんと苦労した。10 回行ったとすれば、そのうち 6 回位は苦労だ、半分以上は苦労だった。

もう少しシケても大変だから、八重山からの北風にかかったら、宮古には上りきらん。八重山に行って、少し風てから、そこから池間に帰ってきた時もよくあった、危ないことだけど。でもそんなしないと、食えなかった。

尖閣は冬の時期はよかったけど、港がないから危なかったからねえ。宮古からアカオまでは、大体 7.8 マイル出て 9 時間位歩くんだから、北風があつたらたいへんだった。

だから、尖閣に避難港が造って貰えるのなら最高だね。これが一番よいんじゃないか。港が出来たら小さい船でも行けるようになる、昔は 3 トの船で行っていたから。

小さい船というのは、行って釣るでしょう。帰りが問題なんだよ。もし船がシケたらどうにもならない。冬に後ろから風が吹いたら、なかなか大変なんだ。これは僕の考えだがねえ、まあ避難港自体は、向こうではそんなデラックスなものは造れないはずだから、2,3隻でも4,5隻でも泊まれる位だったらいいんじゃないか。そんなに大きい物を造ってもしょうがない。向こうに10隻も20隻も泊まることは先ずないですよ。大きく造ってしまうと、向こうの波は沖と一緒にだから、港の中にまでうねりが入る可能性があるし、風も余計に入ってしまうこともある。だから規模は小さく、入口を2つも3つも造って、勢いを殺してやるような造りにすれば上等なものができると思うがねえ、どうだろうか。

この前、アカオに行った コウビトウは 是非行きたい

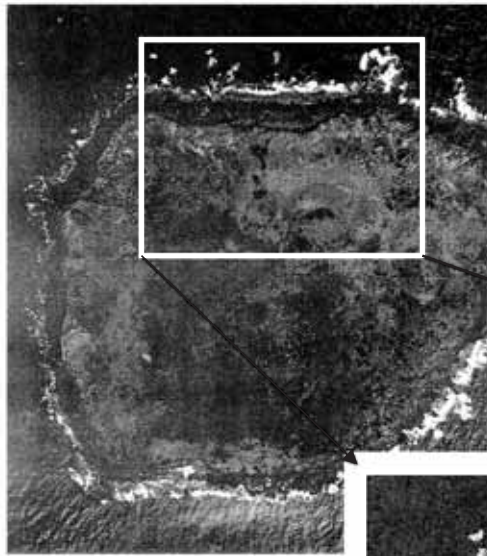
去年(2011年)の9月から10月にかけて3回、今度(2012年)は、2月は2回だったかねえ、漁協の若い年中と一緒にアカオに行ってきた。(外国漁船損害調査事業の一環として)、与那嶺正雄さんと僕と2人で、尖閣の案内役でねえ、もう2人とも80近くのおジーだが(笑い)。僕が、最後に尖閣行ったのは27,8かなあ、カズミ丸という3トンの船に乗って、だから52,3年ぶりだ。向こうはアカマチ、メンタイ、アカマチの大きいのは食うからねえ。シロタイとか、アオマチとか、あんなのが釣れた。だけど、行ったのはアカオだけ、尖閣列島には行かないですよ(笑い)。僕はコウビトウに行きたいと言ったけどねえ、向こうは海も、島もよく知っているから、コウビトウに行く時は必ず乗せてと言ってある。以前話したあの飛行機もまだあるんじゃないか、ああいうのは、なかなか腐れないし、簡単には運ぶことできないから。まだあの畑に坐っているんじゃないか、あつたらもう一度見たいし、できれば、こっちに持って来ようとも思っているさあ(笑い)。(了)



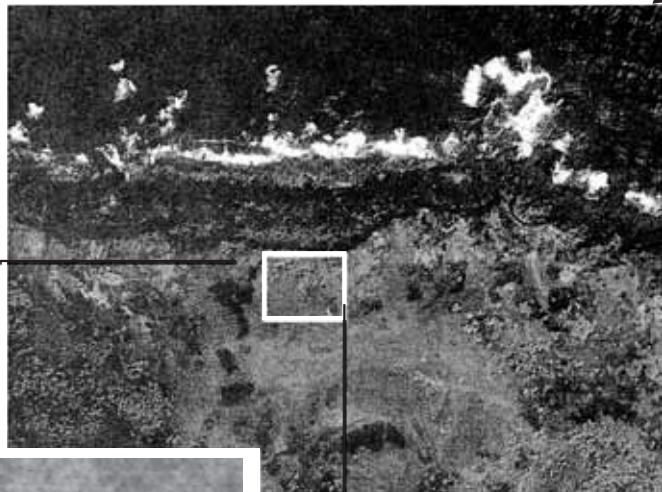
尖閣諸島アカオ(大正島)付近で操業している池間漁船
(2011年10月)

※参考資料

米軍の久場島の航空写真に、不時着した航空写真が写っていた！！



上：米軍の航空写真全体（撮影年不詳 沖縄県公文書所蔵）
中：白枠を拡大した写真
城枠内に飛行機が小さく見える
下：飛行機の部分を拡大



左端上のゼロ式戦闘機と比較して見ると少し異なっているのが分る。
機種は不明

長嶺 宗治 ながみね そうじ (池間漁協)

1930年(昭和5年)、宮古島平良池間に生まれる。83歳(2013年時)
漁家に生まれた氏は、長兄隆博氏と共に漁業に従事する。

尖閣諸島には24,5歳(1954,5年)から42歳(1972年)まで出漁。32歳には、
自船宝盛丸の船長を務め、海のものは潮の関係を学び、大漁を重ねる。

そのあと南方パラオに転じ、50歳から63歳まで16年間、パプアニューギ
ニアに留まり、カツオ業に専念、その間、常に水揚げ高トップだったという。

氏に、当時の尖閣諸島での漁の思い出と、海のものは潮の関係を語ってもらった。



本家の船・宝盛丸で 尖閣 よう行った

尖閣列島の昔のことはそんなに詳しくないんだけど、ウチらが行っていた当時は、クバ
シマ(魚釣島)には、昔カツオ製造やっていた仕事場の跡はあるさあ、跡はあった。工場とか
ねえ、あんな色んな物の跡は残っていたけどねえ。終戦直後に、向こうに住んで、カツオ
漁したり、カツオ節製造していた池間の人達もいるさあ、だけど、ウチらが行った当時は
工場もなくなってねえ。最初に行ったのは若い時だから、24,5歳(1954,5年)位に、照幸丸
(31ト)で、深海一本釣で、マチ釣に行った、それから、ずっと42歳位までは行っていた。

そのあとは南方操業に出かけたから、最初はパラオにカツオ釣に、53,4歳からは、(上に
掲げてある船の写真を指して)、あれは新福丸、あの60トの船を持って、パプアニューギ
ニアにカツオ操業に行っていた、これは16年続いたから。

その前は、尖閣列島にはよく行った。暇がある時に行っていた。本家(実家：長兄長嶺隆
博宅)の船があるから、(下に掲げてある船の写真を指し)、あの宝盛丸(船主長嶺隆博 30ト)
でねえ、あの宝盛丸に乗って、30人位乗って、カツオを釣っていた。

カツオ釣り時期は、あっちもこっちも4月頃から始まるからねえ、一番最盛期は6月か
ら8月位、8,9月頃までは終了している。そのあとは、カツオ漁は休みだから船の整備する。
この船は宮古で初めてのディーゼル船だった。エンジンがディーゼル、焼玉じゃない、こ
のエンジンを整備する前に、「尖閣列島とか、アカオシマ(赤尾島、久場島の意)とかが行って、
魚を釣ってこい」と兄さんの命令で、行っていたさあ(笑い)。

最初 照幸丸で マチ釣に

宝盛丸の前は、照幸丸(31ト)で、船主は與座金真さん、あれで尖閣列島へマチ釣に行っ
た。そのあと宝盛丸(30ト)を持った。あれは久松の人の船で元はサンゴ採っていたよ、サ
ンゴブームの時は、サンゴ採って宮古の造船場に揚げられていた、ウチらは兄さんと2人
で買ってきて、で、購入したのは63.4年の頃かなあ、はっきり覚えていない。これに修理
がいっぱいかかった。エンジンが悪かったから、300万円(米軍票B円)かけて修理して、エ
ンジンも上等にして、あとにはもう、カツオいっぱい釣って来て儲かったわけさあ(笑い)。
これからがあっちにもよく行っておった、尖閣列島にも。

氷ない 塩漬けで 何トも 持って来た

宝盛丸で、夏はカツオ釣って、冬に船の整備するからねえ、整備する前に、尖閣列島によう行っていた。行って、ソーダカツオ(シマカツオ、ヤイト、宮古ではウブシュー)を釣って来て食べていたさあ。2、3ト位も釣っていた、1 航海でねえ。

もう、ウチの船で、尖閣列島には約 10 時間から 12 時間位はかかるから。

宮古から出て到着いたら、その日に操業して、5、6 時間位操業して釣れたら、すぐその日に帰って来たさあ、夜行でねえ。

あとは深海一本釣で、アカマチ (ハマダイ) とかよくやっていた。相当釣っていた。2 トから 3 ト位釣っておったさあ。

あの当時は氷がなかったから、釣った魚は全部塩漬けにした。これが大きな仕事だった。塩をいっぱい持って行って、腹を割いて、内臓取って捨てて、これの中に塩入れて漬けて、塩を揉み付けて、生簀に並べて置いて、氷室にきれいに並べて、そんなして運んで持ってきて、売っておったさあ。

あんな時代もあったからねえ。今みたいに氷が安く使えるもんだったら、氷が贅沢に積めるもんだったら、幾らでも釣っておった、何倍も釣って来れたさあ。

あの当時、向こうには、あっちこっちからの釣船は来なかったから、アカマチをば、あんなに釣れておった。今の場合は、台湾船とか、あっちこっちからの寄り集まりの船がいっぱいいるさあねえ。あんな一本釣船もいっぱいいる。船が集まって来て皆で釣るもんだから、あとはそんなに釣れなくなった。



カツオ船宝盛丸(30ト)、夏は近海でカツオを操業し、冬は尖閣に行き、曳き縄、マチ一本釣をやっていた

魚釣島に、カツオ釣竿の上等な竹 いっぱいある

島にも上がりましたよ。ウチは魚釣島には相当登ったことあるよ、上の方まで行った。何で、ウチが上の方に登ったかといったら、カツオ釣る竿があるさあ。一級品の竿できる竹がいっぱいあるさあ、あの当時は竹竿使っておったから、あの竹を採ってきてあれでカツオ釣っていたさあ。向こうの竹の質は最高。だからあれ採るために登って行った。

ウチなんか上に登るのがきついさあ、だけど、きつくても頑張っあ竹採りに登って行ったさあ。(笑い)。こんな竹竿、内地から買って使っておったからねえ。

向こうの竹は、内地からのカツオ釣竿より倍以上も上等。内地からののは厚みが薄いさあねえ。向こうのは厚みもあって力もあるさあ、バネもある。あの当時は池間の漁船が 10 隻位おったからねえ、採ってきて上げとったから。この竹は何竹かは知らない。カツオ釣の竿と、もうそれしか言わないさあ。もう魚釣島に竹山が見つかったもんだから、本物のカツオ釣り竿ですよ、自分で伐ってきて自分で使っておったさあ。今でもいっぱいあるはずよ。

家造る最高材料 チャーギ いっぱい

また、魚釣島には、あのうクバというか、葉で昔は釣瓶(つるべ)なんかも作っておったなあ。あの木がいっぱいさあ、誰が持ってきて植えたか分からんけど、もう色んな木がいっぱいある。また上の方には、家造る材料のチャーギ(リュウキュウマキ)はねえ、ものすごかった。向こうのチャーギは、佐良浜の連中が皆採って、家を建てていたはずよ。

わざわざ船をチャーターして採りに来ていたから。大きいチャーギなんかがいっぱいあったさあ。ウチは山から伐って来て運んで置いてあるのを、伐って運んで来て集めてあるのを見た。誰がそんなことしているかなあと聞いたら、佐良浜の人だった。



魚釣島北斜面の鬱蒼とした森林、この中に釣竿用上等な竹、チャーギも産する (新納義馬 1979)

チャーギは、もう家の材料したら最高さあねえ、あれには絶対虫も入らない。最高の材質だから、何 100 本も持って行ってるさあ。船を持って行って積んでくる位だから。

小さくない、皆大きかった。ウチも下から登ったけど、上までの間にはもういっぱいあった。全部大きい木ばかり見えておった。だから佐良浜にはねえ、向こうからチャーギを採ってきて、家を葺いている人はいっぱいいるはずよ。それを見たのは 34、5 歳位の時かねえ、今はもう保安庁がやかましいからねえ、簡単に近寄れない、上陸できない。

ドラム缶大の蛇 昔のオジーが話していたさあ

あと、トリシマ(南小島)で、沖縄の漁師(沖縄本島の、糸満漁師か?)なんか、アホウドリ(カツオドリの意)を捕って殺して、皮を剥いでいた。怖かったねえ。あの鳥を殺して下の方に落として、降りて行って見たら、あんな大きいヘビ(シュウダ、臭蛇)が来て、殺して落とした鳥を包んで食べておったと言っていた(笑い)、怖いからもう近寄らなかった。

トリシマはもう夕方なったら鳥が物凄いいからねえ、あの鳥を捕って食べていたというから。あのヘビは、ニシキヘビ(シュウダの意)は、こんな大きい蛇だったさあ、鳥がもう眠ってから、このヘビは上におって、眠っている鳥を襲って食べておったらしい。ウチらにははっきり分からないけど、昔のオジー(古老)なんか話しておった。ドラム缶の大きさ位のヘビもおったって(笑い)。また、あれが死んでいた穴(ヘビの墓場の意)を皆に教えておった。この南小島の北側にちょっと離れた島がある。向こうに穴(洞窟)がある。1つの島だよ、離れているんだけど、島になっているから。向こうにまた、大きなニシキヘビがいっぱいおったというさあ。ウチらも、島に寄って行って、この鳥の傍に寄って行って、鳥を殺して、皮を剥いて肉も採って、お家に持ってきたさあ。アホウドリを、皮を剥いで、肉ばかり持って来て食べておった。

ソーダガツオ いつも大漁 午後 4,5 時頃・魚釣島西方で

尖閣列島には、佐良浜の連中が曳き縄に行くよ、ソーダガツオとってねえ、カツオじゃないんだ、あれを曳き縄で釣りに行っているさあ、ソーダガツオといたら肉も硬いよ。ダーッと座っている。向こうのソーダガツオはエサなしには釣れない。出鱈目に行ったら駄目、釣れない。ウチは向こうは大分経験してあるさあ。向こうで操業を経験してあるから。あれはいい時間じゃなければ釣れない、潮の関係だねえ。何でウチが分かるかと言ったら、アカオシマ(大正島)と尖閣列島行って曳き縄して、魚を釣って食べていたから(笑い)。

で、最初アカオシマでは一本も釣れないわけ、それが夕方尖閣列島に向って夜行で行って、向こうに朝早く着いて、それが3,4回位島を廻ってもカツオ一本も釣れないんだよ。

ソーダガツオも1本も釣れないから、もう帰るしかないねえと思って、もう最後の1回を廻った時に、あの魚釣島の西の方、角の方に、ここまで廻って着いたが、午後の4時から5時位だった。その時間にですなえ。この時曳き縄を4本曳いていたから、1本に針を5本付いておったさあ。それだけの針に、全部に、ソーダガツオがかかって、ものすごかったですよ。それから釣始まって陽が沈むまでは、もう何ト位だったかなあ。とにかく2,3ト位は釣ったねえ、その時間に。

その時に、ウチは勉強して、なるほどソーダガツオも、カツオも、潮の関係だと思って、考えて、そのあと、その時間に行って見たらやっぱり釣れておった。

で、佐良浜の連中は幾ら行っても釣れないというから、その話したら、船さあ持って、ウチが釣っていた時間に、釣りに行ったら、言っている通りものすごかったって、大分釣って来たって、もうお酒とか、何とか色んなもの持って、お礼に来たさあ(笑い)。

あれから始まって、どんどん行っているけど、行く度にもう満タンばかりで帰って来ている。(地図で示しながら)、この魚釣島の西側ねえ、何度も行ったよ、行ったのは冬の時期、島のカツオ漁が始まらない2,3月位かねえ。

やっぱり魚は 潮と時間の関係ですよ

海の物は、あれこれは潮の関係、潮によって釣れる。逆流だったら釣れないねえ。その時の潮は東から西の方へ延びている。尖閣列島の場合は相当波が荒いですよなえ、いや、荒いというよりか、もうその日の天気によって変わるさあ。例えばねえ、リーフに付いている魚、これがリーフだったら、潮の流れが東から西の方に行く時には、このリーフの東側に魚寄るよ、魚は来る、潮の関係で。こっちにおった魚も東から潮があったらここに来る、潮の流れが東から西の方へ延びたら、魚は全部東側へ回る。だから海の物は、全部潮の関係ですよ。どこの物も、カツオだって、アカマチ釣りだって、潮上に出るねえ、潮によって上の方に乗って来るわけさあ。で、うちは船長はじめたのが32,33歳、それから63歳までやって、その間に勉強したのが、海の物はやっぱり潮の関係だなあと感じた。

小さい魚であろうが、大きな魚であろうが、もう皆潮の関係ですよ。

南方でカツオ漁で行った時も、カツオが浮いてくる時間と潮を考えて勉強しておったわけさあ(笑い)。だから他所はカツオ全然釣れんが、ウチは満タンばかりだった。

あんな時間に釣っているから、他人は分からないさあ。船を持って船長たるもの、漁労長たるものは、あんな時間とか、潮とかを、勉強しておかなければ、海のものとは獲れないねえ。ウチはもう経験して来たから。パプアニューギニアは、スターキストといって、外国会社の船が14、5隻、宮古の船は2、3隻位ねえ、全部で30隻位のカツオ船がここで操業していたよ。



(掲げてある船の写真を指して)、この30隻位の船からもう、ウチの船は優勝ばかりさあ。

カツオ船新福丸(60ト)の雄姿、パプアニューギニアで、16年間、30隻中、常に水揚げ高トップを占めていた。

16年この仕事やったけど、16年間この船で優勝ばかりしているさあ、しかも相当引き離してずっと1位ばかりだもん。盾も、大きい盾も、優勝旗も貰った。

南方での生活は長かったねえ、ウチはもう83歳になるが、身体も弱っている、老けているさあ。お家へ帰らないで、もう南方にばっかりいたからねえ、帰ってきても2、3日位しか、家にはおらなかった。すぐ急いで、また行っておったから、船は向こうに係留しておるからねえ。それ見なくちゃいかんからすぐ帰って来ても、またすぐ戻って、16年間もだよ(笑い)、長いねえ。(了)



1978年沖縄県西銘順治知事、ソロモン群島、パプアニューギニア、現地視察記念タオル。

与那原 勉 よなはら つとむ (池間漁協)

1934年(昭和9年)、宮古島平良池間に生まれる。79歳(2013年時)。

カツオ漁業の島池間は夏はカツオ漁、冬場は一本釣の漁業形態である。氏は、20歳で初めて尖閣諸島へ一本釣、曳き縄漁に行き、以後出漁する。1957年、23歳にはダツ追込み・潜りとして糸満漁師に雇われて、魚釣島に3ヶ月間滞在、当時の状況をつぶさに見聞する。のち漁協勤務等を経、国内商船及び外国船ミンダナオ航路の船長を歴任。定年退職後はJESの講師として、沖縄海技者養成に勤む。現在は釣船を操して近海で一本釣を楽しんでいる。



20に初めて尖閣へ、大シケに遭う

僕が尖閣に最初に行ったのは、昭和29か30年(1954,5年)頃かなあ。照幸丸(31ト、96馬力、船主與座金真)という船で、船長が濱川政治さん、長嶺隆博さんが機関長だった。で、当時は天気予報技術がよくないので、その時は2月頃、旧正月、7日正月といますよねえ。その時に船出したんですよ。僕はその時20位だから、1番歳下だから飯炊きやっていたら、もう雲も真っ黒なって、これはもう風が北に廻って、もう大変なシケになるなあと思っていたんだけど、その当時の船長、もう観天望気も何にも知らんもんだから、出航してみるとねえ、ひどい目に遭いましたよ。もうちょっとで命は捨てていた(笑い)。

小さい船で、カツオ船の戦前の木船だからねえ、もうシケに遭って沈みそうになった。サバニは2隻積んで、左右に積んで、1隻は飛ばされてしまって、船は水浸しになって、やっと皆で水を汲んで、汲み出して、やっと浮かばして、船はもうひどい目に遭って(笑い)。

シケも収まり、やっと命拾いしたが、どこに来ているか分からないんですよ。

丁度大型のカツオ船が来たもんだから、高知の船でしたよ。この近辺をカツオ釣って廻っていたでしょう、尖閣列島に行くんだけど、どこの方向にあるかと言ったら、あの大型船から教えてもらって、やっと向こうに辿り着いたんですよ(笑い)。

大漁だった一本釣、大型カツオ船も操業。

照幸丸の機関長は長嶺隆博さんで、弟の宗治さんが僕の上で一緒でした。乗組員は14,5名、その時は冬場、2月頃でシケで、とても寒かった。隆博さんは僕に合羽貸して上げたりしてねえ、また機関長だから、甲板は寒いから、エンジン部屋の中まで入って来いと、自分の当直の時には、暖かいところで暖めたりしてねえ、大分世話になりましたよ。

尖閣行ったら一本釣だったから、もう深海一本釣して、大体100mから200m位の所で、マチ釣して、向こうは、マチとか、シルイユとかねえ、もうすごかった。で、ものすごく大漁して、帰って持ってきたわけですよ。航海日数は、大体1週間位しかできなかったねえ。昔の船はねえ、もう1週間から10日分位しか積み込みはできない。水も積んで、燃料も積んで、何もやったら、しかも水タンクは木板で造ったものねえ、あれしか持って行かない。今みたいに槽内に造られる船はなかった。だから操業日数も1週間位が限度です。

で、向こうで水がなくなれば、魚釣島にサバニ下ろして上陸して水を採ったりしてねえ。飲み水としてもあんまりよくなかった。やっぱり溜まり水と潮のしぶきが上がる所だから、でも魚釣島には上等な所もあったよ。向こうに港じゃないけど、上等に船が入るような所があって、(掘割の写真を見せると)、そうそう、ここですよ、で、ここに入っていくって、これ右側の上の方に、何か水源じゃないけど、岩の窪みがあって向こうに水が溜まってねえ、向こうから水を採った。当時は、尖閣諸島はねえ、あのカツオ船の本場だったですよ、魚釣島のこの近辺は皆カツオ船、大型カツオ船でホンガツオ一本竿釣り、竿釣りが高知県の船とか、それから鹿児島ねえ、山川港の船とか、こういう船が 5、6 隻はいたんですよ。200 トンクラスの大きな素晴らしい船が。冬場のカツオ船ばかり、で、たまにねえ、台湾のカジキ銛突き船、あれが来ていたんですよ。



魚釣島の掘割、ここにサバニで入って水を汲みにきた。写真の舟は調査団のモーターボート。(開発庁 1979)

当時は、アホウドリ(カツオドリの意)はものすごかった、もう南小島の上は真っ黒になってねえ。あれは台湾が皆採り荒らしたみたいですねえ、朝起きたら真っ黒、ダアーツと巻いていたよ。あとでダツの追い込み行った時は少なくなっていた。

尖閣のカツオ速い すぐ釣らんと 止まらない！

僕も、尖閣列島で、カツオ釣り、ホンガツオ竿釣りの経験がありますよ(笑い)、それも一度だけ、照幸丸に乗って、宝山丸と一緒にいった。もう向こうのカツオ速いんだから(笑い)、パッと鳥山が来るでしょう、普通、エサ撒いて、水掛けて、止まって、ワーツと群れたのを釣るが、向うのカツオはそうじゃない、そのまま一直線に、もう止まらんですよ、速いよ。すぐ釣らんと、すぐダーツと潮に流されていなくなる、走って逃げて行く。また次に来るから待ち構えていて、カツオの山が来たら、すぐ釣って、また待ち構えていて、また釣って、また待ち構えて、そんなにしてやっていたよ(笑い)、ものすごく大判が釣れたが。あの魚釣島の付近で、あの北側、西から北側付近で、向こうは回遊は多かったねえ。

宝山丸と 2 隻で行ったが、照幸丸はホンガツオはあまり釣れなかった、竿釣りはいつときだけしかやらない、エサが向こうは採れなかったから、曳き縄が多かったねえ、シマガツオとか、サワラとか、照幸丸は曳き縄兼マチ一本釣専門だからねえ(笑い)。宝山丸はカツオ船、ホンガツオ竿釣り専門ですよ、宝山丸は、池間に「㊦」というカツオ工場も持っているし、魚釣島でも製造工場をやっていたから本格的ですよ。

もうエサは自分達で採ってやるし、人数も 2、30 名位は乗っていたかもしれん、向こうにカツオ釣りでも何回も行ったねえ、僕達は 1 回、いつときしか行かなかったけど、もう 1 週

間で帰って来て、また、マチ一本釣りに切り替えたりして、切替が激しかったねえ。

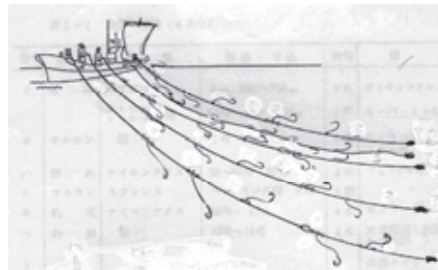
泰光丸では マチ一本釣 流し釣り

そのあとは、24歳(1961年)位の頃かなあ、照幸丸から泰光丸(30.57ト)に替わりましたよ。泰光丸はカツオ船だから、夏はカツオ、ホンガツオ竿釣りしたり、潜ってカツオのエサ採ったりして、僕もカツオ業したねえ(笑い)。カツオ漁を終わったら、船はそのまま係留しておけないとあって、冬は、泰光丸で、尖閣列島にマチ釣りねえ、深海一本釣しに行きました。船長は家内の親父の仲間義雄さん、機関長は義兄の淳さんで、その時に行って、サバニのいっぱい釣ってきて氷に漬けていた、あれはサバニ 2 隻を持っていくわけねえ、そこで下ろして流し釣させる。(海図を見ながら) これは僕らはヒラジマ(やや平らな島?)といっておったけど、今は久場島と言うが、この尖閣の周囲は、皆いい漁場だった。

(大陸棚百尋線から上側付近を指して)、宮古から来る時なんかは、皆この辺で集中してやったねえ。そこは流れが速くて皆潮目ですよ。カツオも釣れるし、カジキも浮くのに、この付近が一番いい。曳き縄でも、カツオとか、サワラとかもよく釣れる。

泰光丸で行った時は、一本釣で流し釣でやったねえ。向こうでは、潮の流れが速いから、アンカー入れんで、後ろに帆を立てて、風に向けて流してねえ、流し釣りは、よい天気には船が移動しないから、潮はあった方がいい。

流し釣りは、縄(道糸)1本にサルカンつけて5つ枝にして針つける、これに錘つけて、この縄は5本位ねえ、釣り針は全部で25本、マチ針だよ、これを流したら、すぐマーマチが揚がってきた、枝いっぱい。3和、4和のものが、80メートルから100メートル位でねえ。あの時は、尖閣は皆魚のいい漁場だった。ヒラマチも、シチューマチも、シルイユも、アカマチも釣れた。相当獲れたましたよ。



深海一本釣の流し釣 縄5本で各々釣針は5本

多い時では7、8トは獲っていたんじゃないかなあ、泰光丸の2つの槽内にいっぱいあったから。与那国辺りも一本釣は行ったら、与那国も相当釣れたねえ、シチューマチが。尖閣ではアカマチとマーマチ、ヒラマチとかねえ、それが多く釣れた。シルイユ、ミーバイ、ミーバイも黒い、アラミーバイみたいなものが。

あの頃は泰光丸で14、5名で行って、1航海は1週間位、多い時は月2回位は出ていたねえ、尖閣にマチ釣、深海一本釣で相当行ったですよ。

糸満のダツ追い込みで 正月用の金稼ぐ

その頃23歳の(1957年)に、糸満に雇われて、精栄丸とあって、小さな船を尖閣まで持って行って、追い込みしてねえ。11月の末頃行って、旧正月近く2月まで、シジャー(ダツ)を追い込みして、すごかったねえ、糸満の網元のウシーヤッピーとあって上原信吉さんで

すよ。池間から泰光丸を借りて、この精栄丸でシジャー獲るといことで、上原さんが網元で行っているわけですよ。精栄丸は 15 馬力の 5 トンの小さい船だったさあ(笑い)。この小さな船が向こうで常駐しているわけ、終わるまで、僕らも。獲ったシジャーは泰光丸と、魚運搬の仲積み船は第 3 蛭子丸(33 トン?)で、那覇の方に、糸満の方に運んで行ったんです。

その時も親父の仲間義雄さんが船長で、義兄の淳さんが機関長してねえ、シジャーの追い込みは、島にテント張って、やったおったねえ。魚釣島でねえ。食料は泰光丸が糸満から運んできた。テントを張って、皆で 3 ヶ月間、ずっと向こうにいたわけさあ、2 月まで、旧正前までは。で、追い込み終わると、旧正前に池間へ帰って来て、また糸満に行って、もう計算して、幾ら水揚げがるからと、歩合制だから、配当があつて、そんなにことしてました。向こうには、旧正用のお金稼ぎで行ったわけ。3 ヶ月やって、配当は 100 何拾ドルだったかなあ、当時 100 ドルしたら大金だよ。相当儲けたですよ(笑い)。

糸満のダツ漁 大変な技 サメを物とせず

上原さんは、池間からは漁師を雇って、潜りは新城シンコウと僕と 2 人、船は 6 名、糸満の連中は 20 名位かな、連れてきて。シジャーの追い込みは、あれはもう大変な技だよ。沖でもう約 500 メートル位、1 キロ位離れていたかねえ、精栄丸は潜りの連中を、一人一人下ろしていくわけさあ、こんな小さな船から、一人一人下ろして、竹竿を 1 本持って、2 尋位の竹を持って、大体 200 メートル位ずつ離して、底が見えない沖にだよ、あの魚釣島の、この周りにはもう全部やるから、もうこうしてねえ。

(海図を広げながら、魚釣島近くにある飛瀬を指して)この岩があれば、これにシジャーが付いたらすごかったよ、この付近皆シジャーだったよ、この岩に付いてねえ。だからこれから落す、追い込みをやって、この岩場とサバニに網を張って待つているから、これからの潮の時に、こっちに前進前進して追い込んで行くわけよ。

僕らは、竹竿 1 本持って、底は見えないよ、100 メートルから 200 メートルの深さだから、底は、サメは見えるよ、5、6 匹がゴチャゴチャして泳いで回っているけど、向かっては来なかったねえ。僕らは裸よ、素潜りだから、あの時はヒレも何もないで、眼鏡とタオルに、竹竿 1 本持って泳ぐわけだから、泳いで、パンパン叩いたりして、袋網の方に追い込んで行って、もう網近くまで行ったら、シジャーが群れて、バァーといくわけよ。これはねえ、前は事故があつたって、追い込んで行く時に、ダツは飛び跳ねて、前の人間を越えて後ろに降りるわけだから、後ろの人が刺されて、出血多量で、死亡した事故があつた。

だから、追い込む時は網までは、全員一列で、絶対後ろにはなるなど、網揚げるまで、ずっと一列でやりなさいと、上原信吉さんはそんな説明していたねえ。

尖閣は回遊魚のホントの本場なんですよ、すごかった。シジャー網はこんなに大きくて、長いでしょう。だけど、シジャーは何十ト、何百疋も群れて来るから、もう 1 回の追い込みで、あの 2、3 トンの大きな網にだよ、入らん時もあった。そんなに獲っていたからねえ。だから、大体 2 日から 3 日位では、仲積み船が満船する位獲れたですよ。

もう 10 年前だったかねえ、50 年ぶり位にウシーヤッピーを訪ねていったら、もう 90 近くなるんだけど、あの時のこと覚えていたねえ、あの上原さんはすごい、もうホントの糸満の海人の王者だねえ、身体もがっちりして、背も 75 位あったはず、自分はもう米寿もやったとって、元気だったけど、2、3 年うちには亡くなりましたねえ。

魚釣島に 3 ヶ月も滞在 島の生活

精栄丸は、向こうで常駐してシジャーを獲って、仲積船の泰光丸が来るまでは、大体 2 日から 3 日位ではいっぱい積んでいた。獲る時は網には入らん位獲れたから。泰光丸は頻りにシジャーを運んで、また精栄丸の食料積んできて、また下ろして、またジャーを積んで、糸満に行って下ろしたら、すぐまた出港して、1 週間に 1 回位 1 航海ですねえ。

僕は、向こうに常駐していて、仕事は、大体月 3 回、4 回位潜って、追い込むだけだからねえ、精栄丸の糸満の人達と、もう、尖閣列島、魚釣島に 3 ヶ月も居座っているわけですよ。食料は泰光丸が運んでねえ、水は向こうにもあったが、しかし、美味しくなかったよ。水は、向こうでさっき言ったようにサバニがスッと入るような所に、サバニを入れて、

上陸したよ、ドラム缶半分切ったものを準備してあれに飲水を積んできたよ。だけど、野菜がないでしょう。で、浜で、ハマダイコンとってねえ、大根の葉っぱみたいのがあるんですよ。あれを採ってきて野菜して食べていたよ。食料は大分あるけど、野菜が向こうは不足さあねえ。魚はもう自由に食べ放題。おかずは魚ばかり食べていたんだ(笑い)。肉も積んで、缶詰もあるんだけど、もう野菜が不足だから、生野菜はハマダイコン(笑い)。行って引っ張ってきて食べたりしていた。



魚釣島は樹木が鬱そうと生い茂げ、ジャングルの山々が広がる。
(新納義馬 1979)

古賀工場跡石垣に「登野城」 住所標識の彫り跡？

3 ヶ月位いたから島は全部廻ったよ、仲積船が来ない時は、あっちこっち探検をした。ユクンコウ(古称ユクン、久場島の意)とって、ヒラジマと言っていたが、そこも上がったよ。大東島みたいに周りは崖で上がり難いが、西の方は平坦地になっているから、そこから上がった。向こうには、日本の飛行機も戦争にやられて落ちたのがあったと年寄連中から聞いたが、僕らは見なかった。サトウキビとか、サツマイモとかあって、キビといっても長いことなるから、竹みたいになって、中はもうガラガラさあ、サツマイモは、山芋になっているわけですよ(笑い)。

南小島、北小島も、もう皆上がった。北小島、南小島のあれは大きなニシキヘビがいる

から、すごい大きなのがいるから注意なさいよと、上がった時は、あれに飲み込まれたらたいへんだから(笑い)、そういう脅しの話を皆やっていた。岩場の間にはまって真ん中の胴体がこの位あったとって、まあ嘘かどうか分からんけど(笑い)。やっぱりアホウドリが大分いるもんだから、あれの卵を飲み込むニシキヘビの大きいのがいると脅していたよ、昔の年寄りなんかの話だけど(笑い)。

で、北小島と南小島の間は浅瀬になっているさあねえ、向こうは泳いだりしていたよ。潮が速かったが。魚釣島では、昔はきれいに石垣が積んであって、人が住んでいる所があるわけねえ。この石垣に、「登野城」という字が見えていたよ。彫られてみたいにあったんだけど、「登野城」までは分かった。薄かったからねえ。50何年だから、もう今はなくなっているんじゃないか。「登野城」と石垣に彫られていたから、ここに人が住んでいたと思った。薄くして石垣に彫られていたけど、(1952年に石垣の前で撮影した高良鉄夫先生の写真を見せると)、ああ、そうだ、多分この付近だったと思う。



古賀村楼門の前でユリを手にする高良鉄夫博士。
この付近の石垣に「登野城」と彫られていた。
(新垣秀雄 1952)

石垣の1箇に書かれて、大きさは相当大きかったねえ、長さは30センチ位、横は20、30センチ位、こんな丸くなった石だったからねえ、字は薄かったから、もうとつくに消えているか分からんが、ああいうものを見たら、やっぱり八重山の人がいたんだなあと感じた。戦前古賀さんがカツオ節工場をしていたからねえ。その頃に石垣に住所を彫ったことは考えられるが、それはわからん。僕が見た時は「登野城」という字だけが薄く残っていたさあ。

(※文末に、同様に「登野城」の碑文を見たという八重山漁民の体験を掲げる)。

魚釣島のカツオ製造工場跡 「㊦ 宝山丸」と大書

その時には島の上までは上がらんで、この海岸伝い辺りを追い込みで泳いで上がったってして、休んだりしたんだがねえ、終戦直後の頃ねえ、ここでカツオ製造していた所に、「㊦ 宝山丸」という字が書かれていた。「宝山丸」とはそんなに大きくない、「㊦」は大きかったかなあ、宝山丸というのは池間の船、カツオ工場ですよ、玉寄正雄さんといって、もう皆亡くなっているんだけど、あれの長男が僕と同窓だけど、魚釣島でカツオ製造してねえ。その跡に字はそのまま残っていたんだけど、大きい石に、もう向こうの自然の大きな岩にねえ。横書きで、「㊦ 宝山丸」と。

(「1950年・工場の崖に商号を彫る」の別の証言記事を見せると)、そうそうそう、崖に彫ったのではなく、崖ぶっこの大きい石に、自然そのままある石に、白いペンキで書いて、あれ大体どの位かなあ、(応接間にあるサイドボードを指して)、このサイドボードの大きさ

位の石かなあ、1950年だから、これを書いた人達はもう亡くなっているねえ。そのまま崖っぷち、崖にそのまま置いてある岩石に、山から崩れ落ちたか知らんが、ペンキが剥げなければまだあると思うよ。

(魚釣島の地図を示して)、場所はどの辺になるかなあ、中央付近だと思うよ。大体ねえこの付近かなあ、そう、こっちは北になるはずだからねえ、だから、北風の島陰の窪んだ所にあったねえ。この工場跡には石垣はなかった。そこにテント張って、住まう所をテント張って、そこにカマを造って工場にして、カツオを炊いてやったはず。石の大きさは1間に1間半位かなあ。尖がつた岩にスーッと書いてあったもんだから、ペンキで、刷毛で書いた感じだからねえ、尖がつた所は消え易くして、引込んだ所は消えんから「@」が残っているかも。だけど、台風で波が来て、もう消してしまったんじゃないかなあ。

薪を採って 持ち帰った

魚釣島の山の方に大きなチャーギ(リュウキュウマキ)があるって、あれはすごい木だからねえ、僕は下ばかりにいたからあの時は知らなかった。もう採り易いものばかり採って、運んできていたよ、カツオ工場の薪にしていたから、向こうはこんなにできない大木ばかり、すごい、しかし南小島、北小島はないですよ。

魚釣島からカツオ工場で燃やす薪採って持って帰ったのは1回だけ。帰りにねえ、こんな大木を2、30本伐ったら、こんな小さいカツオ船辺りにはこれしか積めんからねえ、2、30本伐ったら満船していたよ。それに流木もすごい結構あったから、木を倒すより、流木を拾ってやった方がいい。それで流木を拾ってやったり、木も伐ってやったりして、船いっぱい薪積んで帰ってきましたよ(笑い)。



魚釣島頂上近くには、チャーギとか有用木がいっぱい。(新納義馬 1979)

サバ跳ね釣で 東シナ海へ

そのあと25歳の時、サバ船に乗った。当時サバ釣が盛んだったので、琉球水産社のサバ船に乗った。琉水丸5号に、5号がサバ専門だったからねえ。あの当時はサバの跳ね釣り、これ釣ってパット跳ねるやり方で。網は使わなかったさあ。その後からが棒受網で獲るようになってからダメになったねえ。僕らの時は相当獲っていたねえ。もう琉水社の全盛時代だったから。琉水5号は20名余りかねえ。

漁場は東シナ海、尖閣のずっと上の方、今の東シナ海ガス田のところ付近よ。内地のサバ船も結構大きな船が、結構すごかったよ。夜中なったら街の明かりみたいにすごかった。大分いましたよ。大体大きさは同じ30ト、40ト位の船ねえ、大きくて5、60ト位。あんま

り大きい船はいなかった。サバは相当獲れたけど、獲れてもあまり売れなかったせい、配当は多くはなかったですねえ。

池間ではカツオ業だけで、夏だけのカツオ業だけでは、飯は食えんから、冬はそういった所を廻って、また夏なったら戻ってカツオ業していたからねえ。だから尖閣もその通りですよ。夏はカツオ業、冬は尖閣列島とって、一本釣したり、追い込みに雇われていったりしたですよ。サバ釣り行ったのも、ひと時期だったねえ、サバ時期に。で、あの琉水 5号はねえ、サンゴブームの時、池間に来て、カツオ業もしたよ。カツオ釣りを、なぜかというカツオ船泰光丸はサンゴ漁に行っって、カツオ工場が放置されているということで、5号をチャーターで借りてきて、あれでカツオ釣らしていたわけさあ(笑い)。

精栄丸で サンゴ採る 宝山で大漁したが

その頃はものすごいサンゴブームでしたよ。僕も、精栄丸を、糸満の上原信吉さんの船をチャーターして、サンゴを採ってましたよ。自分が船長して、あっちこっち廻って、サンゴを採っていたからねえ。尖閣列島とか、宝山・大九とか、行きました。が、ダメでしたねえ。丁度昭和 38 年だったねえ、宝山でサンゴを大当たりしたのは。もう宝山で、あっちでいっぱいサンゴ採れてねえ、別の船は採らんけども、もう僕らは船員 6 名で、船いっぱい採って、船に入らん位の深海サンゴですよ、今あれを持っていたら沖縄県一の金持長者になっていたがねえ(笑い)。だが、誰が言ったか知らんが、許可のない船は皆サンゴ採ったのは没収するということを聞いたもんだから、命がけで採ったサンゴが皆没収されたら、もう大変だからねえ、で、一人で、那覇まで乗り込んで、あのクロコゲールストアの照屋敏子さんに会ったら「いいサンゴ、悪いサンゴないで、全部貫 1 ドルで買う、それでよければ」と言われてねえ、もう叩き売りしましたよ。1 貫 1 ドルで売りさばいてねえ。もうこんな大きな大きなサンゴでしたから、今だったら 1 貫で何百万ですよ(笑い)、もう大欠損さあ、積み込み燃料とか、食べ物とか、給料とか、とても足りなかった。これではダメだと漁師をやめて、一時は漁業組合事務所の方に勤めたんだけど、もうこれでも飯食えんからと、那覇に引っ越しました。で、那覇で商船の船長免許とって、外国航路に乗って船長をずっとやってきました。僕が、尖閣列島行ったのは復帰前ですよ、だから復帰前のことしか分からん。

中国船、1 隻も見ない 復帰後 なぜ？ 上陸禁止

当時はねえ、尖閣列島には、中国船は 1 隻も見当たらないよ。台湾船はカジキ突きに鉾を、鉾竿を前の方に据え付けて、あれやっていたわけですよ。カジキをやるのによく来ていたんですよ。だけど、中国船は 1 隻も見ないですよ、その当時は。今頃になって中国は、尖閣列島は、中国の伝統的漁場だったとか、何たらかんたら言うが、あれはおかしい。台湾船はよく見えた、が、中国船は一隻も見えない。台湾なら少しは考えられるけど、中国は今になって、中国領土というのはおかしいですよ(笑い)。

尖閣列島はいい漁場だし、またガス田もあるでしょう、海底にはもっといろんな資源が

かもしれない。だから自分らが乗っ取ろうと思って、そうしているはずだが。

僕に言わせば、これも日本政府のやり方はまずかったからと思うねえ、まあ偉い方々はあとはどう考えていると知らんけど。(笑い)。海上保安庁が警備船を常駐してからは、向こうにはなかなか行けない状態になったでしょう。何で自由に上陸させなかったか、復帰前は、自由に行って、自由に上陸して、やっていたのに。復帰あともねえ、石垣の人、宮古の人、沖縄(本島)の人、皆行って、上陸して、泊り込みとかやっていたら、もう、向うは釣りしても、ダイビングしてもよいし、いい観光地だからねえ(笑い)。中国は、尖閣列島はもう宮古、石垣、沖縄の連中がいるから、もう琉球諸島に入っているから、自分達のものど文句は、言わなかったと思うさあ(笑い)。沖縄の人が、誰でも、自由に行って、もう島に上がり放題、遊び放題していたら、もう台湾とか、中国とかは、何も言えないで、何のあれもなかったかもしれない(笑い)。復帰して、誰も島に上げさせないから、人もいないから、かえて、これが今のような大きな問題を起していると思うねえ。

復帰して、日本政府は、何で向こうに自由に上げなかったかというのが僕の疑問であるわけさあ。前は自由だったからねえ、行って魚獲って、島に上がって、僕らは、もう向こうに3ヶ月もいたんだから。最後に、僕の希望を言えば、このことですよ、日本政府は何で上陸させなくなったのか、その理由をはっきり聞かして貰いたいです。これは沖縄の漁師皆がそう考えていると思いますよ。(了)

※参考資料 古賀村石垣囲いで「登野城」の碑文を見た。

八重山漁協・宮里長吉さん、67年前に、同様な体験

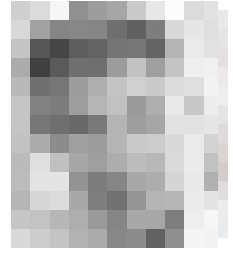
「・・・私らが行った所に「登野城一番地」碑文(ひもん)が建っていた。戦争で尖閣に遭難した人を救出するために行ったんだねえ。その時に見た。あの碑文はまだちゃんと残っているのかなあ。「登野城一番地」の碑はちゃんとセメントで作ってあったねえ。上陸した所は、本船が着けられるようになっていた。インジュ(堀割)されていたよ。古賀さんのカチューヤ(鰹工場)も昔そこにあって、地主でもあったわけさ。あの石垣の積んである前にねえ、碑が建っていたと思う。その奥に昔は家があったはずだよ。

(1945年8月救出隊メンバーで、魚釣島に行った時の話から)

長崎 毅 ながさき つよし (伊良部漁協)

1930年(昭和5年)、宮古島伊良部町に生まれる。83歳(2013年時)。

池間の分村伊良部は、共に池間海洋民族と尊称され、誇り高きウミウチュ(海人)である。この勇壮闊達な気風を継いだ氏も、3.5トンの愛船・豊丸を拵えて、波濤高き尖閣海域へ出漁すれば、常に魚は満載、大漁だったという。氏が、尖閣に行ったのは日本復帰前の1964年から68年の約5年間、当時は「魚積みに行った」「カジキ突船2,30艘来ていた」「長崎巻網船が操業」「上陸して廻ったから島は全部知っている」等々と、氏の話は興味深く示唆に富む。



3.5トンの豊丸 尖閣へ 魚積みに行った

(船の写真と賞状を出して見せながら)、ほんと、この船は小さいがよく働いてくれたねえ。

3.5トンですよ！、こんな船で尖閣行くのは皆が冒険だと言っていたが、沖縄県でこれ(水揚げ高一等賞状)をとることが出来たもん。この豊丸は小さい船だが、尖閣行く目的で造ったから、17馬力で(笑い)。大体14,5時間かかったねえ。クバシマ(魚釣島)にはトローリング、曳き縄で行った。時々底魚の一本釣する位でねえ。もう、あっちには魚釣りにじゃなくて、魚積みに行っただよ(笑い)。昔は、それ位おったんだ。もう一日で満杯、と言っても、船は小さいが、3.5トンの小型船で初めてやったのは僕だもの、ここ(伊良部)では。



琉球政府主催、宮古地区産業振興共進会で多量漁獲部で一等賞もらう。(1967年6月)

当時は魚はすごかったねえ、面白く釣れた。シケが続いてこれがナギるとすぐ出たもんねえ。月には6航海、7,8航海やることもあった。1航海は今日夕方出たら、明日は釣って、明後日は入る。今日朝着いたらもう12時お昼前には釣ってあるから。

あの時は、尖閣には、魚を釣りに行くんじゃない、魚積みに行ったもん、ほんと(笑い)。

僕が行ったのは復帰前でした。昭和39年(1964年)から43年(1968年)までかねえ。そのあとは南方カツオ漁に行ったから。いやーあの頃は、大変魚がおったから、ほんと。

もう僕の水揚げを見て、もう皆びっくりしていた。今日水揚げして、また明後日もだからねえ、(笑い)。だが、あれほど釣れた魚が、今はもうそんなに釣れないと言うから。魚は減ってもいるだろうけど、中国なんかが必要で騒いでいるから、もう魚も驚いて来ないんじゃないか(笑い)。

シマガツオ クバシマだけで 満載

アカオ(赤尾嶼、大正島)へ行かず、直接、尖閣に行きました。当時はねえ、クバシマ(魚釣島)は魚の獲れる島だったから、ここで満載するんだ、いっぱい。そこで魚が獲れなくな

ってからあっちこっち廻ったんだけどねえ、最初はクバシマだけで十分ですから。

あまり釣れない場合は、あっちこっちの島に渡る。曳き縄は島の周囲を廻る、瀬の部分を、いわば瀬に付いた魚ですから、シマガツオ(スマガツオ、ヤイト)というのは島の周囲にしかいないから、そういう名前が付いているでしょう。今は漢那浩一さんらが行ってるがそれほど釣れない、当時はすごかったねえ。

あの浩一さんの親父と、あの喜翁(きおう)丸とは一緒にやったもん。僕が何回も行ってたから、また豊丸を造った與儀さんねえ、あの人のキク丸も連れて行った。

当時の人は殆ど残っていないですねえ、進漁丸の武富金一さんも。

尖閣行って曳き縄ではスマガツオを釣るのは冬の時期ですよ。10月から2月頃までねえ。今は12月からですが、僕らが始めた当時は早い時期には10月から出たんですね。僕は向こうの天候と状況は殆んど分かっている。何回も行ってたから。

当時はねえ、魚はすごかったですよ。ほんとに、今日到着いたらもう12時前には釣ってあるから、もう行って休んで、帰る準備だもん。ああ、それだけ魚が獲れたからねえ。

尖閣行く計画で 船 工夫して造る

若い頃本土の方に何遍も行ったことがあったもんで、紀州とか、宮崎とかの漁師がトロール(曳き縄)やっているのを見ておったから、これを宮古でやったらよう釣れた。どっさり釣れる場合もあるから、よしや！船造って、尖閣に行ってみようと思ったわけですよ。

カツオ船は時々行ってはいるんだけど、5ト未満で誰も行ったことがない。3.5トの船で魚が釣れるかどうか分からない。考えて見れば冒険ですよ、未だ小さい船で誰も行ったこと

がないから。船も自分で工夫して設計して造らしたねえ。今の人なら考えられないですよ、燃料タンクも、エンジンも、船も小さいからねえ、艫の方に、中のセイム積む後ろの方に、長くしてねえ。水缶、ケイコウカン、ドラム缶1本で200リッターですから、これだけの燃料を積めるように、エンジンも当時のクボタの17馬力だったもんだから、ケイコウカンを横に並べてねえ、ドラム缶1本入れてねえ。また魚槽はできるだけ広くして、皆自分で設計してやった

もん。船は平良の與儀造船でねえ。材料も普通の丸太を横に切ってやった、これも注文して買ってねえ、沖縄から造船所の方が注文しているから。これで約1ヶ月以上かかったかなあ、船造るのに。尖閣へ行く計画で造ったもん。

この時は曳き縄でカツオが目当てだった。スマガツオから、ホンガツオから、ハガツオから、最初の計画からこれだったもん。これを計画にして造った。だけど何航海が行った



豊丸(3.5ト)、尖閣で曳き縄を目的に拵えた。
1週間に2航海し、出漁の度に満船大漁した

らねえ、ああ、やっぱり船が小さいなあと思ったねえ。

初航海 クバシマで シマガツオ大漁

船ができて、小さい船だから船員は探せないさあ。皆怖がっているんだから(笑い)。

が、10日位して、僕の従兄弟が台湾帰り、この人をお願いして、もう2人おるから行く準備していたら、あと1人若いのが来たわけだ。自分も行きたいと、よしOK、3人でOKしてねえ。最初はアカオへ行った、向こうが近いから、行ってみたら魚がない。今度はクバシマ、今でいう魚釣島に行くことにした。アカオで12時頃まで夜釣りしてねえ、向こうには朝7時か8時頃に着く計算して、行って朝8時頃に着いたらねえ、面白い位釣れたよ、魚が、ああ、やった！と。曳き縄で、星が3つか6つあるシマガツオをねえ、向こうはカツオの種類は多かった。ホンガツオとか、ハガツオとか、カツオに歯があるんですよ。今の奴と3種類おったわけですよ。今はそんなものは見ないけどねえ。

もう、ほんとにほしいまま魚が釣れたんだ。いやというほどだよ。これ何航海かしてからねえ、もうこんな小さい船が大漁してるもんだから、皆行きたいんだよ。

当時はここに下ろさんで、平良の方に、氷は向こうにあったから、朝行って向こうで水揚げして、すぐまた氷積んで、まあ帰ってきて時間を見計らって、また夕方出港するからねえ、だからもう1週間には2航海はする。2航海とも大漁だよ。

大シケ ダンプルに釘打ち 水中走る

僕が大漁しているのを皆見ているからねえ、これ尖閣へ行きたいんだよ、行きたいんだけど怖い(笑い)。しかし、なかなか行けるもんじゃない。この船は、ほんとによく働いたですよ、シケにはねえ、もうこれ中に入ることは出来ても、外で舵を掴まえないといかんからねえ、もう波はすぐ上のデッキを洗ったもん。だから波乗りするから向こうは見えないさあ、波はこうなっているから、3名では皆雨合羽着けて、後ろの方で並んで坐っているわけだ、ここは皆デッキのダンブルの蓋は皆釘打って、もう僕らはこれで(艫に)坐っている。艫の方では、舵1人は上の方で座っているんだ。裸だし、もう何も皆釘打ってあるから上から波が来ても飛ぶものはないから、(笑い)。だから、坐っていてねえ、船を掴まえておけばよい、デッキの上まで水がこんなに来たもんねえ。いわば水中で走っているようなもんで(笑い)、冒険だから、皆が怖がってねえ、辞める人がおったんだ、何人も。でも当時はねえ、魚はすごかった、食い付きも全然いいから、満船ですよ、それだから、もうシケにこういうことがあっても、何航海もやって来たわけだ(笑い)。

危険な目 何回も 一度は遭難

豊丸の船籍番号はIR-95ねえ、IRは伊良部のIR、今の人だったらこの船見たら怖がるよお、アンテナも、レーダーもない(笑い)、もう裸の船で、よう尖閣まで行ったなあ。もう危険な目にはいっぱい遭ってきた。危険といっても、風とか、うねりによっては

島を真っ直ぐにして走ることはできんから、どんどん落としながら、多良間の水納島か、石垣の平久保の灯台、これを見てねえ、どんどん下げていくわけだ。夜が明けたら廻ってきて、水納島で錨下ろして休んでから島に渡って来るとか、こういうことを何回もやってきたわけよ。ほんとに冒険だった。若いからこそやれたようなもん(笑い)。

もう昔は、羅針盤1つと海図で、また羅針は新しく買ってきても船に乗せたら磁差というのがあるさあ、この磁差の測定が分からなければ大変だよ、だから磁差は大体勘で補正する、実際はその測り方があるんだがねえ。これもあとで分かったわけだ。70マイル位だったらコンパスでも出来る、距離が近いから。100マイル、200マイルといったらそうはいかん。

シケの時とか、何かの時には、コースからはずれる場合がようあった。何遍も怖い目に遭ってきた。一度遭難して新聞に載ったことがありますよ。そうそう、これがあの時の記事(「不明の漁船員救助」琉球新報 1967.10.24)だねえ。あの時は僕は行かなかったんだよ。で、彼等は自分らだけで行ってくるから休んでおきなさいと、ああそうですか、それはよかった、頑張つてねえと(笑い)。そして行かしたわけよ。そしてシケで遭難してねえ、4名全員助かったからよかった。(※末尾に遭難記事掲載)

カジキ突き 漁期 20~30 艘 来ていた

僕が行った最初の頃は、突き船の時期には 20 腹から 30 腹は来ていたねえ、あっちこっちから。台湾の突船は殆んど花蓮港の船だった、キールン(基隆)からも来ておったけど。

殆んどここ(伊良部)の人が乗っていた。船長、機関長は、殆んど伊良部の人だった。何人もいたもん。僕の兄貴も台湾にいたから。で、僕が台湾に行く時も皆集まってきて飲みに行ったりねえ、この連中が今はもう皆亡くなっているがねえ。

とにかく、カジキ突きの時期には、突船はいっぱい来ておったですよ。20 腹から 30 腹もねえ。それだけ当時はカジキが獲れたもん。魚釣島から大概 2,3 時間走れば殆んどサバやら、何やら、皆湧いていたから。それにカジキが付いている、エサがおるからすごかったですよ。だから朝、突き船はずっと一斉に出て、夕方はずっと一斉に帰って来て、ほんとにすごかった。だけど一変シケになったらもう大変なところ、すぐ近くにおっても島は見えない。それで大分津久見の船が 3 人立ちの大きな突き船と一緒に付いておって、もう風が強くなって、島陰に廻って行ったら、島が見えないもんだから、島のし上げてしまった。これで船員が落ちてしかれちゃった。もう向こうではそういう事故が殆んどですよ。

いや、僕らは、向こうの天気の詳細だったら大体見て分かったもんねえ、この島のどこにどういった雲がかかると、どういうシケが起こるか大体分かったもん。それが分からないとダメですよ。向こうは風でもねえ、魚釣島の南の島陰に隠れていても、山頂に当たった吹き降ろしの風が来るんですよ、これがものすごく強いんで、時々生け簀の蓋を飛ばす場合がよくあったですよ、バァーンと。だから島陰でも、安心できない、よう自分で検討して、注意して廻らんといかん。

尖閣 全部分かる 漁が少ない時 上がって廻った

尖閣は僕には忘れられないよ、向こうで金をうんと儲けさせてもらったから(笑い)。島の4つとも、あっちこっち上陸したよ。魚が少ない時は廻って見たりして、だから向こうは全然知らん所はない。一から全部分かるもん。クバシマにはヘビが多いということも分かる、やっぱり山の方は噴火の島だからねえ。大きな岩がごろごろしている。山の方にも上がった。あっちこっち皆見た。また北小島、南小島に鳥が多いよお、台湾連中は大きなカゴ背負って、卵採りに行って、向こうは崖だから、滑って落ちて亡くなった人もいたらしい。向こうの鳥は卵を拾ってカゴに入れて歩いて、後ろからまた卵は生んでできているとねえ(笑い)。その位多かったらしい。今もいるかなあ、あれから行ったことがないから分からん。

コウビトウ(黄尾嶼、久場島)では、ミズナギドリ、あれがねえ、普通の鳥とは違って、穴の中に卵を産むですねえ、僕らはそれを採るために上がっているから、穴の中に手を入れたら突付くんですよ。あれがものすごくいるんです。また、アオヅラカツオドリねえ、あれもいっぱいいるんですよ。コウビトウにはそればかりがすごかった。僕らが帰りにはそれ採ってきたもん。皮を剥いで家のお土産にした。



久場島の溶岩流の隙間、林内はオオミズナギトリの格好の住処となっている。(新納義馬 1980)

ニガナは美味しい 長崎まき網船の人も 採る

コウビトウには、ススキがいっぱいあってねえ。あれ、ススキがこんなに大きいのかと思って、茎齧って食べてみたら甘いんです。あれは昔の在来種のサトウキビでしたねえ(笑い)。芋づるもコウビトウにあるらしい。僕等はそこまでは気付かなかったけどねえ。根っこは出ないんだけど、葉っぱは大根のあのハマダイコン、それとニガナ(ホソバワダン)が向こうにいっぱいあったから、野菜代わりによく採って食べた。ニガナは美味しいから長崎県のまき網漁船の人達に採って上げたさあ。魚釣島からウエスト(西)の方に大体4時間走ればねえ、サバが湧くんですよ、ものすごく。あれを狙って長崎からまき網しに来ておったわけですよ。その前に僕が行った当時は、ここ(伊良部)からサバ釣に向こうに行っていたわけだが、それがあまり引き合わないからやめたんだけどねえ、で、長崎県から来てまき網をした人達は、漁で網を破ってきて、ここで修理して、また行くん



魚釣島、久場島の岩場に自生するニガナ(ホソバワダン)、野菜代わりに重宝。(新納義馬 1979)

ですよ。僕は曳き縄して廻っているから呼ぶわけねえ。行ってみたらサバをねえ、マルサバをバケツのいっぱい貰ったから、これを捌いて、あのニガナを採ってきて混ぜて食べたら美味しいんだ。で、これを半分持って行って上げたんですよ。そしたら翌日も、また呼ぶから行ってみたらねえ、これはどこにありますか、と言うんだ。ああ、向こうにいっぱいあると教えて、行って一緒に採りましょうと行って、採って帰ったわけですよ。

魚釣島の掘割 船入れて 飲水採る

いろいろ何でもやってみたですわ。魚釣島ではねえ、一時、ここでクロキを庭に植えるのがこの島(伊良部)で流行っていて、魚を釣れん時には上から見て、ああ、あれがクロキだなあ、と、それ採りに行ったわけだ、ある時は、上がって見たらねえ、あれクロキじゃなくて、ここでも一時流行ったんだけど、何とかいう木か忘れたが、その木の葉っぱ、枝には、皆ヘビ(シュウダ?)がぶら下がっているわけだ。ヘビばかりだ。もうヘビがものすごく多いのには驚いたねえ。魚釣島には水がありますよ、小さい川が。で、廻って行ってカツオ工場のある所には、小さい船が入れる所が造られてある、掘割ねえ。

僕はこの船で時々で入った。もう、波があるから向こうは流れも速いし、普通の人だと入れないですよ、波の起こり具合見ておって、ずっと走りながら艦の錨を下ろして走って行って、前の人が飛び降りてロープを持ってあっちこち縛ってねえ、島に上がって水採ってきた。また魚釣島の北側にも、小さな流れがありますよ、向こうでも時々水を採ってきた。向こうは水はあるから、食べ物はなくても、しばらくは大丈夫、暮らせるさあ。

アカオの頂上 草も 海鳥も 増えている？

僕は、去年アカオ(大正島)に行ってきた。ほら、国から補助があったでしょう、漁船が向こうで操業していて、中国船を見たら知らせると行って、外国漁船被害救済事業といったかねえ、それで漁船が何回か、こちらからも行っているわけだ。僕も乗せてもらって、1航海行ってきた。もう行きたくてしようがなかったから(笑い)。その時にアカオの写真を撮ってきた。この2枚の写真は漁協にも提供したがねえ。次は尖閣へ行く機会があれば、ぜひ行きたいねえ、尖閣に行って、こんなにした写真撮ろうかなあと考えている。

(撮ってきたアカオの写真を見せながら)、これは東から撮ったもので、潮が下がっている。あれはこっちから行く時の写真で北側から撮ったもの、2つ張り合わせたけど、干潮の時だから高くなっているねえ。アカオは大きな岩山になっているが、昔はロープで登ったよ。漢那の兄貴、一浩さんの兄さんが喜翁丸で行ってねえ、僕より歳下で、もう亡くなっているが、一緒に廻ったから、彼はどこにも登る人で、ロープ持って行って縛って、これを僕らは辿って、上に登って廻ってねえ。上の方は結構緑、木はないんだけど、草がある。

この前行った時は大部増えていたねえ、いや、当時は爆弾落としているから何もないさあ、(笑い)、けど今は大部草が生えているが、そんなに生えないと思うよ、海鳥も増えているから糞も多くなるさあねえ。漢那さんと登った時に、小さいアホウドリ、あれを

向こうから採ってきてねえ、剥製にして家にあったけど、どこに行ったか分からない。

頂上に石囲い？ 岩山斜面 爆弾刺っている

(頂上指して) ここに、この辺に石囲いがある。いつ誰が造ったか知らんけどねえ、話によれば、日本の飛行機がここに落ちて、飛行士は助かったらしいけど、この人がやったの分からない。だけど、ここは誰でも上がれんからねえ、よく分からん。

(下を指して)、アカオはねえ、ここの方にも入り江があるんですよ、いわば壕見たいな所があるんです、ここではエビも獲ったよ、電灯潜りもした、曳き縄も、もう自由だから、ここでもやったし、コウビトウでも、あっちこっちで皆やった。もう何でもやっていますよ。この漁してダメだったら、あの

漁と。(他を指して)、えっと、ここは真っ直ぐではないんですよねえ、こことここに少し入り江じゃないんだけど、船が着けられるような所はあるさあ、アカオに2箇所、これ少し曲がった所で上がった所ですよ。(岩山の斜面を指して)、こっち、この辺に爆弾が入っているんですよ。アメリカの演習にやったもの。恐らく誰も分からんだろう。この岩に、これに突き刺さっている。この前行った時にねえ、見ようと思って行ったん



大正島は洋上に突き出た岩礁の島、この周辺は黒潮が北に転じ潮の流れが速く魚の豊富な漁場である。(比嘉健次 1970)

けど、もう木が生えているから分からない。ここにあったもん、あの演習の時に、これ(模擬爆弾)で皆やっているんだけど、やっぱり皆怖いんだよねえ、バラバラして落ちるから、もう漁を止めてコウビトウに渡ったよ。あの頃は実際に向こうでも演習あるんだけど、コウビトウでやったのは見たことはないねえ。

アメリカはアカオだけで演習やっている。もう爆弾落とすとか、機銃を落とすとかして集中してやっている。実弾ではないさあ、模擬弾だから刺さっても爆発はしない。(笑い)、けど遠くから見ている、怖いから行かない。

南小島 子どもの墓あった？

あもう南小島のねえ、先の方にポツンと出た所がある。向こうには行ったことがないんだけど、昔の年寄り連中が言うには、向こうには大きなへびがいると言っていたなあ、中に洞窟があるらしい。また、南小島には向こうで亡くなった子供の墓碑があるような話もしていたよ。いや、最初の頃、向こうに鳥の羽根を採る時に、何人か住んでおったらしいよねえ、いわば、家族連れでおったらしいんだけど、子供も一緒に、子供の墓碑は、そこ

に小さな洞窟(へびの洞窟とは異なる)があるさあ、向こうに子供の墓があるような話があったわけ、もう皆壊れてないですがねえ。もう子供は向こうの連中ですよ、内地の人か知らん。僕らが子供の時分に、こんな話を聞かされたねえ。誰が話していたか分からない、この人ではあるがもう昔の人だから。昔はここからも行っているだろうから、向こうに行って働いていた人かも知れんねえ。終戦後でもこのカツオ船の殆ど行ってますよ、この人も皆、向こうに行つて、カツオを釣つて、銘々でいい場所を見つけて、工場を造つて、カツオ節造つて、ナマリ節にして、それを持ち帰っているからねえ。

コウビトウ 貨物船難破 積荷盗り合戦

復帰前、1968年だったと思う。1000ト位の大きな貨物船がコウビトウ(黄尾嶼・久場島)で難破してねえ、あれはすごかったですねえ、日本から雑貨積んで台湾に行く船だったが、あの船は自動操舵していたもんだから、ちょっと居眠りした隙に、浅瀬にのし上げて、もう船底に穴が開いてねえ、荷物を積んである所はもう皆水浸しですよ。そこには色々な雑貨、なんでもかんでも積んでおつたわけだ。それを台湾の突き船が、船長は久松の人だった、見つけて色んな品物を盗つて、台湾にそのまま行つたらやられるからと船板を皆外して、ここに皆隠している最中に、僕らと出くわしてねえ、もうお互い顔見知りだから、赤玉ポートワインとか、クラゲの乾燥物とか、いろいろくれたんですよ。そして、向こうにこういう船が沈んでいるから、荷物いっぱいあるから、早く行って盗りなさいとねえ。それで行つてみたら、台湾のまぐろ船・延縄船が何腹もおつたわけよ、もう彼等は一生懸命盗っている(笑い)。



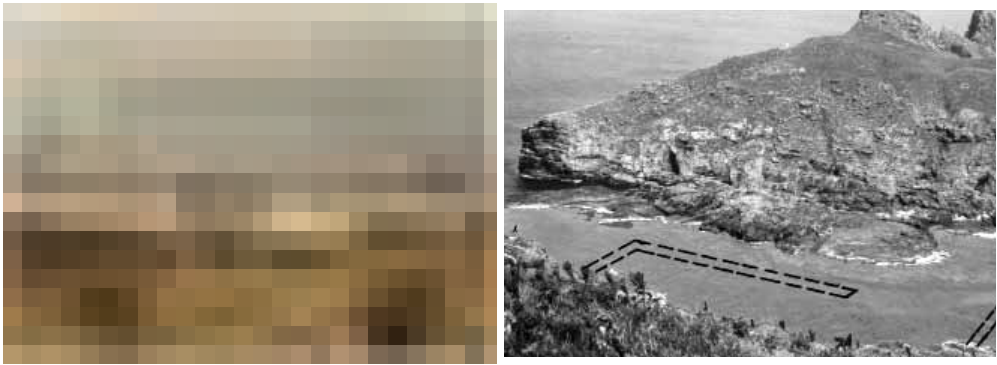
久場島で座礁した貨物船基隆2号(800ト)の残骸、左に見える台湾人の解体労働者の小屋 (比嘉健次 1970)

僕らも行つて銅パイプがねえ、3メートルの奴がいっぱいあつたから、それだけ積んで帰つて来た。ここに下ろして、また直ぐ引き返したんだ。面白いもので、他人がやっている仕事は容易く見えるからねえ、大きな船が自分らも一緒に行こうと言つたきてねえ、だが、僕らの船は遅いから、早めに行きますと先に行つてねえ。あそこに着いたら、もう台湾船が皆盗つて何も無い(笑い)。ダンプは穴が開いてもう水がいっぱい入っている。だが、底の方にエンジン、サバニに使う様なエンジンがいっぱいあつた。それを台湾人は欲しがつてねえ。もう農薬も一緒に積んであるから危険、赤やら青やらの農薬を、そこに潜つて行つたんだよ。で、出てきたら、もうびっくり、赤やら青やらに全部染まってですよ(笑い)、もうホントにすごかつたねえ、台湾人は(笑い)。で、こっちから行つた船はもう何にもないさあ、あとから来た大きな船ねえ、尖閣の海の怖さも知らんもんだから、コウビトウから3時間位走つたらねえ、ものすごい

所がある。そこを知らんで帰って行って、そこの波にやられて、船が裂けたわけだ(笑い)。もう大慌てで自分たちの着物として、それで穴を急いで塞いだりしてねえ、幸いカツオ船が帰りにこれを見つけて、引っ張って来たから助かった、こういうこともあったわけなんだよ。(台湾人がコウビトウで難破船を解体にしている写真を見せる)、そうそう、この船はあの時に座礁した船かもしれない。これが1970年に撮ったものなら、あの時が68年の頃だから、2年後ですねえ。僕らはねえ、この船があるから、海に油が流れるからねえ、コウビトウにはずっと行かなかったですよ。これは何年もダメだからといって行かなかった。だから、僕らはそこまでは見てないですねえ。もうその頃は、僕は南方のカツオ漁に行つて、ここ(伊良部)には、いないからねえ。

港の計画場所 僕らの所へ 聞きにこい

(報告書を見て)この本には港を造る計画場所が2箇所ありますよねえ、これは大体あつちの状況を分かっていない。あんな所で造ってもどうにもならない。一番いいのは真ん中辺りにあるんですよ。僕は何年も向こうを専門にして廻っているから、あっちこっち皆上陸してみ分かってるから。だから僕らの所へ聞きに来いと、僕が言っているわけ(笑い)。



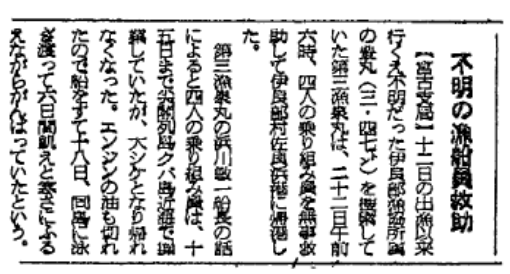
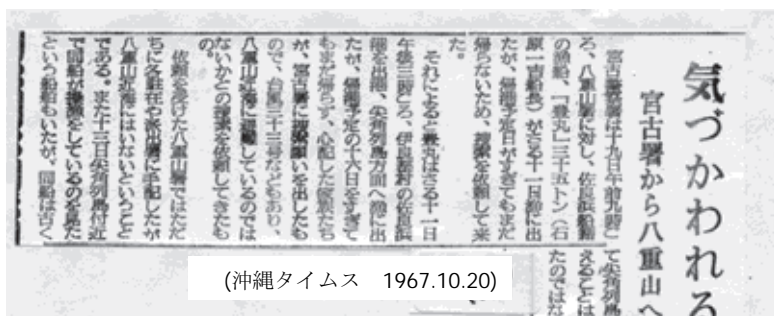
魚釣島西避難港(漁港)候補地 南北小島間避難港(漁港)及び漁船避難用係留浮標設置水域
(沖縄開発庁「尖閣諸島利用開発可能性調査編」1979年(昭和50)年10月)より

実際自分で船持ってあっちこっち避難してみないと分からないですよ。また、この島はどこの風が吹けばどういうふうになる。ここまで分かっておかんと、これはどうにもならない。だから大分の津久見の突船見たいに行つて島のし上げている。

漁師たちは天候も見て、潮の流れも見て、避難をしているからねえ、だから、国が港を造る計画なら、僕らの所に聞きに来いと云っているんだよ、ほんとに(笑い)。

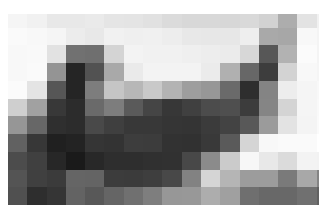
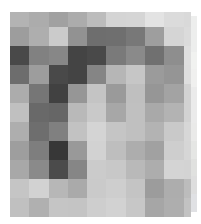
でも、ホントに港が出来たらいいねえ、僕らがそうした時分に話が出た時にやっておけばこんなことはない。西銘知事の時にねえ 川満伊良部町長がこの話は出したんだけど、避難港設置の請願をねえ、ちゃんと知事を通してやっていたけど ダメだった。あの当時造っておけば、今の問題は出なかったけどねえ。(了)

※参考資料 「豊丸」遭難記事



尖閣のカツオドリ 家族の一員だった 長崎 勝子 ながさき かつこ (82)

尖閣から主人が採ってきたカツオドリのヒナを養っていたんです。エサを上げてねえ、とても馴れて、子供たちも喜んで遊んでいたねえ。また外に遊びに行っても帰ってきて、漁から船が帰れば、浜行ってエサ食べて、ちゃんと家も分かっているから、またすぐ帰ってきて。だけど当時仲買さんたちがザルに魚入れてあっちこっちに売っていたからねえ、前の方



尖閣諸島のカツオドリ

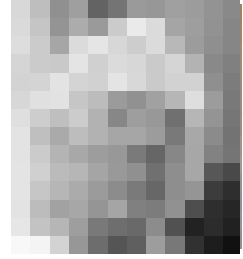
の広場で魚を売っているオバーの魚を盗んだらしい、ザルからねえ。そしたら、そのオバーが怒って、カツオドリを棒で殴って、怪我させてしまった。もう意地悪のオバーと怒ったけど、でもしばらくは生きていたけど、とうとう死んでしまった。もう子供たちは泣いて悲しんでいたよ。あのカツオドリは、遊んでいても、皆が長崎の鳥と知っているから持って来てくれた。自分でも家に帰ってくるし、海からも、また自分で浜に行行って漁からの船は帰るから魚をもらって食べていたからねえ。とてもかわいかったけど。

川満 稔 かわみつ みのる (伊良部漁協)

1925年(昭和元年) 宮古島伊良部町で生まれる。87歳(2012年時)。

昭和18年、南方漁業開発団体に応募しシンガポール等で海外漁業、終戦帰国後は渡台し、尖閣でカジキ突きを行う。

昭和24年、宮古に戻り、尖閣へはカジキ突きで出漁。その傍ら、魚釣島に戦時中に不時着した飛行機3機と古賀村製造場のレンガを解体、スクラップ回収したという。尖閣での漁歴は23~70歳の47年余に亘る、その後沿岸イワシ漁に転じ、1昨年85歳で機関長を辞め、漁業を引退する。



追い込みで南方へ 終戦後 突船で台湾へ

戦前は、シンガポールからギルバートへ、海外漁業に行っておったよ。戦時中は追い込みで南方漁業開発団体(皇道産業焼津踐団)といってねえ、僕が18の時に国が募集しておった。海外漁業といってねえ、沖縄からも、佐良浜からも参加していたよ。

終戦になったら英軍の捕虜、岸壁の作業隊に連れ出された。昭和21年に引き揚げて、8月に宮古に戻ったけど、1年あまって台湾へ行っとる。昭和22か23だなあ。台湾へは密航船で与那国から渡った。闇船だよ、夜中に行って下ろされて、台湾では突船に乗っていた。乗組員は下地栄さんと、伊計長英さん、源河文治さん、豊見山恵義さんの叔父さん(豊見山ナカスジヤ)、浜川太郎さん、名越三郎さんが一緒だった。下地栄さんが船長でメンバーの中心だった。浜川太郎さんは1航海にカジキを40本も突いていたよ(笑い)。

最初蘇澳(すおう)に行って、そこで突船していたが1年して引き揚げた。もう台湾で働いてもお金送金できない。もう食べた方がいい、送金もできないから(笑い)。で、もう宮古に帰ろうと、蘇澳から基隆に移動した。それで僕らの船をチャーターして、ジャンク船が引っ張って、水先案内させて、それで、与那国経由で宮古に帰って来たわけよ。

もう台湾は賄賂、賄賂でねえ、一人幾らとチャーター料を決めたんだが、与那国沖でもめて、もう闇船だから港に入れな。それで台湾に引き返そうとしてから、もう1週間過ぎているからどうせ台湾に戻っても、捕まって強制送還だから、名越三郎さんと僕ら2人は行かないと反対して、皆も行かないと言って、夜中、与那国に上陸して宮古に帰って来たわけよ(笑い)。与那国へは密貿易もした。当時砂糖は高価で一俵20万円(米軍票)位したねえ。

台湾から 尖閣へ 一週間過ぎたら 検査?

台湾にいた時には、尖閣へは2回ほど行ったよ、台湾に近い所にアジンコー(彭家嶼)といってねえ、向こうには、カジキの獲れる時期には台湾船が沢山おるよ。アジンコーで獲れない場合は尖閣に行く船もおるが、全部の船が行くわけではない。アジンコーから尖閣までは大体6、7時間かかるから。僕の乗っていた船は15馬力の焼玉エンジンで、1航海大体1週間位だった。1週間位過ぎたら検査だよ。それに引っ掛かったら強制送還だから。

だから台湾を出港して1週間以上過ぎたら、もう与那国に行って逃げる格好でもう島に

帰るさあ(笑い)。この時は台湾に戻らなければもう何の関係もないさあ。だけど、台湾にいたら、1週間以上過ぎると市場で検査するよ、(密航の検査か?)、だから市場に行く前に途中の浜に降りて、一ヶ月ほど隠れてから、また船に乗るさあ。市場まで船に乗っていつ引掛かったのは何人もいたよ、もう強制送還だから。

宮古に帰り 古い小さな突船を

宮古に帰ってからは、尖閣でずっと突船やっていた。あの時の連中は僕 1人しか残っていないよ。皆、死んでないなあ。あの時の尖閣のカジキはものすごかった。マカジキとか、シロとか、クロとか、バショウとかねえ、ものすごいカジキがいたねえ。

台湾からも突船が来ていたねえ、島の連中が皆行っているわけよ。浜川義孝さんとか、佐久本昌一さんとか、長崎栄吉さん、山口銀行さん、吉浜善太郎さんとかが乗っていたねえ。あの時分僕より 3、4 つ上だったからもう皆亡くなっている。台湾から来た船は大きくて上等だった。僕らの船は小さいさあ、古船で大変だった。台湾人のマルホさんから譲ってもらったニッコウ丸といって 10ト位の船だった。マルホさんは宮古にずっといて、平良で商売していたがもう亡くなったかなあ。僕がニッコウ丸の機関長して、船長は名城三郎さんだった。ニッコウ丸は 20馬力の焼き玉の古船だから、船が遅いので追いつかん。もうカジキが速かったから(笑い)。台湾船は速いからさっと行くのに、僕らの船は遅いから、突船なんかできない、もう真似だけさあ(笑い)。

台湾船は速いから、1日 20本も 25本も獲っておったよ。あっちが 25本獲るのに、もうこっちは 7本位。カジキ見ても追いきらんから、船が遅いからもう逃がしていたよ(笑い)。

クバシマ 昔の製造工場跡あった

クバシマ(魚釣島)は、僕らは突船しておった時分、沖の方を廻っていたから、あの辺のことは、昔のことはあまり分からんけど、昔ねえ、カツオ製造していた大きな製造工場跡があったよ、だから船の出入りする所は石を切られて割られてある、溝(割割)があるよ。

僕はあまり上陸しなかったけど、向こうには殆んどは皆アンカー入れて、何だかんだしておったけどねえ。でも水採りには、皆クバシマまで行っておるからねえ、水は流れている所があるさあ、北側に、で、船から行って、水は向こうから補給しておったよ。で、トリシマの方はガマ(洞窟)のタンクの水で鳥の糞で臭いんだよ。

クバシマの方は水はきれい、山からすぐ流れておるから。

終戦後も、製造が不足した時は、クバシマにねえ、カツオ船が八重山から来て、そこで製造をやっておったらしい。トリシマ(南小島)にもガマの奥行ったらタンクが造られて、コンクリーで造られていた。だから向こうでも製造しておったさあ。佐良浜からカツオ船が行ってやっておったけど、僕らが突船で廻った時分はもう製造終わっておった。エサは採れないといってもうやめたと聞いておる。

クバシマの飛行機 薪燃やして 折って

もう僕らはカツオ船に乗って、尖閣に、クバシマ行った時、日本の飛行機が 3 機落ちていたよ。飛行機の中に誰も死んでいなかったから、多分燃料切れで皆落ちているわけよ。不時着してねえ、翼は何々と書かれておったけど、皆助かっているわけさ。

戦時中に、向こうには降りてるわけよ。

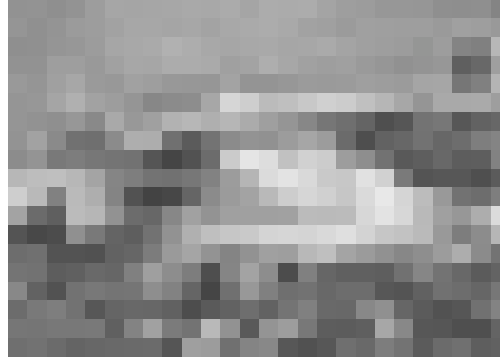
で、あの時分はジュラルミン高いようねえ、積んで行けば高く売れるから。だが、あれをば、小さくできんでねえ。斧でも切れない。鋸でも切れないから、ジュラルミンは硬いんだなあ。骨が入るとるからねえ、それで薪拾ってきてねえ。火を燃やして曲げて折って、羽は羽で、翼は翼で、皆小さく折ってねえ、皆船に積んで来てスクラップで売って、しばらく、それを売って生活していたけどねえ(笑い)。

コウビトウ(久場島)にも 1 台、飛行機があるということは聞いていたけど、向こうまで行かなかった。誰が取ったか分からないけど。クバシマの機体は僕らが取ったよ、3 機とも(笑い)。進漁丸(船主洲鎌蒲四郎 30 ト)という久松のカツオ船で向こうに行つて、僕の家内の親父武富金一は船長していたから、もう冬だから、皆と一緒に廻ったさあ。クバシマには薪取りに行つて、薪は取らないで。飛行機を取ってきたよ。

終戦後はねえ、あの時代は、皆んな取るのも何も自由だったから(笑い)。

工場のレンガも 取ったよ

クバシマのレンガも僕らが取ったよ。あの製造工場のカマド(竈)のレンガもねえ。あれも崩して剥がして取った。レンガは当時は金だものねえ(笑い)。あの時はこっちにレンガもないわけだ。終戦後だからねえ。クバシマの製造工場は大きかったねえ、立派な石積みで囲い造ってねえ。八重山から来てやったおったか、内地から来てやっておったか、分からんが。宮古からはやってないわけだから、何だかんだ造っておったはずだから、その近くにお芋も皆生えておった。僕らは皆採って食べた、長らくなるのでやっぱり水分が多くて、美味くない。住まいもあの囲いの中には、皆あったんじゃないか。



1940年2月大日本航空阿蘇号が魚釣島に不時着、この機体も、この時にスクラップ解体された3機の1つか（「ウェブサイト 川島氏撮影」より）



カツオ節製造工場跡、石垣囲いの内部は藨着と木が生い茂るまま。大規模な造りだったと想像される。(恵忠久 2002)

製造も大きなしかけでやっておったらしい。あのカツオ炊く製造カマド、石垣積まれて、レンガで上等に廻されて、さあと長いの造ってねえ、ものすごい質だったらしい。僕はどんなものだったか、見てないから分かんが、機関長で船におったから、別に崩すのも見ていない。乗組員が行ってやっておるから。飛行機取るのも、皆薪燃やして、火燃やしたら何でも潰れるから簡単だといって、飛行機取ったり、カマド崩してレンガ取ったり、あんなして皆がやっていたから。戦後は、何もないから、しょうがないから、そういうことをやっておったが(笑い)。だけど、あのカマドのレンガは残しておけばよかったねえ。

キャーギ採りに 佐良浜からも 与那国も

向こうには佐良浜の船も、僕らの姉婿の伊波義行も何回も行ったらしいけど。キャーギ(リュウキュウマキ)、あれを伐りには宮古から何回も行ったらしい。伊良部では家造る場合には、キャーギは、尖閣に採りに行ったと年寄りは言っていた。僕の義兄 武富金一も、船持って行って伐ったと、言っておったよ。2、3航海行つたと、言っておったよ。僕が生まれん時じゃなかったかなあ、船乗って尖閣行って、木を伐ってきたことがあると言っておったのに。そうはず、キャーギがいっぱいあるらしいよ。あの時与那国の連中はここに来て突船持って来て、サンゴ採ってあとはもうブラブラしていたけど、あっちへ行って根っこ皆採って来ていっていたよ。クシマヌヤーといって、キャーギの根っこさあ、櫛もできるわけだから、ああいうものを船いっぱい積んできておった。山に登って行って、キャーギを伐って来てから、それがいっぱいあると言っていたよ。今はもう採る人いないから。また生えてもっと大きくなっているんじゃないかねえ。

冬の尖閣 方々の船で賑わう

冬の尖閣周辺はもうカジキが少なくなって突船から、今度はもう一本釣になってねえ。そのあとはあのシマガツオ釣り変わった。シマガツオは一本釣もするが、皆曳き縄で釣っておったよ。底延縄したり、何じやかんじゃしていたよ。沖縄からも、内地からも船が集まって、もういっぱいしておったよお。内地からの船は 2、3 日したら満船して帰って行った。僕は萬生丸で行ったよ。あの時分は、日本復帰前だから、尖閣には保安庁の巡視船は来なかった。台湾船も、尖閣に来てもう一緒にやっていたよ。僕は、萬生丸では一本釣したり、底延縄したり、カツオ釣ったり、何だかんだしていた。

あの時分、尖閣行ってシマガツオ釣ってきたら、仲買人がおって、魚獲れるのが少ない時は、もう向こうで 1 週間も寝泊りして釣っておった。一日、4、5 百キロ位だから、1 トンから 1 トン半、2 トン獲ればいい方だった。

船 5 回造って 尖閣へ出漁

尖閣へは、3 回も船造って航海したよ、ニッコウ丸、見宝丸、大生丸、萬生丸、進漁丸で。ニッコウ丸は台湾の人から貰って、大生丸は与那国から買ってきた。あれは突船だからエ

ンジン乗せ換えて漁をやっておったけど、そのあと 10トの萬生丸を造らして、これはカツオも釣るし、冬は尖閣行ったり、何じゃかんじゃしておったけど。

ある時、右翼団体が来て、僕の萬生丸をチャーターして、尖閣に乗せて行って上陸させたんだよ。あっちで灯台造るとかいって、いい金にはなったが、2回目は断った。

そのあと持った船は進漁丸といって、あれは木造船、もう木造船だからやっぱり 10年目では台割れした辺りから水漏れしてくるから、もうあれは 15、16 年位は持ったかなあ。あれで尖閣も行って、ウブシュー(シマガツオ)も釣った。あの船は家内が病気したもんだから、それに僕も足が悪くなったので、4年前に人に譲ったよ。

歳とって 沿岸イワシ漁に 切り替える

今までずっと尖閣は行っておったけど、だけど、もう歳とったから、網準備して、今は、近くで棒受け網でイワシ漁しているよ、もう、尖閣行かなくなったら、沿岸でのイワシ船に切り替えてねえ、あのマグロを釣る時にエサにするイワシよ。あのイワシを採って漁協に水揚げしておったわけ。もう 15 年位はイワシ採っていたかなあ、一昨年まで、進漁丸の機関長やっていた。もう機械回す人いないから、もう足痛くて手術して、7 回も手術しておるのに、もう辞めたよ。数えて 87 歳にもなるのに(笑い)。

國吉守夫は船を持っておったけど、あれも尖閣で、ロープ切れて、座礁して船割って捨ててねえ、で、船なかったもんだから、僕がイワシ採りに一緒に連れて廻っておった。

僕が辞めたから今度はまた、船主が変わったから漁労長してくれと頼まれて今やっているけど。僕が譲った連中がイワシ網準備して、今日出よう、明日出ようと準備して待っているよ。あの尖閣行った進漁丸で、一日(ついたち)に出るといのが未だ早いと思うがねえ。

(了)

※参考資料 魚釣島の飛行機残骸 散乱

1952 年 4 月に魚釣島に上陸調査した多和田真淳は飛行機の残骸を下記のように記している。



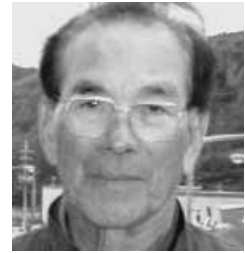
「・・4 月 16 日の日記の中に『しばらくしてわれわれは(魚釣島の)北海岸を巡り東海岸へ出た。東海岸は天候異変がひどいらしく 3、4 隻の大型発動機船が芭蕉葉の如く滅茶苦茶にされた痛々しい姿が見える。魚釣島で遭難した日本機のエンジンや翼のころがっているのもこの東海岸である。飛行機の衝突した岩は真二つに割れて黄色に染っている』。

この飛行機の残骸付近に大塊の砂岩群を縫うようにして小川が海へ注いでいるが、上流へ目をやるとついに断崖に到達するこの断崖から小川まで一筋の黄緑色の帯のようになって一種の蘚(コケ)が生えている・・・。」

(「沖縄・道しるべの島々―尖閣列島の歴史、風物と資源と」⑩ 多和田真淳 琉球新報 1970.10.14)より)

仲間 恵義 なかま けいぎ (伊良部漁協)

1930年(昭和4年)、宮古島伊良部町に生まれる。84歳(2013年時)。氏は伊良部漁協を代表するリーダー、勇壮闊達な漁業人である。漁師に加えて、役場や漁協に勤めたり、漁船や定期航路の船長をしたり、伊良部島における戦後初のカツオ節製造に携わるなどした。尖閣諸島における漁業は、終戦直後、20,21歳(1951,2年)頃に曳き縄、底魚一本釣で出漁したのを皮切りに、その後は、漁船をしたてて曳き縄やカツオ漁を行うなどの豊富な体験を有している。



19歳 台湾の突船戻り 中古船で バーター

僕が最初に尖閣に行ったのは20か21歳の頃ですねえ、大漁丸という7,8ト位の小さな船で行きました。この船は、台湾の突船戻りの中古船で、あのカジキ捕る突ん棒船、あれを改造してカツオ船にしてねえ。あの当時は、小さい船で、尖閣に行っていましたから。

漢那一浩さんの親父が持っていた喜翁丸は6ト位です、そのあとで新造したファイバー船は9.9トですから、皆小さい船ですよ。昭和50年頃から船は大きくなるわけですが。

僕は、終戦後、すぐ学校(旧制宮古中学)を途中で辞めて漁師になりましたが、あの頃はもう物が無い時代で、台湾との密貿易が盛んでしたねえ。それで、アメリカさんのジャケットとか、ズボンとか、上着を、ブローカー達が沖縄から梱包して持って来て売るもんだから、これを台湾から来る船と与那国で、食料品の米とかと、バーター(物々交換)したりしてねえ。僕も19歳でしたが、この大漁丸を買って、仲宗根アキラ叔父を船長にしてバーターの仕事しましたよ。ある時は与那国沖で台風に遭って、密航船だからもう、港に入れないんだ。それで遭難してねえ、もうひどい目に遭ったこともありますよ。(笑い)。それで、このバーター仕事から、海の仕事に切り替えました。

尖閣で 曳き縄 フカ多くて 半分も獲れない

あの当時、島の先輩達が尖閣列島に行って漁やった話や、かもめ丸(船主漢那吉郎)が向こうで小さい納屋を造ってねえ、製造をやっていたという話も聞いていましたねえ。

で、僕らも、夏にはこっち(宮古島周辺)で漁をやって、冬には尖閣に行きましたねえ。

20か、21歳でしたから、昭和25か26年(1951,2年)の頃ですねえ、3,4人で行って、曳き縄、底釣漁をやりました。もう小さな船で行っているから、シケたらもう大変だったです。天気予報を聞くのもないし、だけど、食うためには行かないといかんから(笑い)。

曳き縄では、カツオ、マグロ、サワラを獲ってねえ、マグロは小さいものだが、カツオはホンガツオとか、シマガツオ(ヤイト、ウブシュー)が獲れたよ。

コウビトウ(黄尾嶼、久場島)から南寄りにソネがあるけど、浅く100メートル位かなあ。そこにアカマチとは違った大きいマチがいるが、底釣はあれが釣れたですよ。曳き縄では、シマガツオとかが、ものすごく獲れた。1つの本縄から4つ位枝に針付けて走らしていたら、

もう3,4本位一緒に釣いたらもう引っ張れないんだよ、手繰りだし、船をうんと走らしているもんだから。走らさんとフカが皆身を食い千切ってしまうものだから、あの時はフカが多かったから、(笑い)。うん、半分獲れるか獲れないかだ。半分も残ってなかったねえ(笑い)。今は死んだイワシを持って行って投げたら食うから、竿で釣っている。

だが、向こうに行っても、当時は氷はないから、少し塩を持って行って。

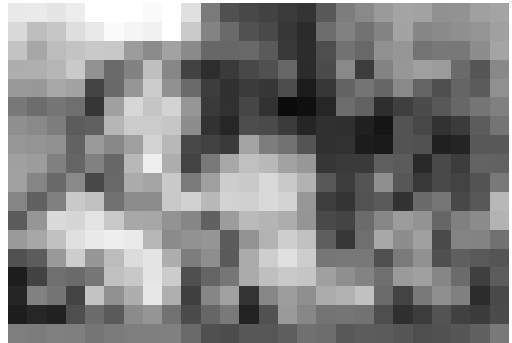
でも、そんなに持って来れない、氷もないし、船も小さいから、それに早めに早めに帰らんといかん、もう生だから、獲った魚は売れなくなるから。昼漁したらもう夜間を走らせて、急いで帰って行ったねえ。

今は氷もあるし、冷凍機もあるからねえ、簡単にもって来れるから。前はそんなに沢山釣れてもしょうもない、適当に獲って早く帰ってきたねえ(笑い)。

トリシマで 海鳥捕って 持ち帰った

その頃、僕等も、トリシマ(南小島)にねえ、かもめ丸の人達がカツオ製造やっていたという島に上がったら、昔の石囲い工場跡がありましたねえ。そのトリシマにはものすごい鳥がおった。もう空いっぱいカツオドリが飛んでいたよ。棒を投げたら当たって落ちて来る位だった。台湾の人達は向こうに上陸して鳥をつぶして、毛も採って毛布とか何かを作ろうとしていたのかなあ。また、卵持って行って商売したりしていたような感じでしたねえ。

もう向こうの山は高いさあ。僕らも、それをよじ登って行って、棒を担いで行って、鳥を叩いてねえ、かわいそうでしたよ、ぶっ殺しているんだ。これを200羽位、棒で叩いて殺して、すぐ持って行けないから、上で殺した奴を下へ投げるとだよ。2、30メートル位下方で引っ掛かるも



甲板に積まれたカツオドリの肉 (田中一郎 1953)

のだから、下りてきて投げて、またこれから下に投げて、もう何回か投げて、下に少し平坦な広間があるんですよ。そこに集めて、あの漁丸で曳き縄やりながら、島に上がったもんだから、そこでアンカー下ろして、投錨しておいて、船からマグロ延縄用の大きい網に引っ張ってきて、縛って、船に引張ってきたんですよ。

そしてねえ、これを羽毛を抜いて、もう家に持って帰って、食料にしまった。もう食物もない頃だからねえ、可哀想に(笑い)、今考えるとねえ、随分野蛮なことを、惨めなことをしたんだなあと思う。だけど、食うためには、もうそうしかできなかったねえ。

試験船に乗って 底釣実習

船長免許を取る前は、伊良部漁協にいました。37、8歳のその頃に、琉球水産研究所の試験船南丸で底釣りの実習に行ったことがあるよ。(※該実習は1968年11月～12月か、「昭

和 44 年度琉球水産研究所事業報告」を末尾に参考資料として掲載した)。

で、尖閣列島から南の方へ1時間位、そこへアンカー降ろして釣ったが、よく釣れた。コウビトウは一番漁はやりやすかった。アカマチ、マチ類を釣った。その時は旧正月の頃だからねえ、もう潮が強いもんだから、オモリ(錘)を、もう相当重いオモリを降ろすから、大きい奴を2,3本縛ってやらんと、底まで着かんよ、これを手繰りで引っ張ってやるもんだから、もう大変な仕事でねえ。で 尖閣列島から大体サウス(南)の方へ1時間位かなあ、そこでアンカー降ろして釣ったこ



琉球水産研究所調査船「函南丸」(1591ト)、尖閣諸島海域の底魚一本釣試験・漁場調査に意欲的に取り組んだ。
(豊見山恵盛 1963)

とがあるんですよ。よく獲れたんですよ。(海図で示しながら)。この百尋線が一番の漁場だ。こういった深い所には深海のアジしかいない。200メートルから深くなったらアカマチ、ナガジュー、メンタイがこの辺で釣れる。300メートルの深さ位か。赤い魚で7,8キもなるが。アカマチ、マチ類、ナガジューは値段が高い。きれいなキンギョマチという魚が釣れましたねえ。

隆祥丸で 曳き縄漁

そのあと尖閣へ行ったのは船が大きくなってから、もう自分で船長やったり、また皆と一緒に رفتりして、船長で航海して尖閣列島まで行きましたよ。

隆祥丸(20ト未満)という船、40歳位の頃かな、大分のヒジ造船所で建造したのを僕が回航したファイバー船だが、この船で夏はカツオ漁をやって、冬になると主に曳き縄で、尖閣に行ったりしておった。コウビトウとクバシマ(魚釣島)ではカツオも獲れた。本カツオもねえ、向こうは潮目が強くなる時があるんですよ。だから潮上りでカツオが来る、その地点に大体浮くから、浅い所で潮が当たって、そこに潮目が立つからここに皆集まってくる。小さい魚が寄って来て、大きい奴が寄ってくるから、カツオも獲れたよ。

大概の場合、曳き縄だとシマガツオだが、その頃からは氷はいっぱいあったので漁のあり次第で帰っていたねえ。もう、尖閣の下の方で投錨し、そこで碇泊しながら、夜は一本釣、夜釣をしてねえ。付近には伊良部の船では喜翁丸や盛海丸とかおった。八重山からも漁に来ていたようだが船名が分からない。内地の漁船もたまには見ましたが、一緒に漁はやってなかったねえ。

尖閣は波が荒い所だから、アカオ(赤尾嶼、大正島)は、泊りが容易な技じゃない。ポツンと突き出た島だからねえ、クバシマの大きい島の島陰で泊まっていた。

そっちの方が少しは安心があるから。ある時、漁を終えて帰る途中にねえ、北風が吹き荒れて、隆祥丸はどうしても佐良浜に向かうことが出来ず、多良間に行ったことがある。

で、夜中に、どことは分からないが、多良間に入って、エンジンをかけっぱなしで舵をいっぱい切つてねえ。そこで夜を明かしたことがある。アンカーも下ろさなかった。舵をいっぱい切っていたのでそこで回ってばかりいたさあ。その時は大変だったねえ。

サバは獲っても、売れなかった

尖閣列島近くは、ものすごいサバだったというからねえ。もう内地の大きなサバ釣船が、集まって夜集魚灯で、真昼のように漁していたというから、ここ伊良部からもサバ釣業をやっていたようだ。サバ漁の技術者が、沖縄の方から来て、元漁協長奥平幸三さんが一緒にやっていたと思う。サバ船は2隻ほどいたかな。1隻は奥平さんの日の出丸？と憶えている。サバは弱るのも早いから難しかったかもしれん。それに宮古には持ってきても、島では売れない。沖縄で売るしかない。離島の離島だけに飛行機は飛ばない。船で持っていったら、もう船の経費ももたないですよ。だから直接、この船で沖縄本島に持って行って売っていたようですねえ。だが、販売が全然だめだったかもしれない。もう2,3航海で終わった感じでした。僕は、それには参加してないのでよく分からないが。でも、尖閣列島近くで、サバがいっぱい獲れるんだから勿体ない話だったなあ。今ではもう獲れなくなってはいるけど。

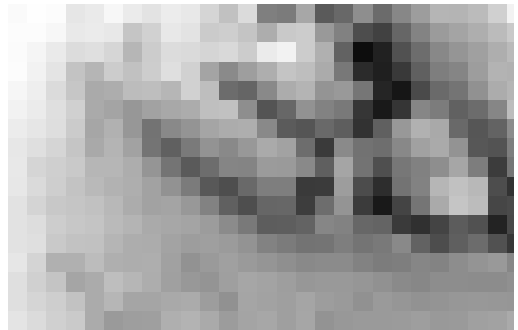
演習のあと 焼け野原だった

尖閣はいい漁場だから、昔の漁船は13時間を走らして行っていた。仕事をしないと皆食べていけなかったから、夜行で船を走らして行った。朝早く着いてすぐ漁ができるから、そしたら、米軍が演習していたからそこには近寄れない。演習を知らないで来て、そのまま引き返して帰った人もいる。

米軍演習やったらもう、コウビトウには上がれないですよ。島を目掛けて弾を撃っているものだから、その時にアメリカさんの船がねえ、何隻かねえ、廻っていたものだから、寄り付きもできないですよ。飛行機だけじゃなくて、アメリカの艦船がコウビトウ近海で、一緒に列を組んで走っているものを2,3回見たことがあるんです。

演習のあと、コウビトウに上がって見たら向こうは焼け野原だった。また、他の人が弾の跡とか弾の外れた爆発しないものとかが向こうで散らばっておったのを見たということは聞いておる。米軍演習で、向こうで漁が出来ないものだからねえ、船主に幾らか、その分だけの補償を払ってました。琉球政府がかなあ。

だから、もう演習するよと、通報来たらもう誰も行かなかったですねえ、危ないから。



久場島は、戦後米軍爆撃演習地となった。島に今尚残る砲弾の残骸 (新納義馬 1971)

演習補償はいつ頃からかなあ、米軍が演習してから何カ年かなってからはないか、今はもうないけど。今演習を止めているから。

カツオ節造りは、水が一番

今でも尖閣には伊良部からシマガツオを釣に行っている、喜翁丸の漢那一浩さんなんかがねえ、前は奥原栄一さんの昇栄丸も行ってたねえ。彼はここに工場を持っているから今でもカツオ節製造しているさあ。僕はここで最初にカツオ節造ったんですよ、昭和55年1980年にあの工場ができた時から。彼の親父栄良さんがカツオ節造りが一番上手かったねえ、造ったのはもうきれいだった。あの漢那吉郎さんのかもめ丸が、トリシマで、カツオ節製造していた時の工場長もした人だから、僕は栄良さんから「カツオ節を造るには張ったような、張らないようにやりなさい」と言われて、それをよく聞いて造っていたねえ。

昔のカツオ節の一番値段が高く売れたのは本部のものです。本部節とケラマ節、なぜかと言えば向こうは雨水で炊くから、ここのは潮水、サバオキの水を汲んできてサバニに積んで、これは、海の水と川の水が混ざっている井戸の水。これを持ってきて製造に使っていた。トリシマで造っていたナマリ節も潮水を使っていたからねえ。やっぱりカツオ節が美味しいのは水なんだ、雨水で造ると塩分がなくなる、皆水分を抜かしてカツオ節にするからねえ。で、塩分が入っているとベタついて、いい節はできないですねえ(笑い)。



伊良部で盛んだったカツオ業も衰退し、今はこの奥原カツオ工場(奥原栄一社長)だけが操業

もう僕は、カツオ船に乗ったり、カツオ節造ったり、平良と伊良部の定期航路船の船長もやっていたよ。もう何でもやった、役場に入ったりねえ、役場の給料では子ども達は食わしきれん、終戦後初任給で70ドル、今の3万円位だったからねえ、それで船乗りになったさあ(笑い)。ここではもう何でもやらんと食えなかったから、潜りもやりました、クブシミ捕りも、タコ捕りも、もう、生活するために、何でもやりましたねえ(笑い)。

(了)

※参考資料

琉球水産研究所・調査船「閩南丸」による一本釣調査

1968年度一本釣漁場調査

一本釣漁業の生産の増大を図るためには新漁場の開発、漁具の改良開発と併せて漁場実態把握による能率的操業が必要である。そのため漁場環境、対象資源及びその分布状況、既存漁場深縁部へ継続する未開発漁場の開発を行ない、最終的には漁場図を作成し、もって能率的操業と資源の高度利用に供するため調査を実施した。

調査海域 大九ソネ、西大九ソネ、宮古ソネ、尖閣諸島海域水深 200m線内外

調査項目 漁獲試験

調査期間 第1次～第2次調査 1968年11月8日～1969年5月1日

調査船 閩南丸(159.31ト、400HP)赤嶺正弘船長外乗組員、

第1次調査 1968年11月8日～12月7日

この調査では、一本釣漁具(長500m、8～10本鉤付)を使用し、手動式巻揚機による投揚縄を行ない、魚種、漁獲率を調査し、魚群状況、海底状況については、魚群探知機で記録調査を行った。大九ソネ、西大九ソネ、宮古ソネ及び縁辺漁場では、ハマダイ、アオダイ、ハチジョウアカムツ、ハタ類、その他の魚種組成で釣獲率1%～15%であった。

尖閣諸島漁場では、タルミ、レンコダイ、アオダイ、オオヒメ、ハマダイ等魚種組成で釣獲率2%～17%であった。

尖閣諸島の赤尾嶼付近、魚釣島東方(約15哩)では、ハマダイ、アオダイ主体の釣獲率10%～17%の好漁場があり、魚群探知機にも魚群の影像が顕著に記録された。 以下略

「昭和44年度琉球水産研究所事業報告」より



尖閣諸島近海での深海一本釣り漁獲試験 甲板一杯に釣り上げたマチ類
調査船閩南丸による漁場調査光景 (豊見山恵盛 1963)

國吉 守夫 くによし もりお (伊良部漁協)

1929年(昭和4年)、宮古島伊良部町に生まれる。83歳(2012年時)。

南洋パラオから引揚げ、終戦直後は、台湾でカジキ、カツオ漁に従事し、尖閣海域に出漁した。昭和29年26歳には宮古に戻り、サバニ漁を皮切りに、宮古・八重山～尖閣海域で幅広く操業。尖閣諸島では、冬場の深海一本釣、シマガツオ漁を営む。また漁業先進県長崎で立延縄、底延縄やジャンボマグロ竿釣り漁法など修得・導入し、漁業技術の向上・発展、創意工夫に熱心である。それ故、年間水揚げは3千万円を超えることも多々あったという。



台湾突船で 尖閣へ 乗組員 皆こっちの人

南洋のパラオから高等1年で引揚げて、宮古に戻った。また台湾に疎開して、台湾で学校を卒業して、叔父の池間孝之助が基隆の南・蘇澳(すおう)でカジキ漁していたから、一緒に漁をして、漁師になったねえ(笑い)、で、台湾の突船に乗っておった。そのあと宮古に帰って、また台湾に行き、26歳(1954年)にはもう宮古に戻ってきたけど。

戦前台湾にいた頃は、カジキ獲りが専門ですよ。もうずっと台湾の突船に乗ってもうカジキ獲りをずっとしてきたから。乗組員は殆んどこっち(宮古の人)です。終戦後は宮古では船も仕事もないからねえ、台湾に渡って出稼ぎに行くしかなかった。佐良浜(伊良部の漁業集落)から行った人の殆んどが台湾の突船でしたねえ。上原金福さん、池原力三さん、池間忠一さん、仲間幸雄さん、糸満芳男さん達が一緒だったですねえ。

漁場は、アジンコー(彭家嶼)と尖閣諸島で、アジンコーにカジキがいなければ、遠出して尖閣に行きましたよ、もうあっちにはカジキがいっぱいおったから。

僕も尖閣には何回も行きましたよ。台湾突船の船主は、呉禮さんで、船は呉榮丸という船だった。乗組員は佐良浜の上原金福さんと池原力三さん、池間忠一さんと与那国の川満さん、船長は池間孝之助叔父でしたねえ。

銚手もした 尖閣で カジキ 20本も

カジキは、北風の強いシケた時に出るから、南風には出ない。だから突船はもう北風なったら、シケたら出ます。船の表に突き出した突台に、面舵とり舵に2人立って、銚を持って立って構えておるから(笑い)。

カジキ見つけたら、もう船は全速力で追いかけて、銚を投げて突くさあ。僕は銚手もした。銚を投げたですよ(笑い)。カジキはもう一目散に、あっちに逃げたり、こっちに走ったり、もう舵を切るのが大変だった。海はシケて荒いし、もう全速力で走っているから(笑い)。

カジキはクロカワと、アカとシロと、それとバショウとあるけど、クバシマ(魚釣島)ではシロカワカジキがよく獲れる。シロカワはカタネとって、カタのヘリが動かない。またアカはマカジキのことで、台湾のアジンコー付近でよく獲れたけど、クバシマではクロカワとシロカワ、もうこれが沢山獲れた。

僕は、尖閣列島では20何本も獲ったよ。向こうにはもうカジキは多かったから。あとになって、宮古からは行った時はあまり獲れなかったですねえ。

カジキも ホンガツオも

戦前の台湾ではカツオはいくらあっても足りないですよ。カツオは台湾海岸から与那国近くまで来ていた。あの頃はものすごく獲れた。1回エサ投げて、釣り始めると船はもたない。もうあんまり釣って、船長があの時20だったから、若かったから分からんさあ。「もう早く止めなさい、止めんと、船が沈むよ！」と叫んだこともある(笑い)。その位釣れた。7、8^{*}位のカツオが多く獲れたから。

カジキ突きでは、アジンコーは毎航海行ったねえ、アジンコーで獲れなければ、尖閣列島へ行くさあ。向こうへ行くと、カジキだけでなく、カツオも、ホンガツオも釣れたよ。もうあちはとてもいい漁場だったねえ。だけど、戦後になって、本土の縄船が尖閣へ来てから、サバがいっぱいいるからと、あのサバ釣ってからねえ、サバは殆んどいなくなった。だからカジキは前のように寄り付かなくなった。

エサになる小さい魚まで獲ってしまったから。小さい魚に大きいのが寄ってきて食べるでしょう。それにカツオのエサになる魚もこの辺に来なくなって、もうカツオまでも寄り付かない、カツオも獲れなくなっている。皆もう余計獲り過ぎているからねえ。

船 幾つも持った 漁場 近海～尖閣

26歳(1954年)には、宮古に戻って、最初の頃はサバニから漁を始めた。

1ト位のサバニではせいぜい多良間付近までしか操業できなかった。そのあと2ト半の船を持ったので、夏にはアカオ(久場島、赤尾嶼)まで日帰りで行った。当時は氷がないから日帰りじゃないと、売って食べることはできない。

で、29歳(1957)頃には6トの大喜丸を購入して、尖閣列島に行って、シマガツオやアカマチ、シチューマチとかの底魚を獲りに行った。その大喜丸が尖閣で座礁したので、この船を捨てて、別の船に乗っていた。そのあと46歳(1974年)には、長崎から10トのファイバー船大喜丸、この船も名前を大喜丸にした、このファイバー船を買って、カツオやマグロ漁、底魚マチ漁をやりました。漁場は宮古近海から尖閣列島、与那国付近ですねえ。

また62歳(1990年)頃には、久高武さんの隆祥丸(16ト)を持って、カツオ漁とか、いろいろやりましたよ(笑い)。

尖閣 底魚 いっぱいおったよ

尖閣列島では、シマガツオも獲れたが、底魚もいっぱいおったですよ。アカマチ類も多かった。(海図で魚釣島と久場島の間を指しながら)、ここには大喜丸から行った時、このコウビトウ(久場島、黄尾嶼)から、2、3マイル離れた所にウキモロといって、アカバーともいうが、誰にも荒らされていないポイントがあるよ、そこではものすごく釣れた。マチ類が

相当獲れたねえ。1日やってもう満船(笑い)。ここが一番釣れた。

クバシマ(魚釣島)の北の方、島の近い所にもいいポイントがあったが、潮が速くて釣機じやないと釣れない。手では絶対できないよ、オモリも大きく、魚が2,3本掛かったらとても、手繰りでは引き揚げられないねえ。もたもたしていたらダメ。ものすごく潮が強いんだから。(久場島付近を指して)、コウビトウのこっちにもいい漁場があった。水深73メートルだからこの辺かなあ、あまり深い所じゃない。浅い所があつて、もういっぺんで食うもんだから、カンパチがものすごく獲れたよ。

一本釣 立て延縄 底延縄 何でもやった

クバシマ(魚釣島)付近での一本釣は、カツオと底魚、底魚は何でも釣れたよ。

割合多かったのはシチュウマチ、キンメダイだが、あれは立て延縄で釣れる。

長崎で立て延縄と底延縄を習ってきて、いろいろ試みた。あれはもう道具によるから。

底延縄は150メートル位の付けて、浮きを50位付けて流すんだが、この仕掛けを2つほど仕掛けて釣るんだが、いろいろやってみたねえ。

またシマガツオを獲る時は、流し釣でやって、アンカー入れたらなかなか潮が強いから、釣機がないとできない。流しにして、もうカツオは釣りだしたら早いからねえ。

シマガツオは沢山獲ったよ。エサをいっぱい積んで行くが残る場合もあった。少しのエサで3ト釣って、もう船いっぱい帰った時もあったねえ。

また、尖閣列島では底魚はマチ類が主ですよ。上原金福さん、本村の婿で名前忘れたなあ、伊志嶺ナカガマ？ 池間忠一さんなんかと一緒にいったねえ。船は仲間武夫さんの「まんぷく丸」で。あの時は1日で1トあまりも獲った。だけど、魚は大漁すると安くてあまり売れなかったよ(笑い)。だけど、僕が底魚一本釣をやり始めた当時は、池間の人はよく獲っていたが、伊良部の人は少なかった、僕だけだったかもしれん。

座礁したり シケでやられたり

尖閣列島はいい漁場だけど、もうシケたら大変な所、何回も危険な目にあったよ。

いい天気に行けんから。一回はもう、何回もだなあ、天気予報で3日間はいい天気というから出漁したら、もうお昼12時頃には荒れ出してねえ(笑い)。20メートルの大シケになって、波でブリッジの戸はぶち破られて、もう散々な目に遭った。大喜丸だったからよかった、助かった。ファイバー船で頑丈だったから。また、14~15メートルの大シケにあつて、3,4日も帰れなくて、ナギてから帰ったがもう大変だったねえ。

一度は、尖閣で船なくしたよ(笑い)。クバシマ(魚釣島)に、ここの方に小さな瀬があるよ。(飛瀬付近か?)。そこでは魚がものすごく釣れるんだ。他の漁師達は行かない所で、そこで2時間ほど釣って、眠くなったから寝ていたわけさあ。浅い所なのでもう潮が変わって、船が回って、流れているのも分からん。飛び起きてどこにいるかと見たら、船はクバシマに乗り上がっている、もうびっくりだ、機械をかけて、あれこれとやったが全然下りない。

どうにもならないから、無線で保安庁に助けを呼んださあ、座礁しているからと。
あの頃は無線電話があったからよかった。無線がない頃は大変だったねえ。
それで無線で保安庁に来てもらって乗せて行ったがねえ、沖縄の船も助けに来ておったけど。もう船は使えないから捨てましたよ(笑い)。

隆祥丸 台湾船を 救助

台湾漁船を隆祥丸で助けた時ことですか。もう忘れたよ。冬場にウブシュウ(シマガツオ)を釣りに行った時だが、クバシマ付近で操業しようとしていたら、北小島の方で台湾船が座礁していたよ。機関長や乗組員は誰だったか、思い出せないが、救助したからと保安庁から表彰を受けたよ。当時の新聞には、「1992年(平成4年)1月9日頃、台湾トロール漁船新志益(18ト)が大シケに遭い、北小島の北側リーフに座礁した。乗組員11名は大シケの海に飛び込み、10名は島にたどり着いたが1人は行方不明になった。事故から12時間後にカツオ一本釣船の隆祥丸(國吉守夫船長、16ト、乗組員6名)に救助された。隆祥丸は10日佐良浜港に到着、巡視船みやづきが遭難船員10名を平良港に搬送した。一方遭難現場では巡視船2隻とヘリコプターが出動して空海から搜索したが、遭難者の機関長は発見されなかった」とあったねえ。

年間水揚げ3千万円余「尖閣長者」

尖閣列島では相当儲けましたよ。何ト位水揚げしましたかって、あんなの(記録)つけないのに、3千万円あまりの水揚げは何回かあったよ。1カ年で、若い頃ねえ。

年間水揚げは3千万円余りだったのは、大喜丸を持つようになってから。

あの船が10ト位あったから、上等な船だった。小さい船の時は遠くまで行けない。1、2トの船ではせいぜい多良間付近まで。船が大きくなってから、尖閣に行くようになった。

(氏に「水揚げ3千万円余は、月収にすると2百50万円余の高額に上る、まさに『尖閣長者』ですねえ」と言ったら、笑顔で頷いた)。3千万円は、大喜丸持ったのが45、6歳だから、50代位までねえ。60才過ぎてから船は替えて、隆祥丸を持った。小さい船だが、あれからでも2千万円は揚げたこともある。ひと夏でもすごかった。この場合は尖閣ではないが、シビマグロを内地に千円で送った。

あの時も相当儲けたよ。漁師でも儲かる人もいるし、儲からない人もいるさあ(笑い)。

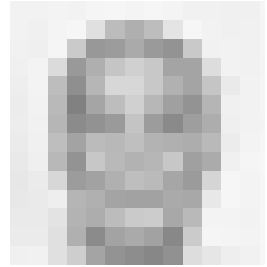
運もあるよ(笑い)。漁師は魚とジンプン(知恵)スーブ(勝負)なんだ。魚は寄る所に寄るから、この辺には魚はいない、この辺にはおる、もう廻って行って、いる所で獲らんとねえ(笑い)。それに潮もあるからねえ、潮が強かったらどうするか、どこに下ろしたら魚は獲れるかと、もうしょっちゅう考えんと、工夫しないといかん。

だから、僕は何でもやってきた。長崎に行って立て延縄とか、また底延縄とか、またジャンボといってマグロを釣る長竿があるさあ、内地の漁法をいろいろ習ってやりましたよ、いろいろやってきたからねえ。(了)

仲地 行雄 なかち ゆきお (伊良部漁協)

1930年(昭和5年)、宮古島伊良部に生まれる。84歳(2013年時)
旧制宮古中学から予科練を経、終戦後20歳に「かもめ丸」のカツ
オ節製造陸上班で尖閣諸島に行き、南小島に3、4ヶ月間滞在する。

氏は「南小島での工場造り」「海岸砂浜に転がっていた機雷の話」
「アホウドリを食べ、脂を採った話」等々といった数々を体験したが、
いずれも興味深い内容である。とりわけアホウドリを食した話は学術
的に貴重である。氏の話をもとに、ここでは島のように、アホウドリ
等を掲載し、カツオ節製造には別途、「魚釣島・南誇島のカツオ節製造」の節に掲載した。



20歳 かもめ丸で 尖閣で カツオ節製造

尖閣列島に行ったのは20歳の時(1950年)ですねえ。漢那吉郎さんのかもめ丸(池間武雄船長 25ト)で、カツオ節製造の陸上班ですねえ。あの時は、尖閣列島へは伊良部から3艘。池間からも出ているんですよ。池間の船はねえ、ただ魚を釣って帰るだけで、僕らのかもめ丸は、陸上班と漁業班で、20数名で行った。向こうに小屋を建てて、工場を造って、住んでカツオ節製造もしているんです。伊良部の工場から製造道具を持ち込んで、僕らは酒も持って行ってねえ(笑い)、そして船は1週間、10日位で出入りするから、向こうで造ったナマリ節を宮古に持って帰って、で、それをまた佐良浜の工場で乾燥させてねえ、カツオ節にする連中がいましたから、そういうことをやっていたので、ええ、僕らは帰らんですよ、陸上班は、製造しないといけないから。しかし海の連中は1週間に、10日に1回位帰ってますねえ、食料積みに。あの頃お米じゃないですよ。芋ですよ、さつま芋。だから大量に積むんですねえ。で、あとは配給米がねえ。カリフォルニア米ですか、あれがあったもんだから、しかし、殆んど芋が主でしたねえ。

漁業班14,5名 陸上班7,8名で行く

(「伊良部町漁業史」のかもめ丸の記述(P70~72)を見ながら)、この中でねえ、「船員 漢那栄(24)、前里一郎(43)、奥原隆治(18)・・・」、これは船の連中ですよねえ。陸のこの連中はねえ、私達の船、僕らと一緒に来て、1週間働いて帰ったんですよ。

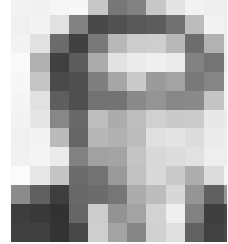
「男工 川平金四郎()、池原勇吉()、仲地行雄(20)・・・」そうそう、これは僕らと一緒に陸上の連中ですがねえ。えっ、「平良寛雄(32)」、なんてあまり知らんなあ。「國頭秀雄(37)」と川平金四郎、これは重複してるんじゃないか。このおじさん達は佐良浜の陸上の連中なんですよ。もっと沢山いるんですがねえ。実際に船が14,5名、陸は7,8名位で、これ全然別個に。あの時に、かもめ丸の他に、有徳丸(船主漢那計徳 31.39ト)、八宝丸(船主与儀巖 23.15ト)の3つが行っていたんですよ。最初はねえ。池間の連中は、あとから大漁したもんだから、あとから皆付いて来た連中なんです。さほど、そんなに水揚げしてなかったかも知れない。別に話をしたことはなかったけどねえ。

あとから有徳丸も来る 歓迎会する

「女工 西里ハル(31)、仲松スズ(30)、浜川梅子(29)、作久田ヨシ(16)」とあるねえ。陸上班の女の人は、僕らの船だけ。また別の船には女の人は付いて行ってない。で、向こうに行って、工場を造ったのは僕らかもめ丸と有徳丸ですよ。

僕らが最初行って、成功したもんだから、有徳丸が来た。向こうに行って家を造って。1週間か、20日位して、来たもんだから、歓迎会やったもん。宮古の漁業は大体10月で終わりますからねえ。だから時期は11月か12月に間違いない。寒かったもん。向こうは寒い所なんですよ。ああ、寒かった。

(「伊良部町漁業史」のかもめ丸の名簿を指して)、この名前は僕に言わすれば、全然別の名前が入っているから、「吉浜アッピー」これは誰のことアッピーと言っているのか、國頭秀雄さん、平良寛雄さん、これはあまり知らんなあ、僕らの船でない。この西里ハルさん、仲松スズさん、この女の人は僕らの船と一緒にですよ。これはもう大体当たっています。僕らの工場の全体の指揮者は漢那国光さんなんですよ。船主の兄貴は宮古にばかりいるから。あとで、八宝丸とかが来る頃には、殆んど漁は落ちていましたねえ。だけど、僕らかもめ丸は、大漁してナマリ節にしてうんと稼ぎましたよ。



かもめ丸鯉工場総指揮者・漢那国光氏

南・北小島間の潮は速い

(南小島の上から見た石垣積み写真を見て) ああ、これがねえ。こっち側に北小島があるんだなあ、僕はねえ、ここをぐるっと回ってこれと並行していたような感じがした。なぜかというねえ。その満潮にはねえ、西の所謂魚釣島の方向から、こちらに潮が満ちてくるんです。満潮だったら逆かも知れんけど。で、ここは大体宮古から来る時は船が入って来ますからねえ。

そして干潮にはこっちから、ダダッと、その引き方が凄いなあ。船はなかなか進まないんです。カツオ船だったら、焼玉エンジンのポンポンで、焼玉エンジンのダブルですから。この潮が満つる時にか、引く時にはあんまり分からんけど、この間を船が通るんですがねえ。間は200メートル位かなあ。で、なかなか通れないんですよ。向こうの流れのために、だから僕らは対岸で座っておって、手を叩いて笑っておった。「だめじゃないか、お前達の船は！」と大きい声で騒いでねえ。全然通らんから(笑い)。



工場跡から対岸の北小島が目の前に。遠くに見えるのは魚釣島。(多和田真淳 1952)

で、製造が休みの時は、向こうに渡ろうと思う時に、大体両方の島は並行しているので

ねえ。向こうへ渡ろうと思ったら、帆と櫂しか持ってないですがねえ。伝馬舟に乗って真っ直ぐ向こう目指して櫂で漕いでいくんですよ、そしたら、北小島の対岸の 100 メートルから 200 メートル向こう側に着くんですよ。潮の流れを利用して、そしたら、またあちらから戻るのは何時間か待ってねえ。またやると、ここに帰ってくる。なぜなら、僕らの住居はここにあるから、この山のこっち側にあるから。また、炊事をする所から、ここから見るとねえ、魚釣島がはっきり見える。で、ああ、どこの船が入っているなあと分かるんですよ。

北小島 洞窟前に 爆撃標識？

この北小島に行くのは休暇を利用して、ただ、探検に行けるようなもんですよ。

ここには、アメリカの爆撃試験地の標識が付いているんです。この辺に、ここに洞窟があってねえ。広い洞窟があって、高い所が。そこに所謂火山島かどうか知らんけど、軽石がいっぱいあるんですよ。で、爆撃試験地の標識のようなものがありましたねえ。

洞窟の前辺りの広い所にねえ、これは僕と同年ですがねえ、那覇市役所に働つていて亡くなったんだけど、糸満博文が言ってましたねえ。どんな標識があったかって、いや、ただ直径で 20 センチ位の丸い奴ですよ、ここの洞窟の手前の広場に打ち付けてありました。飛行機から見たら分かるかなあ。何と書かれていたかは記憶にないですねえ。英語が書かれていたのは間違いない。あの糸満博文は分かっていたけど、僕は分からなかったなあ。

南小島 子供の骨壺 薬瓶があった

で、こちらの頂上に、南小島の頂上に上がるには、所謂この辺に、今先の石垣のあれが、この反対側に石垣が積んであるんですよ。所謂、昔人間が住んでいた居住の跡だねえ。首里城の石垣みたいきれいに積まれてあるんです。で、その辺には岩と岩との間にコンクリーを流してねえ。きれいにお風呂場にしてた跡があるし、それから壺が沢山あって、こう開けたら小さい子供の遺骨が出てきたり、小さい壺ねえ、所謂骨みたいなのが出てきたり、それから子供達に、今でもねえ、そうだけど、子供に飲ませる、咳きをしたり熱を冷ます時に使った薬を入れたような瓶が、目盛りの付いた薬瓶がまた沢山ありましたねえ。だから、それを僕達は見たりしていたけどねえ。

古賀氏の水溜に助かる、髪洗うと固まる

(南小島の写真を見て) これは南小島だねえ、僕らが住んでいた島だ。ここには、この真向かいに、僕らが工場を造った所の、海すれすれに岩場があるんだけど、洞窟が、10 メートル位の洞窟があるんですよ。で、前が高くて、奥の方に 10 メートル位、それをねえ、古賀さんが、明治に、そのコンクリーで区切って、鍾乳洞から落ちる水を溜めてねえ。1 番奥の方に、1 番高く積んで下の入り口の所に、コンクリーを築かれて、それに「明治三十九年十月次辰の水、古賀」と書いてある、きれいな字で。多分明治 40 年の 10 月の第 2 辰の日に、ここが完成したんでしょうねえ。タンクが、ここのタンクに行ってみたら、水が溢れてねえ。

きれいな水が、で、助かったよお。あれがなければ大変だった。まあ、あとは自分らで雨水溜めたけどねえ。

面白いエピソードもあるんだけど、その井戸水でお風呂も浴びんといかんでしょう。沸かしたら浴びる。五右衛門風呂造ってドラム缶で、それにその水を汲んで来て入れて、そして浴びたりして。で、頭洗ったりする。熱いうちに頭洗うと、石鹸つけて洗うと、熱いうちに落とさんとダメなんです。これが冷めてしまうとコンクリー見たいに、カチカチに固まるんだ(笑い)。僕は帰ってから聞いたんだけど、あれはリン鉱石が入ってるものだから、それが染み通って来て、その洞窟からねえ、それで固くなると言っていた。水を沸かして、また頭を洗ったらきれいに洗える。そういうわけで早く洗わんか、早く洗わんか、して。で、あとで沸かしてからやろうとしたら、今度は、また寒いでしょう。あの時はもう12月だから、もう寒さに震えながら。そういったことも思い出したねえ(笑い)。



南小島洞窟にある古賀開拓時代に造られたレンガの水溜タンク。このタンクがあったから助かった。この水を大いに利用したという。(仲間均 2002)

金のかからない工場 造った

南小島のこの洞窟近くに、何も金のかからない工場を造ったよ(笑い)。こちらから持つて行くのは米軍用の天幕だけ。向こうには流木がねえ、材木工場があるんじゃないかと思う位いっぱいある。これはもう大きな杉の木、檜とかがあるんですよ。これを利用して、カツオを煮炊きして、乾燥させて、ナマリ節を造ってねえ。で、結局、金がかからんで非常にうまく行ったんです。大きな流木を切って、五寸釘を持ってきてドンドン打ち付けてから、天幕を張って、工場を建てて、そこで生活していましたけどねえ。

また海岸が近かったから、とってきた魚や海鳥を、海岸にそのまま投げて、4、5日もしたら塩乾燥、もう塩がパチパチ上がって、きれいに乾燥して、もう腐らないから。

それに、野菜はねえ、ダイコンが平地から山の頂上まで、所謂その辺から山の頂上まで生えているんです。僕らの工場付近からねえ。とても生活しやすい所でした。

タイドプールに 雨水溜める

だから、私は南小島でも10年位は生活可能でないかなあ、水もねえ、その洞窟だけの水では間に合わない。あの頃は台湾人辺りも船で来てねえ、それを汲んで行きよった。もう採るなどは言えんからねえ。で、慣れてきたらねえ。スクールが来るんですよ、雨が。

だから、海岸にはあっちこっちに水が溜まっている所があります。そこをきれいにタワシで洗っておいてねえ。潮水できれいに流して洗って、シートを被せて置く。スクールが

来るのがすぐ分かるから、来たら、シートを取ってねえ。雨水をいっぱい溜めたら、また被せておくんですよ。なぜかと言うと、もう鳥の群れが来たら、1分でもう全部糞まみれですよ(笑い)。もうペンキを塗った見たいに糞で全部白くなる。屋根なんかは、天幕張ると同時に真っ白になったから(笑い)。最初はすごい所に来たなあ。これ大変だ、大変だ、逃げろ、逃げろと言ってねえ(笑い)。

また、向こうにはヘビも、いっぱいいるんだけど、毒蛇はいないです。臭いがするシュウダねえ。で、北小島に3、4回は遊びに行ったけど、魚釣島は1度しか行かなかった、離れているからねえ。魚釣島という所は面白い所で、あれは殆んど台風避難の島、この高い所の下の方がねえ。南側には高い山があって、もう中腹からでも雲がいっぱいかかるんですよ。そこの下は避難港でした。

で、そこは24時間風が吹いたら24時間エンジンをかけっ放し。何でそうするかと聞いたらねえ、年寄りに聞いたら。そこは鍋底になって、錨がかからないから、エンジンをずっとかけておかないといかんと。もしも、錨を投げて安心したら、すぐもう船がダメになると、船が壊れるからと、そんなことを言っていました。

南小島にあった機雷 流木火災で爆発

(南小島の写真を見ながら) 南小島のこっちの方にきれいな砂浜があってねえ。ここには、日本軍の機雷、潜水艦を沈ます機雷、それからアメリカ軍の機雷、4つも5つもこんな大きい角をしてあったんですよ。駆逐艦辺りが行ってパァッ、パァッと落として戦艦を爆発させて沈ます機雷というのがあってねえ。で、そこに機雷の中に、杉などの流木が、材木置き場みたいにいっぱいあるんですよ。そこは工場から遠いから使わなかったけど。僕らがカツオ炊くとか、生活に使うものは、洞窟付近にあるもので足りておったから。

ある時、誰があ砂浜の流木に火を点けて燃やしたか知らんけど、ものすごい大きい音して爆発が起きてねえ。ババァーン、ババァーンと、機雷も爆発して、もうこれがもの凄いですよ。いよいよ危ないなあと思った位だから。

3日位ねえ、もうアホウドリは来なかった。海鳥も来なかったよ。結局誰が点けたか分からない。寒いから、誰がやったのか、池間の連中ではないか。僕らは、池間の連中がやったんだろうと思って、漁に来ていたから。あとで宮古の漁業組合に抗議させてねえ。燃料が無くなるでしょう、そういうことをしたら。そんなこともありましたねえ。

北小島 ハマダイコン いっぱい 野菜で重宝

北小島には、この島全体をアホウドリがおるかどうか、おったら捕って食べようと思ったんですが、勿論、アホウドリがいるのは南小島では頂上付近ですよ。

北小島は、この辺りにいるんです。で、ここ行って発見したのは、ダイコン畑が1町部位あって、あらっ、ダイコンがある、ここは誰かが住んでいるんだなあと思う位、ダイコン畑があるから。僕らの高さ位、ダイコンの葉っぱが生茂っているから。それをヨイショ

と引いたら、根はないです。ハマダイコンですよ。ダイコンのように太い根はないけど、もういっぱい生えている。あれは海鳥の糞が大量に溜まって、いっぱいできている。あとはハマダイコンを採って来てねえ。南小島にもありましたがねえ。もう、野菜として重宝しました。助かりましたよ、それで宮古に送ったり、束にして漬物用に送ったりもしました。僕らは、宮古から最初のほどは野菜を持って来いと言っていたけど、後はもう、こちらから逆に送りました。そういうこともありましたよ(笑い)。



南・北小島にはハマダイコンがいっぱいあった。野菜代わりにこれを採って食べた。(新納義馬 1979)

アホウドリ被ったら、すっぽり身体入りますよ

(海鳥の写真を見せると) 南小島には、このアホウドリも、カツオドリもいますよ。

僕らは3,4ヶ月いて遊ぶ所だったから、山に這い登って、130メートル位あるんですよ。山の頂上に夜登ってねえ、アホウドリを捕りに行きよった。僕らは若いから、もう皆先頭立ってやりおった(笑い)。年寄り達はもう山の下におって、砂浜におって、待っているんだ。

アホウドリは翼の長さが1つで1尋半(9尺、約2.7メートル)位あるんです。手を伸ばすとこれ位までくる。1つでよ。2つだったらここまでねえ。

それを夜、頂上に上がって、松明持って崖を上がって行くんですよ。見つけたらもう、アホウドリは急には飛べない、体重が重いもんだから、滑空しなければ飛べない。それをドンドン叩いてねえ、一回叩いたら大体倒れる。死んでると思うが、そうじゃない。しばらくしたら元気になって飛んで行くから、あとで捕りに来て見るといなくなるんです。(笑い)。

(アホウドリの写真を示して) この嘴がねえ、カツオドリとかとは違って曲がっているから、生け捕りする時は、殴って倒してから

上の嘴と下の嘴を錐で穿けて針金で縛っておく、そしてアホウドリ3,4匹を捕ったらねえ、針金で脚1本ずつ縛ってねえ、束にしてから、山の頂上から落とすんです。落としたらあの連中は、待っておってねえ。それを向こうの家の宿舎の傍に持って行って縛って置いておく。で、死んでいるから首を切って、脚を切って、これから裂いてねえ。ガチャッと羽根を全部抜いて、で、被ったら、僕らの身体は全部すっぽり入りますよ。そんなに大きい



一度絶滅したアホウドリも数多く繁殖。南小島の岩場で戯れているアホウドリ。(水島邦夫 2002)

鳥なんですよ。アホウドリは生体で 12 斤半(7.5 キロ)だから。(クロアシアホウドリの写真を見て) そうです。これはクロアシアホウドリ、この嘴も鋭いんだ、こいつも 12 斤半ありますよ。

アホウドリの脂 薬にも テンプラ油にも

アホウドリの親鳥はねえ、毛が全部真っ白になります。あれは 35 斤位あります。

僕はあれは捕ったことがなかったねえ。あれは捕るなして捕らなかつた。アホウドリを炊いて食べたり、焼き鳥にしたり、いや、それは美味しいですよ。鳥というのは皮に臭いがあるもんねえ。あれを足の根っこまで切って、もうこれは、あの時は保護鳥じゃないからねえ(笑い)。もう大概是 2 つ位捕れば、腹いっぱいだったんですねえ。お腹の方に脂があるんです。ラードじゃなくて鳥の脂(あぶら)、黄色いきれいな脂がねえ。で、大体 1 匹に 4 合、5 合炊ける位、脂があるんです。それで年寄り辺りは昔はねえ、この鳥を捕ってきたら脂を採ってねえ。傷につければ一発で治させるし、向こうにいる時はその脂で以って、それで傷も治すんです、薬も持っていないから。で、食べる時もテンプラ、宮古から持って来た芋を切って、そのアホウドリを 3 つ位捕ってきたらもう、1 升余って脂ができるんです。それで芋テンプラを、から揚げでねえ。また野菜のチャンプルーとか、色んな物作ってよく食べました。僕は 80 和位までいきよつた。今は大体 65 から 70 和しかないけど、向こうで太っていたのは、アホウドリのお蔭かもしれない(笑い)。今は保護鳥になって捕ることはできないけど。で、そのあと、琉球大学がアホウドリ調査(1963 年、団長高良鉄夫琉大教授)で行きましたよねえ。そのメンバーに知り合いがいて、「尖閣列島にアホウドリ探しに行ったら、いなかった」(※末尾に新聞報道記事)と言うもんだから、僕らが捕って食べたからいないよ、と言ってやったがねえ(笑い)。

ザル担いで 山に 魚採りに行った

アホウドリは山の下には降りてこないもんねえ、上の方にだけいて。カツオドリとかは、下にもおりますがねえ。旧正ちょっと前にはねえ、島一面、もう波打ち際から山の上まで、全部巣が造られてねえ、そこに皆ヒヨコがいるんですよ。もう、カツオドリは、朝 7 時、8 時になると、沖に向かって一斉に飛んで行くんですが、これが 9 時、10 時頃になると戻って来るんです。口に大きなトビウオを食わえて、横に食わえて、巣の前に来たら、それにくれるために吐くんです。見ていたら、中の奴も全部吐き出して、2、3 匹位吐き出して、それを与えて、また海に飛んで行くんですよ。そういったことを繰り返して



上：カツオドリの親とヒナ 下：親鳥が吐き出したトビウオ (下謝名松栄 1971)

いる。僕らはカツオばかり食べているから、別の魚が欲しくなったら、ザル担いで山に上がって行きましたよ(笑い)。朝の時間は上空は、いっぱいいるからねえ、もう太陽が隠れてしまう位だから、糞がねえ、もう雨あられの如く降ってくる、もう逃げんと大変です(笑い)。

で、ザルを持って上って行って、待ち構えているんです。カツオドリは帰って来たら、巢の前で魚を吐き出すんです。見たら皆生きている。もう何百匹落ちているか分からん。ピンピン飛んで生きているから、走って行ってねえ、1匹、2匹と入れてねえ、100匹位に入れてねえ、持って帰って来るんですよ。こんなして魚を、トビウオとか、イカとか採って食べたり、また宮古に送ったりもしましたよ。もう、尖閣列島行ったら、野菜も、脂も、鳥肉もただでしたねえ、魚も(笑い)。

卵全部採ったら、子孫がダメになるよ

台湾人は鳥の卵採っていた、根こそぎ採るから、これは食べられないものだよ。長らくいるとその卵が古いのか、今割って食べられるか、分かるんですよ。

だからねえ、あの台湾の青年達に 2、3 名の時、水を汲みに来たから、卵はねえ、これはダメだよ。白くなっているのはダメ、これはやがて生まれる卵だ。これはちょっと緑がかった奴がある。これはねえ、この卵は飲んでもいいと、焼いて食べてもいいから、全部採って行ったらダメだよ。あとで残しておかないと子孫がダメになるからと(笑い)、いつも言っておった。何に使うかと聞いたら、お菓子を作るから卵を採りに来たと言っていた。

(続く)

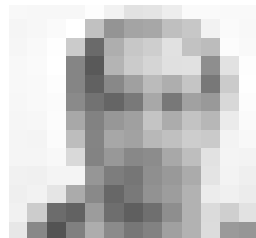
※参考資料 1963年アホウドリ調査報告記事



(沖縄タイムス 1963.5.19)

漢那 一浩 かな かずひろ (伊良部漁協)

1948年(昭和23年)、宮古島伊良部町に生まれる。64歳(2013年時)
伊良部島は、池間島と並び漁業の島、かつお業の盛んな島である。
戦争を終えるや、伊良部からも、尖閣諸島の好漁場めざして多数の
漁船が出漁していた。氏はこれら伊良部シマガツオ漁60年の伝統を
今に受け継いでいる海人である。父から本人、そして息子へと3代に
亘り継がれて絶えることない。氏は日本全国でも、シマガツオ・ヤイ
ト専門は、伊良部の船、尖閣諸島でのウブシュウ漁だけだろうと、誇りを以て語っている。



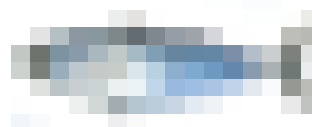
伊良部漁民は、日本唯一のヤイト(シマガツオ)専業！！

今なお受け継がれている尖閣でのヤイト漁を大いに語る

脂のって、美味しい、抜群の人気

— 今でも、尖閣に漁に行っているそうですが、何の魚を獲りに行ってますか。

漢那：はい、僕らが尖閣列島へ行って獲る魚は、水温が下がって寒くなると脂がのる魚
なんですよ。シマガツオといって、本土ではヤイトとも、スマとも言います。島ではウブ
シュウと言います。それを獲りに行くんです。殆んど鮮魚で刺身で食べて、脂がのって
いて美味しいです。向う行くのは冬場、大体12月から3月位
まで。魚はいることはいるんですが、暖かいと今度は脂のの
りが悪くなるから、売れなくなるんです。だから水温が下が
って寒くなった時が一番いい時期です。大きさは、大きくて
4和半か、5和位とか、3和前後が普通ですねえ。赤身で脂
がのって、結構評判がよいです。那覇にはあんまり出
ない、大体地元で売れて、たまに大漁にあがった時は本土、
那覇辺りに出します。昔は結構多かったですが、それが段々少なくなってきて、今はそん
なに獲れないですねえ。別の魚は売れなくても、この魚はとて人気がありますから、売
れますよ(笑い)。



シマガツオ 本土ではヤイト、スマ
宮古ではウブシュウという

今の伊良部はパヤオの魚、マグロ類が多いんですが、マグロ類は売れなくても、この魚
は売れるんです。マグロ類より値段が上がっても売れる。それだけ珍しい魚だから皆が待
っているんですねえ。仲買人もそうですよ。魚は持っけていても、別の魚はいっぱいあつて
も、この魚を買うんです。だから売れるんです。

喜翁丸 9.9トで、40年近く、尖閣でヤイト漁

— ウブシュウは脂がのって美味しいなら、ぜひ食べて見たいですねえ。

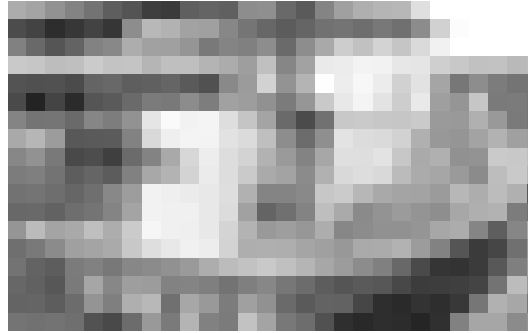
この魚はどんな船で行って、どのようにして獲るんですか

漢那：船は、喜翁丸(きおうまる)といって9.9ト、大体10トの船です。この船で尖閣列

島にウブシュー獲りに行っています。僕が20代の頃からですから、今年満で64になるから、38年以上、40年近くは行ってますねえ。今の船はファイバーで出来ているから修理をすればいつまでも持ちます。シマガツオ漁は、最初の頃は曳き縄でやってました。向うで1週間くらい泊まり込んで。やっぱり時代の流れでねえ、もう十何年位前から、皆竿釣、一本釣になって、今は生餌でやりますから、ホントにカツオの一本釣と一緒にですよ。生餌はグルクンの稚魚ですねえ。それで一本釣ですから、もう日戻りですよ、鮮度的にも全然違いますねえ。こっち(伊良部)から夕方出て、向うには翌日早いうちに着いて準備しておって、もう明け方からは仕事をして、漁があれば早く引き返すと、その日の翌朝はもう戻ってきますから、全然鮮度が違うわけですよ。

— 1航海で、ウブシューはどの位獲れますか、ひと月に何回行きますか。

漢那：喜翁丸は大体6、7名で行って いい時は3トも4トはありますねえ。だけど最近
は2ト釣れたらもう大漁です。もう前は4ト
も5トも釣れましたけど、今はそんなに獲
れないですよ。漁期12月から3月までだが、
冬場は天気は悪いし、シケルと動けないです
から。いい天気バンバン出れば、ひと月に
5、6回出る時もあります。もっと出れる時
あるかもしれん。漁から帰って、すぐまた出
る時もあるから。もう出れない時は、ひと月
に3、4回です。行って仕事やって戻るまで、
往復で3日はみないといかんですから。



喜翁丸(9.9ト)で、尖閣列島で40年近く漁している

先輩方の教え 最初に黄尾嶼から 最後に赤尾嶼

— これは尖閣諸島のどこで獲るんですか、沖ですか、島の周りですか。

漢那：シマガツオは回遊魚ですが、沖の魚ではなくて瀬に付く魚なんですよ。そんなに深い所にはいない、だから遠くに行かないで、皆島の近く、周りになります。

(海図を見ながら説明する) 宮古から赤尾は72から74マイルの間だから、魚釣島は106マイル位、黄尾嶼は103マイル位かなあ、黄尾嶼と南小岩、北小岩は大体一緒、トリシマというのは大体一緒、伊良部からすると、だから魚釣島は大体3マイル位は遠い。

この黄尾嶼も、魚釣島もそう、北小岩も、北小島から南小島も、赤尾島嶼も、もう皆島の近く、周辺ばかりで、殆んど島伝いで、仕事していますから。それに時期的によって、魚のいる場所、漁場があるんですよ。何十年も行っていると、一番先に魚が釣れ出すのはどこからと、大体分かるわけです。尖閣列島の島で、一番どの場所が先に釣れ出して、次の場所に行くとか、大体そういう順繰りがあるんですよ。だから、僕らが行くのは、最初に黄尾嶼ですねえ、僕らはコウビトウと呼んでますが、最初にそこに行きます。それから

そこが釣れ出すと、今度は魚釣島に下っていく。そして向う周辺でやるんです、魚釣島、南小島、北小島周辺で。で、ここがあまり釣れなくなると、今度は赤尾嶼に来るんですよ。この循環でやるんです。

— 今のお話ですと、魚の寄り方からして、最初に黄尾嶼に行つて。

漢那：そうです。して、あとは魚釣島周辺に戻つて行く。それで、そこがまたダメなら、今度は赤尾嶼に行くとか、大体そういう順繰り、淳繰りで回つてますねえ。で、大体、赤尾嶼でダメなら、もう大体時期は、終わりですねえ(笑い)。僕らの漁師仲間では大体それで仕事はやってます、だから、必ず先に行くのは黄尾嶼です。12月から行つて、大体3月までだから、一番先に黄尾嶼に行つて、そこでウブシュウを釣っていて、魚釣島付近に出るのは、大体旧正月近くになってからですねえ。



喜翁丸の甲板でのウブシュウ漁のようす

昔の伊良部の先輩方が、尖閣列島に行つて、こんな仕事のやり方をずっとやってきているわけですよ。これは先輩方の教えですねえ。だから、最初黄尾嶼にいなければ、ウブシュウは別の場所にはいないと、もう頭に叩きこまれていますから。大体当たっていますよ。それで、黄尾嶼に行つて釣つて、また釣れなくなれば、今度は魚釣島のどこかに必ずいるはずだからと、先輩達の教えの通り、大体その順繰りでやっていますから。魚釣島は大体10マイル位離れているから、1時間ちょっと走れば行けますねえ。

日本全国 ヤイト専門 伊良部だけ

— 先輩方のこの教えを受け継いで、今の伊良部のヤイト漁はあるんですねえ。

漢那：そうだと思います。沖縄県で尖閣列島に行つて、ウブシュウを獲るといのは、前は石垣からもいました。だけど、石垣は元々これが専門じゃなくて、石垣の船は底物一本釣、アカマチの一本釣、それをしながら、時たま曳き縄で、これを獲つて持ち帰っていたという位でした。伊良部の船は、もう別の仕事をしないで、ウブシュウを一生懸命、朝から晩まで釣っているわけですから、おそらく日本全国で、この魚を、ウブシュウ・ヤイトを専門にしているのは、伊良部の船だけだと思います。前は池間もいたけど、今は池間は尖閣列島では殆んどやっていません。戦後60年間ずっとやっているのは伊良部だけです。僕らの伊良部の先輩達は、尖閣列島を拠点にずっと仕事をしていましたから、台湾に行っていた皆さんも、台湾からは向うに来ておたはずですから、突きん棒で。それで、尖閣列島には、いろんな魚が、ウブシュウが、いっぱいいると殆んど分かっていたはずですよ。だから台湾から帰ってきた皆さんを中心にそれを獲りに行く、そういう流れになったと思いますよ。大体台湾から帰ってきた先輩の漁師は、殆んど向こうを専門にしておたです

から。僕もウブシューを獲りには、この先輩達の何名かと、一緒に行っていました。もう皆亡くなっていますけど。

先輩達 尖閣で 相当頑張ってきた

— 伊良部の先輩達は、尖閣行って、相当苦労してきたでしょうねえ。

漢那：先輩達は昔から尖閣列島に行ってやっているし、やっぱり向うの魚のことも、島のこともよく分かっていると思いますからねえ、先輩達は、戦後まもなくから、もう向こうをねぐらにして、小さい船でも相当頑張っていました。結構あとから船は大きくなりましたけど、当時は2ト位の小さな船で、シケで大変な時にも頑張っていましたねえ。だから伊良部の船は、向うのリーフに眠っている間にぶつけて、壊してしまう。そういった事故はありましたが、人身事故というのは殆どないです。伊良部の漁民は、それだけ向こうを知り尽くしているということです。もう先発者として、小さい船で相当頑張って、そうやって今まで生き延びてきてますから。もうすごいですよ、エンジンがかからんといつて、あの乾電池を何10個もつないで、エンジンかけたりしてねえ(笑い)。島の浅い所で、島傍にアンカー入れますから、そしたら潮が変わると、もうぶつけそうになりますから、そういった所で寝泊まりしてねえ(笑い)、そんなのがずっとですから。

最初行った 38年前 曳き縄で

— 最初に行ったのは、何年位ですか、

漢那：僕は独身の頃から行ってます。地元の水産高校を卒業して、静岡県焼津の方でマグロ船に5年位乗っていたんですよ。23歳には島に戻って、すぐ尖閣列島は行ってますから。それから南方漁業も2ヶ年は行って、ソロモンとかキャピアンとかに。それ差し引いても37,8年位は行っています。僕は復帰前(本土復帰・1972年)に免許をとって南方へ行ってますから、最初に行った頃は復帰手前ですねえ。あの時は曳き縄だったから、向うに1週間位泊まってやることもありましたよ。シケている時に、仕事はできないから、島陰に避難して3日位船で眠っている時もありました。

当時はもう魚はいっぱいいましたから。どんな魚もいた。ホンガツオも、カジキもいっぱいいた。今はウブシューは2ト釣れたら大漁だけど、あの頃はもう4ト、5トも釣れましたねえ。海は全く違います、全然違います。底魚も獲れたんですよ、一本釣りする魚も。

尖閣列島は漁場がよいから、向うは大陸棚だから、日本全国の船が来ていたはずですよ。鹿兒島、宮崎、長崎辺りからも来てました。何隻か船団を組んで仕事やっていたのも見えましたよ。集魚灯で魚を集めて仕事しているから、もう灯は煌々として島みたいでした。

台湾船 日本語通じた

— こんなに大勢の船で賑わっていて、シケると相当の漁船が避難しに来たんですよえ。

漢那：そうです。天気が悪くなると、あの魚釣島の裏側に何10隻と入ってくるんですよ。

台湾の船から、本土の船から、八重山の船とか、沖縄本島の船とか。台湾の船は大体見るとすぐ分かりますねえ、形がこう曲がって反っていますから。当時は今見たいに保安庁は、向こうは警備していないから、台湾の船が来ても別に、漁師は文句は言わなかった。台湾船の50歳以上の方は大体日本語を話せたから、潮の加減が悪くて魚の動きが悪いと、休んで飯食って、近寄ってきて、煙草あるかあとか、話し掛けてきよった。それに伊良部には、台湾から帰ってきた漁師が、先輩達がいたから、彼らは、大体誰かが分かる、お互いに知り合いだったということもあってねえ、それでポンカン酒といったかな、台湾の酒とか、煙草とかを貰ったり、上げたりして、親しくやっておったんですよ。

復帰後、領土問題が出てからは、保安庁の巡視船が警備してますねえ。今は僕らが行くと、もうこれは伊良部のどこの船と分かっているんですよ、いつも行ってますから、大体船の形見て、で、朝方に尖閣諸島に近付いて行くと、必ず警備船が寄って来て、必ずチャージライトで確認して、パーツと離れていきます。つい最近は、伊良部漁協の何という船が、何時に出港して何時位に着きますよと、連絡するように心掛けているんです。

台湾船は、尖閣列島には、昔のようにもう殆んど入れないから、台湾船が入ると警備船が走っていくんですよ。追っかけてねえ。彼等は島に絶対寄せ付けませんから。

— 台湾船は、尖閣で、何を獲っていましたか。

漢那：あの当時はいろいろ獲ってましたねえ。今は尖閣辺りだと、台湾船は大体がサメですねえ。ヒレ(フカヒレ)が相当値打ちがあるわけですから、今でもやっていますよ。保安庁の目を隠れて、巡視船が魚釣島にいたら、それから離れた所で仕事やる。赤尾嶼なんかでもよくやっている。今でもやっていますよ。あれは道具が違います。大きなマグロを釣っているみたいにしてているが、島の近くでは、そんなに大きいマグロは釣れないですから(笑い)。だから分かりますよ。見ているとサメ(餌)を食わせて、サメを釣って持ち揚げているから。そういう風にサメ専門にやっている船もいるんですよ。あの専門の船は何トあったかなあ、39ト位か、結構大きいはずですよ。最近台湾船は殆んどファイバー船です。サメを釣ったら、ヒレを取って、身も全部持っていきますよ。今はサメの身は結構値打ちものだそうで、色々すり身に使うみたいです。

台湾船は、黄尾嶼とか、赤尾嶼とかでやっていますよ。巡視船がいるのは、魚釣島中心ですから、向うには行かないです、ちゃんと分かりますから。時たま、保安庁のリコプターとか、飛行機が巡回して廻っていますねえ、それでも上空から、仕事しているのが見つかったとしても、彼らは巡視船が来る間に、パツと逃げますから、島から遠く離れた所に。彼らだって生活がかかっているはずですからねえ(笑い)。

赤尾嶼で 米軍演習 遭う 目の前に照明弾

— 復帰前後に行っていたなら、米軍は、黄尾嶼と赤尾嶼で爆撃演習してますねえ。

漢那：はい、米軍演習ありましたよ、一番演習が多いのは赤尾嶼ですよ、いまはやって

ないが。当時は組合から連絡がありましたよ。いつからどこで演習やるから何日間は向こうに行くなという通知が。だけど、当時はねえ、海をやる僕等も、漁業仲間の皆も、これにあんまり敏感ではなかったさあ、だから知らないで行って、島の周辺で仕事やりましたねえ、夜に夜釣りをやっていたら、飛行機が飛んで来たんですよ、米軍の演習機が。

最初は注意するよ。サーチライト照らして、ぐるぐる廻って、「行け！」と、「島から離れろ！」という合図してねえ。だけど漁師は魚を釣りだしたら動けなくなるわけよ、急には。それに船はすぐに走って逃げられん。飛行機みたいにはいかんから。飛行機は速いよ、すぐまたこっちに廻ってくるから。ああまた来たなあ思っているうちに、照明弾を落とすんです(笑い)。もう離れても遅い。前で上がってパーと明るくなる。そして少し離れた所に行き仕事していたら、また来る、また来たあと思って、そこから逃げると、また照明弾を落とす(笑い)。またパーと明るくなって、また逃げてねえ(笑い)。

飛行機は、何分か、何十分かしたら、必ず廻って来て、パー、パーとやるから、これの繰り返しですねえ。もう演習だから何回も来ますから、こんな状態で仕事していましたねえ。もうアカオでは何回も経験しています。黄尾嶼ではないけど。だから別に照明弾くらいと思っているが、島の中心に落としている積もりだが、島でなくその周辺落ちることも結構あるですよ。飛行機からだから(笑い)。

全盛時代 ヤイト船 7,8~10 隻以上 今は2 隻

— いろんな体験もして、今日までヤイト漁を続けてきたわけですねえ(笑い)。

当時の尖閣諸島は、相当魚がいたわけですねえ。

漢那：そうです。今と比較にならないです。魚はいっぱいいました。カジキもすごかった、多かったです、少し北風になるとその時には水面に浮くわけですよ。もうヒレ見えて、何10 とヒレ見えて、カジキが走り廻っていた。もうアカマチとか、マーマチマチとかの底魚もいっぱいいた。イソマグロというか、トカキンとってあんな大きいのも釣ってましたねえ。あれも島伝にいる魚だからねえ。あの時は曳き縄で何日か泊まっておったわけですから、それを夜釣りで、相当釣りましたねえ、アカバーとってカンパチも。カツオはホンカツオも釣れましたよ、大きなカツオが。あの時は、この近海でも、どこでも、大体7キロから10キロの間、こんな大きなカツオが、もうカツオを釣りに行くんじゃなくて積みに行くみたいに、獲れたんですよ。尖閣列島もいい漁場でしたけど、結構獲り過ぎたんですかねえ(笑い)。温暖化の影響も、何も、あるかもしれんが、今はどこでもそうですから、魚はもう少なくなってますねえ。

— あの当時に、伊良部から、尖閣諸島に、冬場ヤイト漁に行っている船は何隻いましたか、今は何隻が行ってますか。

漢那：あの当時、全盛時代というは7,8隻かなあ、今は2隻だけです、僕の喜翁丸と久高明人さんの八幸丸だけ。伊良部には、夏場のカツオ一本釣は3人しかやっていません、

奥原栄一さんと久高明人さんと私の 3 人だけ。奥原さんの昇栄丸は、冬場は尖閣列島に行っていない。乗組員が殆んど製糖工場で働いていますから。数年前まではよく行って、一緒に漁していましたが、今はもう久高さんと僕の 2 人だけです。全盛時代には 7,8 隻はいたと思いますよ、当時はカツオ船は殆んど行っていましたが、カツオ船だけじゃなくて小さい船も行ってたねえ、10 隻以上はいたかもしれないですねえ。

遠出しない パヤオが原因

— この 2 隻が釣って来なければ、ウブシユウはないですから、大変貴重なものですねえ(笑)。何で、尖閣諸島に行く船が少なくなったんですか。

漢那：それは漁船も少なくなったし、魚も獲れなくなったことからです。大体伊良部の船が少なくなった原因は 1 つはパヤオですよ。

遠出しなくても安心で、近くでパヤオがあって、そこでまあ漁ができますから。そんなに大型でなくても小型でも、パヤオでは仕事ができますから。沖縄県でも伊良部はすごいですよ。パヤオ発祥の地ですから。だから、結構パヤオの水揚げが多い。昔はカツオの水揚げが多かったけど(笑)。今はパヤオの水揚げはカツオ、マグロです。それで遠出しなくなりましたねえ。だからパヤオがなければ、やっぱり遠出もして、尖閣列島辺りで仕事もしないと生活はできないわ



伊良部はパヤオの発祥地、水揚げ大半はパヤオに依存、カツオもマグロも獲れる

けですからねえ。それに装備の発達もありますねえ。昔は、双眼鏡を見て、カツオの群を探するのに鳥を見つけていた時代は相当遠出していたですよ。今は海鳥レーダーといって、鳥を探すレーダーがあるんですよ、結構高い 500 万円位しますが、僕らはみんなそれを取り付けて仕事するからあんまり遠出しない。これで大体 1 時間位先をレーダーで見えていますから、向こうに鳥がいるか、鳥がいる所には魚がいて、鳥がいないとそこには魚はいないから、それでぐるっと廻って行く。双眼鏡の時代は、真っ直ぐ、何時間も走ったりして、大体赤尾周辺までは、赤尾嶼が見える所までは、カツオ釣りにずっといていたんですよ。だからレーダーのお陰で、装備のお陰で、遠出もしなくなりましたねえ。

尖閣周辺 パヤオ難しい 海浅く 潮速い

— パヤオから水揚げが多いんでしたら、尖閣諸島近くにパヤオを設置したらどうですかねえ。魚も獲れなくなったといいますから。

漢那：向うは、入れてはないけど、話はあったんですよ。もう、できれば向こうにも、パヤオを入れて貰おうという話は、ウチの組合仲間でやりましたが、向うは水深は浅いし、潮の流れが速いから、とてももたないですねえ。魚は付くことは付くけど、潮が速く

て、浅いもんだから、流れていく率は高い。それに一番の問題はパヤオは管理ができないんです。入れてもねえ。あまり遠くに入れたら、県外船が来たら分からないから、小さい船では遠くは行けないし、本土の大きい船はシケの時でもやりますから。もう平気だから、とても管理ができません。ウチの組合がやっているのもそうですよ。少し遠くに入れて、魚一匹も釣れずになくなったとかねえ。また以前、宝山ソネに、水産庁が試験的にパヤオを入れたことがありました。結構魚は獲れたもんですから、向うにパヤオ入れようじゃないかという話になったんですが、遠いから、毎日行けないから、管理ができません。入れてしまうと、逆に他所の船を呼び寄せてしまうから問題になってしまう。だからやってないですねえ。尖閣列島と同じいい漁場ですが。

儲ける漁業でないと 後継者出ない

— 今は漁業環境は厳しく、どこも後継者がいなくて、衰退して行ってますねえ。

漢那：このまま衰退していったらもう大変ですよ。漁業も農業も何でもそうだけど、やっぱり儲けないといかん。儲からないから少なくなっていくわけさあ。この仕事はどんなにして儲かる仕事にするかということです。儲からない仕事は後継者が育つわけがない、だからこの仕事がどんなにして儲かっているかということ为先輩達は頑張っって示さんといかんです。儲かる漁業をしないと後輩は育たない。

一番大事なのは、県も国も、市もそうだが、漁業育成・振興のための補助とか体制を作ってもらわんといかん。それさえすれば、頑張っって、儲かる仕事をやって、後輩は、後継者は育つさあ。何も、どこも面倒みてくれない仕事であれば、後継者が育つわけがないですよ。海だって考えたら、尖閣列島もそうだけど、近海もそうですし、海は資源がいっぱいですよねえ、目に見えないのが幾らでもありますから、頑張れます。

ここ離島では販路も大きな問題で、あっちこっちの市場、本土市場とかに売れる体制をつくるのが課題です。僕の場合、金秀(県内大手スーパー)と契約してます。金秀が必要なものは金秀に出して、あとはこっちの仲買人に、だから、今は売る心配しないで、一切魚を獲ることだけを考えていますから(笑い)。だから、尖閣列島にウブシュウを釣りに頑張っって行ってますよ(笑い)。

後進に対する義務 尖閣で安心・安全な漁業環境を

— そうですね(笑)、で、尖閣で安全操業するためには、避難港は必要と思いますか

漢那：もちろんあった方がよいですよ。僕らは伊良部町時代に要請決議を出しました。政府は日本領土というなら、安全に操業できるよう港を造ってほしいです。天気が悪い時はそこに避難できるわけですから。向こうはアンカーを沖の方に下ろす。潮の流れが速くなると船が流されて座礁してしまうんですよ。そういった事故も過去に何度かあります。國吉守夫さんも、久高明人さんも、それで船を沈めてしまっている。いろいろ外交問題も言われるかも知れないが、早くきちんと整備して漁民が安心して操業できるようにしても

らいたんです。

— 今尖閣諸島は上陸禁止措置がとられているわけです。漢那さんをはじめ、尖閣に出漁しに行く方がいなくなってしまうたら、本当の意味で無人島になってしまいますねえ。

漢那：本当にそうです。いろんな方にも言われました。「漢那さん、伊良部の漁民が行っているから、尖閣は日本の領土なんですよ」と、確かにそうですよ。尖閣に行っても仕事もしない。何もしないで領土だと主張しているだけだったら何の意味もない。私ら伊良部の漁民は実際に行き漁をしているわけだから、尖閣が日本の大切な領土であるという証かもしれません。

— 最後に、一言お願いします。

漢那：やっぱりですねえ、私らの時代。私もあと何年漁業が出来て、その間にあと何回尖閣列島に行けるのかどうかは分からないけど、親の時代から先輩たちの時代から尖閣列島まで行って魚をとって、我々は生活して、子供達も大きくしてきている。子供達の時代があるんですよ。ちゃんと子供達に、後輩たちに、この良い漁場を残して、安心して仕事が出来た漁業環境や条件を、僕ら先輩が、造り上げて、整備して残しておいてあげないといけない。これが一番気になってるんですよ。これだけは皆さん取材に来られる方に強く言うわけです。今で終わりじゃない、私らは何十年もここで魚を取り続けてきたわけです。私の長男竜也(39)は、島に帰ってきて今一緒に船に乗っている。そういう子供達のためにも大事な漁場を残して、そこで安心して仕事が出来ると環境を残してあげないと。

— 確かにそうだと思います。これは私達世代の後進に対する義務ですねえ。

今日は、大変ありがとうございました。

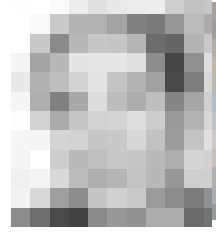


喜翁丸乗組員 左から漢那竜也(39)、漢那一浩(62)、池村武弘(55)、伊舎堂武雄(70)、友利厚(59)、浜川輝一(58)の各氏。(宮古毎日新聞 2012.12.29)

友利 哲夫 ともり てつお (宮古島漁協)

1938年(昭和13年)、宮古島平良に生まれる。75歳(2013年時)。

氏は27,8歳(1965,6年)の頃、5トンの船で尖閣諸島に出漁し、2,3人で曳き縄すれば、3,4時間で魚は500キも獲れ、往時は魚の宝庫だったことが分かる。ところが魚は売れず大欠損、尖閣への出漁を断念、小船に転業、以来追込み漁業に勤しんでいる。傍ら、氏は青壮年漁業者リーダーとして、中学生に追込み体験を、20数年に亘り、実地指導し、漁業振興に努めている。



曳き縄で 尖閣へ アカオ 爆撃演習で 行かない

尖閣列島での漁のことなら、45年前の話なら分かるはず、今のは詳しくないよ。

尖閣に最初に行ったのは、27,8歳(1965,6年)の頃かな。いやカツオ船ではなく、殆んど曳き縄で行ったんですよ。その前に僕はサバニ4腹位を持っていたが、それを取っ払って、5トンの中古船を買ってきてねえ、これは元々は小さなカツオ船で、喜翁(きおう)丸という船で、伊良部の人がやっていたもの。今でも向こうでシマガツオ(ソーダカツオ、ヤイト)を獲っている漢那一浩さんねえ、あの人のお祖父さんの船だったと思う。この5トンの船で尖閣にも曳き縄しに行きましたよ。もう、この船は狭く、向こうへ行くのに支障きたしていたから、しばらくしてから、大きい船に、10トンの船に買い換えて、それでやりましたよ。そしたら、アカオ(赤尾嶼・久場島)でねえ、米軍の爆撃演習があって、もうアカオは立ち入り禁止みたいになって、それで、向こうにはあまり行かなくなりましたねえ。

僕らが漁している時にねえ、爆撃演習に遭ったのは、たまたま1度だけねえ。軍用機が飛んでいるのを見たが、実際向こうで演習しているのは見ていないさあ。アカオの周辺で殆んど演習やっておったみたい。だから、漁協から爆撃演習があるから危険だから近づくなと連絡があって、今みたいにテレビはないから、殆んどラジオでねえ、皆に連絡が行くから、僕らも、これ聞いたら危険だから、アカオには行かないさあ。

5トンの船 8~9ノット 池間・尖閣 往復で26時間

尖閣も、アカオも、向こうは漁場としては、もう宝庫とっていいですよ。

尖閣は、宮古からは距離が遠い、八重山辺りからはそんなに遠くないけど。今の船だと速力が10ノットから15ノットは普通だが、あの頃の船は8ノット、速いので9ノット位だった。

それで、僕らの船で、アカオまで10時間位かかって、またアカオから尖閣までは3時間位はかかったかな。あの頃は、池間から明け方の2時、3時頃に出て、翌日の午後3,4時頃には尖閣に着いたから、それで13時間、もう往復だけで26時間はかかったですねえ。

でも、向こう着いて、そこで漁している時間は僅か3,4時間、だから殆んど往復している様なもん。それに往復するのに、アカオは潮の流れは殆んど北廻りだから大変ですよ。与那国辺りからだったら、殆んど黒潮の流れに沿って走るから速いけど。ここ(宮古島)から行ったら、流れに逆らって走るから大変です。まかり間違ったりで、今の船でも、例えば

GPSでアカオへ直線で、真っ直ぐに行っても、おそらくそのまま行くと3時間位は北に流れている。GPSを頼って行ったら、向こうでアカオを見る時点では、おそらく遥か北側へ流されている(笑い)。だから、もう速い船では2度位南寄りで行かないと、向こうに、まともに着けないですよ。なんと3時間位ロスしている、3時間以上ずれている、まして、あの頃は、今の船のスピードの半分だったから、航海は大変でしたよ、往復だけでも。

2、3名 3,4時間して シマガツオ 500和 水揚げ

あの5トンの船で行って、2人で、多い時は3名で、相棒のひとは那覇で78歳なる人ですよ、狩俣昭任さん。もうひとは僕の1級下で、根間ヒラヨシさんだったねえ。

で、尖閣行く時は、池間(漁港)からです。僕らは殆んど単独で行ったですねえ、池間の船も行っていましたが、向こうの船は速いさあ、大型だから、カツオ船とか、曳き縄船とかねえ、ちょこちょこ現場でよく見たんです。たぶん1泊やるとか、2,3泊とか。

僕らは殆んど日帰りの形でやっておるもんだから。アカオへ行くだけで10時間、尖閣へは13時間位かかりますが、現場で漁するのは3時間、長くて4時間ですよ、それで300キロから500和、500和が普通です。あつという間に、その位は獲れましたねえ。

もう魚が食ったら船に揚げるのが遅い位で、手繰りで、手袋で、揚げるのが大変でしたよ。殆んどシマガツオ、ここでウブシューという奴です。島の近くで、周りで。それがもう8割方、曳き縄ですから、だから1つの縄に4本やれば、3匹、4匹はかかりましたねえ、その頃は、縄を下ろすと同時に食い付いて。今はもうそんなにいない見ただけど。

アカオとか、トリシマとか、今問題の魚釣島とか、行っても、あの頃は島に上陸するという事はないから、殆んど島の周辺をぐるぐるぐる廻って、曳き縄やってねえ。5トンの船でも結構獲れましたねえ。

シマガツオ 釣れても 売れない

そのあと10トンの大きい船に買い換えてねえ、それに流し網を、当時の千ドル近い流し網を購入して、やりましたがねえ。それでシマガツオはいっぱい獲れたけど、全く売れん。あの頃は全然売れないねえ(笑い)。シマガツオは脂が多くて、鰹節にならんから、また物も小さい、大きなもので3和位、大体20~25センチ位しかない。大掛かりな商売にならないから売れなかったかもしれん。しばらくしたらアカオで米軍演習があつて、もう立ち入ってはならないとってねえ。20海里以内に、当初は20和以内となっていたけど、それがどんどん広がって、あとは立ち入り禁止になっていました。もう、漁も思うようにできない、魚も売れん、あまり儲からなくてねえ、1年位は続けたかなあ。

それでも全部二束三文で売って、船も、網も、もう全部売り払って(笑い)。

網って高価ですよ、1和以上(重量)の網だから千ドル近かったから、もう大欠損しましたよ。魚もねえ、宮古は人口が少ないでしょう、今もそうですが(笑い)。あの頃の15セントでも売れないもん。あの頃の大工の棟梁が、僕の実家の兄貴も大工の棟梁やっていたが日当

が 80 セント位だからねえ、あれで何千ドルの大欠損、大赤字ですねえ。

僕の人生の最初の大失敗ですよ、尖閣の魚を狙ったばかりに、(笑い)。

僕も若かったから、また一からやり直しですよ(笑い)。あれからは大きい船はやってない。あの時往生したから。そのあとは船が小さいから、尖閣には行ってない。殆んど 5 年で切り替えて、今置いている奴が 2 トンで 12 腹目ですねえ。

夏休み 中学生に 追込み体験 指導

とにかく尖閣では、相当魚が獲れましたよ。まあ、あの頃はどこ行っても獲れたがねえ。ここ宮古周辺でもあの頃はそうだったです。僕は今 40 年位追い込みをやっているけど、23 歳からやっていますが、今は大変ですよ。この狩俣でもやっていますが、グルクン(タカサゴ)の追い込みを、そんなに獲れないですねえ、6 名から 8 名で、1 日 300 疋位かな。



追込み漁業を体験中の生徒達、上達の早さに驚かされる

今僕達は、生徒達に、夏のこの時期に追い込み体験をさせているが、狩俣中学校の生徒達に、今年で 23 回目になるねえ、もう時期になったら、生徒はひと月の特訓です。プールから始まって、海で泳いで、潜

って、大変ですよ、もう女の子なんか 10 メートルも潜るんだから。10 何メートルも、網の高さ、袖網の高さが大体 7 メートルだから それだともう普通に潜ってできますから、中学校の生徒達は上達は早いですよ。また、追込み体験をしたお陰で、漁業に対して、興味を、関心をとても持つようになりますねえ。

尖閣で トビウオ追込み

だけど、追い込みといっても、アギヤーは、泳ぎながらスルシカー(魚脅しの縄)で、深い所にいる魚を網に追込む。チナ(縄)カキエーは、表層を泳ぐ魚が相手ですから、少し浅い所でやりますねえ。生徒達にやらせているのは、チナカキエー追込み体験のようなものです。

石垣にいる漁師が若い頃に、尖閣行って、チナカキエーをやろうとしたと言っていたんですか。いや、尖閣でチナカキエーはできないはずですよ。向こうでは、おそらく無理でしょう。まずリーフが短い、そして殆んどストーンと何 10 メートル、何 100 メートルも落ちている。

ああいう所ではまずできないと思う。流れが 7 マル、8 マル、だから潮の流れを考えると向こうでは無理ですねえ。ただ向こうでできていたのはトビウオ漁、それは盛んだったなあ、ダツ漁もねえ。

僕らはトビウオ漁をやっているのを 1 度だけ見ましたよ。冬の時期 3 月頃にやっているのを見て、聞いたら伊江島から来たと言っていたかな、それは定かでないけど、とにかく

本島の方がねえ、母船だけ来ておったから。結構獲れたようでしたねえ。僕は中身を見てないから規模は分からないけど、母船だけで船が2艘来て廻って曳き船来ていたから、おそらく人数は20名は超えていたと思う。大体1晩、2晩でなんか泊まり、2泊位して母船も満載して帰っていくという話だったから、相当獲れたでしょうねえ。

尖閣で揚げたサンゴ 触ると 痒かった

僕は、5トの船を持つ前、サンゴ船に乗って尖閣へ行っただけがあります。25歳の頃(1963年の頃)かなあ。あの頃は大変なサンゴブームです。池間にはサンゴ船が5、6艘、もつといったかなあ、いましたねえ、もうカツオ船まで、サンゴ網を載せて、サンゴ漁をやっていた。

もう一時は、池間がサンゴ船は1番多かったかもしれない。僕が乗ったサンゴ船は小さかったですよ。13ト位、船主は与那嶺チョウショウさん。サンゴ網入れたのは殆んど宝山ソネだが、尖閣でもやりました。魚釣島の東側から行ってアカオ向けて流したさあ、ところが1時間やると、揚げて戻るには約2時間かかる。元に戻るのに、流れがもうとにかく速くて、で、最初のひと網が結構掛かったんですよ。15疋位、戻ってドラムを2本縛って、目印にアンカー下ろすわけ、ところが、水圧でドラム缶がペシャンコになって全く通用しない。



サンゴブームの頃はカツオ船まで魚釣らずサンゴ漁に走った。サンゴ陸揚げ光景 (中村幸裕 1963?)

そんなこんなで、尖閣では3日やりましたね。

丁度、僕達がサンゴ網を曳いている時に、あの久米島航路のみどり丸が遭難して、もう台風状態だからすぐ帰ったんですがねえ。もう3日やってダメでしたねえ。

揚がったのは全部で30疋位ですか。サンゴは揚げてから、網に引っ掛けているから外さんといかん。それで、サンゴに触るともう全部刺すんです、向こうのサンゴは。もう痛くて、痒くなる。よだれみたいなものがくっついて、それに触ると、痒くなって、もう疥癬ですか、ジンマシンみたいになって大変でしたねえ(笑い)。

採れたのは殆んど桃色の奴です。まあ、たまには100疋に1疋の割合で白い奴があります。丸い一番高級というボケサンゴが、でもそれはなかったですねえ。

あの頃は大変ですよ、もう帰って来て、船に置いてあったらバールでダブルをこじ開けて、サンゴが盗られる盗難事故がよくあったなあ(笑い)。盗られんように5寸釘を打つさあ。それでも抜いて持って行かれたと(笑い)。もう大変な時代だったねえ。僕はサンゴ採りは半年しかやらない。もう分からないから辞めたいと言って乗らなかつたけど。

船チャーター マッコウ ハマシタン採りに

僕らは島に上陸しなかったが、尖閣に庭木になる木ねえ、マッコウ(ハリツルマサキ)とか、ハマシタンとか、植木を採りに行った話を聞いたことはある。僕の4期後輩位がそれを採るといって船をチャーターして行ったという話を、魚釣島に、復帰前のことだが、その島まで行ったけど、ところがなかなか簡単には上陸できない、前にカツオ漁やっていた頃の入り江があるが、そこはちょっとシケたら入れない。だから、シケてなかなか上がれんから、もう戻って来た話を聞いたけど。宮古ではハマシタンは特に多い。昔はこの周辺にあったけど、今は全くない。

マッコウも、ハマシタンも、盆栽や植木としては最高ですよ。(※編集子曰く、宮古観光協会の方のお話だと、どこかの家に行った時に、庭の盆栽ですごい見事なハマシタンが飾ってあって、これどうしたのと聞いたら、どうやら尖閣から持ってきたらしいとの話でしたが・・)、

ああ、それは間違いなく尖閣から採ってきたものでしょう。僕は見たことないけど、結構大きいハマシタンがあるという話だ。ああ、尖閣から持って来たものは宮古のどこかにある。間違いなくありますよ。その専門がいるのに、僕らの後輩たちがチャーターして行っている位だから、6人位で、それ採りに。大体狩俣の人達かもしれん。今西銘に住んでいるねえ、尖閣から持って来た植木があるとすれば、おそらく西銘の方じゃない。盆栽は多いですよ、狩俣には。



魚釣島北西側の隆起サンゴ礁上に自生するハマシタン (ミズガンビ)群落。絶滅?して今は貴重 (新納義馬 1963)

漁師が安心して 漁行けるようにしてほしい

今は伊良部は尖閣に行ってますがねえ、あの頃は池間が主流ですよ。伊良部の船はあまり見なかったねえ、池間の方は沢山いました。僕が知っているだけでも6人位おったけど、その方達は皆亡くなってねえ。殆んど元はカツオ船の船長とか、ああいう人達が、もう冬になったら向こうに行って、夏場はここにいないもんだから、それで冬だから売れると思ったらそうでない。全然売れんですよ、ここでは消費は知れてるから(笑い)。

あの頃は一本釣りといって底釣りは近海のリーフでねえ、ソネで殆んどやっていた。

向こうにはたまにしか行かない。先月ですか、あの尖閣の方に船が交代で行っているさあねえ。(※註、2011年度外国漁船被害救済事業の一環で) で、そこで一本釣りやっていたけど、結構釣れている話だったからねえ。大体100疋、200疋位釣って来てあった。

1晩泊まりでぐるぐるやって、晩のひと時でねえ。昔は八重山からも、沖縄からも、よく行っていたが、最近はあまり行ってないから、魚も大きくなって殖えているかも。(笑い)。

今、東京都が尖閣購入するとの話あるけど、どうなりますかねえ、それはやった方がいい。昔から日本固有の領土ですから。僕は漁師として、今の政府の弱腰に腹が立ちますよ、正直な話。尖閣へは八重山より宮古の方が盛んさあ、とくに伊良部がねえ。

だから今見たいな問題が起きると、皆もうおちおち漁にも行けない状態さあねえ。

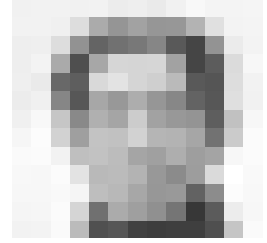
何とか安心して漁に行けて、安全に操業できるようにしてほしいですねえ。

(了)

与那嶺 正雄 よなみね まさお (池間漁協)

1933年(昭和8年)、宮古島平良池間に生まれる。79歳(2013年時)。

1950年の冬、伊良部漁民が尖閣諸島近海でカツオ漁を行い、南小島に仮工場を設けて、鯨節を製造していた。ほぼ同じ時期に、池間漁民も、魚釣島で鯨節を製造をしていたという。今回、氏の話からこの事実が明らかになった。17歳に船の飯炊きとして尖閣諸島に連れて行かれた。島に上陸する機会を得、魚釣島の仮工場の様子を実見した。当時の池間漁民の関係者は亡くなっている。氏が63年前の事実を語る唯一の生存者である。



17才 飯炊きで 尖閣へ

僕は17歳の頃、飯炊きで尖閣列島へ連れられていった。お正月前だったと思うけど、11～12月頃だったか、宮古には冬はカツオはいないから、冬は向こうへカツオ漁に行った。

カツオ船は池間の宝山丸、船主は玉寄正雄さん。宝山丸という船は戦前からの船で和船形だった。ト数は昔の30ト型というから30トだったかも、よく分からない。宮古でも、カツオの大漁船では有名で、戦後も相当現役で活躍していたねえ。

この宝山丸で向こうに行った時は、乗組員は30名位だったと思う。その中で船にいた連中は20名位かなあ、魚釣島でカツオ節を造るから、工場の連中は島に下りていたから。僕は船におったが、その時は子供だから何もできない、皆の飯炊きや雑用係りしていた。先輩たちが海に潜って、小魚を追い込んだりする時は、エサ採りも手伝った。また生簀に潜って網ですくってエサを撒く練習もやって、カツオを寄せて釣る手伝いなんかもした



池間のカツオ船が並ぶ。左端が宝山丸、戦前からの船で船首にミヨシが突き出ているのが特長。有数の漁場宝山ソネを発見。(「沖繩池間島民俗史」より)

が、一番年下で子供だったからあまり憶えていない。カツオのエサ採る時は、船の連中は機関帳と船長以外は全員総出だった。もう船には最低限の人しか残らないから。エサの採り場は、あの一番大きな島、魚釣島の周辺でやりおった。エサはバカジャコの仲間、スルルーグワ(キビナゴ)よりはずっと小さい小魚だった。

エサは少なく、カツオ いっぱいいた

朝日が出たら、すぐエサ採りを始めて、皆で潜ってエサを集めて、サバニを下ろしてエサを網で採ってねえ、真冬の時期だったから、ものすごく寒いよ。もう裸だから、今みたいに(潜水)スーツがない時だから、ドラム缶を半分に切ってそれで焚き火してねえ、潜ってエサを集めて、終わったら、急いで火に当たった。でも小魚はそんなにはいなかったねえ。

バケツみたいな杉板で作られている桶があるのだが、オーキといって 20 リッター位のもので、エサを採ったら、すぐそのオーキに入れて船の生簀に移す。結局オーキの 2,3 杯しか取れなかった。だけど、カツオの群は大変多く来ていたから、いっぱいいたから、少しのエサでも大分釣れた。カツオの釣り場は魚釣島の表側、南側ねえ。南小島と北小島の周辺と、魚釣島と南小島の間いっぱい来ていたんですよ。島の周り、その近くで釣っていた。釣れたカツオは、本カツオです、シマガツオ(ヤイト、アブラカツオ)は混じってなかった。



池間カツオ船のエサ採り光景(「前場民俗史」より)

鯨節工場は、島の南側

『伊良部町漁民史』には 1950 年伊良部のカツオ船「かもめ丸」が、南小島でカツオ節を製造した旨が記載されている。これを見て)。その時はこの佐良浜(伊良部)の人達と一緒にですよ、私ら池間の人達が魚釣島でカツオ漁して、カツオ節製造していた時に、佐良浜の連中は南小島でやっていたと、先輩たちから聞いていた。佐良浜のカツオ船は金光丸だったと憶えている。

私は船にいて、たまにしか島に下りなかったもので、魚釣島の(宝山丸の)工場はよく分からない。昔の栈橋見たようなものがあるねえ。(旧古賀村の堀割を指す)。

私は栈橋の所に上陸したことはないが、船から廻って行った時に、その栈橋や石垣の形のものが見えていた。工場はそこにはない。その栈橋からもっと南の方にあった。工場から栈橋までは何百メートルも離れている。工場のある所は、島の表側、南側の海岸で、大きい岩見たいところがあるが、すぐ後ろは崖になっている。後ろは急に崖だから海岸はそんなに広くない。



魚釣島南側の西端海岸、工場はここに？、断崖絶壁で海岸は狭い。古賀氏の旧工場は北側あった。(新納義馬 1979)

木を伐りだし、屋根は、テントカバーで

カヤブキ小屋も何もなかった。山から大きな木を伐ってきて、あれで工場を造っていたようだ。柱を組んで、屋根は、テントじゃない、大きなカバーよ、アメリカのテントカバー(米軍野戦用天幕シート)を被せて、雨が入らないようにしていたが、あまり丈夫には

見えなかった。工場に何名いたかよく分からない。陸にあまり上がらなかったから。

その時は旧 11、12 月で海が荒れている時だからねえ。でも少なくとも 7、8 人位はいたように思える。同じ宝山丸だが、船の連中と工場の連中とは違っているから、

仕事も一緒じゃないから、誰の名前も知らない。池間の人とか、また別の島の人とかが混ざっていて、製造のやり方の上手な人なんかが行っていたはず。

魚釣島の工場は水はいっぱいあったよ、工場のある所の絶壁の山から水が流れていたから、飲み水や食事は、その水で炊いた。島にはあちこちに壺みたいな池（海岸のタイドプールの意）が多くあった。そこには海から上がった潮水と流れてきた雨水が混ざって溜まっていた。カツオはあれを汲んで来て炊いていたと思う。

食料は米や芋を船で積んで持ってきていた。

もうどの位おっても大丈夫ということで、自分らで炊いて食べていた。

魚釣島には芋はいっぱい植えてあったな。

カツオ炊きに使っていた釜も、カマドも、工場の中はよく分からない。僕は見たはずだが憶えていない、製造の道具は池間の宝山丸の工場から持って来たかもしれない。

こっちの工場へ船から積んで持って来て、使っていたかもしれない。

工場の崖に ㊦商号を彫る

工場のあった所の後ろの崖に、真っ直ぐに崖がパット落ちて来ている所に、㊦の字を彫っていた。池間の宝山丸のカツオ工場も㊦だったからねえ。その印を工場で働いていた若い連中が登って彫っていた。ただ、彫っているねえと途中を見ただけで、完成したのは見えてない。そのあと行ってないから。彫っていた所は高い崖で水はそこから流れていた。そんな高い崖に苦勞して彫っていたが、今もあるか知らんが。

池間の宝山丸の製造工場は、島の港の近くにあった、ナカマゴシという所、船が最初に出入りする近くにあった。相当栄えていた大きな工場だったが、もうカツオ業が廃れてから、工場をやめて、建物も全部崩して、今はもう形も何もない。

が、昔工場にあった㊦を彫ったコンクリートの破片が残っているだけです。

船主の玉寄正雄さんで、ずっと前に亡くなっている。

今生きていたら今なら 100 歳か、105 歳になっているはずです。



宝山丸の丸山工場跡に残っている㊦印

連れられて行ったのは1回だけ

尖閣列島は、冬だから海は荒かったが危険な目に遭っていない。

カツオ釣る時は、ドラム缶で大きなロープをつけて、沖を少し外して沖の方に、アンカー入れとって、それをブイの代用にして、それに船を繋いで、漁をしておった。こっちから朝出て出て、夕方入って来て、また、あれを捕まえたりしていたねえ。

暴風やシケの時は、あのブイの縄、ロープを使わんで、エンジン起こして風の方向を考えて、魚釣島の周りをぐるぐる回って、島陰に避難していた。

南小島には佐良浜の連中がやっていたと先輩たちから聞いていた。

漁に出ている時には、カツオはトリシマの間から上り下がりがひどかった。だから漁している船は見えていた。南小島には、沖の方からタンクが見えていた。人は見えなかったが、漁している船は見たから、島に人はおったかもしれない。

私は尖閣列島には1年だけ行った。そこで2回もしていたかも知れないが。

17歳というたら当時は子供だから、私は1回だけ連れられていった。

2,3回行った人は、外にいるかもしれない。

もう向こうに行った人たちは殆ど亡くなっている。だから名前も、何もわからない。

(了)



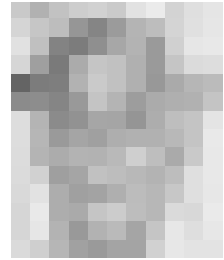
池間のカツオ工場、カツオ漁時期なると各工場の煙突から煙が上がり、終日賑わった。宝山丸の㊦工場もここにあった。（「前場民俗史」より）

仲地 行雄 なかち ゆきお (伊良部漁協)

1930年(昭和5年)、宮古島伊良部に生まれる。84歳(2013年時)。

1950年、20歳の歳に「かもめ丸」のカツオ節製造陸上班で尖閣諸島に行き、南小島に3、4ヶ月間滞在、様々な体験をなす。その中で「アホウドリを食べ、脂を採った話」等は「伊良部漁協」の節に別途掲載した。

氏は63年前に南小島でカツオ節製造した当時のようすを、生切りからカマド作り、煮炊き、焙乾等々をよく憶えておるのは驚きである。当時の人が殆んど亡くなっているだけに氏の話は貴重である。



海岸近くでカツオ釣る 工場から見えた

僕らは、かもめ丸で、カツオ節製造で、陸上班で行ったんですよ。その暇、暇にねえ、あっちこっちを廻って遊びましたけど。南小島に製造工場を建てて、そこにも鳥は、いっぱいいましたが、カツオもいっぱいいましたねえ。もう、海岸から100メートル位沖でカツオを釣ってましたよ。そんなにいるんですよ。

14、5名の連中が、竿やって一生懸命カツオを釣っている、かもめ丸の海の連中がねえ。それを僕らは工場の中に座っておって見ている。ああ、もう何匹位釣り上げてあるなあ。何て分かるんですよ。いや、もうすごいですよ。もう、こんな近くでカツオがいっぱい釣れるなら、島でカツオ節にしようということで、僕らは来たんだけど、僕ら陸上班は多分8人位ですよ。女の人達が来たのは1回だけだからねえ。しばらくおって、すぐ帰ったけど。ああ、この女の人達、ホントに偉いなあ。この中の西里ハルさんねえ、彼女は4、5年前までは元気でいたんだけど。

で、宮古の工場からカツオ炊く釜やニカゴ(煮籠)やセイロ(蒸籠)を持って行ったんですね。向こうでカマド(竈)は、自分たちが石を並べて造って、製造したカツオを釜で炊いて、骨抜いて、1週間位乾燥してナマリ節造って、宮古に送りましたねえ。ああ、懐かしいねえ、懐かしい、60年余り前の話だけど。



南小島の旧古賀村の工場跡で、この石積みを利用してカツオ製造工場を造った。(仲間均 2002)

尖閣では うんと稼いだよ

僕らは、宮古では夏の期間中ねえ、大体1万円(米軍票B円)位稼いだかなあ、あの頃は。しかし、向こう行ったら、あんたひと月では1万円超していたもん。尖閣では、1人配当で1万円超していた。で、宮古では、大体僕が工場に入っておって2500円位でしたからねえ。1ヵ年働いても1万円しかない、しかし殆んど1ヵ年は働かないからねえ。あとの半年寝て

暮らすと僕は唄を唄っていたから、半年働いて半年は休みですよ。また4月頃に出てきて、また半年働いて、もう終わり。だから、僕はいつもデカンショー、デカンショーしていたよ(笑い)。向こうではひと月でも1万円位稼いでいるねえ。1万何千円か稼いだはずよ。海岸近くでカツオいっぱい釣って、島でナマリ節にして、もう皆儲けたはず、金持ちになったはずですよ(笑い)。

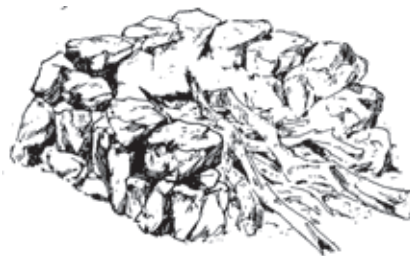
海岸で生切り 2つ割 多かった

向こうでは、寒いから海岸の浜辺の砂利の上にカツオを並べておいても腐らないんですね、明日までも。だから、カツオを生切りして炊いて、骨抜いて、1週間位で乾燥して、ナマリ節を造っていました。向こうにはカツオ炊く燃料も、乾かす材木は幾らでもあるわけだから、流木がいっぱいあるからねえ。まずカツオが生で上がって来るでしょう。釣って来て、海岸に並べておいて、カツオの尻尾の上の方を指で押さえるだけで、ああ、これはもう切っていいなあと分かるんですよ。尻尾を掴まえておいて、こうしてギューとこう指で押さえる。そしたら凹っ込んでいくでしょう。それで生切りが始まる。頭と腹腸を取って、これはもう海に捨てる。これを大きな台を作って海岸でやりましたねえ、台は幾らでも流木があるから。5、6斤位のカツオなら小さい奴だから大体2つ切り、真ん中からカチッと下ろして胸をとったら終り。6、7斤以上位だった4つ切りです。2つに切って、これをまた裏表を切って4つにして、向こうのカツオは2つ切りが多かったですねえ、それにあまり脂が多くて、乾燥しにくい。乾燥しても、カツオ節なっても、こうカサカサなったりしてましたねえ。

石 並べて カマド造る、

向こうには製造するものは何もないから、包丁や鍋釜とか、ニカゴ(煮籠)やセイロ(蒸籠)とかは、全部伊良部の工場から持って行ったですねえ。カツオを煮炊きする釜は四角で縦横1.5メートル、深さは2メートル位ですかねえ、ニカゴとセイロはねえ、これ位の板が敷かれていたと思うよ。網の目状で、幅2センチか3センチ位の小さい板が嵌めて、5つか、6つ位の板を嵌めた四角のものです。セイロは両方から持ち手が付いてねえ。

炊く所と乾燥させる所は石垣の中でないよ。外で。カマド(竈)は石垣の外に造りましたよ。大きい石を担い来てねえ、やはり石を並べて置いてねえ。真四角でなく、矩形の長方形でカマドを造りました。石垣の外に、石を積んで置いて、ニカゴやセイロの幅を計ってねえ、乗せればOKと言うようなカマドを造りましたよ。炊く所と乾燥させる所は別個だから、カマドは別々に造りました。幾つ造ったのか憶えてないけど。



カマドは大きな石を担いできて、石を並べて煮炊き用と焙乾・乾燥用の2箇所を造った。
(新里堅進 イラスト)

煮炊きするカマドは、前から火をくべますが、乾燥する、セイロで焙乾するカマドは上からくべるんですよ、下からくべない、上からして、火を点けて燃やしてやるから、別個だから。

煮炊き 潮水で 骨抜き 簡単

身割りしたカツオを大きな釜に入れて煮炊きします。この時はカツオをニカゴに並べてねえ、これをお湯の中に、ドンドン入れちゃう。お湯といっても、向こうには水がないからねえ、カツオ炊くのは潮水ですよ。潮水を釜に入れているから。

で、釜は最初はそんなに沸騰してないから、1段のニカゴを入れたらねえ、2段、3段とその上に重ねて入れていく。そうするとニカゴは浮き上がって来るからねえ、手で押さえて、下に沈めて、ドンドン入れちゃう。最後は竹でフタ(蓋)をしてねえ、フタをしたら動かなくなるから。僕らは、向こうで幾つ入れていたかなあ、4,5段位かなあ、宮古の工場では5,6段以上積んでいたと思うけど、あまり記憶にないねえ。自分達がやっていたくせに、もう忘れてるさあ(笑い)。カツオの煮炊きは大変だったですよ。もうお湯を暴れないように、沸騰させないようにするから、僕は見習いの時、さっと沸騰させて、カツオをダメにしたことがあるさあ(笑い)。あんまり強火にすると、カツオが暴れるからねえ、中のカツオは全部ダメになるからねえ、だから火加減というのを非常に重要視していたねえ、だから炊く時は、湯の加減、これに指を突っ込んで、どの程度沸いているか、ああ何度位だと訓練された、すぐ計りよった。これなら丁度入れていい時にやった。向こうで、カツオはどの位炊いたのか、時間もどうだったかは、もう分かりませんねえ(笑い)。炊き終わったらニカゴを釜から取り出して、並べて、カツオを冷まさんといかんから、冷ましたら、次は骨取りですよ。骨を残していたらカツオ節が曲がるから、乾燥した場合、製品にならないから、皆で骨取りしました。宮古の工場では女が専門にやっているが、向こうでは、もう手の空いている人がやりましたねえ、あれ用のピンセットがあって、この腹辺りの所は骨が大きいから、この出口を押さえてやると取りやすい。キューンキューンとうまく抜けるから、もう簡単、誰にもできますよ。



南小島でのカツオ煮炊きのようす。釜は宮古の工場から運び、ニカゴ4,5段に4つ割したカツオを並べて入れたという。左は骨取りしたカツオをセイロに乗せて、焙乾に行くところである。(新里堅進 行状)

焙乾 4,5段重ねて 乾燥 1週間位

今度は焙乾ですねえ、骨抜きしたカツオをセイロに並べて、カマドで乾燥させます。焙乾作業も石垣の外でやった。大きい石を持ってきて石囲いでカマドを造ってから。

焙乾する時は、セイロを載せる前にカマドの火を起します。カマドの下からじゃなくて、上から火を起して燃やしていくんです。火はパッとある程度燃えて収まるでしょう。収まったらドンドン上から突付いて、炎を消して火種をいっぱい作るとか、弱い火にしてからやりますねえ。炎が出たら、焚き火になったら、カツオを焦がすから。炭焼きの焼き鳥屋さんの要領でねえ(笑い)。向こうではセイロは、3段から4段位は積んでいたと思う、少ない時は、多い時は5段位。で、下からドンドン火をくべて、強いと思ったら強いよと言ったりするから、もう火には目離せんから。カツオは乾燥しだしたら、触って大体どの程度乾いているなあと分かるから、今度は2人で、重ねているセイロをチェンジします。掴まえる所がちゃんと付いているから、一番上の奴を下に降ろして、一番下のと交換して、で、これを順繰り順繰りやるんです。セイロはそんなに重ねることはできないねえ。持って順繰りに交換しないといけないから。だから、向こうではやはり3、4、5段位だったと思う。宮古では5、6段だったけど。セイロと火との距離はねえ、分からんねえ、1メートル位かねえ、あまり近づけたらカツオが焦げるから、火をドンドン燃やしても不味いので、焙乾する時はやはり専門がいてねえ。僕らも専門なっておったけどねえ。1年もすると専門になるから(笑い)。



カツオを焙乾する際に使うセイロ、これを3、4段積みカマドで火をおこし乾燥させた(新里堅進 イラスト)

で、1週間毎日1回位乾燥して、そしたら次第にカツオ節の形が出来てくる、ナマリ節になるから。

ナマリ節 再度乾燥させて カツオ節に

ナマリ節は箱に詰めてから宮古に送る、1週間か、10日位で交代で、船で宮古に持って行った。戻りには船の燃料、石油積んで来てねえ、それから食料積んで来て、また下ろして、また次の物として、また乾燥しているから、1週間位か、10日位で、また行くという状態で、どの位積んだか記憶ないけれども、いちいち数えなかったから。量は結構あった。ある程度1週間位は乾燥させてあるはずだからねえ。

なぜかと言うと2、3日乾燥では積み重ねていくと折れて行くから、ダンボール箱見たいのがあって、それに積んだと記憶している。

ナマリ節で宮古に持って行ったら、宮古の工場の建物は広いから、そこでまた乾燥させて、セイロに載せてバラ乾燥と言って、バラにして乾燥する。バラ乾燥させて、もう、工場のおばさん達が一生懸命削りをかけて、きれいにしてカツオ節に仕上げる、立派にカツオ節にねえ。そういうことをやりましたねえ。

かもめ丸帰路 エンジン故障で往生

尖閣列島から帰りねえ、あと4時間位で宮古島着くと思ったら、夜明けだからねえ。午

前4時頃、コロコロっと急にエンジン停まってねえ。早く直さんかぁと機関長に言ったら、いや、これは直らない故障だ、もうダメだと、(笑い)。直らない故障って、どうするかと聞いたら、いや、誰か感づいてねえ。無線も何もないでしょう。誰か感づいて助けに来なければもうダメだ。救助の船が来て曳いてくれないとダメだ。もう往生しましたねえ(笑い)。もう命からがら、そしたら宮古から尖閣へ行った船が2、3艘いたからねえ。この連中は、かもめは早く帰って来るはずなのに、おかしいなあ、まだ帰って来ないと心配してねえ。それで捜索船を出したわけですよ。でも、あの連中に会わなかったけれども、運良く沖縄の慶良間から来た小さいポンポン船がねえ、僕らの近くを通ってねえ、発見して曳っ張ってくれたよ。この船に荷物積んで、一步下がってねえ、そういった状態で曳っ張ってきたよ。助かりましたが、いやあもう、大変でしたよ。

漁師やめて 警察入る 尖閣 楽しい思い出

僕はそのあとも船乗りになってひどい目に遭った。親父の代わりに、与那国から米軍衣料やスクラップを積んで、伊セイ丸(10ト)で台湾に行ったら、台湾の警備艇に鉄砲で射られて、ほうほう逃げて、大シケに遭って、船は大破して浸水したんだ。

普通だったら9時間で帰って来る奴を、58時間位かかって漸く与那国に着いたねえ。もう生きた心地は全然しない。飯も食えない。大変な思いして、それで、もう漁師は、船乗りはやめたと決めた。宮古行きの船があったからすぐ飛び乗って家に帰って来たら、親父に「何んで途中で帰って来るか!」と怒られてねえ。

「冗談じゃないよ、あんな所で死んでもいいと思うか!」とやり返して、家を飛び出してねえ、妻子3名を連れてだよ(笑い)。もう船乗りは大変な仕事ですよ、もう絶対やりませんよ(笑い)。

そういうことがあって、ついま警察を志願したら、受かって警察に入ったんですよ。

警察に入ってから復帰の年の前の11月に、佐藤訪米の頃、尖閣に行こうと計画したんです。ところが佐藤訪米で警備で忙しくて、結局行けなかったんですが、今でも行きたい。向こう行ったら道案内は僕ができるから、あの時一緒に行った陸の連中は全部死んでいない。生き残っているのは僕だけ。尖閣では、よく食べて、よく遊んで、もう楽しい思い出がいっぱいありますねえ、この南小島は僕らの家みたいなものですよ(笑い)。



那覇の東急ホテル玄関前。来沖した佐藤栄作総理の警護 1965年8月

(了)

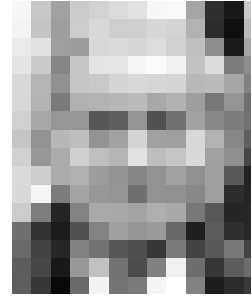
奥原 隆治 おくはら りゅうじ (伊良部漁協)

1931年(昭和6年)、宮古島伊良部町に生まれる。82歳(2013年時)。

昭和24年2月から3ヵ年、かもめ丸で尖閣諸島へカジキ、カツオ漁に従事、その間かもめ丸は南小島でカツオ節を製造を行う。

昭和45年からパラオ、パプアニューギニアで南方カツオ漁業を営む。昭和61年グアムを基地にした南方マグロ漁業を開拓。

平成2年から19年まで伊良部町議及び伊良部町漁協組合長を歴任。



宮古カツオ業界の大先達に聞く

トリシマでの伊良部漁民のカツオ節製造のようすを語る。

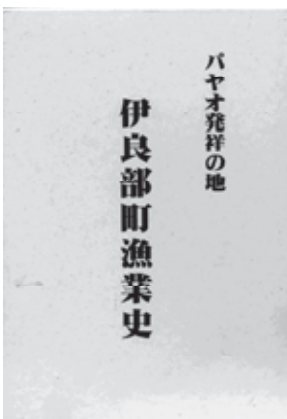
突船で行って、カツオ船に切り替る

— 奥原さんは伊良部組合長をされている時、仲間井佐六さんの「伊良部町漁業史」の編集に協力し出版されました。この本は伊良部の漁業を知る上で貴重です。奥原さんがいろいろ教え下さって、仲間さんは出版されたと聞いていますが。

奥原：僕は組合長は平成19年までやっているよ、この本は平成12年に出したから、これは半分位は僕が言うたさあ、だけど仲間さんも相当調べてある、登記所などに行って調べて書いてある。調べたのは仲間さんだ、あの人は元新聞記者だからねえ。

— この本の中に伊良部漁民が、終戦後、南小島でカツオ節造りしたことが書かれていますが、今日はその話を聞きにきました。

奥原：あの頃の尖閣列島を知ってるのは僕らの他にあまりいないはずだよ。昭和25年(1950年)、今から62年前のことだから。僕は18歳の時に、この本に書かれているさあ、この時は、かもめ丸(池間武雄船長25ト)は、最初カジキ突きで廻っている。カジキは海がシケると出るんですよ。ナギの時はアンカーを下ろして、向こうのクバシマ(魚釣島)の影で休んでいたさあ。最初に行った時は、カジキを獲っておったら、されどカツオがあまりにおるもんだから、今度はカツオ獲りに切り替えたわけさあ。カツオが物すごくいるもんだからねえ、



それに、あの頃はカジキは獲ったら、伊良部に下ろすか、平良に持って行ったか分からんが、もう氷は積んでいないから3日位では帰らないと、どうしても魚がダメになってしまう。

カジキを突いても、内蔵を取ってそのままデッキの上に布を被せて置いておくだけだから。カジキを獲りに行って、カツオが多いからとカツオ船に切り替えた。一旦戻ってからカツオ船で行った。

カツオを釣っても、氷もないから、宮古へ持って行ったりはできん、それで、トリシマにやむなくカツオ工場を造った。鍋もニカゴ(煮籠)もセイロ(蒸籠)も船に積んでいって、製造工場を造ったわけだよ。漁師だけじゃなくて、カツオ節を造るためだけの人、捌いた時に出る内蔵で塩辛だけを作りに来ての人を連れて行ってねえ。

僕はねえ、漁師で行って、カツオのエサ採りやったねえ。

エサの小魚 島の周りで採った

— 奥原さんは漁師で行って、エサ採りをなさったわけですねえ。

尖閣では、エサはどこで採りましたか、何の小魚をエサで採りましたか

奥原： 僕は、クバシマ周辺も、このトリシマ周辺も、北小島周辺も、皆潜ってエサを採っているさあ、あのシーラー(ミナミキビナゴ)を、浜などにいるイワシ類ですよ。あれが向こうにもよくいたよ。旧暦の1,2月頃だ。皆んなブルブル震えて潜っているわけさあ。あの頃は潜り雨具があるわけでもないねえ。素肌のままで、もうブルブル震えながら。エサ採りは朝起きて太陽が上がるのと同時に始まるさあ、太陽が上がらなければあのエサは来ないよ。太陽が上がると共に潜っているから、もう寒くてならんどう、キビナゴみたいな小さい魚がある、あれは浜でもどこでもよくいるから、あれも採っていたよ。

エサ採りは少なくとも2時間以上、3時間はかかっているでしょう。ここで採って、ここである程度採って、ずっと泳ぎながら、ずっと廻って、島の周囲を廻って採っていた。クバシマ、トリシマ、中の島の周りは皆んな泳いだ。3つの島とも皆んな泳いだ。で、たまにはあまり採れないと、船に上がって移動する場合もあったさあ。だけど、普通はここに下りたら、もうずっとこの沿岸をずっと泳いで採っていたよ。サバニで行って、カツオ船とサバニ、この間に網を張っているよ、この網に皆で追い込む、そうやって網を揚げて、カツオ船の生簀に入れていたわけさあ。

だけど、向こうでは、エサの小魚はそんなに豊富に採れない、もうチョロチョロしているさあ、それを浜に、岩場にいるイワシを追い込んで、もう一匹一匹いるから追い込んで集めて、かたまったら網を下ろして採っていたから、そんなに多く採れないよ。

追込むのは7,8から10名位かなあ。あの本に名前が載ってある國吉孝助兄さんとか、機関長の大浦金助さんの子供の繁雄とか、名城豊吉とかねえ、もう皆一緒に泳いだねえ。

あの時は旧暦1月、2月のとても寒い時季だったよ(笑い)。

トリシマ・クバシマ間 カツオよく釣れた

— 尖閣では、カツオはどうでしたか、いっぱい獲れましたか。

奥原： それで、エサをとって沖に行くと、ここにカツオがいるんだよ(笑い)。未だ着替えもしないうちにねえ、裸で、潜ってエサを採ったロープも片付ける、アンカーも片付けて、カツオ獲りの準備をしておいたら、カツオがおるもんだから、そこでカツオを釣ったりしているさあ。このトリシマとクバシマの間にもよくいたんですよ、向こうでは、エサが少

なくても、カツオが多くいたから、カツオはいっぱい獲れましたよ。

エサの小魚は1回採ったら、採った分は全部使う、だから、たまには2回エサ採りに行くこともあった。これはたまにだよ、カツオを釣って早く入ってきたから、またもう1回出たいから、もう1回エサを採りに行くさあ、そういう場合はたまにはあった。午前中か、昼間の早い位にねえ、カツオのエサを採って行ったらカツオが釣れたから獲ってきて、工場に下ろして、座っていても仕方がないから、急いで、もう1回エサ採りに出て行った。そういうことあったよ。

カツオを釣るエサは生きた小魚よねえ、あの小魚は、沖の真ん中では何か頼るものを探して、藻でも、木でも、何でも流れてくるものにくっ付きさあ。自分の身を隠そうとよ、で、今度は、このカツオ船からエサを投げると、エサの小魚は、船向かって走ってくるよ、船に必ず寄ってくる。ここにカツオの群れがいたら、エサを投げると、カツオの群れはエサを見て走ってくる。船からどんどんエサを投げるから次第にカツオは船にくっ付いてくる、そしたらカツオ船はストップをやって、釣り始めるわけです。エサをドンドン投げると、エサはグルグル回るよ、で、取り舵側からカツオは釣るから、取り舵側を風下において、船は流して、ドンドンカツオを釣るんですよ。カツオ釣というのはそういうものです。

内地の大型カツオ船 来ていた

— かもめ丸が行ったのは昭和25年の頃、その頃、尖閣にはどんな船が来ていましたか。

奥原：内地の大型カツオ船も来ていたねえ、今考えると200トンから300トン位はあったかなあ、あれなんかは、エサ採りも何もしない。カツオを釣って回っていた。あの船は冷凍庫も氷もあったんじゃないかな。冷凍機があったのか、氷を積んでいたのか分からないが、貯蔵設備があったのは確かだよ、1ヶ月も沖にいて、長らくカツオを釣ることできるから。

積んでいるエサもタレクチというて、特殊なエサで、1ヶ月位も生きているよ。

こっちで採れるエサは、1日に位しかもたない、長くても3,4日で死ぬけど。

内地のカツオ船のエサは1ヶ月も生きるから、内地のカツオ船は、皆んなあんなエサを積んで何日も航海して回っていた。また、あれはとても元気があるから、カツオもよく飛んで走ってくるさあ。船からエサを投げても元気がよいから、すぐ船に寄ってくる。だからカツオが船に寄り付くのも早いわけだ。僕らが採るのは、シーラー(ミナミキビナゴ)とか、ウフミー(大目魚、テンジクダイ類の稚魚)とか、ムギヤ(ハタンボ類の稚魚)とかの小魚だから、のろのろしてあまり歩かんさあ(笑い)、で、あれは投げても、もうのろのろして、船に寄り付くのも遅いよ。だからねえ、カツオ釣はエサにもよるわけです。

ダツ、トビウオわんさ 糸満船 追込みで獲る

— また他の船が来てましたか。沖縄の船も来てましたか。

奥原：大分の船が艦に帆を揚げてよく一本釣りに来たよ。クバシマの沖の方でよく見ましたよ。何を獲っていたかは分からん、艦に帆を揚げてアンカー流して釣っていたが、何を

獲っていたか分らん。る、船を波に向けておくようにここに艫の方に帆を揚げると、船は風向きに向んですよ。アンカー下ろしてこのアンカーが下には掛からないんだけど、引張りながらも、このアンカーを下ろすと、台風の時にも、このアンカーを下ろして流すと、このアンカーがねえ、波に向けておくよ、だから船は強いわけ、横にはならんからねえ、だから大きい台風の場合は皆このアンカーを流さないといかんさあ、で、このアンカーを下ろしていたか、どうかは分らんよ、

で、沖の方には、大きいトビウオとダツがものすごくいるわけねえ、今もいるかどうか知らんが、もう糸満の連中がやって来て、船と、サバニを持ってきて、沖の真ん中で大勢泳いで、僕らが見たらもうサメにねえ、食われるかどうか分からない、もう僕らが見たら怖いさあ(笑い)。でも、あれたちは平気ですよ、沖の真ん中でダツやトビウオを、追い込みで獲っていたよ。もうこんなにかたまってるからねえ、ダツもトビウオも、いやというほど獲れたはずよ。動かんのに、皆かたまっているから、相当獲れたはずだ。

話は変わるが、あの頃はねえ、今でいう中国船はいないです。1隻もない。

また、あの頃台湾船も度々来ていたねえ。しかし、この台湾船に乗っていたのは台湾の人達じゃないよ。

台湾突船、皆伊良部の人 家族に渡してと頼まれた

— 台湾の突船の乗組員は沖縄の人達だったと聞きました。

奥原：そうです。こっちの人達で、この佐良浜（伊良部島）の人たちが台湾に出稼ぎに行き、台湾で突船に乗っているわけ。出稼ぎにねえ、この本にも書かれているよ。

かもめ丸の先輩達も、終戦で台湾から帰って来たからねえ。こっちに(「伊良部町漁業史」p 69,70)、名前があるさあ、池間浩兄さんは死んだ僕の婿兄さんだけど、この婿兄さんが僕をかもめ丸に乗せて連れて行ってあるさあ、池間清一兄さんは、浩兄と兄弟だから、この上里盛繁さん達は台湾で相当カジキ漁やって来ているよお、それでこのかもめからカジキ突きに行き、あるわけさあ(笑い)。

で、台湾に終戦後も残っていた先輩達も、尖閣へカジキ突きに来たからねえ、その時は船に米を積んで、僕らの船に渡していたですよ。「自分らの家族に渡してくれと」。彼らは、宮古に来れないわけだから、ここに来て会って、こうして僕らの船と会っていろんなものを託していた。今考えると台湾と宮古でも生活の差は違っていたねえ。ある時、餅ねえ、乾燥させた餅を持って切って、僕らに焼いてくれてたんだが、美味しかったねえ。僕は今でのあの味は忘れん。島の先輩達がくれた餅の味を(笑い)。あの頃、尖閣に来た船はその位のものよお、中国船なんて全く見たこともない、話もない。

13歳から サバニ帆揚げ アンカー下し

— 奥原さんは、18歳で尖閣へ行かれたわけが、62年前のことなのに当時のことをよく憶えていらっしやいますねえ。

奥原：尖閣は冬にならないと行かない。夏には皆、宮古の近海をやっているから。冬にが向こうには行くさあ、特別な所だったから、それでよく憶えているよ。

僕はねえ、13から漁師をやっている。お父さんが僕が7歳で亡くなっているから、お祖父さんとお母さんで育てられて、このお祖父さんが、昼間漁に、夜釣りにも行くし、僕がいやだと泣いても、お母さんと2人で僕をば船に乗せて、沖に押し出してねえ(笑い)。

13の頃だよ。お祖父さんはサバニの帆を一人で揚げたり、アンカー下ろすのはできんから僕を連れ回してねえ。ここに船端があつて帆を揚げると、僕はこの縄をずっと引っ張って、船から外に出てねえ、やらんと船が傾いていくから、サバニは大体4、50度まで走のかなあ、風上に、帆をかけたら、波がここから来るさあ、されど船はここ走っているわけだ。その時は波が襲いかかって来る、頭の上からよ、波風が、それで動けないさあ、それを13の子供の頃だよ。雨風に叩かれて、僕は泣きながらやっていたよ、夜も昼も。

だけど、お祖父さんは平気さあ、海に馴れているから(笑い)。僕は雨風吹いたら今日もう死ぬかなあと思ったねえ。で、魚釣るポイントに行ったら、「アンカー下ろせ、下ろせ」なんだから。今度は魚釣って帰る、どこかに移動しようと思ったら、お祖父さんは、船を叩いて寝ている僕を起して、「アンカー揚げろ」、「帆を揚げるよ」と言ってねえ(笑い)。

もう僕は、13の時からずっと海の仕事をやってきた、70歳位で海を辞めるまで。

南方のパラオとか、ソロモンとか、パプアニューギニアとかでカツオ船をやったり、グアムにマグロ船を持っていたりもして、いろんなことをやってきたよ。話が別の所にそれてしまったねえ(笑い)。今は尖閣列島の話をしたくないさあ。

製造工場 海岸近く 石垣跡傍らに

— ありがとうございます。大変興味のあるお話ですので、別の機会にぜひお聞きしたいです。今日は尖閣のお話をお願いします。

かもめ丸はトリシマでカツオ節工場を建てて、製造を始めたわけですねえ。

奥原：工場を建てた場所は平たい所ですねですよ、で、ここに薪が、海岸に流木が流れて来ているから、この本に書いているさあ、これこれ、「男工、女工が島の周囲に流れ着いた木や材木などを拾い集めていたが島での滞在は約二ヶ月位だったという」(同書 p72)、この辺りの海岸に流れて来ていたんですよ、ここに歩いて行けるから、工場造ったのはこの辺ですよ。海に重たくて、滑らかな石、さんご礁じゃなくトラパーみたいに硬い石があるでしょう、あんな石が積まれた石垣があった、誰がいつの時代に積んだ石垣か分か



南小島に残る古賀村の石積み跡 (仲間均 2002)

らんが、古賀さんの頃か分からんが、石を並べてカマドも造った。カツオを煮炊きするカマドを、奥には洞窟があって、垂れてくる水を、3つに囲んで、溜めて置けるようにセメントで造られたタンクがあったよ。で、僕らはここでよく水を取ったんだけど、飲めなかったねえ。酸っぱくて。甘いことは甘いんだけど、多分これでカツオを炊いたじゃないか。よく分からんが。

鍋 ニカゴ セイロ 皆船に積んで行ったよ

— 製造に必要な道具は、宮古の工場から持って来たと聞きました。

奥原：カツオを炊く鍋は、かもめ丸の製造工場から持って行った。大きな四角の鍋で、宮古の工場では、あの高い鍋でカツオを炊いていたから、普通の鍋じゃないよ、大きさは1メートル角位かと思うけど、もっと大きいかなあ、それ以上あると思うよ、はっきりそこまでは分からない、高さは1メートル50位か、人間の高さ位あるかなあ、あんな四角の大きい鍋はわざわざ造っているからねえ。カツオ炊く鍋は四角だから、身切りしたカツオをニカゴ(蒸籠)に並べておく、四角いニカゴに、で、この鍋をちゃんとカマドを造って据えて置かないといかん、ニカゴがドンドン入れられるように。あの頃は、ニカゴは人間の手で出しているわけだから、2人で捉まえて出して、また揚がって来るから、捉まえて出したりやっているから、ニカゴは10ヶ位は入れられる。鍋1個にでもカツオは沢山入るから1個だけ。

向こうで、ニカゴやセイロ(蒸籠)は何ヶ位を入れたか、積んでいたか分からない。

カツオ 2、3日置いて炊いた

— 製造に必要な道具は、宮古の工場から持って行ったと聞きました。

奥原：向こうは冬にはねえ、相当寒かった、冷えているはず、だからカツオを釣ってきて、浜に置いても2日、3日位大丈夫だった、だから2日置いて炊いていたかなあ、僕は製造じゃないからよく分からんが、カツオは鮮度を落とさないとな節は造れんさあ、釣ってきたものは炊こうとしたら皆な割れてしまうよ、カツオ節にはならん。だから鮮度落として、ある程度弱らしてから炊かないと、あの鍋には、カツオ節造るのに、4つに切ったカツオを並べるさあねえ、ニカゴに。で、これを持って行って鍋に入れて、1時間位、2時間位炊くかなあ、で、このカツオは鮮度が高かったらダメなんだよ。カツオ釣ってきたら工場長が、専門がいるから、カツオの尻尾などを掴まえて、このものは切ってもいい、切らなくともいいと。それまでは男工、女工待っているよ、皆んな。工場が集まって待っているよ(笑い)。だけど、今のカツオ工場は冷凍物を使っているから度数はいらんさあ、鮮度の加減はいらんさあ。

— トリシマの工場で、カツオ節を何ヶ位造りましたか。

奥原：ああ、それまでは憶えてない(笑い)。その頃何ヶともあまり分からんよ。昔はカツオをばつとは言わなかったですよ。数えていたんですよ、千匹とか、5百匹とか、300匹と

か数えて、島の人には何百匹獲ってきたよと、宣伝はしていたさあ。今だから 1 トとか、2 トとか言うであってねえ。あの頃は何百、何百と言っていたよ。数えてよ、だから沖でカツオ釣ったら数えてきていたよ。僕は、ここでも、島でもずっとカツオ船に乗っているからねえ。カツオ工場も、自分で宮古ではやったことがあるさあ、自分で。

けど、あの頃、トリシマでカツオ節を、何匹、何疋を造ったか憶えていない。

尖閣では1回の漁で、カツオは本数にすれば2、300本だったかなあ、と思ったりするんだけど、で、1本(匹)は5、6疋内外だったんじゃないか、それほど大きなカツオでなかった、トビ大ではなかったことは確か。

池間の船 クバシマから 薪採って帰った

—1回目は2ヶ月で、2回目はあまりエサがなくて、すぐ帰ったそうですが。

奥原：ああ、それまでは分からん、僕はそれまでは憶えていない。この本には書かれているけど、僕が言うて書かしたかとかどうかは分からんよ。されど、今はそれまでは憶えてないんだけど、あのねえ、これに書かれているさあ、「翌26年には・漢那計徳所有の有徳丸と与儀巖所有の八宝丸も、宮古近海での不漁は尖閣海域で挽回しようと同海域に乗り出したが、ここでもカツオの回遊はなく、その上エサが採れないため、1週間位して帰港した経緯がある」(同書 p72)。ここにあるように、僕らかもめ丸が大漁するもんだから、おいおい皆んな来たんだけどねえ、その時はもうカツオはいなかったよ。だから皆んな空帰りをしたんじゃないか(笑い)。伊良部の船は。

また池間からも来ていたからねえ、池間の船はカツオ獲れんからクバシマに上がって木を伐って積んで帰ったよ(笑い)。そう、あれなんか行って薪を伐って、クバシマから積んで帰ったもん。それは僕は分かる。カツオ獲れんから薪でも採って帰ったよ。

あの頃は上がって木を採っても誰もものを言わん。クバシマにも、トリシマにも、どこかの島に上がっても、誰もものを言わんでしょ。何で今は上がるなって言うのかなあ。

僕は、今から10年位か20年位前かねえ、わざわざ、ここの保安庁に行って、何であんな達は、尖閣列島に上陸するなど言っているかと、聞いたことがあるんですよ。

僕らはあれだけ上陸していた時はものを言わないで、何のわけで僕らに島に上がるなあ、そしたら返事しなかったねえ。僕らが上がると何の問題が起きるか聞いても、もう全く返事しなかった。

上陸目的 クバシマは飲み水 トリシマはアホウドリ

— おっしやる通り、復帰前に尖閣に行かれた人達は、皆自由に上陸したと言ってます。

奥原さんもクバシマにも、トリシマに、他の島にもよく上がりましたか

奥原：このクバシマには木がものすごく生えてるさあ。ものすごいよ、ここは皆な木の山だよ。多分クバがあるからクバシマと言ったかなあ。クバの他にもう色々な木が、大きなものすごい木、高い木でいっぱい、もう海からも浜からも見えるよ。僕らはそこまでは

上がらないんだけど、浜から廻っているからねえ、向こうに下りたのは水採りに、2回行っただけ、トリシマに飲み水がないから、向こうの水はきれいで、木の根っこからの水、真水、上等な水が流れているよ。今でも流れているはずよ。

皆さんが南小島と言っている島は僕らはトリシマと呼んでいる。なぜトリシマと言うか、ここにはアホウドリが沢山いる。ものすごくここにアホウドリがいるさあ。それでアホウドリを捕りに上がった、このアホウドリは松明を持って行って照らすとねえ、これ動かないんですよ。だから棒を持って叩いて殺して捕って来ていたさあ。



藨蒼と樹木が生い茂るクバシマ(魚釣島) (新納義馬 1979)

あ。で、海鳥の卵も沢山あるから、こんなに卵も採ってきて焼いて食べたりしていた(笑い)。

トリシマの辺りにはイルカも沢山いたからねえ。だけどイルカをばあまり獲らなかった。あれ臭いもん。食べても美味しくない、たまには獲って乾燥してお家に持ってきたけど。隣のナカノシマ(北小島)にも海鳥はいたけどあまり多くはなかった。ここには根っこのない大根(ハマダイコン)が生えているよ、僕らはここに上がって大根(ハマダイコン)を採ってきて食べたなあ。もうあっちこっちの島に上がったですよ。

苦しかった 寒中でのエサ採り アンカー見張り

— 最後にお聞かせ下さい。18歳の時に尖閣行かれて、あの時に一番苦しかったことは何ですか、また印象に残ったことは何ですか。

奥原: ああ、そんなに苦しいもんじゃない、寒い海に潜ってエサ採りが苦しかったかなあ(笑い)。あとは夜は寝ないで、アンカーが流されるかといって、寒い中で、アンカー見張っていたことかなあ(笑い)。北風の時は、かもめ丸は、クバシマの島影か、トリシマと中の島の間にアンカーを下ろして待っているさあ。このトリシマにはアンカー下ろす所はない、中の島に流されて相当船はやられているよ。なぜ船がやられているかといったら、ここには海底がねえ、瀬がないからアンカーがかからない。だから、風が少し強くなると、眠っている間に、船はこの瀬に流れて行って皆やられている。それで若い連中は、名城豊吉とか、大浦繁雄とかねえ、僕ら若い連中は、アンカーを下ろしたら、流されないように、アンカーを見張っているわけさあ、行ってアンカー曳くと、ロープがドットトトと動くよ、だから行ってロープを掴まえて、船の表の方に、ブルブル寒さに震えながらよ。2時間交代で、ブリッジに番して坐って、アンカー見張っていた、もう北風に吹かれてよ(笑い)。そうしないと中の島の方に流されて、もう大体の船はもうそこでやられている。当時の突船はそこで相当やられているから。これははっきり憶えているねえ(笑い)。

クランク折れて カツオ船と突船が曳航 帰港する

で、あの頃はディーゼルじゃないから、焼玉を焼かないと掛からないさあねえ、エンジン掛けるのもある程度時間がかかるわけさあ。だからアンカーが曳いたら、早く焼玉を焼いてエンジンを掛けないと船は動かんから、アンカーが曳いたと知っておっても、すぐにはエンジン掛からんですよ。かもめ丸も焼玉だったから。

僕らは殆んどトリシマと中の島の間アンカーを下ろしているわけねえ。で、クバシマに渡るのに大体30分近くかかっていたかなあ。船は6,7マイル位しか出ないから、かもめ丸は。で、僕も機関員をしていたんです。クランクが折れてしまって、クバジマまで行かん間に、沖に流されたわけだ。そしたらねえ、内地の大型カツオ船ねえ、先に話したあのカツオ船がここまで引っ張って来てくれてあったよ、で、そこでアンカー下ろして打って、今度は得宝丸(15ト、船主仲間武一)か、ソウホウ丸(平良か、久松の船)か、突船にアンカーを下ろして、僕らのかもめ丸は、別の突き船に引っ張られて宮古に帰ってきたことがあるさあ。僕らのかもめ丸は、もう動かんからねえ。引っ張られてきたこともあった。

僕が憶えているのは大体こんな話だがねえ、少しはためになったかねえ

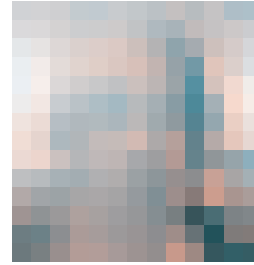
- はい、とてもためになりました。当時の尖閣を知る上でとても貴重なお話でした。
ありがとうございました。

渡真利 浩 とまり ひろし (宮古島漁協)

1926年(昭和元年)、宮古島で生まれる。87歳(2013年時点)。

18歳で海軍に志願、長崎佐世保、宮崎、鹿児島に勤務。

終戦、23才で復員、宮古島に戻る。以後、漁師となって漁業に専念する。1950年代はプラタス島や南洋諸島で海人草・貝殻採取、60年代はカツオ漁に従事。1958年冬期に尖閣諸島でカツオ漁が行われた。宮古の漁船3隻が南小島でカツオ節製造をしたという。進漁丸のその1つである。氏は同船の製造係りとしてカツオ節製造に携わったという。以下は貴重な南小島での貴重な体験要旨。



カツオ漁3隻 操業

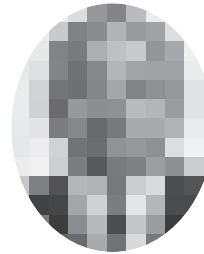
私が尖閣諸島へカツオを獲りに行ったのは、32、3歳の頃、昭和32、3年頃です。これは宮古の漁が終わってから寒くなってから、乗組員全員が佐良浜の人達だった、私だけが久松の人。宮古での漁が終わってから自分たちの進漁丸30トで行った。普通宮古でカツオ漁する場合は40名位だが、尖閣へ行ったのは25、6人位だった。私は製造する係で行きました。甘露(旧暦9月)の頃から1月頃までの寒い時季だった。こっちの漁期が終わったから、向こうで、尖閣で、漁をしようということで、その時は、宮古から3隻一緒に行った。

トリシマ(南小島)近辺でカツオを釣って、カツオ節の製造はトリシマでやった。3隻全部でやったが、他の2隻の船名は覚えていない。

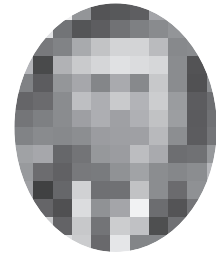
(氏は、こちらから持参した1958.02/05付「冬の鯉業に成功、漁船続々大漁」(※末尾にこの新聞報道を掲載)の記事を見て、思い出したようだ)。

そうです、この時ですよ。2隻は幸洋丸(船主前泊力)と隆祥丸(船主奥平幸三)です。

2隻とも伊良部の船でした。前泊さんとは一緒に、前泊光さんは機関長していた。



幸洋丸・船主前泊力氏



隆祥丸・船主奥平幸三氏

南小島に仮工場を設けてカツオ節を製造

別々鯉節づくり 製造人3名

カツオが獲れたのはトリシマの近辺、島からそう遠くない。釣っているのを海岸から見える時があった。陸に揚げる迄はピンピンしているほどだから。エサは、波の上、しぶきの上に浮く青い魚で、スルルーグワー(キビナゴ)という小魚を、隣のクバシマ(魚釣島)の廻り、周辺で採っていた。それを船に池があってそこで活かして使った。

僕は、たまに製造するカツオのない時は、2、3回位漁に出たこともあった。(南小島の写真を見せると、一番高い島だったから、この島だったねえ。ここで、皆(3箇所の漁船)、別個に、カツオ節を製造しました。海岸近くに古賀という方の工場跡があった。

釜は宮古の工場で使っていたのを船で運んできた。昔のこの工場跡は石垣がいっぱい積まれて、レンガ造りの水溜も残っていた。宮古から持ってきた TENT を、その石垣を利用して張り、小屋(仮製造場)を建てた。

製造人は3名、内間某(70歳位)、前泊某(50歳位)と私(渡真利、33歳)が担当した。向こうのカツオ節仮工場では、2,3ヶ月間仕事をしていたと思う。他の2つの工場の製造人も、私たち同様2,3名位、漁する人も22,3名位だった。私は工場にしかいなかったもので、船の様子はよく分からない。



南小島北西海岸、岩山斜面海岸に沿って見える古賀村の石垣跡、ここにカツオ節製造小屋を設置した。
(新里堅進 イラスト)

浜辺でカツオの頭 はらわた取る

カツオの頭とはらわた取りは浜辺でした、海岸の方で。獲れたカツオは漁船から5~6人の漁師が伝馬に乗せて陸揚げした。平良の工場からもってきた「まな板」(3メートル×2尺60センチほどの足つきの作業台)を浜辺に置き、その上で製造係りと漁師が一緒になって、頭とはらわたを取った。カツオは島の周辺で釣れるからピンピンしていた。ピンピンしていたら製造はできない、少し弱くしないと使えない。それで、カツオは、浜辺から焙乾する石垣のところに持って行って、石垣の外側に並べて5~6時間ほど置いた。そのあとでカツオの生切りをした。そこに浜辺で使った「まな板」を置いて、製造担当2人で生切りをやった。TENTを張って、TENTの中でやった。

鍋 持参 カマド 昔の製造跡使う

カツオを炊く鍋も平良の工場で使っていたものを持ってきた。横縦1.5メートル、深さ2メートルと大きい鍋だった。カツオは潮水を入れて炊いた、水がないから。トリシマには昔の製造跡があった、昔の古賀さんの頃のカマド(竈)があったから、石垣の外に、石で造ってあって、そこに鍋をのせて使った。薪を入れる所は少し深くなっていた。

向こうは岩だらけの島で、大きな木がないが、海岸は流木が多い。

カツオを炊く薪は、流木を持ってきて、斧で割って使った。

カツオをのせるニカゴ(煮籠)も、宮古の工場から持ってきた。このニカゴにカツオをのせて、鍋の中に入れていくが、6,7段位を重ねて入れたかなあ。竹製のふたをして炊いた。

カツオを炊き終えて鍋から取り出す時は、もうニカゴが自然に浮いてくるから、上から順序よく取り出せば、下の方から浮いて来るから全部取り出せる。

あとは炊いたカツオの骨を抜いて、乾燥し、パイカン(焙乾)させるだけ。

焙乾するカマドあった 全工程 10日間位

バイカンする所は別に造った所があった。やはり古賀さんの頃に造られたもので、石垣の中に、正方形で四角に石でできていた。セイロ(蒸籠)も平良の工場から持って来た。

セイロに載せて焙乾はそこでやった。セイロは最初は1段位でしたが、乾燥したらもう2段、3段積んでいく。10段位は積んだかなあ。

皆カツオは乾燥させるまでそこに置いておく。火入れは一週間以上した。最初は横に並べて置くが、乾燥させたら、これを縦に並べるから、もう広くした所もちょっと狭くなっている。小さくなっている。このバイカン、乾燥作業もテントの中でやった。

これらの全工程に、カツオ節(ナマリ節)を仕上げの、大凡10日間位かかった。



写真は南小島の古賀氏の工場跡の石積囲いの前で
疏大・資源局合同調査団。(新垣秀雄 1952)

この石積囲いを利用し工場を建てカツオ節製造する

カツオ節 1000本 約2トつくった

向こうで、どんどんカツオを獲ってくるもんだから製造する人は、カツオ節は乾燥したら宮古へ船で運んだ。また宮古から船の燃料、食糧などを積んで持ってきた。そういう様にトリシマと宮古とを何往復かしていた。私がカツオ節を運んで行ったのは2回位かねえ。宮古の工場には留守番が2,3人しかいなかった。

向こうで、カツオ節は何本造ったか覚えてない。1日で100匹位は獲って、工場ですぐに処理している。製造は10日位とみると1000本になるから、向こうで造った鰹節は1000本位だったと思う。重量でいくと2ト(約3300斤)位になる。(前掲新聞の「船主前泊力の幸洋丸側がカツオ節1万1000斤(約6.6ト)を製造した旨」を記事を見て驚く)。

いやあ、幸洋丸側は、そんなにカツオが獲れて、カツオ節を造ったのかなあ？

進漁丸の3倍になるわけだが。それとも製造高は私の記憶違いなのか、よく分からない。進漁丸は株式でやっていたので、代表者は洲鎌蒲四郎氏だった。

水は充分なく 風が

トリシマというから、空が真っ黒くなるほど鳥がいっぱいいる、昼はいない。朝に出て行って、夕方しか帰って来ない。いっぱいいる時は、もう糞が落ちてくるから、外ではご飯は食べられない、もうテントの中で食べるしかなかった。(カツオドリの写真を見て)、この白い(雛)のは少ない、黒い(成鳥・親鳥)のは多かった。時々捕えて食べた。これは大きから1羽で2,3食分あった。肉はカツオ臭い。卵は家に持ち帰った。

飲み水は宮古から運んだ、船が宮古に行っている時は、そこにある水を飲まんといけん。

古賀さんの造った工場にはレンガで造った水溜め池があった。その水は鳥の糞で汚れて飲めないが、もう目をつぶって飲んだよ。(笑い)。苦労は色々あった。水がないから、余り髪も洗えん、あとで虱が出た。水が充分にないから洗えん。もう苦労し放しさあ(笑い)。

一番苦労したのは、海人草を採りにプラタス島(東沙諸島)に行った時だ。夏の台風避けるため冬行って、もう寒さでブルブル震えながら、一日中潜っていたさあ。

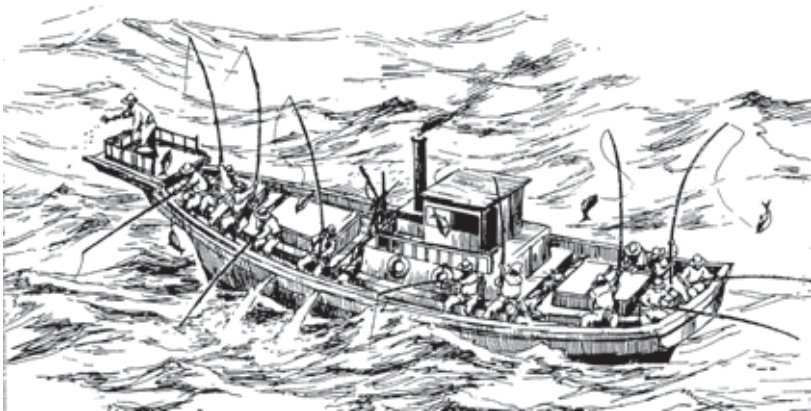
あの時の苦労と比べたら、尖閣でした仕事は苦労じゃない。

私らがカツオ節を製造したのは、ひと冬期間だった。

尖閣列島では、ホンガツオに混じって、アブラガツオ(ヤイト、スマ)が沢山獲れてきた。

アブラガツオは、カツオ節にはできない、脂が多いから。

私らは、それで尖閣でのカツオ節の製造期間を短くして、宮古に帰って来た。(了)



冬期、尖閣諸島へ出漁し、荒波の中をものとせず、回遊するカツオの大群をしとめ、次々と、カツオ釣り上げている。(新里堅進 イラスト)

※参考資料：新聞報道記事

【宮古版】冬の鯨業に成功 漁船続々大漁

冬期カツオ業が成功し、転業問題まで出されて暗い表情の漁村に明るい希望を与えるニュースがある。さる一月十日に先角列島で冬期カツオ漁業のため、出漁した幸洋丸(船主前泊力氏)は大漁して同列島でカツオ節に加工して去る二十六日帰港した。カツオ節は一万一千斤製造されており、この外同出りよの隆祥丸(船主奥平幸三氏)也大漁しているという連絡があり、冬期漁業の期待は大きい。

(八重山毎日新聞 1958.2.5)

3章 八重山地区



(登野城港)

八重山地方は、石垣島を主に聞き取りを行った。この地方を構成する漁業者は明治期以降、沖縄本島より遠征してきた糸満漁民の漁労を土台に、沖縄本島地方や周辺離島からの移住民が糸満の漁業技術を受け継ぎながら発展してきた。

漁民の集落は、明治期石垣港栈橋付近に形成され始め、その後は東へは字登野城、中間に字石垣(新栄町)、西へは字新川と広がり、現在に至っている。

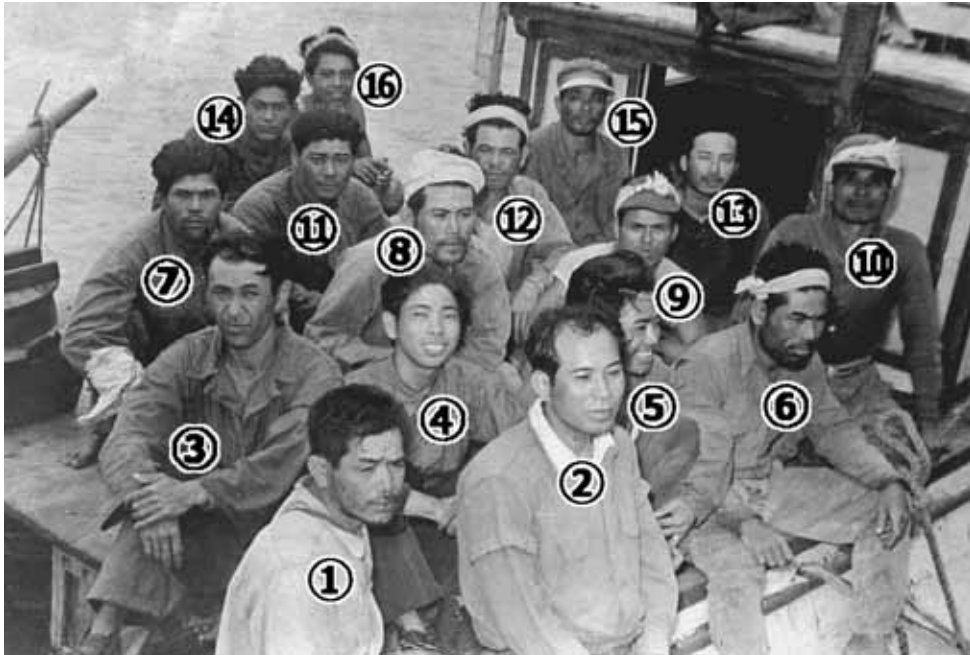
聞き取りにあたっては、糸満漁民の末裔であり、地元の漁業民俗史に造詣の深い石垣市新川在の金城五男氏の多大な協力を得た。

3A 一枚の写真から、半世紀前へ

八重山における戦後の尖閣への出漁は、1950 年前後からと言って良いであろう。この頃は、カツオ節製造の為のカツオ漁、そして貝ボタン材料としての貝殻漁、虫下し薬の原料となる海人草採取が水産物輸出の大きな柱であった。

聞き取りによると、1950年代から60年代にかけて、尖閣への出漁の多くは、カジキが目当てであった。カツオ節製造の為のカツオ漁が夏場で終了するため、冬にはカツオ船をカジキ突き棒船に仕立てて、出漁する事が多かったようである。

最初にまず一枚の写真を見ていただきたいと思う。これは、1952年に写された、尖閣諸島調査団と、同団が便乗した漁船の乗組員の面々である。



尖閣諸島調査団(高良鉄夫団長)のメンバーと突き船基本丸の乗組員の面々。(新垣秀雄 1952)

今から 60 年前の 1952 年 4 月、琉球大学と琉球政府農林省資源局による合同尖閣諸島資源調査が実施された。調査団は高良鉄夫(琉大助教授)、多和田真淳(琉球林業試験場技官)、以下 4 名の専門家と 3 名の琉大生により編成された。当時、同大は開学間もない頃だったので、研究費とてなく、調査費用の捻出に一苦労、学生たちも自己負担だった。もちろん尖閣諸島への船をチャーターする資金など無く、同諸島へ出漁する漁船に便乗しての渡島である。調査に参加した多和田真淳氏が当時琉球新報に寄稿した「尖閣列島採集記」を見ると

四月二日 晴天 尖閣列島行漁船の便乗を交渉して失敗に帰す。

四月三日 晴天 尖閣列島行漁船の便乗を交渉して失敗に帰す。

四月四日 晴天 尖閣列島行漁船篠原光次郎氏所有基本丸に便乗方交渉、船主は納得したが、船員が納得しないので困った。

四月五日 曇、雨、曇、基本丸船長は納得したが船子が納得しないので困った。

四月六日 曇天 基本丸に根気強く再び交渉船員も調査団に同情を寄せ便乗方を納得。

と、あり漁船便乗の交渉に難航した様子が伺える。

交渉の末に漁船基本丸に便乗させて貰えることになった調査団の中に、当時の様子をカメラに収めた方がいた。琉大生新垣秀雄氏である。

八重山での聞き取りに際して、この写真の乗組員で健在な方がいないか、金城五男氏の案内の下、当時を知る漁業者の方々にお話を伺った結果、彼らの名称や思い出等を聞くことが出来た。

参考までに判明している人物の氏名を番号順に列挙すると(敬称略)

調査団員：①多和田真淳 ②高良鉄夫 ③知念正雄 ④上運天賢成 ⑤棚原清二
乗組員：⑥(不詳) ⑦浦崎蒲次(コウチョウ) ⑧荻堂盛徳 ⑨伊礼の松兄さん(良精)：機
関長 ⑩ハンサグー(波平庫里)の金城次郎：突き手 ⑪宮城ジュンコウの妹の旦那 ⑫仲
村ミツヤのお兄さん(コウリュウ?) ⑬仲井のトク兄さん ⑭(不詳) ⑮国吉のオトーさ
ん ⑯並里長信：コック。

尖閣諸島周辺漁場は一般に好漁場だと言われるが、現在では行く船は少ない。好漁場という説明は領土問題が俄に起こった1970年前後から続いているが、漁業者を取り巻く環境が、この半世紀近くで大きく変化したことは言うまでもない。地産地消が以前から唱えられているのは知る限りである。が、ここ沖縄に住む人々でさえ、好きなネタを聞かれると、平然とサーモンと答えるのが現在である。無論、南の沖縄でサーモンは漁獲されない。これ迄も、これからも。

さて、報告は、基本丸乗組員調査の記録を紹介することから始めたいと思う。

仲田 吉宏 なかだよしひろ (通称カミジューオージー) No.1

仲田吉宏氏は父の代に伊是名島から石垣島へカツオ船の釣り手として渡ってきた。氏の父は尖閣諸島でのカツオ船の釣り手であったそうである。仲田氏自身は石垣島でカツオ船のエサ採りを長く経営、その後、現在は近海マグロ船を所有、鮮魚店を経営するに至っている。聞き取りは仲田鮮魚店(字新川マックスバリュー向かい)にて。鮮魚店の裏で、冒頭の1952年当時の集合写真を見て貰いながら、心当たりのある乗組員に関して聞いた。



新川マックスバリュー向かいの仲田鮮魚店。

※仲田鮮魚店の皆さん：仲、カミジューオージー：カ、金城五男：五、筆者：筆

懐かしい面々

カ：うんうん。この人はあの時分篠原の船に乗っているから、はっきり直ぐわかるよ、、、これ、伊礼の松ちゃん兄さんじゃあないかなあ、この人はもう確実わかっているよ、ハンサグー！

仲：こっちは浦崎コウチョウだね。

カ：コウチョウ、そうそうそうそう。

筆：当時だと、何歳ぐらいになりますか。

仲：あの当時だったらねえ、20幾つだ筈よ。この人なんかもう80余るから。

カ：結婚はしておるよ。あの篠原の時分よ。だから昭和 20、。

仲：イズミあのオジーなんかわからん？ 85 以上の人だったらわかる筈よ。

五：誰がわかるかねえ。

カ：いや！船乗りやっている人だったらわかるわけさー！ カツオ船乗っておる人なら若くてもわかるだろうけど、ジャコトヤー(エサ採り)歩いている人なんかは、簡単にはわからないよ！ うん。

仲：この人は松ちゃんオジーに似ているさ、。

カ：目鼻立ちが、もう松ちゃん兄さんだよ！

仲：うん。そうそうそう。

カ：これはよ、ハンサグイのおやじ。この人なんかはよ、カツオ船は少ないけれどよ、冬の時期になったらよ、突き船歩いているわけさ。当時は突き船が花形だったからよ。

五：これは夏に写した写真じゃないから、やはり突き船が出ていたんだな。

カ：そう。これは萩堂のヤッチー(兄さん)！ 今思い出した！

仲：今元気だったら 100 は超えるよ。うん。今は萩堂建設している。

カ：もうこの人なんかは、あの当時は篠原の船に乗っているからよ、この内にマツゴロウ兄さん(山城満吉さんの兄)なんかもおる筈よ、必じよ！

五：萩堂建設の親になるわけね。ちょっとこれ拡大してごらん、もっと思い出すかもしれないから。

カ：ああもう、これははっきりわかるなあ！ これは伊礼良精だ。

筆：ハンサグーのおじさんという方は、これは名字は？

カ&五：金城！そうそう。

五：何名わかった？ 1人2人3人4名わかった？

カ：奥のは山根のセイイチ兄さんに見えるがよ。

筆：この浦崎さんというのは、どんな役目というか、。

カ：元々、カツオ船の魚を釣る人！ この人なんかはもうエサ！ 投げる、本撒きよ！
もう一流のあの、カツオ船のエサ投げる、係りだったわけよ。

筆：あー、じゃあ浦崎さんは本撒きで、。

カ：そうそうそうそう。もう言わば、あの。

筆：伊礼さんとかも釣りですか？

カ：そうそうそうそう、釣りでやったり、魚釣りとか、元々この人も突き船歩いておったんじゃないかなあ。冬の場合はよ。これはもう、コックをやっている子供連中(並里長信さん)よ、これは。この人なんかは生きておったらもう隅から隅までわかるよ。

筆：はいはい。

カ：もう亡くなっているからよ。これもまだ若い人よ。もうこの人なんかよりはずーっと後輩ではあるよ。この年齢の人がはすぐわかるよ。もう昭和 20、4、5 年ぐらいの、。

五：誰か 1 人生きていたらねえ！

カ：この辺にカツオ船乗っていた人、、もうこの年齢の人はもうねえ、、。

古賀丸とカツオ工場

筆：この時、乗っている時に着けている服というのは、これは？

カ：これはもうあの、戦後の着物だからよ、軍の払い下げでないかなあ。あの当時はもう、アメリカさんの洋服とかよ、あんなのしか無かった。調度あの時分はもう尖閣辺りは冬はもうあのカジキを捕るってからよ、行きおったから、今のあのハンサグイか、金城さんなんか。突き船の船頭しておったからよ、あの人なんかは。だ一、夏場はまたカツオ釣りよったさあな。荻堂建設のおやじなんかも突き船に乗っている。それより前の、(尖閣で)カツオ船していた頃というのは、僕らのおやじなんかだったらもう、昔の古賀丸に乗っているからよ。尖閣列島のあのカチュー(カツオ)屋がある時分はもう仕事をしに行ってるからわかるわけだけだよ、で、こっち(鮮魚店の後方を指して)はカチュー屋、古賀のよ、屋敷だったわけさ。

五：古賀の屋敷だった？

カ：そうそうそう。こっちは市有地だけど、あっち(鮮魚店の後ろ)は全部古賀の屋敷よ、工場をあっちで作ってよ、してあの一。

筆：ああ、古賀さんの頃の場所というのは。

カ：あったよ、昔は全部もう、この辺全部古賀の屋敷だったよ、うん！あの頃はおるからよ。こっち全部よ。して昭和24,5,6年位かな、分配してよ、売っておるわけさ。

五：この人は飯炊きだな。

カ：この人はもうすぐ初めからわかるよ一、ウフフ、、これはもうたぶん飯炊きぐらいじゃないかなあ、あの当時はもう、14,5位のよ。

五：これは発田の船？

筆：これは篠原さんの船です。

カ：発田？、篠原だろう。あの時分はほとんど尖閣列島でやっているからよ、、。

五：もう1つ(写真)あったでしょ？あのログワー(船着場)。あれ出してごらん。

カ：そうそう。これ尖閣のよ、削ってるよ、船が入る所さな。ここのカツオ工場は古賀ドンのもんだよ。

五：こっちにあったの？！

カ：そうそう、尖閣によ。古賀ドンのよ。これ(南小島)はトゥイジマだよ。

これはクバジマやさ。これはトゥイジマ、これは岩だけがあるよ、、僕らも上がった事はないよ、もう！何も上がる必要は無いから、ハハ！

五：ああ、トゥイグワー(海鳥)が写っている。

カ：そうそう。あの当時はもう自由に上陸出来るから、、あれ？これでもヤギは写ってはいないな一。

筆：ああ、ヤギは復帰あとみたいなんですよ、持って来たのは。

カ：いや、あの当時はもうヤギはいるわけさ！

筆：いましたかね？

カ：うん。戦争でよ、あの台湾に行く船がやられてから、それからあっちで、半年位住んでるからよ。

五：遭難してからが。

筆：その時ヤギも食べてしまったんでしょうか。

カ：ああ、あの時分からおった筈よ、ヤギは。この伊礼さんよ！あれなんか無人島から、生き残りさ。帆で漕いで来ているわけさ。あの金城よ、カナグスクグラーのおやじなんかよ、全部5,6名でよ。

筆：あとはこれですが、当時の小屋のあと。

五：今なんかがは残っている？

筆：いえ、もう全部台風や色んなのやで、崩れてしまっ。

カ：そうだ筈よ！昭和24,5年だったらあった筈よ！

筆：まだ茅葺きというか、小屋は。

カ：戦前まではカツオをあっちに下ろしに行きよったから、僕らのおやじなんかは、僕が3歳頃まではね。してこっちに工場、こっちに古賀丸あったからね。

筆：古賀丸は、何艘ぐらい？

カ：イーエーナー(感嘆詞)、1艘だけがありおったよ！

筆：1艘だけでしたか。

カ：そうそうそう、こっちの古賀丸の方の総責任は、金城良正よ、

五：うん、うん。

カ：あっちのおやじが、総責任だったよ。工場の総監督しておったよ、山根セイイチさん。

五：だ一、もう1回あれ(集合写真)見せてごらん。

筆：はい。

カ：間違いない。萩堂建設のおやじよ！アハハ。これは伊礼さん。

筆：この中ですと、1番年配と言うか、ベテランの方はハンサグイ？

カ：この人は元々突き船をやっていた人だわけよな。だから篠原の船が突き船をやっている時分は船長やっておるかもわからん。あの当時はもう夏は、カツオ釣りで、冬は突き船だったから。昭和24,5年は尖閣列島、冬場はあっち以外、カジキは捕られんからよ。もう、顔かたちが全部変わっているなあ、この人は山根の次男だと思うけどなあ。

五：どこにいらっしゃる？ 屋慶名？

カ：そう、いや、こっちから(長崎)オガンから、、(山根さん宅への道順説明)。

五：ああ、はいはいはい。そこにいる？

カ：セイイチ兄さんだったらよ、

五：行ってみるか。

カ：うん。あの人に見せたらわかるよ！行ってみた方が良いよ。

五：はいはい、ありがとう。

筆：ありがとうございました。(山根セイイチさん宅へ移動)

仲田 吉宏 なかだ よしひろ No. 2

仲田氏の父が古賀丸に乗っていた話を後日、新栄町にある床屋さんで伺った。尖閣諸島でカツオ工場を経営していた古賀は、ある時期、埋め立て前の字新川の海沿いに広く土地を求めカツオ工場を建設、拠点を尖閣諸島から新工場へと移動したようである。しかし戦後になってその土地は全て処分された。話はそこから戦後の八重山カツオ漁の衰退に及ぶ。

※仲田吉宏さん：カ、床屋さん：床、西表炭坑の話の方：炭

古賀丸とカツオ工場

五：高良、高良鉄夫先生、、同じ部落出身？

炭：えー、、この人のワッター(私らの)アンマー(母)、、。

筆：同じ備瀬から？

炭：そう、高良鉄夫のおっ母一さんがよ。備瀬の人。僕のお爺よ、芋取りに行ったって、アハハ。終戦後よ。

カ：金持ちだったわけさ！アハハ。

炭：農家だったからよ、あれたーはハル(原：畑)の人、ハルサーだよ。

五：あんた(筆者)が聞き逃したのがあったでしょう。

筆：はい、以前聞いた時、この基本丸の乗組員にばかり夢中になってしまって、仲田さんのお父さんのお話、古賀丸に乗っていたという話を。

カ：もう尖閣列島に、ちょうどあの時分は僕らは、戦後まで親父は生きておったから。戦前までは古賀丸に乗っているから、今、あの古賀丸のあの鰹工場は僕らの店の後ろにが鰹工場あったわけよな、古賀丸は。

筆：はい、鮮魚店の後ろですね。

カ：そう。戦前はよ。戦後になってからはもう人に貸してたから。戦前はこっちに大きな工場作って。水揚げもこっちにしておったんだよ。

筆：ああ、、。

カ：これ古賀丸の工場だった、大きな。御願グラーの側まで。全部古賀の屋敷だった。

床：五男。お前の母親の家な、あれも古賀丸の工場だったんだよ。

五：アハハ。今あんた(筆者)が宿泊している所、古賀さんの土地だったって。

古賀さんの土地は、どこから、、長崎御願の所まで？こっちから全部？

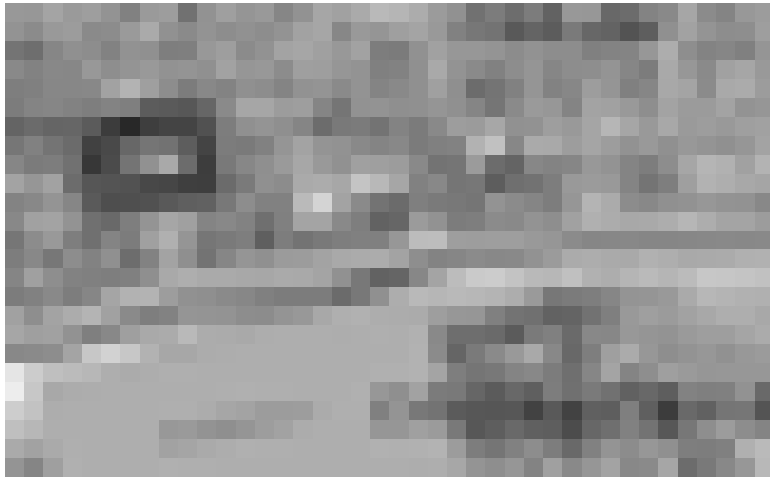
カ：(工場の敷地の説明)、、これだけ全部さ。

五：はあー、あんだけ古賀さんの土地。

カ：そうそう。それを古賀が売った様になったから。この入っている人とかが、分離してよ、買っているわけさ。

五：ああ、細かく分けて、古賀さんが分けたからが買っているわけだ。

カ：僕らが入っている所は市有地だから。だからこの、僕らの後ろの道路は、この市有地からあつちは古賀の屋敷だったから。この屋敷買った人なんかは道路開けんと、買わないと言うものだから、車が入るぐらい開けてあるけれど、全部縮まって来ているわけさ。市有地はもう動かせないから。（動かす部分は？）古賀の屋敷しか無かったわけ。古賀



の屋敷の分、後ろの人なんかはもう道がないと、買っても意味が無いでしょう。だからあの当時まで市の屋敷は売られんわけさ。

五：この比嘉の前まで？

カ：うん。こっちは昔はよ、戦前は、車(船を下ろす台車か)が降りられるようにしてよ、ヒラ(坂)グラーがあったわけさ。

五：こっちに？

カ：そう。それとあの今の長崎オガンよ。

炭：昔はカツオ船のね、船揚場みたいになっていた。

カ：そう。本当の戦前からのヒラグラーがあったさ。今のあの比嘉の前よ。

そうして、船を上げ下ろししたり、カツオをセイロでよ。昔はセイロでやっていた。終戦後バーキ作って担いでおるんだよ。

五：じゃあ、この今の比嘉の前のヒラグラーから、全部がカツオ工場。

カ：カツオ工場があったわけさ。焙乾屋から製造小屋から。

床：僕が小学校3年までカチュー屋なんかも水タンクもあったよ、たまたま子供なんかがあれに溺れて死んだ。

カ：国のよ。市有地。これ前はヒラグラーだからよ。国の、国有地だから。売りもできないでそのままあるわけさ。

五：してこのオガングラーからこうして、こんだけ延びているのが古賀さんの土地？

カ：そうそうそう。丸野のイリー(西)まで。だからこの辺に住んでいる人は古賀から全部

分担して買っているさ。

床：ああ、あの一带皆んなよ。

五：はあー、これいつ頃買っているのかな？

カ：(昭和)30年位なるんじゃないか、、、あの時分までは道路だからよ。ちょうど27,8年ぐらいじゃないかな。

五：昭和27,8年？

カ：そうそうそうそう。

五：古賀さんはこっちを売ってもう、、、。

カ：そう。これはもう、僕の父なんかは戦前までが(古賀丸に)乗っているからよ。

戦前でもう古賀丸はもうやめる様になったから、戦後になって丸野の船に乗っているからよ。戦後に。

五：あ！古賀がもうやめたから、丸野に乗り移ったわけだ。

カ：そう。僕のおやじの場合はよ。僕の、古賀の船に乗っているのは、最後まで乗っているのは、あーは一徳嶺のおじいも、そのの。

床：あーだけどもう、亡くなったからな。

古賀丸工場の総監督、金城良正さんの父

カ：うん。乗っておったからよ。本当古賀の総責任はよ、金城良正のおやじがよ、古賀丸のカツオ工場のよ。総監督だったわけよ。

五：金城釣具屋の？

カ：そう。あのオジーがこれだけの古賀のカツオ工場の総責任だったよ。

五：工場の？

カ：そうそうそう。総監督さ、言わば。古賀は結局ヤマトにがおるから。この人にが総責任持たしておったんでないかなー、と思う。

床：これ昔の話になるけど、炭鉱流れかなんかしらんけどよ、結構カツオ工場にヤマトウー(内地人)がいっぱいおったんだ。製造人が。だから多分西表の炭鉱辺りから流れてきた連中が結構いた、この人らなんかもみんないなくなってしまったなあ。

カ：古賀だけが、本当の土地を持って、カツオ工場を持っているのは、八重山で古賀だけがであった筈よ。篠原なんかも借りてがやっていたからさ。丸野も本当はこれ自分の屋敷ではないわけさ。うん。

床：丸野の場合なんか、連名で土地を借りてたりしてるんだよ。だけど結局、皆んなもう、親の代が亡くなって、子供の代というか、丸野さん一人で結局ちゃんと税金払い続けて、、、。

五：あー！グループで市から借りて、このグループが分散して、この丸野が最終的には、借り入れて、代用借りをやったわけか。整理がつかない。

カ：古賀の場合は元々本籍がヤマトにおるから、売られるようになって、あんなして売っ

であるわけさ。

五：あー、あすこがわは売ることが可能になっている。でも丸野側はあのグループで買った。このグループの出資者がいなくなったから、。

カ：だから身元がないからよ、丸野も。

五：同意書がもらいにくいから、未だに、空白地になっている。

カ：古賀はこの大東亜戦争が終わってからはよ、昭和20年に終わったでしょう。

それでもう古賀はカツオ船はもうやらないわけさ。戦後なってからは全然。戦前まではやっているわけなんだよ。船もあったから！戦後まで船持っておったからな。戦後は青山がな、このカツオ工場も、カツオ船もよ、借りてやっておったんだよ。でも、青山がやらんようになったから、この土地も全部処分してあるわけだ。もう船も古くなっておったからな。

床：カミジュー兄さん、この青山というのは何処の人？

カ：お父は与論（島）。戦前、僕の親父は古賀のカツオ船に乗っておるからわかるわけよ。尖閣にも行きおったからよ。あっちで船入れるところも、古賀丸が入れるように作ってあったから。戦前はバカドリな、あそこに行ったらアホドリを持って来おったよ。

床：僕らも食べた。バカドリ、カチュードリ、。

筆：古賀丸は何人乗りぐらいの船だったんでしょうか？大きさとかは。

カ：あの当時の、今の船の計算なら、トン長に直せば、10ト、いや5トぐらいの船だな。10トはない。5トよりは大きいけど。今のマグロ船から考えたらな。

五：機関は？

カ：焼玉、25馬力！ポッコンポッコンしておったなあ。

床：ああもう、あの時分はみんな焼玉さもう！

五：昔は帆で走らせて尖閣まで行ったって話は聞いていない？伝馬船で。

カ：大昔はやっておったかもしれんが、尖閣にあんな船はいないよ。行ったという話は聞いてないよ。大昔は、歴史上は行ったかもわからんけど。西表の樹を採るってよ。三本柱の伝馬船が西表の材木を積んだりするのは昔からあったが。

床：尖閣に行く時に、燃料を計算して、風があつたら帆を立てたとかこれはわからない。

カ：また、あの時分は突き船以外はあそこには行かないからよ。

五：カツオ船は？

カ：カツオは時期時期にが行くわけよ。で、また船が走らんだろ、25馬力なのに。

古賀丸は、10トはなかったけど、マギーグラーだったからなあ。

篠原の船も戦後には大きい方だったからよ。乗組員は20名近く乗っているよ。

与那国のクバ採り、尖閣産チャーギ(イヌマキ)

炭：与那国ンチュウ(の人)はクバ採りにが行きよったさ。

カ：イユクワサーからハンメースガヤーからイキマガカリから、ユツタイ(4人)はおる。

4人は別に必要だから25名位になるよ。

床：それと不思議なのは、宮前幼稚園でわかる？ あの幼稚園の中柱は尖閣から採ってきたちゅう話だ。金城の兄さんもよく話していたが、誰が尖閣にチャーギを植えたのか。

五：自然にじゃないの？

床：自然に！ はあ。宮古あるだろ、宮古にはあんな資源はない。でもあそこの瓦葺の家には全部チャーギが使われているそうだが、ほとんど向こう(尖閣)から採ってきたっていう話よ。

炭：あっちからがあるかよ。西表からよ。

床：石垣は西表があるからわかるけど、それが不思議なんだよ。

五：幼稚園のチャーギはどのくらいの大きさがあったの？

床：宮前幼稚園のあれは、こう。見事なものだったよ、お前。

カ：人一人では全然抱ききれんかったよ。中柱の2本よ。

床：あれは誰が貰って行ったのかなあ。

五：尖閣から出してきた。

床：そう、尖閣から。

カ：戦前は夏だけがあっちに行きおった。カツオ漁の合間合間によ。カジキは別の時期に行く船はあったけど、古賀丸は行かなかった。篠原が行ったのは戦後だ。あそこは戦前から親父がやっていたから、戦後も突き船なんか出来たわけ。

筆：仲田さんはお爺さんの時代から、ここに移ってきているのですか？

カ：いや、僕の親父の時代からここに来ている。ここに来て最初に生まれた姉が生きていたら93才超えるぐらいになるから。100年前ぐらいに来ている。

筆：じゃあ大正の始めぐらいに来ていることになりますね。

カ：戸籍を見ないとわからないなあ。アハハハ

炭：戦前にはわしも尖閣に行った事があるさ。イケマガカリ(エサの生簀係)をやっていた時分な。17,8ぐらいの年になるか。

五：尖閣のクチ(掘割)あるでしょう、あれ本船は入れるの？アンカー降ろして、伝馬で荷は降ろしたわけ？

カ：満潮でも入れられんかや？

炭：いや、入れられん。けど、横付けできよったさ、水深は深かったからよ。

五：いやいや、イケマガカリをやったというから、あそこに魚を降ろしたの？

炭：あらん。わたらの前の人たちはあそこのカツオ工場の跡みたいなどでやっておったけど、(自分が)行った時は視察でだったと思う。

カ：戦前は僕の親父の頃はあそこでカツオを釣っているけどよ。大東亜戦争でもう戦が激しくなって撤退して、戦後はもうやめているわけさ。だから(尖閣で)カツオやっているのは戦前まで。

五：おじさんはこっちの島には上がらなかったの？

炭：いや、上がらん。家グワの作られたあとはあったが。あの時分は与那国ンチュウがクバ採りに上がっておったさ。与那国のあの着物つけてよ、見たさ。

床：与那国のあの行事に着けるよ、なんと言うかな。小さな碁盤の目の模様の着物よ。独特の今でも着ける着物なんだが、宮良のアカマターの時もその行事の時だけ着けるでしょう。小浜もそうだ。

五：そんな着物をつけて、上陸してクバを採っていたと。しかし一体何に使うのかね。そんなにまでクバを。やっぱクバ笠か？

床：たぶんそうじゃないか、クバ笠じゃないか。

五：与那国に生えてるクバだけで充分じゃないのか、わざわざあんなにしてまで、、、

カ：昔のクバ笠というのは帽子と同じだのに、カツオ船に25名乗っていたら、25名全員がクバ笠をかぶっている頃だよ、今は安全帽とか色々あるが。

床：与那国のクバ笠というのは特別なクバ笠なんだ。どこにも無いんだ。与那国のクバ笠はああいう作りで、頑丈でいてキメが細かくて深みがあって、海人に対してはあれがもう一番なんだ。

カ：カツオの釣り針も付けられるようにちゃんとなっていて、アカ扱むのもクバ笠でこうして扱みよった。昔はクバで帆を仕立てて曳縄でカツオも釣りよった、アハハー。僕も古賀丸に乗ったことがあるよ。小学校2年の夏休みだったな。カツオを釣るのを見せてもらいに行った。デキラングワ(勉強が出来ない)でチブルがない(頭が悪い)からよ、もう親父が船に乗せて仕事を習わせにその頃から行きおったからよ。

炭：だから与那国の人が見えてよ、島の後ろの方にはね、イモもサトウキビも植えられてあるそうだよ。後ろは平坦な場所があるさ。

ヤギの話、東京都の尖閣購入への淡い期待

カ：今はもうヒージャー(ヤギ)もしたたかいる筈だよ！

床：あのヤギはもう何もかも食べて大変だって川満安次が言っておったな。上陸の許可を貰えたら、駆除しないとイケない筈だよ。

炭：あそこにはまだ石垣市何番地という碑はあるのかな。

五：登野城一番地だな。昔からあそこは登野城一番地になっている。

炭：だからあそこにまだ碑があるかと聞いているわけさ。

筆：番地の碑はあると思いますけど、写真だともっとずっと下った番地なんです。嵩田よりも下って2390番台が尖閣の番地になっている。

炭：したら戦後になが直してあるのかなあ。昔は古賀商会在管理してあったわけだよな。

カ：役所で古賀丸の登記簿でも見ることが出来たらすぐわかるのになあ。

五：今は内地の人が所有していて国が借りているわけでしょう、現在は。だからヤギの駆除にしても上陸の許可をそこから貰えないとしようがない。

カ：結局は国が管理しているから、上陸できないわけでしょ。国が(ヤギの駆除を)命令し

たら上陸できるわけでしょ。

床：今は古賀さんから譲ってもらった人が持つてるわけだけど、この人は東京都の石原都知事と友達らしい。だから東京都に買って欲しくないかと言って、慎太郎は買って良いと言っているわけだ。(尖閣が)中国と日本の外交問題になって、日本は強気に出れないわけだ。慎太郎はこれが歯がゆいわけよ、なんで自分の国の領土を、そのまま放っておいたら中国に盗られるわけでしょう、今でさえ中国は自分のものだと言っているのに。(東京都の購入騒ぎが起きていた頃の聞き取りである)

カ：だからなあ、韓国との竹島みたいになったら、あとはもう盗られるわけさ。尖閣列島も石油が出るって話になったから、今こんなになっているでしょう。さっさと昔に灯台でも建物でもきれいにやっておけば、今こういう事にはなっていないわけだよな。復帰以前はみんな上陸してるわけさ、台湾人は卵なんか取っている。

海鳥の味

床：あれ何に使ったんだろうね、お菓子の原料かな。

カ：味は普通の鳥と変わらんよ。ただ魚食っているからよ。

炭：臭いがなあ。

カ：臭いがするだけであって、中身は何も変わらん。僕らが南方に行っている時は、卵チヤンプルー炒めみたいにして食べよった。ただ魚臭いんだよな。

五：何島だったよ？

カ：プラタス。もうこんなにいるよ、海岸に。食べ物も無い時代だから美味しかった。

五：(尖閣で)漁をするぶんには保安庁は何も言わないの？

カ：魚は関係無いよ、右から左よ。上陸するしないが問題になるのであって。

筆：仲田さんたちは、伊是名島から来たんですか？

カ：そう、伊是名の字勢理客。浦添市長だった儀間光男と一緒に。

筆：お父さんたちは、カツオ釣りでここに来たんですか？

カ：そう、カツオ釣専門で渡ってきた。夏はカツオ船に乗って、冬は農業をやっておった。

五：垣花シンカはいたかな？

カ：垣花はおったな。今の宮城のところに垣花小屋があつてよ。あれらもカツオ釣り専門に来ていた。

五：行ったり来たりはしていなかった？

カ：いや、もう寄留していたよ。戦後になって行ったり来たりの人はいたけど。戦前の人たちはほとんど寄留だ。久高ンチュウもそうですよ。戦後になって若い連中が出稼ぎみたいに来て、あの時はカツオ工場には寝るところも作ってあったから、みんなそこで寝起きしていた。時代だな、もう何もかも無くなってしまった。

南海商会の話

床：古賀丸の場合はでも、カツオだけじゃないでしょう。カツオの前は海鳥の羽毛を採ったり、糞を肥料の原料として採ったり、。

五：ヤクゲー(夜光貝)もやっていたかな、あの棧橋のところにお店があってそこで。

カ：あれは南海だろう。古賀丸がやっていたという話は聞いたことがないな。

床：あの南海は元は古賀さんが作った会社だったのかなあ、あとで南海になったんだけどその以前は？

カ：それは俺は分からんな。

床：この亡くなった黒島安助さんなんかやっていたでしょう。僕らが覚えている時分はあそこは南海といって、シナグラー(貝殻)も買いよったし、海人草も買いよった。

カ：あの人は最初は南方行きに乗っていたんだよ。あとからが南海に入っている。

炭：南海があったところは。元の古賀の屋敷(古賀商店八重山店)があったところだよ。

床：丸野のうしろだよ、友助兄さんなら分からないかなあ？同じ内地の人間だからな。

筆：黒島安助さんは南海商会に長らくいられたのですか？

床：そう、もうずっと南海だった。南海商会にいた連中はもうみんな亡くなっているんじゃないか。もういない。

筆：扱っていたのは海産物が主だった？

床：ほとんどが海産物だったね。

筆：南海商会の主で照屋清栄さんという方がいました。

床：ああ、あの人がこれ(親分)だったよね。

カ：あの人はここでは余り目立たなかった。商品の管理なんかの監督は黒島安助さんとかそういう人だったから。

床：南海商会の話は友助さんならわかるんじゃないか。

カ：友さんは昔の話はやらないよ。お坊ちゃんだからな。

床：しかし古賀さんのことを考えると、あの明治の時分どうやって本土から八重山にまで来るようになったのか。海産物を商ったというのが、品物をどういうルートで捌いたんだろうな。

カ：あの人はどこの人なの？

筆：九州、福岡県の山の中の八女というところから来たらしいですが。

床：何年前かなあ、古賀さんの関係者が那覇の松尾にいと聞いたことがあるよ。なんとか写真館の近くと言っていた。そんな話を聞いたよ。

カ：古賀さん自身はこっちはいなかった筈よ。僕らの記憶にある時はもうこの工場は金城の親父(良興氏)に総任せやられているからよ。だから見た事はないし、那覇にがおるか本土にがおるか分かんわけよな。カツオ工場の主が古賀さんという話しか分らんわけだ。

床：僕としては、カツオ船の主というより、海鳥の羽毛だったり、鶏糞を集めたり、古賀

さんというのは何かの商売人だった感じがするな。

カ：だからカツオ船があっち行っても、海鳥のな、親父なんかはおみやげによくバカドリを2,3羽持って来よったよ。殺して食べれつって、アハハ。

炭：臭くて食べられないよ、あれは。台湾の人ならば料理上手いから、臭みを抜いて食べるだろうけどよ。鶏糞の話なら波照間が本家本元だよ。

台湾船、発田氏のこと(尖閣でのカツオ節製造)

カ：復帰前は台湾船がもう全部卵を採るって上陸するわけよ。

炭：台湾中国の人は何もかも使うからな、捨てるところがなんにもない。

五：復帰前は台湾船は尖閣によくいたわけでしょう？

カ：あー、尖閣どころじゃないよ。与那国にも散々いたよ、船すぐ着けて密輸しておったんだから。

五：尖閣に中国船はいつ頃来たのかなあ。

炭：見えんよ。石油出るようになってからの話だよ。

カ：復帰前は台湾よ。夜中に着けて来て、ものを交換するわけよ。ポンカン酒わかるか？

炭：あれは甘くて美味しいんだが、飲んだらメクラなるよ。メチル入ってるから危ないよ。

中国もの、台湾ものは気をつけないと危ないよ。

筆：カツオ船の親方で、戦後に与那国から石垣に来た発田重春(ほったしげはる)さんという方がいますよね。この方が昭和25年頃に1,2年だけ尖閣でカツオの納屋の跡を使わせてもらってカツオ節を作っていたという話があるんですが、盛海丸という船で、高良先生が調査の時にそれで行っているんですね。



戦後魚釣島でカツオ製造を行った発田重春さん

カ：そういうことがあったのかな。発田の船はこっちに来てからは、日向丸に全部改名しているからよ。僕はあそこのエサ取り10年やっているから、隅から隅まで内容はわかるわけだよ。

筆：当時の新聞に書いてありますから、間違っていないと思うんですね。与那国の船が石垣から尖閣に行くことはなかったのでしょうか？

炭：うーん。当時は与那国にも鳩間にもカツオ船はあったからよ。

筆：当時尖閣の納屋でカツオ節も作っているそうですから、人数がいると思うんですね。

当時の人でお元気な方がいればよいのですけど。

床：戦後？

筆：昭和25年です。

カ：昭和25年には確かに(発田は)こっちに来ておるよ。ただ僕らはそこまでは知らない。ヤマトの兄さん(長兄発田貞彦)の子供だったら、わかるかも知らん。重春さんの一番上のお兄さんがヤマトで大きくやっていて、そのお陰で重春さんもうやくカツオ船を持てたんだから。与那国から来て、7年間かな、漁も余りなくて、その時に雇われ船長の

新垣さんが僕の兄さんのところに来てから、僕らにエサ採りをお願いした。僕の兄さんがエサ採りになって、もう漁がなかったら那覇に引っ越すしかないと計画しておった。7年間やっても年に10万斤も釣れなかった。ところが僕らがエサ採りになって、14万斤も釣らしたわけ。それからもう立ち上がって、(石垣島から)動かんわけさ。そうして儲けたものだから今度はマグロ船に手を伸ばしたら、それで首括ってるわけさ。

マグロ船経営の失敗

筆：これは失敗しちゃった？

カ：そうそう。あとはもうね。手っ取り早く話をしたらよ、八重山で大型マグロ船を作ったのは発田さんからだったからよ。沖縄本島のマグロ船が台風で飛ばされているものを買って、僕らも降ろしに行ったよ、船浮(西表)で座礁してよ。のし上げているのを買って、それで造船場に持ってきて直してからがよ、それで那覇に持って行って、最初は大漁したものだから、1つ2つと増やしていったわけさ。

床：あの時八重山はカツオ船が何十隻とあったわけ、ところが発田さんが儲かっているのを見ているものだから、別のカツオ船の親方連中も金を出しあって、株で何かでマグロ船を作ったんだけど、みんなパーよ。あれで殆んどのカツオ船まで潰れてしまった。

カ：10年もエサ採りしておったからよ。ずいぶん儲けさせたよ。兄さんは(次兄発田喜平)はもう釣れないからって、那覇に行ってカツオ節の商売をしているわけさ。

床：あの時分まではカツオ節は高級品だったな。みんなが買って。今はもうだしの素とかが出ているでしょう。

カ：カツオ節は特に人が要るでしょう。昔はこんな小さなカツオでもみんなお金になったんだよ。花カツオにしてよ。全部あんなにして売りよったわけよ。昭和34,5年ぐらいまでだな、このだしの素が普及しないうちは。こういうものが出てからが、カツオはどーんと落ち込んでいるわけさ。大東亜戦争の頃まではカツオは相当売れている。だから宮古のカツオ船も南方まで行っていた。またあの時分のカツオ船は借入も簡単だったんだよ。船が担保になるから堪えないわけさ。2,3年で払いきれたらすぐ船代はきれるわけさ。船が担保だから保証人も負担がないし、造らせる人も多かったんだよ。

炭：戦後はガリオア資金といってよ、アメリカの補助で、米松みたいな材料で造ってたよ。杉じゃないわけさ。アメリカの木材だったよ。

五：これ、欠点はないのかい？

カ：いや、特に変わらん。八重山ではカツオ船が2隻だな。湯浅とナビサグラーが30トンのガリオア船を持っていた。あと2隻は南方船がだよ。湯浅は与那国のヤマトウーだったよ。

炭：湯浅はヤマトウーよ、戦後は海賊しておっただろう。有名よ。

筆：発田さんの船に乗っていた方というのはもういらっしやりませんか？

カ：もういないよなあ。

筆：仲田さんのお父さんの頃に来た時は、カツオ釣りのグループで来たのでしょうか？

カ：もうあの時分は大概(伊是名)島で働く場所がないから、色んなところに出て行ったんじゃないの。

筆：もう八重山に来る前からカツオ釣りの技術は習得していた？

カ：そう。若い時は潜りもやっておっただしけど、潜りだけでは飯が食えないからな。

筆：古賀丸のことを覚えている方というのは、

カ：もうみんないないなあ。おっても84,5以上の人だけだ。

山根セイイチ やまね せいいち

山根セイイチさん宅で、カジキ突き船基本丸の乗組員について、お話を伺った。山根さんは篠原の船には乗っていないそうである。

※山根セイイチさん：山

(基本丸の集合写真を見てもらいながら)

山：これはあの、仲村ミチヤと言って、ここにおるんだけどよ。

五：今生きてらっしゃる？

山：いや、亡くなった、、はい、、、この人は伊礼さんかなあ。

五：伊礼。はあ、当たってるなあ！

筆：山根さんは写っては？

山：僕はその当時コックだけどよ、写っていない。

五：誰か生きている人がいればねえ！

山：みんなこの人も、え一つと名前なんと言ったかなあ？コウチョウ、コウチョウ、、浦崎！

五：浦崎。はいはい、当たってる。

山：だろう、これは荻堂さん。この人が仲村コウリュウでないかと思うんだが。仲村ミチヤの兄さんでね。この人は伊礼かなあ、、はっきりわからない。

筆：60年近く、前ですからねえ、、。

山：写真を長らく見ていると、ぼ一つとしてきて、見えなくなる。

五：イヒヒヒッヒ

山：これは琉大の先生？高良鉄夫！これの、弟の亀助と同級生だよ。コックは誰かなあ？

五：あの青年見せてごらん。コックらしい青年。

山：いやあ、わからん。

五：じゃあ浦崎を見せてごらん、浦崎さん。

山：浦崎コウチョウやい。

五：間違いない？

山：間違いない。

五：これは誰かわからない？誰か、生きている人探してるけどよ、誰に聞いたらわかるかなあ？ 当時の突き船、冬の突き船なあ。で、尖閣行っているわけ。

山：もうみんな死んだよ、、、あのよ！山城マンキチ！あの人が昔突き船乗りなんだよ。

五：どこ？生きてらっしゃる？

山：うん。だけど、足不自由でさ。

五：家はどこねえ？ 山城マンキチ。

山：この通り、行ってよ。瓦葺きがあるからね。

五：山城、はいはい。よしよしよし！

山：あーそうだよ、あの人 1 人しか会わない、突き船。あれはもう、向こうの姉さんが荻堂さんの奥さんだからね。

五：じゃあ詳しくわかるかもしれん。

山：もーう残ってるったらあの人 1 人ぐらい。

五：ありがとう。

ま：ありがとうございます。

山：懐かしいなあ。昔を思い出す。ご苦労さん。(山城マンキチさん宅へ)

山城 満吉 やましろ まんきち (87) No. 1

山城マンキチさんはカジキ突き船の突き手として活躍した方であり、カジキ突き船基本丸の乗組員について、ご存じの方がいないか見ていただくと共に、ご自身の現役時代の思い出等のお話を伺った。

※山城満吉さん：山、山城さん奥さん：奥

やはり懐かしい面々

奥：テレビは消した方が良いですかね？

五：どちらでも、、はい。

奥：ああ、じゃあ、画面だけ。この人、耳よ補聴器もあるけどね、入れたらもうワーラワーするって言って、補聴器はかないんですよ。

五：あー、合わないのかあ。

奥：だから私も、声が大きくなっているのよ、ウフフ。

五：昔の事は少しは憶えてらっしゃいます？

奥：えー！昔の事はよう憶えているんですよ。最近はまだ、もの忘れも多くなったけど、言葉はちゃんと順調にしますよ。

五：この方たちよ、船に乗ってらしたって！

奥：父ちゃんメガネかけてごらん！だー。コウチョウ兄さんよ。

山：浦崎って。

奥：えー、これは！並！あっちの人でしょう？ 並里の、長信でない？

五：並里の長信！

山：これナカムラグワに顔が似てるなあ、これ！

奥：うん、そうそう。ナカムラの兄さんだなあ。、父ちゃんはいない？

山：入ってないな。

五：この人並里長信？

山：あ、そうよ、この方。この人は間違いない。

奥：そう、並里長信よ！うちの弟と同級生さね。

五：この人は？ 荻堂の。

奥：あー荻堂の！えー、荻堂のヤッチー(兄さん)よ！ あり！

山：んー？！ 荻堂のヤッチー！？ ホォー、これ荻堂！

奥：えー、荻堂のヤッチーよ！ 若い時だから格好良いさー。

山：マラソン！ アハハ。

五：あー！ 荻堂マラソン走るつってよう聞いたよ。

奥：マラソン上手の！ アハハハ！

山：これ石垣でナンバー1 よー。

奥：これよー、姉さんの旦那さんさ！ 荻堂のお母さんのよ。

山：これ荻堂のヤッチーヤサ、似チョール。こっちは浦崎コウチョウ、浦崎。

奥：そうそうそう、浦崎のコウチョウ兄さんだねえ。並里も出ているし、ああこっちはわからん！ 父ちゃん見てごらん、。父ちゃんわかる人？、。

筆：、、この方々は本島からの学者の先生たちで。

五：この人らなんかは、だから琉大から来て、尖閣に上陸させて一って。

奥：ふんふんふん、尖閣にが上陸ね。

山：尖閣列島に？

五：皆さん突き船の、シンカなんですね。マチデーグワの船？

山：はあー！ 僕はマチデーグワの船に乗っていたど。

五：あー！ はいはい、僕の家。僕の家突き船！

山：ほおー！

奥：えー！ マチデーグワで、あの突き船やって、尖閣諸島に行った？！

山：うんうん。

奥：あー、そうねー。

五：うんうん、話は良く聞きましたよ。

山：(五男さんの)家に、トリグワ(海鳥)持って行ったさーやー！

五：うんうん！そうそう！

奥：鳥持って来たって？！

五：僕の家におみやげ持って来たらしい、

奥：あのオウムみたいなのねー？

山：オウムやー、あれー、南方！バカドリ！

五：僕の兄弟のところに持って来ているわけさ。

山：憶えてるど！

五：僕の家から、出帆して行った、、鳩間でトビウオトゥヤーしたり、シジャーも 獲ったかな、尖閣でマグロ船もやって、失敗してるわけさ！

奥：あーあ、そうね。

五：もうみんな死んでしまったけどね。マチデーグラーの次男です私達。次男マチデーグラー！ クルミ屋のすぐイリ(西)ーヤケーよー。

山：次男マチデーグラー！

五：はいはい。

山：長男マチデーグラーの船からよ、ハンメースガヤーはじめた。

五：おーう！ そうねー。僕の兄貴の所だ。

山：で、あれが名が、何と言ったか？

五：イワオ？ イワオ？

山：んーん、イワオじゃない。

山：アダ名ー、あれ付けておってよ。

五：ミンタマー(目ン玉のこと)！

山：ミンタマー、ミンタマー、はー

五：はいはいはい。僕の兄貴ですはい。4,5年前に死んだですよ。

山：あれ、マサオがおじさんは？

五：あの人も死んでいる。ここの船はあの人がかけてあるよ。米軍基地からスクラップ貰って来てね、戦闘機のワイヤーよ、当時のプロペラ機の戦闘機のワイヤーケーブルを、こっちに沢山(持って来て)あって、このワイヤーケーブルで、こっちで道具作って、、。

奥：あー！ 荻堂のヤッチーなんかねえ！ コウチョウ兄さんなんかあれだねえ！カツオ船に乗って。

山：冬は向こうにおって！

五：あの時に沢山いた？ カジキは？ マグロも食わした？

山：んー、向こうは突き船だよ。

五：ああ、突き船でがが！ はいはいはい。

山：バレンー(バショウ)沢山おったど、クロカワと。

五：クロカワもいた？

山：色々だよ！わった一色々したんど！トビウオトゥヤ(獲り)もやった。

五：トビウオトゥヤーもやった。波照間で？

山：トビウオよ、いつも満船したよー

五：マース敷き(塩蔵)？ 氷敷き(氷蔵)？

山：んーん、氷敷きだった。

五：氷敷き、は一は一。でも、もう余り金にならんという失敗したと言うさ。

台風で沈んだらしい。

五：(写真に戻る)わかりそうねえ、見たらわかる？

山：思い出がある、思い出がある！

五：オバァーわかるんじゃないかねえ？ これ誰？

奥：うん伊礼！ 松ちゃんオジーさー！

山：伊礼なあ！ ああ、あの人にが似ちよーる！

奥：松ちゃんオジーよー！ 亡くなったよ、もう。松ちゃんオジーもカツオ船乗っておったのねえ。

五：ええ、あれ大きな人だったんじゃない？

奥：うんうん！ そう！ 背大きいよ！ うん。えー松ちゃんオジーよー！ カツオ船、篠原の船に乗っておったの？！ マチデーグラーの船に？

山：マチデーグラーの船には乗らんよ。

五：篠原の船に、おばさんこれ、この人誰？

奥：ハンサグイみたい、似ているねえ！

山：ハンサグイな一、突き船の船長よー。

奥：あの時までねえ！ ハンサグイのオジーだ筈！ 眉が濃ゆいから、はあー！

山：ワッター(私ら)マチデーグラーの船にも乗っているよ。

五：このマチデーグラーの船は何丸だったか憶えていますか？

山：んなもん忘れおってるよ。

奥：コウチョウはそのままだねえ。父ちゃん、隣近所だったからよ。

山：もう本撒きの専門、、エサ投げやる。

奥：父ちゃんよりシージャ(先輩)？

山：ああ、そうさあ、自分よりシージャーさあ。

五：並里さんはお元気？

奥：並里の長信は！ 若い時にほら、今も元気です。

筆：もう1枚のも見て貰えますか？

奥：長信だ筈よ あれ、今も顔変わらんさ！ えーコウチョウ兄さん！

山：え一、これよ！ 全くであるさ！

五：これ並里？ 長信？

奥：長信、うん。やっぱり、顔、うん顔がね、今でもこんな顔よ。これ別の人だねえ、帽子かぶって、大学？ ここは、どこかねえ？

尖閣諸島に関する思い出

五：尖閣。

奥：尖閣島！ はい尖閣諸島！この尖閣諸島よ！ みんな日本のなのに、中国がねえ、

自分なんかの、自分なんかのしてよー！

五：トートー、あれ(魚釣島の)石垣まで見せて、自信付けさせてあげて、アハハ。

奥：昔は皆んな行っただって言うしねえ、この松ちゃんオジーなんかもよ！

山：こっちは古賀の小屋、カチュー屋よ。こっちにあったよ、この島グラーに。こっち
にが突き船皆んな入っていった。

奥：ここまで皆んな行っただねえ！ 皆んな昔はねえ！ 尖閣諸島で魚釣っておったん
だ！ あー。これは突き船だよねえ、長いから。

山：これクバジマ(魚釣島)、

奥：ああクバジマ

五：あの石の家よ、あったでしょう。見た覚えあるかも、こんなに家があった？石垣が
あったかねえ？

山：上陸せんからわからん！

五：ああ上陸していない。遠くから、遠望だなじゃあ。

奥：納屋のある所がは上陸したわけ？

山：島には上陸せんから。潮の流れ、ムル(大変)強さによー。

奥：潮の流れが強い、あー。

五：これ、中国に知られても、「お前今頃作ったもんだろう！」と言うから、言葉と一緒に
にねえ、これは自分だー！って言うのを！証拠として、どうしても残さないといかん。

奥：昔から石垣島の尖閣諸島は日本の一つってよー、わかっている筈だけど、なんで今ま
でずーっと、あんなにー

五：石油が出てからややこしくなってる。

奥：ねー！ 厄介！ えー、この島から石油出るわけ？

山：んー？ 石油出るってー？

五：だから中国も台湾も、自分のものって、。。

奥：そうって、自分のもの。台湾もねえ韓国も皆んなもう、なんかあの地図見てわかる筈
なのにねえ！

山&五：アハハハハハ！

奥：厄介よねえ、早くやらんと何か！ あの建てれば、良かったのよ。だらだらするか
ら！ 後々これなんかに先手を打たれるのよ！

五：これ本当にまずいよ。まあ名前は殆ど一致したねえ(基本丸の乗組員)

山：この茅屋がやってあるなあ！ こんな家無かったのに！

五：あー、無かった？

奥：あとからが造った筈よ！

筆：いや、これは明治の写真ですから、。。。

奥：えー！ 明治って！？

山：昔？ 昔には写真写さん筈、。。。

奥：いや、明治時代に造ってあるってよ！

山：明治？ アンシ(感嘆詞)、自分らは昭和だからなあ。

奥：こんなのもほら、中国なんかに見してあげたら良いんだよ、台湾に。

五：これからはこんな写真だけじゃなく、あなた達のような証言が必要になるわけですよ。

奥：あーそうねえ、父ちゃんなんかもほら、海でちゃんと魚捕っているから、あっちにも行っているからね。

3代続けて使われたチャーギの材木

山：古賀がよ、古賀の名前は何と言った方だったか、。

奥：カツオ工場をやっておった、あの尖閣諸島で？。

山：うん。

奥：この話をずーっとするさー、うん。うちなんかおばあちゃんがいる時もよ、向こうにも納屋造ったよーて、言っていましたよ。

五：焙乾屋あった？ 焙乾屋。ちゃんと乾燥してが出しよった？生ガチューが出したのかな？

山：乾燥がだ筈よ。これ(明治の頃の写真)は、はっきりはわからんさ、俺なんかより先だから。

奥：私なんかもね、台湾生まれだから。この人の奥さんになって初めて、色んな、この人が聞かしてよ、うちのお父さんなんかも、篠原の船に乗っていましたからよ。亡くなったけど。

山：だから、あの古賀の焙乾屋から出た、あのチャーギ(リュウキュウイヌマキ)よ。

五：はいはいはい。

山：元の家を建てるときの材木がよ、アガリグヤ(現登野城)の人から家買って、それを崩して造ったんどー。その家によ、このチャーギが入っていたさ。

奥：ああ、ハナンマヤ(屋号)、あのセメン瓦の家買ってよ、して持ってってよ、この屋敷の元の家を建てたのよ。

五：この、尖閣にあった古賀のカツオ屋の材木が、。

奥：えー、あのハナンマヤよ、お家の中にチャーギがあったわけ。

山：うん、家によ。

五：尖閣から出して来た？

山：そう、納屋の。納屋の、焙乾屋に入っていたのよ。だからチャーギよ、真っ黒くやっていたよ。そのままそれを使ってあった。

五：は一ん、3代使われたわけだね！じゃあ。あの、尖閣で使われて、ハナンマヤで使われて、こっちで使われて。

奥：焙乾屋のあとだから、黒くして色があったんですよ。

五：これはもう廃材にしてしまったの？

奥：おう、みんなもう、全部デイコワ(壊した?)しているさ。2本入れてあったけど、ムル(皆)デイコワしてあるねえ。

山：そう。しょうがないよ。

五：持って行く人がいておればなあ。

奥：だからねー。ハハハ！ あーんなのわからんからねえ。

山：ユンボで崩してから持って行ったよ。

五：あれねえ、あの、あれの片割れか知らないけど、幼稚園の中前にもあったんですよ。

宮前幼稚園の中前。尖閣からのチャージと言っていた。

奥：へー！うちなんかも、あったのにねー！ あんなの、前もって調べんから、わからんよー。平成9年にこのお家作ってあるから、建ててあるからよ。

五：じゃあ、私ら今から並里の長信兄さんに会って来ますね。

奥：ああ、そうそう。私もほら台湾生まれだからね、14歳に来て、12月の台湾引き揚げで。それでこっちに来て働いて、上京もして、して18、19で結婚しているものだから。それで色々お父さんから。だけど、親戚のね、皆んなあれはわかるんですよ。あの松ちゃんオジーもおったからね。うちのあのお母さんの兄弟。あの伊礼良精よ。だから並里の長信も若いけどね、この人だ筈よ、今でもそういう顔をしているのに。アハハハ。そう75,6になるさ。うちの弟と同級生だよ、国吉のよ、うちのお母、うちのお父さんも乗っておった。篠原の船に。お父さんも乗っておりましたよ。国吉松吉と言ってよ。

五：じゃあ行ってみましょうね。

奥：ごくろうさん、はいはい。(並里長信さん宅へ)

山城 満吉 やましろ まんきち No.2

最初、基本丸の乗組員を訪ねる目的で伺った際に、山城さん自身もまた尖閣へ出漁していた経験を持っていることを知った。尖閣での漁労は金城五男さんの父親正弘さんの船に乗船していた時期だそうである。五男さん自身もまた尖閣について、個人的な思い入れがある。尖閣でダツ追込漁が始まった経緯を、父正弘さんら、マチデーグラー(五男さんの実家、網元の屋号)兄弟が深く関わっていた事を幼少の頃より聞かされていたという。

無人島：尖閣諸島での漁労

五：それでねえ、おじさん昔はマチデーグラーの船に乗って、尖閣までカジキ漁行きましたでしょう。

山：あーあー、無人島(尖閣のこと、どうやら戦前世代の漁業者は尖閣を無人島と呼んでいたようである)な。うん、トゥブー(トビウオ)採り、シジャー、カジキ、、、。マチデーグラーから初めてやったよ。あんなとこで追い込み網やるなんてよ。

五：はいはい。

- 山：トビウオ一日よあれで、えー、何万尾も揚げてたんだよ。運搬船に載せて。
- 五：これ沖縄(本島)から？ 運搬船は？ トビウオ載せる母船が来たわけ？
- 山：うん。ウチナー(沖縄本島)から来ていた。
- 筆：カジキはどんなにやって捕ったんですか？
- 山：んーあれ、モリで。突きん棒。
- 五：で、あそこで母船に積んでいたと。何日ぐらい航海したんですか？ 尖閣での仕事の期間は？ 1週間以上かかりました？
- 山：それは、えーっとあん。月に15日は足らん位。それで水揚げは、母船に、糸満から来ていた船に満船してね。
- 五：母船は沖縄から来て沖縄にすぐ戻る？
- 山：うん。鉄船の大きな船だったど。一打ちの網でがよ、1万尾は獲ったど。
- 五：これ何を捕った？ 魚は何だったのですか？ トゥブー？

追込漁の漁場は、波照間と尖閣

- 山：もう追い込み網でよ。船2艘で追い込んで、、、
- 五：はい、追い込み。これ魚は何だったのですか？ トゥブー？ ビカー(スズメダイ)？
- 山：ああ、時期によって違うから。シジャーもやったよ。多くはトゥブー、波照間でもやった。無人島での漁がダメだったら、波照間の沖に行く。波照間がダメだったら、また無人島に行く。そうして魚を母船に積んで、母船は沖縄と行ったり来たり繰り返す。
- 五：たいてい現地(漁場)で母船と合流ですか？
- 山：母船は沖縄で水揚げして、また戻って来るさ。
- 五：石垣にも降ろすことはなかった？
- 山：いや、ここには集まらんかったよ。
- 五：ふーん、そうね。であの、無人島(尖閣)には15日位いたわけ？ 上陸とかしませんでしたか？
- 山：無人島には、、滅多に上陸はしない。鳥を獲りにしか上がらんよ。アハハハ。あその鳥は沢山いたから。
- 五：誰か上がった人見たことある？ 台湾船とか、台湾船の人が上がったのは見たことあります？
- 山：台湾船、、、台湾船はあまり見とらん。
- 五：見えない、、戦後何年だった？戦争終わって何年だった？
- 山：終戦5,6年位はやったんかねー。
- 筆：追い込みのシンカというのは糸満の方だったんですか？
- 山：んー、機関長はよ、ナカイマという人だったが、わからんさ。シンカは、シンカは5名位おった、、玉城の爺さん、、玉城のアグースー(屋号か?)、僕より年配は2人ぐらいだった。

五：戦後5年と言うと25才位という事だな。それで、尖閣と波照間の行ったり来たりだったわけ？

山：うん。波照間行くでしょう、僕らはここ(石垣)から詰め込み(出港準備だろうか)さ。連絡してよ。みんな呼んでからよ。

五：連絡して、、その乗組員は5名位？シンカは。

山：そう。波照間からは1人、僕らはここから4人。

五：この船の名前は何だった？ なに丸？

山：あー、思い出せん。

筆：この船は木船だったのですか？

五：木船で間違いないね、FRPはずっと後からだから。

山：僕らの仕事しとる船は木船で、何トぐらいかな、サンパン(三板船)だよ、、、。

筆：カジキの場合も母船積み込み？

山：あー、モリで突いとった。

五：1日に何本捕った？ 出来る時は。

山：1日に何本？、、、突いとったけど、、これまではチブル(頭)が覚えておらんさ。

五：うん、で、これは母船に積んだんですか？

山：母船に乗せおったよ。無人島な、あそこはバラ浮きよ。

筆：じゃあその時は沖縄送り？

奥：話はどうですか、わかったー？

五：こっちら辺に、もっと船員は生きている人はいない？ まだガンジュウ(健在な)船員はいませんか？

山：みんな亡くなってしまうているよ。僕一人残ってしまった。

五：ああ、オジー1人、、宮古からは来なかったかな？ 宮古からワジャ(漁労)しに来なかった？ 宮古の船はいなかった？ 見えなかった？

山：うーん、おらんよ。

五：そうですか。僕の親父が糸満からのシジャー獲りにあすこ(尖閣)で合流したと言う事を聞いているんですよ。今日はおじさんの話を聞けて嬉しかった。

筆：あと、カジキは冬ですよね、夏は何をやっていたんでしょうか。

五：トビウオ獲りじゃないか、、、あの、夏は何をしていた？ トビウオ？

山：うーん。トッピー、シジャー。カジキもやったが。一本釣りも色々、、、。

五：あー、色々獲れるねえ。

山：魚な、相当いたど、、、。ああ、今思い出した。兄さんと会うのは2回目だ。

奥：ああそう？ うちもおった？ 母ちゃんおったー？

山：うん。

五：だから聞き逃しがあつたから、今度来たわけよ。

山：だー、あの尖閣列島の話の人たちだよ、、、。

カツオ工場の話

五：あの、無人島じゃなくてね、ここ新川にもね古賀のカチュー屋(節工場)がなかった？

山：ああ、古賀、うん。丸野の西側にあったよ。

五：この古賀は戦前にあったわけ？

山：僕は詳しくはわからん。戦前に潰れているからよ。倒産。

五：潰れた、ああ戦前のうちに潰れた。

山：倒産。ここにも、無人島にも納屋があったそうだが。あの、水タンク。カツオを漬けるでしょう。向こう(尖閣)にも向こうにもらしき跡がポツン、ポツンしてあった。

五：ああ、尖閣には納屋があったからね。こっちの工場の話有谁か分かる方いないかねえ、サンダー屋のオジー、太郎オジーだったらわかった筈だけどもなあ。

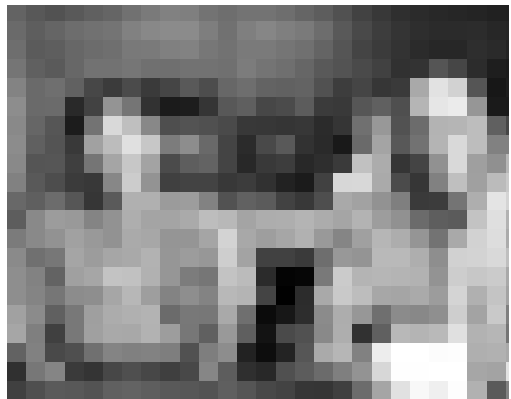
奥：だけど亡くなったでしょう。サンダー屋のオジーだったら、隣近所だから、。

五：もういないなあ、、、じゃあそろそろ行きましょうね。今日はありがとう。おじさんが健在で安心しました。

並里 長信 なみざとちょうしん (77) No. 1

並里さんは、冒頭写真に写る、カジキ突き船基本丸の乗組員でお話を伺うことが出来ただ一人の方である。現在では仲田鮮魚店の二軒右隣に並里鮮魚店を営んでおり、氏自身現役で刺網漁をされている。当時の思い出を中心に話を伺った。

※並里長信さん：長



右が並里長信さん、左は金城五男さん。

自分の顔も忘れてるさ！

五：こっち座って。覚えてる？(冒頭写真を見せながら)、こっちにハンサグイのオトー⑩がいるでしょう、ほら。

長：であるなあ。

五：こっちは浦崎コウチョウ⑦。

長：コウチョウおじさん。

五：こっちは荻堂さん⑧、親父さん(並里さん)はこっちにいるさ⑩。

長：これが僕か。顔も忘れてるさ。ほんで国吉のオジー⑮もおったけ

どな。

五：国吉さん、誰だろうね。この人は伊礼の松ちゃん兄さん⑨。覚えてる？

長：(写真を見ながら)ワッター(私ら)シンカ(仲間の意)だけではないさ。

五：そうね、この人達(写真手前の人々①～⑤)は学者だって、ウミンチュウ(海人、漁師の意)ではない。それ以外がウミンチュウなわけ。このかたは誰かわからないかな？



50年前の並里さん

長：これよ⑨、機関長だったよ。

五：伊礼の兄さんは機関長、船長は誰だった？

長：だからね、ナイチャー(内地人)だったけど、名前は何だったか。突き船はよ、前(突き台)に2人立つさ、立ってよ。面舵は船長でよ、取舵はこの人⑩だったさ。

五：2人で(突き)棒持って立ってるわけだ。

長：そう、絶えず立っている、クニシ(国吉)のオトーはこれさ。国吉と言ってよ。

五：今生きている人はいる？

長：んーんん。機関長はなくなった。この人は仲井の徳兄さん⑬、沖縄(本島)に引っ越した。この人⑫は仲村のミチヤの兄さん。この人⑩はあとから船長しておった。これ⑨が伊礼機関長、荻堂⑧、浦崎コウチョウ⑦、この人⑪は宮城ジュンコウさんのとこの婿だったか、この人⑭はわからん。この人⑥もわからない。わからんさー。

当時は 15,6 の見習い(コック)だった

五：この時は長信兄さんは幾つだったんですか？

長：15,6 よ、とにかく中学生ぐらい。なんで今頃あんな、あれこんな写真が出てくるよ。

五：このね、一緒に行った大学の学生なり先生方がね、一緒に行った方々は元気にされているのかねと、もう自分たちも年で。

長：あの時はよ、僕はコックだったさ。飯炊き、だからあんまり詳しいことはわからないけどよ。これ今座っているところはクバジマ(魚釣島)さ。

五：上陸した時の(写真)。

長：クバジマ(魚釣島)にも上陸したよ、トゥイジマ(南小島)にも上陸して、あのオオミズナギドリ(カツオドリか?)よ、ハッサーモウ(感嘆詞)、あれ捕って食べて美味しくなかったのだけ記憶に残っているよ。

五：やっぱり美味しいもの？ 海鳥は。

長：これよ、拵えるのもよ。脚を、ちょっと腿の方から切って、あの竹(の管)でよ、管入れてよ、皮と肉の間に管入れてよ、プーッと吹くわけさ。吹いたらよ、皮と肉がよ、こうバリバリバリバリと外れていく。人の息の力で、して、これ膨らましたらよ、湯がいていちいち羽なんか脱がんさ。

五：ああ、皮にくっ付いて来るからね。

長：バリバリと身と皮と外れるからよ。お腹の方からよ、パッと包丁で皮さえ切れればよ、身だけスッと、して頭落とすわけさ。首まで剥けるさ。

五：今じゃあんな真似は出来ないからね(カツオドリやオオミズナギドリ、アホドリ等の海鳥はレッドデータ指定を受けていることを指しているのであろう)。貴重な体験だこれは。

長：肉も硬くてよ、美味しくなかったのを覚えているさ。バカドリを捕るのは、必ず崖の絶壁におるから、見られんように下から上がっていくわけよ、人が。

五：すごい絶壁なの？

長：上がれる位の所があるから、あんまり物凄い絶壁は人が上がりきらんさ、もうあの時分からアホウドリは少なくなっておったよ。してよ、1メートル位の棒よ。あれを持って行って、こう蹲っているあれでもよ、人が突然出て行ったら、直ぐにはパツとは飛ばんさ。ガーッと行って羽を広げてよ、首伸ばして、羽ばたきもしないで黙っているよ。黙っているからよ、棒で首一回ポンとしたらもう終わり。だからよ、昔の人はこれなんか羽毛なんかを使うと言って採ったみたい。簡単に採れたんだよ。これ採るの簡単だったばーよ。だからもうこれあのバカドリと言うさ。アホウドリ。

五：この時はカジキで行ったの？

長：夏はカツオで、冬はカジキ。突キン棒だった。今写っているのは突き船さ。

五：これ何月に行った？カツオ終わってから？

長：終わってからだな、冬だったかな。トトトーこれ。(船の写真)

後ろでカジキを見つけたらよ、花金は3倍なんだ

五：テンマ(伝馬船)で荷降ろししたわけ？ テンマに載せて行って。

長：そう。してよ、こっちに見張り立つわけさ。して、船員は前から横まで全部見るわけよ。俺一人はよ、後ろ見れって任命されるわけさ。僕は後ろだけ見るわけよ。カジキ見つけたらよ。見つけてこのカジキ取るだろ、一本幾らで花金グラー(ご祝儀、懸賞金、ボーナスの意か)が付きよったわけさ。して俺は後ろだけを見るから中々当たらないわけさ。しかし、後ろで俺発見した場合は、花金3倍ばーよ。

五：おー。

長：アハハハ。花金3倍さ。(後ろの位置は)もう見捨てられてるような物さ。して、俺は後ろだけを見とけよと命令されていたものだから。



カジキ突き船基本丸、船首の突台にモリ手が立ちカジキを突く。並里さんは15、6歳で乗り込み炊事係り。(新垣秀雄 1952)

後ろで見る時があったさ。これよ波間のよ、これのこの背骨(背ビレ)よ、サツとの瞬間だからよ。ずーっと出てあんな泳いでいる物ではないさ。波の上(を)上がったたり下がったりする所の一瞬でよ、サツと、この一瞬を見ないとよ。

五：して、あそこいるいる！って指さすわけだ。

長：指さしてる間にもういないさ！へりはもう見えんさ。だけど向こう！って、言って、こう船廻して行ったら背ビレは出ていなくても、色でもうすぐわかるさ、色で。背びれはもう一瞬でいないよ、だから色で、沈んではいないからよ、船一回廻して行ったらすぐ色でよ、見えるわけさ。だから俺は後ろの見張りだから、俺は3倍なわけよ！して、

カジキ見たわけさ。

五：あー、見えた

長：ほんで見てよ、「ハァ、ヤー、チューバーヤサー」（この場合眼や勘が優れているの意、大した奴だなあと、褒められた。）言われたんだよ。あの船員なんかによ。チューバーってよ、俺よパッと半分はもう勘にもよるわけよ。あれ、あれはカジキのヘリだった筈だがなあていうよ。アイッ！という瞬間もうパッと行って船廻していたら、案の定おるわけさ。アハハハ。

五：じゃあ見つけるのの名人、チューバーだった。

長：そうだなあ、だからもう乗組員がよ、あんなに後ろだけ見ているのによ、あんなに見ると言って褒められたよ。

五：(右の掘割の写真を見て)、これはダイナマイトでかな？

長：これよ、人が掘ったんだよ。今は中国のものと言ってあんなに叫んでいるけど。昔はこっちの丘の方にカツオ工場の跡もあったさ、ワッターが行くまで石垣も積まれてよ。

五：この(船着場)広さというのはどのぐらい？広さはそれほどない？

長：ないないテンマが漸く入るぐらい。

五：昔のカツオ船みたいに沖泊りして、テンマでカツオ運んでいたのかもね

長：そうそう。

五：あと先生らが言うには、トリシマに上がったら海が時化てしまって。

何日か閉じ込められた。

長：大海に突き立っている島だから。

五：この時は突き船はどうしていたの？

長：そうそう、クバジマは単に大きい島だから、北風が大きい時は島陰になる南側に回す。時化てるから沖には絶対行かん。

五：1週間ぐらいいたの10日ぐらいいたの？

長：10日ぐらい、大漁していたら1週間で帰るけどさ。

五：ああ、漁のついでに島に降ろして貰ったわけだ。

長：(尖閣に)行く船がおるといふことで、頼まれたわけだ。わざわざ先生なんか。生徒なんかだけ乗せていくわけ無さ。

五：じゃあ(先生方は)便乗したわけだな。備船ではない。石垣島から出る時に神酒を飲んだという先生の話があるけど。

長：内航海では、(お神酒を飲むことは)ないよ。けどもこの航海はたまたまオブザーバー(普段乗らない異人といふことか)が乗るといふことでだよ。



魚釣島の旧古賀村前の堀割り、沖に見えるのは基本丸。調査団を迎えに来る所、手前は調査団の荷物(新垣秀雄 1952)

五：祈願したわけだ。

長：そう。けども、普通でもお酒は船に乗せておったさ。一日の、これ昼の仕事だからよ。突きン棒は昼の仕事だから。日が暮れたら島陰に来てアンカーを下ろして休むさ。その時に刺身と酒グラー。俺はもらわなかったけど。子供だから。

五：(並里さんは)篠原のジャコ(カツオ船のエサ魚)採りもしていたわけ？

長：うん。あの時カツオ船のハンメースガヤー(見習)、あとからにジャコトヤーになった。ジャコトヤーは篠原はあんまやってない。用徳(具志堅用徳氏、新川在のカツオ船主、具志堅用徹氏の父、具志堅用高氏の親戚)がよくやる。

五：トリシマにはみんな上がったんだよね。

海鳥のタマゴ

長：うん。クバジマが見えてた。トリシマのタマゴもよ、珍しいわけさ当時。タマゴをたくさん採るさ、採ったらよ。今度はあの3個以上よ、全然食べられない。これがもう日夜茹でて籠に入っているわけさ。鳥の茹でタマゴが大きなパーキに入れられてるから。食べている間に慣れて、今度は5個も6個も食べられるようになるわけさ。段々よ。毎日！もう毎日あるから。

五：体が慣れてくるわけだ。

長：最初はよ、もう3個目ぐらいから鳥の糞の臭いして、もう臭くて。多く食べても3個までだな。

五：アーハハハッ。

長：それで食べなくなるさ。でもよ、ところがひもじい。茹でタマゴがここにある。となったらよ、自然と割って食べるわけよ。

五：体がもう割ってしまうわけだ。

長：してよ、(そうなると)免疫がもう慣れてる筈よ。

五：ウーフッフ、ハンメー(飯米か)になるわけか。

長：慣れるまでは全然あんなに食べられなかった。茹でタマゴもよ。

五：生では食べなかった？

長：生では食べたことはないな。

五：でも当時ウミンチュウが採るぐらいではあんなに落ちて(海鳥の生息数であろう)はいかないでしょう。他の原因でね温暖化とか魚がいなくなるとか、そういう大きな原因があつてでしょう。

長：あれは人間だはずよ。アホウドリは。

与那国から突き船、糸満からシジャー獲り船が

五：八重山からは他に、何艘ぐらい突き船行った？与那国からも行くでしょ。宮古からも行くでしょう。

長：宮古からはいなかったけれども、与那国から。

五：マチデーグラーはいなかった？ 行ったとは言っておったけど。カジキ突きン棒ではなくてマグロ延縄やっていたと言う。僕の親の時代は終戦後すぐだな。

長：何時ぐらいかなあ、ワッターはもっと後だなあ。

五：そうか、僕なんかここは終戦して2年ぐらいしてすぐだからなあ。

長：沖縄からよ、イシジマグラー(北小島)かいよ。シジャー(ダツ類)よ、シジャー獲りってあの網でよ、網ではおったよ。

五：あのよ、最初糸満から来てよ、僕の親父なんかは(その頃)延縄やっておったってよ。そしてで会ってからよ、(最初は)シジャーが中々獲りきれなかったってよ。(八重山での)技術は僕らチナカケー(五男さんの屋号マチデーグラーは大正初期から糸満より八重山に渡ったチナカケー漁の網元の家系である)より下だから、それで(僕らは)チナカケー専門でしょう。これ獲り方教えたらしいんだよ。

長：シジャーのか。

五：そうシジャーの獲り方を教えたわけ。その代りに燃料を貰ったって。燃料を貰って技術を交換したって！ あんな事は僕の親父からよく聞いてたんだよ。(尖閣附近での漁は)突きン棒ではなくて、僕らなんかは延縄。

長：沖縄のよ、沖縄の船と言ってたけどな。イシジマグラー(北小島)の側で。

五：あれさ、カマボコ原料かね？

長：あー、わっからんさー、カマボコ原料あらんか。

五：本土の船はどうか、いたかな。

長：来ていない。一艘もない。

五：台湾は来たかな。

長：台湾は一緒に漁したよ。カジキ突きン棒。

五：台湾の突き船にはあれかな、沖縄の突き手が乗っていたりしたと言うけど。

長：うん。いたよ。(台湾突き船の)船長が沖縄の人。台湾船だけど、ウチナー口、要するに方言で情報交換。

五：国境なき島だな！ウフフフ。

長：中国が尖閣は自分なんかのだと言ってるけど、僕は一理はあると思うんだ。なぜったら、尖閣諸島はシナ大陸の大陸棚からの続きであるよ。して石垣島とよ、尖閣との間は切れ目になってよ。海深いさ！あい！(尖閣は)中国の大陸棚やし！

五：アハハハ、だけどよ世界中見ればよ、おなじ大陸棚に乗っている国でも国が違うところはたくさんあるさ。イギリスとフランスもくっついているさ、足はティーチ(一つの大陸に、という意か)だから、これでは決められんわけよ。でもやっぱり海の色は違うか、クバジマの向こう側は？

長：いーや色ではわからんよー、わからんわからん。

五：カジキはどの辺まで来るの、島の周りまで来る？

長：そう。島の周辺は特に潮目があるさ。この潮目にが、カジキが浮くわけ。潮目のない、島がないとこ、潮目のないところはよ。いないではないけど、そんなに集まる場所ではないさ。

五：バンナイ(多く)潮が立っているところに集まるわけ？

長：そうそう、そういったところに騒いでくるわけ。

五：なんかね、発田さんが昭和 25 年頃にクバジマでカツオを作っていたらしいけど、発田の船は覚えているかな？

長：発田さんはもう辞めて引っ越して長くなるよな。もう 40 年近くなる。発田重春といったかな。もうこの島(魚釣島)からはすぐ漁場だからな。

五：そんなに近い？

長：うん近い。またトゥイジマやイシジマグラーで、もう青い大海から突き出ている島が 5 つぐらいあるよ。もっとニシ(北)の方に行ったらアコウ(大正島)ってもあったよ。

五：あそこまで漁に出たの。

長：いんや行かんかった。宮古が近かったか、だけどよあっちの方には行かなかった。あのなんでかと言うとよ、アメリカの演習地だよ。

五：爆弾落とされるか、漁師の人は皆んな知ってたの？

長：組合から連絡がある。演習地と言うことであっちには行かなかったよ。

五：トゥイジマは上がって、イシジマも上がったの？

長：いんや、イシジマはよ、上陸できん。すぐ大海から突き立ってるさ、だけど 1 本ではないさ島よ。ポンと出てる一本ではなくて 2 本位出ていたよ、イシジマは。こういった島があるためによ。潮目が出来るわけさ。で、この潮目にジュウガジラー(スマガツオ)とかよ、トカキン(イソマグロ)やー、カジキだけではないドー、うんシジャーなども。

イーグンクバジマとは言うのかな？

五：あと、本に八重山の人たちは尖閣のことを昔からイーグンクバジマと言うと書いてあるけど、イーグンジマと言うのはあるのかな？

長：なかなかイーグンと言うのは聞いたことがないな、クバジマクバジマては言うけどよ。

五：やっぱりクバが生えているあの一番大きい島はクバジマか？

長：そうそうクバジマ。

五：トリジマはこれだよな。

長：そうそう、けども北側はもう少し大きい草地があった気がするけどな。そうして海側の石がごっごつしている上には六畳間位の箱がさ、流れ着いているわけさ。流れ着いてもう大きいぐらいの箱さコンテナ位の箱さ。あの当時はもうどんな宝物が入っているかと思った(ら)、空箱だよ、木の。して木の厚みも 4 寸位ある。板の厚みで。何かわからないけどよ、だわけよ！

五：印字は打たれていなかった？ 英字とか漢字が。

長：いや字は書かれているみたくは無かったな。いや書かれていたとしてももう剥がれているさ。相当波に揉まれてよ。それが岸の上にあがって来てから、丁度この草っ原の下の、こう、岩のごつごつした所によ、こう打ち上げられておった。最初遠くから見た時は何か宝物が流れ着いているなあと思ったわけさ。寄っていったら、空きただの木箱。

五：アハハ。でも長信さんが元気で良かった、一緒に行った先生で元気な方が、皆んどうしているのかなあと気にかけているってよ。

長：僕なんかは終戦が小学三年生で、あれから漁業だけだからよ。

五：すぐ海に行かされた、学校も出ていないのに。

長：そう、口減らしに海に行かされてウミンチュウに使われて。

五：家に帰って来てもヒージャー(ヤギ)の草刈り行かされて、話変わるけどさ。行った時に上運天さんと言う学生さんの1人がね、カジキが海鳥を食うのを見たらしい。それで「魚が鳥を食った話」という子供向けの本にした。カジキは鳥食うかな？

長：見た言うならだろう。カジキは必ずよ、潮目に向かってが行くさ、また波というのは潮目に立つからよ。魚はこっちにいると思うけど、船が中々突ん棒の竿が届くまでに近寄ることができない、魚の泳ぎ(に追いつくの)と船のスピードで間に合わないから、この魚(の速度)を緩めるためにはどうするかと思つたらよ、曳き縄で釣っておいた、カツオを、こう輪切りに切つてよ、カジキが泳いでいる前めがけて投げるわけさ。投げたら一時的によ、これをカジキが鼻(カジキの角であろう)でよ、投げたエサをよ、こう巻くってやってスピードを緩めるわけさ。その時に船が(追い付いて)来て、突ん棒で突くわけよ。して2人立っているところにエサ箱とってよ、カツオを切つて入れておつたよ。魚にエサを投げながら、船は必死で寄せるわけ。焼玉エンジンのシングルでもうポンポンだからよ。

五：6ノットぐらい？

長：中々もう、潮上に出れないわけさ！ だからもうカジキ止める為に、エサ投げ入れるばーよ。

五：鼻でやっぱり、あれマーンマーン(鼻先で突き上げる動作であろう)する？

長：すぐパクッとはいかんさ！ 最初はよ、鼻で。

五：生きてるのも飛ばされるときある？ カチュー(カツオ)なんかは。

長：うん。うん。して、落ちてくるところをパクン。落ちてくるときは鼻でなくて口だよ。サバ(サメの事)でもあんなだよ。サバが人食う時。

あんな時代でも、幸せではあったよ

五：これで大体の人の名前は分かったな。ありがとう。

長：ああ、みんな亡くなったか、沖縄に引き揚げていつてるなあ。

五：みんな引き揚げていくね。

長：八重山(の漁師)はよ、殆どが寄留民！ 純粹に八重山の方なんかは居ないよ。(登野城、

石垣、新川等の漁師部落を指している)、この人も伊平屋だし、この人も沖縄、この人なんかも伊平屋の人、だからあの沖縄本島から寄留民として入植している者だから、皆んな引っ越していくわけさ、本島に。もう 1 人、山城ってのがおっただけど、わっからんさー。

五：この方⑥は誰だろう？

長：特徴がある顔だけどなー、なんで思いつかんかなあ。

五：ハチマチしめてウミンチュウだよ。

長：うん。ワッター船にが乗っておったはずだけどなあ、思いつかんなあ。

五：カジキ漁ついでに(調査に)行ったわけだね。専門では無くて。

長：だからしょっちゅうは陸に上がらんかったよ。ワッターなんかでも。

五：降ろしてから、本来の自分の仕事をやって、帰りもまた乗せて行ったと。

長：またあの突き船はね、あんまり天気が治るでしょ、ベタ風なったら、カジキ浮かんば一よ！ して漁休みおったよ。普通風の時に漁するけどよ、突き船だけはそうでない。北東の風が 10メートルぐらいの風があった方が良いわけよ。北東の風と、ある程度海が時化てる方がよ、カジキ浮くわけさ。

五：普通の漁で何本位積んできたの、1回の漁で？

長：えー、4、50本ぐらいは積んだ。早くて1週間かもう獲れない時は10日位はやったけども、氷がある間は家帰らんのに、氷が無いとなったら、あんまり漁なくても仕舞いさ。

五：港に持って行って。

長：あの時分は那覇に送りよった。地元消費あらん。してよ、カジキなんかは長いからダンブル(魚槽)に1本そのまま入らんから切るさ、のこぎりで切って氷詰めやるけどよ、切り口もよ、カシガー(麻袋)にで包んで、紐で縛って氷詰めもやった。あんなにやっpegダンブルに並べやっpegよ。鼻も切って捨てて、尻尾も切って、合う様に切って。あんなして送ってたよ。

五：ほー、楽しい思い出だったろうね、今考えると。

長：今になったらなあ、だけどやっpegしよ、あんなあれでも、幸せではあつたよ、今よりはよ。喜び、楽しみ、だから人間の幸せはよ、生活力、お金だけの問題ではないわけさ。人のよ、心のゆとりつたらあの時分の方がよ、良かったみたいだよ。

五：活気があつてなあ。

長：うん。活気もあるしよー。

五：もう(カジキ)見たら、見つけたどーって

長：もーう、よー。したら花金が3倍だからよ！ 楽しくてアハハ、帳簿に付けてよー。

五：アハハハハ

長：やっpeg貧乏は貧乏でもやー、人の幸せは何にあるかはわからんよー。

五：そっかあ、並里さん色々ありがとうね。じゃあ帰りましようね。

長：いや、色々思い出して楽しかったさ。

並里 長信 なみざとちょうしん No.2

前回聞き取りの後、お礼に伺った際に、補足の話聞き取りしたので、抜粋する。

乗組員は全員地下足袋

長：あれから色々思い出したんだけどよ、カジキが動く様に船曲げんといかんからよー、
(乗組員)全部足袋が履いている。地下足袋よ、乗っている時滑ったら、舵取れんから。

五：滑らないで踏ん張れる様にだな。

長：舵取り、と言ってよ、配当よ、1人で何人分とかだった。機敏性のある人でないといかんわけさ。(カジキを追って)右に左にもう、、、。

五：誰が最初に海に飛んだの？(ボートを上陸させる為に、案内人が先に飛び込んで、島にあがってロープを結んだ?)。海に飛んだのは誰だった？

長：最初？ 最初は泳がん。伝馬(船)から。

五：伝馬から？ 誰かが泳がなかった？

長：ううん。あのよー、船下ろしておったらよ、魚が、アーガイ(ヒブダイ)の大きいのが、浮いて流れて来たわけさ。浮いとして、潜水病みたいになって、半分死になわけよ。これ捕ると言って、俺が裸になって、海に下りようとしたわけさ。船はすぐそばだから！アーツサヨー！クニシー(国吉)のオットーが、死にたいんか！って怒ってよ。一旦下りたらよ、船に戻って来れんぐらい、潮が流れているちゅうわけさ。

五：あー、あー、あー。

長：それで、次第次第にこう、船に(魚が)寄って来たから、縄よ縄、俺のお腹に縛って、要するに流れたら、これで揚げるつってよ。そうしてオモテから飛んでよ、捕まえて、すぐ船に乗りはしたけどよ、アーツシ！、、、。

五：それほど潮が流れているわけか。岸边でも凄い？ 危ないなあ、泳いでは中々渡れない？

長：あそこではよ、風に向かって船は向かない、潮に向かうんだよ。アンカー下ろしたらよ、(普通は)風が向くけどよ、潮目が向くさ。

五：それほど潮の圧力が、風より強いかな、、、6ノットぐらい走るかな、5,6ノット、黒潮が走った場合は。じゃあこの伝馬を漕いでいる時とかもすごい大変じゃないか？

長：誰が漕いだか、、、とにかくよ、これ(写真)から見たら、穏やかみたいだけだよ。この伝馬よ、船岸に着ける時よ、うねりみたいのがあってよ、岸に伝馬を当てたりしてよ、なかなか着けにくかった。

五：このメンバーで、前にも上陸した人いる。

長：おったみたい。経験者よ、、、色んな話しておったからよ。

五：あの別の島グワーによ、1人暮らしていた人がいたって言うけど、話していたことない？ 鳥グワーの羽採って暮らしていたって。

長：いや、、、僕なんかでさえも、あの大学教授なんかに乗らんかったら、そばまでは行くけど、陸に上がるという事は全然無かったからよ。

五：ほとんど用事がない、、、南洋から流された時は、上っているよ。ンブヤー(屋号)なんかよ、南洋から流されて、島陰に泊めて、アンカー下ろして、あのもう野草なんか食べて、クバ食べて、鳥食べて、水も沢山積んで、また帰って来ているわけ。流されて、コース滑って、帰りよ、南洋からよ、ナチョーラトウヤー(海人草採り)や一、流されて尖閣に行って、2日間暮らしていたって。

長：ワッターンナグワートウイ(貝採り)からよ、南方から戻る時、八重山が見えてこない。もう時間的には着いている時間だけど、島見一らん。どうにもならんてなったら、台湾に戻る。

五：台湾に行った？

長：台湾に行ってからよ、台湾の現場調べて、現在地を再確認して、またコースを取り直した。船長が台湾の何処って分かっているな。アイ！ここは蘇澳だ！して今度は蘇澳から八重山にコース取ってから、、、あっちはよ、向こうから来る潮の方が、多いらしいさ。台湾から行く時でも、ずーっと、宮古ぐらいのコースに向けないと、八重山に着かんば一よ。

五：尖閣へは何時間かかったね、これ？ 1昼夜かかった？

長：そんなにはかからんさ、そうだなあ、夕方出て、朝は現場には着きおったよ。12時間ぐらいかなあ。12時間、13時間、、、。

五：船も(潮に)乗ったかもしらん、黒潮に乗ったかもしらん。

長：尖閣まで90マイルではなかったかなあ。

五：90マイル、170キロだから、、、。

長：90マイルぐらい、、、与那国が90マイルだったかなあ。

五：台湾の船に乗っていた船頭は？ 沖縄の人だけ？

長：いや日本本土の人がも船長しておったよ、台湾船はよ。だから台湾船だけど、会ったら日本語でも喋りおとった。

五：は一、結局(台湾から)引き揚げもできない人が乗っておったのかな。

長：引き揚げないで、残っていたのではないかなあ。僕なんかも台湾引揚者だからよ、戦後が。

五：この人ら(内地人船長)も台湾で突き船やっていたわけか。

長：うん、やってたなあ。

五：あと、このカジキは、冬には何航海ぐらいしたの。

長：何航海ぐらいやったかな、航海数までは憶えていないな。大体1週間ぐらい、長い時は10日ぐらいで、氷無くなったらお家にがだったからよ、食糧な、何も持たんよ！米と味噌だけ。

五：アハハハ！ 野菜は？

長：んーん。朝から晩まで、魚だけ。

五：脚気かかるなあ、野菜なしで、グンボウ(ゴボウ)でも載せれば良いのに、デークニ(大根)とか、

長：無人島、、、お昼漁に出たらよ、ご飯炊かれなかった。お汁なんかも炊かれんから、朝に島から出る時に、ご飯炊いて、お昼は現場でよ、刺身だった。刺身とご飯だけ。帰って来てから、夕飯またあのお汁沸かして、食べよった。

五：風の時はどうした？ 曳縄しなかった？

長：曳かんさ。うん。いやあもう釣れた筈だけどよ、その代わり漁に出たら、曳縄引っ張った。ジュウガジラーからトカキンから、大きなナガイユからよ。全部おかずさ。商品はカジキだからよ、だからもうあんなのでは仕事しない！

五：氷が勿体ない

長：全部おかず！ 親方関係無いさ、乗組員で分けよったさ、カジキ以外の魚は。

一本釣りのオモリは3合瓶。

五：亀はいた？

長：いた筈だけど、泳がんからな。潮が速いから。でも向こうには魚はなんでもいたど。(水深)60メートル位のところからよ、プープーグー(クルキンマチ：底物魚)よ、食わせたよ。今考えたらよ、(一本釣りの)オモリよ、3合瓶なんだよ。何故かしらんけど、3合瓶が島にいっぱいあったさ。これに砂詰めて、湿らして使った。

五：なーにこれ？

長：考えたら石でも良かった筈だけどよ、わざわざ3合瓶に砂詰めてよ、これをオモリに魚食わせてるんだよ！

五：あー、はー、瓶が沢山あった？古賀さんの時に醤油持って行ったんじゃないかねえ。

長：何の瓶かわからんさあ。

五：醤油と、酒か？、昔はあそこで鳥の羽を筆ったあとに、こう肉を絞って油だけを絞り出して、瓶に詰めて商品にして、売っていたらしいけど、その瓶なのかなあ、、、どんな瓶だったの？ 相当に古い感じ？ 酒3合瓶フージー(様な物)？

長：油絞ったのまでは、分からんなあ。

五：あの瓶の形は、今のビール瓶と一緒？

長：、、、何か、首が長かった様な気がするさー。ずんどうの首か何か細長い様な記憶があるけどよ、わからんさ。

五：鳥はどんなの見たの？ 海鳥は(カツオドリ、ミズナギドリ、アホウドリ、3種の写真を見せながら)

長：これはあんまり見なかったな、、(アホウドリの写真)。主にこれだった(カツオドリの写真)。

五：黒いのが多かったか、カツオドリ、タマゴを食べたと言うのはこれのタマゴかな？

それとももっと小さいタマゴかな？

長：うん。小さいの一も、これのタマゴなんかも、もう色々。

五：そうかあ。そろそろ帰ろうね、ありがとう。

3B 見たり、聞いたり

八重山漁業者の中の尖閣諸島

さて、前節を見て貰ったわけだが、漁業者の間で語られてきた尖閣諸島の姿は、テレビや新聞、書籍等から得られるいわゆる情報や知識とは大分違うようである。我々が知り得る知識というものに比べ、彼らの話はある一方では具体的でありながら、また一方では漠然としている。各漁業者らが持つ、尖閣のイメージとはそういうものかもしれない。読み難い文章で申し訳ないが、願わくば、彼らの喋っている様子を想像しながら、読んで頂ければ幸いである。

金城 正松 きんじょう せいしょう (75)

金城五男さんの兄さんである。金城さんらは大正期に八重山に渡ってきた糸満漁民、追い込み漁集団、マチデーグワァーの末裔である。戦後、父(金城正弘さん)の代に尖閣での漁業を行ったそうである。正松さん自身も追込漁を解散してのち、曳縄漁で尖閣に通ったそうである。尖閣で見た魚影の話はいつしか、八重山全体の水産資源の減少へと進む。水産資源の減少はおそらく尖閣の漁場にも関係がないことではない。

※金城正松さん：松

糸満でも評判だった 追込漁集団マチデーグワァー

五：尖閣の話聞かせたらいいさ、これ尖閣のあれでが来ているさ。

松：ほう。僕も、何日か行っておるけどね、一晩泊まりだよ。

筆：尖閣へ行かれた時というのは、もうカツオでは無くて？。

松：あの、サワラ！ サワラ専門に釣りに行って、一晩泊まりだよ。

五：昔(1950年前後)は僕らの親なんかマグロ船で行っているわけさ。

松：ああ、あれ採りに行っただよ。何と言ったかあれ。燐鉱？と言うか？

五：燐鉱石か

松：うん、あれ採りには行っておるよ。親父は。

五：で、どこに持って行ったか？ これ。

松：わからん。とにかく採りに行っておる時、聞いて、あのイチユマン(糸満)よ！、イチユマンからシジャー(ダツ類)獲りに来ておったらしい。で、獲りきれないで、親父がおると言うのを聞いておったから、お願いに来ておったらしい。船一杯になすまで教えて

くれと。

五：そして燃料をもらって、その代わりに自分たちの技術を糸満に教えたというわけ。という事は糸満の技術より、潮目でのシジャー追いは、こっちの技術の方が上だったという事だわけ。

松：だから親父の評判は糸満にも響いているわけ。親父は八重山でも一番だと聞いているから、お願いしに来ておったって。わざわざ船付けて来てこういう事でやったらしい。

五：だからあの(尖閣での)シジャー漁と言うのは、わかってはいるさね、全部学者なんかだよ。糸満から行ったというのはわかってはいるわけさ。だけど当時は初めてじゃないかなと、技術を習うぐらいだからよ。

松：うん、戦後、戦後だよ。

五：戦後でしょ、戦前から行っていたら技術習う必要無いもの。

おみやげはアホウドリの幼鳥

松：燐鉱石採りに行っている時というから戦後だよ。で、帰りがけは、バカドリよ！ あの幼鳥を、小さいの持って来てたよ。覚えてないか？ 庭に。

五：だから僕全然覚えていないわけよ。エへへへ。

松：あの頃はなんか台湾の船も着けてから、お菓子屋に持って行ったら買ったらしい。あのアホウドリの卵よ。

筆：石垣のですか？

松：いや、あの台湾に持って行って。

五：だから台湾の船が卵取りに来ていた。

松：で、全滅して。僕があとから行った時には2,3羽おった、アホウドリ。

筆：持って来たのはどんな鳥ですかね。3種類ぐらい海鳥の写真がありますが、

(オオミズナギドリ、カツオドリ、アホウドリ等を見せる)、

五：幼鳥だから黒いよ。

松：この種類(アホウドリの写真)、この種類が。

筆：じゃあこれの幼鳥だから、黒い奴を。

松：そう黒い、黒い。真っ黒いよ。

筆：じゃあ結構大きいと言うか。

松：だから大きかったですよ。これ(成鳥の写真)はもう船から見てるから飛んでいるのは見たけどね。

筆：これ何年頃？

松：僕は最近行ってあれだから

五：増えてるってよ。尖閣で親父なんか何採りに行ったんかな。マグロ船と僕は聞いているんだけど。

松：ああ、マグロ船はこの辺ではやったけど、向こうまでは行って無い筈よ。

五：尖閣行ったと、言った乗組員がよ、いたからなあ。

松：今、残っているのはよ、あの。ユヌシーと言って、平良さんと言って伊原間におるさ、伊原間に。

五：あー！ うんうんうん！

松：あの人の弟が、弟。ユヌシーって言ってあの人は宝徳丸(マチデーグラーの所有するマグロ船)のコック長をしておったさ、あの人は行っている。だから何回か、あれ戦前から(シンカに)おった筈だからよ。

尖閣へ燐鉱石採りに

五：で、何しに行っていたと言ってたの、尖閣には。

松：だからあのこう、何って言うか、燐鉱か、採りにってのは聞いたけどよ。

五：鳥の糞？(グアノか)。そしてこれどこに持って行ったてか？

松：だから分からんよ、小学校1,2年の時の話だよ。

五：小学1,2年てったら、台湾から帰ってすぐだ。あの頃に船あったのかね。

松：あったんだよ。あのね、戦前から船はあるんだけど、戦争始まったら軍から没収だよ。没収して戦後ようやくサーバントして、ようやくこの船が使えるようになったんだよ。

五：戦前からの船を取り返して、これ乗って行ったのか、ほうー！

松：あったあった、おう。

五：氷はいつごろ供給されたのかな。

松：マグロ延縄は確かにやっているけど、尖閣には、、、あの頃はマグロは沖縄には運んでいない筈よ。氷漬してもよー、毎日入るものでもないのに。1か月に何回位しか入らない。

五：これより4,5年あとのよ、基本丸よ、篠原の船は氷漬けで沖縄送ったそうさ。

燐鉱というのは鳥の糞を採りに行ってるわけだな、鳥のタマゴとかじゃなくて。

松：鳥のタマゴ採りにじゃあなくて、燐鉱を採りについでにこれを持って来ている。で、なんて言うのあれ、トカラアラービャー？シュウダ(臭蛇)と言うの、あれが沢山おったってよ。あれを皮剥いで乾燥して持って来ておった。干物みたいにしてよ。

五：それと山城(満吉さん)って言う人はよ、あの人も乗っていたって言ってた。

松：そうあの山城のよ、山城は兄弟2人おったさ。1人は屋慶名で、1人は今元気かな、今車椅子乗って歩いていただけ弟の人は、兄さんは亡くなったよ。

五：元気元気、この前会って来てよ。

松：山城って兄弟2人、上のおじさんの名前はわからんけど下は太郎太郎しておったよ。それから、もうあの頃に乗っている人なんかはほとんど亡くなっていないんじゃないか。残っているしたらユヌシー兄さんぐらいだよ。

五：なにが島外に出してはいる筈だよ、じゃないと意味無しにあんなとこ(尖閣)に行くわけではないからよ。鳥糞でもどっか仕入れるところが。

松：ああ、買う人がおったからが行ってるさ。それは当り前のことさなあ。2,3回は、とにかく行ってるよ。僕が言いたい事はわかるよな、これ。1回行ってまたあとからまた持って来てるから。

五：アホウドリの事だな。

松：うん、アホウドリの子供。

五：何回か持って来ているわけね。終戦後何年位なるかな。

松：何年位なっているかなあれ。

五：15歳位じゃない？台湾から帰ってくるのが小学生ぐらいでしょ。したら中学生ぐらいじゃない？

松：はあ？僕小学生の6年位から追い込みやっているのになあ！6年の時分から親父と海やっているのになあ！15歳なるわけないさあ、ほら！

五：はあ、6年たら13？

松：おう、数えで13だろ、11？それでずっとの間やって。

五：んなら10歳位に来たとして、昭和何年ごろだ、23年位か。その最初の頃に行った時は魚じゃなくて燐鉍石を取りに行ってた。

松：うん、そう聞いている。そうして後はマグロ船したかもわからんけど。

金城家、庭でアホウドリを飼う

五：連れてきたアホウドリよ！羽を切ってどの位生きてたかね。

松：うん、あのね、向こうでは火は見たことがない筈だから、今はこういう風にしてあるけど(後ろの台所のコンロを指して)、前はあのこう地べたに土で作った、薪燃やしていたら火の中にも入って行きよったよ。中でパタパタやってよ、ハハハ、火という物自体がわからんわけよ！だから僕なんかアホウドリと言わんでバカドリと言ってた。えー、これなんか本当に馬鹿よ一火の中にも入っていくのと言って笑っておったけどね。タマゴも他のタマゴよりもちょっと大きいぐらいだけどね。あの一食べたら魚の臭いした！あの一白身よ、白身は魚の臭いしよるよ。魚を食べているからかはわからんけれども、魚の臭いしたよ。あのシュウダよ、乾燥したら油が出るだろう、油を貯めて持って来てよ。傷に塗ったり色んなものに上等ってからよ。

五：シュウダか、臭い蛇と書くらしいよ。触ったら鱗の間から臭い臭いが出るみたいね、尖閣に行った先生で南洋帰りの人がいるけど、そこで蛇の料理の仕方ならってたんだな。シュウダもキャンプ(尖閣調査での)の時は上手く料理してね、食べたら味は美味しかったらしいよ。

松：あーあん。あれ別に普通は臭くない筈だけど、なんか敵に、敵に襲われたらなんかフーッと興奮すると出したろうね。

五：だからもう皮剥いたら普通に戻っちゃうわけだ。

松：あんなに乾燥して持って来る位だから、わざわざ山に登って採りに行かないでもウジ

ヤウジャおったんじゃないかな、あの頃は多分。乾燥して持って来る位だからよ。

五：あすこはもう鳥が幾らでもいるから、たっくさん、蛇にとっては天国みたいなもん。鳥もいっぱい、タマゴもいっぱい。

松：八重山からタマゴを取ってきたのはその、わざわざ採りにじゃあないけど、ついでに持って来てるんだから、台湾船はわざわざこれ採りに来とったってよ。タマゴ。

五：なんかなあ、もう準備してなあ。

松：うん。なんかなあ聞いたらなあ、この頃、皆んなあのお菓子作る所が買い込んだってよ、だから幾らでも採りに行っている。それであのアホウドリは全滅に近かったんじゃないか。

五：台湾の人が一杯上陸するから、当時琉球政府が問題にして警告板も建てたんだよな。

避難港の話

松：そういえば、昨日も行こうとして帰って来たんだ、ヤスジがよ、(川満安次さん、川満さんは石垣市議員と共に度々尖閣に行っている)、あの市会議員何名と。

五：川満安次？ アーク時化、(日)選んで行けば良いのに。

松：で、戻って来てるわけ。引き返して来たんじゃないかな、今は時化てるから。

五：ふーん、上陸するつもりか。

松：3日前か、氷3つから4つ乗せたよ。何しにか一言って、「いやあ傭船よ、傭船よ」、とは言っておったさ、ヤスジはよ。

五：行くのは良いとも思うんだけど、あんな時化て、選んで行けば良いのに。

松：今から冬はちょっと厳しいよ、向こう(尖閣に行く)は。

五：長信兄さんが言ってたけどよ。潮がもの凄いらしいな。

松：視察して、避難港を作るとかなんとか言っておるけど、避難港あったら、あの一番近い島グラーがあるさーな、タッチウの(南小島の事か)よ。これのこっち側、ニシ(北?)側しか出来ない。もし、避難港を造る時は。

五：遠浅なっている所もあるわけ？

松：そうそう。だから最初のこのタッチウ島グラーのここの方がね、浅瀬さ、ここは。だから、ここしか無いよ！ 皆んな！もうここにおける(泊まる)よ。前、あの一、尖閣をどう利用するかというような会合が、那覇であったのに。その時に行って、ここしかないよー、と話しはしたんだけどよ。

五：あれ相当急ぐべきだけどな、あんなのパーっとメインにやるべきだと思うんだけどよ。して、またあと10年たったら、また10年前にやれば良かったということになるから、サッサとやったほうが良いよ、もう。

松：アンシ、あのその時に日本政府が、ちゃんと、あれ、、やっておけば、、良かったんだけどなー。

五：アハハ、チンタラチンタラしてからに、、、空中分解。あー、音波立たしたくないと

いうよ、あれが、あって。近付けたくないという。

松：中国が台湾とのあれがあって、それがあって、。

五：刺激したくないという。

松：あの頃までは、まだそんなに、中国は尖閣を重視しておらんかったんだよ。は一もう、最近が石油が出るということで重視して、自分の領土だ一って、頑張っているけど、その頃まではそんなあんじゃない。だから、その時に早く、手を打って、やっておけば後々は、そういう事になるってのを計算してやっておれば良いのに、いつも、後手後手に回っているだろう！

アホウドリは格好良いんだ

五：そうだな。。話戻すけどアホウドリを自分で見たのはいつごろだった？これカツオドリとかよりは全然大きいよね？

松：もう！絶対大きいこれ、全然だよ、普通のカツオドリとは違う、(カツオドリは)しょっちゅう羽ばたいているけど、(これは)1回2回羽ばたいてるだけで、ずーうーっとうしているのに、グライダーみたいに。これすごい本当に格好いいよ！

五：じゃあ本当に優雅になわけだ。

松：あれ見て、蘇ったなあ！って、もう何回か通っているうちに、1羽も飛んでいるのを見なかったけど、あと3年か4年目だったかなあ、行った時には、飛んでいるの見て、アアアアってしてね。ああー、やっぱり蘇ったなあ、と思っておったけど。あんな沢山じゃあ無くてよ、1,2匹だったよ。グライダーみたいに、一旦飛んだらずーっと飛んで、動かないよ！

五：しかしやっぱり、学者先生が見付けられなかっただけで、アホウドリは前からちゃんといたんだろうなあ。僕もな、小学校の5年の時に台風の明けた時にこれの幼鳥が飛んだのを見ているよ。でも違うと言う人もいるわけさ、絶対羽を動かさない、台風でも！回って行くさ、こうして。羽は羽ばたかんわけよ。1日だけいたよ、1日だけ。こっちすぐ海だから。これみんな見ているよ、子供たち。大きいのに！とにかく大きくてよー。やはり、これはまとめて、東邦大学の長谷川先生か、あの人に持って行かなくちゃいけないよ。アッハハッハ。あれ東京オリンピックの年(1964)は何年だっけ、あれの2年ぐらい前の台風明けの日だった。

ユクンは平らな島

松：ユクン(いわゆる久場島の事、こう呼ぶ八重山の古参の漁業者は多い)はユクンはどんなだったかなあ。ユクンは上陸したんだったかなあ、ユクンという島だけは、尖閣列島でもユクンだけはちょっと違っている。あの、平ら！、そんなに高い山が無い。真っ直ぐこうしておる、ユクンは。

五：アンカーは向こうは降ろす所あるの？

松：向こうはだから僕なんかはもう、(尖閣へは)サワラ曳きに行っているから、向こうはちょっと浅い所あるかー？って、浅い所ではまたサワラは食わんから、向こうにはちょっと行くぐらい、1,2回ポッと回って来るだけで、ユクンはまたそんなにサワラも食わなかったかなあ。

五：ユクンは石垣からはどのくらい？ 遠い？

松：うん、だいぶ行くよ、少し離れているよ。それからユクンからまだあの、赤尾嶼と言う、アコウと言う、沖縄の人はアコウと言うよ。あれはまだここから大分行く筈よ。

五：あそこには何がいの！？

松：カツオ、マグロがおるらしい。あの今はどうか分からんけど、今は宮古もパヤオ設置しているから、どんなかわからんけど、前は行った筈だよ。アコウまでは、宮古のカツオ船などは。

スマガツオの話

五：宮古の方が言うには、11月から2月ぐらいまでは、最初にユクンに行って、次にクバシマに行って、それでも釣れなかったら、最後にアコウに行く。宮古ではウブシュウと言ってるらしいけどよ、こっちで言うジュウガギラーだな。佐良浜、伊良部島か、島で人気があるみたいで、島内消費で収まっていると言う。あそこの人は魚食べるからな。

松：あれは、また節に出来ないのに、カツオ節に出来ない。脂が強いからね。これを釣りにも行ったけど、もうフカ(鱻)が多くて、どうしようもなかったと言われているさね。

五：もうホログワー(餌木の一種か)手繰るだけでもやられているわけね？

松：もう、ホロを手繰るまで間に合わんって！

五：ハーッサミミョー！！(アキサミヨ、感嘆詞)

松：亀一兄さんも行っているよ。センにジュウガギラー食わせに、鳩間屋の亀一兄さん(玉城亀一氏)もよ、。

五：ああ、宝辰丸か。

松：おお、カツオ船やって、で冬は遊ぶだろ。だからその時に行っているんだけど、アーキキサミョー！ サバ(鱻)がマンリー(沢山)ワジャー(技)ならん！って言うておったよ。

五：そんなに鱻がいるかあ、

松：刺身なら、僕なんか漁師なら、あれの方が、ジュウガギラーの方が刺身美味しい。脂のっおるからね。トロっとして、石垣のあのマグロ、本土行くと、ヤマト行くと、あの戻りガツオなんか脂がのと言うけど、ここの大判でも脂のってるの、いないからね。殆んど脂が無いから！ 隣鉾以外に行っているのだと、カジキ突きに行っているよ。バレンとか、カジキ。バラ浮き(いっぱい魚が浮いて出てくる状態。非常に興奮状態)するってよ！ だから釣りよりこの方が良い！ 突いて獲るのが、この潮が合った時にはもう、ハネ(背びれか)立てて、あれ寝ているのか、ハネ立てて、皆んなあんなしておたらしい。

五：その話聞いたことがあるな。当たり日になると、凄いものがあつたそうだ。

松：だからあの、台湾からも、与那国からもカジキ突きに、来ておつたみたいだけどね。だけども今はあんなして、バラ浮きするカジキもいないよ。どんな一に、(僕らウミンチュウが)何をしたのからでもない！ どんどん(魚が)減っている！ 横ばい状態なら良いけど、もう！ どう！ ずーっと下がりっぱなし！ どんな魚でも、もう同じ、、あのイワシもな、ここで言うグルクマーも、やがて、風が南から北に廻るといふ、その、この浜から、名蔵周辺、、もうこんなに表面、、もう海面が膨れて、、僕なんかはタギャーって言うさ、だから確実、これになったらもう明日は天気崩れるなあって、

五：(魚がみんな)口を海面に出してポコポコしているわけ、これを皆んなが出すから、ものすごくブワーっとなつているわけ。

松：あれぐらい(魚が)おつただけど、最近もうこの辺で、名蔵辺りで、これをやっているのは、もうあんなには見ない。

五：見ないねえ。

今は、漁師が獲らないのに、魚が減る時代だ

松：なんの影響かわからんけどよ、獲らないで減っているから！ もう今はもう、何年になるか何 10 年、もう(網漁ではグルクマもカチューも)捕つてもいないのだけど、いない！ あのチョウセンサザエ、あれを前はボタンの材料になるといふ、あのこれ安いけど、高瀬貝、広瀬貝より安いけど、買う人がおつたんだよ。だから、これを商売にしているウミンチュウ(海人)が昔はおつただけど、(今は誰も)獲らないでも減っている！のに。

五：あの時は、獲つても減つてはいなかった。今はもう獲らないでもないよー。海の世界自体が、、

松：そう、環境かなんかがおかしくなつている、たぶん。

五：だけどよ、これ人間の所為か自然のなんかなのか、太陽の活動の所為か、さっぱり意味がわからん。もっと(ウミンチュウの活動なんかより原因が)大きいわけよ。我々があんなにあのサンゴを潰すから、歩いて潰すから、といふけど、こーんな問題じゃあないわけよ！ 八重山の砂浜な、昔はこんな色じゃなかった、農地改良するまでは、全然白かった！ 今は黄色くなつている。砂浜の色が変わつてしまった！

松：あれなんて言うかな、あの小さな貝、なんか、白いシジミみたいなのが、ここの下の浜にも、足でこうこうしたら出て来おつた、出ておつたよ。それが赤土、土地改良！ 土地改良では一あー。僕らは何度も陳情したんだよ。赤土が流れたらサンゴ礁も死ぬ、あれここの赤土は酸性だからアルカリ性でダメになるから、、。

五：何度も警告したよなあ！

松：やつたんだけど、、なーんにも！ やつてくれなかった。一旦ダメになつてから！ やつたつて、あとは何十年、何百年かかるか、わからんよ！ 元の土地改良しない時の

海に、戻るまでは。

五：沖縄の復興、こういう事業がよ、復帰以降のよ、水産業よりもよ、農地改良の方に重きを置かれていたわけよ。そして沖縄開発庁なんかはあれなわけよ、もうこの農地改良を主体に動いている様なものさ、組織でな。そうしてよ！ 段々工事が減って、開発する場所が無くなってからが、今度は海を守りましょうと言う、海に対して凄く厳しくなってきた。こんな矛盾がよくもまあ、4,5年か10年のうちに出来るものだなあと言う様な感覚で、受け止めるわけさ。そうなりますよ。5年か10年の間に、あんなに掌を返されるかー！ と言うわけ。あんな想いをしているわけさ。

松：何んでもかんでも、本土基準にやるもんだから、本土だったらあの、僕なんかびっくりするのは、あの北海道とか、向こう田舎行っても、田んぼ、真一つ直ぐで、何れもずうーっと平らさあね。ところが、ここいら辺りは皆んな傾斜でしょう！ 向こうみたいに、土地改良したら、赤土流れるのは当たり前なんだよな！ 浜に流れるのは。眼に見えてははっきりしているのに、これを対策してくれってお願いしていたんだけど、やらない。

五：そしてよ、あの開発庁のよ誰だったかなあ、担当者だったかなあ、あまりにも(僕らが)くどくどしつこいものだから、反論として、こう言うことを言いおったさ、赤土と言うのはよ、人間が住む以前が、太古の昔から、それは流出していると書かれている、と。ツシシシアーハハハハ！ いや、相対というのものもあるだろうけどよー。

松：アハハハハ。あれ何ブダイで言うか。サンピングワーよ、口の赤い、。

五：あー、わかる。

松：あれもせいぜい、これ位にしかならないさ、大きくならない。あれはもうリーフのどこにでもおったよ！ 専門にこればっかし獲る人なんかがおった。川平に泊まり込みして、登野城でも、こればっかし、あれは追い込みと違って、網をあのをこれ、時期なるとねえ、3月4月5月ぐらいになってくると、産卵するの。産卵は、普通はクブシミなどはサンゴ礁に卵産むでしょう。これはブダイの場合は、外に出すんだよ。大海に流すんだよ。卵は大海で、小さな稚魚になって、逆に外から入ってくる。アイゴもそうさ。スク(アイゴの稚魚)と言うのも、あれも外に流して、外から入ってくるさな。

五：昔は元の場所に戻って来たんだよな。

松：うーん。あれも、あんなに獲れたのに、今全然に！ って言う位もう、全滅しているよあれも。考えられない！ 前はあんなに獲っておったのに、今は獲らないでいなくなっているからね。アジよ、僕らなんかはガツンと言うけどね、あれを獲る網、もう僕らなんかしか持っていない。何年かもう全然使っていない。そのまま倉庫に入れっぱなし！ 前はようあんなして獲れたんだよ。あの底地湾で、お正月前まで、12月まで向こうであの泊まり込みして、テントなんかも作ってやっておったんだけど、もう段々段々いなくなると、もう何年かは全然来ない！ なんととも言えないな。アハハハそれでカズーが、正松兄さん、この網何するかーってったから、ああ、置いとけよー、お前って、

アッハッハッハ。

五：あとはもう博物館に譲ったんだよ、

松：アッハッハッハッハ。

五：よし、もう行くか。潮も引いているんじゃないか。

金城 良正 きんじょう りょうせい (81)

仲田吉宏氏の聞き取りで名前が上げられたのが、現金城釣具店を営む金城良正氏である。氏の父良興氏は戦前、尖閣諸島及び字新川の古賀の鯉節工場で総監督を勤めたそうである。良正氏自身も漁業ではないが、米軍政府の上陸用舟艇で尖閣へ行った経験を持つ。又、良正氏は海月会という八重山に古くからあるイカ曳き愛好会に所属している。



左が金城良正さん、右は金城五男さん

※金城良正：良

海月会

筆：海月会の活動なんかについてもちょっと。

海：僕は役員ではないけど、もう随分昔に先輩なんか。内地から来た寄留民の方なんかイカ曳き、海月会というのを作って、昔はこの裕福なお金持ちの人なんかやっておったものさ。ナビサグラーとか、八重山の大家なんかね、

五：浜崎のおじさん(故浜崎莊市氏)とかな！

海：篠原さんとか福地さんとかね、あの内地のあれした人なんかよ、何名か、新垣セイシュウさんとか発田重治さん鹿児島の人とかだ、組織あんなだったさ。まあ 40 か 50 年ぐらい前だ。日本復帰しない前よ。

五：発端は相当古いつて言うじゃない、話聞いたら。

海：海月会というのは八重山の伝統だからよ。明治大正時代頃から鹿児島辺りで娯楽で元々このイカ曳き大会というのがあって。鹿児島からの流れで、イカ曳き釣るのよ、時刻表というのがある。月が上がるでしょう、月が上がって、出て、月天井、オオアカ、月のネ、一番明るいところはナンジュウ、ハヤナカマ、ハヤクウ、ナマグラという風に名前皆んな書かれてる。時刻表というのを僕持っているさ。これ鹿児島から来ている。

五：鹿児島から！来てるんだ。

海：時刻表というのが、烏賊曳きするのの時刻表さあ、月出はツキデと書いて、闇夜はシンクラと書いて、シンクラ、ツキデ、クラオボロ、クラオボロって月一寸上がってから月が暗く朧月夜になるでしょう。して名前みんな書かれている。

お父さん金城良興氏のこと

筆：話は変わりますが、金城さんのお父さんは古賀さんのカツオ工場の製造責任者だったそうですね。

良：そう。尖閣諸島の工場で責任者をやっていたそうだよ。あそこを引き揚げてからはここ八重山の工場で引き続き責任者をやっておった。

筆：尖閣を引き揚げというのは、いつ頃かわかりますか？

良：戦前の話だからね、終戦の年で小学3年だから、僕は余り詳しくはわからない。

戦前に尖閣でしていたという話を聞いてるんだけど、僕の親父は戦中に山に避難してマラリアに罹って、終戦すぐ亡くなってしまったのよ。親父がここでカツオ工場を見ている時はね、古賀さんの事務所が730交差点のすぐ傍にあった。

五：事務所の責任者は覚えている？

良：照屋という人だったそうだよ。親父の話は僕より兄貴のほうが分かるよ。5才上だからね。新川の先輩方が言うには、僕の親父は大男だったそうだよ。僕は小さかったから戦中は台湾に疎開していたんだよ。兄貴と親父がここに残っていたけど、僕らが台湾から引き揚げてみたら親父は亡くなっているからね。

五：尖閣での詳しい話は何か聞いていないかな。

良：そうだねえ。なにか杖をおみやげに持ってきたという話があったけどよ。兄貴から聞いた話で(カツオ節の製造)職人がよく脚気にかかったというのがあるよ。何か向こうは野菜不足だったそう。それで向こうでの製造を諦めて島に戻ってやることにしたそうだよ。

五：珍しい材木なのかな。それは。鳥をおみやげにした話はよく聞いてるけど。この脚気には殆どの人が罹ってしまったのかなあ？

上陸用舟艇の機関士

良：僕は詳しいことは全然わからんなあ。でも戦後によ、僕は民政官府で舟艇の機関士をしておったんだよ。僕はカツオ船に乗った経験があったから、若い頃はハンメースガヤーしておったから、民政官府に入ったら米軍が、金城さんは海の方に回ってくれという事で、那覇軍港で2週間の講習受けて免許をとって、その後1年位してから航海士の免許もとって、舟艇に乗っていた。

五：舟艇は主にどんな仕事だったの？

良：まず警備の手伝い、あの頃は保安庁なんてないから、八重山警察署がダイナマイト漁の取締だとか、領海警備をやるわけさね。あとは離島への重機運搬、船がない時代だから、軍のも民間のものも無料で運搬するわけ。

五：ああ、無料で、戦後の復興のためなんだな。

良：そう、米軍は商売はしなかったよ。また一度は八重山で干魃が酷かった時があつてね。黒島、新城島に舟艇を水でいっぱいにして運んでいった。カバーを張って栈橋に横付け

して、水をいっぱい流しこんでよ、アハハハ。

筆：何トぐらいの船なんですか？

良：70ト余りなるかな、元は軍用のね、グラマリンエンジンというのが4台付いているものだよ。エンジンの音が物凄くうるさくてね、この舟艇でよ、尖閣諸島に行った事があるんだよ。八重山の議員さんとか偉い人を乗せて行った事があるわけさ。

五：それはいつ頃の話になるのかな？

良：復帰前だよ。

筆：復帰のだいぶ前でしょうか、それとも復帰の年ぐらい？

五：尖閣の石油騒ぎが起こる前かな？ あとかな？

良：それよりは前だよ、復帰の年より10年前ぐらいだよ。僕は18年間民政官府にいて、10年ぐらいはずっと舟艇に乗っていたからね。それでも復帰したら免許は通用しなくなってしまった。アハハ。

五：舟艇だと尖閣に行くにはどのぐらいかかったかね？

良：1日あれば充分行けるよ。そんなに遠い感じはしなかった。宮古に行くのと変わらないよ。

筆：この偉い人たちは尖閣に上陸したんでしょうか？

良：ああ、させたよ。それは良く覚えているよ。上陸させて視察させて、その日のうちにまた戻っていったさ。

筆：どのぐらい島を回ったんでしょうか？

良：一島、一番大きい島だけだよ。あのカツオ工場があった島だ。あれを見るのが目的だったんじゃないかな。

五：石油の話が出る前なんだよね。

良：そう、石油とか中国の話が関係しない前の事だよ。どんな議員がいたか忘れてしまったが、逃げ切れない鳥を捕まえて焼いて、彼らに食べさせたのを覚えているよ。でも臭くて美味しくなかったな。

五：どんな鳥だった？ カツオドリ？

良：それはわからないけど、黒くて大きな鳥だったよ。みんなで、魚の臭いがするなあ、美味しくないなあ言いながら食べたんだよ。

五：試食会を開いたわけか、アハハハ。

良：岩だらけでゴツゴツした島さ、舟艇だから横付けできるんだよ。

五：じゃあ伝馬とかボートは積んで行かなかったの？

良：舟艇だからそんなもの要らないさ。砂浜にすぐ乗り上げて上陸できる。大概の波にはびくともしないしな。

五：島のどこに着けたの？

良：あのカツオ工場があった場所にだよ。僕が尖閣諸島を見たのはそれが最初で最後の話だ。八重山の議員を10名以上は乗せていたよ。こういう大きい話だから、市役所

にちゃんと記録があるはずだよ。

五：そりゃあ無いとおかしい事だよ。あるでしょう。

筆：議員先生が乗って行くとなると、目的があったと思うんですが、。

良：さあなあ、ただ舟艇は米軍のものでしょう。だから議員さんらが民政官府にお願いしたんだろうな。

筆：議員さんは船酔い大丈夫だったのでしょうか。何時間ぐらいかかりましたか。

良：ダウンしているようには見えなかったよ。

舟艇は足が遅いんだよ。16,7時間ぐらいかかったかな。



米軍上陸用舟艇LMC型（「ウェブサイト」より）

五：舟艇の中は休む所はあるの？

良：運搬用だからそんなものはない。機関部と重機を積むスペース以外あとは何もない。

筆：議員さん以外に、軍のアメリカ人も乗っていたのでしょうか？

良：アメリカ人は2人乗っておったよ。これは尖閣行くのに限らず、監督としていつも2人乗っているわけだよ。僕は機関士で、船長が西銘さんという与那国の人だった。非常に穏やかな優しい人だったけど、あの人ももう亡くなってしまったさ。

台湾から逃げるようにして引き揚げた

五：台湾からはいつ引き揚げて来たの？

良：戦中石垣の女子供の多くは台中に疎開してね、僕らはインリン小学校というところで寝泊まりしていた。終戦になってあと、日本人、主に行政に携わっていた人たちが襲われて殺された。教師と警官が多かったよ。そのうち蒋介石軍が台湾に入って来てね、あれはとんでもない軍隊だった。あちこちで日本人が殺されて、資産の略奪が本格化した。それでもう逃げ勝負みたいになって、台中から基隆に逃げて、そこから石垣に戻ったんだよ。

筆：お話を聞いていると、戦中よりも戦後の方が被害が大きかったようですね。

良：そう、戦争に負けて全部ひっくり返っての話だからさな。

五：米軍はいなかったの？

良：米軍を見た記憶は全くない。全部中国人だったな。基隆港には蒋介石軍がびっしりいるんだ。それで夜中の2時頃に、タバコ吸うなよ、灯りも消せよって言って、与那国の漁船に乗り込んで、ゆっくりゆっくり港から出て行って逃げてきたんだよ。

五：見つかったらこれ銃撃されるわけか。引き揚げの許可なんか貰って帰って来たわけじゃなかった？

良：そんなものなんか無かったよ。こっそり逃げて来たんだ。与那国の漁船にも何人か台

湾人が乗っていて、漁業をしているふりを出来るようにしていた。蒋介石軍に見られたら台湾人が対応するわけさ。だから大勢の団体が乗れるわけじゃあない。

五：大変な苦勞をしたんだね。今日はいろいろなお話ありがとうね。

西組の方

沖縄では、旧5月4日ハーレーという漁業者の一大イベントがある。漁業者は各ハーレー組合に分かれて、爬竜船の競漕を競い合う。西組の組合小屋にお邪魔した際に、親が古賀丸に乗っていたという方がいた。

※西組の人：西

五：この人のオジーも乗っていたってよ。詳しいことは聞けないかな？古賀丸の面影は憶えてないかな？

西：ほう。いやいや、僕はまだ全然小さかったから。幼稚園ぐらいだったかな。

五：何か話は聞いていない？ ナチョーラとか、ヤクゲーとか(海人草、夜光貝)買ってなかった？

西：わっからんよー。

筆：カツオ船だったですか？

西：ええ、古賀丸はカツオだったらしいけど。話は聞いているのだが。ワン(自分は)まだ小さいからわからんさね。カミジューオジーは親が乗っていたからよくわかるけど。

五：やっぱりあの人ぐらいかあ。あの方のシージャ(兄さん)はお元気？

西：いやもう亡くなった。

五：あの方が生きてたらもっとよくわかったらなあ。

筆：実際に古賀丸をご覧になったことは？

西：いや、話だけです。そういうカツオ船があって、先輩なんか尖閣でカツオを釣っておったという話。

大城 政一 おおしろ せいいち

大城政一さんは潜り漁のベテランである、現在は体調を崩し、海に出る事は控えているが、若い頃はウミガメを追って九州五島列島まで遠征したという。大城さんは旅歩き(航海)の際には、必ず何か一つ、その土地の記念品を持って帰るのを楽しみにしていたそうだ。鹿児島島の硫黄島では硫黄の塊を、南方では美しい貝殻を。そして尖閣では、ガジュマルを持って帰って来て、育てている。

お話を伺う前に、尖閣に漁に行った際に持ち帰ってきたガジュマルの鉢を見せて貰った。左が大城政一氏、右は金城五男さん、奥は宮良貞光さん。大城さんが抱えているのは、尖閣から持ち帰った岩石。これも思い出の品だそうである。

※大城政一さん：大、宮良貞光：宮

尖閣では、エビカキ(仕掛け)に行つて、ハッパもした

大：そうねえ、ヤマトに入ってから(復帰してから)喧しくなつて、、もうどうにもならんよな。、、、これ僕あのあれ、コレクション。(石垣島周辺での漁の際に集めた貝殻や海産物のコレクションがガラスケースに入っている)。

宮：なにこれ？

大：これ見てみ、カマンタのジュウ(エイの尻尾、毒針)さ。

宮：ああ、カマンタのジュウ。これに刺されたらもう、もう大変な事になるよ。、、これは何時頃の？

大：こっちまだ埋立てやらん前の。

宮：ああ、昔の。もう貴重なものを持っておられるんだねえ、兄さんは。

大：これは昔のアンダツボ(油壺)。

筆：これ全部ツボに？ (油壺がサンゴに覆われている)

大：何回も、折れては生えては、こっち折れた所からな、生えて。

五：サンゴをかぶったアンダツボか。

大：これは酒壺で、(サンゴに覆われた3合瓶)。こっちは硫黄だよ。

五：して、大城さんが尖閣に行った時の話を聞かせて欲しいんだけどね。何を獲りに行ったの？ 尖閣に行くのは自分のサバニから？

大：いいや、あの一昔、小浜のよ、ポンポログワー(伝馬船?)があったのよ。

五：今のサンパン位？

大：あれとあの2しんばらしして(右手と左手を合わせて)、

五：何？ 2しんばらしって言ったら何？ ああ2艘伴走で行ったわけ？ サバニをタックワァー(くっ付けること)して。

大：そうそうそう。

五：で、あそこで何日泊りやったの？

大：4,5日位は泊らんかったがやー。

五：何匹ぐらい食わせ、いやかけてきた？

大：カーミーカキ(亀カキ)に行つたって？ いやいや、エビカキに行つたのよ。



左が大城政一さん、手に抱えているのは尖閣から持ち帰った岩石と鉢植えはコマルバガジュマル。



飾り棚には採集した貝の数々のコレクションが。

五：ああ、エビカキに！

大：うん。して、台湾のものを、失敬して来た。

五&宮：アハハハ！

大：あれなんかは昼、潮引いている時に、あの割れグワー、割れている所、こう開いている所に網引いている。

五：ああ、岩礁の隙間隙間に網を仕掛けてあるわけだ。台湾人がエビを捕っているわけよ。台湾から来ている連中は網で捕っていた。

大：こっちは潜りでが捕るわけよな。網だけ仕掛けてあるから、皆んなもう外して全部取ったよ。

筆：はあ、台湾の人たち、あそこでエビも捕っていたんですね。

五：ヤマトーと一緒にだな。このフック捕りは沖縄だけかなあ？ これは。

大：これ(フック)が正確！これが。

五：フックで、フックで引っ掛けるわけよ。

大：して、これも持っておったけど (導火線にマッチで点火する仕草)。

五：ダイナマイトか、

大：エへへ、エビを全部取ったものの、満船ならんわけさ。で、ダイナマイトは持って行っているわけだ。で、グルクンをやった(ハッパ漁をした)わけだ。そしたら(グルクンを)食べに来るだろう、あのガーラ、ヒラアジが、また連続投げたわけよ。こうしてどうにか船満たして帰って来た。

宮：凄いな、僕らの友達も言ってたけど、尖閣列島に亀カキに行つて、潜つたら、カツオとかあのトカキン、前見えない位おったよ、って言いおった。

大：まだいるよ、アーガイ(ブダイ類)のマギー(大きい)から、サバよサバ。

五：何サバよ、イーユーグワァー？

大：んん、あらん。あれマーブカー。

五：マーブカー。レモンシャーク(レモンザメ)だなあ。

大：あの人喰いサバが大量にいる。この辺で噛まれているのは大体あれに噛まれている。

海亀を追つて、長崎五島まで

五：しかし、そうかあ。亀カキと思つてたけど、エビで行つただね。それはそうと、亀カキは儲けたでしょう、あの時には。

大：そう！

五：ワカー(屋号 海産物仲買人)だけが卸した？

大：いや、沖縄に。沖縄で頼みに来ておった。観光おみやげ店の人が。

五：土産店の人、ああ剥製業者が！

大：そう。頼みに来ておった。

五：して、卸す所は沖縄に？

大：そう、いや、船は糸満で借りて、借り主は沖縄よ、糸満で借りて。

五：捕って来たのはどこに卸したの？ 糸満に？

大：あっちさ、糸満からあの、糸満に着けて、那覇から取りに来よったさ。車で。

うちらはこっち(石垣)で人数揃えて、船一杯にして、糸満に持って行く。これの繰り返し。もう慶良間、久米島、ムル(大変)カメがいるのに。鹿児島にも行ったよ、十島村にもムルいる。五島ぐらいまで回ったんど。

宮：この尖閣のガジュマルは凄いいねえ。

大：向こうにもう1つあるよ、あれは鉢交換しなかったらよ、伸びないさ。

筆：あのガジュマル、枝がもう横に広がるんですよね？ ぐーっと、

大：だから切った。伸ばさせんよ。アハハ。

筆：なんか琉大の先生がですね、まだ復帰前に尖閣に行って、植物の先生が調査して、今頃になって思い出そうなんですよ、もう枝が畳みたいに地面にバーつて伸びて、向こうは風が強いからか、上には全然伸びないそうですね。

大：あそこは船も入れるように、されてあったよ。

宮：あそこは古賀さんが掘ってある。だけどこれは浅くて避難出来る所じゃ無いと言うけど。

大：狭いよ。今使うなら石割らんといかん。あの時分に今みたいに、使い捨てカメラがあったら、すぐ写して、持っておったよ。僕、海に行くときもみんな持っておるからよ。

五：ウフフフ。大城さんはね、昔から研究熱心な方なんだよ。

筆：尖閣に、エビ漁で行ったのは何年、何歳位の頃になるんですか

大：何年やがは忘れたよ。35年か40年位前になるかな、

石油の話が出る以前

五：あの頃からはもう、警備艇は来ていたわけ？あれ、石油の話出てた？

大：いや。あれが無いから、シナの船は来ないわけさ。台湾船がは来てるけど。あっち調査して、石油が出るといって言ったから、中国船来るようになった。

宮：中国の船はどうしようもないねー、は一。

筆：じゃあ、台湾の船が来ていた時期で、この八重山からもエビ採りの船だったり色々な船が来ていた時期で、全然普通にやっていた頃だった？

大：あの時分はまだあんな調査もしていない頃だから。

五：ところが、あとで石油が出る、天然ガスが出るというから、皆欲を出した。

大：そうそう。欲張ってからあんなに来る様になっているわけさ。

五：で、警備艇が来る様になった。以前は中国船も来ない？台湾船と沖縄船だけで、仲良くやっていた。

大：そうそうそう。

筆：台湾の船は一番何を、何船が多かったんですかねえ？
大：見ているだけでは、あの波照間なんかでも、あの葉草とかよ。
五：じゃあ上陸だな。
大：はい。そう。
筆：葉草とはこれは何なんですか？
大：海岸に生えているよ。
宮：台湾人に言わせたら、沖縄これ全部葉草の島だと言うよね。
筆：あのイソマツっていう、そういうみたいなの？
大：そう、あの盆栽みたいなのを採りに行ってたよ。竹でイカダ作ってよ。イカダを（船に）積んで、、、これから渡ってやっておった。僕らはもう何回も見ているから。
宮：仲の御神でもそうしたみたいね、イカダ作って、これで渡って鳥の卵や葉草取ったりして
大：西表の崎山あたりなんか、あっち行ったらみんな台湾人だったよ。
五：こっちの警備力は全く弱かったわけ、昔は。
筆：船もそんなに無かったんですか？ 警備船はありはしたんですか？
五：ああ、警備艇はあったよ。でもあれはダイナマイト（取締）だけ。
大：東小屋にはあった筈だけど、もうあれさ、遠くには回らんわけさ。いつものあの、サバネがダイナマイト使ってるのしか、目当てにしてないから。
五：台湾人は最近までうろろうやってたよ！ 保安庁が来てもまだ台湾人はこっちら辺からうろろうやってたのに、台湾の船はこーんな形して
大：艫が高いさなあ、トモダカ。
宮：尖閣列島もあれグルクンおるんですか？
大：うん。おったけど、ただ普通は獲らんかったよ。
宮：だったらあれだね、サネーラー（グルクンの稚魚、沖縄のカツオ船が使うエサ魚の1つ）が寄るわけだね、向こうは。
五：じゃあ昔のカツオ船はサネーラー採っておったのかね、あっちで。
宮：いや、カタクチイワシ、シーラーって。
大：うん。シーラー、あれは群れているから、あれは採ったりしたな。そろそろハーレー（爬竜船競漕）会場に戻ろうな。
五：ありがとうね。またね。

大浜 長弘 おおはま ちょうこう

石垣港旧離島棧橋前、一際目立つ「まぐろ」の看板は、大浜長弘さんが経営するマルハ水産である。鳩間島出身の大浜さんは婿入りしてから、漁業の道を歩き始めた。現在は八重山の漁業者の中では成功者と知られている方である。中2組の爬龍船小屋でお話を伺った。

※大浜長弘さん：大



マルハ水産の大浜長弘さん

尖閣の話をするのも嫌なんだよ

大：尖閣には何回も行きましたよ。

五：何回も、。

大：子供に船呉れたけど、船が大きいから、今でもたまには一緒に乗って行くさ。

五：上陸したことはある？

大：やったけど、カチメラレタ(逮捕された)よ。

五：カチメラレタ！？

大：上陸してはいけないわけさ、だけどあの、以前ね。私が若い時よ、40年位なるけどね。

五：復帰前？ 復帰前、あの時も保安庁おった？

大：あの時は保安庁の船ちゃんとおったもん。

五：ああ、じゃあ復帰後かな。

大：保安庁の船おったもん、1隻2隻はいつもいておったよ、して内地のね、社長なんかを乗せていったんだよ。聞いたらこれなんかもちょっとこれ(頬に指で線を引く仕草をする、極道者という事だろう)ですよ、この時は傭船で行ったけど、代金を渋ってね。

五：本当に社長なんかねえ。

大：大きいとこの社長で、ヘリコプターなんかも持っている自分なんかに言っておったもん。ヘリコプターで、たまには尖閣に乗って来ると言っておったもん。そりゃあもう金持ちさ。社長は年寄りで、3名乗せて行ったよ。保安庁来るから皆んな捕まれるどー、乗ったら捕まれると言ったけど、自分たちが責任持つと言うから。

五：持つと言った、。

大：そうして島に上がりたって言い出してね、私兄貴に「兄貴、責任持つと言っても法は法どー、犯罪なるどー、下ろすなー」と言ったけど、もう下ろしてしまっただけよ。して向こうでは、カツオもいっぱい釣れてたから釣って、刺身も切ってあげて、あれらなんかはウイスキーも持ってきて飲んで、して、これも皆んな写真撮っているわけさ。で、あれらは島に上がってからは、「大浜さんあんたなんかはお家に行けー」って。「帰れー」って。お前らなんかどうするの？って聞いたら、「いや、保安庁は人は殺さんからよ、保安庁の船から、乗って来るから行きなさい」って。これがもう！ダメだった。

五：ああ、わざと逮捕されるて。

大：そう。だからよ。「心配するなって、あんたらなんかには迷惑かけんから、帰れ」って言うから、帰ったさね。逃げて行ったけど、今度は肝心なカメラも皆んな引き上げられて、もうこれが証拠で罰金払わせられて、警察署に行って始末書を書いたよ。そうい

う辛い経験があるからもう私は絶対人を連れて行かない。尖閣の話をするのも嫌なんだよ。

五：これ傭船代はどうなったの？

大：結局呉れたさ、うん。傭船代よ、全部は払わんと渋っておったのが、自分たちで逃げれと言いながら払わんのがあるかーと、もう法律もクソもないと、兄貴が怒ってよ。

五：ああ、トシオね、、、。

大：あんなにして体大きかったから、あれらなんかは捕まえられたら折って捨てられるのに。驚いて「すいませんでしたー」って言って、翌日には逃げてよ、えー兄さんもうお金は取られないさー、いいさーもう」ってしてたら、ホテルの人に預けて逃げて、あれっつきり来ない。何か堂々と暴力団の旗も上げてたんだよ(おそらく船にか、右翼団体の旗か)。このチンピラみたいなのがよ、兄貴に殺されるといって恐れ入っていたよ。

五：トシオさんはもうゴリラみたいだからな。

大：「お前らなんかの金？ あんな糞つたれの金なんか貰わんでいい、金の代わりにお前殺してやるからなー、、、」って言っておったら、もう驚いて逃げて行ったよ、アハハハ。トイレに行って来ると行ったら、来ないよ。チャー逃げーよ、裏口からヒンギテ(逃げて)行ってる。もうね、私はだからそういう辛い経験があるから、もう尖閣には絶対人を連れていかない！

五：兄さんにこんな人がいるとは思わずに、馬鹿にしてかかったわけだ。

大：そう。だからよ、そんな物騒な所よ本当。私はもう向こうに何10年も行き帰りしているからよ、漁に。昔はあのこっちの人も行ったりしているよ、だけど中国が入り込んでからやられると思ってあれから行かないんだのに。もう全然行かない。

昔は経費がかからなかった

筆：行ってる頃は、大体何を釣りに行って？

大：マチ類とかね、色んなの。曳縄とか。マチ類を多く釣って来るよ、お金になるものね。向こうのは曳縄やっただってお金にならん。トカキンとか釣ってきても、買う人いない。

筆：値段付きませんか？

大：うん。あんなのはもう釣る人いない。あの頃は経費がかからなかったからね。今はもう5万以上かかるかね。5万から7万ぐらいかかるでしょう。

筆：ああ、行って帰って来るだけで。

大：うん。燃料代でその位かかる。これに氷、エサ、色んな道具かかるよね、

筆：大体何人ぐらいで？

大：行く時は私らは親子でが行くよ。最近はみんなでがグループで行ったさ。

筆：ああ、はいはい、この前の？(外国船被害対策救済事業である)

大：この前は行かんかった。この前はこれ漕いでる(ハーレーの練習だろう)。この前のだった。またあると言っているよ。

筆：今行っている方達は何を釣って来ていますかね。

大：あの、仕事やらなかったみたいよ。風が時化てから、夜行くでしょう。夜明けに着いて、1日回って写真撮って、そのまま帰って来たみたい。

筆：じゃあもうほんと当日当ぐらい？ 日当ぐらいしかないですかね、今行っている船というのは、配当ないと大変ですよ。

大：あのね。日当もない。尖閣を守る為には自分らなんかもある程度犠牲になろうという形で行くでしょう。儲けでは行かないよ、仕事はして良いんだよ、して良いけどね、みんな1隻が帰ったら帰るさ。自分1人はおりきれんさ、そこに。まああの自分の日当ね、大体2万5千円。もうあんだけ貰ったら良いと思ってみんな帰る。私も行ったら2万5千円。子供の船借りても2万5千円貰うよ。あの子供は燃料代と自分の駄賃は出ると言っているけど、幾ら貰っても知れているよ。

五：カチメラレタ(捕まった)ら、丸欠損だね。

大：もう今はカチメルという事はしない。当然、うちらはカチメラレンさ、ウミンチュウだから。だけどあんた(筆者)を連れて行ってどうぞーって言ったらカチメラレルどー。言わば傭船とかさ。傭船とかね、あのなんとかのカメラマンとか、テレビ会社とかね。

五：目的外侵入になってしまうわけか。

大：なんでもわかるさ、保安庁も、ウミンチュウであるか、ウミンチュウはウミンチュウでちゃんと保険もかけられて登録されているさ。だから良いけど、他の人連れて行くでしょう、すぐわかるよ。

五：現実には国の使用期限切れているでしょう、借用期限。切れてない？まだ切れない？

筆：まだ切れてないんじゃないですかね。切れたら東京都の購入の話が進む。

尖閣の島々

大：詳しい話が聞きたかったら、また来たら良いよ。ハーリー終わってあとに。あのしつこくてね、NHKよ。私を何回も訪ねて来て、ケツ追いまわしてよ。尖閣の島々があるでしょう。これを国が何か登録する為に、本当にあるの無いのって聞いてくるんだよ。確かに島はあるよ。ユクンという島がずっと北の東の方によ。アメリカが演習している島さ。あの島は私なんかは普通はクバジマって言うておらんけど。NHKの人は向こうがクバジマ、向こうはみんなクバなんですよ、って、逆に私に説教してね。あそこ、向こうは上陸もできる所ないんだよ。みんな、。。

筆：断崖？

大：うん、もう真っ直ぐと落ちているよ。簡単には登れないよ。まあなんとかしたら登れない事はないかもわからんけどね。無理しては登れない。で、イシジマ(北小島)にも、3個ぐらい島があるさ、でもあれはもうタックワー(くっ付いている)してるのに。あれを登録するから島の名前がどうだとか聞いてくるわけ。ちょっと離れて並んでいるだけなんだよ。またトリジマ(南小島)の所にも2つあるよ。

筆：大きい崖にタッチウがある島でいいですか(南小島のことだろう)？

大：そう。あんなのがあって、また東に、あのこっちに島が 2 つあるでしょう。こっちの方に島があるでしょう。きれいな島があるじゃない。してこっち砂があるでしょう、間には。あれには私らなんかは普通はトリジマって言うておったけど、今の言い方は違っている。鳥は 2 つある島のこっちが一番多いよ。

筆：こっちの方が。

大：うん。こっちには上がった事あるよ。

筆：こっちは上がり易い？

大：上がった事あるさ。ここは海やりながらね。先ず上に上がってみようと言って、うちの兄貴なんかと行ってアンカーかけて泳いで行って上がったよ。見事な島ではあるよ。、、本当はねえ、もう自分で写真撮って、本当実際この島がどういう形をしているかというのを見て来たら良いんだけどね。今頃だと鳥が多いよ、こんなにおるよ！産卵時期には頭も突つくよ。

筆：あ？ 船まで来ますか？

大：いや、船までじゃない。上にあがったら。で、翌日起きたら船の上は皆んな糞ばっかり、皆一んな！ 鳥の。蚊もいっぱい向こうは。蚊もいっぱいおる、鳥もいっぱいおる。ちょっと冬なったら皆んなもうバラッといなくなる、鳥。したら大きい鳥よ、大きい鳥。あれがおる。

五：アホウドリ？

大：ああ？ 突っ込む鳥がおるだろ。

筆：カツオドリ？

大：カツオドリかな、もうこんな鳥がおる。何 10 羽か残っておるよ。、、向こうはね、潮が速いからね、あのなんという？ このエサがね、豊富なんだよ。エビとかこうシラスみたいなのがね、いっぱい流れておる。イカーなんか、で、トビウオもおるしね。豊富なんだよ、だから向こうに鳥が集まっている。で、冬はもうまた変わっていくよ。スルル、あのキビナゴというのが今の時期から、今時分に 8 月位なったらこんなにおるよ、魚、あのツムブリ？よ。あれ持って来ても金にはならんもん。あれ買う人もおらん。

五：台湾人があれ捕りに来るって、あんなシーラーみたいの、で何に使っているかねえ？

大：あの、台湾も今はないだろうもう。前はよ、台湾はよ、私なんかは歩く頃よ。あのゴマサバと言ってさ、サバ。サバをイカダで流してよ、何 10 隻と泊まっているよ。してあの天気の時化る時は、皆んな一緒にアンカーかけるさ。私らなんかも。してあのイカダから渡って来てよ、このゴマサバを持って呉れよったよ。こいつら島に上がってよ、鳥よ、鳥殺してあれを食べるんだよ。エー今頃だったらもう犯罪さ！大変さ！これなんかあのねえ！

筆：自然保護ですか。

大：そう、それだ。あんなして食べて、汚いんだよ、あれなんか、まだあんなのも食べる

んだから。でもあれらは人間は悪くないよ！ バナナもあげるしねえ、なんかスイカなんかもねえ、もう全くもう自分なんかと同じ人なんだよ。

五：国境意識がなかったわけだ。

大：今はもう国境とかは絶対でしょう。もう今はあの日中関係が悪くなって、台湾も悪くなって、昔はこの中国からは来ない、みんな台湾から。中国でこんな来んかったけどねえ。皆一んな台湾よ！ イカダよ、竹のイカダよ、このイカダ1つに1人を乗せてよ、皆んな下ろすのよ。

筆：して、やはりこれ全部サバですか？

大：そう、サバを釣ってよ、時間になったら本船が来てよ、皆んな乗せて行く。このサバを乗せて大漁してから帰るよ。私らなんかはもう、あれ美味しくないので、貰ったけどね、もう1回2回は食べたけど、もう食べんよ。カツオとかが釣れるからあれの刺身を食べた。

筆：台湾人はサバをどうするんですかねえ？

大：知らんけど、向こう(尖閣)ではあれ、この位にはなるよ。

筆：大きいですか？

五：クサヤにするわけではない、

大：大きいよ、ゴマサバと言ってよ。でも最近ねこんな時代遅れの事はやっていない。巻網でとってしまうんだよ、あのヤマトが。台湾は巻網せんけど、ヤマトが巻網で獲ってしまうんだよ。最近来ていない筈だよ、もうこんなのは来ていない。、1回はねえ尖閣に行って見てきたほうが良いよ。

筆：はいー。

大：そしたらもう話はすぐに覚えられるよ。

又吉 ヒデイチ またよし ひでいち

ハーレー(爬虫船競漕)会場で話を聞いている際に、主に外国船被害対策救済事業により、最近尖閣に行ってきた又吉さんを紹介頂いた。当時は、漁場として利用するにはこれからという印象であった。

※又吉ヒデイチさん：又

筆：最近行ってきたんですか？

又：いや、少し前に3航海ぐらいしてきた。

筆：今は何日目かかりますか？ 行って帰ってくるのに。

又：大体90マイルだから、9時間ぐらいだな。

筆：島のどの辺で漁をしています？

又：クバシマの台湾よりの側。台湾の方から棚がずっと繋がっているから。

筆：ああ、じゃあ大陸棚に沿ってやるわけですね。マチ釣りでしょうか。量は釣れます

か？ どのぐらいの大きさの魚が釣れますでしょうか？

又：場所によって変わるから、1メートルぐらいの大きいのもいるけど、小さいのが多いよ。
焼き魚にしかないサイズはあんまりお金にならないけど。

筆：量はどうでしょう？

又：向こうは栄養がいいから釣れることは釣れる。これまではあまり行ってなかったが、今は2,3隻一緒に行っている。これからポイントを開拓すれば大きいのを釣って帰って来れるようになるだろう。ああいう漁場は大事にして行かないといけないよ。

西里 政晃 にしぎと まさあき

西里さんは、祖父の代に宮古島から開拓民として移住してきた方で、父の代から海の仕事を始めた。石垣のいわゆる宮古部落に住む方である。元々は内地で建築関係の仕事をしていたが、島に帰ってから漁業を継ぎ、西里さしみ店を経営しながら、遊漁船案内もてがけている。尖閣での出漁経験を積んでいる、現役の漁業者の一人といえるだろう。

※西里政晃さん：西

尖閣へは秋ザワラを狙って

筆：じゃあお父さんではなくて、西里さんの代になって？

西：そうそうそう。尖閣に行く様になったのは。

筆：これはどっち？(遊漁)案内が多かったんですか、仕事が多かった？

西：いや、あの仕事で、ん。

筆：その時は何釣り？

西：サワラ、曳縄で。10年位前かなあ。12,3年前。2000年前後。

筆：時期としては何時頃が多いんですか。

西：10月。10月から秋ザワラを狙って、はい。

筆：秋ザワラ、これは何か味が？

西：もう、丸々と太って、脂が乗ってるんですよ、刺身に。

筆：10月から何月ぐらい迄？

西：あの、1ヶ月間だけ。

筆：ああ、ひと月。じゃあ10月はもうこれと決めて。

西：そうそうそう。もうそれからは天気時化て来るから。あんまり行けないんですよ、向こう。

筆：このサワラというのは、こちらのさしみ店で？

西：そうそうそう、ここに卸す奴。

筆：八重山から、他の船というのは、西里さんが行っている頃というのは？

西：いや、あんなには行っていなかった。あんまり見ない。距離的に遠くて、スピード出る船があんまりいないんですよ。

筆：あ一一、じゃあ、西里さんの船は相当速い？

西：うん、速い。4時間ぐらいで魚釣島まで行く。漁場は魚釣島と南小島の間あたりで、行ったり来たりよ。一昼夜で帰ってこれる。

筆：ここを出るのは何時頃になりますか？

西：大体あの、こっからは夜中の3時に出るんですよ。

筆：ああ、そしたらちょうど朝になる位に着いて、。。

西：はい。着いて漁をやって。帰って来るという形で。

筆：ふむ。そしたら4時、いや3時に出て、7時に着いて。

西：向こうで5時間ぐらい仕事して、戻って来るという形で。

筆：ああ、じゃあお昼には出て夕方前には帰って来て、翌日にはお刺身で(お店に並ぶ)。

西：魚も日持ちする魚じゃあないもんだから。サワラは。

筆：はあ、そうなんですか。やっぱり脂が乗ってたらとかある？

西：脂が乗ってても、いなくても、もう2日が限度なんですよ。サワラだけは。

筆：じゃあ氷の量とかもやっぱり多く積んで？

西：ああもう多く。300和ぐらい積んで行きますよ、向こうには。

筆：どのぐらい釣れ、獲れますか？ この漁獲は。

西：漁獲、、大体80本から100本前後で、1本7和から15和ぐらいまでのだから。

1トぐらいは釣って帰って来る。

筆：これというのは、この西里さしみ店だけで売ってしまう？

西：うん。捌く。刺身の他にもフライとか天ぷらとかね。全部切り分けして。

筆：刺身はどうですか？ 評判というか。

西：うん。刺身はもの凄く良いですよ。

筆：もの凄く良いですか。、、西の方、新川の方でもサワラ曳きはやっていたよーというのは聞いているんですが、今はそんなには？

西：うん、出ていない。

筆：聞かないんですよ、今でも行ったりは？

西：うん、あのお客さんを乗せて行く。釣り船で。

筆：これ何を釣らせている？

西：イソマグロとマグロ、、と、あの底物ですね。

筆：底物、じゃあマチ釣りなんか？

西：マチ釣りも入る。あそこはもう120メートルぐらいからマチ類が釣れますのでね、もの凄く良いです。

筆：大きいのも釣れます？

西：うん、釣れる。もうイソマグロだったら、こっちは100和前後のやつが釣れますんで、お客さんはもの凄く喜びますよ。

筆：じゃあやっぱり乗って行く人たちも釣りマニアみたいな、、。

西：そうそうそう、マニア。一人だけで。もう固定客、リピーターよ。

筆：尖閣に行こうというきっかけは、誰かにお聞きしたんですか？

西：うん。釣れるという話は先ず聞いていたもんでね！

筆：これは、皆んな結構有名？

西：うん、知ってますよ。漁師は。黒潮が島近辺に寄らなくて、穏やかになるんですよ。

10月頃は、海流が変わって。この時期を逃してしまうと、もう行けない。

筆：曳縄というのは、どういう感じのものなんですか？ 1本の縄に？

西：サワラの場合は1本の縄に1本だけ。それを3本。両サイドに縄入れて、して真ん中、自分の持っている手に1本。

筆：で、これで周囲をぐるぐると？

西：そうそう、同じ所を行ったり来たりする。何度も。

筆：じゃあその魚釣島と南小島の間というのは、相当サワラがいる？

西：そうそう、(魚影は)もうすっごい濃いよ。

筆：アハハハ、このサワラというのは石垣の方まで来るんですか？

西：いやいや、石垣にもいますよ！ いるけど量が捕れない。ここの場合。向こうはもう釣る人がいなくて、豊富なんですよ、もう。

筆：ああー。競争相手というか、毎日みんなが行く様な所ではないから、。。

西：ないから、釣れる。

筆：ふーん。じゃあ難しいですね。避難港を作って皆んなが行けるようになったら、減りますかねえ。

西：たぶんあんまりは減らないんじゃないかな。ほんと避難港あればもの凄い良いんだけど、ここは。ここ基地にして2日ぐらい泊まれば、もう1,2トンの魚は簡単に釣って来れると思う。マチ類もいっしょだし、フエフキの仲間も結構釣れるんですよ、ここは。タマンクチナジ、ミミジャーとかね。もう3本枝縄下ろしたら底に付くまでにはもう全部食ってますよ。

筆：はい、じゃあやっぱり良い所で、。。

西：良い！濃い。2日ぐらいあれば。

筆：行く時というのは、大体お父さんの船と一緒に？

西：いやいや、僕の船で1隻で。

筆：じゃあ結構怖くないですか？ 遠いですよ。それはないですか？

西：いや、無い。あれ保安庁に一応連絡入れて、保安庁あの着いた時に必ず確認しに来るんですよ。

筆：ああ、どの船かと。

西：そう。で、確認して。で、朝や夕方着いたら確認して、朝も確認しに来るし、ヘリが飛ん来て、巡視船も来るし、で、確認して、。。

筆：賑やかですね、アハハハ。

西：ん、だなあ、アハハハ。来てすぐ戻っていくんだけどね、船を確認して。

筆：何か漁師さんの中にはこの確認を嫌がっていると言うか。

西：いや、そういった事は無いんじゃないかなあ。ただ、あまりに側まで来て呉れると、近付くと、あのエンジン音が激しい。もの凄く強いんですよ。エンジンも大きいから。魚が散るんですわ！ 沖で見て確認してくれたら良いんだけど、側まで来るからね。これだけでも魚散ってしまうから。邪魔かな。

台湾の船はいつもいます

筆：ふーん、じゃあお客さんの、船釣りの場合はイソマグロ、マグロ等で、底物も釣らせると、漁業の仕事としては秋ザワラを狙って、他の船というのは見ましたかね？
この台湾船だったり、。

西：いや台湾の船はいつもいますよ。

筆：ああ、いつもいる。何を釣っているんですか？

西：えーっとね、マチ類だね。えっとこの前見たのは2隻だったけど、マグロはえ縄やっていた。はえ縄船が2隻。

筆：この前というのは何時頃？

西：えっとね、先月の9日かな。あの、団体で行った時。船釣り大会をした時に、2隻いました。して、で保安庁が来たから道具切ってあったんじゃないかな。はえ縄の道具が島近辺まで流れて来ておったから。

筆：はあー。普段というか、以前見ていたのはマチ釣り船みたいな底物船が？

西：底物船というか、釣り船が来るんですよ、これ。60トぐらいのでっかい船が。これに向こうのお客さん乗っている。結構近くまで来るよ！ 側にまでくっ付いて来る。夜もくっ付いて来るよ。泊りがけで釣らせているんだな。

筆：はあー、幾ら、1人幾ら位なんでしょう(遊漁船の案内代)、アハハハ。

西：どうでしょうねえ、でも持っている人じゃないと来れない筈、電動リール使っていたから、結構裕福な方たちみたいだった。マチは深さが120,130メートルだから手では巻かないでしょう。全部電動リールで。

筆：60トといたら、お客さん何名位乗っている感じでしたか？

西：あれ、2,30名は乗っているんじゃないかなあ、両サイドに。

筆：そんなに乗っています？ 両サイドに。

西：うん。こっちの与那国の近くの台湾曾根にも来ますからね。

筆：ああ、はいはい。これは漁船ではない？

西：ううん。客船、お客さん乗っているのに。同じ船だよ！

筆：へえー、台湾から来るより、八重山に来て泊まって乗ってくれたら！

西：そうそう。こっちも朝、120,130(メートル)で底物釣っておったら、どんどん寄って来るよ！ あーこれやばいなあ！ってアンカー上げて、また別の所に逃げて。あいつらポイ

ント知らないもんだから、どんどん寄せてくるさ、そんなに寄られたら気持ち悪くて、釣りにならんよ。怖いよ、何されるかわからんもん。

筆：でもこれ全然報道とかには出て来ませんね。報告なんかは、海上保安庁見ているわけですよ。

西：見ているよ！ 保安庁に連絡しても来ないのに。

筆：は！はあー、どの位まで寄って来ますか？ 島の近く？

西：台湾曾根っていう曾根があるんですよ、あっちだと4,50メートル、船の近くまでくっついて来ますよ。尖閣の場合は、まあ島から離れているんだけど、やっぱり明かりが見えるから、あれはもう尖閣(領海内)に完全に入っていますよ。

筆：そういえば与那国の方が言っていました。台湾の釣り船が来ているのに、なんで与那国の釣り船が行っちゃダメなのか、不公平だねーと。聞いた時は本当に(台湾の釣り船が行くのかなあと)思ったんですが、やっぱり来ていますか。

西：います。

筆：初めて知りました。いつ頃来始めたのでしょうか？西里さんが最初に行かれた2000年頃の時は？

西：いや、見えなかったよ。段々、増えて。

筆：そうですか、あと避難港が出来たら、やっぱり2日位は泊まって仕事を。

西：うん、した方が効率がね、あの燃料を考えれば。

筆：ああ、はい。燃料はどの位かかります？

西：だいたい行く時に、400リッターは食べますね。向こうは漁場が目の前だから、避難港が出来たらもの凄い良いですよ。

筆：じゃあこの八重山、石垣島の近海でやるよりは全然使っています？

西：使う。何十倍も使う。でも避難港があればこの3分の1位じゃないかな。漁場は目の前だから、あそこは。もう港から10分もかからん、港が出来れば。10分出れば全部が漁場だからね。もの凄い良いですよ。

筆：そうすると、避難港が出来て、そういう風に使える様になったら、先ず何釣りを、。

西：いや、もうマチ釣り。あとカツオが、あのアブラカツオが多いんですよ。宮崎のカツオ漁船も来ますよ、これ目当てに。鮮魚のカツオを釣りに、1本釣り。

筆：アブラカツオというのは、これスマカツオと同じもので良いんですか？

西：スマカツオかな、こんなにでかくなるよ。トロカツオって言って、スーパーなんかで出ているやつ。ジウガジラーと言いますよこっちでは。あれが釣れる。

筆：宮崎の船というのは何月頃？

西：10月頃。同じ時期。

筆：このカツオというのはどの辺ですかね？ 島の？

西：島にくっついて！ 魚釣島のすぐ南東側で釣るんです。1キロも離れていない。

筆：ふーん、これは小魚かなんかが島に寄っているんですかねえ。

西：寄っているんでしょう。向こうに多いんですよ、このカツオは。石垣のカツオ船、前の、今のはるみ鮮魚が持っている船。これカツオ漁終えたら尖閣に行っていたんですよ。宝辰丸っていったね。前の持ち主はずっと向こうに行っていた。時期には行っていた。カツオの時期のこっちシーズン終われば、尖閣に。

筆：尖閣に行って、前の持ち主の方のお名前は？

西：玉城、。

筆：ああ！亀一さんという方

西：そう。亡くなった、この前。あの人はカツオが終わったら向こうでね、よう釣っておったよ、昔は。1ヶ月ぐらいはずっと通って。

筆：宮崎の船というのは、何ト位に見えましたかね。

西：あれ結構大きかったよ。4,50ト。

筆：これはもう終わったら宮崎に帰るんですか？ 釣ってあとは。

西：そう。釣って帰る。

筆：石垣に卸すとかではなくて？

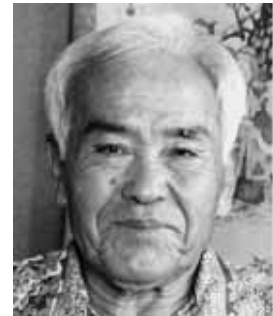
西：卸さん。

筆：色々ありがとうございます。貴重なお話。

比嘉 幸信 ひがこうしん (77)

沖縄本島のそれに比べると、八重山の底物マチ釣り船というのは規模が小さいそうである。が、お話を聞かせて頂いた、比嘉さん、神村さん、そしてもうひとり玉城亀一さん、この3人が八重山ではマチ釣り専門の大型船を経営していた。彼らは尖閣周辺の大陸棚を含めた広大な範囲を、海上で10日間近く頑張りながら操業、那覇港に水揚げしたそうだ。

※比嘉幸信：幸



比嘉幸信さん

尖閣には、マチ狙い

幸：中学出てすぐだから14,5才ぐらいに、漁業を始めたんだ。最初はずっと親父と一緒にカツオ船のジャコ採りをしていた。あの当時は本当に大変なんだな、この暮らしをずっと続けて行かないといけないかと思うものすごい厳しさがあつた。耐えられないものがあつてね、だから家内を貰った時に、自分の意地をかけて、漁船を大きいサンパンを新造したんです。

筆：この船では何を釣ったんですか？

幸：(マチ)一本釣りだよ。そしたらすぐに3ト4ト釣れるようになって、アカマチをだよ。あの当時は八重山の周りは皆んなアカマチが釣れおつた。だからが漁業者があんなに沢山いたんだ。石垣から西表から宮古の多良間から、皆んなアカマチを釣っていたよ。

筆：この時はもう尖閣に行っていたんですか？

幸：いや、尖閣に行く様になったのは、復帰の少し前に協徳丸を新造してからだよ。それまでは近くででもアカマチが釣れるから、(強いて)大型の船を造る人はいなかった。以前から先輩方たちから尖閣辺りにマチの良い漁場がある話は聞いていたからよ。思い切って遠征できるような大型の船を造った。協徳丸というもの凄い儲けさせてくれた船を造ったんだ。組合のみんなが支援して、資金も貸してくれて出来た船だよ。それで尖閣に行く様になった。

筆：じゃあ、もう尖閣には完全にマチに狙いを定めて行ったんですね。

幸：そう。その頃一本釣りはみんなやっていたけど、大型船でマチを専門にしていたのは僕以外合わせても3隻ぐらいだった。

筆：何トぐらいの船で、乗組員はどの位だったんでしょうか？

幸：全部で8名だった。大きさは15トになるかな、この船が尖閣に行つて、満船して那覇の港に水揚げするでしょう。那覇の人が驚くんだよ。

筆：1 航海で、尖閣諸島周辺では、何日位操業しますか？漁場は尖閣だけと言うことではないですよね。

幸：周辺の海の様子を見ながら判断するわけです。もちろん尖閣は遠いから、近くで釣れるなら行かないし、尖閣に行く場合は満船して那覇に水揚げするわけ。先ず尖閣に行つて釣つて、多良間の方の曾根でも釣つて、満船して那覇の港に向かうんだよ。そうして帰りは石垣に必要な冷凍の品物なんかを積んで帰つて来る。そうして那覇と石垣を往復していたよ。

筆：差し支えなければ、島のどの周辺で操業していたか、簡単に教えて頂きませんか？

幸：あの、島に沿ってずっと続いている深い所があるでしょう、大陸棚という。あそこを辿つて釣つて行くわけだよ。だから浅い所、島の北側には殆ど行かない。そうしながら、良く釣れるポイントを探してあの大きい島、魚釣島の西側の棚に良いポイントが多かった。アカマチが釣れるのは大体250~300メートルと分かっているから、その位の深さの棚になっている場所を回つて釣つていく。

筆：大体島を出てから水揚げするまで何日位かかりましたか？

幸：石垣を出て那覇に行くまで、10日位はかかった。いつも満船して、沖縄県一の水揚げも記録して賞状も貰った。本当に良い船だった。

筆：苦労した事は何かあるでしょうか？

幸：一旦出たら10日も船の上にいるんだからきつい仕事だけど、苦労という苦労は思い出せないさね。いつ行つても満船という位、本当に優秀な船だったから、東からも西から



大型マチ釣船協徳丸(15ト)進水式

も、兄さん、ワン(私)に海の技を教えてください、と乗せて欲しいと頼みに来るぐらいで、乗組員に困る事もなかった。そうして僕の船に乗って一本釣りを覚えて、一人立ちした人が新川にも登野城にもいるよ。

筆：比嘉さんの他に尖閣に行っていた船というのは、。

幸：玉城の兄さんの金剛丸、神村さんの松丸、この2人の先輩方から尖閣にはマ

チ釣りの良い漁場があると教えて貰った。玉城の兄さんはマチ釣りだけじゃなくてジューウガジラー食わせにも尖閣に行っていて、あの人が一番長らく通っていたよ。あれは本ガツオとは違ってアブラガツオといって脂が乗っておるさ。だから刺身には上等。

筆：玉城さんには以前お会いしてお話伺いました。マチ釣りにも行ってらしたんですね。

幸：玉城の兄さんは今入院している。神村さんと呼んでくるから、ちょっと待っておきなさい。



当時の水揚げの写真

神村 松男 かみむら まつお (83)

(比嘉さんに神村さんと呼んできて頂いた)

※神村松男：松

筆：初めまして、突然すいません。比嘉幸信さんから尖閣に行っていた話を聞いていて、神村さんと玉城さんが尖閣に行っていたという、当時尖閣が良い漁場だと神村さんから教えて貰ったとお話されたんですが

松：それぞれ銘々で行っていただけだよ。

幸：時期時期に、潮の流れが走る時期があるから、向こうの海は特に潮が変わるからね、何月から何月までは潮が走るからという事を、この兄さんから教えて貰ったんだよ。もうベテランの兄さんに助けて貰ったんですよ。

筆：いつ頃から神村さんは尖閣に行き始めたんでしょうか？

松：一本釣りは比嘉さんとそんなに変わらないですよ。それに船を下りてもう 6,7 年にはなる。

筆：八重山でも少ない大型のマチ釣り船という事ですが、何トで何人乗りでしょうか？

松：16トで、カツオ船の時はいつも 15,6 名乗っていたよ。マチ釣りは 6,7 名で大体 3,4ト釣って帰って来た。



神村松男さん

幸：それぐらいが目安だね、というのも日にちがかかったらそれだけ値段が安くなるでしょう。1週間、長くて9日が限度だな。鮮度が良いうちに水揚げするから。松兄さんの船が尖閣で粘って釣っているのを良く眼にしたよ。頑張り屋さんだったなあ。もう何歳になりましたかね、兄さん？

松：今年数えて82歳になったよ。

幸：はあ、もう元気だねえ。健康体だよ。アハハ。

筆：5年前というと、77歳まで船を持って尖閣まで行っていたというすごいですねえ。

幸：僕は今年75になるけど、もう子供に父ちゃんは海は休んでくれと言われてね、今でも行きたい気持ちはあるんだよ。尖閣のポイントは頭に入っているから、一緒に行っておくと教えてあげたいんだけどね。

松：船を売らなかつたら、今もやっていたと思うよ。アハハ。尖閣ではジュウガジラーも釣った。あれは時期が限られてると、傷みやすいから2トぐらい釣って帰って来た。

筆：ジュウガジラーはアカマチと比べると値段は安くないんですか？

松：値段はそれほどね、安かったよ。でもなんにしる釣れるのが分かっているからね。

また、あの魚は石垣の人にはあんまり好まれないんだよな。

幸：松兄さん、あれは血抜きが上手く出来なかったんじゃないか、カツオみたいな魚はきれいに血を出し切らないと、血が魚体に回ったら傷みが早いからね。でもあの魚はもう美味しいものだよ。脂が乗って。

筆：トロみみたいな味がするそうですね。

幸：そうそう、たまに水揚げがあるから食べたりするよ。

筆：お二人が行ってた頃は、沖縄以外の船も結構見たりしましたか？

幸：鹿児島島のマチ釣り船とかが、入れ替わり立ち替わりで来ていた気がするよ。伊平屋島の上ぐらいから、ずっと下の尖閣の方まで、あの辺の棚は本土の船に荒らされているものだよ。しかもあの船らは内地に水揚げするんじゃないんだよ。沖縄の那覇に水揚げして、またすぐ尖閣に向かうんだよ。

松：昔は多く来ていたからね、何10隻と。

幸：40隻ぐらいはいたんじゃないか、漁場が近いから。

筆：近い？んですか？

幸：一本釣りは大陸棚が漁場だから、鹿児島から出る船にとっては同じ様なもんだよ。そうしてあれだ、沖縄(那覇港)を基地にしてからは、そこから南は全部行けるようになるから。

筆：復帰前とあとでは、全然競争条件が変わってしまった？

幸：そうそう。復帰したあとでは鹿児島島の船も宮崎の船も、沖縄が使えるようになったから。彼らが那覇に水揚げして、魚の値段が上がらなくなるんだよ。彼らは船の上で何日も粘って釣れるだけ釣って水揚げするけど、僕ら八重山の船は鮮度が良い状態で水揚げするでしょう。魚(の状態)は全然違うのに同じ値段で取引されるし。

筆：八重山に来て驚いたんですが、那覇の魚市場で買う魚に比べて、こっちの魚屋さんで買うお魚は鮮度が全然違いますね。他の船、たとえば台湾の船がよく尖閣に来ていた話を聞きますが、。

松：近頃になが問題になっているけど、台湾船はいっぱいだったよ。でも海上保安庁が出てくるようになって島の側には近寄らんでしょう。

幸：僕なんかも台湾船はよく見たよ、何回もあっているけど。

松：それ(保安庁が出てくる前)までは一緒に操業していたよ。

筆：台湾船は別に邪魔になるということはない？

松：邪魔することもなくて、時化になったら一緒に避難したりしていたよ。

筆：避難する場所は決まっていたか？

幸：クバシマ(魚釣島)。風向きに応じて島陰に避難する。台風なんかだともうおれないわけだけど。急いで逃げるとー。

筆：ああ、はい。台湾の船はこの時は何を釣っているんですか、(マチ)一本釣りの邪魔にはならないんですね。

松：一本釣りをやっている船も少しはあったが。

幸：あれなんかは浅い所、80メートルから120メートルぐらいの所で延縄をやっている感じだった。マグロかなんかを釣っているんじゃない？ 僕らとは場所が違ったから詳しくはわからないが。

筆：比嘉さんや神村さんは、上陸なさったりはしたのでしょうか？

幸：上陸？ 散々島の周りは回ったけど、上陸しても何も無い島だよ、必要がないのに。

筆：水の補給だとか、鳥を採ったりだとか、。

幸：水も食料もちゃんと準備して行くからな、上陸して乗組員に変な水飲ませて、腹でも壊させてしまっちは、僕には船長の責任があるでしょう。だから上陸なんかはやったことがない。

松：僕は昔に行った時に、22,23の頃に一回上がったことがあるよ。突き船に乗っておった頃だよ。ずっとベタ風で、カジキが浮かんでしょう。その時に上陸して水を汲んだりして上がった事があった。

筆：その時は与那国の突き船に乗っていたんですか。

幸：与那国の船は昔はみんな突き棒だから。もうカジキの島だよ。

松：今はもう時代が変わって、あんな船はいないからね。リュウジン丸という船だったよ。当時の与那国ではね、夏はカツオ、冬は突き船。

筆：当時は久部良から出たんですよね、そうして水揚げはどこに？

松：そう、水揚げはね、宮古の平良とか、石垣だとかに下ろしたよ。

筆：宮古まで下ろしに行ったというと、漁場はやっぱり広かったんでしょうか？一番東の端にあるアカオ(大正島)あたりも漁場でしたか？

松：いや、大抵はクバシマ(魚釣島)の周りだよ、あそこが一番浮くんだよ。当時はもう沢

山カジキがいた。カジキが浮かんときは曳縄やったりして、水揚げしていたよ。

筆：相当いたんですね。一回の水揚げだと大体どの位カジキを下ろしたんでしょうか？

松：きちんと数えたことはないけど、大抵30本ぐらいは積んでいたよ。

幸：すると4,5トは下らないね。今だと相当な量だ。

筆：乗組員は何名位になるんですか？

松：突き船はたいてい5名ぐらいだよ。

筆：カツオ船にも乗っていたんでしょうか？

松：夏はカツオ、冬は突き船、突き船以外だと冬に曳縄で、与那国と台湾の間にあるメクラゾネというのがあるよ、そこをやったり、夏はジャコ採りをやったりした。

筆：松丸を持ってから、尖閣にマチ釣りに行くようになったんでしょうか？

松：いや、この船の前の船から行っていたよ。。もう、いいですかね。大概のことは聞けたでしょう。

筆：はい、大変ありがとうございます。突然のことですみませんです。

現実の心配は燃料の高騰

幸：あなたは尖閣の昔の漁の事について聞きたいと言っているが、今は中国の船が来たり、台湾の船が来るのがニュースになってから騒いでいるけど、ウミンチュウの現実の心配は燃料代がどんどん騰がっていている事だよ。尖閣まで行くのは400リッター位燃料がかかる、行ってみて潮が調度良く走っていれば心配は無いけど、そうでない場合は燃料代全部丸損だよ。何が釣れる、あれが釣れるというより、今はこの燃料の問題が一番の問題になっているんだよ。昔の復帰前、燃料の心配があまりない時代は僕らは台湾の紅焼島までマチを釣りに行ったものだよ、そこには3ト、4トと確実に釣れるポイントがあるものだから、燃料の事なんか考えずに計算が出来たんだよ。

松：台湾もあの頃は曳縄船ばかりで、誰もマチを釣ることなんてわからないから、沢山釣れたんだろうな。昔懐かしい話だよ。あとから台湾も釣るようになって、今は沖縄周辺まで来る様になっている。アハハハ。

筆：今はもう台湾の人もマチの味を知ってしまったんですかね。

松：そうだな。尖閣でマチ釣りをさせている釣り船(遊漁船)を見かけたよ。

幸：ああ、あのレジャー船の話か。それは聞いたことがあるよ。。。しかし、僕らがずっと使って来ていた島を今になってこういう風に中国が自分のものと言っているのは、何か釈然としない。誰が一番使って来ていると思っているのか、そういう事を無視して、ただ自分とこの島だと主張して、こういう事がまかり通れば大変ですよ。

松：しかし、不思議な島だな。ちょうど沖縄と中国を大陸棚でわけるように、大陸棚に沿って島が4つ5つと続いているよ。

筆：今日は色々とお話下さいましてありがとうございました。

高江洲 正光 たかえす まさみつ

高江洲さんは比嘉幸信さんの協徳丸の機関長として、復帰の少し前から平成の初め頃まで、凡そ18年間、尖閣にマチ釣りで通った経験を持つ。1970年代から1990年にかけてが、八重山のマチ釣り漁師が、尖閣を利用した全盛期に位置するのかもしれない、ト単位の水揚げで儲かったという話が聞こえるのはこの頃である。



高江洲正光さん

操業するには冬の方が良いんです

僕がマチ釣りの仕事を始めたのは、協徳丸に乗ってだね。比嘉幸信さんが船長で、僕は機関長。18年間一緒に尖閣に通った。あの頃は全部那覇に水揚げです。僕らが八重山に卸したら、あんだけ卸したら値段を下げてしまって怒られるからね。向こうは夏は潮が早すぎてね、仕事が出来ない。だから実際は冬の方が良いんです。

僕はマチ釣りだから大体もうこの棚に沿ってやっておったわけさ。

棚から北の方に上がったら、中国の手繰り船(巻網船?底曳船?)なんかは昔から沢山いました。彼らが何を目当てに来ていたか? 浅い所の魚は僕らはわからないからね。ただカワハギは捨ててあって、沢山浮いていましたよ。中国の船は全部手繰り船だね。あれだよ、長崎の船員があのだけで海に落ちて、中国船の網に引き上げられた事がありますよ。あんな広い海で1人の人間が引き上げられるんだから、見たらわかるが何十隻と来ているんだ。でも彼らは日本の領海までは入ってこなかったよ。棚の上の方でやって、下までは降りてこない。

台湾の船もマチを釣っている

巡視船がずっと12海里にいるから。台湾の船もそうです。外で仕事している。あれなんかは僕らと同じマチ類を釣っている。彼らもマチを食べるようになっているんだね。今や向こうでも高級魚ですよ。与那国沖まで押し寄せているから、レジャー(遊漁)船が。向こう(尖閣)はなんでも釣れるからね。棚に行けばマチ類が、また島のすぐ側、1マイルもいかん場所だと、サワラ、カジキ、トカキン、曳縄でバイナイ(ドンドン)釣れる。僕も協徳丸に乗っておった頃、潮が走って、しょうがないからサワラを90本近く釣った。レジャーには持って来いだね。

今は魚の消費が減っているんだ

今漁業者が行かなくなっている理由? それは簡単な事だよ。復帰前はね、魚が少々傷んでも売れた。今、僕らが向こうで10日間も頑張って魚を持って来たとするでしょう、もう半分の値段でしか売れない。少しでも傷むとすぐ叩かれる。それに今はみんな魚食わないでしょう。協徳丸に乗っていた頃は、アカマチ2ト釣って来るよね、県漁連(那覇の競り)に卸すでしょう。全部良い値段で売れた。今は1ト卸したら、和1000円以内にしか

らないよ。消費が減っているんだな。

僕の船だと尖閣まで行ったら600リッター位食うでしょう、7、8万円になるよね。氷代エサ代人件費、他の経費いれたら、1ト釣ってきてても合わないんだな。だから向こうに行くには、確実に潮の流れが止まっている時、大漁出来ると分かっていないと、行けない。だから大体11月頃から4月位迄と、決まってくるわけです。

僕らの船以外だと鹿児島、宮崎の19トクラスの船が良く行っている。那覇を基地にしてね、彼らが水揚げすると値段が落ちるんだ。彼らは10日間位頑張るから、すると往復で2週間はかかるよな。だから卸す魚は鮮度が弱っているでしょう。それに引きずられる。でも本土の船は身内なんだから、そりゃあ僕らも(文句を言わず)我慢はせんといけないと思う。でも外国の船まで来られるのは、ちょっと遠慮して欲しい位は言いたくなりますよ。

台湾船はね、レジャーで10名位乗せてマチ釣っているよ。で、与那国辺りまで来るでしょう、わざと領海内に入ってくるんだよ。で、僕らが保安庁に連絡する。ヘリや巡視船が来る。すぐ逃げる。

尖閣での思い出

尖閣での怖い思い出ねえ、、、協徳丸がラワンに衝突してね。向こうは流木がよく流れているんですよ。それで船に穴が開いて、もう修理して釘打ってよ、ようやく海上保安庁呼んで。曳航されて八重山に帰って来たよ。だから近くに保安庁がいるという事はありがたいですよ。

この前、仲間議員が尖閣に行ったでしょう。兄弟の船が乗せていったんだよ。仲間さんは上陸しないで写真を撮るだけというから、みんな安心してよ。ところがいざ行ったら、いきなりあの人(海に)飛び込んだでしょう。兄弟は話が違うって怒ってね。そうしてこっちに帰って来ないうちにニュースで流れるでしょう。みんな驚いたよ。

あの時は2時間位仕事も出来たよ、アカマチ70和釣って来た。大きいので4和位だった。また向こうはアーラミーバイが釣れる場所があるんだ。本土の船はよくあれを狙っているよ。向こうではマチより高く売れるから。僕らもアーラミーバイを釣ったら築地に送るよ。向こうではアカマチより値段が良いからね。ただ丁度良い大きさというのがあるんだ。2キロ前後が拵えるのに都合がいいのか、良い値段がつくね。尖閣のは脂が乗っていて値段が良い。ここよりかはずっと北だからね、やっぱり(脂が)乗るんだな。

尖閣では一番シチューマチが良く釣れる。でもどういいうわけか皆んな小さいんだな。アカマチなどは良い形なんだけど。シチューマチもクルキンマチも皆んな小さい、逆にマーマチは大きいのが釣れる。120、30メートルの浅い所、魚釣島のすぐ西で良く釣れるよ。八重山では(ポイントを)半年ぐらい休ませたら、大きいのが釣れるんだけど、向こうは休ませても小さいのが釣れる。不思議なものだね。だから売る事を考えたら、本土で値が良いアーラミーバイを狙った方が一番良いさね。ただ運賃やら経費が結構かかるんだな。ここから沖縄(本島)に送っても、2割は経費に消えるから、離島の条件というのは厳しくはある。

昔は向こうでカツオ節を作っていたそうだが、確かに時期にはカツオの群が凄いよ。だから鳥ももの凄く集まる。僕が若い頃でも、まだ台湾船はタマゴを取りに来ていた。それどころか、ダイナマイトでまだ魚を獲っていたからな。巡視船が見張っている頃の話だよ。島の向こう側で隠れて爆発させていたんだから、考えてみると向こうは台湾船に陸も海も相当荒らされているよ。



1987年頃、尖閣に通っていた時代の一枚、一番奥が高江洲さん、右端が比嘉さん。協徳丸は映画の撮影にも使用されたそうである。

平得 政八 ひらえ せい はち (79)

平得さんは与那国久部良の出身である。こんな所では儲けられないと、16の頃に島を飛び出し、18歳で糸満漁師らの追込み漁に参加したのが、尖閣諸島に行った始まりだそう。その後糸満の一本釣船に乗り、一人前になってからは石垣で大型船の船長として一本釣り、底延縄でマチ類を尖閣で釣り上げ、沖縄本島那覇に水揚げした。底延縄で尖閣に通った頃は、お金が儲かってやめられない時代だったと、平得さんは笑う。

※平得政八さん：政



平得政八さん

五：おじさんは尖閣では最初に何の技で行ったの？

政：一本釣りだったり、底延縄で行ったんだよ。島の上は70メートル80メートルの底が続いているからよ。延縄はずっと出来るわけさ。マーマチとかシルイユとかオーマチとかよ、全部直接沖縄に持って行った。

五：この船はどこ船だったの？

政：船はな、上地源光さんのハツエ丸よ。最初は松丸とかに乗って行ったな。松丸は一本釣りだった。延縄はその後からだよ。延縄は僕が一番多くやっているさ。相当な量を水揚げしたよ。4日操業したらもう積みきれない位獲った。19トンのカツオ船でだよ、あんな大きな船が積みきれない位に満船だ。色んな船に乗ったが、鳩山屋とか高那屋とかな、上地源光の船が一番長く乗った。10年以上船長をしておった。

五：島のどの辺でやっていたの？

政：3つの島の周囲全部でだよ。島の上に上がるだろ、あまり深くないさ。大陸棚の上はずっと出来るさ。クバジマから上に久米島の西までもうずっと。上地さんはほとんど僕が儲けさせたようなものだよ。

五：じゃあ仕事は大陸棚の上の浅い所が多かったの？

政：延縄は、70, 80 メートルから 120, 30 メートルの浅瀬さ、一本釣りは逆に下の深い所でやりおったさ。アカマチは 300 メートル以上だからよ。

五：他の船はいたの？ 中国船、台湾船は？

政：台湾船はようけいたさ。サバ釣ったり、何か釣ったり色々さ。サバはよ、琉水、琉球水産の船が沖縄から出ていたよ。もうやっていない筈だけど、あの時分はあそこはサバ釣りよ。夜電気付けて、サバを浮かせて、寄せて釣っているわけさ。30 トリ、40 トリの大きい船が何隻もやっておった。西原のオジーはその漁労長をしておったさ。

筆：糸満の船にも乗っていらしたと聞きました。

政：それ以前はね、糸満の大嶺屋とタルマー屋という人たちが合同で、尖閣にトビウオやシジャーを取りに行きおったんだよ。その船に乗ったんだが、向こうでの漁が芳しくない。それで 3 隻おった船を、マグロ船、延縄船、一本釣船に切り替えたんで、僕は一本釣に乗ったよ。

五：糸満から尖閣に行っていたグループはいくつだったの？ シンカはどのぐらい連れてた？

政：だから、タルマー屋、大嶺屋、もう一つあったけど、名前は覚えてないんだよ。シンカはもう何 10 名だよ。潜りなのに、みんな泳いでがだよ。

五：ハーッシ、あそこの海は危ないんじゃないの？

政：冬だから寒いんだよ。もうガタガタ震えておったよ。潜りをする若者連中は、アハハ。伊江島の若者がね、「もう親方、儲け僕は要らんから、船に乗せて！」と手を上げてるけど、艫乗り（漁の責任者）、親方は許さんわけさ、して懼で叩いて使っておったよ。僕は関係無いさ、魚を積む母船の船員だからね。母船は 25 トリ位のね、何丸だったか、だあ。船長は石垣の人で、ずっと先輩だった。あの頃の冬は今と違って寒かったんだよ、尖閣では裸では船の上にはいられなかったよ。

五：北風だな。潮はどのぐらい走ってた？ 5 ノツも走る？

政：5 ノツ！ 10 ノツは走るよ。

五：いやいくらなんでも 10 ノツはないでしょう。ハハハ。

政：あい！向こうはアンカー入れても、曳縄が出来るんだよ。潮が走るからホロが泳いで、カツオが食いついたんだよ。

筆：この潜る人たちというのは、どこから集められていたんでしょうか。

政：伊江島の連中が多かったよ。雇いではなかったけど、親方が厳しくてなあ、「なに！寒いなんて言っておるか！」って、あんな使い方しておった。可哀想だったよ。終戦 10 年もならない、5, 6 年頃だよ。僕は終戦して、与那国の景気時代（1946－1950 年頃の密貿易全盛期、大変に栄えた時代だという）わかるか？ あれがダメになってすぐ与那国を出たから、こんな島にいたらもう儲けにはならん！って親父と相談して石垣に来たんだよ。16 の年だな。

五：して、石垣に来て儲け仕事を探してたら、糸満の船が来たわけか。

政：そう。糸満の人が来て、こっちで母船を買って、謝敷の船だったかな。18の頃にその船の乗組員として雇われたんだよ。シジャー獲りのな。僕の他にも6,7名雇われたよ、久部良の青年とね、宮古の人がいた。

五：シジャーか、やっぱり追込だな。網とかの道具は糸満から持ってきてあったの？

政：そう。舳船から、網から、何もかも持って来ていたよ。

五：この糸満の追込の人たちは、別に尖閣だけでやってたんじゃないでしょう、波照間もやるでしょう。

政：そりゃそうさ。慶良間も波照間も、宮古にも行って追込みしてるんだけど、その時期は終わっているわけさ。だから今度は尖閣まで行った。

五：おじさんが乗ったのは、糸満の人が来た初めての船だったの？以前からやっていた？

政：前からやっておった感じだったよ。ずっと機関長を勤めていた方が一の橋の方におったよ。もう、みんな亡くなってしまったよ。僕らの先輩の時代だからな。無人島(尖閣のこと)には、僕は随分通ったよ。相当儲けたど。

五：源光さんが成功しているのが証拠だな、アハハ。

政：相当儲けさせたからな。夏はカツオ、冬は延縄、ハツエ丸にずっとだよ。あれは最初勝栄丸だったけど、奥さんの名前に改名しおった。カツオ船も僕は相当したよ。八重山の記録は僕が持っているのに、ひと夏で48万斤余り。船に積みきれん位釣ったからな。

五：話変わるけど、おじさんは尖閣の海知っている人だから聞くけど、あそこで昔はカツオを獲っていたそうだけど、エサはどうやったと思う？

政：わからんけど、おそらく電灯で棒受けだな。

五：あの頃に集魚灯なんてあるかな？ 明治ですよ。電気はないでしょう。

政：あーもう、灯りを作って、やろうと思えば集魚灯ぐらい作れるさ。カツオ工場の跡はあるんだから。向こう行ったら見えるんだよ。戦後になってから入れてあるけど、ヤギも沢山いるんだよ。

五：食べには上がらんかったの？

政：そんな暇はないよ。自分の仕事にが一生懸命だよ。

五：仕事は浅い所の方が多かったの？ 浅い方が潮は落ち着く？

政：いや逆だよ、浅い所の方が速いよ。深い方が大海になって走らんさ。延縄やるだろ、潮が早すぎる時は曳縄するしかないさ。ジウガギラーをよ、船のいっぱい積んで宮古に行くわけさ。宮古の人はあれをようけ買うよ。

筆：尖閣で一番長くやったのは延縄でしょうか？

政：儲けたのは延縄だよ。4日で1万斤は釣って、すぐ沖縄に上げて、戻るときは源光の荷物、冷凍のかまぼこ材料なんか積んで石垣に下ろして、石垣からは氷積んで、尖閣で又4日釣って、これの繰り返しよ。船は行き帰らずと満船だ。これが全部儲けになるんだからやめられんさな。金がちり紙の時代だったよ。(船から下りたら)毎日18番街に金束にして行ったもんだ。

筆：底延縄ですと、魚の種類とか大きさはどうでしょう？

政：色々いるからね、大きいのならウキムルー(カンパチ)は何10疋というのが釣れるけど、あれは安いから捨てて来るよ。あんなのまでは船に入りきらん。向こうの底は泥地でね、上げたら釣り針にみんな泥が付いている。大陸から流れてきたのが積もっているんだろうな。あんな所でマチが釣れるから、所々には岩が、ヤナがあるんだろうな。泥だけでは魚はおらんよ。向こうのアカマチはね、またこんなに小さいよ。大きいのがおらん。取り過ぎたのかも分からんよ。あの時分は日本船がみんな集まっていたからよ。沖縄基地にして、尖閣に来てマチ釣って。あんな小さいアカマチなんか金にならんよ。だけど数は獲れるさ。逆に深い所、大陸棚から下りた所は大きい。クバジマの西はアカマチ食うけど、小さい。金にならんから僕はトリシマの東よ、アカマチはあそこでやっておった。あそこは大きい。270メートルから300メートル位深いところな。

五：サメは向こう沢山いない？

政：あれ、今はこんなんだけどよ。昔はいなかったんだよ。僕らが延縄しているのを学習して、集まるようになったんだな。

ま：延縄の船は平得さんが船長で、他に乗組員は？

政：6名いたかな。玉城マサオは、もうおらん。亡くなった。石垣シントロウわかるか？あれも一緒に尖閣通ったさ。

五：シントロウ兄さん、わかるよ。あの人にも聞いてみないといかん。

政：僕は尖閣にようけ通って、一番詳しいからよ。仲間均とか、色んな人が金持ってお願いしに来おったよ。でも保安庁がうるさいからみんな断ったさ。以前は何回か乗せて行ったことがあるけど、もうやかましくてな。一度は自分らのお父さんが戦争で向こうで亡くなったから弔いたいと、許可も貰ってると言うから、乗せて上がらしたら、許可はとってない上に入墨してるヤクザなんだよ。家に帰ってみたら保安庁から呼び出しでしょう。もう困ったよ。

筆：いつ頃まで尖閣には通ったんでしょうか？

政：平成元年に、南方のバリ島にマグロ船を教えに行ったから、無人島は昭和の最後の年までだよ。

五：雇われたの？

政：そう、2年間向こうでマグロ船を教えた。5隻の船団を作ったけど、日本人の給料は高いでしょ。現地の船員は安いから、船長だけ日本人で、あとは現地の人雇って、仕事を教えるわけさ。僕はヤマグー(野生児?)で言葉わからんけど、向こうが出来るようになりよったさ。「お前ら日本語出来なかったら仕事覚えるの一生無理だよ」とバンメカシとったら(ハッパをかけたら)、日本語覚えとったよ。アハハ。

五：おじさんは若い時はレスラー並の体格で、顔もエリツインみたいだったからな。みんな必死で覚えたんじゃないの。

政：あの頃は屋慶名の政八といたら、石垣の遊び人はみんな震え上がったからな。

上地 貫伸 うえち かんしん

上地さんは潜り漁を専門にしている、いわゆる代表的な沖縄のウミンチュウである。若いころに電灯潜りで尖閣に行ったという。

※上地貫伸さん：貫、漁師小屋の仲間：仲



上地貫伸さん

筆：尖閣まで行ったというのは？あのサバネみたいな船ですか？

貫：いや、ボートでだよ。朝の3時頃出てよ。翌日の夕方に帰って来たよ。向こうに朝について、ちょっと泳いで偵察してからに、夜に電灯潜りして、翌日帰って来たさ。

筆：何名ぐらいで？

貫：3名だったなあ。

仲：お前尖閣行ったんか？ 誰の船で行ったんだよ。

貫：はるみのシンコウオジーの船がだよ。

仲：はあ？ 燃料足りんだらう。どうした？

貫：水缶に詰めてよ、あの真っ黒の。エンジンにも満タン詰めてよ。

筆：漁はどうでしたか？どの位、。

貫：いやあ、(初めて行くんだから)海が分からんのに。マギー魚がいるって言うけどよ。

筆：行くきっかけ、理由というのは、

貫：沖縄の人が、糸満の人が行こうって言うからよ。自分は行かんて言って、二日酔いで行けん言うからよ。

仲：どのぐらい突いた？

貫：タンナーを、イソマグロをよ、3つ4つ突いても、知れているから。マギーだけだよ。

筆：大きいから値段が良いということはないんですか？

貫：いや。そういうわけにはいかんのよ。ただ尖閣見たいから行ったようなもんよ。

筆：行かれたのは何年前ぐらい？

貫：30才頃だからよ。

筆：失礼ですけど、今おいくつですか？

貫：23才。

筆：ああ、じゃあ10年後に行かれるということで、。

貫：あの頃は海上保安庁も1艘だったよ。行っても何も言わなかったよ。時期は、何月ぐらいかなあ、11月位だった。沖縄の人が電灯潜りに良く行っった。大きい船で何名もシンカを乗せて。何名か死んでるよ、あそこでは電灯が消えたら終わりだからよ。

筆：流されるんですか？

貫：無人島なのに、はあ、あそこはデージードー(大変だよ)。(潮の流れが)ヨナラ(水道)より走るからよ。比べものにならん。

金城 マチコ きんじょう まちこ

ハーレーの余興でハワイアンダンスを披露していた方である。

※金城マチコさん：マ



金城マチコさん

マ：尖閣列島のニュースを見るとねえ、石油の話で大見謝さんという人を思い出しますよ。

筆：大見謝さんをご存知なんですか？

マ：私がまだ子供の頃、八重山にいた頃ねえ、石油を掘るっていつて、大見謝さんという方が八重山に来たんですよ。その調査にうちのお父さんが協力していたんですよ。山形屋の直ぐ側に宝石屋さんをやっている人で、この人が初めてこの尖閣列島に手を付けたんですよ。

筆：お父さんはウミンチュウですよ、お名前は？

マ：うん、もう亡くなった。金城勝次と言ってね。尖閣列島の調査を手伝ったんですよ。そのあとから、東海大学とかなんかが来て調査をしたんですよ。

筆：じゃあ最初に調査の船を出したのは。

マ：そう、最初に出したのはうちの親父。

筆：船の名前とかは？

マ：いや、小さい船だったから名前なんていうのはあれですけどね、最初にやり出したのは大見謝さんで、うちの親父が手伝ったから憶えているんですよ。尖閣列島の騒ぎが大きくなっているけど、最初に初めたのは沖縄の人なんだ、大見謝さんなんだって。うちの父ちゃんもそれを手伝って皆んな働いてって、それを今の方は忘れてるんですよ。それを皆んな忘れてるの。なんだか可哀想だなあって、本当にそう思って。あなたの調査もがんばってください。

筆：大見謝さんの事をこの場で聞けるとは思いませんでした。ありがとうございます。

マ：本当によく憶えていますよ。うちはまだ小さかったけど。ぼっちゃりして。優しい人でしたよ。石油が出たら、儲かるって、沖縄の人がみんな楽になるって、色んな難しい手続きなんかしたのもあの人なんですよ。今のニュースを見ていると、あの方があんなに頑張ったのにねえ、と思いがらいるんですよ。

筆：思いがけなく、本当に良い話が聞けました。

マ：忘れられているんですよ。じゃあもう行こうね。

尖閣水産

かつて、沖縄には尖閣水産という水産会社があったという話を、元船大工の宮良貞光さんから聞いた。泊漁港の隅には、当時会社が使っていた尖閣丸といった船が、打ち捨てられているという。俄には信じがたい話だったが、実際に尖閣丸を眼にした。石垣の港では、水揚げの際に使う青いプラカゴに、「せんかく」の文字が刻まれているのが眼に止ま

った。尖閣水産の名残りである。

筆：那覇地区漁協の港に尖閣丸という漁船が捨てられてありますが、これは昔尖閣水産という会社があって、そこが持っていたマグロ船だそうなんです。



五：懐かしいな名前だな。尖閣水産は元々は与那国の人が石垣で始めたんだ。那覇に移ってあとはわからないけど、僕はそこの事務所に一時いたことがある。事務所には僕ともう一人、今は八重山商高野球部の監督している伊志嶺という人と一緒に勤めていたよ。

筆：マグロ延縄をしていたと聞いていますが、八重山ではどういう会社だったんですか？

五：最初はよ、遊漁船だったんだよ。始めた人が川平さんという少し右翼と付き合いがある人で、尖閣に上陸させるために中古の漁船を買って、遊漁船に仕立てあげたんだよ。

筆：船は何隻ぐらいあったんでしょうか？

五：3隻持っていたはずよ。つる丸と尖閣丸と、もう一つは何だったか、。つる丸はお母さんの名前からとったそうだよ。ただ、思いつきが思いつきだから遊漁船で尖閣へ行くことは出来ずに、マグロ漁をやるという話になって製氷所なんかも作って、一時は大々的にやって、やろうとしていた。

筆：マグロ漁の方は余り芳しくなかった？

五：うん、さっぱりだったんだな。尖閣で仕事をしたのかもよくわからない。釣るには釣るけど、船員を満足させるような水揚げはなかった。最低保障の給料をぼちぼち払っている格好だったよ。

筆：五男さんは事務所では何を？

五：部品の発注とか、そういう事務方の処理が主だったよ。でもたまに右翼みたいな若い出入りして、少しキナ臭いところではあったな。

筆：船員の方は結構いましたか？

五：与那国の人が殆どだったな、仲本さんという方が尖閣丸の船長だったよ。あと稲本さんという方、仲本さんは以前は突き船に乗っていた方で、穏やかな良い人だったよ。漁協の後ろに事務所があって、大浜長弘さんの建物を借りていたよ。

筆：市役所通りに面した建物にも、尖閣水産というペンキの跡があるんですが、。

五：あれは、それ以前の事務所じゃないかな。最初に遊漁船をやろうとしていた頃のだろう。ところが遊漁船は無理になって、船はずっと陸に上げて遊ばしてあった。遊漁船タイプでは本格的な漁業には使えないからなあ。そうして話がコロコロ転がって行って、あの人のお母さんが金はどんどん出すから、今度はマグロ船を買ってきて、事務所の側に製氷会社も作って、あげくに全部みんな失敗だ。みんな失敗してしまったんだよ。今の騒ぎを考えたら、もう少し計画的にというか、見通してこの尖閣水産を続けていた

ら、世間に主張できる立派な事業になっていたかもしれないよ。そう考えると残念なことだよ。

平良 良則 たいら よしのり (56)

尖閣の周辺は潮の流れが速いと、多くの漁業者が語るが、その海でサンゴ礁内の追い込み漁を試みた方々がいるという話を聞いた。現在遊漁船を経営する第八紀丸の船長、平良良則氏も、追込シンカの一人として参加したそうである。

※平良良則以下：平



平良良則さん

筆：(チナカケ)の親方はどなたでしたっけ。

平：大嶺さんよ。

筆：あのロッテの大嶺投手のおじさんにあたるわけですか？

平：いや、爺ちゃんよ。

筆：お爺ちゃん、あの育てられたというおじいさんですか。

平：そうそうそう。

筆：あの、平良さんのチナカケーのお話ですが、僕はあまり詳しくないので、詳しい方で金城五男さんという方をご一緒に話聞いて貰えないかなと、お呼びしました。何名ぐらいで行ったんですか？

平：6名ぐらい、母船付きでね。

筆：じゃあ全部では。

平：10名ぐらい。母船はキャビンもあって寝泊まり出来る。けど僕らなんかはもう暑くて、網なんか持って出してから寝てたけど。

筆：平良さんは昭和何年生まれでしょうか

平：32年。母船は、伊礼の正市兄さんの船だった。

五：尖閣へは初めて行ったの？ 何日位いたの？

平：一晩しかいなかった。台風が近づいてきて。

五：台風じゃなかったらどうだったかな？ 大漁出来た？

平：駄目だ、あそこは。

五：網に入らない？

平：人驚かん！魚が。チナ(魚を追い込む脅し網)敷いててもよ。

五：あー！決定的なあれだな、チナカケーには

平：チナ敷いてもよ、魚が網に入らんわけさ。

五：魚を脅す道具があるだろ、あれに対して魚が余りにも動かない。無知なんだな、危機意識がない。恐怖感がなかったと。

平：そう！で、もうどうにもならんわけよ。脅かしも出来ん。人間に向かって来るのに。

五：脅嚇道具にはならなかったわけだ。

平：そう、

筆：魚はいることにはいるんですか？

平：いーっぱいいるんだよ！アハハハ。

五：この、条件が合ったら獲れたんだな。

平：あー！（もちろんという風にうなづく）

五：網を、あれ。潮で流されるといふ苦労は無かったの？（向こうは潮が強いというけど？）

平：いやいや、そんな事は無い。そんなあれは、だから潮のちょっと緩い所で張ってあるから。

五：そういうところは何箇所ぐらいありそうかな？

平：あー、僕らは行って1網座らして、翌日2網、2袋座らしたかなあ。あんまり入らなかつたけどな。

五：まあそれはしょうがないと思うんだけど、セット出来たら、あの潮の流れにきつい思いはしなかったか？というわけ。

平：いやあ、そんなでは無かつたけどよ。

五：台風の条件も絡んだわけだなそれに。

平：して、あの当時、昔は無線も入らんかつたわけさ。ラジオも入らんしよ。だからもう、うねりが出てきたからよ。実際。やばいかも一つって、案の定帰って来たら、台風発生してらって。

五：あー、はあはあ。それでもう、そういう条件から、行かないと。

平：赤字さ、ムル。あー、親方はもう。ジュンニ(ほんとに)よしてもうモノが捕れないん。だから。だから夜泳いで懐中電灯で泳いで突いて、あれで、。

筆：これはもう電灯潜りに切り替えて？

平：懐中だから普通の電灯でさ、。

五：あの何島の島陰でやったの、？

平：えーっと、なんてが言う？ まずあの最初の小さい島と、こっちの島、あれヤギがいっぱいいる所。

筆：あー！はいはい。魚釣島、それともクバシマというかな？ヤギがいっぱいいました？

平：ヤギいた。いっぱいいた。あっちの奥の島には行ってないからな。手前の島。このこっちのヤギがいっぱいいる所だけが、こっちの島陰でがやったから。

筆：これ親方はなんで行こうと考えたんですかね？

五：魚がいるという情報だから？

平：いやいや！そう、たまには行ってみようという事だった。

平&五&筆：アーハッハッハ！

筆：ああ、冒険！

五：赤字ーなっているさアハハ。

平：えー、前の日というか、その前の前の日は宮古に行ったわけさ。宮古行って、えー、平安名崎の方、こっちでひと網座らして、300 疋位揚げて、して宮古に、平安名崎の下に港があるよ無人の。してこっちに船着けて、大嶺さんの親戚、呼んで、軽トラにみんな乗って、あっちの部落まで行って夜は宴会して、翌朝さあ行こうってして、仕事やろうとしたら、佐良浜（宮古漁民）に追い駆けられて。

五：アハハハハ！

平：やばー！これー！って、「石垣の人は帰れー！」って。もう仕方なく帰って来て、それから積み込みして尖閣にまで行ったわけさ。

筆：はい。

平：はあー、こういうわけよ。宮古は魚いっぱいいたよ！

五：ああ、当時はいたって言っていたなあ。

平：もの凄いいた。チナカケーやっている船があんまりいないから、魚はバンナイいた。

筆：そしたらもう追い返されて。

五：ヤリ持って投げられようとして、海賊だな。

平：すぐもう！ あっちも石垣の船すぐ分かるわけさ！

五：あーそう！

平：こっちもサバニも 1 艘だったからよ。網船が。あっち(尖閣)はもう沢山いたけどなあ、行きたいんだけどなもう 1 回。

五：チナカケーは持たないか、電灯潜りだなもう。

平：あー！電灯潜りと昼潜りは凄いいよ！もう。だから母船はもう網入れている間は暇さ、トローリングしているけどよ、糸が持たないと言うからして、イソマグロに食われてよ、200 のナイロンなんかも。みんな切られているつってから。

五：200？ カジキじゃないの、お前。

平：300 疋位のマグロなんかいっぱいいたのに、イソマグロ。

五：は！

筆：そんなに大きくなるんですか。

平：大きいのはよ！ 1 本から 2 本位釣って、ダンブルに入れたけど、石垣に帰って来たら出せないわけさ！こっばってるから！ だから中で 3 等分か 4 等分に 切ってから出したのよ。生きている間は軟らかいからどんなにでも入るさね。あの氷室に。トー、港に帰って来たら出そうとしたら出ないのに。

五：死後硬直して。

筆：へー、じゃあやっぱり魚はいっぱい。

平：いっぱいいるよ！はあー！いっぱいいるー！海の中。

もうあと 2,3 日おれたら面白かった筈だけどよ、

五：ふーん。コツを掴んでおいとったら、上手く行ったかしらんなじゃあ。考えれば、

あんなにいるんだから。

平：半分はもう遊びで行っているから。まずは行ってみようよ、

筆：それで10人ぐらいで、

平：そう。

筆：全部登野城からですか。

平：そう。

五：伊礼さんにちょっと会ってみような。この件で。

平：正市兄さんに会ったらいいよ。

筆：五男さんお知り合いですか。

五：おう！弟分で可愛がられてるよ。

平：僕は人数だけで、名前は誰々いたか余り覚えてないけどよ。あの当時サバニの持ち主は誰だったかな、平良イサムだったかな！平良イサムの船でいったかなあ、そう。魚は凄い！

筆：海上保安庁の船とかはいたんですかね。

平：いや！いなかったよ！

筆：いたら何か、。

平：いやあの当時まではそんなには、あんなにもではいなかった。違う違う。

(日中が)喧嘩してなかったからよ。

筆：サメが沢山泳いでいるという話聞きますけど。

平：いや、俺らなんかサメ見えなかったよ。やっぱり血イ流したら来るんじゃないの？

サメは。特にやっぱり夜とか、あんまり網をしても、魚血イ流れないから。

筆：夜モリで突いたというのは、どんなのが多かったんでしょうか？

平：あー、んとよ。何と言うかな、タンナーと言うかなあ。

五：タンナー、はい。

平：うん。あんなのが多かった！とか、ゲンナーとか。

五：ゲンナー、はい。ボラ、カワハギとか

筆：大きいですか？

平：大きい！大きかった。これ口にノリ、皆んなノリ生えてたよ。

五：ブダイの仲間、皆んな。食性もブダイと一緒にノリを食べたりサンゴを齧っている。

平：あんだけ年取っていてガバーなってるという事でしょ。口がもう汚れてよ、口が青ノリ生えてる様に口が、。

筆：(尖閣に行ったのは)この1回だけ？

平：1回だけー！

筆：ああもう1回だけ、。

平：あーもう、2回は行かんだらうなあ。

五：あの時に黒字だったらいいけどな。2回とは行きたくはならないわけ。

筆：あーそっか。悪い思い出になってしまっ。

五：トラウマになってしまっ、ヘッヘッヘ。

平：チナが驚かんのに！魚自体。どうしようもない！人間が一生懸命追いかけても入らんのに。

筆：普通はこれ、逃げる？

平：普通はよ。網座らして、もう。チナ敷いて、少し手練り寄せたらよ、あきさん、もう網に入ってるよ。だけども、この辺(チナの周辺)で、もういっぱいウロウロしている。全然歩かんのに。追いかけてからがやっとな、やっとなもう入る。

五：チナをもう、脅嚇道具とは全く認識しておらんわけだな。

平：うん。人間見たことがない筈なのに、魚自体が。もう怖いものだとは思わん筈よ。

筆：じゃあ、本当の無人島だ。

五：追い込めないわけだよ。アハハハ。

平：でも1,2回やって、驚かせば！次からはアレする筈だけれども。

五：だからコツ掴めばどうにか出来た筈だけもなあ。

筆：大変ですなあ、先ず魚にも覚えさせてから、

平：そう。

五：これ(チナ)、怖いぞおー！ってな

筆：アハハハ。

平：ああ、あの当時はあっちに行って泳ぐ人あんまりいなかったのに。あの後からが、三郎(海人三郎)も、船で行く様になっているからよ。

五：(チナカケが出来る漁場がある事)この情報は誰から仕入れたのかなあ？

平：あー。、

五：伊礼さんわかるかなあ？でなかったらあの大嶺さんわかるかなあ。

平：わかるかも知らん、うん。

五：聞いてみようなあ。

平：その前に、その前ぐらいからかなあ。登野城の吉元さんなんか、良くサワラ釣りに行っておったわけさ。

五：サワラ釣りにね、あー、海を見ていたんだなあ。

平：サワラ良く釣れるって言うておったよ。登野城から2,3艘位行ってたかなあ。パヤオが無い時代さ！

五：長嶺さんなんかも行ってたかな、死んだ長嶺さん。長嶺タケイチさん。

平：あー、、、僕は釣りやっている人はあんまりわからんから。

筆：ああ、じゃあ先輩方がサワラ釣りに行っていたりして。

平：うん。そうそう。

筆：どんな海だよーって？

平：うーん、これは僕も親方からは聞いていないけどよ、たぶんあれなんかはあんな情報

は入っておったんじゃないの。先ず行って泳いでみたかったんじゃない？ 潜りやっている人はそうよ。

筆：先ずは海を確かめて？

平：たぶん雇い小の時代でも、尖閣には行ってない筈だから。

五：うーん。

筆：(平良さんが)25歳ぐらい。

平：うん。25ぐらいの時だったと思うけどな、もっといっておったかなあ。

筆：あの三郎さんがまだ尖閣に行っていないぐらい。

平：まだ行って無かった筈、うん多分。親方に聞いた方が早いよ。どういうあれで、尖閣に行くという様な。

五：よし、じゃあ大嶺さんとこ行ってみような、今。

平：漁協のすぐ東側に、伊礼さんなんかも皆んな船並んでいるよ。

筆：じゃあ、平良さんありがとうございました。

伊礼 正市 いれい しょういち

尖閣での追い込み漁を試みた際に、母船(運搬船)として船を出したのが伊礼さんだという。成果はなかったと言いながらも、快く当時の事を話していただいた。また一緒にいた友人の方からも尖閣の事や、最近の事について、色々とお話を聞くことが出来た。

※伊礼正市さん：伊、左は伊礼さんの友人：友



右が伊礼正市さん、左は友人

五：新川で伊礼さんらが尖閣に行った話を聞いてきたんだけど

伊：あの当時はもう、若かったからな。

五：チナカケ(サンゴ礁内追込漁)はその時一回しか行っていないの？

伊：サバネも僕の船ももう一緒に。あそこに追い込みしに行ったよ。

五：して、どうだったの状況は、成果はあったの？

伊：いやあ、あそこの魚はよ、チナを見たことがないからよ、追い込めないのよ！アハハ！人間を見た事がないんだな。チナが来ても驚かんよ。こっちの海とは全然違うど。

五：ハハハ、逃げないの？ して、イユ(魚)はどんなよ。

伊：アハハ、あまり良い魚はいなかったな。ムルー、タンナー、ゲンナーあんなのしかないよ。

五：ああ、タンナーな、聞いていた通りだね。

伊：タマンなんかいたらな、でも延縄でタマンとかあんなのは獲れる。タマンはマギーさどー！ 潮の流れが激しくなかったら、なんでも釣れるはずだけどよ、あそこはかなり

激しい。

五：追込網は、底網はどうやってセットできたの？

伊：出来る場所があるんだよ。

五：出来る事は出来るんだ。それは沢山ある？ 少し？。

伊：場所はあるんだけどよ、チナを驚かさないんだから獲れない。チナが少しでもゆるんだらよ、平気でチナの上を歩いて行くのに。魚はあんなにが(たくさん)いたんだけどよ。

五：ああ、いることはいるわけだ。

友：かえって電灯潜りがいいんじゃないの。

伊：台湾人がダイナマイトを投げたみたいで、(サンゴ礁が)ムル割られてあったよ。沖縄の人はもうあの時はダイナマイト使わないさね。保安庁がこっちか見張っているだろう。そうしたら台湾の船は島陰に隠れているわけさ。

五：保安庁の眼を盗んでやるわけだ。

伊：昔は眼を盗んで台湾の船はよくダイナマイトを投げておったよ。

筆：台湾の人もダイナマイトを使うんですね。

五：アハハ。八重山の人より上手かもしれんよ。やった後は新しければすぐわかるけど、今はもうやらないのかな。そういえばこの間も行ってきたんだよな。尖閣つぎはいつ行くのかな？

友：もうすぐだな、今度は10隻ぐらい計画しているみたい。

筆：ああ、そんなに。

五：漁業活動だよな。運動活動じゃないよなアハハ。

伊：台湾の船はもう突き台の上に乗ってダイナマイトを構えてよ。もう見てすぐ分かるぐらいにやっておった。

五：僕ら島の方は復帰してから。保安庁が厳しくなってやめたでしょ。そのあともやっておったの？

伊：やっておったよ。今はもうやめてるだろうけど。向こう(尖閣)には避難場所を造ってくれたらもっと行きやすくなるんだけどな。

五：みんなそう言っているね。

友：保安庁は自分なんかで法律作って取り締まっているけど、今やっているのはあれ違法なんじゃないか。これまで傭船はみんな取り締まっていたでしょう。今は乗組員名目で色んな人や議員さんなんかに乗っても何も言わない。あれらは漁師じゃないよ。

筆：うーん。

友：保安庁は自分らで罪を犯しているよ。

筆：これまで厳しいぐらいに取り締まったかと思うと、今度は逆に行きなさいと言ったり、色んな人が乗っていったり、、、。

伊：最近台湾の遊漁船が保安庁の船に当たって来たらしいだろう。こんな対応じゃ、日本は馬鹿にされているよな。保安庁が捕まえるのは日本の船だけだからな。台湾の船な

んか捕まえんよ、(領海に入っても)出て行け出て行けしか言わんのに。

五：不公平だよなあ。

友：なんで身内を捕まえて、台湾の船は捕まえないのかな。避難港を造って態度を見せれば来なくなるんじゃないか。

筆：今はどの船が尖閣まで行ってますかね。石垣の船以外だと。

友：(港が出来たら)、石垣の船、宮古の船、那覇の船、鹿児島島の船、から全部あっちに避難するよ。

筆：そんなに使っていますか。

友：うん。避難場所さえ出来たら、だから(他の船は)行ききれなくなるよ。(日本の船が)あんだけ使ってるから。

伊：向こうは避難する場所がないからよ、時化たら急いで帰るしか無いんだよ。

友：どこかに避難して(時化を)やりすごせたら、相当使えるようになるよ。東京都が買ったら造ってくれないかな。

筆：どうでしょうね。港を作るのにどのぐらいのお金がかかるのか。やっぱり買ってもらうないと造りきれないんでしょうか？(東京都が購入のために呼びかけた寄付金は)八重山に来る前で確か10億円は超えていたそうですが。。。話を戻して、チナカケのあとに尖閣には通ったりしたんでしょうか？。

伊：延縄では何回か通ったど。

五：延縄では何が釣れるかな？ アカマチ？

伊：浅い所はダメだな。汚い。流し延縄(おそらく底立延縄か)で深い所に流したら上等さ。でも今は禁止になっているからよ(八重山漁協では底立延縄漁はマチ類資源の乱獲を招くとして自主規制中だそうである)。ここじゃ出来ないわけさ。あその海は、避難場所さえあれば、本当に良い海ではある。

五：チナカケで行ったのが、復帰して後だよな。

伊：今から20年少し前の話だよ。

五：1990年前後か、その頃でも台湾はダイナマイト使っていたの？

伊：はあ、あの頃台湾の船はまだ色んな所を歩いておったのに。当時は尖閣列島といえど騒がないようにしようという感じだったさ。保安庁は見て見ぬふりよ。

五：こっちでは厳しくやって、向こうではそうして。この証拠はウミンチュウは見れば分かるわけでしょう。あんまりな話だな。

伊：そりゃわかるど。皆んな真っ白になる。だからもうムルーもシチューもあんなにいたのが全くなかったよ。恐ろしいぐらいにいたんだよ。

筆：島に上がったことは？

伊：いやもう保安庁が見てる頃なのに。

友：(傭船を受けたら)呼び出されて大変だったど。降りるなよと言ってるのに、本人なんか勝手に上陸して、あーもう。。。

五：何を尋問されたの？

友：たんまり絞られたよ。川満はその話は得意だよ。あれは何度もヤマトゥーを上陸させて呼び出されているからよ。5.6艘ぐらい捕まえられてる筈よ。ハンマヨー！

五：ああ、川満の兄さんは、アハハ。じゃあもう行こうね。ありがとう。

大嶺(おおみね)のナガーオジー

大嶺さんは宮古出身のウミンチュであり、八重山では甲子園に出場した八重山商高の大嶺投手(ロッテに入団)のおじいさんとして知られている。平良さん、伊礼さんらシンカを率いて、尖閣の海でチナカケー(サンゴ礁内追込み漁)を試みた親方その人である。

※大嶺さん：大 大嶺さん奥さん：奥



大嶺のナガーオジーさん

五：おじさん達が尖閣でチナカケーをやってみたと、シンカの人たちから聞いて来たんですけどね。

大：ああ、あれ。アハハ。僕らが行った時は、まだ自由に行き来していたからよ。台湾船も来ていたよ。200海里問題がなかった頃だからな。

五：中国船は来ていたかな？

大：中国船はいなかった。台湾の船ばっかだった。突き船が多かったさ。

五：あの時は皆んなダイナマイト使っていたそうじゃない。

大：アキサミヨー。皆んなじゃないよ。シチュー(イズズミ)よ、ああいうのを獲る人がやっていたんだよ。

五：おじさんは何で行ったの？

大：僕らは電灯潜りで通ったんだよ。その合間に追込を試そうということで、網を持っていったわけだ。別に網に入らんという事ではないよ。向こうで魚を獲って、こっちに帰って来ても(セリに出すと)安いわけだ。

五：魚はいることにはいるの？ 潮はどんな感じ？

大：沢山いるよ。向こうの魚はあまり下には降りないよ。クバジマよ、リーフは棘々だけど、底の方は深い亀裂が走っていて、それがずっと続いているのよ。追込するだろう、魚は全部そこに逃げていってしまうわけだ。五男、お前も向こうにチナカケーしに行くのか？ アハハ。

五：いやあ、あそこでの話を色々聞いてるだけだよ。

大：だけどな、トリジマあるさな。あそこでは試さなかったけど、(追込みするには)おそらく上等だな。

五：ちゃんとチナに驚くかな？

大：ハッサミヨー。人間が10名で囲んで脅かすんだよ。チナに驚かないわけがあるかよ。

五：この、おじさんが試した時は成果はどうだったの？

大：全然ダメ、ムル赤字よ。あれは遊びながらの研究だったからよ。500キ位獲ったけどよ。

五：調査で行って、出来ないという結論になったわけだな。

大：海を見て、いわゆる視察だな。出来ないというよりは、引き合わないという事だよ。

良い天気の時になら向こうには行けないわけだ。(天気が良いという事は)、こっちは魚安いだろ。

五：！！なるほど。良い天気の時他漁も良いから、必然的に魚(の値段)は下がるわな。

大：そう。魚の値段が安い時にしか行けないんだな。試験で遊びながら行ってみたが、母船は3トぐらいのサンパンだよ。尖閣見に行くぞ、大漁して来るぞ！儲かるぞ！って皆んなに声かけてよ。アハハ。僕のシンカは本当は5名しかいなかったけど、10名引き連れて行ったんだよ。

五：ああ、上陸して鳥のタマゴ食べたりはした？

大：いやあ、視察だけだよ。鳥なんてそんな。向こうはクバやらチャーギやらもの凄く茂っているよ。

筆：ヤギは増えていますか？

大：あれは昔からいるよ。10年位前にエビカキに行った時に良く見たな。サワラ曳きなども合わせたら、向こうには全部で10航海余りしているよ。

筆：行く時期というのは、いつ頃が一番多かったでしょう？

大：夏の時期だよ。ちょうど今時分だと天気が良かったら船も走るから上等さ。

五：何時間ぐらいかかる？

大：昔は船も走らんからよ。5時間余りかかったな。今なら3,4時間もあれば行けるんじゃないの。

五：本当に？そんなに近いのなら家の海、日帰り航海が出来るじゃない。

大：やろうと思えば出来るけど、経費が持たないよ。(利益を出すには)魚積んで来んといかん。

五：日帰りの海にはならんわな。魚積んで帰って来ても安い。難しいな。

大：電灯潜りで遊んだ方が良いよ。向こうは保安庁が頑張っているから、昔よりは安全だしな。今さっきラジオで日本人が2人島に上がったって言ってたぞ。

五：右翼だろうな。ああいうのでなんか問題が起こったら大変だよ。

奥：大東亜戦争が始まるよ。アハハ。五男、お前尖閣に何の用があるからこんな話をしているのさ？

五：いやチナカケーしに行くからよ。

奥：ハーツサツ、お前。中国の船に撃たれて死んでも知らんよ。

川満 安次 かわみつ やすじ (75)

川満さんは尖閣への傭船歴がおそらく全国一である。話の内容は漁業と活動が入り混じっているが、興味深いものがある。新川漁港側の漁師小屋で、尖閣への出漁と傭船のお話

を伺った。昼間の聞き取りなのだが、なぜか皆んなハイテンションである。

※川満安次：安

安：復帰の前ぐらいから(尖閣)通っているわけさ。

五：石油が出る(という話)と同時にもう、3国入り乱れたからねえ。

安：一回は、200隻ぐらい、中国船が来とったど(1978年の中国武装漁船襲来事件のこと、鄧小平来日の際に、日本側では日中間で尖閣問題の処理が話し合われるという期待があったが、中国側は武装漁船団を尖閣諸島近海に集結させ、この問題で妥協する余地の無い事を明確に暗示した、この時鄧小平は、尖閣の問題は今話し合うべきではなく、未来の人たちに任せましよう、日本側にとどめを刺した)。こう、戦争ならんかなというぐらい、怖いぐらい。

五：上陸はどうやって阻止したの？

安：ああ、保安庁が追い払ったさ。

五：あの頃から力入れ始めたんだな、こりゃあ大変だと。

安：俺はずっと7,8名乗せて行っておったからよ。あとから厳しくなってよ。いつも呼び出されて、「何しに行ったかー!」「誰々連れて行ったかー!」。俺わからないって(言った)。あれなんか(傭船主であろう)に聞けて、ただ案内しただけよ。一回は、罰金も被った事あるんだよ。

五：なんでこの罰金はどこから出てくるんだ。

筆：漁師さんだったら、もう自由に行けるらしいですけど。

安：お前は関係ない人なんで連れて行ったかー!と言うわけさ。(尖閣へ一緒に)行くべ、五男。

安&五&筆：ワハハハハ!

五：健康だったらもう既に行ってるけど、僕は心臓が悪いさ。

筆：尖閣ではヤギとかは見ましたかね？

安：ヤギはいっぱいいるよ。1000頭余るんじゃないか。

五：あんし、ヤギ最初にどっから持って来た？

安：あれは青年社が与那国からオスとメス入れて、あんなに増えているわけさ。灯台もあれなんかが建てた。初め電柱だったよ、して、鉄骨に変えたわけさ

筆：その時は鉄骨は、これは？。

安：内地から持って来おった。あと、3トぐらいの大理石があるわけさ、全部名前刻まれてよ(1978年に栗原家が魚釣島に設置した古賀辰四郎開拓記念の碑)。僕が通い始めてから、これ持って来て運ぶのが大変だろうから、どんなにしました一って聞いたら、大型ヘリ頼んで、3000トの船に乗せてきて下したって。

筆：この島の持ち主の方々が大理石のは建てたって聞いているんですけど。

安：国に貸してあるわけさ。

筆：この方達というのは、(川満船長のところに)来たりしましたかね？

安：いや、来ていない、一回も来ていない。

筆：その方の話はあんまり聞いたことがない？

安：あー、保安庁はよ、島からよ、浜から30メートル上がって、休んで、漁具手入れして良いと言うわけさ。だけど、もう他の人連れて行ったら、航行違反とか何とかで取り締まるわけさ。上がって良いとは言いながら。なんで上がって良いのに。俺なんかは上がらぬのに、彼らが上がったら、彼らを取り締まれば良いなのに、なんで連れて行ったかって、今度はもう船長に全部責任被せる。だから1週間も2週間も呼ぶから、誰も向こうには行かんさ。呼び出し、朝から晩まで、5時まで。8時に呼んで、12時に飯食べに出て、又来て座って、はあー。

五：嫌だな。

安：だから嫌がるよ、あれもあんな嫌がらせなのに。

五：ちょっと、これ(保安庁が)方法を変えなきゃいかんのではないか。

安：おかしいんだよ。

五：外国には甘くて、身内には厳しくて。

安：今度だってさ、僕は正月の3日にも上がらせているからよ。市議員なんかを。乗っておったでしょ。

筆：今年行った時もヤギは見えませんでしたかね。

安：いつでもいる。あれ捕らんといかんさ。もう樹の皮も食べているから、下は雑草無さ。

五：アギジャビョー！(感嘆詞)

安：保安庁にカメラ持って行って撮して来て、出して見せているけどよ。これ捕らんといかんのではないか、と。「そうですねー」とか言いながらよ、

筆：もうずーっと行ってらっしゃるから、島の形もどンドンヤギで変わっては、いませんか？ 山が無くなるとか。

安：いや、向こうはあんなに禿山みたいだけど、上がって行ったら(中は)ジャングルになっっていて太陽見えないよ。大変だよ！ あー！ 恐ろしいよ！

五：そんなに樹が生えているの？！

安：アンカー下ろしてある俺の船が見えないもん。だあ、乗ってきた船が見えないさあ！ だから200メートルぐらいまで上がったけど、もう降りて来たよ、船が隠れて大変なってるって。潮がこっちから来たかなあと思ったら、すぐまたこっちから返して、船グルグル回ってるからよ。危ないなあって。

筆：中の方にはヤギは入って行くんですか？それは行かないで？

安：人が来たら、すぐ中に入るよ。こんな大きいのがいるよ。

五：これはもう銃で撃つしか無いんじゃないか。

安：もう銃で撃つしか無いよ。メスのヤギ持って行って、ホルマリン打ってメーメー鳴か

したら、寄って来るって言うておったけど。全部捕れるって、買うと言う人もいるけどよ。仲間議員よ、あれも 17, 18 年位なるよ。通ってから。

筆：そんなになりますか。

五：最近は桜丸というのが来ている。

安：ああ、わからんさ。誰(どの漁師)が行っているか。

五：アガリグヤ(東小屋：登野城港)に桜丸と言って来ているさ。あすこで釣ってるのテレビで流れているさ。サワラとか、ユウガジラーよ。よう釣れると言っていた。

安：今石油が高いから、幾らであれするかさ。

筆：1 回行くのにどの位かかりますか？

安：あー？6 時間で行くさ。行って翌日かその日で帰ってきても良いし、寝て、写真全部島中、、、。

五：自分は仕事はしなかったの？ 写真撮ったくらい？

安：僕は、魚釣って、曳縄してから、ジュウガジラー食わせていたさ。遊んでおるのに。

五：燃料代は釣りで埋まらない？

安：いや、あんまり食わんよ。おかず食うぐらいは捕れるけどよ、売るだけは難しい。

五：何月に行ったの？

安：何月！、そうだな 4, 5 月だな。5, 6 月だな。7 月は行かんわけ。向こうに行って泊ったら、これ(幽霊か)がいるからさ。話は聞こえるけど、見えないわけよ！デージードーヤー。足音聞くけど見えないよ！ 姿が。話はするよ、聞こえているよ。見えない。いるんだなあ。人の魂というのはいるんだ。

五：あー、戦時中に遭難やった人死んだからな。

安：引っ張るどー、一緒に行こうと。それでよ、東側の方に行ったよ、向こう砂が無いからよ、石の盛りよ、50 ぐらいあるわけさ。亡くなった人を石で押さえている。墓さな。

五：なんで、あれ回収したんじゃないの？ 戦後。

安：いんや、やっていない。戦争で亡くなったか、遭難で亡くなった人か、わからんけどよ。

五：戦争で亡くなったのを回収した、、、。

安：俺はもう 30 年以上、尖閣を守りましようと言っているけど、誰も振り向かんよ！

笑ってがおったど！ 触らぬ神に祟り無し、って。

五：あー、余りに国境が身近だから。

筆：佐良浜、伊良部島の人にとっては尖閣が身近な印象を受けました。尖閣のウブシュウだよなー、と。

安：向こうはよく売れるわけさ！ こっちは売れないわけさ！ 肉が赤いから！ 食べてはあれが美味しいのに。

五：1 番美味しい、カツオが一番美味しい。脂乗ってよ。

安：アカオ(赤尾：大正島)だよ、あれの 5 和のを釣ったさ。アカオは仲ノ神島みたいに、

海の真ん中にずーんって、岩と岩と、リーフもあるよ。

五：こっち爆弾演習やってるところ？、へえ、リーフある！？

安：あるよー、(島の)周囲に上げて、タンカー船が折れておっただ。サワラもマンビキも島の近くに、こんな大きい大判なんか、バンナイ！

五：他の島はどうなの、樹は色々な樹が生えているの？

安：まあランもあるさ(魚釣島)。200メートル位上がればはランがあるさ。

五：雲がかったりする？

安：ああ、かかっている。何時でもかかっている。上に行ったら、あれよ。1回は上がって降りて来ているだろ。もう船が大変だから、船の番せんといけない。

五：して別に変わったのは見なかった？ 幽霊しか見なかった？

安：いーやー。あれは7月に、お盆の時期にさ。

筆：へビは見ましたか？

安：へビは見たこと無いな。大きいのはいるって、言ってるけどよ。まあへビがいるから、魚釣には鳥が来ないさ。

五：食べられた。

筆：(尖閣に)行くんだったら、この夏とか、春夏秋冬だったら、一番？

安：今(3月末)が上等さ！ もうニンガチ(2月)カジマーイ(風廻り)無いから、今さ、もう。

西村眞悟さんのこと

五：あの仲間均議員の写真集ね。

安：ああ、あれ、俺が全部撮らしたさ。

五：あれ、良く出来ているよな、経費かかっているよなあ。

安：あれ2千円では、うん、作れないよ！

筆：あれは何回ぐらい行って、撮って？ 相当充実していますね。(島の)中の方までも。

安：17回、18回ぐらい行っている。この仲間議員はね、17、18回行っている。俺が全部連れて行っているわけさ。

五：行かした方が良いですよ、あそこは。

安：で、西村眞悟さん(衆議院議員)が行った時にヤギ汁を食わしたら、おかわり3杯ぐらい食ってたよ！「うんまい！」って言って。仲間議員と一緒に行ったわけよ。俺たちは1杯でチムカユク(チム=肝、胸がムカムカするか?)なるけどよ、あれは3回もおかわりしおった。刺身も！ ヤギの刺身も！

筆：やっぱり違いますかあ。

安：そんな偉い人には見えない！ もう自分らなんかみたいに普通に話す！、青年社の連中はよ、あんまり威張りすぎるよ。あー、やー、これもう行かないとなってから。で、あの灯台ね、電灯だけでも300万するって言うておっただのに。検査もだから俺が受

けて来たからよ。尖閣まで行って、「全部もう合格よ」って言ってもらって、「じゃあもう海図に乗りますねー？」って聞いたら、「いいや保留だ」って、最近が載っている筈よ。

筆：仲間議員のお話だと、あのこのトリシマとか小島の方に漂着のゴミが、結構溜まっていると、。。

安：おおーおおー！ 魚釣島にもいっぱいある。どこもかもさ！

筆：魚釣島でもいっぱいですか、。。

安：すごい、漁具のあの流れたのあるだろ、浮きなんかね、いっぱいある。東海岸、南海岸に全部流れてるさ、もう。

五：最初は何をしに尖閣に行ったの？

安：魚釣(島)に灯台造りにさ。あれなんかは与那国に行ったら断られて、八重山漁協に来たら、八重山漁協も断って！僕なんかの兄さんが呼んでいるから、「何かー？」って言ったら、「これなんか内地から来てよー」って、青年社の幹部なんか来ていてさー 7名。

五：ウミンチュウ(海人)は誰が紹介したの？

安：俺の親戚が来て、与那国と(八重山)漁協に行ったら断られて来ていると、「おまえー、ここは行った方が良くないか」、行った方が良くと言うより、「一緒に協力出来ないかー？」と。おう！。「無人島なのに灯台造ったら、こんな良い事は無いよー、これに協力やらない人はおらんよなー」「おう！やります。」って言って、それからさ。そうだろ？ 危険区域なのに、わかっていて、灯台建てたら、全部、商船も漁船も、全部安全航海できるさ、ああこれは協力できると言って、これを断れる理由(わけ)はない。わざわざ東京から来ているのに。

五：これ、灯台建てた人、政治色とか、色々なよ。

安：あん！僕には青年社とかなんとか、あんなの関係ないから、協力はしますと。お互いで(島を)守りましょうと。

五：それで、帰って来て(保安庁に)呼ばれた？

安：いやあ、最初の頃はそんなに呼ばなかったよ。もう、この中国人なんか上陸を始めてからだよ。

五：あーあ、あああ。あれ、からか。

安：やがましくなって、ばっかし。

安：で、お前あんなして無理してないで、行って来たらもう。

五：行きたいなあ！！僕は体力があれば行きたいけど、行ったら死ぬー！（筆者に向かって）この人(川満船長)、有名人よ、尖閣に関して。

安：ハハ、有名人ではないけど、島を守るには、ああいう、あの、あれさ。

五：あんたみたいな人がいない限りは。

安：協力する人がおらんと、どんなやっつてが島を守る、私、川満というさね。そろそろ又

連れて行くようになっているけど、フジテレビだったかな、去年、震災(3.11)が起きて、ボランティアに行ってからが、来れなくなった。

筆：あの、仲間さんの撮っている写真でこの、喜翁丸。

安：喜翁丸な！ 冬はあれずーっと向こうにが通っているさ、10 トンぐらいの船にでいるよ。7,8 名で、曳縄でがやっているよ。喜翁丸は。夏冬やっているよ。向こうには、金になるものがある。向こうよ、金になるものもあるよ。

筆：あー、何か、商売になりそうなものが？

安：いやいや。ものすごい金になるようなもの、あれ持って来たら、もう莫大な金持ちになるよ。イーヒヒ！。

五：イヒヒヒ！なんだろう？。

安：ああ！これは喋ったら、人に沢山わかるからよ！

五：健康だったら行くんだけどなあ！ 金鉱脈か？

安：僕に行こう行こうと言うけどよー！まだ早いでないかあ、と思っ行って行かんわけさ。「取って来ーい、取って来ーい！」と言う人がいるけどよ。

筆：実は昔から海賊の宝があるんじゃないかという話が、。

安：いんやあ、海賊の話ではないよー。

五：難破船の、あれ残骸？ 物の割れたのとか

安：いやいや、俺なんかも見ているのに！

五：磁器？ 陶器？

安：あれあれ、北小島にも灯台建ててあったけどよ。海に落としてあるんだのに。俺泳いで見ているからよ。

五：あれ、波が持って行かんかなあ。

安：何かに引っかかっているんじゃないか。流れんよ。底見えないよ！ 絶壁で。北小島でもよ。

五：陸の方もこうなって(絶壁状に)？、海もこうだな。海に叩きつけられている。

安：だからもうダイビングは上等さ。潮が早いだろ、シュモクザメから、魚がいっぱいおるから。ダイビングはもう、カメラで、写して、最高だわけさ。

五：、、、(お宝を)取りに行くかあ。(五男さんは川満船長の言う宝物が沈没船の漂着物だと考えている)。あそこら辺で魚釣ってるふりしてよ、夜になったら行ってから、取ってから。

安：お前が 2 人ぐらい上に上がらせてよー、取って、夕方よ。あーお前取って来いよーってからよ。

五：あー、あれ品物 1 個見せれば良いのに、品物 1 個だけ、別に。

安：1 個だけでは金にならないのに。

五：あの中国製かよ、オランダ製か、日本製か、わかれば良いんだけどねえ。

マークがあるから、何か調べる方法がないか。

安：ウーフッフ。

筆：きれいに形が残っていたら、化けるかもしれない？

五：何処の船だと言う事が、わかるさ、オランダ、スペイン、ポルトガル、イギリス、あんぐらいか、大体かち合うのが。

筆：色々の話を聞かせていただいて、ありがとうございます。また尖閣の話をお聞かせください。本当に面白いですねえ。

安：振り返るとねえ、もう何10年にもなるねえ。

宮里 長吉 みやざと ちょうきち (通称ンブヤー)

宮里さんは尖閣諸島遭難者の救助に向かった経験を持つという。また南方漁から帰る際に、自船の位置がわからなくなり、尖閣諸島に流れ着き、のちに改めて八重山に進路をとったという。この報告は聞き取りの要約である。

私らが行った所には登野城一番地という碑文が建っていた。戦争で尖閣に遭難した人を救出するため私らは行ったんだね。その時に見た。あの碑文はまだちゃんと残っているのかな。登野城一番地の碑はセメントで作ってあってね、上陸した所は、本船が着けられるようになっていた。インジュ(堀割)されていたよ。古賀さんのカッチューヤー(鰹工場)も昔そこにあって、地主でもあったわけさ。あの石垣の積んである前にね、碑が建っていたと思う。その奥に昔は家があった筈だよ。

あの当時は、私達は遭難した人たちを、ただ島に下りて連れに行っただけだ。連れに行っただけはカツオ船ではなく闇船(貨物船?)だったかな、一隻で、船は大きかった。あそこには僅かの人がいなかった。私らは下りて、あっちこち巡ってから、八重山へ、シマ(故郷)へ帰ろうと行って連れてきた。10名位はいたかなあ。女の人もいたが、名前はもう忘れてる。アーブヤーもいた。カナグスクグワーもいた。

南洋から流されてきた時、あの時はサバニに乗っていた。トリシマに流れ着いてあそこで4日位泊まった。アンカーかけて、島に渡って鳥の卵採りに行った。

命からがら上陸した。もう飢えて、あの鳥を捕って煮て食べた。硬くて食べられない。

外間(ほかま)のオジーさん

外間さんは登野城在の南方の貝殻や海人草といった潜り漁の経験豊富なオジーさんである。この周辺で尖閣に行った経験を持つ方がいないか、外間さんに尋ねた所、幸運にもご自身も行った経験を持つという。お聞き出来た経験談は他の方とは少し違ったものであった。

※外間さん：外、



外間のオジーさん

尖閣にはハッパ(ダイナマイト)を持っていったさな

五：オジーは尖閣列島行ったことはあるのかな？

外：あるよ。ハッパ持って行って魚を積んできたさな。カミサグラーという人たちと一緒に
行った。

五：カミサグラー、初めて聞くな。ナビサではなくて？

外：いやナビサグラーではない。糸満から池田さん(池田元さん、登野城)のどこに来てい
た人たちだよ。あそこのオジーは一本釣りしていただろ。だから一緒に行つてあつちは
一本釣り。僕はサバニで潜りをしておつた。

五：ンブーヤーのオジーから、あなたも尖閣に行ったという話を聞いて来たんだけどね。
氷は積んで行ったのかな？ どこから氷を積んだか憶えている？

外：ここ(登野城の港)から積んで行ったさ。

五：終戦何年後ぐらい？

外：ああ、もう何年頃だったか。ただそんなにあとではなかったよ。

五：季節は覚えていない？ 水を汲みに上陸したりはした？

外：島の北側に、海鳥がいるだろ、シロチナーとかいう。あれを採りには行った。
あそこは平坦地だから、鳥を食べるといって上がった。

五：アホウドリは見えなかったかな？

外：いや、ああいうマギー鳥はそういる感じはしなかった。

五：何航海したの？

外：1航海だよ。1回行ってみたけど大したことなかったからやめたよ。

五：なんでよ、他の人の話では魚が沢山いるそうじゃない？

うちらが行った時に、ハッパで荒らされて後だった

外：うん？ 確かにあそこには糸満から通つて沢山やつているという評判があつたんだよ。
ハッパの仕事で。それを聞いて、うちらなんかはカミサグラーの人をお願いして一緒に
行ったわけだ。あの人らはそのあと沖縄の安謝に引き揚げて、沈船から爆弾取る仕事
があるでしょう。あれの最中に爆発して亡くなつたらしい。終戦後はああいう人が沢山お
るさね。

五：結局、尖閣の海より、八重山の海の方が良かったんだね。強いて行く程の海じゃな
かった？

外：うちらは人が言っているのを聞いて、欲張つて行こう行こうと言つて行つてみたわけ
だよ。どのぐらい獲れるのか？とね。アハハ。ただ行つてみたら糸満の人が獲つて後
で魚はいなかった。

五：荒らされて後だったわけだ。シジャー捕りの人は来ていなかったかね？

外：いや、見ていない。池田にいた頃だから、終戦5、6年位になるかな。

五：台湾船はいなかった？

外：いやあ、あの頃は今テレビで見てる様にはいないよ。少ない。台湾よりも宮古から近いさ、あそこは。だから宮古の船が来ているのをよく見た。

五：おじいが行った時は何名位で行ったの？

外：4名、うちらは1艘でだよ。一本釣りの船に乗ってその人らが5名だから、全部で9名乗っておったさ。でも石垣の人はあんまり行ってないよ。与那国と宮古の方が近いから、あそこの方が良く行っているさ。

五：与那国はそうとして、なんで宮古が近いのかな？ 多良間よりも向こうよ、宮古は。

外：オジーが行った頃は、宮古からも来るし、糸満からも来るし、そうして人が行って魚を獲って後だから、(魚が)いないわけさ。

五：もうダイナマイトで荒らされていたの？

外：そう。潜ってみたら分かるさ、みんな割られていたよ。

五：破砕痕が沢山残っていたわけだ。自然の状態じゃないから、そうなったら魚ももうびっくりして近寄らなくなるね。

外：五男よ、あの頃は尖閣とも言わない。無人島と呼んでいて、魚が沢山いると評判でみんな集まって荒らしていたわけだよ。

五：終戦直後はそうだろうね。今は保安庁が見張って厳しくなっているから、また魚が集まってきているようだよ。そうして人が来ないもんだから、向こうの魚は今は人を全く驚かないってよ。

外：それは行ってみないと分からないんじゃないか。

南方漁の話

五：そうか。ありがとうね。話は違うけど、南洋はどこへ行ったの？

外：ビルマ、ニューギニア、ビルマには1年以上行っていた。玉城仁栄さんわかるか？ あの人が社長をやっておったさ。そうして向こうには高瀬貝がいっぱいいるって話が出て許可を貰って、行ってみたら何もいないわけだ。アハハ、観光に行かされたよなもんだよ。

五：何隻で行ったの？

外：6隻だよ。それが全然採れないんだよ。石垣みたいに小島が沢山あるから、採れると仁栄さんは見当を付けたんだろうけど。

筆：大体何名位行っていたんでしょうか？

外：船の大きさによるけど、おじいの乗った船はデンポー屋ので小さかったから31名。他は大体1隻に35～45名位乗っていた。(200名を超える集団になる！)

五：それが6隻か。憶えているだけでいいけど、他に何丸があった？ ナツコ(夏子)の船もいた？

外：デンポー、ナビサグラー、、ナツコの船は開幸丸か、あれはなかったな。

五：あの船は海人草専門か。

外：あの船にはオジーも乗ってた事があるけどよ、海人草とか高瀬貝取りにで、(場所は)危険地帯とかプラタスとか言ったかな。台湾が近くて、採ったものは台湾の高雄に降ろした。あの頃は終戦後すぐでお金じゃないんだよ。だから全部物々交換で砂糖とか色々な物資に換えて石垣に持ち帰っていた。そうしてまたここで乗組員に物資を配当していたんだよ。

五：はあ！海産物を台湾で直接バーターしてたのか。そんなルートを誰が開いたのかな、これも密貿易だよな。

外：いや、オジーが行っていた頃は、台湾行っても香港行っても検閲なんかなくて自由だったよ。(逆に)向こうが早く持って来てくださいよーって言うておったのに。海人草は向こうでは大人気だよ、健康にする薬の原料なんだよ。そのあとから閩船が行くようになっていくわけさね。オジーらが行った頃というのは沖縄にも石垣にも何も食べるものがないんだよ。だから砂糖や物資を持って帰って来たんだ。

五：やはり開幸丸が果たした役割は大きいんだな。

外：有名な船だったよ。でも誰も開幸丸なんて呼ばないさね。ハカセイーンメー(屋号)のナツコ姉さんの船と呼んでいた。

五：棧橋に南海商会ってあったでしょう。あそこに品物を降ろしたことはあった？

外：いや、オジーの乗った船はあそこには降ろさなかった。

五：ワカーには降ろさなかった？ ワカーは買い受けた品物を南海商会に降ろしてたみたいだけど。

外：いやあ、あれがは(南洋からの水揚げは)買い切れんよ。ワカーが買うのは石垣で取ってきた品物ぐらいだよ。ワカーに売ってその後はわからんよ。それぞれ最良があるわけだしな。

五：そうか、南洋行きが盛んだった頃は相当貝殻取ってきたんだろうね。

外：行かないウミンチュウの方が少なかったんじゃないか。潜りの出来るものは皆んな行ったよ。そうして親方から(謝礼を)前借りしてくるわけでしょう。両手に抱えて、お母さんにも奥さんにも渡さないで出港の日まで飲み食いする人も多かったよ。何が何だか分からない時代だった。

五：アハハ。まあでも一時の良い思い出と思えば良いんじゃない？

外：ナビサグラーの船に乗っていた頃、最高の水揚げを記録した時があった。もうこの船がいつ沈没しないかと心配になるぐらい貝殻を積んで来たさ。(逆に)こんな時は配当に困るんだな。順位で区切って配当を分けるんだが、石垣ですずっと待っている家族がいる人もいるわけでしょう。責任者はそういうのを検討しながら、順位を替えたりしないといけない。

五：はあ、じゃあそろそろ帰りましょうね。ありがとう。

比嘉 康英 ひが こうえい (81)

比嘉さんはカジキ突きや南方の貝殻漁を専門に、(いわゆる儲かる漁業を渡り歩いたのだらう)海を歩いてきた人である。比嘉さんによると、復帰前のカツオ船全盛期には、その多くが冬はカジキ突き船に転業し、尖閣を目指したという。

※比嘉康英さん：比

ここのカツオ船、冬になると皆んな尖閣に行った

五：おじさんが昔尖閣に行っていたと聞いて来たんですけどね。

比：僕なんかは尖閣に行ったのは、突き船でだったよ。昔のこのカツオ船はね、クルミ屋も丸野も、篠原も、皆んな冬になると突き船に仕立てて尖閣に行っていた。

五：篠原の船は何丸だった憶えてる？

比：うーん、船長は確か荻堂さんという人だった。新川のおガングワの後ろにいたよ。

五：アハハ、ハンサグイのお父さんもいたでしょう。

比：そうそう、あの人は船頭だったよ。ワッター船の名前では呼ばなかったから、憶えてないな。

五：一航海で何日あまりかかったの？ カジキは何本ぐらい乗せて帰って来た？

比：10日あまりかかったんじゃないかな、突ける時は相当穫れたよ。

五：直ぐ行って帰って来れたぐらい？

比：いやいや、そこまでじゃないよ。あそこで泊まってやるわけよ。ヤマト船から台湾船から来ていてね、泊まる時はみんな島影に寄せてくるわけ。向こう(内地の船か)は無線なんかで天気が悪くなるのを予測して来ていたみたいさね。島に納屋があったのが見えたな。

五：上陸したの？

比：いや、上陸は僕はトリシマ(南小島)にがした。鳥を獲りにだね。

五：他の船はどうだった？上陸とかしていた？

比：台湾船が多かった。皆んな突き船。

五：乗っていたのは沖縄の人じゃなかった？

比：いや、台湾の船は台湾人だったよ。宮古の人は宮古の船でやっていた。

五：冬の間は何航海ぐらいしたの？

比：数えてないが、2,3日休んで行っの繰り返しだったよ。



カジキ突きの頃は懐かしいと話す比嘉康英さん(左)

五：終戦後何年ぐらいから行ったの？

比：トゥジ迎える(結婚する)前から行っているからな。

五：16才位？

比：いや、もっと前からだよ。あれも一緒に乗っていたよ。仲村も。あれは夏はカツオ船、冬は突き船専門だった。僕なんかは南方の貝殻取りと突き船の行ったり来たりだったよ。

筆：丸野さんやクルミ屋はカツオ船で有名ですけど、カジキ突きもしていたんですね。

比：カツオは夏で終わるからね。クルミ屋は長男のカツオ船は突き船もやっていたよ。

五：そうだな、クルミ屋のカツオの話は色々聞いているし憶えているんだけど。突き船していたのは初めて聞いたかもしれない。

比：、、、考えてみると、突き船やっていた連中がもういないんだね。荻堂、ハンサグイ、、、懐かしいな。ハンサグイは相当気が短かったど。

五：怒るとすぐモリ投げたそうだね。

比：船がカジキに寄せられないと、投げるんど。あれは海賊もやったり、香港で密貿易をやったり、与那国の人と組んでね。一時期は指名手配にもなっていた。本当に懐かしい。アハハハ。

筆：康英さんはどの親方の船に乗っていたんでしょうか。

比：僕はね、クルミ屋にも乗ったし、丸野にも乗っていたよ。

五：おじさんはカツオ船には乗らなかったの？

比：僕はカツオには行かない。専ら突き船と貝採り。

五：カジキはどこに降ろしたの？ 沖縄に運んだ？

比：ここで氷を積んで行って、そのままここに降ろしていたよ。

尖閣に落ちている飛行機

五：そうかあ。上陸した人で、おじさんが知っている人はいないかな？

比：尖閣と一口に言っているけど、島が5つぐらいあるんだよ。クバジマ(魚釣島のこと)からずっと北の方にあるユクンという島(久場島のこと)には昔飛行機が落ちていた

五：飛行機が？ どの飛行機よ？

比：日本のだろう。燃料が切れて不時着したような格好だったよ。

筆：これは船からすぐ見えるんですか？ それとも陸に上がって？

比：いや、海の上からでも見えるのよ。凧の時はカジキが浮かんから、突き船は仕事にならない。それでジュウガジラーを食わせに曳縄しに行ったわけさ。すると見えた。そういえばあの島にもバカドリを食べるために上がったな。



実際に落ちていた飛行機。
戦後の米軍空撮写真

五：バカドリ。上がった時はどんな鳥がいたの？ 突き船だから冬の時期だよ。

比：あの鳥はいつも夫婦でいるんだよ。捕り方があって、上から近付いたら飛び去ってしまふから、下からこっそり近づいていく。そうすると、急には飛び立てないんだな。

五：滑走するすきを与えないわけだね。

比：そう、もう飛び切れないで黙っているよ。それで頭を叩くわけさアハハ。

五：鳥はどんな色だった？ おじさんはカツオドリは分かるかな？

比：カツオドリはそりゃすぐ分かるさ。カツオドリとは違っていた。色は白くて嘴が黄色かったよ(アオツラカツオドリか？アホウドリの可能性はあるのか?)。

五：アホウドリという事はあるのかなあ。ここが学者とウミンチュウで意見が別れるところなんだな。

比：そうよなあ。

五：で、これは沢山いた？

比：うん食べるには充分な数いたよ。

五：いやいや、そういう数え方でなくてね。何匹ぐらいいた？1000 はいた？

比：そんなにはいないよ、数えてはないけど、もっと全然少ないぐらいだよ。

五：うん。飛び方はどうだった？

比：あれは上には飛び上がれないんだよ。坂を利用して滑空するんだよ。

筆：子供みたいなのもいましたか？

比：わからんけど、たいてい夫婦でいるから。いたかもわからん。あの時は20組ぐらい夫婦がいたと思う。

五：海の上からじゃなくて、捕るために上陸して見てるわけだね。

比：そう、上がって崖に登って、噴火のあとみたいなどころまで行ったな。

筆：これ、飛行機のところまでは行きましたか？乗って遊んだりとか、。

南方漁での思い出

比：いやいや、あそこまでは行ってない。あそこにあるなあと見ただけだよ。あとからはアメリカが演習するようになってしまっ行って行けなくなったしな。今はヤギが一番の心配だそうだな。あれは全く捕まえきれんよ。ヤギというものは前足が短くて後ろ足が長いだろ。下から追いかけてもすぐ高い所高い所に逃げてしまう。だから上から下に追い込むようにしたら、勝手にゴロゴロ転がっていくよ。フィリピンに行った時はそうやっていたずらしたものだよ。アハハ。向こうの人は僕らみたいにダイナマイト漁もしていたな。タバコの火で爆発するといけないから気をつけろと言ってね。

五：でも潜水漁をやらせたら沖縄の人には敵わないんじゃないの？

比：うん。かもしれないが、僕らの水眼鏡あるでしょう。あれも持っていて、潜水をしているんだよ。おまえのそれはどうやって作ったと聞いたら、沖縄の人から作り方を習っ

たと言っていたな。

五：僕らの先輩が戦前に教えたんだな。方々でそうして海の技を伝授していた時代があった。その技術は元を辿れば糸満から広がっていったんだ。そう考えてみると、ウミンチュウというのは実に面白い。おじさん、今日は色々な話をありがとう。

福地 友正 ふくち ゆうせい (75)

福地さんの屋号フクチグラーは戦前からのカツオ船の親方として、八重山でも有名である。福地さんは五男に生まれ、若い頃から父のカツオ船に乗った。尖閣へは冬場のカジキ突き船で通ったという。現在は仕事としての漁業は辞めて、専ら趣味の釣り、特にイカ曳きを楽しんでいる。

※福地友正：友



福地友正さん

突き船には、限られた人しか乗り込めないんですよ。

筆：去年、プレジャーボートでのイカ曳きのお話をお伺いした時に、以前はカツオ船に乗っていて、尖閣まで行った事があるという事でした。

友：はいはい、そうねえ、僕の家はフクチグラーとあって、代々カツオ船をやっていたんですよ。それでカツオ漁だけでは冬は遊びますから、これじゃあいかんという事で、カジキ漁をやりました。尖閣諸島でね。

筆：：これはいつ頃のお話になりますか？

友：はっきりは覚えていないけど、18から32才までの間の話ですね。

筆：これはいわゆる突き棒ですか。

友：もちろんそうです。夏場はカツオ船をやって、冬は突き船に切り替えるわけです。海では波が下がりますよね、その波が下がった時に、カジキがハネを見せるんですよ。これを追っていく漁が突き棒です。しかし、あそこは隠れる所がないんですよ。海が荒れても避難する場所がない。これには参りましたねえ。浅瀬にアンカー下ろして、留まっているでしょう。ところが波が臙まで被るんですよ。水浸しですよ。大変な仕事でした。まあ遊ぶよりは少しでも稼がにゃならんというのが、船主の考えだから従わんといかんでしょう。

筆：これはお父さんの船ですか？

友：そうです。大福丸とってねえ。15トから20トぐらいの船でしたね。

筆：じゃあ本当に一般的なカツオ船ですね。

友：そうです。昔のカツオ船ですね。木造で。ちょうど僕らが終わる頃ぐらいからプラスチックが出て来ましたが。

筆：突き船は何名位乗っていたんでしょうか？

友：少なかったですよ。5名位なものです。カツオ船は20名以上乗りますけど、カジキは

そんなに人が要らないんです。そして限られた人しか乗り込めないんです。

筆：人数としては5名位、カツオ船に突き台を取り付けて、突き手が2人ですよ、。

友：そう、眼の前に突き出せるぐらい台を出して、そこから突くから突き棒というんでしょう？ わからんけど。

筆：いや僕もわかりませんが。福地さんは突き手もやりましたか？

友：いや、僕は突きはしませんが。僕は見張り役です。僕は眼が良かったから、カジキを探る役です。カツオ船でも主に遠眼鏡の係でした。魚は、カツオの場合は鳥を見るんですね。鳥の群れをね。

筆：狩りをしてる海鳥を探るわけですね。

友：そうです。これの下には必ず魚がいます。下ではカツオが小魚を追っていて、その逃げる小魚を海鳥は狙っているわけです。

筆：カジキの場合はどうなんですか、波間のヒレだけで探せるものなんですか？

友：そうです。この一瞬を探るんです。

筆：わかりますか？

友：わかります。サッと見えますから。いたぞー！と言って叫ぶと、船長がサッとその方向に船を向けますから、して真ん中に見張り台があるんですね。高くしてあって、遠くを見渡せるように。その上で頑張って、一日中これを見ているわけです。

筆：突き棒は時化の漁と言いますから、相当揺れるんですよ、。

友：そりゃあ揺れますよ。船も小さいし、冬場だから荒れるさね。

筆：一航海で何日位なものですか？

友：尖閣行って、帰ってくるまで、1週間ぐらいですよ。1週間なんか問題にならないですよ。南方に行く時は、行くだけで13日かかるんですよ。

筆：南方にも行ってらしたんですか？これは貝殻で？

友：いや、これもカツオです。船団を組んでですね、ほとんど宮古からの船だったけど、石垣からも1隻だけ出てですね。海光丸という船の船長をやったんですよ。

筆：これも福地さんたちの船ですか？

友：いや、これは雇われて。カツオ船は親父の時代でもう終わりましたので、南方行きが非常に儲かっていた時代ですので、それに乗りました。この家も南方に行ったお金で建てたんですよ。

筆：このカツオはカツオ節にしたんですか？　なんでそんなに儲かったんでしょう？

友：いやいや、船団は13隻でしてね、別に母船があるんですよ。この母船は缶詰会社が持っている船で、これに全部水揚げするんです。食料や燃料は向こうが提供して、10ヶ月カツオを獲り続けるんです。向こうはカツオの群れが多いのと、不思議な事にカタクチイワシが採れる。だからエサに困る事はないんです。相当獲れた。

筆：南方はそんなに儲かったんですね。

友：僕は若い頃から、外国に行きたくてしょうがなかったけど、親父が許さないんです。

中学出てすぐカツオ船に乗せられて、僕が出て行ったらカツオ船の眼鏡がいなくなるでしょう。だから出たくても出れなかった。

筆：それだけ重要な役目だったんですね。

友：眼鏡は遠くを見えればそれだけ有利なんですよ。たとえばここにトリマキ(海鳥の群れ)があるとするでしょう。そうして僕が見つけると、船長に言って、回りこむようにしてそこに向かうわけです。

筆：回りこむのは群れが逃げない様に？

友：違いますよ。周りには別のカツオ船がいるわけでしょう。その船に気付かれないようにして行くためさ。

筆：ああ、有利というのは他のカツオ船に対してという事なんですね。

友：カツオ漁というのは競争なんです。先に群れに当たった方が勝つんです。ぼやぼやしていたら間に合いません。5分の勝負なんです。ちょうど同じ群れにかち合ったときは喧嘩するよ、船の上で。昔一度僕は先輩を竿で叩いた事があって、大変後悔している。若いから、船の上では誰にも負けたくなかったんだけど、今になって後悔してるさ。

筆：カツオ船というのは、誰にも負けられないという勝負なんですね。

友：そう、あれぐらいの気持ちがないとカツオ漁は出来ない。

筆：、尖閣に行った時はカジキは何本ぐらい獲ったのでしょうか？

友：もう覚えてないさ、それ位昔の話ですよ。

筆：カジキはどの位いましたか？去年お伺いした時はバショウカジキが多かったと言っていました。

友：そうさね、結構獲ってはいったと思うが、そう、バショウカジキが殆どだったですよ。あれは波の間からハネを見せるからね。普通のカジキはなかなか見せないけど、あれは見えるんだよ。一瞬の間だけど、行先を見て僕が合図するわけだ。船長がそれで船を向けて、近付けるだけ近づいて、突き手がこれをボンメカスわけ。

突き手は、ずば抜けて優秀な人がやる

筆：この突き手というのは、どういう方たちが主なんですか？

友：カツオ船の中でも優秀な人なんかがいるでしょう。ずば抜けて釣りの上手い人、強い人、器用な人、こういう人なんかは主に突く。

筆：じゃあ体つきなんかは大柄な？

友：いや、体は普通ですよ。スポーツの代表選手みたいにわざわざ鍛えてるのではなくて、自然と船の生活で鍛えられている人なんかからがいます。長い間の経験が、蓄積が自然と体に染み込んでいる人さ。魚を釣らせたら分かるんだよ。なにもかも人より速いよ。カツオは一本釣りだけど、竿でね、だけどどこで竿を動かすかというタイミングがあるわけよ。プロ野球の選手と一緒に。この竿を下げて上げるまでの45度の間に、ど

こで動かすかで決まるわけ。もう魚は食っているよ、かかっているよ、竿を上げたら、ちょうど頭の上を過ぎたところでカツオが外れるわけ。この回転の要領があるわけです。だからこういう人にカジキを突かせても、魚と船のスピードを分かっている、どこを突けば良いか瞬時に判断できるわけ。そういう人が突き棒。

僕はまた別に眼で勝負しているから、魚のヒレを波間で見ると、パッと見えたら、すぐ「いたー！」っていうのが僕の仕事。カツオ船 24 名の中からそういう人たちを選びすぐったのが突き船です。

筆：じゃあ選ばれた人たちだったんですね。

友：そう。5 名位しか要らないよ。それに何名も乗せていたら配当分けないといけないでしょう。最小限の人数にしてお金を多くあげるようにしないとイケないでしょう。今はもうこれでは飯は食えないよ。でも当時は冬の仕事として、副業として成り立っていた。あんなして突いて、カジキには悪いけど、相当獲っていたんですよ。

筆：今では想像できない事ばかりです。今日は貴重なお話ありがとうございます。御座いました。

3C 尖閣諸島と台湾、尖閣諸島と与那国

ナビイの恋という沖縄映画の中で使われた、15 の春という歌がある。戦前に沖縄で歌われた名曲だそうだが、元々は日本歌謡だそう。沖縄本島でこの歌が最初歌われたのは、与那国から留学してきた若者たちの間であったと、戦前生まれの方から聞いた事がある。台湾という地域が、現在では考えられない位に近かった時代がある。その頃は八重山、特に与那国に住む人々にとって、台湾はすぐ側の大都会であり、一大消費地であった。

長濱 一男 ながはま かずお (82) No. 1

与那国久部良で突き棒漁とカツオ工場を長らく経営した長濱さんは、義兄の呼びかけにより終戦後の台湾に年若くして渡り、台湾の突き船に乗った経験を持つ。今回は聞き取りの要約と抜粋を報告する。



長濱一男さん

尖閣列島の本場は台湾

戦前は台湾が本場だと思うんです、尖閣列島は。でも台湾人は突ん棒は出来なかった。沖縄の人が突き手として乗っていたんですね。私が突き船に乗ることになったのは、姉が嫁いで行ったのが台湾で、漁業しておる関係上、台湾に来ないかと連絡があって、向こうで 2 年半やりました。

基隆の社寮町において、私の義兄が呉礼丸という船、船主は号礼さん。この方は船 4 隻、5 隻持っていて、沖縄の人間が全部船長していました。

基隆島のすぐ横にアジンコウという、中国大陸に近いです。ここからは、アジンコウか

ら大陸までは 3 時間位で行けよった。大抵ここで漁業しておったけど、一遍すぐ尖閣列島へ行ってみようということになった。

この日獲れた魚が大変な魚なんです。30 本 1 日に獲れて、翌日も 30 本余り獲って、結局 3 日で 90 本位の魚を獲って基隆港に入ったんです。台湾の漁師なんかも、こんなに魚がおるものかと言う位で、他の僚船も全部船団なして、積み込みして早く行けと行って又行った。普通だと 1 本、2 本の奴が尖閣列島はこんなに魚が獲れるとは思わなかったけど、行ったらこんなに獲れた。

評判になってしまったんですね。それからポツリポツリ台湾の船が向こうに行くようになったんです。戦後の話ですよ。でもやっぱりこれは時期なものです。丁度私らが太漁して帰った時が、考えると 10 月頃だと思う。時期的に 1 番 10 月から 12 月まで、1 番大きな漁があった時期だと思うんです。

そうしているうちに、2.28 事件があつて、もう命が危ないからということで帰ろうと、もう船はそのまま置いて、与那国の人間もいるし沖縄の人間も多いから一杯の船で全部乗って、帰りたい人は帰ろうと行って全部連れてきた。島に帰ったけど、これからどうなるか分からない。これではどうもいかないからと思い、本部に大栄丸 50 トンの大きな船がおったんです。この船をチャーターして、島から 5 隻の船団組んで、獲った魚を大栄丸で積んで那覇に持って行って売却する積もりで沖縄に、計画してやったんです。

けど時期がどうも合わなかった。尖閣にカジキが獲れると思っていったのが漁がなかった。大きなシケに喰らって、そのまま暴風時期で帰って来た。7、8 月頃だったと思うが、台湾から帰って 2、3 年後の話です。

カツオ船はコウビアカとアカオと、コウビアカという処はアカオトウです。ゴエイ丸というカツオ船でコウビアカに行ってカツオを釣って、台湾で売り捌いたりしました。魚はよくおりました。

台湾船には沖縄の人間が乗っていました

突船は台湾船なんだけど、沖縄の人間が乗っています。突ん棒には 7 名しか乗らないから、カツオ船だったら 2、30 名おりましたけどねえ、突ん棒は台湾の人はよっぽどでないと、もう親方の子供とか、じゃないと乗せなかった。だって何にも役立たない人を連れて行ってもね。台湾人にはまだまだ、こういう技術が無かったです。向こうの人は近海しか、台湾の周囲しか行けなかった。1 番遠くてアジンコウですからね。

尖閣でカジキが浮くのは、クバシマですね、あの島のすぐ側です。潮目の立つ所でホント夢みたいですよ。カジキ 3 日間で 90 本を獲って帰った時なんかは、夜寝る暇もない。冷凍するのに大変でした。海に全部魚を放り投げて、縄でくくって放り投げて、お腹を腸を取って、割って、立派に洗って、冷凍しますからねえ。夜寝ないでしてたんです。若いから出来たんでしょう。満船して、船ビタビタして入って行ったんです。

基隆から尖閣までは、漁しながら行きますから 1 日がかかり、帰りも漁しながら来ますか

ら1日がかかり、結局4日はかかる。カジキは台湾でも高価です。

クバシマにはクバが豊富ですよ、向こうのクバはとっても美味しい。芯をテビチと入れて味噌煮で食べたら、とても美味しい、こんな料理はないです。

台湾船が尖閣に来る様になったのは、台湾近海に漁がないために手を伸ばしてきているんでしょう。今は宮古沖、コウビアカまで行っているでしょう、台湾船なんか。トリシマに水取りに行っているんだな。これ水を補給する所、トリシマに湧き水あります。で、トリシマは卵が一杯あるでしょう。カツオドリの。

台湾船は昔はあんなことしなかった。今はもう漁がないからずっと、どこことなく駆け回っている。

長濱 一男 ながはま かずお No.2

※長濱一男さん：長 金城五男さん：五 宮良貞光さん：宮

冬の北風は突き船日和

五：お久しぶりです。尖閣水産にいた頃、長濱さんに一度お世話になりましたが憶えていますか？ 今日昔の話を聞きに来ました。長濱さんは昔に尖閣に突き船で行っていたそうですが、尖閣には与那国から何時間ぐらいかかりますか？

長：ああ、そうですね。あれ(尖閣水産)は失敗してしまったんだよな。

尖閣へは真っ直ぐ舵を向けて12時間ぐらいかかったよ。台湾から出た時が、僕の船じゃなくてね、台湾の突き船に乗って行った時が一番獲れたんだな。あの時はクロカワもシロカワもバショウも、ビックリするぐらい浮いてた。

五：これは尖閣の各島の周囲を回って獲るんですか？

長：いやもう、クバジマのすぐ横よ。もう大きな潮目が出来て波が渦巻いているんだよ。

五：もうそこを行ったり来たりするだけで、。

長：そう。冬の北風というけど、絶好の突き船日和りだったんだな。

宮：一男兄さん、向こうでは波が何メートルぐらいまで漁はしていたの？

長：そうだな、4,5メートル、突き台の舳先が、波の中に潜るぐらいまではしおった。

宮：台風だね、そりゃあ。

長：突き台が折れそうになる事が大分あったですからね。ホースビット(船の舳先)そのものが折れることもあるんだよ。

筆：与那国は密貿易で大変栄えたそうですね、尖閣まで行ったのはそれの前ですか後ですか？

長：そりゃあ前です。台湾に行って帰って来て、そうして8トンの船を3隻作ったんだね。

五：尖閣へは魚だけ？ 材木なんかを採ったりはしなかったの？

長：いや、クバを取りに行った連中はいたけど。あそこにはヘビが多いんだな。上がった時に何か踏んづけたと思って見ると、もう大きなヘビが。

五：ああ、シュウダだね。いっぱいいるんですか？

長：クバジマにもイシジマにも、いっぱいいるんだよ。イシジマなんかには鳥の卵を抱いているよ。やっぱり向こうは鳥が多いから、あんなところでも大きく育つんだよ。

筆：上陸したということは。結構天気の良い日もあったんですね。

長：天気の良い日は漁ができないから、時化ないと仕事にならないからね。

五：戦前はカツオ節を尖閣で作っていたそうだけど、与那国からこの製造だったり釣り手だったりで行った人というのはいないですかね？

長：いや、与那国は与那国で立派なカツオ工場を持っていたからね。行かない。

古賀という人がやっていたらしいことは聞いているし、納屋なんかも見ただけだね。時代が違うんじゃないですか。与那国からはクバを採りに行っただけだよ。

海賊の根拠地

五：与那国で長濱さん以外の船で尖閣へ行った船はないのかな？

長：いや、ない。自慢じゃないけど突き船の第一は自分ですよ、、、与那国(出身)で海賊をしておった人たちでね、殆どもう死んでしまったけど、無人島を根拠地にしておったからねえ、あの時分。

五：どこの無人島ですか？

長：尖閣列島よ。だけどそういう事を喋ったら、もっと色んな事を喋らないといけなくなって、迷惑がかかる人が出てくるからね。

五：もう時効だから大丈夫ですよ。

長：もう大丈夫だとは思うんだけどね、もう話を始めたら止まらなくなるものだから、、、名刺を半分にしちぎってね、長浜一男の名刺を半分にして向こうに渡しておくんですよ。

五：ああ、勘合貿易だね。ウシシ。

長：渡してあった名刺とこちらの名刺を合わせてみて、合わなかったら品物は絶対に渡さないんですよ。まだ 20 才いかないぐらいの子供がそんな事までしたんだからね。電気で合図してね、何回光らせたらすぐ出てこいよと打ち合わせておいてね、そういう事を行った事があるよ。

宮：やっぱり一男兄さんはなんでも知っているねえ。

五：品物はこういったもの？

長：色々だよ。米国のカーキ服とか、ダイナコンポ？とか、HBTとか、もうそういったものだよ。持ってくるものはサッカリンとか色々。これをヤマトに送るわけだ。ヤマトからは石鹸とか化粧品とかね、買ってきて、これはまた日本製だから台湾に送ると高価なんだよ。こういう事をしてきた。度胸があったんだね。

五：無法地帯だな。

長：警察にもね、裏から品物を持って行ってあげるんだ。わざと台湾人に担がせてね。米やる、卵やる、ビールやる。向こうは生活が苦しいから、受け取るんだね。本当に色ん

な事をしてきたから、もう、もう話が出来ないよ。

五：いやいや、ありがとうございます。海賊の話はまた別の機会に聞かせて下さい。

石垣に南海商会という海産物を扱うのがありましたよね。

長：ああ、南海商会というのはね、あれはブローカーじゃなくて、商人の間屋だね。社長は照屋さんという人だったね。

五：照屋清栄さん御存知ですか？ どういう人だったか憶えている？

長：わかりますよ。僕は良く喧嘩したんだよ。降ろした品物の代金を出せといってもね。

7割位しか出さない。残りはちびちびと出してくるんで、馬鹿野郎！と言って、お前とは商売はやらないとね。

宮：南方の貝殻を扱っていたんだよね。

長：そうそう、貝殻を多くやっておった。うちはカツオをね、当時カツオ節を花カツオにしてね。カマスに何個も作って下ろしていた。ところが払いが少ないでしょう。こっちは帰りに石垣で芋を買ったり米を買ったりしないといけないのにね、与那国は品物が少ないから船員に分けてあげないといけないでしょう。そういう男でしたよ。(以前の聞き取りから推察するに、この年は与那国島を干魃が襲った年であり、飢えに苦しむ船員の家族にどうしても食料を分け与えてやる必要があったようである。忘れられない思い出であろう)

賀数 金次郎 かかず きんじろう (84)

賀数さんは与那国久部良に住むおじいさんである。尖閣には儲けるために行ったそうである。台湾では台湾人の親方に信頼され、カジキ突き船、カツオ船に長年乗り込み、台湾の乗組員や久部良から連れて行った同郷の者と漁をしてきた。尖閣諸島は、台湾でもよく知られた漁場だと言う。



賀数金次郎さん

台湾にカジキ商売で渡った

台湾にカジキ商売で行ったのは終戦 4,5 年頃、1950 年、まだ結婚してない独身時代、久部良から出発して台湾蘇南方という所で働いていて、基隆の船が良いという事で、基隆に行って、台湾にアジンコウという処がありますでしょう、あっちで商売しながら尖閣列島には漁に行行って来ました。

尖閣列島の漁場はクバシマの周囲でした。昔沖縄がキビ作っていた島、そこには行ったことありません。トリシマは鳥採りに行っておった。食べるのにね。尖閣列島はカジキ商売です、台湾の船ですから。あそこで 2,3 日商売して、また漁がなかったらアジンコウに帰ったりして。獲ったカジキは基隆に水揚げ。

直接は尖閣に行きません。普段はアジンコウが漁場だから、漁が少ないときに尖閣に行ったものです。僕の乗った船は台湾の船トクリュウ丸、社寮町という離れ島があつて、基

隆から橋かけられて、そこの船です。大体与那国の人は社寮町で皆んな船は乗っていた。みんな突き船です。ケーブル船(トロールか?)は大部いるが、ケーブル船は久部良の人は乗りません。

向こうでは、トリシマでなくして、クバシマにがアンカーは入れて、昼は仕事して、夜はアンカー入れて休みました。ワシなんかの船は自慢じゃないが、基隆では1番いい船だから、船長はいいし、親方は浜町では一番力の強い親方ですから、船も整備できて、毎年一番漁。ああ、夏はカツオ船するわけさ、乗組員も入れ替えて。私は釣り船の船長ではないですが、夏場は私は与那国でカツオ船の経験あったもんだから、台湾のカツオ船の釣り手の一番、一番竿ですね。この資格持ってずっと、久部良から終戦後ですから年寄り連中連れて行って夏は又、あそこで儲けさせて、又行って冬は突き船。カツオは尖閣ではしれていますよ。

尖閣にはシロカワカジキが多い

カジキはですね、大体尖閣はシロカワが多いんだが、尖閣列島の西側の方に瀬があって、この瀬には大体クロカワが多い。クロカワは本数が少ないもんですから大体シロカワ。トクリュウ丸は1隻で、トクリュウ丸だけでないですよ。他の台湾船大部行きます、10隻位、トクリュウ丸での水揚げは、5日の商売で99本はとった記憶はある。これ以上は船に入れられない。両方でとった本数です。アジンコウはマカジキ、アカカジキといってシロカワ、クロカワと違うんです。場所によって獲れるカジキも違うわけです。ワシは、与那国に揚がるクロカワが一番美味しい。マカジキは60~70^キが上、小さいからよけいダブルに入るわけです。

アジンコウはアジがやっぱり湧くんですよ、で、アジを獲るために台湾の船が船団で網もって獲った。それでアジンコウという名が付いた。終戦後はずっとトクリュウ丸に何十年乗っているから、親方もいいし、また親方も私を信頼して、夏は僕にカツオ船の責任もたして、又冬場は、僕より先輩の松川とって亡くなったんですがねえ、この人が突ん棒の親分でした。もう皆んな亡くなっているんですが、船員は大体久部良から。トクリュウ丸は王リュウトクという親方の船です。社寮町は突ん棒、基隆は手繰り、これは東シナ海から網をとる船です。

台湾には儲けに行ったわけです。こちらから台湾に儲けに行くのが冬場だから大体、もう今時分9月から行って、年明けて、大体2月頃まで、で、2月になったらカジキ時期は終わりだから、又カツオ船に切り換えてね。

突ん棒は台湾の人が多くいます。台湾の人はカツオ釣りは出来んから、久部良の先輩なんか頼んで、大体25名連れていくから、5,6,7,8、大体4ヶ月カツオを釣る。そうして一休みして、又冬場の儲け。

突き船で行くのは冬の4ヶ月

尖閣は、もう2,3月で終わり、大体台湾の突船は10月から2月、3月頃までですね、4ヶ月か5ヶ月位。ひと月に3,4回の航海です。アジンコウで漁がなかったら行くわけです。船がいいから(アジンコウから?)6時間位で行く。尖閣はもう船が少ないから良いです。あの頃は尖閣には、沖縄からの船というのもあまりいない。

で、私が台湾から引き揚げて、日の出丸で大友の店の船に乗って、無人島で尖閣に、船団組んで、魚買う船を沖縄から呼んで、あっちに待たして、2日か3日位やったんだが、漁がない。他の船も、母船も帰るし、僕も帰ってきた。

もう今は、尖閣列島、中国のものとか、いろんなものがあって危ないでしょう。もう与那国漁協も行く船がない。一人で無理だから、今全部一人の船だからよ昔は突船で大体5名から6名おるから、船で生活、ご飯炊いて、大体1週間位の燃料積んで行く。

台湾から尖閣に行ったときは台湾船大体10隻位はおった筈。皆んなカジキ突ん棒。台湾の人は台湾の船に乗るし、僕等のトクリュウは大体沖縄の人3名か、4名、他の船、ゴレイ丸も2人か3名、バンセイ丸も4,5名位、あとは八重山台湾の人が混じって乗っている。ゴレイ丸も、バンセイ丸も尖閣へ行きますよ。トクリュウと同じ50馬力です。

尖閣列島でカツオ? カツオ釣っても他の雑魚が混ざって仕事にならないわけです。

コウピアカ(大正島)というところには宮古の船もくるし、石垣の船もきておった。他にはユクンと言って、ずっと昔、石垣の人がキビ作っていた所ですが、僕等とは関係ないからあそこは行かない。トリシマはクバジマから近いんだが、ユクンはずっと遠い、見えない。トリシマは名前つけられたのはもう鳥が多いから。鳥は簡単に採れるけど、コックの方が難儀で、鳥持って行ったら文句いうので、やめた。またニワトリみたいに美味しくない。臭い。鳥が多いから、フカも多いんです。

もう当時は儲けることしか考えてないでしょう

僕が行った頃は警備船もない時代だから、尖閣列島は石垣何番地と憶えておっても、漁場だからもう台湾の人に報せないでずっとお金儲けていたわけです。台湾の基隆船は、もう冬場のカジキは尖閣列島を大体あてにしている。シロカワがよう獲れる所だから。錨あげたらすぐカジキ泳いでいるのに、ほんと。

台湾の突き船は、冬場ならどんなシケでも大丈夫な船です。又冬場は台風もないでしょう。だから天気の強いといって海から帰ったことはない。ずっとやとった。カジキは、風があつて、白い波がある時が浮く。勿論突き手もやりました。

久部良の漁民よりは宮古、石垣の方が尖閣列島は詳しい。何でかという一本釣りで行くから、宮古石垣は突ん棒はない。皆んな一本釣り。尖閣列島の付近はマチが良く食うから。一時は宮古、石垣からずっと行っていた。

クバジマから与那国に材木持ってきて作った家が祖内に2軒あります。祖内に。尖閣列島は風が荒いか、木は堅いんだが高さには伸びない。だからあそこから持ってきた家はふ

つうの家より少し低い。造った親父が祖内のお金持ちだからできた。船も貸し切りして行かんといかんでしょう。

クバシマの堀割ですか？ いや、あんな小さな所に船持っていけん、危ない。あんまり近くなったら風廻ったときは、座礁しますよ。

もう当時は儲ける頭しかないでしょう、僕等の若い時は台湾の島がなかったら飯喰えないうー、財産もないし、また与那国のカツオ船に乗って、冬場はカツオ船はないから仕事はないでしょう、それで台湾に、尖閣に行ったわけです。

比嘉 松竹 ひが まつたけ (90)

比嘉さんはなんと、戦前のカツオ船。それも古賀丸に乗船した経験を持つ方である。残念ながら比嘉さんが乗った時は既に尖閣諸島の工場から撤退しているが、そのお話には非常に参考になる点が多々ある方である。

※比嘉松竹さん：松

最初に乗った船は古賀丸だった

五：若い時に働いていたんだってね、カツオとか・・・。

松：ああ、そうそう。僕なんかは13の頃に女の親が死んでしまってね。下に4名もおるもんだから、当時まだ高等科に通っていたけどそれをやめて、カツオ船に乗るようになった。昔はボーイと言ってね、コックだった。それからはずっとカツオ船に乗っていた。

五：どこのカツオ船に乗ったの？

松：古賀丸と言ってね、最初に乗ったのはそれだった。

五：比嘉さんは何年生まれになるのかな？

松：大正13年。だから僕なんか下の人でも85余りになる。僕は89歳、今年でもう90になるからな。だからもうあの時分の人はいないよ。

五：いつからコックをやったことになるの。

松：13,14の時分、2カ年ぐらいコックをやって、それからもう体も出来てきてるから、釣り手に回った。古賀丸に17ぐらいまで乗っていた。それから別のカツオ船に移った。

五：その時の船長の方は憶えていらっしゃる？

松：名嘉と言ってね。名嘉船長と言っておった。

五：名嘉さん、ほう。一番竿の方は？

松：一番竿はねえ、、、あの時のあの人が一番竿だったのかなあ。ああ、こっちの徳嶺のお父さんが一番竿だった。

五：徳嶺ペイントのね、ほう。あの人も寄留民なんだね。あの方は大正何年ごろの人なんだろう。

松：確か大正4,5年頃だよ。

尖閣に行くのは4月から5月

五： そうなんだ。それで船長の名嘉さんなんかはね、こっちでカツオをやりながら、時期には尖閣に行ったりしなかったのかなあ？ この船では。

松： いやいや、こっちは、無人島(尖閣)に漁をしには行かんかったど。与那国のメクラ(ソネ)とか、台湾ゾネとかあいった所にはこっちから行っておったが。無人島(尖閣)に行ったのは、僕が18の頃に台湾に行って突き船に乗っておった頃だよ。あの時分は台湾の蘇澳南方にほとんどの突き船の拠点があつてね、キールンにあつた人もいたけど、ほとんどが与那国経由で蘇澳南方に行きおった。あの時、そうだな、9月10月ぐらい頃から年明けて3月か4月ぐらい頃まで蘇澳南方におつて、そうして(別の)時期が来たから、4月から5月まではキールンに渡つて、そこから無人島(尖閣)に行くわけだね。

筆： 無人島というのは尖閣のことですか？

松： そう、あの時分はそう言っていた。

筆： 何を釣りに行くんですか？

松： 向こうにはほとんど全部がカジキを突きに行くんだよ。

五： そうすると魚はどこに下ろしていたの？ そのまま？

松： そう、キールンに下ろす。これを1ヶ月半か2ヶ月ぐらい続けて、そうすると向こうの漁も夏になって、そうなったら行かなくなった。何か風が南風が変わつてね。突き船というのは北風が吹いていないといかんのだね。

五： はいはい、冬の漁ですね。

松： 冬の仕事だから、4、5月終わつて南風が吹いてきたら潮の関係ははずど。でもあの時は若かったから、海の話は船長任せで自分らはただ漁をしているだけで、この時期というのははっきり意識していなかつたわけさね。ただ蘇澳南方の漁が終わつて4月5月は向こうに移転したから。ただ無人島での漁は長らくはやらなかつたよ。

五： あすこではアホドリを見なかつたかな？ バカドリかな？

松： んー、あの時分見たのは、ウンケー(カツオドリのこと)と言っておつたな。

五： ああ、ウンケーか、あれよりもっと大きいね、グライダーみたいな優雅な鳥は見なかつたかな？

松： あの時分はわからんよ。あんなのは僕なんかは分からんさ。ただ鳥はウンケーとかシロチナークロチナーとか呼ばれている鳥がおつたさ。ただ種類はわかつてても大和口の名前は全然分からんよ。

五： アタカー(海鷗のこと)はわかります？

松： あれとウンケーのいるところにはカツオの群れがおる。群れに追われてジャコが上がってきているからね。それをめがけて突っ込みおる。でも僕らはそんなに関心なかつたからな。

五： 鳥はそのぐらいにして、あの古賀の事務所は誰が見ていたんですかね。

古賀の事務所の思い出

松：ああ、今思い出した。向こうの古賀の事務所は、あれが社長かどうか分かんが照屋という人がおった。で、その下に伊地さんという人がおった。伊地さんというグテー(身体)の大きな人がおって、その下にはまた黒島安助といって僕なんかより少し上の、大正4,5年生ぐらいの人がおったよ。

五：会計を見ていたのかな？

松：いや、あれは会計じゃない。向こうの商品の品物を積み降ろしたりする責任者みたいだった。会計はその上の伊地さんとかいう人だと思う。

筆：伊地さんというのは体が大きかった？

松：そうそう、大きい人でした。

五：船に必要な物資とか食べ物とかは、どなたが管理していたの？

松：あれは黒島安助が見ていた。あれに言って、申し込んだら米も味噌、醤油、マッチまでも調達して準備していた。

五：薪とか燃料なんかも？

松：そう、あの時はあの方が全部、船に関することはね。

筆：戦前の新聞に皆さんの名前のがっています。照屋さん、伊地さん、黒島さん、喜舎場さん。

五：喜舎場さんという方はいなかった？

松：うーん。船長は名嘉さんだろ。他に僕が入る前に屋慶名の人で事務所にいたという方がいたけど、黒島さんと一緒に働いていたと言ってたけど。事務所をやめて屋慶名で農業している人がいおったけど名前はわからんさ。

五：古賀丸には何名ぐらいの人が乗っていたの？

松：あれは、、、20名。

五：もうそんなに乗っていたの？

松：おう、20名にもう一人ぐらいおったかな。毎日の漁だからね、2,3名は欠ける場合もあったけど。

五：この物資の調達要求の時は、大川の事務所に行った？

松：そう、棧橋の事務所のところに行くわけさ。伝馬持ちというのがいてね、これで石油を取ったり、あの時代は

一斗缶を10個ぐらい載せよって。米は3,4日で一斗は食べよった。

五：沖に船はアンカー下ろされてあって、、、。

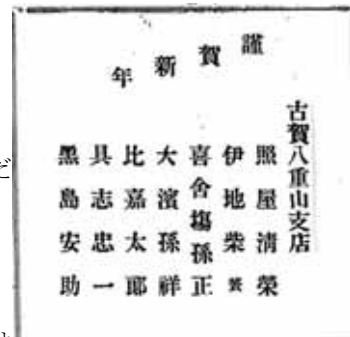
松：そう、沖にね。

五：すると、物資の運搬は新川の沖から大川の事務所まで伝馬を漕いで、そうして積んでまた新川に向かうと。

松：そう。カツオ船が来たら、米、味噌、塩なんかを伝馬持ちが取ってきて船に渡すわけ。

五：これは航海毎にやっていたわけ？

松：伝馬持ちが事務所へ行くのは一日置きかもしれんけど、船への受け渡しは毎日だった



よ。

五：新川の納屋に物資を集積しておいたわけだ。

松：そう。また別にね、敷地内にカツオ船シンカの納屋というものもあった。製造場の隣だったよ。

五：古賀のカツオ工場の敷地はオガン(長崎御嶽)の東から丸野のどこまででよいのかな？

松：そう。丸野のすぐそばが製造工場だった。あれから今考えると、面積は 300 坪以上あっただろうね。敷地の東側にはクーガー(香皮：線香原料)乾燥場というのがあった。

五：タブの木の皮だね。

松：そうそう。あれは西表からこう東にして、。。

五：カシガー(麻袋)詰めて？

松：いや、カシガーじゃない。荷造りして、タムン(薪)縛るみたいに。きれいに束になって持って来おった。

五：すらっと長く剥いで、帯締めるみたいに、コンブ締めるみたいに？

松：そう。あの様に荷造りして西表から持って来て。

五：こっちはどういう風に製造するの。

松：工場の敷地の西側にね、これを干すところがあるわけ。昼は干して、夜はまた取り入れて、雨が降ったりしたら困るからね。

五：製造の作業なんかはどうなの、粉末にしたりとか。

松：僕らは干すところまでは見てるんだが、それから何処に行ったかは、わからんど。

五：製造はしていないの？

松：いや、製造はしていない。干すまで。これ内地に送った筈よ。行く先は分かんが。

五：そうか。おじさんたちは専らカツオのことに従事していたわけだからね。しょうがない。

松：見てるだけだからね。詳しいことは分かん。香皮が無い時はジャコトウヤーの網をね、干したり、血で染めたのを干したり、補修したり。あんなことをやっておった。

五：納屋は何葺きだった？

松：瓦葺きであったよ。

五：火事があったことはなかった？

松：あれは昭和何年ごろになるかな。焙乾屋で、火を燃やして乾燥させるでしょう。カツオの脂が垂れてそれに燃え移ったのか、大きな火事があったよ。

五：燃やしてしまってあとは再開してるの？

松：焙乾屋が燃えただけだからね。再建して工場は続けていたよ。18,9 の頃だから僕らは別のカツオ工場に移っていたけど。戦後もやっていたかはわからんが、とにかく昭和 19 年頃からはやっていたのかやっていたのかわからん。ただ船はあったから、戦後もやってもおかしくはないど。僕らが乗った古賀丸が、20 馬力の船が残っていた。

君が代丸と八千代丸

筆：おじさんが乗っていた頃は、工場にある船は古賀丸 1 隻だったんでしょうか？

松：そう、だけどそれ以前の無人島(尖閣)時代はね、君が代丸と八千代丸という 15 馬力のポンポン船がおった。

筆：これはカツオ船だったんですか？

松：あれは曳縄でね、カツオを捕って無人島で節を製造していたという話を聞いておったさ。この辺一带は護岸を積まない昔は浜だったでしょ。こっちに君が代丸。八千代丸とって 2 隻の船が揚げられていた。無人島での仕事が終わって辞めて来て、廃船みたいな格好になっていた。僕は 6 歳ぐらいだったか、すぐ近くに住んでいたから、そこで相撲とったりよく遊んだりしたんだよ。古賀丸が一番八重山に貢献した工場だはずよ、あんだけ長い間古賀の船はあったわけだから。

筆：その後、与那国に渡るようになったのは、。

松：あれはね、ここのカツオ船は(操業時期が)3月の末から9月頃までなんだな。18 になってからは与那国に渡って、そこから蘇澳南方に渡って突き船に乗ってね、突き船で 2 年ぐらい歩いたな。

筆：この時というのは、船は台湾の突き船なんですか？

松：いや、蘇澳南方にいたこっちのウチナンチュ(沖縄の人)、与那国ンチュ(の人)なんかか持っている船だよ。台湾の船じゃなくてあれに乗ったんだ。石垣からも与那国からもウミンチュウをやっている人は冬の漁を蘇澳南方に行つて突き船に乗っていた。また行かない人はそのまま島にいるさね。だからその時に無人島にも 1 ヶ月か 2 ヶ月ぐらい行って漁をしているわけだね。古賀がカツオ製造をした場所がここだとね、一緒に乗っている先輩にその時教えてもらった。そのあと空襲の時に台湾に疎開する船がやられたさね、あの生き残りが古賀のカツオ工場の跡で生き延びてるよな。工場をやっている時分の時カンダバー(芋の葉)なんかを植えていたんじゃないか、それがあったから生き延びられたという話を聞いている。戦後は。そのあとからは僕なんかも海は歩いていなからな。

五：島々の周囲を回ったりはしたの？

松：いや、周囲には船は着けられないんだよ。海でアンカー下ろすけど、向こうの海はまたとっても潮が速いんだ。1 時間に 7 マイルとか言っていてね、夜はアンカー下ろして、朝は夜の明け切らないうちから出て行って漁をする。大変だよ向こうは、僕は初めて潮があんなに流れるということは、向こうに行つて分かったんだから。アンカー下ろすでしょう、そうしているとロープが潮で震えるんだよ。

五：潮の流れで振動しているんだ。

松：そう、潮にね、(アンカーが)切れたとか、引かれたとか(見張りの者が)言ったらね、アッ！という間に、もう相当流されているんだよ。またアンカー上げて、帰ってくるまでにもう相当時間もかかったな。

五：周囲を伝馬で漕げるかな？

松：伝馬なんか話にならんよ。無理だよ。ただでも向こうのカツオ工場のところは割られて、あすこだけには船が入れられるようになっている。外から回っても見えるさね。でも僕らは全然上陸したことはないよ。だから昔の人は相当苦勞してやっておったはずだよ。台湾で突き船に乗って初めて(尖閣の開拓村跡を見て)、はあこんなにして昔のウミンチュウはやっているんだと、感心したものだよ。あんなに苦勞して、だからねえ、ウミンチュウやって生活が良くなったというものはいないよ。

筆：蘇澳南方から、キールンまで行って、そうして尖閣に行ったわけですね。

松：蘇澳南方から、キールンまでは昔の船グラーでも 4,5 時間はかかったからね。またあの鼻頭という所、あんなに潮の曲がる所は見ることがない。岸壁ストレスだと潮もそんなに流れていないんだが、そこから 50メートル100メートル離れたら、船が進まないぐらいですよ。八重山だとヨナラ(水道)が潮の速いところだけど、あんなの話にならないよ。

台湾の社寮町には、沖縄の人がいっぱいいた

筆：キールンでは、どこの港に船を着けたんですか？

松：キールンではね、あまりわからないけど、浜町とか社寮町とかあってね、社寮町にはウチナンチュウがいっぱいおった。知っている人も 2,3 名いたけど、僕らはいつも船泊りでしょう、海に出ない時は上がったりもしたけど、僕は 20 歳未満の子供だったから(社寮町は琉球人の集落以外に歓楽街としても知られていた)詳しいことはわからないよ。それにあの頃は八重山から台湾に行く人はほとんどが高雄あたりに行っているわけで、キールンには行っている人はいるけど、社寮町というところがほとんどだった、港のそばに離れ島みたいにして橋が架かってあったよ。こっちの国吉という人がおって、あそこでウミンチュウしておった。そのぐらいしかわからないけどね。

五：古賀丸のジャコトチャーはどこがしていたかな？

松：年々代わっておったからなあ。

五：誰か憶えている人いないかな？

松：うん、こっちにミーヤー(屋号)という人がおったでしょう。ミーヤンスーといって、あれは 2 年ぐらいやっていたんじゃないかな。わかるか？

五：うん、もう沖縄に引っ越したよ。

松：イチマンチュウだよ。

五：そうそう、あそこはジャコトチャーしていたからね。

松：黒島ンチュウの雇小が 3 名位おったよ。イサムという人の親になるよ。

五：イサムというのは尖閣に亀カキに行って、行方不明になった金城イサムだよ。搜索されて自力で帰って来たっていう記事(1971.5.2 八重山毎日)がある。この人の親が一時は古賀丸のジャコトチャーの責任者だったわけだ。

筆：あの、古賀丸の主の古賀さんという方にお会いしたことは？

松：いや、会ったことはないよ。僕らはワラビ(年少)なのに。ただ、(事務所では)照屋さん

という人が向こうに座っていてね。伊地さんが横におって、こっちに黒島安助がおった。この3名ははっきりわかるさ。

筆：これは照屋さんの戦後の写真ですけど。

松：そうだね、僕なんかが見ていた時は、あの時分はまだ痩せておったよ。

筆：どんな方たちでしたかね？

松：照屋さんは痩せていてね、伊地さんは体がものすごく大きかった。黒島さんは青年時分の頃だろうね、僕なんかより少し上で体がしっかりしていた。皆んないなくなってしまったね。僕なんかは色々見てきている。シナグワートヤー(貝殻採取の意)の全盛時期にね、そこに瓦屋のウェーキ(お金持ちの意)のイチマンチュェがおった。雇い子を10人以上抱えて台湾の高雄で盛んにやっていたが、昭和12,3年頃か、台風で全て死なせてね。全部消えてなくなってしまった。雇い子を使っていた人たちは儲かってはいたが、長続きしないね。全部潰れてしまった。

五：そうなんだよね。

松：イチマンヤーのことを調べてるのか？ 新川から東小屋まで全部調べたらいいさ。余りろくなことはないよ。

筆：はあ、、、。

五：ほんとほんと。だから僕ら不思議がってるわけさ。

松：僕らは雇い子を見てきているからね。つらい仕事さね、ろくなもんじゃなかったど。色々勉強してみてごらん。

筆：今日はお邪魔しました。貴重なお話ありがとうございました。

3D 南海商会の思い出

尖閣列島、古賀のカツオ節工場、古賀丸、事務所、照屋さんという人、南海商会、、、これまでの話に目を通した方なら、これらの言葉が一つの線で繋がっているとお分かりいただけると思う。尖閣諸島の開拓者と知られる古賀辰四郎は、その経営拠点として、石垣島に八重山古賀商店を構えていた。古賀商店の経営は戦争で一旦途絶えたが、戦後、元従業員を中心にして業務を引き継ぐ形で設立されたのが、南海商会である。南海商会と創業者照屋清栄氏は海産物の輸出を主導することにより、戦後の八重山の復興に大きく寄与したと、地元紙に記されている。

絶海の孤島と呼ばれる尖閣諸島にしろ、人びとの活動を通して、どこかに線が繋がっているだろうと、思いたい。

正木 譲 まさき ゆずる (79)

正木さんは気象台に長く勤められた方で、全身石垣島愛に溢れている様な人である。が、これまで聞き取りをしてきた方とは、少し位置付けが違っていると言えよう。正木さんは旧姓石垣、石垣島の士族出身、いわば八重山の知識人階級に位置する方である。

※正木譲さん：正



正木譲さん

正：昔は八重山から船が南方に行つてね、貝殻を取つてきていた。それで、ここの棧橋から荷造りするんだよ。僕はそのアルバイトをしていて、船から貝殻をリヤカーで運んで船と倉庫を行ったり来たりしているうちに、船の船員と友達になつてね。僕も南方に行くことになつたんだよ。浦添君という同級生と2人でね、行くことになつた。

筆：はあ。

正：船長が言うには、タオルとか石鹸とか歯磨きを準備すれば充分だよと言うから、明日出港という日に準備して待つていたんだよ。パラセルに行くことに決まっていたんだ。南沙諸島というのか今は、海図を見せて貰つて、この辺というから、バシー海峡を通つてこう行くんだと教えられて、僕らは2人でワクワクしながらいたんだよ。浦添君というのは、海南時報という新聞社の社長の息子なんだ。僕は親父もいないから、許可なんていっても要らんわけさな。お袋の許可なんて必要ないから。

筆：浦添さんの方は。

正：向こうはお父さんの許可があるさな。お父さんにちゃんと話したかはわからんが、どうやら察知して、手を回したらしい。

筆：船長に話したんですか？

正：いや、船長に直接は言わない。警察に話したらしい。僕らは出港するといつてもう船に乗り込んでいたんだよ。そうしたら警察が来て乗員みんな出てこいという。臨検さな。出港前に臨検するという。当時は海上保安庁はないから、警察がこれをやる。船長が僕らは隠れておけというわけだよ。ほら結局は僕らは船員手帳がないさ。そうして隠れておつたんだけど、臨検が終わつても警官は船から降りないんだよ。もうしょうがないから僕らは出てきて、船から降りるしかなかった。こんなに悔しい事はなかったよ。僕らは棧橋から船を見送つたんだ。

筆：船から降りるしかなかったんですね。

正：結局は新聞社の社長が警察に言つて、高校生が2人乗つてるからということ。はあ。そうしてずっと出て行くまで見送つてね。夏休みが終わつた。ところがこの船がだね、遭難したんだ。

筆：はい？

正：帰つて来なかったんだ。この船の名前はなんて言つたっか。建安丸じゃあなかった。

そのうち調べておこうと思っているのだが。バシー海峡で台風に遭ってしまって、遭難したと聞いている。

筆：何年ごろのお話ですか？

正：1952, 3 年だ。いや高校 2 年の時だから 53 年だな。

筆：乗組員は何名位だったんでしょうか？

正：15 名ぐらいはいたんじゃないかな。

筆：貝殻船ですよ。

正：そう、高瀬貝。

筆：正木さんと浦添さん以外は、

正：ウミンチュだろうな。糸満の人も乗っていたよ。

筆：大体何歳ぐらいの方が多かったですか？

正：10 代の連中が多かった。僕らと変わらないぐらいの青年たちだった。船長もそんなに年じゃなくて 20 代前半だった。僕より 5, 6 才上だった。考えてみれば命拾いをした事になるんだな。これが僕の南海商会の思い出です。あそこは当時貝殻を相当扱っていたよ。カシガー袋(麻袋)に入れてよ、縛って。

筆：貝殻の中身はどうなっていましたか？

正：僕らは荷造りしたのを運ぶ仕事だったから、洗ったりすることはなかった。

筆：新栄町で聞いた話では、女の人達が雇われて棧橋の側で貝殻を洗ったそうですが。

正：しかし、船から降ろして僕らが荷造りする時にはもう洗われていたよ。船の上でもやっていたんじゃないか。何ヶ月も行っているんだから、その間に洗ったりしてるんだろう。そういえば僕の同級生に南海商会の事務員をやっていた方がいる。そっちが詳しいんじゃないか。

筆：出来ればお聞きしたいです。

正：女だよ。それでもいいなら、話してみようか。

筆：お願いします。

大盛 清子 おおもり きよこ (79)

大盛さんは、正木さんの同級生であり、社会人としての第一歩を南海商会の事務員として歩んだ方である。社長の照屋清栄氏は戦前からの生粋の商売人であり、その従業員に対する姿勢は厳しいものだったそうだが、懐かしそうにお話いただいた。古賀商店の従業員たちが戦後どのように再び歩き出したのか、迎える上で、大変貴重な方である。

※大森清子：清 正木譲：正



大森清子さん

筆：学校を卒業して後だと、昭和 31 年頃から南海商会にお勤めになったわけですね。

清：そうです。全部で6名働いていました。ただそれ以外に人夫が沢山おって、10名以上荷造りの人達がいまして。南方から貝殻の船が入って来たら、臨時で貝殻を洗う人たちが30名余り雇われて来てました。

正：どこで洗っていたの？

清：730交差点の今空き地になっている、駐車場がありますよね。当時はそこに倉庫があって、あの一帯はみんな南海商会の倉庫にしていました。そこのそばに井戸があって、そこで洗うわけですね。もう大変臭くてね。海でも洗っていたみたいですけど、最後は水で洗わないと。

筆：完全に洗うというと、井戸の中に入れるんですか？

正：ばかもん！本当にあんたはものを知らないな。井戸の中になんか入れたらお前、大変な事になるよ。

清：タライに水を貯めて、その中に入れるんですよ。

正：僕らの生活をわからないんだから、これじゃあ話もやりきれないよ。

筆：すみません、、、。

清：もう時代が全然違うからねえ。タライの中に貝殻を入れて、お尻の方を叩くと、取り残した中身が出てきますでしょう。そうして皆んなきれいにして、梱包して送ったんですよ。それは沢山の人がいたんですよ。

正：僕らも人夫で働いておったよ。

清：へえ、そうだったのねえ。貝殻には種類があって、高瀬貝、広瀬貝、黒蝶貝ね、真珠養殖に使う。して、玉貝(チョウセンサザエ)、網焼きして食べる貝ですね。そして夜光貝。食べても美味しいけど、全部貝殻だけです。これを本土の大手企業に出していたんです。企業名は丸紅飯田だったと思います。昔はボタンは全部貝殻だったでしょう。今のプラスチックより光沢があって、立派ですよ。

筆：貝殻の中で一番高価だったのは？

清：一番は夜光貝です。次に、黒蝶貝、高瀬貝の順ですね。玉貝が一番下。船も2隻持っていますね、平和丸と宝正丸。3カ月余り南方で貝や海人草を取らせました。会社の持ち船です。ちらっと聞いたんですが、平和丸は古賀さんが尖閣列島を売った代金で買ったらしいですね(南北小島の売却が1972年なので年度的に合致しない、地所を売ったとするなら、新川一帯のカツオ工場と推測される)。海人草などは虫下しの薬になりますから、本土企業の藤沢薬品に出しました。西表からは雁皮、和紙を作る原料ですね。

正：君は雁皮も知らんのだな。琉球の古文書は全部雁皮に書かれているんだよ。

清：それからキリン草、角又は八重山で採れました。寒天の原料ね。それからモズク、これを塩漬けにして出しました。それからカツオ節。相手は全部本土の企業です。まず伊藤忠、カツオ節は大阪中央魚市場。

筆：カツオ節は工場を持っていたのですか？

清：いえ、色んな所のカツオ節工場が持ってくるんです。鳩間でしよう、新川の篠原、フ

クチグラー、そして屋慶名という所があるでしょう。そこら一帯は全部工場だったんです。カツオ節も昔は10貫箱と言って、専用の箱を作らして、箱に詰めて出していました。

正：誰が作っていたんだね？

清：玉城という、糸満チユのこれを専門に作る人をお願いしていました。ですから規格もきちんとしていましたね。法螺貝、千年貝、万年貝、そういったきれいな貝も南方から集めてきて、本土の企業に出していましたよ。取引も英語のL/C、信用状ですね。今は自由貿易ですけど当時はこのL/Cがないと、銀行の外為でお金に換えて貰えないんですね。あと、輸出するには税関を通さないといけませんよね。八重山支庁のライセンスを貰うわけですよ。それから農産物は黒砂糖、昔は製糖会社もないですから、大浜や宮良の製造場を廻ってですね、これをまた規格の決まった木の樽に詰めて出していたんです。黒糖にも等級があって、物産検査所という政府機関の検査官が等付けして、ランク付けしてから輸出していたんですよ。

筆：カツオ節にも検査はありましたか？

清：カツオ節もやっぱり検査を受けてね、だけどあれは等級付けはなかったですね。農産物の取引をした企業の名前は忘れてしまって、ご免なさいねえ。でも今でもたまたま名前を見ると、ああこども取引したのねえと、思う事があるんですよ。もう書類が多くてですね、物産検査証名からインスペクションから、ライセンスを揃えて、L/Cがありますでしょう。もう全部揃えて、取引していたんですけど、それから自由貿易になりまして、もう南海商会は下火になって、自然に倒産したんですよ。L/Cの時代はすごい儲かったですよ。南方から船が入った時はもう。

正：照屋永順先生(照屋清栄子息、永順氏は一時期教鞭を執っていて、正木さん大盛さんの恩師にあたる)のお父さんの名前は何と言ったかね？

清：清栄。社長がこの人でした。その息子が、専務が永順先生。大株主が古賀善次です。私が知らない時代ですけど、昔は古賀ドンというお店があって、そこからきたのが南海商会だと聞いています。

正：古賀のあとが南海商会だよ。

筆：この社長の照屋さんという人はどういった人でしたか？

清：とても厳しい人ですよ。私たちもう80手前ですけど、社長は70余りで亡くなったんですよ。昔の人は70超えたらもうお爺さんですよ。もうとても細くて仕事ばかりして、食事も取らないぐらい仕事熱心で、もう算盤ですよ。商才に長けた人でした。当時あんなお年寄りはいなかったですよ。とにかく厳しかったですから。

筆：この取引相手ですね、内地の商社は照屋さんが契約を取り付けていたんですか？

清：そう。それでこの契約の書類を、みんな英字ですよ。明治生まれのお爺さんが全部英字で署名して私に渡すんです。私はそれを英文でタイプしたんだけど、当時のお年寄りとは考えられないんです。して、電報ね、当時は電電公社ですかねえ。電報を打ってきたと思ったら、帰って来たらまたすぐ次の電報を私にタイプさせるんですよ。当時ラジ

オの短波放送を常に聞いていて、値段が、特に黒糖などは相場が上下したかわかるわけです。ですから高い時に売るんです。時には品物もないのに、書類を揃えて、品物は他所から借りてきて売るんです。それぐらい頭の回転が違ったんですね。

筆：生粋の商人という方だったんですね。

清：そうです。南方から船が入るでしょう。当時はドルですかねB円になっていましたかね(復帰前の通貨単位)。船員使い上手よね、わざと分厚くして、100万でも1枚にしないで、100枚にして渡すわけです。私もそうして貰った事があるからね。当時の株主は、まず古賀善次さんでしょう、次に篠原光次郎さん(ご存知の通り基本丸船主である)、仲本信幸さん(波照間出身のカツオ船主、のちに竹富町長等、政治家)でしょう。余り他の方は記憶に無いんですけど、古賀善次さんは美栄橋に住んでいられて、奥さんは東京の病院で看護婦長もされた方で、夫婦でヨーロッパ旅行なんか楽しんでおられたような方ですよ。お家なんかは作らんですよ。貸家に住んでね。そうして石垣市の教育委員会に1000万寄付した方なんです。

筆：善次さん夫妻は八重山によく来られたんですか？

清：いえねえ、善次さんは良くいらしてましたけど、花子さんに会ったのは1回位です。善次さんは優しく、色が白くって、おっとりした方でねえ。

筆：この、南海商會が良かった頃から、段々と落ちていく境目というのは

清：昭和45年、自由貿易が段々と始まってからです。社長は常に前々から、これからは自由貿易の時代になるから、厳しくなるよと言っていたんです。その頃にはもう本人は亡くなっていましたけどねえ。

筆：照屋清栄さんが亡くなってあと社長は、。

清：永順さんが見ていました。元は熊本工業大学を出た化学の先生で、もの凄い優秀な人でしたよ。

筆：このウミンチュウの方が南海商會によく孟宗竹を買いに行ったと聞いているんですが。

清：ああ！、孟宗竹は鹿児島から輸入していたの。毎年輸入していて、これが良く売れるんですよ。

筆：漁具に相当利用していたそうです。カツオ船の餌かごのウキには上等だと。

清：輸入はですね、孟宗竹はウミンチュウが買って、ここ(四箇、ウミンチュウ以外)では鯉のぼりの竿にするんですよ。それからサンマの塩漬けを。どこから仕入れたのかねえ。相当売れたんですよ。また肥料も売ってました。窒素リン酸カリの三要素があるでしょう。これも仕入れて農家に。それから農薬、バクゲーターというカタツムリ殺す薬なんかね。農薬なんかは扱う免許がないといけないから、永順先生が資格持っているから、仕入れられたんですよ。それから素麺、松の雪、あれも仕入れてねえ。

正：は一ん。南海商會が素麺仕入れたから、僕らは素麺の味を知ったわけだな。

清：あとはサバかねえ、まあい魚の缶詰を。それから旅館館とか向けにプロパンガスを扱ってました。あとは雨合羽も扱ってました。

筆：色んなことをやって、賑やかだったんですね。

清：あの爺ちゃんが、照屋清栄さんがやり手でねえ、休みもないし、お正月だけです。

公務員は5時頃帰るでしょう、私がお昼食べるのはそれからですよ。

筆：あの、お給料はどうだったんでしょうか？

清：それがね、安いと知ったんですよ。自由貿易で南海商会が先が見えなくなって頃に、教育庁に呼ばれたんですよ。そしたら査定というのがあって、履歴書でお給料を決めるでしょう。それで、ああ公務員と会社は違うなあって思いましたね。でも、不思議な事に、教育庁の辞令をもらって勤めることになってから、何日も夢をみるんですよ。南海商会に戻って来いと、夢で呼ぶんですよ。

筆：他の事務員の方はどのような方が。

清：黒島安助さんでしょう、この方は品物の仕分けですね。息子さんの安順さんもいたけど亡くなってしまって。

筆：本土の企業との連絡は？

清：社長の清栄さん自らですね、一日中電報打っていました。

筆：南海商会は本店は八重山で、那覇に支店がありましたですよ？

清：泊高橋にですね、支店長は日高栄次郎という人です。

正：こんなに詳しく話せる人は糸満の人では無理だろう？ いないだろう？ うん？

筆：皆さん南海商会の事は覚えているんですが、さすがに中の事を話せる人はいないです。貝殻を売りに行ったお話が多いです。

清：私なんかも、事務していながら、貝殻を売りに来たら計りましたからねえ。

筆：これは現金払いで？

清：そう。すぐ現金渡して。

筆：何か、おじいちゃんが売りに行くんですけど、付いて行ったら帰りにアイスクャンデーを買って貰えるのが楽しみだったというお婆さんがいました。

清：そうですねえ、糸満の人が売り来ましたよ。そのお話はどなたさんから聞いたのですか？

筆：この方はワカーヤーのお爺さんのお孫さんだそうです。

清：ああ！ワカーヤー、あそこは貝を沢山扱っていてねえ。良く売りに来てましたよ。あそこはもの凄く貝をいっぱい売りに持って来ていましたよ。糸満の人たちから貝を買い集めている仲買人でねえ。懐かしいわねえ。

筆：今日は本当に色々なお話を、詳しいお話をさせていただいて、ありがとうございます。

所感とお礼

島という、大海から顔を出している岩の塊に、もし人格があるなら、尖閣諸島には、あなたはなんて色々な重荷を背負されてしまった島だねえと、声をかけたくなる。国有化以降、沖縄のある新聞は、評論で平然と、いわばただの岩の塊に執着するなど書いていたのは筆者の記憶に今でも残る。評論を書いた論説委員の方は、島が望んでこのような重荷を背負ったとも思っているのだろうか。

さて、話を戻すと、尖閣での漁業経験のある漁業者の殆どが、あの頃は、行っても何も問題がなかった、と言う。石油の問題が出てくる前は、中国が騒がない頃は、領土の問題が出てくる前は、復帰する以前は、。

本来、トラブルのある海域に、進んで出漁しようという漁業者はいない。彼らの立脚点は生活である。聞き取りの最中に、東京都の購入宣言が湧出で、場当たりの措置としての国有化と、中国の脅迫的な反発、あれよあれよという間に、漁業者にとって尖閣諸島周辺海域は、出漁するには程遠い場所と化した。

国家の対立が強まるほどに、世間の目は注がれ、その重要性だけが、切り出され、我が事のように強調される。わかりやすい例だと、尖閣は好漁場である、地下資源が豊富である等、すなわち国益であると喧伝される。すると、それに呼応するかのように、対立する意見や主張が沸き起こる。

意見や主張の対立よりは、漁業者の語る、いわば昔話のような心地好さに惹かれるものがあり、結果的にそのような聞き取りが大半を占めている。

材料となる、漁業の実績を期待した読者の方には申し訳ないが、尖閣諸島の問題を考える前に、尖閣諸島が人びとにとって、どういう場所だったのか、興味を持っていただけたらと思っている。まあ、岩の塊にしか見えない、新聞の論説委員の言葉よりも、そこに残る石垣積み跡や開鑿された掘割に、先人の苦労を見出す、比嘉松竹さんの言葉に、純粹に共感する方が多くなって欲しい、とは思う。

最後に、沖縄口も糸満言葉も使えない調査員に対して、聞き取りに快く応じて下さった方々、訝しみながらもお話し下さった方々、そして、多くの漁業者を紹介いただき、また様々なことを教えてくれた金城五男さんに御礼と感謝の意を申し上げて、八重山地区を終わりとしたい。

比嘉 健次 ひが けんじ (琉球政府法務局出入管理庁)

1926年(大正15年)、名護町に生まれる。89歳(2013年時点)。

県立第三中学校(現県立名護高校)卒業、所沢陸軍航空整備学校(特別幹部候補生)に入隊・復員、宮崎県延岡警察署、琉球警察本部勤務を経て、琉球政府法務局出入管理庁に転官。1970年7月、同庁警備課長の職責にあった氏は、尖閣諸島に警告板設置の命をうけ、21名のリーダーとして設置工事を指揮し、尖閣5島に警告板設置を無事成し遂げる。また傍ら不法操業の台湾漁船を調査、臨船して、領海から退去させる。氏が語る40余年前の警告板設置は歴史的事実として、後世に伝えねばならない貴重な証言である。



復帰直前 尖閣諸島に3ヶ国語警告板を設置

工事責任者として、当時の米琉政府の動き、工事の苦労話、大いに語る

警告板設置 米国民政府から提案

— 1970年7月、琉球政府は、尖閣諸島に台湾人が頻繁に不法操業や不法上陸していたので、それを防止するため、日・米・中3ヶ国語の警告板を建てたそうですが。

比嘉：そうです、1960(昭和35)年頃から、台湾漁民が尖閣列島領海内で不法操業したり、海鳥類の卵を採りに不法上陸したりして困っているから、取締まりをしてほしいとの要望が高まってきました。(末尾掲載：※参考資料1)。

この頃は、沖縄はアメリカの統治下にあつて、琉球列島の入域・上陸・在留の管理の権能と責任は、全て琉球列島米国民政府(USCAR)にありました。

(書類を取り出して)、これが警告板設置のきっかけとなったものです。1969(昭和43)年9月、USCAR 主席民政官スタンレー・S・カーペンターさんが琉球政府行政主席松岡政保あてに送った書簡(※参考資料3A)で、アメリカ側は違反事件の発生を減らす対策として、尖閣列島に「警告板」を設置してはどうかと提案し、琉球政府に意見を求めています。

これに対して松岡主席は、「諸般の情勢から考慮したとき、有意義かつ適切な提案であり原則的に同意する。提案を実現するために可能な限り適切な対策を講じ貴官の意に添うよう努める」。だが、琉球政府はお金がないから(笑い)。「警告板の設置には多額の経費を必要とするので、貴官の絶大なる配慮を願いたい」と書き添えている。このような経緯で、尖閣列島に建てた日・米・中3ヶ国語からなる警告板は、アメリカ側から提案されて、アメリカが全額費用を出して建てたものですよ。米国民政府布令(第125号)という法律で、「琉球列島に入域しようとする



星条旗がヘンボンと翻える米四軍司令部、琉球列島入域管理・権能を握っていたランバート高等弁務官

琉球住民以外の者は、すべて琉球列島高等弁務官の事前の許可を得なければならない」とありましたが、その警告板にも「琉球列島米高等弁務官の命による」と記されていますよ。

設置経費 全額 アメリカ側負担

— 一当時のお金でどの位、かかったのですか

比嘉：琉球政府建設局で、「警告板設置」の事業概算見積書、工事仕様書、設置場所（島名）、警告文案等具体的資料を作成し、見積もってみたら、総経費は7,459ドル（当時の為替相場1ドル360円に換算：286万5,200円）となった。アメリカ側がこれをチェックし、出したのは6,815ドル（245万3,400円）です。当時としては大金ですよ。この時に3ヶ国語の文案も、このようにしなさいと指示されてきてねえ。この写真（右図に掲載）にある通りに決まりました。それと琉球政府が予算を作って、米国民政府公安局長に援助を要請したのが1969年3月28日、これが承諾され、お金が出されたのが翌70年1月9日だから、約9ヶ月間でスピード処理している。その前の69年11月には佐藤・ニクソン会談で、もう沖縄の施政権返還は決定している。

2年4ヶ月後の72年5月15日にはもう日本復帰ですから。厄介な領土問題だから、あとは日本政府に任せようと言って、そのまま放ったらかしてもよかったはずだが。アメリカは、沖縄の日本復帰は決まっているというのに、わざわざ大金を出してまで、警告板を設置している。表向きは「琉球政府建立す」と書いてあるが、これはとても意味深長です。



警告板、施政権返還後の日本への贈り物 ？！

— そう言われたら確かに意味深長です、日本復帰が2年後に迫っていながら、アメリカは警告板を急いで建てたわけです。そのあとは復帰準備で大変忙しくなりますから。

比嘉：アメリカは警告板を建てる前の1968年に民政府渉外局長ロナルド・A・ゲイダックさんが尖閣列島に行って台湾人の不法入域状況を調べています。領土は、国民、主権と並んで国家の三要素で、重要ですから、何をか況やです。

アメリカは、布告第27号「琉球列島の地理的境界」（1953年12月25日発布）で、尖閣列島を施政権下に置き、1972年には、日本へ返還を予定していたわけですから、アメリカは、尖閣列島に警告板を建てることによって、まぎれなく日本領土であることを対外的に、明確に示しているわけです。台湾・中国が領有権を主張し出した1970年にです。だから、この警告板は、アメリカから日本への贈り物です。日本の領土であるというアメリカの意思表示ですよ。だから復帰後においても、隣国からの領有権主張に屈せず頑張りなさいという意味かもしれません。

— 日米両政府にとって、警告板は深い意味があるとは知りませんでした。

比嘉さんは琉球政府出入管理庁の警備課長として、警告板設置に行ったわけですねえ。

比嘉：そうです、私がいた琉球政府法務局出入管理庁（外局）の業務は、表向きは法務局ですが、米高等弁務官通達に基づき米国民政府公安局長の直接の指揮、監督下にあった。アメリカは、この出入管理業務は、琉球政府に任せないで、復帰直前まで直接管理していた。私は出入管理庁で入域、上陸又は在留に関する違反事件を調査する仕事をしてきたから、尖閣列島に、違反を防止するために、「警告板」の設置、違反事件調査の目的で出張を命じられたんですよ。

出張命令に緊張

— その時のようすをお聞かせ下さい

比嘉：いつものように職場に出勤したら、席に着くや庁長室に呼ばれたですよ。大城実庁長は、海軍兵学校出身のばりばりで、おもむろに口を開いて、「民政府の資金援助で、尖閣列島に不法入域を防止するための警告板を設置することになっているが、作業現場の監督と違反調査を兼ねて警備課長を派遣することになった。出発までに体調を整えておくように」と言われた。当時、私は44歳の働き盛りの年代だったので、躊躇なく承諾し、やりがいのある仕事を与えてくださったことに感謝した。ところで、「尖閣列島」と聞いたとき、15年前の「第三清徳丸事件」がよぎりましたねえ。1955年、魚釣島領海内で国籍不明のジャンク船2隻に銃撃され、9名の乗組員中3名が行方不明となった、琉球住民を震撼させた事件です。物騒な所へ行くわけだから、それ相当の覚悟がいることを自分に言い聞かせましたよ。早速準備に取りかかり、まず、台湾船の不法操業や台湾人の不法入域の証拠写真の撮影に必要なだからと、小型携帯カメラを購入しました。そのカメラで100枚ほどの写真を撮ってきたから、これがあとで大変役に立ったですねえ(笑い)。

あの時撮った写真が10数枚あります。これでどのように建てたか説明しましょう。

また取調べる際の制服・制帽や、強い直射日光を避けるための麦藁帽子や足下を保護するための編上靴を準備しましたよ。いわば戦場へ向かう兵士の完全武装といった出で立ちですよ(笑い)。あとは作業服、着替えなど詰めて、すぐ石垣へ飛びました。

警告板の偉容に 心打たれる

— 私達は、「警告板」は写真でしか見てないですが、実物はどんなものでしたか。

比嘉：石垣に着いたら、すぐに出入管理庁八重山出張所長伊佐義昭と共に琉球政府八重山建設事務所を訪れて、私もそこで「警告板」を初めて見ましたよ。その偉容さに心を打たれましたねえ。セメントを流し込んで作って、縦90センチ、横120センチ、厚さ5センチの大きさです、運搬能力を考えると、

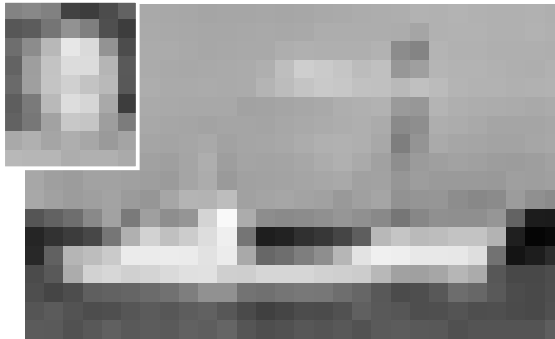


不法入域警告板は、3カ国語で「琉球列島米高等弁務官の命による」と明記

重さは 130 ㌔位です。コンクリート板面には、日本語、英語、中国語の 3 カ国語が彫刻され、それぞれの文字に黒エナメルをしみ込ませ、表面を白いペンキで塗り、文字を浮き出させてあります。設置する支柱は、縦 15 セチ、横 20 セチ、高さ 215 セチ、重量 50 ㌔の 2 本、警告板と合わせると全部で 230 ㌔にもなります。これは八重山建設事務所の仲本技手が設計し、田本建設が指名競争入札で単価 158 ドル 54 セントで製作、施工まで落札した。設置場所は、魚釣島、南小島、北小島、南小岩、北小岩、久場島、大正島の 7 箇所です。それで、この 7 枚全部の警告板を傷つけないように木の筏でしっかりと梱包して、船で持って行くんですよ。それに、向こうは船が接舷できないから沖に停泊して、島にはボートに乗せて運んで、設置するわけだから、これは大変なきつい仕事になるなあと考えた。警告板を見たときは、思わず身震いましたねえ(笑い)。

— 尖閣諸島は潮の流れが速く、波が荒い所と聞いてますから、持っていくのさえ大変です、それを島に上陸してちゃんと建てるわけですから、責任重大ですねえ。

比嘉：そうです、失敗は許されない。警告板 1 個でも海に落したら一巻の終わりですから(笑い)。それで尖閣列島の海を熟知しているベテランの船ということで、白羽の矢が立ったのは与那国・崎原海運の第三白洋丸(150ト、乗組員 14 人)で、船長は崎原孫好



与那国・崎原海運の第三白洋丸(150ト)と崎原孫好船長

さん(故人)。また作業員は、突き棒漁船の屈強な漁師の人達ですよ。崎原さんとの間に 2,500 ドルで傭船契約がされました。あとは、八重山建設事務所長知念さん、田本建設さん、第三白洋丸崎原さんらと会合を開いていると決めました。設置は 7 箇所を予定していたので、それが天候の影響とかで、設置不可能な島があれば、実際に現地を調査してから、それに替わる島を決めるといったこととか、

また作業は、まず設置ポイントの調べ、資材等の輸送、陸揚げ、運搬、警告板組み立て、支柱の穴掘り、深さ 40 センチの順序とし、また台湾漁民が比較的多く上陸し、人目につきやすい場所を選んで設置、またその際、風波等気象条件に耐えられるかを充分考えないといかん。(自分が書いた「復命書」を取り出して)、そうそう、あの時は総勢 21 名だった、ここに書いてある。で、全体の作業班を編成して、それぞれ作業分担を決めて、私がリーダーに指名されてました。

— 第三白洋丸と崎原孫好船長は、確かに尖閣諸島にはベテランです。1970 年 12 月にも九大・長崎大調査団を、尖閣諸島に連れて調査させてます。

比嘉さん一行は、警告板を積んで、愈々石垣港から尖閣諸島に向ったわけですねえ。

比嘉：あの時残念なのは、マスコミ関係者4名から、警告板設置や台湾船の不法操業漁取材のため乗船申し込みを受けたので承諾しましたが、出港間際で、会社の都合とかで皆キャンセルでしたねえ。もし、彼らも一緒に行って、尖閣列島で警告板を設置している様子や台湾人が不法上陸、不法操業している様子を取材し、それが新聞で報道されたり、テレビで放映されておれば、どんなによかったことか。貴重な記録、歴史的記録にもなるし、尖閣列島に対する皆の関心も一段と高まったと思いますよ、またとないチャンスを失ってとても残念でならないです。

大荒れの海域、モーターボート舟底に、大穴も

— この「尖閣列島の警告板設置に関する復命書」を見ると、魚釣島に向けて行ったら、大シケにあったと報告していますが、警告板の設置作業は大変だったんですねえ。

比嘉：あの時の設置作業のようすは、この「復命書」に皆書いてあるから、これを見るとよく分かります。7月8日22時、第三白洋丸は、魚釣島に向かっていたら真夜中、嵐に遭って船体が25度にローリングを繰り返し、それが3時間も続いて、もうひどく船酔いしました。9日夜が明けたら、船を魚釣島の南岸沖に着けてねえ。そこには石垣市の行政標柱、あの魚釣島は石垣市字登野城2390番地と印した標柱があるから、その近くに警告板も建てる積りでいましたが、もうシケで波が高くて、とてもボートで上陸できる状態でなかったですねえ。それで、船長は島の周りをぐるぐる廻って、2時間かけてやっと北岸に上陸できる場所を探して、船に乗せてきたモーターボートを海面に降ろして、それに警告板や支柱、資材とか積み込んで北岸に接岸しようとしたら思わぬ事故が起きた。鋸状に尖ったサンゴ礁に引っ掛かって舟底に大穴が空いて、浸水さわぎ。警告板と支柱を急いでロープで縛って、皆で引っ張って陸地に揚げて、どうにか助かったが、あの時は皆大慌てしましたよ(笑い)。たまたま船にもう1つのくり舟を乗せていたからよかった。船の炊事係がおかずの魚を釣るためのエンジン付の舟ですよ。あとからは、警告板や資材とかは救命ゴムボートに乗せて、このくり舟で



沖に停泊した船から警告板をボートに乗せ、上陸地点へ神経集中して安全に運ぶ、海に落せば一巻の終わり



警告板を15メートルの断崖から陸揚げ

上陸地点にロープで曳いていくという方法にしました。それが案外うまく行きました。

運搬・陸揚げに一苦勞 5島へ設置 成功裏に

一 初端から魚釣島でシケに遭って、モーターボートも途中で沈むし、警告板設置は大変な作業だったと思います。「復命書」には、警告板7個が、尖閣諸島の5つの島に設置した様子が淡々と報告されていますが、実は大変な苦勞があったわけですねえ。

比嘉：そうです。一番の苦勞は、重量が130キロもある警告板の陸揚げに労力と神経を使ったことです。北小島の場合だと、南岸の海面から15メートルの岩上に11名がかりで陸揚げしました、赤尾嶼の場合は、20メートルの岩上に14名でやりました。万が一、ロープが切れたり、手をすべらしたりすれば、警告板は海底の藻屑と消るから、失敗は絶対許されません。また、向うは足場の悪い凸凹のサンゴ礁の岩盤だから、警告板を目的地まで運ぶのにも相当苦勞しましたよ。8名がかりで傷つけないようにゆっくりゆっくりと運んで行って(笑)。それと沖の北岩と南岩の警告板ですか、当初この2ヶ所にも予定していましたが、クリ舟で実際現場を視察してみたら、両方ともいつも波が高く、船が停泊して人が上陸できるような所でなかった。それで、その2本は、不法上陸者が多い魚釣島と南小島にそれぞれ追加しました。まあ、尖閣列島への警告板設置の任務は、あれやこれやといった障害や難儀はあったが、全員が一丸となって力を合わせて頑張ったから、大きな事故もなく、無事目的を達成することができましたねえ。

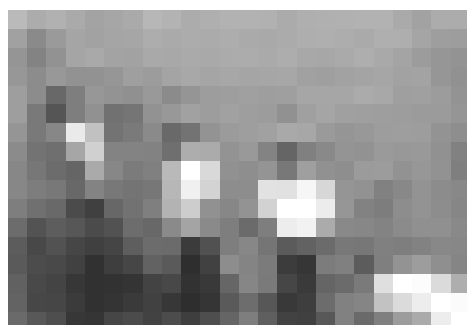
一番の思い出ですか、一緒に作業した皆さんには、それぞれ「思い出」があると思うが、私の場合は、警告板の設置場所選びが第一の任務でしたから、あの松岡主席宛の書簡で言っているように、「台湾漁民がよく上陸し、人目を引く場所」を頭に入れて、どこに警告板を設置した方がいいのかと探しのため、尖閣列島の島々を歩き廻ったのが一番印象として残っています。



想像以上だった領海侵犯

一 比嘉さんは、尖閣諸島での警告板作業の現場の監督と併せて、台湾漁船の違反操業の調査もされたとも聞きましたが、どんな状況でしたか。

比嘉：台湾漁船の違反操業を調査しました。これは復命書の「不法入域者の取締り状況について」で詳しく報告しています。とにかく、想像以上に台湾人の領海侵犯が多かった。(復命書を見ながら)、7月9日から11日までの3日間に、北小島と魚釣島



上：北小島と魚釣島の沖合いで操業の台湾漁船
下：臨船して尖閣海域から即刻退去命令する

の沖合いで操業していた台湾漁船は 6 隻でした。これらは台湾の宜蘭県蘇澳南方の船で、金吉隆一三六号、金興隆七号、新興福、金泰財、新台福、金吉隆二二号という船名だった。この台湾船に乗り込んで調査し、乗組数と現認場所とかは、この復命書に記録している。乗組員は大体 10 人から 15 人、6 隻全部で 75 人だった。ここは琉球の領土だから、すぐ立ち去りなさいと、退去命令を出したら素直に応じたですよ。だけど、我々の取締船を見て、急いで領海外へ逃げた船は 8 隻もいた、船名は確認できなかった。また遥か遠くで操業している台湾船は数隻が見えた。ところで、臨船した 6 隻のうち金吉隆二二号の場合は、魚釣島で警告場を建てている時、海岸の天然の岩風呂で水浴している 9 名を見つけて、取調べたところ、サンパンという竹で編んだ筏で上陸したことが分かった。これら台湾漁夫 9 名に警告板を見せたところ、中国語の意味が通じ、上陸したことが犯罪なることを理解した。それが他の仲間に伝わることで、大きな効果が期待できると思いました。

— 台湾船の違反操業は想像以上ですねえ、それに島にも不法上陸(入域)しますから、これが犯罪になると理解させるためにも、警告板設置は相当効果が期待できるわけですか。

比嘉: 彼らを調べてみると、不法入域の主な目的は、ここ(復命書)にも、「飲料水の補給、水浴、海鳥のタマゴ採取、休養等である」と書きました。この台湾の漁民の人たちの他にも、難破船解体の労働者が来てました。7月11日、警告板を建てるため久場島(黄尾嶼)に移動した時、北岸に打ち揚げられた難破船の解体作業をしている台湾人労働者 14 名と沖合いに停泊している貨物船「大通号」を見つけて、作業責任者張雲蔚を取調べた結果、7日、大通号に乗船して基隆港を出港し、9日に久場島に来て、解体作業を行っていましたねえ。

大通号の台湾当局の出港許可証を見ると目的地が“無人島”として地名、国名は記入してなかった。ここを漠然としているところに問題があったので、この許可証を写真に撮って置けばよかったと今でも悔やんでいますよ。作業責任者張は、座礁船が台湾船であるし、この島は無人島だから、許可を必要としないと思ったと言っていた。だが、ここは米国が統治している琉球の領土だから、琉球住民以外の人が入域するには、正式な入域手続を行って、入域許可証をもらう必要がある。大通号は琉球列島に入域するのに必要な米高等弁官の入域許可証および旅券を所持していないので、すみやかに立ち去るようにと全員に退去命令を行いました。時間の関係で確認まではできなかったです。だけど、2年前には、南小島に正式な手続を行って、台湾人労働者が入域していますからねえ。



久場島で座礁船の解体作業している台湾人労働者、責任者を呼んで正規の手続きで入域勧告を行った

台湾人労働者 正規の手続きで入城

— 2年前に、台湾側が、入城手続きをして、尖閣諸島に上陸した事例があるんですか

比嘉：ありますよ、だけどその前に、「入城手続」は、どのように定められていたか説明しましょう。民政府布令第125号「琉球列島出入管理令」（1954年2月11日公布・2月15日施行）の条文には、「琉球列島に入城しようとする者は、規定の入城申請書（※：参考のために第1号様式を掲示する）を外交機関を通して高等弁務官に提出しなければならない。但し、商用入城者の場合は、代表商社又は申請人個人でも直接提出することができる。処理の結果は、その受理した経路を経て通知される。入城申請が許可されると、6ヶ月間有効の入城許可証が発給される。入城者は、指定出入港において出入管理官の上陸許可証印を受けなければならない。商用入城者とは、貿易、事業若しくは投資の活動を行おうとする一時訪問者である」とあります。

丁度2年前68年8月12日に、民政府渉外局次長ロナルド・A・ゲイダックさんを団長とする調査団が、南小島に座礁したパナマ籍貨物船「シルバーピーク号」の解体作業に従事していた不法入城台湾人45名に対して、入城手続をして解体作業に従事するようにと、出城勧告をしていますよ。

(第一号様式)
琉球列島高等弁務官宛の入城申請書

この書類(※参考資料2)を見ると、「許可の方法」として「高等弁務官名で、在台北米国大使館を通じ電話で許可されている」とあります、シンナンエンジニアリング会社(台湾在)が入城手続きし、68年8月30日付けで50名が許可され、69年4月21日には78名に追加修正されている。「免許証」には「1968年3月12日付中華民国政府通信者」とあり、また台湾国境守備隊本部から従業員が南小島に行くための出国許可も取得していますよ。だから、これは台湾は尖閣列島は日本領土であることを認めて、入城手続きしていたわけです。あとではその事実に類かむりして、台湾の領土と主張していますけど(笑い)。

一致団結で目的を達成

— 警告板の設置と不法上陸取締まりの話聞かせてもらいましたが、今振り返ってみて、いろいろ大変なことがありましたですねえ。

比嘉：これまで話したとおり、尖閣列島における「警告板」の設置は、すべて成功裏に完了しました。最後に設置したのは大正島(赤尾嶼)ですから、それを終えた時はホットしましたねえ。警告板の末永き健全を山の神、海の神にお祈りして、7月13日朝9時、全員が元気な姿で石垣港に帰って来たときは、皆の顔は困難な仕事を成し遂げた誇りと無事帰れた喜びで溢れていたねえ。考えてみればいろいろと困難なできごとがありました。第一に荒れ模様の海上で、安全な上陸場所を見つけるのに時間を要したこと、第二に警告板、支柱や資材輸送用のモーターボートが暗礁に乗り上げて舟底を破損し、窮地におちいった

とき、救命ボートとくり舟で困難を乗り越えたこと、第三に起伏の峻しい地形での 130 キロもある警告板の陸揚げや持ち運びに体力を消耗したこと、第四に硬い岩盤の穴掘りに苦勞したこと、第五に三角波の渦巻く赤尾嶼に挑戦したことなどいろいろ困難に遭遇したが、冷静な判断と真摯な努力により、ひとつひとつクリアしていきました。石垣の料亭で打ち上げしたときは、お互いの健闘を称え、酒を酌み交わし、いろいろな苦勞話を披瀝してねえ、あの時の乾杯のビールの味が忘れられないなあ(笑い)。また帰って来たその日の 11 時から出入管理庁八重山出張所において琉球新報、沖縄タイムス、八重山毎日各記者による取材が行なわれた。翌日の八重山毎日の朝刊に写真入りで、警告板の設置状況、台湾漁民の不法操漁及び不法上陸の状況が報道されましたよ(※参考資料 4)。



一致団結で無事目的を達成、田本建設、崎原海運他工事関係者の皆さんご苦勞様でした！！

ー ホントにご苦勞さんでした。最後に、警告板に対する思いを聞かせて下さい。

比嘉：前に話したように、警告板は日米両政府にとって大きな意味があります。アメリカがまぎれなく、尖閣列島は日本領土であることを示した外交上の記念碑です。

残念なことに、あの時から 43 年余りも経っているから、尖閣列島に建てた 7 つの警告板はどうなっていますかねえ。島によっては壊れて跡形ないのものもある。けど警告板の図面はちゃんと保管されているから、復元できます。今ならそんなに金もかからない(笑い)。最後に、私が言いたいのはそれです。沖縄県も、政府も、尖閣列島の警告板は、日米両国にとって、外交上の重要な記念碑になるわけですから、これを早めに復元して、できれば尖閣列島の元の位置に建ててほしいです。今はそれが難しいなら、せめて、復元した警告板のレプリカを博物館とかで展示してほしいです。それに設置に関わった人達も皆歳をとっていますから、元気なうちに、実現することを期待していますよ。(笑い)



北小島の警告板は支柱だけ残して壊れ、無惨な姿を晒している。(八重山毎日新聞 1995.6.22)

ー 皆さんが元気なうちにぜひ復元できるといいですねえ。お話有難うございました。

※参考資料1 取締まり要望高まる



琉球新報 1968.7.11



琉球新報 1968.8.14

※参考資料2

「八重山石垣市尖閣列島南小島近辺において沈船の解体作業に従事する作業員及び船舶の琉球列島入域許可について 琉球政府出入管理庁」

入域許可通知年月日

1968年8月30日 69年4月21日追加修正

2、許可期間

1968年8月1日から1969年10月31日まで14カ月

3、許可の方法

高等弁務官名で在台北米国大使館を通じ電話で許可されている。

HCPs 191203

4、許可人員及船舶数

68.8.30 50名 船舶3隻

69.4.21 追加修正 78名

5、沈船名 シルバーピーク号

7、当該沈船の譲渡者

パナマ在エンプレサ・ナビエルス・ラ・リベルテッド社

8、ヤンツ製鉄会社から当該沈船の解体を許可されている会社

台湾在シンナンエンジニアリング会社

9、免許証

1968年3月12日付中華民国政府通信者 CHIAO-HANG5703-0431

更に台湾守備隊本部により解体作業従事のためこれらの従業員が同地域に行くための出国許可も取得している。

10、保証責任

許可期間満了の際は全従業員及び関係船舶が同地点から本国向け引揚げること。

※参考資料 3
カーペンター書簡

1968年9月3日

親愛なる松岡殿

最近、琉球政府警察の巡視艇「チトセ」が尖閣列島を巡視したため、同列島内の南小島に不法入域した台湾の解体作業員は、同島から出て行った。聞くところによると、彼等は道具をたたんで琉球の領域を離れたとのことである。

今後この地域における不法入域をなくするために不定期に現場点検を行なう制度を確立すべきであると信ずる。そのために、本官は、軍の航空機が時々尖閣列島上空を飛ぶように手配中であります。貴政府警察当局が時々同列島を巡視するように手配すれば、なお有効だと信ずる。混乱を防ぐため、お互いの巡視活動について絶えず連絡をとるべきことは勿論である。なお、正確な航行ができなため、または同列島の領土上の地位を知らないために偶然同列島に立ち入る漁夫もあると思われる。

つまり、尖閣列島に立ち入る場合に入域許可が必要であることをほんとに知らないで、事実領域侵犯をすることがあるということである。このような誤解を少なくするために、尖閣列島の各島、すなわち琉球列島の領土に上陸する者に対し、事前に琉球出入管理当局から入域許可を得ること、事前に手続をとらない場合には、琉球の法令に基づき起訴され、罰せられることを警告する恒久的な掲示を上陸しそうな地域の各見やすい場所に立てるよう提案したい。(勿論、琉球の領土に緊急入域を要する不可抗力な事情は考慮される。)この掲示は、英語、日本語および中国語の三ヶ国語で書いた方が有効だと思う。

琉球の領土に対する今後の不法侵犯を最少限に喰い止めるためのこれらの提案に対する貴殿の意見をきかせていただければ幸甚と存じます。 敬具

民政官 スタンレー・S・カーペンター

琉球政府行政主席
松岡政保殿

※参考資料 3A
カーペンター書簡(写し)

No. GOLF/AM/71354

CONFIDENTIAL

3 September 1963

Dear Mr. Matsuda:

The patrol boats by the GHI Police boat "Chidona" to the Senohu Goto have resulted in the departure of the salvage workers from Takou, who were illegally on Himeji Islets, one of the islands in the group. I am advised they have now dismantled their gear and have left the territory of the Ryukyus.

To help discourage illegal entry in this area in the future, I believe it advisable to institute a system of spot checks at irregular intervals. To this end, I am arranging an occasional military oversight over the Senohu group. I believe it would be satisfactory if you arranged to have your Police authorities also patrol the islands from time to time. To avoid confusion it would of course be desirable to keep one another informed at the working level of our respective patrol activities.

It has occurred to us also that occasionally fishermen getting into the area of Senohu Goto are not sure either of their exact location because of occasional depression or are not sure of the territorial status of this island group. In other words, they are often honestly unsure that they require an entry permit to land on Senohu and that they are in fact trespassing. To help lessen any such misapprehension, I should like to suggest to you an arrangement for the placement of relatively permanent signs at various vantage points located in likely landing areas, which would indicate to any individual setting foot on any of the Senohu Islands that he is on Ryukyus territory, that he requires entry permission from Ryukyus immigration authorities; that in the event of failure to comply hereunder with Ryukyus immigration procedures, the individual subjects himself to prosecution and, upon conviction, penalty under the laws of the Ryukyus. (Generally, those major circumstances necessitating emergency entry of Ryukyus territory could be taken into account.) I believe it would be useful if these signs were made up in three languages: English, Japanese, and Chinese.

I shall be grateful to have your reactions to these proposals which represent an effort to minimize further illegal intrusions into Ryukyus territory.

Sincerely,

STANLEY S. CARPENTER
Civil Administrator

The Honorable Seizo Matsuda
Chief Executive
Government of the Ryukyu Islands

REPLY IN
25
CASE

CONFIDENTIAL



右上：陸軍省琉球列島米国民政府(USCAR)首席民政官スタンレー・S・カーペンター
右下：琉球政府第六代行政主席松岡政保

※参考資料 4 警告板設置を報じる新聞

不法入域防止めざす 尖閣諸島に警告板を設置

【東京】八月八日、尖閣諸島に不法入域の防止めざす、警告板を設置する。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。

八月八日、尖閣諸島に不法入域の防止めざす、警告板を設置する。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。

八月八日、尖閣諸島に不法入域の防止めざす、警告板を設置する。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。

八月八日、尖閣諸島に不法入域の防止めざす、警告板を設置する。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。この措置は、尖閣諸島の領土主権を主張し、不法入域者を警告するものである。

警告板設置光景



魚釣島の南岸が大シケで上陸困難、安全な上陸地点を探している第三白洋丸。

魚釣島北岸沖合に到着した第三白洋丸、手前はモーターボートは、接岸の際、サンゴ礁で船底を破損、使用不能になった。その間に見えるのはくり船。



エンジン付きくり舟が警告板・資材を積んだ伝馬舟を曳航して魚釣島の上陸地点に向かっている。



島に上陸すると、警告板が人目に付きやすい設置ポイントを探している。

設置ポイントが決まると、警告板と支柱を陸揚げ開始、警告板と支柱2本、全体で重さ230キになる。全員で陸揚げ作業。



陸揚げしたあと、足場の悪いサンゴ礁の上の設置ポイント場所に運ぶのも一苦勞。

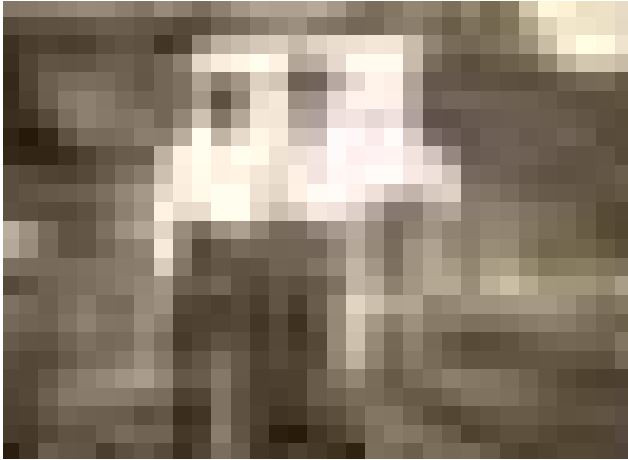


サンゴ礁の固い岩盤に
深さ 40 c m の穴を掘っ
て、設置に取り掛かる。

ボルトとナットで組み合
わせた警告板と支柱を穴
に建て、セメントとバラス
を流し込んで根元を固め
て、しっかりと建てる。



琉球政府出入管理庁と建
設局八重山建設事務所の
担当官が設置工事完了を
点検している。



魚釣島の警告板を前に
記念撮影、左は筆者、
右は同庁八重山出張所
長伊佐義昭氏。

全員揃って記念写真、警告板は
このよう上陸したときに目に付
き易い場所に設置した。



尖閣海域は大荒れだ
った。沖ノ北岩と沖
ノ南岩は風波が高
く、上陸不可能だ
った。ここに予定
していた2つは魚
釣島と南小島に
追加設置した。写
真は沖ノ南岩の
全景。



最後の設置場所は大正島、三角波の渦巻く断崖をよじ登り設置した。これで尖閣5島に、7つの警告板の設置は完了。

久場島の沖合いに台湾スクラップ運搬船が停泊、水浴しているのは同船の台湾労働者。彼ら呼んで警告板を見せたら、不法上陸であることをすぐに理解した。



警告板は、石垣市の領土標柱と並び尖閣諸島のシンボルとなっている。その傍らで休んでいる琉球大学学術調査団一行。
(新納義馬 1971)



1971年琉球大学学術調査団が魚釣島高台から撮影した台湾漁船。沖合では何隻もの漁船が不法操業していた。一人乗り筏に乗って操業しているのが分かる。（新納義馬 1971）

寄稿 国境警備追想 5 題



元救難艇「ちとせ」艇長 よしはま 吉浜 さだいち 貞一

1927 年(昭和 2 年)宮古島平良池間に生まれる。86 歳(2013 年時)。
1943 年(昭和 18 年)沖縄水産学校入学。
1963 年(昭和 38 年)琉球政府警察本部所属艇救難艇「ちとせ」艇長拝命
1972 年(昭和 47 年)本土復帰に伴い海上保安庁十一管区に配置替え
以来、1981 年他管区に転じるまで尖閣諸島等の巡視警備に従事
1988 年(昭和 63 年)定年退職する。

1、魚釣島の台湾国旗掲揚事件

尖閣諸島は 1951 年(昭和 25 年)サンフランシスコ平和条約の際米国の施政権下となっている。その後 1972 年(昭和 47 年 5 月)沖縄返還(本土復帰)の際南西諸島の一部として日本政府に領土を返還(復帰)されている。

この諸島の魚釣島に沖縄が本土に復帰する 2 年前の昭和 45 年 9 月(1970 年)突然降って湧いた事件が発生した。事の起りは 1968 年(昭和 35 年)国連アジア極東経済委員会の調査で同海域の海底には豊富な石油資源が埋蔵の可能性を指摘、当時極東経済委員の東京水産大学地質学の権威者である新野弘教授等によって発表された。

中国と台湾は自国の領土の一部を主張し始め、両国は動き始め、遂には魚釣島西岸に台湾の国旗(晴天白日旗)が掲揚される事件が発生した。

当時私は琉球警察本部の所属船救難艇「ちとせ」の艇長として乗艇勤務していた。

台湾の国旗掲揚事件の第一報は、魚釣島周辺海域で操業中の本土漁船からの緊急通報によるものであった。緊急通報の内容は、尖閣諸島の魚釣島西岸の小高い丘に晴天白日旗が高々と掲揚されており、その下方の岸壁には白い文字で蔣総統万歳の文字が大きく記載されているとの通報であった。

この通報により、私は警察本部より緊急出港指令を受け、確認のため急遽尖閣諸島魚釣島向け出港したところ、魚釣島西岸に

は漁船からの通報があった通り西岸の小高い丘に晴天白日旗が高々と掲揚されており、その下方の岸壁には白い文字で蔣総統万才と大きく記載されていたのが艇上からも確認され



琉球警察本部所属艇・救難艇「ちとせ」(130ト) 尖閣諸島及び与那国島周辺海域を取締っていた

た。

私は事の重大さを考慮し外国との関係上、国際問題に発展しかねないので不測の事態を招くおそれも考へ早速警察本部に処置について如何にすべきか指示を乞う旨打電した。警察本部からの処置についての指示待ちのため（現場海域）待機中のところ、警察本部からの指示電は台湾の国旗は拾得物として引下し持ち帰るようにと指示でした。

指示待ちのため小一時間位待機中の間、台湾漁船（突きん棒船）は次第に隻数も増し 10 ㍻位の船から 20 ㍻位の船が 20 数隻となり救難艇「ちとせ」は二重、三重に包囲され、身動き出来ない状態となり漁船群からは激しい抗議で「尖閣列島は台湾の領土である魚釣島海域から直ちに退去せよ」まさに一触即発の急迫なる危険な状態となっていた。

私は台湾漁船群からの激しい抗議を受けながらも如何にして漁船群の包囲網を突破し魚釣島の西岸に掲揚された台湾の国旗を引下すべきかと考えた末、多少の台湾漁船群の破損も止むなしと考え、救難艇「ちとせ」を急発進する強行手段に出る事を決意し、直ちに実行に移し急発進した。強行行動によって台湾漁船群の二重三重による包囲網を、突破することが出来た。その直後搭載中の高速機動艇を降ろし台湾の国旗引下しのため、行動開始、魚釣島西岸に向け発進させた。

その後約 30 分して、台湾の国旗引下しは成功し救難艇「ちとせ」に持ち帰ることが出来た。私は台湾の国旗引下しに際して台湾漁船群からの激しい抗議を受け乍らも、救難艇ちとせは二重三重に包囲され身動き出来ない状態に立ちながら包囲網を突破するため強行手段に出て急発進したことにより漁船群の破損もなく台湾の国旗を引下す事が出来たことについて安堵している。

引下した台湾の国旗はその後関係機関に引渡すべく、宮古島向け急航し宮古島で関係機関へ引渡しを終え、再び魚釣島西岸に記載された蔣総統万歳の文字を消すため同島西岸に向け急航し文字を消し沖縄那覇に帰港し台湾の国旗掲揚事件は無事終了した。



魚釣島から持ち帰った台湾国旗は取得物として処理
左より屋良朝苗主席、新垣徳助警察局長、行政主席
にて。
(沖縄県公文書館)

2、与那国島沖の台湾船取締り椿事

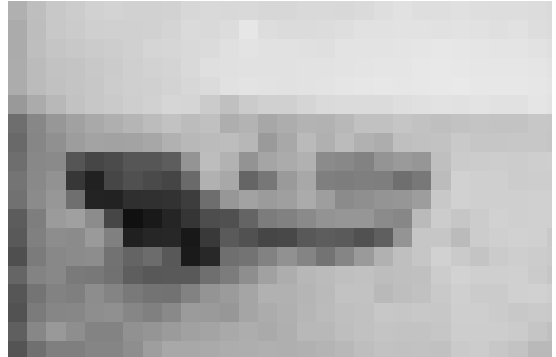
1970 年（昭和 45 年）12 月当時の琉球政府警察本部は救難艇「ちとせ」を八重山警察署へ配置替えした。尖閣諸島及び与那国島周辺海域の領海警備と、台湾漁船等の領海侵犯違反操業等の取り締まりが目的であった。沖縄が本土復帰する 2 年前までは、尖閣列島及び与那国周辺の領海内の侵犯操業は頻繁に行われている状態であった。

尖閣列島は石垣市登野城に地籍はあり、尖閣列島及び与那国海域を取締りを管轄する八

重山警察署は日常茶時で繰り返し違反操業が行われている台湾漁船等の領海内違反操業を野放しには出来なかった。毎年 3 月頃から 5 月頃にかけて与那国島周辺海域及び尖閣列島海域にはトビウオが回遊する季節となるため、その頃になると、台湾漁船等が群をなし侵犯違反操業が行われていた。

これまで同海域での侵犯違反操業船等の取締りは一度も実施された事はなかったので台湾漁船等は大いばりで違反操業が繰り返して行われていた。

国境に近い与那国島は石垣島からは取締り船ちとせでは 6 時間もかかるため、台湾漁船等の違反操業取締まりなると与那国島で仮泊して実施していた。違反操業で検挙した船に対しては、立入検査を実施した後船舶内に漁獲物が発見された時はすべて海中に投棄し石垣島へ連行すると警告していた。



台湾漁船の侵犯違反操業は日常茶飯事だった
与那国島南東沿岸で不法操業中の台湾漁船

1971 年 4 月（昭和 46 年）与那国島南島沿岸 2 湊附近で違反操業中の台湾漁船を発見追跡停泊せしめ、ちとせに接舷させ乗組員（6 名）を甲板上に集め、船艙内を立入検査を実施したところ侵犯操業で漁獲物はすべて海中に投棄した上、二度と違反操業で検挙された場合は石垣島に連行すると、嚴重注意したところ甲板上的乗組員（6 名）は正座してしきりに頭を下げて許しを乞うたので同船を領海外に出るまで同航し台湾方向に航走したことを確認した。のち通常の侵犯違反操業船等の取締りを行っていた。

1972 年 5 月 15 日（昭和 47 年）沖縄は米国統治から 22 年目にしてようやく本土に復帰した。私が乗船勤務している救難艇「ちとせ」も復帰と同時に一夜にして海上保安庁巡視船「ちとせ」として、尖閣列島及び与那国島周辺の領海侵犯違反操業船等の取締りを継続していた。

本土復帰 1 年前に与那国島南島沖合の領海内違反操業で立入検査を受け厳しい警告の上甲板に正座許しを乞った時の台湾漁船の船長が沖縄県宮古島伊良部出身の長峰政勝であった。その人は戦前台湾に永住し、本土復帰したことによって復帰 1 年後の 1973 年（昭和 48 年）宮古島伊良部島に 48 年ぶりに帰郷した。その人こそ妻の「おじ」に当たる人で長峰政勝であった。その人が石垣港に在泊中の巡視船「ちとせ」を見るなり、自分はこの船にきびしく取調べられた上、漁獲物の飛魚等を海中に投棄した後甲板上で正座して許



臨検中の台湾漁船、立入検査し、領海侵犯・違反操業を厳しく警告、漁獲物は海上投棄処分する

し乞うた事があったと話したのであった。当時その船の船長は吉浜貞一であった事を聞き大変怒っていたようである。私は戦争末期の頃和 19 年から昭和 20 年にかけて台湾に居た頃妻の「おじ」長峰政勝にはいろいろお世話になったが 28 年余の時の流れであまりにも台湾の人のように変身しているので、全然知る由もなかった。また当時は職務上取締る立場にあったので止む得なかつた事を釈明した。

3、魚釣島に於ける遭難者の遺体収容要請

1968 年（昭和 43 年）9 月高知県宇和島市船籍の鮪延縄漁船が台風避難中魚釣島の北西海岸の岩場に乗り上げ同船の乗組員の 1 人が行方不明となり残りの乗組員は僚船によって救助された。行方不明となった、乗組員は後日魚釣島北西海岸の遭難現場（乗り上げ現場）近くの岩場で遺体となって発見されたとの情報によって救難艇ちとせは日本政府（南方連絡事務所）からの遺体収容の要請を受け遺体収容のため、尖閣諸島魚釣島向け急航した。当時の魚釣島付近洋上の天候は快晴で遺体発見の魚釣島付近の海面は非常に平穏で凪いでいた。救難艇「ちとせ」は現場到着後早速搭載艇を下し遺体発見現場の岩場附近に接岸早速遺体の収容作業を開始したが、遺体は遭難ご何日も経過してから発見されているため、腐敗がひどく収容は非常に困難と考えられ現場で「だび」にすることにして、附近海岸に漂着した。木材等を拾い集め、火葬すること 4 時間余をかけて遺体はようやく火葬することが出来た。その後遺骨は箱に収められ救難艇「ちとせ」に持ち帰り乗組員全員で手厚く葬り安らかな眠りを祈り合掌し救難艇「ちとせ」は魚釣島を離れ帰船の途につき、翌日泊港に入港して、遺骨は日本政府南方連絡事務所に引渡した。

後日遺体発見現場及び「だび」に付した現場の当時の状況等を撮影した写真等数 10 点は高知県宇和島市在住の遺族宛送付遺骨収容作業は終了した。

4、行方不明の漁船(クリ舟)搜索

1969 年（昭和 44 年）4 月 9 日早朝、石垣島登野城漁港からクリ舟で出漁した玉城信良さん（20 歳）が翌 4 月 10 日になっても帰港しないので、同船搜索のため、救難艇「ちとせ」は 4 月 10 日午後泊港より石垣島向け出港した。当日の天候は海霧が発生しており、視界不良であった。海霧は、沖縄地方では 3 月下旬から 4 月初旬の春先の風の時によく起こる現象で、東シナ海南部より沖縄方面にかけて発生する。石垣島登野城漁港からクリ舟で出漁した玉城信良さんは、漁撈中海霧の発生に遭遇し帰途への方角を誤り、遭難したものと考えられる。救難艇「ちとせ」は、11 日早朝、石垣島搜索海域に到着し、石垣島北西海上より宮古島寄りの海上を、目視とレーダーを併用して搜索を開始するも、同日は手掛かりなく、翌 12 日 2 日目、引き続き搜索するも何等手掛かりは得られず。搜索 3 日目は搜索範囲を広げた。宮古島北方海上より赤尾島（大正島）間の海上を搜索するも発見することが出来ず、4 日目の 14 四日は更に範囲を広げて、宮古島北方海上より北東海上にかけて拡大搜索するも、やはり依然として手掛かりはなかった。翌 15 日は、長引く後日の搜索に備えて、

燃料補給のためいったん泊港に帰港。給油し、次の出動に備えて待機していた。その矢先、4月18日午前、行方不明となつてから10日目にして、捜索中の玉城信良さんの漁船（クリ舟）を、東シナ海の漁場向け航行中の第一静山丸が、石垣島平久保崎より260マイルの洋上、北緯27度10分・東経125度20分の地点で、漂流中の一人乗りのクリ舟を発見し救助したとの朗報が届いた。待機中だった救難艇「ちとせ」は、直ちに第一静山丸より救助された遭難者玉城信良さんの身柄引き取りのため、18日午後1時すぎ泊港を出港し、前述の地点の救助現場の洋上（那覇の西北西165マイル）向け急航した。4月19日早朝、現場海域に到着。第一静山丸より遭難者の玉城信良さんを引き取り、クリ舟を曳航し、同日夕刻、救難艇「ちとせ」は、玉城信良さんを待ち受ける石垣港に入港した。

遭難者の玉城信良さんは石垣島登野城漁港を出港してから11日目にして、無事石垣島に生還した。



救難艇「ちとせ」引渡し式終了後、乗組員と記念撮影
筆者中央平服姿（1963.12.10）



警備休みのひと時に

5、尖閣諸島での領海警備状況

尖閣諸島周辺海域の領海警備は沖縄が本土に復帰する2年前の1970年（昭和45年）から救難艇「ちとせ」及び救難艇「おきなわ」の2隻で実施していました。

1972年（昭和47年）沖縄の本土復帰に伴い第十一管区海上保安本部が発足新設され、小型巡視船「ちとせ」、中型巡視船「おきなわ」の2隻で本格的な領海警備は実施されるようになりました。

復帰した翌年の1972年（昭和48年）の7月から8月頃にかけて中国の漁船団底曳漁「カワハギ」に尖閣諸島周辺海域に大挙出漁するようになり、その隻数は2百隻を超える大船団で、発足間もない第十一管区の巡視船2隻では対応できず他管区の巡視船の応援を得て領海警備は実施される様になりました。

中国の漁船団は約100ト内外の鉄船で5隻毎に船隊をなし、先航する船の上部船橋には

「キ関銃」らしきものが装備され、カバーがかけられて居るため、キ関銃か否かについては不明。尖閣諸島の北側海域及び北西方、西方海域は中国大陸からの大陸棚となつてをり水深も比較的浅く 100 米内外の浅海となつてをり、中国漁船団はこの海域で毎年 7 月から 8 月頃にかけて底曳網「カワハギ」漁を行っているようで、この時期になると大挙 2 百隻を超える大船団で出漁している。

1975 年（昭和 50 年）から第十一管区の巡視船艇等も大幅に建造増強され、石垣海上保安部では巡視船「やえやま」（400 トン）が配備、続いて巡視船「よなぐに」（1000 トン）が配備、その 2 年後には巡視船「はてるま」（1000 トン）が建造配備された。

また管区本部でも巡視船「くだか」（1000 トン）が配備され、続いて巡視船「もとぶ」（1000 トン）が配備増強され、尖閣諸島方面海域の領海警備は一段と強化されるようになりました。

同方面海域の領海警備は当時は通常 1 隻体制で 1000 トン級巡視船で 1 週間交替で実施されていましたが、毎年 7 月から 8 月頃にかけて中国漁船団が大挙「カワハギ」底曳網漁に出漁する時期になると同方面の領海警備も一段と緊張し 2 隻体勢から情況の変化に応じ 3 隻体勢で対応し警備体勢も大幅に強化されるようになった。通常の尖閣諸島に於ける領海警備は魚釣島、北小島、南小島、久場島（黄尾嶼）、大正島（赤尾嶼）等の領海警備及び接続海域を毎日周回する警備体勢を実施してをり、常に緊張した巡視警戒を実施してをります。

私は昭和 56 年の配置替により転船となり、尖閣諸島方面の領海警備を離れているため、その後の情況については不明である。

（丁）



魚釣島沖で不法操業している台湾漁船



復帰後は、第十一管区の大巡視船「はてるま」（1000 トン）が配置され、尖閣諸島の領海警備は一段と強化された。写真は初代「はてるま」。



首席航海士の頃の筆者

あとがき

私共編纂会が尖閣諸島海域の漁業に着目し、この調査を手がけたのは3年前です。

2009年度日本財団からの研究助成交付を受けて、尖閣諸島海域の漁業に関する資料収集に着手してみたら、公的資料、統計資料が殆んどないのに驚きました。

同海域には、どのような漁業者が、どんな船で出漁し、どんな魚を、どの位獲っていたのか、漁業の全容は分かりませんでした。その中で相当役立ったのが当時の新聞資料と直接出漁された漁業者たちのお話でした。彼らウミンチュウ(海人)たちは、「板子一枚下は地獄」という厳しい環境の中で、仕事をしてきたせいか、性格も気宇壮大、記憶力も旺盛、昔のことを昨日のように憶えていました。大漁した場所、大凡の年月、どの位魚を獲ったのか、また漁労のようす。漁場の地形も知り尽くし、自分の庭のように話すのにびっくりしました。

彼らの体験・知見は、尖閣諸島の漁業を知る上で貴重な資料です。

これらを基に、前回「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告—沖縄県における戦前～日本復帰(1972年)の動き—」(2010年8月)をどうにか報告できました。

その聞き取り調査に伺った際、ウミンチュウの皆様から、「もう、数年早く来ていたら、尖閣に詳しくあったあのオジーも、シンカのあれも元気だった。いろんな話が聞けたのに、もう亡くなってしまったよ、残念だ。もうアンタたち来るのは遅過ぎたんじゃないか！」旨をよく言われました。

戦前、終戦直後、米軍統治下の復帰前に、尖閣に漁に行かれたウミンチュウはもう相当高齢になっておられる。考えてみると1972年復帰の年から、早40年の歳月が経っています。

彼らウミンチュウは、尖閣諸島海域での漁業という貴重な体験の持主です。彼らの頭の中には、図書館に万卷の書を蔵しているように、貴重な体験がぎっしりと刻み込まれています。

然るに、歳月人を待たずで、ウミンチュウたちはドンドン高齢化し、年々亡くなりつつあります。

彼らのお1人が亡くなれば、図書館1個消失し、その分の貴重な体験は一瞬に消え失せます。

それ故、お元気なうちに、体験を聞き取って、正しく記録しておかねばなりません。

この機会を逸すれば、地元沖縄県の、日本側の、尖閣諸島海域の漁業の歴史的事実が永久に消え失せてしまい、国家にとって、大きな損失にもなります。

今回、私共が聞き取り調査を急いだのも、このような事情からです。

今回も日本財団には大変お世話になりました。聞き取り調査の意義と重要さを認識頂き、この度も尖閣諸島海域の漁業に対して研究助成を賜りました。厚くお礼を申し上げます。

今回の聞き取り調査を終えて、振り返ると、力不足の故、数々の反省点があります。

加えて、聞き取り内容は十分ではなく、全体を網羅したものではありません。

地域も、対象者も、一部に止まっており、未調査の地域、対象者が多くあります。

これらは、国や県、漁業関係者が、喫緊に取り組みねばならない火急の課題であります。

私共の調査期間中にも、聞き取り者の1人の方がお亡くなり、3人の方が病で倒れています。

彼らウミンチュウは高齢の途にあり、聞き取り調査は一刻も猶予ならないというのが現状です。

願わくば、本調査が、本報告書が、契機となって、全体を網羅したさらなる聞き取り調査がなされることを期待し、あとがきといたします。

尖 閣 研 究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

- 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 -
2012 年

発行日：2013年 9 月30日

編集・発行：尖閣諸島文献資料編纂会

〒902-0068沖縄県那覇市大道40番地

FAX (098) 884-1958

印 刷：株式会社 国際印刷